第９章　　県体育協会加盟団体の活動

第１節
競技団体

鳥取県スキー連盟

平成30（2018）年度現在、加盟クラブ25団体、全日本スキー連盟（以下ＳＡＪ）会員登録数472名、競技者登録数117名、多くのＳＡＪ公認資格者により、鳥取県スキー連盟（以下県連）規約第３章「スキーの正しい普及と発展を図り、スキー競技の促進と県民体育の向上を図る」の目的のため、主に６つのスキー場を拠点に活動をしている。

１　スキー競技の変革

（１）スノーボードの登場

時代の変化とともに、スキー界でもさまざまな変化がみられる。スキー場にスノーボードが登場してきた。青年層を中心としたスノーボードの登場に、最初はゲレンデ内でも戸惑いがあった。スキーと異なる動きのため、これまでとは違う怪我も起こった。また、スキーヤーとスノーボーダーとの接触事故等、安全面でも問題が起こった。当初は、スノーボードで滑走できるゲレンデを指定するなどの対応もあった。しかし、その普及により、現在はスキーとスノーボードが共生できる環境になってきている。

（２）スキー用具の変化

スキー場環境の変化や滑走スピードの変化、更には世界のトップ選手の技術の変化と競技ルールの変更等に伴ない、スキー板の形状に大きな変化が見られた。現在は、スキー板のトップ部分とテール部分が幅広となり、より回転性の高いカービングスキー板が主流となり、長さも短めになった。

２　大会の変遷

昭和63（1988）年に第25回全国中学校スキー大会､平成４（1992）年に第41回全国高等学校スキー大会、そして、平成５年には大山で２回目となる第48回国民体育大会スキー競技会だいせん国体を開催した。これらの全国大会を経て、大会運営の実績､競技会場の公認､競技熱の高まり等が相まって、次々とＳＡＪ公認大会や国際スキー連盟（以下ＦＩＳ）公認大会が開かれるようになった。

（１）全国大会

平成10（1998）年３月、全日本スキーマスターズ大会（ＳＡＪ主催）を大山スキー場で開催した。競技は、アルペンとクロスカントリーの２種目で実施したが、２月に行われた長野冬季オリンピックの盛り上がりをそのままに、ベテランスキー選手が全国から集って技を競い合った。詳しくは第６章第２節に載せているが、県内選手の活躍も多数あった。

（２）ＳＡＪ公認大会

平成元（1989）年、ＳＡＪ公認大会としてＪＲ西日本カップを開催した。西日本で初の公認大会であったこと、また、全国的にもまだまだ公認大会が少なかったこともあり、全日本競技者ポイントを獲得するために、学生をはじめ多くの競技者の参加があった。この大会以降、高松宮杯大山アルペンスキー大会、西日本スキーマスターズ大会をはじめ、ジュニアからシニア・マスターズ世代まで、アルペンで４大会、クロスカントリーで１大会、スノーボードで１大会のＳＡＪ公認大会を開催している。

（３）ＦＩＳ公認大会

平成18（2006）年、ＳＡＪ公認高松宮杯大山アルペンスキー大会を西日本で初のＦＩＳ公認大会として開催した。開催に当たっては、ＦＩＳ公認コースとしての条件を満たすこと、安全面等における施設・設備・機材面での整備をすること、競技役員の充実を図ること等、大山スキー場をはじめスポンサー企業・関係団体の多大な協力を得て実施に至った。現在は、アルペンで２つのＦＩＳ公認大会を開催している。

（４）ジュニアの大会

ＦＩＳ・ＳＡＪ公認大会の参加基準は、ＦＩＳルールに則り定められている。ＳＡＪ公認大会の参加資格が中学生以上であったものが、平成23（2011）年から15歳以上となった。これに伴ない、新たにチルドレンのカテゴリーが加わった。現在は、小学校５・６年生のＫ１、中学１年生から高校１年生早生まれまでのＫ２として、ＦＩＳ・ＳＡＪ公認大会において同時開催をしている。スピード系（滑降・スーパー大回転）競技は、ルールの標高差等が県内スキー場では確保が困難なため実施できていないが、このＫ１・Ｋ２クラスにおいてはスーパー大回転において基準を満たすため、唯一実施している。

（５）県内大会

全国で最も早く開催（昭和21年）された大会として各方面から注目された「大山国立公園スキー大会」は、平成30年で84回の歴史を重ねている。

この他、県連主催･後援をはじめ、数々のスキー大会が県内各スキー場で開催されている。大会は、アルペンでは大回転・回転で、クロスカントリーではクラシカルとフリー､そして､近年ではスノーボードの大回転が行われている。大会によって参加資格は異なるが、幼児から小・中・高校生・青年・マスターズまで、幅広い参加を得ている。

３　教育部の活動

スキー場にスノーボーダーが登場しはじめたため､平成13(2001)年､県連基礎教育部にスノーボード委員会を設置した。平成16(2004)年､基礎スキーがスキーへ、技能テストがスキーバッジテストへと標記・呼び方が変わった。ＳＡＪ教育本部が大幅に改組されたことを受け、本県連でも基礎教育部から教育部へ改組した。新教育部では、スキー及びスノーボードの育成ならびに強化、スキー及びスノーボードに関する調査研究、スキー及びスノーボードの安全に対する調査研究、公認資格者

ならびに公認スキー学校の審査・認定及び管理指導、スキー及びスノーボードの指導・講習・検定など、社会教育におけるスキー及びスノーボードの普及発展を目指した活動をしている。

（1）指導者研修会

１級・２級・テクニカル等は技能級と呼ばれるところであるが、スキー･スノーボードの指導員･準指導員はその名の通り、スキー・スノーボードそれぞれに、その技術を指導できるという資格者である。これらの資格者を対象に毎年研修会を開催し、最新の指導技術を磨いている。研修会は、理論編と実技編の２本立てで行っている。平成20(2008) 年シーズンからは、２年に一度韓国で12月に開催し、充実したシーズンを迎えられるよう県内スキー場のオープン前に開催している。有資格者も年々増え、参加者が300人を超す年もある。スキー・スノーボード技術の普及とスキーヤー・スノーボーダーの安全のため、指導者としての技量を高める機会としている。

（2）ジュニアスキー教室

小・中学生とその保護者を対象に、米子市・大山町教育委員会の後援のもと、だいせんホワイトリゾートの協力を得ながら、年６回程度のジュニア教室を毎年開催している。スキー技術の習得はもちろん、ウインタースポーツの素晴らしさを味わわせるとともに、健康づくり・体力づくりを目指して行っている。毎年約100名の参加者がいるが、近年の少子化やスノーボーダーの低年齢化等により、参加者が減少傾向にあることは課題である。

（3）スキー技術・用具の変遷

スキー技術やその指導法は、この約25年で３回の大きな変革があった。平成５（1993）年頃には、ゲレンデの整備拡大やマテリアルの改良進歩等に対応した技術が確立し､成熟期を迎えた。その後、スキーを楽しむ志向別の技術、トップコントロール・トップ＆テールコントロール・テールコントロールが発表され、指導法もそれにならうようになった｡平成12(2000)年頃には､カービングスキーが主流となり、スキー板の特性を利用したカービングテクニックが使われるようになった。平成20年頃から自然で楽なスキーがテーマとなり、ターン運動における重心移動は谷方向へ移動し、内主導を導く技術が打ち出された。平成25年には、パラレルターンへの指導の展開を三つの形態、プルークスタンス・パラレルスタンス・シュテム操作から導き出すという技術体系ができてきた。

スキー板の形状は、カービングスキーがその登場から今では主流となっているが、スキーヤーにかかる体の負担や安全面を考慮して、極端なしゃもじ型から以前のスリムな形に近いものまで、用途に応じたスキー板が使われるようになっている。

（4）教育部強化

全日本スキー技術選手権予選突破、西日本スキー技術選手権10位入賞を目指して、選手の技術力向上に取り組んでいる。同時に、技術の向上と理解及び指導力を身に着けるため指導者資格取得に取り組んでいる。

全日本スキー技術選手権では､平成24(2012)年、安田直也選手が予選を突破したが、その他はいない。まだまだ厚い壁を感じている。西日本スキー技術選手権においては、平成８、９(1996、1997)年に、山崎満朱子選手が連続優勝を遂げた。男子は毎年１～２名の入賞者を出しているが、女子は近年入賞から遠ざかっている。

４　競技部の活動

平成５（1993）年の大山国体以降、競技部新体制のもと、底辺拡大を軸にジュニア期から強化指定選手を位置づけて強化に取り組んでいる。地球温暖化の影響もあり、県内で雪上練習ができる期間が短く、北海道や長野県のスキー場をはじめ韓国にも遠征して合宿を実施している。

ＦＩＳ・ＳＡＪ公認大会は、ＦＩＳのルールに則り行われる。公認ルールの変更により、近年大会使用バーンの基準の変更や種目別・年齢別の使用マテリアルの変更、年齢別カテゴリー区分の変

更等があった。特に小・中学生では、これまでの学年別で区分けされていたものが、世界基準に合わせ、年齢別で区分けされるようになった。使用できるスキー板の長さやラディウス等で適用ルールが異なるため、練習環境の整備をはじめ用具の準備等、配慮が必要となった。

大山国体以降、国体では、アルペンで山﨑一孝選手・山﨑満朱子選手・尾関絵美選手・糸乗克選手・大藤翔太選手が、クロスカントリーで宮本孝志選手・宮脇宏和選手が、ジャンプ（コンバインド）では岩井良選手が入賞している。数年おきに入賞者を出しているが、かつてのオリンピック選手等日本を代表する選手を輩出した時代と比べると、強豪県に水をあけられている。近年の暖冬傾向の影響で、県内で練習できる期間の短さや練習バーンの確保など、スキー環境には厳しい面もある。また､少子化による選手の減少に加え､スキーシーズンが受験シーズンと重なり、伸び盛りの年代がスキーから離れてしまうこと、ジャンプでは岩井選手以降の選手がいないこと等々課題は多々あるが、強豪県復活を目指して取り組んでいる。

スノーボードの普及により、平成29年からボード部を新設した。オリンピック競技でもあるスノーボード部門を担当し、競技スポーツとしてのスノーボードの普及・強化に当たる。今後の躍進に期待している。

５　創立100周年を目指して

平成22（2010）年11月、県連創立80周年記念式典を、平井伸治知事はじめ県内スキー場・西日本ブロック各県連代表・関係の皆様をお招きして行った。式典では、これまでの本連盟へのご尽力に対し、感謝状贈呈他、各表彰を行った。

上部団体であるＳＡＪの公益財団法人化やその内部機構の改革等をうけ、本連盟の規約も改正を重ねている。現規約と昭和５年創立時の規約を比べても時代の変化が読み取れる。

社会情勢の変化､地球温暖化による気象の変化、少子高齢化等々、スキー界においてもその影響は少なからずある。県内におけるスキーシーズンも気温・降雪量の変化により短くなってきている。スキーヤーの減少とともに競技人口にも減少傾向がみられる。

そんな中ではあるが、これまで本連盟を築いてこられた先輩方や支えていただいた関係諸機関の皆様の熱い思いを受け継ぎ、今後とも加盟団体が一丸となってさらに歴史を重ね、スキー王国鳥取の躍進、そして、2030年に創立100周年を盛大に祝おうと念願し､努力を続けているところである。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成５～11年	松原　一男
12～17年	大館　禅雄
18年～	内田　博長

◇理事長

平成５～11年	内田　博長
12年～	山﨑　孝夫

鳥取県スケート連盟

2016年8月　岡山国際スケートリンクでスケート教室開催時の集合写真

１　スケート教室の継続により底辺拡大

鳥取市スケート連盟では、土曜、日曜の早朝８時から２時間のスケート教室を毎週継続開催していた。スケート連盟役員たちの休日返上のボランティアにより、教室に参加した子どもたち（大人も含む）に対して熱心な指導が行われ、それが結果として、多くの優秀な競技選手やスケート愛好者を育てていく最大の要因となっていた。教室はレベルごとにグループ分けされ、初級クラス、中級クラス、上級クラス、選手コースと分かれており、進級テストを受けることにより次のクラスへと進級できる仕組みとなっていた。選手コースへ進級した後には鳥取フィギュアスケーティングクラブへの入部が認められ、選手として各種競技会で活躍するといった流れになっていた。米子市においても同様のスケート教室が開催されていた。

２　夏季強化合宿の継続開催による選手強化

念願であったスケートリンクのオールシーズン営業が、当時の県スケート連盟会長であり日本海リッチランドスケートリンクの社長でもあった吉岡美根子氏の協力により、平成３年以降実施されており、それをきっかけに、当時鳥取市スケート連盟会長の岩本章嗣や鳥取県スケート連盟理事長の林田房雄などが中心となって準備を行い、フィギュアスケート夏季強化合宿が毎年開催されるようになっていた。鳥取県のアドバイザーコーチである無良隆志を中心に、秦安曇、仲行恵美等の多くの県外の有力インストラクターが鳥取に集結し、県連盟のフィギュア部長であった岡本哲彦も指導に加わり毎年８月に強化合宿を開催した。年々参加者も増えていき、鳥取県内の選手はもとより、千葉、静岡、愛知、兵庫、広島、岡山、山口、香川、愛媛、島根、等の県外からも多くの選手が参加するようになり、2010年バンクーバーオリンピックの銅メダリストとなる高橋大輔（岡山）、2014年ソチオリンピック５位入賞の町田樹(広島)もジュニア時代に毎年参加していた。このような多くの有力選手とともに練習することにより県内の選手は刺激を受け、技術面でも、メンタル面でもどんどん力を着けていった。

また合宿以外にも、スケート教室と鳥取クラブの指導を目的に、無良隆志アドバイザーコーチもしくは秦安曇コーチを毎月１回招いて強化を行った。

このような環境が整ったことにより、スケート連盟は国体選手のさらなる強化へ向けて国体入賞５か年計画を策定し、５年後の国体入賞へ向けたジュニア選手の育成と強化を行っていった。

その結果、平成７（1995）年の第50回冬季福島国体で、今井恵子、垣屋玲香がフィギュア少年女子で初めて県別６位入賞を果たした。その翌年の平成８年、第51回冬季日光国体でも今井恵子、今

井智子の姉妹がフィギュア成年女子で５位入賞、翌平成９年の第52回冬季釧路国体では今井恵子、今井智子でフィギュア成年女子７位入賞、平成10（1998）年の第53回冬季岩手国体では今井恵子、垣屋玲香でフィギュア成年女子７位入賞、と４年連続入賞を果たし、鳥取県フィギュアスケート黄金時代を築くことになった。

国体入賞へ向けた５か年計画
左から、今井智子、垣屋玲香、今井恵子、岩本英嗣

３　日本海ジュニアカップ開催

平成６（1994）年に、鳥取県スケート連盟と新日本海新聞社が主催した西日本の小中学生を対象としたフィギュアスケート競技会である第１回日本海ジュニアカップを、平成７年に第２回日本海ジュニアカップを日本海リッチランドアイススケートリンクで開催した。この大会では、観客席の無かったスケートリンクに仮設の観客席が設置され、そして競技会の模様は日本海ケーブルネットワークの生中継で２日間TV放映された。

鳥取市立東中学校出身で、その後千葉県松戸市のDLL（ダイエーレジャーランド）フィギュアスケートクラブにスケート留学していた岩本英嗣が、平成11（1999）年、大阪アイスアリーナで開催された第68回全日本フィギュアスケートジュニア選手権大会で見事優勝を果たした。この快挙は優勝候補であった高橋大輔、中庭健介などを抑えての優勝であった（中庭２位、高橋３位）。この大会での優勝は鳥取県出身者としては1971（昭和46）年第40回大会の伊吹武彦（鳥取市立西中学校出身）の優勝以来２人目である。

岩本英嗣が全日本ジュニア選手権で優勝
左から、中庭健介、岩本英嗣、高橋大輔

４　米子市のYSPスケートリンク閉鎖

米子クラブの練習拠点であった米子市のYSPスケートリンクが平成11年に閉鎖となり、地元の練習リンクを失った米子クラブの選手たちは、平成４（1992）年に開業した島根県平田市（現在は出雲市）の湖遊館アイススケートリンクや鳥取市の日本海リッチランドアイススケートリンクで練習することになった。

５　濱尚子、初めての国際大会参加で優勝

平成14（2002）年、濱尚子（米子クラブ）が第６回全日本フィギュアスケートノービス選手権大会､ノービスBクラスで準優勝した。その結果フィンランドで開催された国際大会、タンペレ・サンタクロースフィギュアスケート競技大会のノービス・スプリングス部門の日本代表選手として初出場し、見事優勝を飾った。

６　成年男子国体で過去最高の４位入賞

平成15(2003)年第58回冬季群馬国体のフィギュアスケート成年男子で岩本英嗣が鳥取県勢では初めて個人優勝を飾り、須嵜功典との団体順位で県別４位入賞を果たした。スケート国体で鳥取県は過去最高順位の快挙を遂げた。

平成15年、第58回冬季群馬国体成年男子入賞者の面々。
向かって右側最前列が岩本、2列目右が須嵜

7　吉岡会長の死去

平成17（2005）年12月、昭和62（1986）年より18年間鳥取県スケート連盟会長を務め、県スケート界の発展に貢献してきた吉岡美根子会長が急逝された。岩本章嗣がその後の会長となり現在のスケート連盟を支えている。

8　日本海リッチランドスケートリンクの閉鎖

昭和51（1976）年10月に開業し30年間営業を続け、鳥取県スケート界の拠点となっていた鳥取市の日本海リッチランドアイススケートリンクが平成18（2006）年１月に閉鎖となった。県内のすべての活動拠点が失われ、選手たちは県外リンクでの活動を余儀なくされた。

9　金メダリスト荒川静香さんのトークショー開催

2006（平成18）年８月に、鳥取県スケート連盟と鳥取市体育協会、鳥取県体育協会との共催で、「鳥取のこどもたちに夢と希望を」と題したトークショーを、トリノオリンピック金メダリストの荒川静香さんと国際大会などで荒川さんとチームメイトであった鳥取出身の岩本英嗣さんを招き、県民文化会館梨花ホールで開催した。トークショーでは荒川選手と岩本選手が選手時代を振り返り、再び鳥取県にスケートリンクが設置され、鳥取の子どもたちが夢と希望を持てるようになれば、と会場の2000名を超える聴衆に訴えかけた。

10　県内の練習拠点を失った後の連盟の活動

鳥取県内にスケートリンクがなくなった平成18年以後も連盟は活動を続け、鳥取県スケート選手権大会、国体鳥取県予選会、鳥取県中学校総体、鳥取県高校総体を毎年岡山県のスケートリンクで開催している。また、平成３年から行ってきたフィギュア夏季強化合宿も岡山国際スケートリンクを会場として、現在に至るまで毎年継続開催している。

11　国公立大学FS競技会での鳥取県出身選手の活躍

国公立大学フリースケーティング競技会で、平成18年と19年に鳥取クラブ出身の保木本望（大阪教育大）が優勝し２連覇を達成した。また、平成28年から30年の３年間、米子クラブ出身の齋藤舞（高知大学）が優勝し３連覇を飾っている。

12　NPO法人アイススポーツ鳥取を設立

平成20（2008）年、鳥取県アイスホッケー連盟と共に鳥取県の氷上競技の再興とアイススケートリンクの建設を県民や行政に働きかけるため、NPO法人アイススポーツ鳥取を設立した。ホームページで鳥取のスケートとアイスホッケーに関する情報発信を行うとともに、毎年６月に会報を発行している。さらに、毎年８月に岡山国際スケートリンクを会場にして鳥取県スケート連盟、アイスホッケー連盟と協力してスケート教室を開催している。教室には県内外のスケート愛好者が参加し、平成29年度は51名もの参加者があり、大変好評を得ている。

13　無良崇人が鳥取県スケート連盟に登録

鳥取県出身のアドバイザーコーチ無良隆志コーチの長男である無良崇人が、平成26年から鳥取県の選手として連盟登録し、平成27年から29年までの全日本選手権で３年連続３位入賞する等、平成30年に引退するまで、鳥取県の選手として国内外で活躍した。

14　スピードスケートも継続して国体参加

国体へのスピードスケートの選手派遣も大学生、社会人を中心に継続して行っており、スケートリンクの無い県の連続出場は、鳥取県が全国唯一である。

平成22年65回冬季釧路国体
（釧路鳥取神社にて入賞祈願）

15　平成30年現在、鳥取県スケート界の問題点と課題

県内からリンクが無くなってから間もなく13年が経とうとしている。現在、選手は近県のリンクで練習を続けているが、県内に練習リンクが無いことは連盟にとって致命的な問題であり、選手も年々減少の一途をたどっている。次世代の競技者を発掘育成するためのスケート教室が県内で開催できないことは如何ともし難く、今後のスケート連盟の存続すら危うい状況となっている。

鳥取市では、平成24年７月にスケートリンク検討委員会を設置され、全７回の委員会を開き議論した結果、平成26年５月に深澤義彦鳥取市長に「鳥取市にスケートリンクが必要」との報告を行った。ところが、平成29年12月に再度鳥取市にスケートリンク建設整備の要望を行ったところ、「市単独での建設は困難。鳥取県の協力、支援が必要」との回答であった。平成30年５月に鳥取県スケート連盟、鳥取県アイススポーツ連盟及びNPO法人アイススポーツ鳥取の３者で建設整備に向け、鳥取県体育協会に対し、鳥取県、鳥取市に働きかけるよう要望した。歴史ある鳥取県スケート界の灯を消してしまわないためには、一日も早い県内へのアイススケートリンクの設置が必要である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和62年４月～平成17年12月	吉岡美根子
18年１月～	岩本　章嗣

◇理事長

昭和63年４月～平成18年１月	林田　房雄
18年１月～　21年４月	岡本　哲彦
21年４月～	林田　房雄

組織体制および実績

平成３年	・国体入賞５か年計画を立てる。 ・施設リンクがオールシーズン開設になり、夏場も練習ができる環境になる。 ・国体強化部長の下に（フィギュア部、スピード部、普及部）３つの組織を設立し、一貫指導体制で強化をおこなう。 ・第１回強化合宿を開催する。（現在も継続）
平成６年	・第１回日本海ジュニアカップを開催する。（西日本地区より有名選手が参加）
平成７年	・国体でフィギュアスケート少年女子が６位入賞する。
平成15年	・鳥取市に公式規格のスケートリンク建設を請願する。
平成18年	・鳥取市の日本海リッチランドが閉鎖し、県内のスケートリンクがなくなる。
	・８月にスポレク記念事業 トリノ五輪・金メダリスト 荒川静香トークショー「鳥取のこどもたちに夢と希望を」開催する。
	・鳥取市にスケートリンク建設を陳情する。
平成20年	・鳥取県アイスホッケー連盟と共にNPO法人アイススポーツ鳥取を設立する。
平成22年	・鳥取市に公設スケートリンク建設を陳情する。
平成26年	・無良崇人選手が鳥取県スケート連盟に登録する。 鳥取県平井知事、鳥取市深沢市長にスケートリンクの建設を要望する。

全国大会以上の主な入賞成績【フィギュアスケート】

※全国大会、国際大会のみを抜粋。個人は３位入賞まで。団体は８位入賞まで。

国民体育大会 入賞者

平成７年	第50回冬季福島国体フィギュアスケート	団体少年女子	６位	今井恵子・垣屋玲香
平成８年	第51回冬季日光国体フィギュアスケート	団体成年女子	５位	今井恵子・今井智子
		個人成年女子	３位	今井恵子
平成９年	第52回冬季釧路国体フィギュアスケート	団体成年女子	７位	今井恵子・今井智子
平成10年	第53回冬季岩手国体フィギュアスケート	団体成年女子	７位	今井恵子・垣屋玲香
平成15年	第58回冬季群馬国体フィギュアスケート	団体成年男子	４位	岩本英嗣・須嵜功典
		個人成年男子	優勝	岩本英嗣

全日本ジュニア選手権

平成11年	全日本フィギュアスケートジュニア選手権	男子	優勝	岩本英嗣
平成14年	全日本ノービスフィギュアスケート選手権	ノービスB女子	２位	濱 尚子

全日本選手権

平成27年	第84回全日本フィギュアスケート選手権	シニア男子	３位	無良崇人
平成28年	第85回全日本フィギュアスケート選手権	シニア男子	３位	無良崇人
平成29年	第86回全日本フィギュアスケート選手権	シニア男子	３位	無良崇人

国際大会

平成９年	国際大会スロベニア・トリグラフトロアフィー	ジュニア男子	２位	岩本英嗣
平成10年	国際大会メキシコ・メキシコFスケートGP	ジュニア男子	２位	岩本英嗣
平成11年	国際大会スロベニア・トリグラフトロアフィー	ジュニア男子	優勝	岩本英嗣
平成14年	国際大会フィンランド・第４回タンペレ・サンタクロースフィギュアスケート競技大会	ノービス・スプリングス部門　女子	優勝	濱 尚子

平成26年	ISUチャレンジャーシリーズ ロンバルディアトロフィー（イタリア・ミラノ）	シニア男子	２位	無良崇人
平成26年	ISUグランプリシリーズ スケートカナダ（カナダ・ケロウナ）	シニア男子	優勝	無良崇人
平成26年	ISUグランプリシリーズ NHK杯（大阪）	シニア男子	３位	無良崇人
平成27年	ISUグランプリシリーズ NHK杯（長野）	シニア男子	３位	無良崇人
平成28年	2016年プランタン杯（ルクセンブルク）	シニア男子	３位	無良崇人
平成28年	ISUチャレンジャーシリーズ USインターナショナルクラシック（ソルトレイクシティ）	シニア男子	２位	無良崇人
平成29年	2017年プランタン杯（ルクセンブルク）	シニア男子	２位	無良崇人

全国中学校総合体育大会

平成５年	全国中学校スケート競技会フィギュア部門	男子Bクラス	３位	谷尾公平：鳥取東中
平成８年	全国中学校スケート競技会フィギュア部門	男子Aクラス	２位	岩本英嗣：鳥取東中
平成８年	全国中学校スケート競技会フィギュア部門	男子Bクラス	２位	前田武頼：湖東中
平成16年	全国中学校スケート競技会フィギュア部門	男子Bクラス	３位	堀之内雄基：箕蚊屋中

全国高等学校総合体育大会（インターハイ）

平成６年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	女子Aクラス	２位	今井恵子：鳥取西高
平成７年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	女子Aクラス	３位	今井恵子：鳥取西高
平成７年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	男子Bクラス	優勝	前田知憲：鳥取西高
平成７年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	男子Bクラス	３位	須嵜功典：青谷高
平成11年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	男子Aクラス	優勝	岩本英嗣：修徳高校
平成17年	全国高校スケート競技選手権大会フィギュア	男子Bクラス	２位	鷹取吾一：鳥取東高

国公立大学フリースケーティング競技会

平成18年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	優勝	保木本望：大阪教育大
平成18年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	２位	岡田亜子：東京外国語大
平成19年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	優勝	保木本望：大阪教育大
平成19年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	２位	岡田亜子：東京外国語大
平成20年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	２位	岡田亜子：東京外国語大
平成21年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	２位	岡田亜子：東京外国語大
平成28年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	優勝	齋藤舞：高知大
平成29年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	優勝	齋藤舞：高知大
平成30年	国公立大学フリースケーティング競技会	女子	優勝	齋藤舞：高知大

日本学生氷上選手権大会（インカレ）

平成12年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子	３位	岩本英嗣：日大
平成13年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子	３位	岩本英嗣：日大
平成14年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子	２位	岩本英嗣：日大
平成15年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子	優勝	岩本英嗣：日大
平成19年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子Bクラス	２位	竹田津彰太：鳥取大
平成20年	日本学生氷上競技選手権大会フィギュア競技	男子Bクラス	３位	竹田津彰太：鳥取大

鳥取県アイスホッケー連盟

1　国体の連続出場

アイスホッケーは国体では常に先陣を務め、その成績が後に続く他の競技団体の士気に影響することから、この先陣の重責を胸に秘め、選手、関係者は苦労を共にしてきた。

成年は、昭和53（1978）年第33回大会の初出場以降、平成17（2005）年から野坂三郎監督、藤野純一コーチ､種田豊明トレーナー､完井寿弘トレーナー、チームスタッフ野坂夏子、種田早苗の協力体制の下、米子アイスホッケークラブを中心とした選手､関係者の弛まぬ努力により､平成21(2009)年の第64回大会まで中国、四国ブロック予選を突破して連続32回の出場を果たしている。平成18(2006）年の第61回大会で沖縄と対戦して６－３で勝利し、昭和60（1985）年の「わかとり国体」以来、約21年ぶりに国体１回戦を突破し、野坂監督、選手、チームスタッフ、関係者は大いに歓喜し、感激した。

成年（平成19年　群馬県伊香保市）

平成22（2010）年、第65回大会は残念ながら、ブロック予選敗退となった。平成23、24年、第66、67回大会は出場したが、平成25（2013）年の第68回大会から平成30年の第73回大会まで予選敗退し、連続して６大会の出場を逃している。

少年は平成２（1990）年、第45回大会に初出場し、平成８（1996）年、第51回大会まで連続して７回出場した。

平成11（1999）年にＹＳＰリンク（米子市）が閉鎖となり､ジュニア選手の育成ができなくなり、若い年代の選手への世代交代が進まないことも伴い、成年の中心選手は現在も少年選抜チームのメンバーが主体となっている。他県の国体チームは20代が中心であるが、本県の国体チームは平均年齢が40代前半であり、体力、気力の限界を超えて涙ぐましい努力で頑張ってきた。

成年（平成29年中四国ブロック予選　広島市）

少年選抜チームから現在も現役の選手は、以下の13名が全国大会めざしてがんばっている。野坂達裕、石口亮好、野坂康二、大西孝司、中原 亘、磯山隆志、長谷洋史、山根義隆、長谷佑哉、小早川 堅、関 隆之、種田淳志、稲垣 稔。

県少年選抜（平成８年　栃木県日光市）

２　鳥取大学アイスホッケー部の活躍

昭和52（1977）年、日本海リッチランドスケートリンクが開設され、鳥取大学の大学生は、日本海リッチランドクラブに参加して練習していた。その後、平成８（1996）年に鳥取大学の単独チームを部員10名で結成し、中四国学生リーグ戦、大会(トーナメント戦)では準優勝するなど上位チームとして活躍していた。平成18（2006）年に日本海リッチランドスケートリンクが閉鎖され、以降のシーズン（10月～４月）は湖遊館スケートリンク（出雲市）で毎月土曜日に３～４回､練習を行っている。湖遊館スケートリンクまでは車で片道約３時間を要し、大変な時間と労力と経費を費やして大学生は奮闘努力していたが、部員数は減少していった。

平成25（2013）年に完井寿弘が監督に就任した当時、部員は７、８名で試合時はベンチの控え選手が１名程度で岡山大学に０対27と大敗するような状況であった。平成25年に新入部員の入部がなければ部存続の危機であったが、経験者の水口勇人が入部し、その経験者の勧誘により２名入部したことで、存続の危機を脱出した。試合では未勝利の状況が続いていたが、完井監督の指導強化が結実し、平成28（2016）年11月の中四国学生大会において、広島修道大学に７対０で約10年ぶりに勝利した。監督、選手たちは大いに感激し、感涙した。現在、部員は男性17名、女性１名、マネージャー８名、計26名となっている。

鳥取大学アイスホッケークラブ
（平成29年　岡山国際スケートリンク）

３　スケートリンクの建設整備の要望

平成11（1999）年にＹＳＰスケートリンク（米子市）が閉鎖され、昭和59（1984）年を初回とする全山陰アイスホッケー選手権大会は、数々の名勝負を記憶に留め幕を閉じた。大会は、米子クラブ（米子市)、日本海リッチランド（鳥取市)、松江クラブ（松江市)､鳥取少年選抜チームの４チームでリーグ戦（同一カードで２回対戦)）を戦うものであった。

平成18(2006)年には日本海リッチランドスケートリンクが閉鎖となり、県内にスケートリンクは存在しなくなった。

国体選抜チームの選手は米子クラブのメンバーが中心で、湖遊館スケートリンクでシーズン中は週に２～３回練習している。中心選手はほぼ同じメンバーで、年齢は40代となっており、チームの存続が危ぶまれる状況であり、一刻も早いスケートリンクの建設整備を熱望するものである。

平成30（2018）年、競技団体としての鳥取県アイスホッケー連盟、鳥取県スケート連盟、またＮＰＯ法人アイススポーツ鳥取は、スケートリンク建設整備に向けて公益財団法人鳥取県体育協会に鳥取県、鳥取市へ強く働きかけていただくよう要望書を提出した。

今後、当連盟は、県スケート連盟等と連携して早期のスケートリンク建設を目指して最大限の活動を行っていくこととしている。

成年（平成９年　釧路市）

4　鳥取県アイスホッケー連盟の功労者

鳥取県アイスホッケー連盟のために長年にわたり、多大な尽力を行い、功績のあった人は以下のとおりである。いずれも故人である。

山本恒治（理事長）　平成６年４月没
花見　守（副会長）　平成18年12月没
堂坂　昇（副会長）　平成26年４月没
尾川裕男（副会長）　平成27年11月没

【歴代会長、理事長】

◇会長

昭和58年～平成22年	坂口平兵衛
23年～	中西　照典

◇理事長

昭和58年～平成５年	山本　恒治
６年～	野坂　三郎

一般財団法人鳥取陸上競技協会

2017全日本中学女子100m決勝
左から吉田（河原）４位、一人おいて角（美保）３位、尾﨑（鳥西）５位

1　組織の充実強化

（1）諸規定の改正

平成16年６月、アテネオリンピックの最終選考を兼ねた第88回日本陸上競技選手権大会が鳥取市の布勢総合運動公園陸上競技場で開催され、無事成功裏に終了した。

この後、鳥取陸上競技協会の発展を考え組織の充実強化に取り組むことになり、先ず協会の諸規定、規則の全面改正を進めることとなった。

同年11月、当協会の副会長を退任した田淵顧問（教育関係法令を熟知している。）に依頼し、諸規定の改正案を作成してもらうことになり、鳥取陸協規約等検討委員会を倉吉市で開催した。この検討委員会では、当協会の規約等全般について大幅改正を行うことに決めた。この改正の中で特筆することは、県東・中・西部の３地区にそれぞれ協会の支部的なものを設置（平成18年）したことであった。これらの地区における陸上競技の振興を図るために地区協会を設置し、地区協会の会長は自動的に県協会の副会長に就任した。

さらには、審判員等役員の登録に加え、各競技会に出場できる競技者登録制度のあり方、表彰規

定などを明確に定めた。

（２）協会の法人化

平成24（2012）年、日本陸連や全国の陸協が進めていた法人化に取り組み、知事に認可を得て新たなスタートを切った。

当然のことながら規約を定款に改め、各種の規定を定めるとともに理事､評議員の役員を選任し、法人組織として健全で充実した活動を推進することとなった。この結果､従来の組織編成を見直し、バラ陸上競技協会、クラブチーム、マスターズ連盟との連携を図るため特別加盟団体として正式に組み込み、陸上競技を通じて健全な青少年の育成と健康で明るい鳥取県人の育成に寄与するための有機的な組織づくりを行い、地域創生に取り組むための活動を目指すことになった。

２　鳥取陸協の主要事業

（１）主催・主管大会等の開催

鳥取陸協の主催・主管大会としては、鳥取県陸上競技選手権大会、記録会などのような本協会単独の主催大会や鳥取マラソン、日本海駅伝、くらよし女子駅伝、境港鬼太郎カップ駅伝大会など地元市、地元陸協、新日本海新聞社との共催で開催する大会、さらには小体連、中体連、高体連などとの共催の大会などである。（年間を通じ、各月に開催される大会・記録会等は別掲どおりである。）

いずれも伝統ある大会であるが、比較的最近に開催され始めたもののうち、特筆する大会に次のようなものがあげられる。

①布勢スプリント

布勢スプリントは、昭和60（1985）年の「わかとり国体」を記念して、翌年の昭和61年に「布勢リレーカーニバル」の名称で日本海テレビとの共催で開催する大会として創設された。会場の布勢陸上競技場は、記録の出る競技場として全国の高い評価を得ていたが、直線の単短距離種目に特化した日本初の競技会となったのである。

平成21（2009）年に「布勢リレーカーニバル」の名称を変更し、県体協との共催による「布勢リレーカーニバル兼2009スプリント挑戦記録会in TOTTORI」に改めた。この年のスプリントには、女子短距離界のエース　福島千里選手が出場し、当時100m11秒24の日本新記録を出したのが印象深い。

この大会は、以後毎年６月に開催され、平成23（2011）年に大会名称が「布勢リレーカーニバル兼布勢スプリント2011」となった。リレーカーニバルには、全国から小･中･高の選手（但馬地区、東部地区）が参加し、スプリントには日本の短距離（100m、110mH、100mH）のトップ選手が出場し、平成28（2016）年男子100mの山縣亮太選手の10秒06が当時の布勢の競技場記録となった。

さらに平成30（2018）年には、日本グランプリ大会に指定され、日本最高峰の大会に認定されて名称も「ＧＰシリーズ布勢スプリント2018」となった。（なお、平成29年と30年のスプリントにジャマイカの選手２名が出場した。）

②但馬・因幡ジオパーク地域交流選手権大会

鳥取県が関西広域連合に加入し、観光などの経済界や医療面での交流を推進している中、スポーツの交流を中心に教育界の交流があってもよいのではないかという意見もあり、平成22年12月に県体協会長が知事と話し合い、とりあえず但馬地区と鳥取地区の中学生の陸上競技の対抗大会を開くということで了承を得たのである。そこで、翌年２月に開かれた鳥取但馬地区新年総会の席上、出席されていた但馬地区の市町長に鳥取陸協を代表して、田淵顧問、中原理事長らがあいさつし、但馬地区の各市町からこの大会に参加する選手（中学生）のために貸切バスの経費を負担していただけないかと要望を行った。そして、平成23年８月に第１回ＡＬＬ但馬・鳥取東部地区中学校陸上競技対抗選手権大会を開催することになった。鳥取但馬会は、寄付を集めて県体育協会に贈呈し、県体協は、鳥取陸協に助成金を出すこととなった。

この大会は、それぞれの地区から１種目に４人または４チーム出場こととし得点を争うこととし

ている。

③車いすマラソン・湖山池マラソン大会

車いす使用の障がい者や知的障がい者らが健常者と一緒に競技走行する大会として、平成元（1989）年から、大会実行委員会、鳥取市陸上競技協会、県障がい者スポーツ協会と共催して、毎年９月に布勢陸上競技場と湖山池周辺の日本陸協公認コースで開催されている。

車いす使用のレースは、ハーフマラソン、３㎞、500ｍと種目があり、障がい者手帳を有する者と特別支援学校の生徒は１㎞、３㎞、５㎞、10㎞の種目がある。健常者は小学生から高齢者まで１㎞、３㎞、５㎞、10㎞の種目があり、ウォーキング（３㎞）もあり、伴走者も含めると約1,200人が参加する特色あるマラソン大会である。

（２）中国地区大会

中学校・高校の中国大会やマスターズ陸上競技選手権大会、中国五県対抗選手権大会などを中国五県が持ち回りで開催している。

①中国高等学校陸上競技選手権大会

６月に開催し、種目６位までに入ると全国高等学校総合体育大会に出場できる。

②中国高校男子駅伝競走大会・中国高校女子駅伝競走大会

11月に開催し、全国大会が記念大会の時は、この大会で県代表を除く最上位校が全国大会に出場できる。

③中国高校新人陸上競技大会

10月に開催し、各県の上位３位が出場する。

④中国中学校陸上競技選手権大会

８月に開催し、各県代表３名が出場する。

⑤中国５県陸上競技対抗選手権大会

８月に開催し、日本陸上競技選手権大会中国地区予選会となっている。

⑥中国マスターズ陸上競技選手権大会

８月に開催する。

（３）記録会

公認記録会が、東・中・西部地区で開催され、記録は認定される。競技力向上につながるものとして年間に数回開催されている。

３　全国大会の開催

（１）全国高等学校総合体育大会

平成７（1995）年の鳥取インターハイ陸上競技は、布勢総合運動公園陸上競技場で開催され、最初の優勝者は鳥取県の女子やり投げの岡村亜希選手（由良育英高校）であったのは鮮明に陸上ファンの脳裏に残っている。そのほか、男子800mの常田昌司（鳥取東高校）が４位、女子400mの矢野加奈子（由良育英高校）が５位に入賞している。

（２）全日本実業団対抗陸上選手権大会

平成10年ごろから、鳥取で大きな陸上競技大会を開催しようという動きが当協会の中であった。はじめは日本選手権大会ということであったが、先ず実業団の大会を開催してはということになり、平成12（2000）年６月10月～11月に布勢総合運動公園陸上競技場を会場に、第48回全日本実業団対抗陸上選手権大会を開催することが決まった。

開催前年の３月に実業団陸上競技連盟の役員が競技場を視察し、競技場の環境が良いことに驚いていた。

この大会は、シドニーオリンピックの代表ら我が国のトップクラスの選手が出場することで話題になった。男子100mの日本記録保持者（当時）の伊東浩司選手も出場し、男子走幅跳では森長選手の８ｍジャンプも見られた。鳥取県の選手では男子やり投で石破選手が２位、女子100mの澤田選手が活躍した。

（３）日本陸上競技選手権大会

鳥取陸上競技協会の長年の夢であった日本陸上競技選手権大会が平成16（2004）年に中国地方で初めて鳥取で開催されることが決まった。

この第88回の大会は、この年開催されるアテネオリンピックの最終選考会を兼ねた大会で、我が国の一流のアスリートたちの気合の入った競技会になるので、大会の競技役員はもちろん運営役員や補助員、ボランティアたちにとって精神的に張

り詰めたものとなった。

鳥取県の陸上競技界は、バルセロナオリンピックマラソンの森下選手や山下選手をはじめ、全国トップクラスの選手を輩出しており、また、大会運営に優れた審判員が大勢いて、その者たちの能力は全国でも認められていて安心して大会を任せられると評価が高かった。

このようなことから、日本選手権を鳥取にという要請は、優れた競技場もあることから、日本陸上競技連盟の幹部役員に聞き届けられたと考えられる。

鳥取陸上競技協会は、当初鳥取県で全国的なイベントが集中している時をさけて平成18年に開催したいとしていたが、いろいろな事情から、日本陸連は鳥取県開催を早めて平成16年に開催してもらいたいとの申し入れがあり、競技場施設の改修工事も必要であることから県当局に対し県体協とともに協議を行い、平成16年開催を了とした。

競技場施設の改修整備は、鳥取インターハイ以降損傷も著しく、走路を９レーンにすることや風除けフェンスの設置、バックスタンドの選手通路整備、芝生スタンド席の芝生の張替えや競技場内の芝生の張替え、走路の改修などが実施され、平成15年開催の全国聾学校陸上競技大会に合わせることになった。

さらに大会成功のために、交通機関（ＪＲ、航空会社、バス会社）に協力を依頼し、また、選手のコンディションに大きな影響もある旅館、ホテルの接客に留意してほしいなど旅館組合に要請、警察や医師会、救急車配備の消防局にも協力を要請した。

駐車場は近辺の学校のグラウンドなども使用することとした。

このような全国大会は、県民にとって初めてのことであり、市町村教育委員会にも児童生徒の観戦を呼び掛けたり、芝生観覧席を学校ごとに割り当てを行って場所を確保したりした。

周当な準備を行ったことから「これほど多くの観衆が集まったのは珍しい。」という話も聞かれ、大会運営について日本陸運からも称賛の言葉があった。

（４）　日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会

日本陸上競技選手権大会開催が決定した同時期に、鳥取県での開催が内定していた「2008日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会」が、平成20（2008）年10月17日～ 19日に布勢陸上競技場（コカ・コーラウエストスポーツパーク）で開催されることになった。

この大会が日本のジュニア・ユースのトップアスリートが競い、さらに世界へ飛躍していくレベルの高い重要な大会であることから、県体協は万全の体制で大会運営を行いたいとして、平成20年７月１日に関係機関、各種団体の代表からなる実行委員会を設立して開催準備を進めることとした。

全国から標準記録を突破した高校生が集うこの大会は、保護者等も来県するので、鳥取のＰＲはもちろん接客等に特別な配慮を行った。陸上競技場の管理運営を行う県体協や陸上競技場のスタッフにも、競技運営に支障がないよう支援していただいたことは言うまでもない。

大会は17日から19日までの３日間であったが、鳥取県の選手の活躍があり、鳥取中央育英高校の選手ら県内３校の選手７人が１位～４位に入賞したほか、ユース日本新記録３、大会新記録57という多くの好記録が生まれた。

４　全国駅伝競走大会での鳥取県の成績

（１）全国高等学校駅伝競走大会（京都市開催）

平成５（1993）年以降の高校駅伝は、男子は由良育英高校が昭和54年に２位、平成４年に２位になったものの、平成９年に由良育英高校、平成10年に米子商高が共に９位になって以降、本県代表は20位台、30位台、近年は40位台と低迷している。また女子は平成12（2000）年に米子商高が８位に入賞、平成14年に由良育英高が６位に入賞して以降やはり20位台、近年では40位台と低迷し、高校

駅伝の成績は振るわない状況である。

（２）全国中学校駅伝

男子は平成16（2004）年に桜ヶ丘中が４位入賞、翌17年にも５位入賞した。平成29（2017）年には、八頭中が４位入賞したが、それ以外は40位台であった。女子は平成10（1998）年に鳥取東中が17位、平成16年に鳥取大学附属中が17位、平成17年に赤碕中が17位であったが、近年女子も40位台で成績が振るわない年が多い。

（３）全国都道府県対抗男子駅伝競走大会

平成８（1996）年から広島で始まったが、平成11年の12位が最高で、ここ数年は40位、30位台である。

（４）全国都道府県対抗女子駅伝競走大会

昭和58（1983）年に京都市で始まったものであるが、鳥取県の最高順位は平成７（1995）年の第13回大会で12位である。なお、昭和62（1987）年の第５回大会の１区で山下佐知子選手がトップで走ったことは特筆すべきである。以降は男子と同様に30位台、40位台と振るわない状況が続いている。

５　ジャマイカ陸上競技との交流

（１）世界陸上のジャマイカ選手の鳥取合宿

平成19（2007）年８月、大阪の長居競技場で開催が決まっていた世界陸上競技選手権大会に出場する各国の選手団の事前合宿地について、アメリカやドイツが合宿をどこそこの県で行うというニュースが入り、鳥取陸協としてもどこかの国の合宿地にと名乗りを上げ、選手団を受け入れしようと日本陸連に申し入れた。

県体協も支援のための予算について配慮するとともに、会長自らが６月に日本陸連に出向き、副会長（常勤）と事務局長に面会し、鳥取陸協の申し入れについて特別に配慮してほしいと依頼し、２、３の国にあたってみると回答を得ていた。そして、７月に入って日本陸連からジャマイカチームを紹介され、同国の布勢陸上競技場での合宿が決まったのである。鳥取陸協としても県体協、県教委とともにジャマイカ陸上選手歓迎本部を設置し、準備に入った。

当時100mの世界記録保持者のパウエル選手も来県して８月11日から22日まで布勢で合宿練習をすることになったのである。

８月10日に先ずクォーリ・ジャマイカ選手団長ほか役員４人が来県し、宿舎のホテルで練習日程等の打ち合わせを行った。選手は世界各地の滞在地から11日までに関西国際空港に２～３人づつ到着するというので、毎日のように鳥取陸協の役員がバスで迎えに行った。12日に歓迎レセプションを行い、13日にジャマイカの役員が知事を表敬訪問した。練習は13日から朝夕に行われ、公開練習も16日、17日に行われた。

その際、選手と子どもたちとのふれあいや技術的な指導もあった。また、20日には近くの保育園へ選手15人が訪れ、給食時に幼児との交流を行った。

21日に選手団は大阪へ向かい、鳥取での合宿は終わった。25日に大阪のホテルへ知事と県体協会長が訪問し役員団を激励した。その際にジャマイカのユニホームを10着いただいている。

（２）ジャマイカ陸上選手の２度目の布勢合宿と交流発展

平成27（2015）年８月、北京で世界陸上出場のジャマイカ選手団が、２度目の鳥取合宿を行い、公開練習には約１万２千人の人が集まった。８年前の大阪世界陸上で有名になったウサイン・ボルト選手らの活躍が県民に大きな関心を持たせたのであろう。

平成28（2016）年には、県内３地区でジャマイカトップコーチによる陸上教室を開催し、交流が更に発展したものとなった。また、この年にジャマイカのレゲエマラソンに鳥取の選手が参加し、谷口選手（東部消防局）が優勝したほか、翌年にも指導者短期研修として２人の指導者をジャマイカに派遣している。

ジャマイカコーチによる陸上教室の３地区での開催やジャマイカレゲエマラソンへの出場は継続

している。

このような交流の充実発展は、浜崎晋一会長らがジャマイカを何度か訪問し、交流事業の継続に尽力したことによるものであった。

６　今後の課題

少子化、子どものスポーツ離れ、体力低下、そして学校部活動の見直しなど、スポーツを取り巻く環境は決して良好というわけではない。本県のスポーツ振興は、民間のクラブ組織の充実と進展なくしてその目標は達成できないだろう。現に、クラブチームで育った子どもたちが中学校、高校でも成長しつつあり、平成29年のジュニアオリンピックでの鳥取県の子どもたちの好成績がその結果を示しているのである。これらの有望なジュニアアスリートを更に大きく伸ばしていくことが喫緊の課題である。

また、駅伝は陸上競技の中でも独特の魅力を持つ競技であり、県民の注目度も高い。短距離を中心としたジュニアアスリートの成長の勢いを長距離分野の競技力の向上にも引き継いで、大幅なレベルアップを図る必要がある。

昭和21年、敗戦に打ちひしがれた県民を何とか勇気づけようと「米子～鳥取間駅伝」を企画し、開催し続けた先人の壮大なスケールと豊かな発想こそ、鳥取陸協の精神であり神髄である。スポーツでしか伝えられないものがあるという信念と熱意をもって、鳥取陸上の発展に若い指導者たちが尽力されることを望みたい。

2017ジュニアオリンピック女子4×100mR優勝

【歴代会長、理事長】

◇会長

昭和48年～平成21年		浜崎　芳宏
22年～	27年	横山　隆義
28年～		浜崎　晋一

◇理事長

昭和53年～平成10年		平野　壽光
11年～	15年	横山　隆義
16年～	23年	中原　利幸
24年～		新田　明彦

鳥取陸上競技協会の年間主催大会

月	曜日	鳥取陸協主催・主管（一部郡市陸協主催大会）	会　　場
4	土	第1回土曜記録会	鳥取・倉吉・米子
	日	小学生クラブ対抗陸上競技大会	名　和
	月	記録会	鳥取・倉吉・米子
5	祝日	第１回長距離記録会	鳥　取
	土・日	鳥取県陸上競技選手権 兼 国体選手選考会	鳥　取
	土	春季ジュニア陸上競技選手権大会	名　和
	土	第２回土曜記録会	鳥　取
	日	鳥取県障がい者陸上競技選手権大会	鳥　取
	日	鳥取県マスターズ陸上競技選手権大会	米　子

5	土～月	鳥取県高等学校総合体育大会 兼 国体選手選考会	鳥　取
	月	第２回長距離記録会	鳥　取
6	土・日	日本グランプリシリーズ　布勢スプリント	鳥　取
	土・日	鳥取市陸上競技選手権大会	鳥　取
	土・日	倉吉市・東伯郡陸上競技選手権大会	倉　吉
	土	米子市陸上競技選手権大会	米　子
	日	境港市陸上競技選手権大会	竜ヶ山
	日	全国小学生陸上競技交流大会県選考会兼鳥取県夏季小学生陸上競技大会	鳥取/倉吉/米子
	土・日	中学校通信陸上競技大会	鳥　取
	日	第３回長距離記録会	鳥　取
7	日	国体選手最終選考会	鳥　取
	土・日	鳥取県中学校総合体育大会	鳥　取
8	土	西部地区陸上競技選手権大会	米　子
		ＡＬＬ但馬・因幡地区中学校対抗陸上競技選手権大会	鳥　取
	土	名和ナイター陸上競技大会	名　和
	土・日	鳥取県ジュニア陸上競技選手権大会	倉　吉
9	土	第３回土曜記録会	鳥取・倉吉・竜ヶ山
	日	車いすマラソン＆湖山池マラソン	鳥　取
	金～日	鳥取県高等学校・中学校新人陸上競技大会	鳥　取
	日	長距離記録会	鳥　取
	日	鳥取県小学生陸上競技大会	鳥　取
10	土	第４回土曜記録会	鳥　取
	日	くらよし女子駅伝競走大会	倉　吉
		日本海駅伝競走大会	
	日	境港鬼太郎カップ駅伝競走大会	竜ヶ山
		鳥取県小学生クロスカントリー大会	
		男子・女子鳥取県中学校駅伝競走大会	東部/中部/西部
	土・日	鳥取県民スポレク祭 兼 会長杯陸上競技大会	東部/中部/西部
11	日	男子・女子県高校総体駅伝競走大会	境港マリンマラソンコース
	土・日	米子～鳥取間駅伝競走大会	県　下
	日	鳥取県マスターズ駅伝競走大会	湯梨浜
	23	長距離記録会兼都道府県対抗男子・女子選考会	倉　吉
	土	第６回長距離記録会	鳥　取
3月	日	澤巌クロスカントリー大会	鳥　取
	日	鳥取マラソン	鳥取砂丘因幡マラソンコース
	日	ＳＢちびっこ健康マラソン	鳥　取

国際大会

年度		大会名	チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	開催地
西暦	平成							
1993	5年	東アジアジュニア陸上	石破清志	鳥取西高	やり投	67m42	1位	香港
1994	6年	世界ジュニア	石破清志	鳥取西高	やり投	71m72	8位	リスボン
		ポートランドマラソン	米原正人	芙蓉	マラソン	2時間18分00秒	1位	ポートランド
1997	9年	東アジア大会	冨田　学	鳥取県スポーツセンター	110mH	14秒12	4位	釜山
		国際マラソン	西村　忍	鹿屋体育大	マラソン	2時間39分16秒	1位	ニューカレドニア
1998	10年	アジア選手権	冨田　学	鳥取県スポーツセンター	110mH	14秒11	7位	福岡
2000	12年	アジア選手権	福長正彦	東京学芸大	200m	20秒78	1位	ジャカルタ
2003	15年	世界ユース	田邊　剛	鳥取西高	400mH	51秒58	4位	カナダ
			佐分, 藤光 品田, 田邊	日本チーム	メドレーリレー	1分53秒11	3位	
2014	26年	日･韓･中ジュニア交流	寺谷論美	倉吉東高	走高跳	1m72	1位	岩手
2016	28年	レゲエマラソン	谷口晃太	東部消防	男子マラソン	2時間38分49秒	1位	ジャマイカ
2017	29年	レゲエマラソン	池本大介	陸上自衛隊米子	男子マラソン	2時間36分04秒	1位	ジャマイカ
			塩見志保	チーム全力少年	女子マラソン	3時間20分19秒	1位	

日本陸上競技選手権

年度		チーム・選手名	所属	種　目	記録	成　　績	開催地
西暦	平成						
1993	5年	笹川勝彦	筑波大	砲丸投	15m09	8位	東京
		宮本栄子	由良育英高	800m	2分20秒57	7位	
1994	6年	笹川勝彦	筑波大	砲丸投	16m57	5位	東京
1995	7年	冨田　学	筑波大	110mH	14秒10	5位	東京
		川本衣里子	大阪体大	走高跳	1m70	5位	
1996	8年	冨田　学	筑波大	110mH	14秒06	6位	大阪
		笹川勝彦	筑波大	砲丸投	16m12	6位	
1997	9年	入賞者なし					東京
1998	10年	井中将貴	米子商高	3000mSC	8分46秒86	6位	熊本
		冨田　学	鳥取県スポーツセンター	110mH	14秒11	8位	
		澤田博美	鳥取県スポーツセンター	200m	25秒08	8位	
1999	11年	福長正彦	東京学芸大	200m	21秒70	8位	静岡
		澤田博美	鳥取県SC	100m	12秒26	8位	
2000	12年	福長正彦	東京学芸大	200m	20秒87	2位	宮城
2001	13年	石破清志	米子高教	やり投	71m07	4位	東京
2002	14年	中村　純	東京学芸大	七種	4648点	3位	石川
		中村　純	東京学芸大	やり投	45m32	8位	
2003	15年	安倍翔太	中央大	走幅跳	7m79	3位	神奈川
		牧　和穂	鳥取SC	円盤投	43m33	8位	
		牧　和穂	鳥取SC	ハンマー投	48m62	8位	
2004	16年	石破清志	TTC	やり投	72m99	3位	鳥取
		安倍翔太	中央大	走幅跳	7m72	4位	
		福長正彦	鳥取県体協	200m	21秒19	8位	
		山下聖人	明治大	3000mSC	9分02秒33	8位	
		湊　つばさ	島根大	走幅跳	5m99	7位	
2005	17年	田子康宏	立命館大	1500m	3分41秒39	3位	東京
		福長正彦	鳥取県SC	200m	21秒45	8位	
		牧　和穂	鳥取県SC	ハンマー投	58m13	3位	
2006	18年	牧　和穂	TTC	ハンマー投	53m04	7位	兵庫
		定常銘美	倉吉東高	400mH	60秒54	8位	
2007	19年	入賞者なし					大阪

2008	20年	松田大介	早稲田大	800m	1分50秒71	7位	神奈川
		湊　つばさ	鳥取県SC	走幅跳	6m11	7位	
2009	21年	北山慎一	中京大	400m	47秒03	7位	広島
		湊　つばさ	鳥取県教委	走幅跳	6m10（+1.5）	7位	
2010	22年	西澤真徳	鳥取県教委	110mH	13秒94（+1.8）	6位	香川
		高力裕也	大阪体大	やり投	72m01	7位	
		湊　つばさ	鳥取県教委	走幅跳	5m88（+0.4）	5位	
2011	23年	赤穂弘樹	大阪体大	ハンマー投	65m33	4位	埼玉
2012	24年	西澤真徳	鳥取県教委	110mH	13秒87（-0.6）	3位	大阪
		赤穂弘樹	大阪体大	ハンマー投	66m41	4位	
2013	25年	高力裕也	鳥取AS	やり投	77m84	3位	東京
		柏村亮太	日本大	ハンマー投	67m07	3位	
		赤穂弘樹	鳥取県教委	ハンマー投	64m59	5位	
		西澤真徳	鳥取県教委	110mH	13秒72（+1.3）	5位	
2014	26年	高力裕也	鳥取陸協	やり投	76m18	2位	福島
		赤穂弘樹	鳥取県教委	ハンマー投	67m60	2位	
		寺谷諭美	倉吉東高	走高跳	1m70	4位	
2015	27年	高力裕也	鳥取陸協	やり投	76m25	3位	新潟
		赤穂弘樹	鳥取陸協	ハンマー投	66m52	5位	
		西澤真徳	河原中教	110mH	13秒93（-1.4）	7位	
		寺谷諭美	筑波大	走高跳	1m75	6位	
2016	28年	赤穂弘樹	鳥取陸協	ハンマー投	67m67	3位	愛知
		小椋健司	日本大	やり投	75m77	4位	
2017	29年	小椋健司(4)	日本大	やり投	76m16	3位	大阪
		鍛治木　崚(4)	城西大	400mH	50秒01	4位	
		赤穂弘樹	鳥取陸協	ハンマー投	65m95	6位	
		高力裕也	鳥取陸協	やり投	73m62	6位	
		寺谷諭美(3)	筑波大	走高跳	1m74	4位	

国民体育大会

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	開催地
西暦	平成						
1993	5年	石破清志	鳥取西高	少年共通男子やり投	66m44	3位	徳島
		常田昌司	鳥取東高	少年B男子800m	1分55秒57	5位	
		魚住直毅	由良育英高	少年A男子5000m	14分44秒57	7位	
		上川亜矢	由良育英高	少年共通女子3000m競歩	13分52秒87	2位	
		吉野涼子	由良育英高	少年B女子100mH	14秒78	3位	
		谷　真理子	由良育英高	少年A女子400mH	1分01秒94	6位	
		植松博美	鳥取女子高	少年B女子砲丸投	11m82	6位	
1994	6年	石破清志	鳥取西高	少年男子共通やり投	68m22	1位	愛知
		笹川勝彦	筑波大	成年男子砲丸投	16m88	2位	
		橋本　淳	由良育英高	少年男子B3000m	8分35秒36	5位	
		阿部雄一	倉吉工高	少年A男子走高跳	2m05	6位	
		上川亜矢	由良育英高	少年A女子3000m競歩	13分23秒16	1位	
		日下部和子	芙蓉	成年女子3000m	9分13秒33	3位	
		岡村亜希	由良育英高	少年共通女子やり投	46m34	4位	
		大塚　茜	由良育英高	少年A女子1500m	4分23秒81	7位	
1995	7年	藤田将弘	由良育英高	少年A男子3000mSC	9分06秒01	4位	福島
		笹川勝彦	筑波大	成年男子砲丸投	16m29	5位	
		常田昌司	由良育英高	少年A男子1500m	3分54秒55	6位	
		岡村亜希	由良育英高	少年共通女子やり投	48m38	1位	
		矢野加奈子	由良育英高	少年A女子400m	55秒48	3位	
		上川亜矢	東京女子体大	成年女子5000m競歩	22分56秒93	4位	
		福井　希	鳥取女子高	少年A女子400mH	1分05秒52	8位	

1996	8年	冨田　学	筑波大	110mH	13秒89	2位	広島
		田中　健	由良育英高	5000m競歩	21分44秒93	5位	
		橋本　淳	由良育英高	1500m	3分51秒38	6位	
		橋本　淳	由良育英高	5000m	14分11秒34	6位	
		常田昌司	筑波大	800m	1分50秒88	7位	
		松田賢二	米子商高	3000m	8分35秒33	7位	
		深津裕子	芙蓉	1500m	4分22秒09	3位	
		加嶋久子	由良育英高	3000m競歩	14分02秒49	5位	
		礒江美和	由良育英高	800m	2分11秒60	7位	
		澤田博美	島根大	100m	12秒11	8位	
1997	9年	高見剛志	由良育英高	少年B男子400m	48秒70	3位	大阪
		有田正寿	八頭高	少年B男子800m	1分57秒68	4位	
		冨田　学	鳥取県SC	成年男子110mH	14秒05	4位	
		徳田義和	布勢AC	成年男子3000mSC	8分45秒86	7位	
		上坂祐介	鳥取城北高	少年A男子やり投	60m52	8位	
		伊民沙由里	鳥取西高	少年B女子100mH	14秒47	3位	
		大塚　茜	鹿屋体育大	成年女子1500m	4分22秒47	5位	
		上川亜矢	東京女体大	成年女子5000m競歩	23分03秒34	6位	
		川本衣里子	大阪体大	成年女子走高跳	1m75	6位	
		礒江美和	由良育英高	少年A女子800m	2分11秒95	6位	
		荒木麻美	由良育英高	少年B女子砲丸投	11m85	7位	
		礒江美和	由良育英高	少年A女子400mH	1分03秒91	8位	
1998	10年	井中将貴	米子商高	少年A男子3000mSC	8分47秒92	1位	神奈川
		高橋　洋	由良育英高	少年A男子5000m	14分10秒28	4位	
		原園謙介	由良育英高	少年A男子110mH	14秒74	7位	
		中村　純	鳥取西高	少年A女子やり投	47m47	4位	
		湊　つばさ	境港一中	少年B女子走幅跳	5m52	5位	
		上川亜矢	東京女体大	成年女子5000m競歩	22分41秒06	5位	
		牧　和穂	米子西高	少年A女子円盤投	41m12	7位	
1999	11年	安倍翔太	境港工高	少年B男子走幅跳	7m28	1位	熊本
		泉　法俊	由良育英高	少年A男子3000mSC	8分57秒48	4位	
		田子康宏	由良育英高	少年B男子3000m	8分40秒09	6位	
		湊　つばさ	境高	少年B女子走幅跳	5m57	4位	
		広澤里佳	鳥取商高	少年共通女子3000m競歩	14分02秒81	5位	
		澤田博美	鳥取県SC	成年女子200m	24秒45	6位	
		伊民沙由里	鳥取西高	少年A女子100mH	14秒68	7位	
2000	12年	田子康宏	由良育英高	少年A男子800m	1分50秒92	1位	富山
		福長正彦	東京学芸大	成年男子200m	20秒97	2位	
		石破清志	鳥取西高教	成年男子やり投	70m91	4位	
		広澤里佳	鳥取商高	少年A女子5000m競歩	23分25秒53	2位	
		湊　つばさ	境高	少年A女子三段跳	11m86	5位	
		岡田雅未	米子商高	少年A女子1500m	4分27秒47	7位	
2001	13年	田子康宏	由良育英高	少年A男子800m	1分52秒28	1位	宮城
		蓮佛友紀	八頭高	少年共通男子5000m競歩	21分07秒46	3位	
		山本英範	由良育英高	少年共通男子やり投	64m49	3位	
		石破清志	米子高教	成年男子やり投	70m46	6位	
		山下聖人	由良育英高	少年共通男子3000mSC	9分00秒19	7位	
		吉田　平	鳥取三洋	成年男子3000mSC	8分57秒32	8位	
		田邉　剛	鳥取西高	少年B男子110mH	15秒07	8位	
		湊　つばさ	境高	少年A女子三段跳	11m92	4位	
		岡田雅未	米子松蔭高	少年A女子1500m	4分25秒32	5位	
		牧　和穂	島根大	成年女子ハンマー投	52m31	6位	
		牧　和穂	島根大	成年女子円盤投	45m88	8位	

2002	14年	田子康宏	立命館大	成年男子1500m	3分49秒49	1位	高知
		安倍翔太	中央大	成年男子走幅跳	7m75（+2.6）	1位	
		北村迪人	由良育英高	少年共通男子5000m競歩	20分40秒13	3位	
		加藤一機	米子松蔭高	少年A男子5000m	14分02秒08	8位	
		松本佳江	倉吉東高	少年共通女子棒高跳	3m70	1位	
		蘆田陽子	由良育英高	少年共通女子3000m	9分18秒48	5位	
		塩谷佳奈子	境高	少年共通女子走高跳	1m66	6位	
		牧　和穂	島根大	成年女子ハンマー投	49m93	7位	
		牧　和穂	島根大	成年女子円盤投	46m53	8位	
2003	15年	田子康宏	立命館大	成年男子1500m	3分46秒65	2位	静岡
		岩本拓也	由良育英高	少年A男子100m	10秒58	4位	
		牧　和穂	鳥取SC	成年女子ハンマー投	58m57	2位	
		塩谷佳奈子	境高	少年女子共通走高跳	1m63	6位	
2004	16年	田子康宏	立命館大	成年男子1500m	3分46秒08	2位	埼玉
		黒松直人	由良育英高	少年B男子砲丸投	15m51	3位	
		平木敬太	鳥取西高	少年A男子110mH	14秒59	3位	
		福長正彦	鳥取体協	成年男子100m	10秒49	5位	
		加藤真幸	倉吉東高	少年共通男子400mH	52秒53	6位	
		山下聖人	明治大	成年男子3000mSC	9分01秒55	7位	
		牧　和穂	鳥取SC	成年女子ハンマー投	54m37	4位	
		湊　つばさ	島根大	成年女子三段跳	12m44	7位	
2005	17年	西澤真徳	八頭高	少年A男子110mH	14秒44	1位	岡山
		田子康宏	立命館大	成年男子1500m	3分42秒74	1位	
		石破清志	鳥取西高教	成年男子やり投	71m80	4位	
		小谷健人	倉吉北高	少年A男子棒高跳	4m80	5位	
		駒場萌美	鳥取西高	少年共通女子走高跳	1m75	3位	
2006	18年	田子康宏	中国電力	成年男子1500m	3分58秒15	3位	兵庫
		沢田研二	鳥取東高	少年共通男子5000m競歩	22分22秒96	6位	
		安倍翔太	チームアドバンス	成年男子走幅跳	7m56	7位	
		加藤秀治	倉吉東高	少年A男子400mH	57秒31	8位	
		駒場萌美	鳥取西高	少年共通女子走高跳	1m66	7位	
		山根瑠美	倉吉総産高	少年B女子100mH	14秒87	8位	
2007	19年	安倍翔太	鳥取陸協	成年男子走幅跳	7m58	5位	秋田
		高力裕也	倉吉総産高	少年A男子やり投	63m97	8位	
		井伊拓哉	鳥取商高	少年共通男子5000m競歩	21分31秒53	8位	
		駒場萌美	鳥取西高	少年共通女子走高跳	1m72	3位	
		湊　つばさ	鳥取県SC	成年女子走幅跳	5m81	7位	
2008	20年	柏村亮太	倉吉北高	少年A男子ハンマー投	60m91	2位	大分
		石原寛之	米子東高	少年A男子100m	10秒66	4位	
		西澤真徳	福岡大	成年男子110mH	14秒11	5位	
		谷口晃大	東京農大	成年男子3000mSC	8分53秒60	8位	
		小谷優人	倉吉北高	少年共通男子棒高跳	4m70	8位	
		湊　つばさ	鳥取県SC	成年女子走幅跳	6m00	7位	
2009	21年	西澤真徳	福岡大	成年110mH	13秒82（0.0）	1位	新潟
		柏村亮太	倉吉北高	少年A男子ハンマー投	68m33	1位	
		田村大輔	自衛隊体育学校	成年男子800m	1分49秒24	3位	
		萩原くらら	河北中	少年共通女子走高跳	1m72	2位	
		湊　つばさ	鳥取県教委	成年女子走幅跳	5m95（+0.1）	7位	
2010	22年	藤原匠平	鳥取城北高	少年B男子3000m	8分30秒05	3位	千葉
		西澤真徳	鳥取県教委	成年男子110mH	13秒98（-0.9）	4位	
		高力裕也	大阪体大	成年男子やり投	72m33	4位	
		松浦憲吾	境高	少年A男子走幅跳	7m33（+1.2）	6位	
		赤穂弘樹	大阪体大	成年男子ハンマー投	61m59	8位	
		湊　つばさ	鳥取県教委	成年女子走幅跳	5m99（+1.2）	4位	

2011	23年	赤穂弘樹	大阪体大	成年男子ハンマー投	66m48	3位	山口
		西澤真徳	鳥取県教委	成年男子110mH	13秒80（+1.9）	4位	
		田村大輔	自衛隊体育学校	成年男子1500m	3分44秒59	6位	
		萩原くらら	倉吉東高	少年女子共通走高跳	1m69	5位	
		湊　つばさ	鳥取県教委	成年女子走幅跳	5m92（-0.1）	7位	
2012	24年	西澤真徳	鳥取県教委	成年男子110mH	13秒88（+0.8）	3位	岐阜
		高力裕也	大体大TC	成年男子やり投	76m02	3位	
		藤井亮汰	倉吉総産高	少年男子B110mH	14秒52（+1.5）	5位	
		森山大成	境高	少年男子B走幅跳	6m92（-0.5）	6位	
		赤穂弘樹	大阪体大	成年男子ハンマー投	62m09	7位	
		小椋健司	倉吉総産高	少年A男子やり投	60m82	8位	
		萩原くらら	倉吉東高	成年女子走高跳	1m75	4位	
		田中晴菜	倉吉総産高	少年女子共通やり投	47m22	5位	
		前川祐紀	鳥取中央育英高	少年女子A3000m	9分13秒38	6位	
2013	25年	松浦憲吾	美作大	成年男子走幅跳	7m54（+0.9）	3位	東京
		小椋健司	倉吉総産高	少年A男子やり投	66m38	3位	
		西澤真徳	鳥取県教委	成年男子110mH	13秒94（-1.2）	5位	
		赤穂弘樹	鳥取県教委	成年男子ハンマー投	64m19	5位	
		田中晴菜	倉吉総産高	少年女子共通やり投	52m12	4位	
		斉木杏優華	倉吉総産高	少年女子共通棒高跳	3m30	7位	
2014	26年	西澤真徳	鳥取陸協	成年男子110mH	13秒91（-0.5）	4位	長崎
		寺谷諭美	倉吉東高	成年女子走高跳	1m72	4位	
2015	27年	西澤真徳	鳥取陸協	成年男子110mH	13秒83（+1.4）	3位	和歌山
		石坂力成	倉吉総産高	少年A男子やり投	65m76	5位	
		門脇昭憲	倉吉北高	少年A男子ハンマー投	56m81	8位	
		寺谷諭美	筑波大	成年女子走高跳	1m72	7位	
2016	28年	西澤真徳	鳥取陸協	成年男子110mH	13秒80（+0.3）	3位	岩手
		坂田育斗	鳥取育英高	少年A100m	10秒72（0.0）	5位	
		鍛治木　峻	城西大	成年男子400mH	51秒63	8位	
		寺谷諭美	筑波大	成年女子走高跳	1m69	5位	
2017	29年	小椋健司（4）	日本大	成年男子やり投	76m20	2位	愛媛
		今西弘成（3）	倉吉北高	少年男子A棒高跳	4m80	3位	
		藤原大輝（3）	鳥取城北高	少年男子A100m	10秒59（+4.2）	5位	
		池田弘佑（4）	鳥取大	成年男子400m	48秒02	7位	
		岸本百桃（3）	鳥取西中	少年女子B800m	2分11秒56	4位	
		上田理湖（1）	鳥取城北高	少年女子B100m	12秒27（-1.0）	8位	
2018	30年	鍛治木　峻	住友電工	成年男子400mH	49秒61	1位	福井
		井上瑞葵	鳥取育英高	少年男子B100m	11秒10（-3.8）	1位	
		小椋健司	日本体育施設	成年男子やり投（800g）	74m31	2位	
		藤井亮汰	順天堂大	成年男子110mH（1.067m）	13秒81（+1.2）	6位	
		中井啓太	鳥取城北高	少年男子共通800m	1分57秒70	7位	
		池田弘佑	鳥取大	成年男子400m	47秒69	8位	

全国高校

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	開催地等
西暦	平成						
1993	5年	石破清志	鳥取西高	やり投	65m64	1位	栃木
		魚住直毅	由良育英高	3000mSC	9分05秒94	8位	
		川本衣里子	鳥取女子高	走高跳	1m68	5位	
		谷　真理子	由良育英高	400mH	1分05秒27	6位	400mH
1994	6年	石破清志	鳥取西高	やり投	68m22	1位	富山
		原田　大	鳥取東高	800m	1分53秒48	5位	

1995	7年	常田昌司	鳥取東高	800m	1分52秒29	4位	鳥取
		岡村亜希	由良育英高	やり投	48秒32	1位	
		矢野加奈子	由良育英高	400m	56秒23	5位	
		福井　希	鳥取女子高	400mH	1分03秒37	5位	混成・競歩 400mH 長距離
1996	8年	橋本　淳	由良育英高	5000m	14分26秒08	4位	山梨
		岡垣俊輔	由良育英高	やり投	62m30	4位	
		小原　尚	由良育英高	200m	21秒87	7位	
		礒江さつき	倉吉工高	走高跳	1m66	8位	
		橋本　淳	由良育英高	10000m	30分29秒47	6位	混成・競歩 400mH 長距離
		加嶋久子	由良育英高	3000m競歩	14分18秒81	6位	
1997	9年	福長正彦	鳥取西高	200m	21秒87	6位	京都
1998	10年	井中将貴	米子商高	3000mSC	9分08秒42	1位	香川
		高橋　洋	由良育英高	5000m	14分23秒70	5位	
		原園謙介	由良育英高	110mH	14秒81	7位	
		牧　和穂	米子西高	砲丸投	12m97	4位	
		牧　和穂	米子西高	円盤投	40m55	5位	
		原　和司	米子商高	10000m	30分46秒15	8位	混成・競歩 400mH 長距離
		中村　純	鳥取西高	七種	4549点	5位	
		西野珠美	由良育英高	3000m競歩	14分49秒75	6位	
1999	11年	小林竜也	由良育英高	800m	1分54秒36	6位	岩手
		三木真輔	由良育英高	八種	5648点	4位	混成・競歩 400mH 長距離
		佐々木裕介	由良育英高	5000m競歩	22分50秒57	7位	
		広澤里佳	鳥取商高	3000m競歩	14分28秒91	5位	
2000	12年	田子康宏	由良育英高	1500m	3分51秒55	2位	岐阜
		湊　つばさ	境高	走幅跳	5m94	4位	
		岡田雅未	米子商高	800m	2分12秒14	7位	
		広澤里佳	鳥取商高	3000m競歩	13分53秒25	3位	混成・競歩 400mH 長距離
		石笠弥生	由良育英高	3000m競歩	14分08秒58	6位	
		岡田雅未	米子商高	5000m	16分26秒98	6位	
2001	13年	田子康宏	由良育英高	800m	1分51秒18	1位	熊本
		田子康宏	由良育英高	1500m	3分49秒32	3位	
		安倍翔太	境港工高	走幅跳	7m43	3位	
		湊　つばさ	境高	走幅跳	5m92	3位	
		岡田雅未	米子松蔭高	1500m	4分25秒66	7位	
2002	14年	山田庸介	八頭高	110mH	14秒94	8位	茨城
2003	15年	岩本拓也	由良育英高	100m	10秒80	8位	長崎
		平林　幸	由良育英高	1500m	4分25秒17	6位	
2004	16年	平木敬太	鳥取西高	110mH	14秒73	4位	島根
		加藤真幸	倉吉東高	400mH	52秒72	6位	
2005	17年	西澤真徳	八頭高	110mH	14秒48	2位	千葉
		小谷健人	倉吉北高	棒高跳	4m70	7位	
		西村健士郎	倉吉総産高	やり投	60秒40	8位	
		駒場萌美	鳥取西高	走高跳	1m72	4位	
		定常銘美	倉吉東高	400mH	60秒94	5位	
2006	18年	赤羽竜之	鳥取育英高	1500m	3分49秒23	2位	大阪
		山本哲也 岡田祐季 大田克人 大川直人	鳥取育英高	4×100mR	41秒13	4位	
		加藤秀治	鳥取東高	400mH	53秒87	5位	
		定常銘美	倉吉東高	400mH	60秒40	2位	
		駒場萌美	鳥取西高	走高跳	1m68	8位	

2007	19年	高力裕也	倉吉総産高	やり投	62m20	7位	佐賀
		駒場萌美	鳥取西高	走高跳	1m72	4位	
2008	20年	長石　匡	倉吉北高	ハンマー投	58m09	3位	埼玉
		石原寛之	米子東高	100m	10秒73	6位	
2009	21年	柏村亮太	倉吉北高	ハンマー投	61m98	1位	奈良
2010	22年	入賞者なし					沖縄
2011	23年	入賞者なし					岩手
2012	24年	岸田健太郎	鳥取城北高	400m	48秒40	4位	新潟
		小椋健司	倉吉総産高	やり投	64m27	4位	
2013	25年	小椋健司	倉吉総産高	やり投	67m26	3位	大分
		寺谷諭美	倉吉東高	走高跳	1m68	7位	
2014	26年	藤井亮汰	倉吉総産高	110mH	14秒81（-2.4）	5位	山梨
		東島清純	米子松蔭高	3000mSC	9分06秒64	6位	
		寺谷諭美	倉吉東高	走高跳	1m75	2位	
2015	27年	石坂力成	倉吉総産高	やり投	66m65	2位	和歌山
2016	28年	大森太楽	鳥取城北高	3000mSC	9分10秒43	8位	岡山
2017	29年	入江みはゆ（3）	八頭高	5000mW	22分45秒34	4位	山形
2018	30年	中井啓太	鳥取城北高	800m	1分51秒59	5位	三重
		谷尾俊樹	倉吉北高	やり投（800g）	61m47	6位	

ジュニア・ユース選手権（高校・大学生）

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	開催地	備考
西暦	平成							
1993	5年	仲野慎一	中京大	棒高跳	4m70	8位	愛知	ジュニア
		山本真弓	中京大	やり投	48m76	4位		
		谷　真理子	由良育英高	400mH	1分02秒17	6位		
1994	6年	石破清志	鳥取西高	やり投	61m36	5位	愛知	ジュニア
		松本滉彦	中京大	三段跳	14m41	7位		
		上川亜矢	由良育英高	5000m競歩	23分53秒15	3位		
		川本衣里子	大阪体大	走高跳	1m70	6位		
		谷　真理子	関西外大	400mH	1分02秒45	7位		
1995	7年	石破清志	筑波大	やり投	69m72	1位	徳島	ジュニア
		上川亜矢	東京女子体大	5000m競歩	23分23秒09	3位		
1996	8年	橋本　淳	由良育英高	5000m	14分19秒56	4位	新潟	ジュニア
		常田昌司	筑波大	1500m	3分51秒66	7位		
		岡村亜希	筑波大	やり投	48m04	2位		
1997	9年	小原　尚	中京大	200m	22秒02	7位	山形	ジュニア
		加嶋久子	東京女子体大	5000m競歩	24分34秒11	4位		
1998	10年	原　和司	米子商高	5000m	14分15秒90	8位	熊本	ジュニア
		牧　和穂	米子西高	砲丸投	12m63	8位		
1999	11年	小谷直樹	八頭高	10000m競歩	46分36秒06	7位	三重	ジュニア
		三木真輔	由良育英高	十種	5706点	7位		
		小林竜也	由良育英高	800m	1分57秒69	8位		
		牧　和穂	島根大	円盤投	44m69	2位		
		牧　和穂	島根大	砲丸投	13m69	2位		
		中村　純	東京学芸大	七種	4215点	7位		
		広澤里佳	鳥取商高	5000m競歩	24分52秒57	8位		
2000	12年	田子康宏	由良育英高	800m	1分53秒79	2位	兵庫	ジュニア
		田子康宏	由良育英高	1500m	3分53秒49	4位		
		湊　つばさ	境高	走幅跳	5m88	5位		
		岡田雅未	米子商高	3000m	9分33秒50	7位		
2001	13年	佐々木裕介	国士舘大	10000m競歩	45分04秒23	6位	長野	ジュニア
		岡田雅未	米子松蔭高	1500m	4分32秒16	2位		
		松本佳江	倉吉東高	棒高跳	3m50	5位		

2002	14年	田子康宏	立命館大	1500m	3分52秒70	1位	福岡	ジュニア
		安倍翔太	中央大	走幅跳	7m46（+3.0）	2位		
		山本英範	立命館大	やり投	62m82	6位		
		湊　つばさ	島根大	走幅跳	5m88	2位		
		湊　つばさ	島根大	三段跳	11m99	4位		
2003	15年	田邉　剛	鳥取西高	400mH	51秒33	2位	群馬	ジュニア
		山本英範	立命館大	やり投	65m27	2位		
		北村迪人	国士舘大	10000m競歩	45分09秒53	5位		
2004	16年	田邉　剛	福岡大	400mH	51秒43	1位	兵庫	ジュニア
2005	17年	平木敬太	福岡大	110mH	14秒52	4位	富山	ジュニア
		佐々木エルザ	鳥取城北高	走高跳	1m70	7位		
2006	18年	西澤真徳	福岡大	110mH	14秒32	3位	島根	ジュニア
		小谷健人	日本大	棒高跳	5m00	5位		
		定常銘美	倉吉東高	400mH	60秒60	4位		
2007	19年	入賞者なし					大分	第1回ジュニア・ユース
2008	20年	小泉和也	鳥取育英高	5000m	14分56秒60	1位	鳥取	ジュニア
		細見駿介	鳥取育英高	5000m	15分16秒53	2位		
		池谷　竜	鳥取育英高	1500m	3分53秒16	4位		
		赤穂弘樹	大阪体大	ハンマー投	60m09	6位		
		橋本悠平	八頭高	やり投	61m52	8位		
		松浦七実	鹿屋体大	5000m	16分18秒80	2位		
		高力香織	鳥取育英高	5000m	16分19秒93	3位		
		柏村亮太	倉吉北高	ハンマー投	61m72	1位		ユース
		田川　諒	鳥取城北高	やり投	61m18	2位		
2009	21年	柏村亮太	倉吉北高	ハンマー投	64m83	3位	山梨	ジュニア
2010	22年	萩原くらら	倉吉東高	走高跳	1m66	5位	愛知	ユース
2011	23年	松浦憲吾	美作大	走幅跳	7m25（+0.2）	5位	愛知	ジュニア
		齋木勇輝	中京大	棒高跳	4m90	6位		
		萩原くらら	倉吉東高	走高跳	1m69	4位		ユース
2012	24年	萩原くらら	倉吉東高	走高跳	1m74	1位	愛知	ジュニア
		田中晴菜	倉吉総産高	やり投	45m95	4位		ユース
2013	25年	田中晴菜	倉吉総産高	やり投	51m41	6位	愛知	ジュニア
		藤井亮汰	倉吉総産高	110mH（0.991m）	14秒21（-0.1）	4位		ユース
2014	26年	藤井亮汰	倉吉総産高	110mH	14秒25（+2.7）	5位	愛知	ジュニア
		鍛治木　崚	城西大	400mH	53秒05	7位		
		寺谷諭美	倉吉東高	走高跳	1m73	3位		
		石坂力成	倉吉総産高	やり投	60m77	3位		ユース
2015	27年	寺谷諭美	筑波大	走高跳	1m70	5位	愛知	ジュニア
2016	28年	石坂力成	大阪体大	やり投	73m20	1位	愛知	ジュニア
		坂田育斗	鳥取育英高	100m（-0.6）	10秒55	3位		
		福長ちひろ	鳥取陸協	三段跳	12m00（+0.7）	8位		
		田口光樹	倉吉東高	やり投	59m92	7位		ユース
2017	29年	藤原大輝(3)	鳥取城北高	100m	10秒69（+1.0）	7位	愛知	第1回U20
		岡崎　汀(2)	倉吉東高	100mH	13秒87（+0.4）	8位		第1回U18
2018	30年	有本吏里	倉吉東高	走幅跳	5m86	2位	愛知	

全日本中学

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	開催地等
西暦	平成						
1993	5年	生原幸太	大栄中	三種B	3080点	3位	兵庫
		宮本準也	三朝中	100m	11秒43	8位	
		三橋里子	境港二中	1500m	4分33秒33	3位	
1994	6年	入賞者なし					北海道
1995	7年	中村　純	倉吉西中	三種A	2840点	5位	山梨

1996	8年	高見剛志	河北中	100m	11秒52	4位	静岡
		小谷　彰	岩美中	走高跳	1m88	6位	
		西村京子	倉吉西中	三種B	2953点	7位	
		西村京子	倉吉西中	砲丸投	13m11	8位	
1997	9年	小谷　彰	岩美中	走高跳	2m00	1位	高知
		小谷　彰	岩美中	三種A	3065点	2位	
		揚本真由 中澤瑠衣子 馬淵可奈子 野間真琴	境港二中	4×100mR	49秒84	4位	
		湊　つばさ	境港一中	走幅跳	5m25	8位	
1998	10年	山根卓也	鳥取南中	800m	2分01秒86	6位	山形
		湊　つばさ	境港一中	走幅跳	5m63	3位	
		中澤瑠衣子	境港二中	200m	26秒08	6位	
		中澤瑠衣子	境港二中	100m	12秒74	8位	
1999	11年	篠村梢子	岸本中	三種B	3028点	8位	富山
2000	12年	徳岡美沙樹	岸本中	三種B	2903点	8位	長崎
2001	13年	池田大介	日南中	三種A	3147点	1位	広島
		池田大介	日南中	三種B	3348点	1位	
2002	14年	中澤輝映 荒井奈留美 坂井麻由 田中里奈	境港二中	4×100mR	50秒08	6位	京都
		新　里菜	大栄中	100mH	14秒86	7位	
2003	15年	加藤秀治	三朝中	100mH	14秒87	4位	北海道
		森脇優衣 坂本陽子 中澤輝映 田中里奈	境港二中	4×100mR	49秒32	5位	
		佐々木エルザ	鹿野中	走高跳	1m59	7位	
2004	16年	駒場萌美	中ノ郷中	走高跳	1m72	1位	群馬
2005	17年	入賞者なし					岐阜
2006	18年	入賞者なし					香川
2007	19年	田川　諒	鳥大附属中	砲丸投	14m35	5位	宮城
2008	20年	入賞者なし					新潟
2009	21年	入賞者なし					大分
2010	22年	渡辺孝道	鴨川中	110mYH	14秒69（+1.0）	7位	鳥取
2011	23年	入賞者なし					奈良
2012	24年	佐伯洸輔	倉吉東中	砲丸投	13m84	8位	千葉
		土岐恵里佳	湊山中	砲丸投	13m20	8位	
2013	25年	住谷俊亮	鳥取西中	400m	50秒43	6位	愛知
		大岩千紘 樋野真奈花 曽田凜子 遠藤菜々	後藤ヶ丘中	4×100mR	49秒12	6位	
2014	26年	入賞者なし					香川
2015	27年	北脇秀人	鳥取南	1500m	4分02秒65	2位	北海道
		長谷川迅平	中ノ郷	点4種競技	2805点	2位	
		北脇秀人	鳥取南	800m	1分56秒30	3位	
2016	28年	市村知弘	河北中	110mYH	14秒16（+0.5）	3位	長野
		岸本百桃	鳥取西中	800m	2分14秒37	4位	
		吉田明香里	河原中	200m	25秒23（-0.2）	5位	
		尾崎　星	鳥取西中	200m	25秒31（-0.2）	7位	
2017	29年	福本航太（3）	北溟中	1500m	4分02秒95	8位	熊本
		中山敬太（3）	八頭中	四種競技	2669点	8位	
		角　良子（2）	美保中	100m	12秒30（-0.5）	3位	
		尾﨑　星（3）	鳥取西中	200m	25秒35（-2.3）	3位	

2017	29年	吉田明香里（3）	河原中	200m	25秒40（-2.3）	4位	熊本
		岸本百桃（3）	鳥取西中	800m	2分14秒32	4位	
		尾﨑　星（3）	鳥取西中	100m	12秒34（-0.5）	5位	
		吉田明香里（3）	河原中	100m	12秒41（-0.5）	7位	
2018	30年	山口大凱	鳥大附属中	200m	22秒23	2位	岡山
		角良子	美保中	100m	12秒26	3位	
		加河鈴菜	後藤ヶ丘中	100m	12秒73	6位	

ジュニアオリンピック（中学生・高校生）

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	備考
西暦	平成						
1993	5年	橋本　淳	八東中	男子B3000m	8分48秒25	7位	東京
		谷　真理子	由良育英高	女子A400mH	1分01秒60	3位	
		上川亜矢	由良育英高	女子A3000m競歩	14分04秒08	3位	
		浅田倫世	由良育英高	女子B3000m競歩	16分15秒45	6位	
		植松博美	鳥取女子高	女子B砲丸投	11m50	6位	
		吉野涼子	由良育英高	女子B100mH	15秒58	7位	
1994	6年	大平一夫	由良育英高	男子A5000m競歩	22分26秒45	5位	東京
		西田裕司	倉吉西中	男子B110mH	14秒93	8位	
		小林純子	境港三中	女子C走幅跳	5m34	1位	
		西村京子	倉吉西中	女子D三種	2782点	1位	
		加藤愛美	境港一中	女子B走高跳	1m55	2位	
		金築かおり	境港一中	女子B200m	26秒07	4位	
1995	7年	高見・長井 河島・仲	河北中	男子CD 4×100mR	46秒40	4位	東京
		磯江俊浩	北溟中	男子D三種	2953点	6位	
		西村京子	倉吉西中	女子C砲丸投	12m33	5位	
		小林純子	境港三中	女子B走幅跳	5m33	6位	
		加嶋久子	由良育英高	女子A3000m競歩	14分27秒33	7位	
		角　尚子	境港一中	女子A100m	12秒78	8位	
1996	8年	磯江俊浩	北溟中	男子C100m	11秒37	6位	東京
1997	9年	向井偵幸	倉吉工高	男子Aハンマー投	50m78	4位	東京
		小谷　彰	岩美中	男子B走高跳	1m90	7位	
		原園謙介	由良育英高	男子A110mH	15秒34	8位	
		小泉寿幸	赤碕中	男子B110mH	14秒82	8位	
		湊　つばさ	境港一中	女子C走幅跳	5m34	2位	
		佐々田千春	境高	女子Aやり投	40m78	5位	
1998	10年	小谷　彰	倉吉工高	男子A走高跳	1m96	2位	東京
		山根卓也	鳥取南中	男子B800m	2分01秒87	4位	
		中澤瑠衣子	境港二中	女子B200m	25秒31	2位	
		中沢摩美	境港二中	女子D走幅跳	4m85	5位	
		青砥奈々美 揚本真由 賀川沙夜香 中澤瑠衣子	境港一中 境港二中 加茂中 境港二中	女子B・C・D4×100mR	49秒65	6位	
1999	11年	池田大介	日南中	男子D走高跳	1m71	1位	神奈川
		寺岡夏希	福部中	女子D走高跳	1m54	1位	
		倉繁裕子	倉吉東高	女子Aハンマー投	26m23	8位	
		篠村梢子	岸本中	女子B100mH	15秒52	8位	
2000	12年	池田大介	日南中	男子Cジャベリック	60m06	1位	神奈川
		野儀亮介	倉吉工高	男子Aハンマー投	41m25	7位	
		田邉　剛	鳥取北中	男子B110mH	15秒48	7位	
		松本佳江	倉吉東高	女子A棒高跳	3m40	3位	
		田中久美子	鳥取南中	女子C100m	12秒72	3位	
		新　里菜	大栄中	女子D100mH	16秒19	4位	

2000	12年	尾古奈津美	中山中	女子D走高跳	1m43	4位	神奈川
		青砥奈々美	境高	女子A200m	25秒74	5位	
		蓮佛真莉子	河原中	女子D砲丸投	11m06	6位	
		角　友代	倉吉東高	女子Aハンマー投	28m00	8位	
2001	13年	加藤秀治	三朝中	男子D100mH	14秒43	1位	神奈川
		池田大介	日南中	男子B走高跳	1m90	3位	
		前川良太	倉吉東高	男子Aやり投	50m26	8位	
		田中久美子	鳥取南中	女子B100m	12秒50	3位	
		新　里菜	大栄中	女子C100mH	15秒26	5位	
2002	14年	田中裕介	鳥取城北高	男子A走高跳	1m88	5位	神奈川
		加藤秀治	三朝中	男子C110mH	15秒59	6位	
		池田香澄	河北中	女子D100m	13秒11	5位	
		浦部梨絵	久米中	女子D砲丸投	11m21	6位	
		田中久美子	鳥取城北高	女子A100m	12秒86	8位	
2003	15年	西澤真徳	八頭高	男子A110mH	15秒56	6位	神奈川
		小谷健人	倉吉北高	男子A棒高跳	4m50	6位	
		古田光弘	青谷中	男子B走高跳	1m80	6位	
		斉木俊輝	倉吉西中	男子D110mH	15秒15	8位	
		佐々木エルザ	鹿野中	女子B走高跳	1m66	1位	
		駒場萌美	中ノ郷中	女子C走高跳	1m50	6位	
		山脇衣美香	淀江中	女子C100mH	15秒04	6位	
2004	16年	新　憲太郎	後藤ヶ丘中	男子D100m	11秒71	2位	神奈川
		三浦　隆 遠藤　俊 盾　康平 新　憲太郎	後藤ヶ丘中 日南中 箕蚊屋中 後藤ヶ丘中	BCD共通4×100mR	43秒48	6位	
		若松恭平	河北中	男子D110mH	16秒08	8位	
		駒場萌美	中ノ郷中	女子B走高跳	1m69	1位	
		松本亜沙美	倉吉東高	女子A棒高跳	3m20	4位	
		磯江南那	東郷中	女子B100m	12秒64	4位	
2005	17年	井上晴之	桜ヶ丘中	男子B1500m	4分10秒27	5位	神奈川
		田川　諒	鳥大附属中	男子C砲丸投	13m97	8位	
		金田修平	中山中	男子ABジャベリック	59m21	8位	
2006	18年	長岡里香	鳥大附属中	女子B走高跳	1m55	4位	神奈川
		中村彩香	箕蚊屋中	女子C100mH	15秒30	4位	
2007	19年	田中　萌	桜ヶ丘中	女子ABジャベリック	45m77	5位	神奈川
		長岡里香	鳥大附属中	女子A走高跳	1m55	8位	
2008	20年	萩原くらら	河北中	女子B走高跳	1m64	1位	神奈川
		山田莉己	加茂中	女子A100m	12秒49	6位	
2009	21年	加藤研三	三朝中	男子C100mH	14秒28（+0.6）	4位	神奈川
		宮本健太郎	湖東中	男子C1500m	4分21秒83	7位	
		萩原くらら	河北中	女子A走高跳	1m67	3位	
		岡田　悠	鳥大附属中	女子AB円盤投	31m33	4位	
2010	22年	加藤研三	三朝中	男子B110mH	14秒83（-0.9）	1位	神奈川
		森山大成	大山中	男子B走幅跳	6m39（+0.3）	6位	
		藤崎佳穂	鳥大附属中	女子B100mH	14秒81（-0.3）	5位	
		山本亜利沙	東伯中	女子B1500m	4分34秒41	6位	
2011	23年	米井健人	智頭中	男子A100m	11秒25（-0.2）	6位	神奈川
		加藤研三	三朝中	男子A110mH	14秒93（-0.9）	7位	
		土岐恵里佳	湯山中	女子B砲丸投	13m34	4位	
2012	24年	北島 昌樹 小林 太一 米澤 尚宏 坂田 育斗	鳥取選抜	4×100mR	43秒57	8位	神奈川
2013	25年	北脇秀人	鳥取南中	C男子1500m	4分18秒24	6位	神奈川

2014	26年	北脇秀人	鳥取南中	B男子1500m	4分08秒08	7位	神奈川
		長谷川迅平	中ノ郷中	B男子110mH	15秒51（+0.3）	8位	
		岡崎　汀	三朝中	B女子走幅跳	5m45（+0.1）	4位	
2015	27年	北脇秀人	鳥取南中	A男子3000m	8分42秒40	3位	神奈川
		吉田明香里	河原中	C女子100m	12秒45（+0.1）	2位	
		岸本百桃	鳥取西中	C女子800m	2分17秒33	2位	
		岡崎　汀	三朝中	A女子100mYH	14秒30（-0.6）	3位	
		杉本鈴夏	赤崎中	C女子走幅跳	5m14（-1.4）	7位	
2016	28年	吉田明香里	河原中	B女子100m	12秒25（-2.1）	1位	神奈川
		角　良子	美保中	C女子100m	12秒73（-0.9）	2位	
		岡村玲奈	八頭中	共通ジャベリック	46m78	6位	
		角　良子 吉田明香里 上田理湖 尾崎　星	鳥取選抜	4×100mR	47秒70	6位	
2017	29年	山口大凱(2)	鳥大附属中	B男子100m	11秒12（-1.6）	1位	神奈川
		井上瑞葵(3)	倉吉西中	A男子100m	11秒24（-1.0）	6位	
		古田涼介(2)	鳥取西中	B男子100m	11秒40（-1.6）	6位	
		福本航太(3)	北溟中	A男子3000m	8分41秒48	8位	
		信夫大輝(2)	八頭中	B男子1500m	4分07秒68	8位	
		角　良子(2)	美保中	B女子100m	12秒19（-1.5）	1位	
		佐々木真歩(1) 尾崎　星(3) 角　良子(2) 吉田明香里(3)	鳥取選抜	ABC女子共通4×100mR	46秒90	1位	
		吉田明香里	河原中	A女子100m	12秒27（-1.5）	2位	
		尾崎　星(3)	鳥取西中	A女子100m	12秒43（-1.5）	5位	
2018	30年	山口大凱	鳥大附属中	男子A200m	22秒01（-0.9）	3位	神奈川
		湯川玲之	湖東中	男女ABC共通ジャベッリクスロー	63m08	6位	
		角　良子	美保中	女子A100m	11秒92（0.7）	1位	
		佐々木真歩	東山中	女子C100m	12秒39（-2.1）	3位	
		伊丹樹里 加河鈴菜 佐々木真歩 角　良子	河北中 後藤ヶ丘中 東山中 美保中	女子ABC共通4×100mR	47秒03	4位	
		加河鈴菜	後藤ヶ丘中	女子A100m	12秒23	5位	

全国小学生交流大会

年度		チーム・選手名	所属	種目	記録	成績	備考
西暦	平成						
1993	5年	入賞者なし					東京
1994	6年	入賞者なし					東京
1995	7年	揚本・湊 由木・中沢	境港ジュニア	4×100mR	53秒99	7位	東京
1996	8年	辻　元気	岩美北クラブ	走幅跳	4m99	8位	東京
		渡辺絵里 魚谷智香 藤井世里花 青砥奈々美	境港ジュニア	4×100mR	54秒69	7位	
1997	9年	入賞者なし					東京
1998	10年	山根絵美	TF鳥取	5年100m	14秒10	6位	東京
1999	11年	山根絵美	TF鳥取	6年100m	13秒45	4位	東京
		田中里奈	境港ジュニア	5年100m	14秒14	5位	
2000	12年	牧田和憲 加藤秀治 中田泰弘 山本宏樹	TF倉吉	4×100mR	51秒16	7位	東京

2000	12年	大坂ひかる 遠藤智子 中澤輝映 田中里奈	境港ジュニア	4×100mR	54秒83	4位	東京
		戸田千晴	加茂クラブ	走幅跳	4m46	6位	
2001	13年	関口敦代	加茂クラブ	走高跳	1m30	6位	東京
2002	14年	小林弘之	岩美南クラブ	走幅跳	5m00（-0.3）	2位	東京
		美谷優介	伯仙クラブ	5年100m	13秒71	4位	
		永井尊子	福生西小	5年100m	14秒47	6位	
2003	15年	新　憲太郎	住吉クラブ	6年100m	12秒47	1位	東京
		梅月亮兵	境港JS	5年100m	13秒56	2位	
		畑　沙也香	TF米子	5年100m	14秒08	6位	
2004	16年	梅月亮兵	境港JS	6年100m	12秒84	5位	東京
		池田泰明	河北クラブ	走高跳	1m40	6位	
		畑　沙也香	米子陸上クラブ	6年100m	13秒64	2位	
2005	17年	福田晃大	明倫クラブ	80mH	12秒42	2位	東京
		須山司朗	五千石クラブ	走高跳	1m40	5位	
2006	18年	萩原くらら	河北SS	走高跳	1m30	2位	東京
		盛田彩野	醇風クラブ	5年100m	13秒91	3位	
2007	19年	盛田彩野	醇風クラブ	6年100m	13秒35	4位	大阪
		坂本佳世 樋野蒼衣 岩本真侑 新田朋生	TF米子	4×100mR	53秒44	4位	
2008	20年	森山大成	大山陸上	走高跳	1m40	8位	東京
2009	21年	山本由菜	TF米子	走幅跳	5m10	2位	東京
		大森真歩子 遠崎沙英 梶谷茉由 宮平真衣	米子陸上クラブ	4×100mR	52秒73	3位	
		橋谷　結	浦安クラブ	走高跳	1m35	7位	
		土岐恵里佳	TF米子	ソフトボール投	58m05	8位	
2010	22年	勝部浩平	名和クラブ	ソフトボール投	74m35	6位	東京
2011	23年	石賀早紀	八橋クラブ	走高跳	1m35	5位	神奈川
2012	24年	入賞者なし					神奈川
2013	25年	角　啓汰	境港ジュニア	走高跳	1m40	8位	神奈川
2014	26年	奥田　大	上小鴨クラブ(6)	走高跳	1m45	2位	神奈川
		住友悠馬	関金小(6)	80mH	12秒89（-0.5）	5位	
		山口大凱	布勢TC(5)	5年100m	13秒44（-0.5）	6位	
		岸本百桃 吉田明香里 清水美京 尾崎　星	布勢TC	4×100mR	52秒10	1位	
2015	27年	小林朝日 山口大凱 山田遼太郎 岡崎凌大	布勢TC	4×100mR	50秒48	2位	神奈川
		清水美京	布勢TC	80mH	12秒25（+1.1）	1位	
		松崎瑠奈 田村倫子 細田葵生 角　良子	TF米子	4×100mR	53秒42	8位	
2016	28年	竹内元春	布勢TC	80mH	12秒73（+0.1）	8位	神奈川
2017	29年	岩井光大(6)	世紀小	6年100m	12秒63（+1.7）	6位	神奈川
		阪本晴也(6)	TF倉吉	走幅跳	4m99（+0.4）	8位	
		深田彩名(6)	布勢TC	80mH	12秒88（-1.0）	4位	
		井東　結(6)	SMTC jr	走高跳	1m30	5位	

一般財団法人鳥取県水泳連盟

平成29年度一般財団法人鳥取県水泳連盟表彰式 （倉吉体育文化会館にて）2018.3.21

1　組織の充実と強化による連盟の発展

一般財団法人として今日に至るまで、鳥取県水泳連盟はその時々の会長や理事長、専務理事のリーダーシップに牽引され、また、各専門部委員長はそのリーダーシップに触発され組織を進化させてきた。

「わかとり国体」までは、任意の競技団体として選手強化・競技運営を行ってきたが、「鳥取スイミングスクール」と「米子スイミングクール」を併せ持っており、スイミングの運営と財政的安定、組織としての体制づくりを目指し法人化へと進むことになる。

またちょうどそのころ中国５県では、島根県、山口県、広島県が連盟の法人化を行っており、そのような状況も影響を与え、設立準備委員会等を経て、昭和63（1988）年４月に財団法人鳥取県水泳連盟となった。

連盟は法人格を取得したが、そののちも当初のもくろみ通りとはいかなかった。鳥取県営屋内プール、米子市営東山水泳場ともにコースをその都度借りる状態で、施設・設備等の改修のたびにスクールの休校を余儀なくされたり、長期にわたる休館により会員数が激減し財政状況も悪化するなど、大変苦労した時期もあった。

しかし、苦境をしのぎ今日に至っているが、現在に至るにはさらにその後もいくつかの変遷があった。

一つは、民間団体（PAJA）の公営施設事業管理委託受諾（2007年）での連携である。以前から直営のスイミングスクールの運営については連盟挙げて取り組んでいたが、このことは初の試みであり、連盟の活動が広がっていく大きなきっかけとなった。

もう一つは、公営施設の指定管理者制度の施行である。平成15（2003）年に地方自治法の一部を改正する法律が施行され、民間企業、ＮＰＯなどの団体による管理が可能となったことである。

連盟は法人化により強化事業をはじめ運営全般に一層の支援が可能となり、大会成績の好結果を獲得することに今まで以上に組織を挙げて奮闘するが、その後、法人化の行政改革に伴い、連盟自体の内部改革・組織改革に迫られる。これは、財団法人化（昭和63（1988）年）以来の大改組となるものであり、将来に向けて大きくステップアップする基盤作りになった。米子市営プールの事業管理を受諾（平成24（2012）年）したのである。選手強化やプール管理の専門家集団といえども、全てに責任を持つという画期的な活動を始めるこ

とになった。

さらに、組織としてまとまっていくきっかけがあった。それは、財団法人鳥取県水泳連盟から一般財団法人になる（平成24（2012）年）ことであった。役員が一致団結して、その改編に努力し成就したことは、あらゆる面で本連盟の躍進に大いに役立つこととなった。

役員組織として、前半は山口享会長（平成９年～20年）の下で、竹内聰、高濱穆史理事長等の努力で成就し、後半は藤縄喜和会長（平成21年～26年）、川口武専務理事（平成21年～）を中心に画期的な改編が行われた。ただ全般に公営施設の老朽化が進み、連盟の活動に苦労をする期間でもあった。

東山水泳場は、平成27（2015）年11月には米子市から鳥取県に移管され「鳥取県営東山水泳場」となった。

そして、平成29（2017）年４月１日から「鳥取県水泳連盟・県体育協会共同企業体」として指定管理者を受け、鳥取県水泳連盟が主管となって管理運営にあたっている。

これらの変遷を経て、組織の構成員においても各役員の世代交代が進められ、強化方法、競技運営等に新鮮な取り組みが出てきた。また、以前から競泳・飛び込み・水球競技の本県指導者組織の特徴である連携の良さが、より充実した。中でも、競技を超えた選手間の新規の交流事業、他県のトップ指導者・選手交流事業が増加した。その結果、競泳については全県的にジュニア層の活躍が目立ち、全国大会での入賞者が出始めた。

２　全国大会の開催

県水連の組織としての大きな役割に競技会の運営がある。昭和59（1984）年に「わかとり国体」のリハーサル大会として「全国中学校水泳選手権大会」を開催し、昭和60年に国体を迎えた。以来、全国規模の大会は開催していなかったが、その後大きな大会を三つ開催することになる。

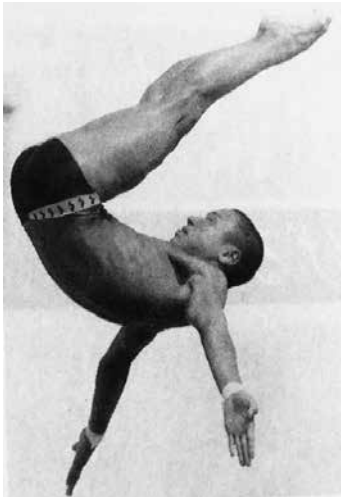
（１）鳥取インターハイの開催

平成７（1995）年８月17日から20日にかけて、選手規模2,000人の「第63回日本高校選手権水泳競技大会」が、米子市営東山水泳場（競泳・飛び込み）、米子工業高プール（水球）で開催された。国体に次ぐ「スポーツの祭典」の開催に向け、それぞれ２年前から本格的な準備が進められた。

事務局は東山水泳場におき、船本逸（福米中学校教員）が３競技の選手の受け入れ、会場の準備等に奔走した。

連盟は選手強化と競技運営に力を入れた。選手強化では、競泳、飛び込み、水球と３競技の指導者が合宿、強化試合、遠征など、少人数ながらその任に精力的に当たった。強化は、競泳は本田義孝（鳥取東高）・川口武（県水連理事）、飛び込みは安永三郎（米子高）、水球は宍戸靖雄（由良育英高）が、競技運営では本田義孝（鳥取東高）が、それぞれ中心となった。

大会は、真夏の太陽が照りつける中、４日間順調に行われた。競泳では残念ながら決勝進出を果たすことができなかった。全国の精鋭を相手にして戦った選手は次のような感想を述べている。200m自由形に出場した小村和敬（米子北高）は「練習に対する甘さがあった」、同じく200m自由形に出場した太田千玉（鳥取東高）は「精神的なものですね、みんな同じ条件だから…」、200mバタフライの仲山桃代（鳥取工高）は、「最後まで踏ん張れなかった」と悔しがった（日本海新聞より）。

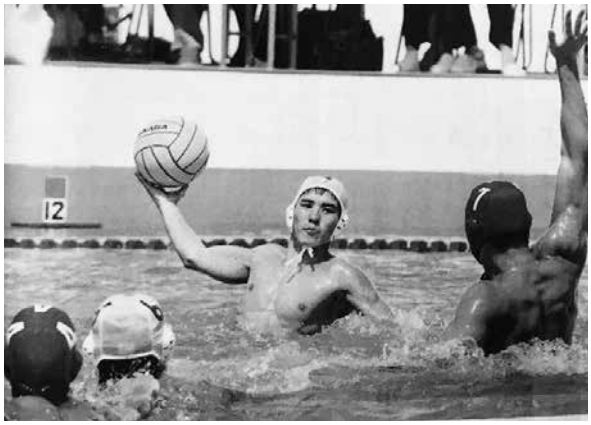


二種目制覇を目指す飛び込みの宮本幸太郎　（日本海新聞提供）

飛び込みでは、国際大会、国体、日本選手権で活躍してきた宮本基一郎の弟、宮本幸太郎の活躍が圧巻だった。宮本幸太

郎は、前年度「愛知インターハイ」で板飛び込み３位、高飛び込み優勝と好成績を収めていたが、この年は、板飛び込み、高飛び込みともに優勝し２冠を達成し、鳥取県民を沸かせた。以後も宮本兄弟の活躍は続き、鳥取県の飛び込みのレベルの高さを全国に示すこととなった。

水球は、米子工業高校のプールで開催され、一回戦は富山東高とあたり、由良育英高が10対３で快勝し２回戦へ進む。２回戦は明大中野高とあたり、９対７で勝ち準々決勝へ、準々決勝は鳥羽高に６対13で敗れ、惜しくも準決勝へ駒を進めることはできなかったが、みごとに８位入賞を果たし、県民の期待に応えた。



1995年　鳥取インターハイ水球1回戦由良育英―富山東
（日本海新聞提供）

（２）飛び込み競技・日本選手権の開催

平成11（1999）年８月７日、８日、米子市営東山水泳場で「第75回日本選手権飛び込み競技」が開催された。本来、水泳の日本選手権は、どの競技も東京、千葉など都会地を中心に行われてきた。しかしこの大会は、当時全盛を迎えた宮本基一郎、そしてそれに続き成長してきた弟の宮本幸太郎の二人の育ての親である安永三郎（米子高教員）の熱意で実現した。地方開催は稀で、記念すべき大会となった。

大会では、男子３ｍ板飛び込みの優勝は当時高飛び込みの実力者筆頭であった寺内健（JSS宝塚）であったが、宮本基一郎、幸太郎の兄弟が２位、５位に入賞し、地元の観客を沸かせた。また、男子高飛び込みでは弟の宮本幸太郎（日体大）が２位につけた。

公開競技のシンクロナイズドダイビングで息の合った演技を見せる宮本基一郎（手前）と幸太郎（日本海新聞より）

男子１ｍ板飛び込みでは、宮本基一郎が期待通りの演技をし、３年連続３度目の優勝を果たした。弟幸太郎も６位入賞した。女子では野中恵美（米子高教）が１ｍ板飛び込みで７位入賞を果たしている。

最終日には、翌年のシドニーオリンピックから正式種目となるシンクロナイズドダイビングが公開競技として行われ、宮本兄弟が息のあった演技で観衆を魅了した。

日本選手権において宮本基一郎は、平成15（2003）年、平成16年にわたり高飛び込みで２年連続の優勝を、１ｍ板飛び込みでは平成９（1997）年から平成15（2003）年まで７年連続で優勝を果たしている。弟幸太郎は、平成12（2000）年に３ｍ板で優勝し、宮本兄弟の名を全国に轟かせた。

（３）全国中学校水泳選手権大会の開催

平成７年のインターハイに次いで、平成13（2001）年８月21日から23日の３日間にわたり「第41回全国中学校選抜水泳競技大会」が東山水泳場

で開催された。

事務局は、１年前に会場内の一室を借りて開設され、青江邦弘（福米中）が中心となって担当し、県内中学校教員が協力して準備を進めた。中でも米子市中学校水泳部担当の教員は大会に向け、日々事務局に詰め準備に当たった。

全国中学校大会は、競泳競技と飛び込み競技だけで、水球競技は開催されない。しかし、競技役員は国体、インターハイと同じように配置が必要で、引き続き役員の協力は得られるものの数は不足し、役員の養成が急務であった。各係員を県内中学校教員に依頼するとともに、競技役員の養成も行い大会に備えた。競技運営初日は緊張気味で、若干ぎこちなさが見られたが、２日目には整然と大会運営に当たったことを記憶している。

また、大会の前日より台風11号が接近しており、大会日程の見直し等、徹夜で日水連の役員と打ち合わせが続いた。台風の影響で、西日本を中心に交通機関に乱れが生じ、空の便、鉄道の運休も相次ぎ、大会が予定通り開催できるか大いに心配したが、棄権する学校もなく大会は無事開催された。

選手の活躍では、智頭中学校の女子400mメドレーリレー（米井理絵、山中彩華、国岡千春、林美菜）の８位入賞が光った。

３　近年の選手の活躍

近年では、水泳連盟の組織としての活動が機能し始め、組織運営も充実し始めた。特に、選手育成での成果が結実しつつあり、ブロック大会はもとより全国大会、国際大会、あるいは合宿等で海外派遣される選手も出てきた。これは、学校関係、民間スイミングのまとめ役として県水連が牽引してきた成果と言っても過言ではない。また、それぞれの関係者の協力と切磋琢磨の結果でもある。以下、近年の選手の活躍について記しておきたい。

（１）競　泳

平成24（2012）年岐阜国体では、武良竜也（少年男子B100m平泳ぎ優勝）、石田華子（少年女子B100m平泳ぎ５位）と久々の複数入賞が実現した。つづく東京国体で、武良（少年男子A200m平泳ぎ７位）、落部緋菜子（少年女子B100m平泳ぎ８位）が入賞、長崎国体に至っては稲垣大智（少年男子B100m平泳ぎ優勝）、武良（少年男子A200m平泳ぎ３位）、落部（少年女子B100m平泳ぎ５位）、石田（少年女子A200m平泳ぎ６位）が入賞し、競泳においても常時競技得点が取れるようになってきた。

翌、平成27（2015）年和歌山大会では、横山雅（少年女子B50m自由形８位）、さらに平成28（2016）年岩手大会では、本田海雅（少年男子B50m自由形３位）、本田航平（少年男子B100m平泳ぎ５位）、落部（少年女子A200m平泳ぎ８位）、石田（成年女子100m平泳ぎ５位）が入賞し、競泳だけで15点を取っている。

国際大会においても選手の活躍は増えている。

2014年、当時、高校３年生だった武良竜也は「第６回ジュニアパンパシフィック選手権競泳競技」に日本代表として出場し、100m平泳ぎで銀メダル、200m平泳ぎで優勝し金メダルを得た。さらに、平成29（2017）年には日本選手権で入賞し、2017年に「ユニバーシアード台北」に日本代表として派遣された。また、同じく日体大に進んだ石田華子は、平成28（2016）年に「世界短水路選手権」に派遣され活躍している。また、石田は平成30（2018）年度現在、日本選手権の平泳ぎ決勝進出者として常に上位に名を連ねるほどの力を着けてきている。

ジュニア層も育ってきており、ジュニアオリンピック等全国大会に出場し、入賞する選手も近年

2014/8/27～31　ジュニアパンパシで入賞した
武良竜也（左から3人目）

続いている。切磋琢磨する指導者の増加によるものである。

（2）飛　込

1990年代、日本のトップに君臨して来た宮本兄弟が築き上げた「飛び込み鳥取」の伝統の火を消失させることなく、平成12（2000）年以降の選手たちにも見事に襷を繋ぐことになる。平成19（2007）年、秋田国体少年男子飛び板飛び込みに出場した安永元樹（米子高校）が５位に入賞したことを皮切りに、平成22（2010）年千葉国体で、高校から競技を始めた前谷健佑（米子南高）が準優勝に輝き、平成24（2012）年岐阜国体では宇田恵理子（米子西高）が高飛び込みで県勢女子初の優勝に輝いた。これは、平成７（1995）年の福島国体での宮本幸太郎選手以来の快挙である。宇田は翌年の東京国体でも優勝して２連覇を達成し、「飛び込み鳥取」の伝統を見事復活させた。その後も清水咲（米子東高）や近藤優妃（米子南高）、柏原沙羅（加茂中）が国体で入賞するなど、襷を途絶えさせない活躍が続く。さらに、その襷は三上紗也可（米子南高）と安田舞（弓ヶ浜中）に引き継がれ、舞台を世界へと移していった。

2012年　岐阜国体高飛込で優勝した宇田恵理子
（長良川スイミングプラザにて）

三上紗也可は、平成26（2014）年に世界ジュニア選手権14－15歳女子３ｍ飛び板飛び込みで８位入賞を皮切りに、その後の国際大会で多くのメダルを獲得し、日本を代表する選手に育っている。

平成28年度日本選手権において３ｍシンクロ競技で、東京の金戸とペアを組んだ安田舞が、中学生で日本チャンピオンになるとともに、その年のアジア選手権の日本代表にも選出され、同種目で銀メダルを獲得するなど活躍をしている。

平成29年の国際大会派遣選考会で三上が３ｍシンクロ、３ｍ飛び板飛び込みの２種目で優勝し、高飛び込みでも２位になり、本県４人目となる第18回アジア競技大会日本代表に選出される。また、安田舞も同大会での３ｍシンクロ競技の結果を評価され、世界ジュニア選手権日本代表に選出された。さらに全国ジュニアオリンピックで優勝するジュニア選手も控えており、伝統は確実に引き継がれ、日本屈指のチームとして活躍し続けている。

2015インターナショナルダイビングミート（ドイツ）
3m板飛込・高飛込で優勝した三上紗也可（中央）

（3）水　球

鳥取中央育英高校の活躍が続いており、平成17（2005）年の岡山国体で準優勝した。平成22（2010）年千葉国体３位、平成23（2011）年の山口国体準優勝と新旧指導者の連携で、天皇杯得点獲得の稼ぎ頭の伝統を守ってきた。さらに、平成25（2013）年に４位、平成26（2014）年に６位と入賞しているが、ここ最近は、選手層の薄さから国体出場から遠ざかっている。

平成21（2009）年の第64回国体中国ブロック大会で、同校水球部の選手数名が全国的に猛威を振るっていた新型インフルエンザに罹患していることが判明し､やむを得ず出場辞退することとなり、選手は残念な気持ちであったろう。

今後は、ジュニアの育成に尽力する必要があるため、平成23年から、鳥取産業体育館の県営プールの事業として、小学生を対象とした水球教室が開かれており、平成26（2014）年の第36回全国ＪＯＣジュニアオリンピックカップ春季大会（千葉県国際総合水泳場）に、この教室の受講生から鳥取県選抜チームを編成し、出場している。

平成26年の大会は､夏季大会（大阪 門真スポーツセンタープール）も開催され、鳥取チームも出場している。さらに、平成28（2016）年の第38回春季大会、平成30（2018）年の第41回夏季大会にも出場したが、いずれの大会も残念ながら予選で敗れている。

４　強化選手認定式の開催

近年､４月に「連盟の定めたその年の強化選手」の認定式を行っている。元々は、中国５県対抗の選手の結団式が発端だと記憶しているが、これが発展し今日に至っている。現在では「強化選手認定式」と「研修会」の組み合わせで行っており、選手・コーチ・関係者の意識高揚を図る最適の場となっている。選手育成には、本人の前向きな努力、そしてそれを支える指導者や周辺の人々の絶大なる支援が必要である。競技力の向上には選手のモチベーションをどう維持させるかにかかっているが、現代では科学的見地に立った指導力の向上も合わせ、両輪として回らなければならない。その両輪をうまく回転させるためには、それぞれの意識高揚を図ることが最も大切であり、そのすべてを包括した狙いがこの認定式にはある。

「認定式」と「研修会」を合わせた形式で行うようになって６回を数える。この研修会には、海外遠征、国際大会などを経験してきたコーチ等を講師として招聘している。第１回は県水連の山本和幹・恩田修コーチ、第２回は、シドニーオリンピック日本代表の萩原智子氏、第３回はスペイン合宿に参加した別府淳コーチ、第４回は岡山県水連の森重樹氏、第５回は自身オリンピック候補になり、アジア大会３位入賞するなど飛び込み指導経験豊かな安田千万樹コーチ、そして、第６回は、今現在オリンピック選手を輩出し日本水泳界を担っている日体大職員藤森善弘コーチなどである。

選手の意識を高めるための「強化選手の指定と認定式」、同時に行われる「研修会」が、いかに関係者の「やる気」を醸成することに役立っているかここに記しておきたい。

５　表彰式の開催

水泳連盟の表彰規定では､「本県の水泳発展のために功績のあったものに対し表彰を行う」としている。これまでも功労者や選手の励みになるよう独自に表彰を行ってきたが、平成２（1990）年に「（財）鳥取県水泳連盟表彰規定」を整備し、毎年３月に表彰式を行ってきている。その年の功績著しい選手、コーチ、役員、その他該当する者が表彰されるが、数多くの関係者が集まり盛大に行われる。この表彰式で一年のくくりとするが、連盟として、選手をはじめ組織、競技運営など幅広くかかわりのある方々に敬意を表するとともに、さらなる活躍、貢献を期待し新年度への起点としている。

【歴代の会長、理事長】

◇会長

昭和61年～平成８年	谷口	充
９年～　20年	山口	享
21年～　26年	藤縄	喜和
26年～	川口	武

◇理事長

昭和50年～平成８年	垣田	覚
９年～　14年	森本	重美
15年～　16年	竹内	聰

17年～　20年　高濱　穆史　◇専務理事

平成21年～　川口　武

鳥取県水泳連盟組織行事（平成５年以降）

西暦	平成	組織関係	県内ブロック 全国大会開催
1993	5		
1994	6		41中国中学校
1995	7		63全国高校（東山プール）
1996 アトランタ	8	鳥取県水泳連盟創立50周年記念式典（白兎会館 12/15）	中国５県対抗
1997	9		
1998	10	財団法人鳥取県水泳連盟発足10周年記念式典(12/6白兎会館)	46中国高校
1999	11		75日本選手権（飛込） 33中国中学校
2000 シドニー	12		
2001	13		53中国５県対抗 全国高専（東山プール） 41全国中学校
2002	14	（財）日本水泳連盟公認２種競泳競技役員養成講習会	50中国高校
2003	15		
2004 アテネ	16		38中国中学校
2005	17	ＰＡＪＡと提携	
2006	18	行政改革指定管理者制度の移行	58中国5県対抗
2007	19		
2008 北京	20		56中国高校
2009	21		43中国中学校
2010	22		
2011	23	外　業務委託	63中国５県対抗
2012 ロンドン	24	財団法人から一般財団法人へ 米子市営プール指定管理受諾	
2013	25	米子東山水泳場スタート台設置・自動計時装置更新	61中国高校
2014	26		48中国中学校
2015	27	11月１日より「米子市営」から「鳥取県営」になるオープニングセレモニー	
2016 リオ	28		68中国５県対抗
2017	29	（一財）鳥取県水泳連盟・県体協共同企業体として「県営東山水泳場の指定管理」を受ける 期間：平成29年度４月１日から平成33年３月31日まで	53中国高専 中四国学生選手権
2018	30		66中国高校

国際大会

年度			選手・チーム名	所属	大会名	種目	成績	開催地
西暦	平成							
1993	５年	飛込	宮本　基一郎	日本	東アジア大会	高飛込	６位	中国
1997	９年	飛込	宮本　基一郎	日本	東アジア大会	１m飛板飛込	３位	韓国
			宮本　基一郎	日本	東アジア大会	高飛込	４位	韓国
1998	10年	飛込	宮本　基一郎	日本	アジア大会	飛板飛込	７位	タイ
			宮本　基一郎	日本	アジア大会	高飛込	６位	タイ
2000	12年	飛込	宮本　基一郎	日本	アジア水泳選手権	１m飛板飛込	７位	韓国
			宮本　基一郎	日本	アジア水泳選手権	３m飛板飛込	５位	韓国
			宮本　基一郎	日本	アジア水泳選手権	高飛込	５位	韓国
			宮本　幸太郎	日本	アジア水泳選手権	高飛込	８位	韓国
2001	13年	飛込	宮本　基一郎	日本	東アジア大会	１m飛板飛込	３位	日本
			宮本　基一郎	日本	東アジア大会	高飛込	３位	日本
			宮本　幸太郎	日本	東アジア大会	３m飛板飛込	６位	日本
2002	14年	飛込	宮本　基一郎	日本	アジア大会	３mシンクロ	４位	韓国
			宮本　基一郎	日本	アジア大会	高飛込シンクロ	４位	韓国
			宮本　幸太郎	日本	アジア大会	３mシンクロ	４位	韓国
			宮本　幸太郎	日本	アジア大会	高飛込シンクロ	４位	韓国
2014	26年	競泳	武良　竜也	日本	ジュニアパンパシフィック	100m平泳ぎ	２位	アメリカ
			武良　竜也	日本	ジュニアパンパシフィック	100m平泳ぎ	１位	アメリカ
		飛込	三上　紗也可	日本	世界ジュニア選手権	３m飛板飛込	８位	
2015	27年	飛込	三上　紗也可	日本	ユースダイビングミート	１m飛板飛込	８位	ドイツ
			三上　紗也可	日本	ユースダイビングミート	３m飛板飛込	１位	ドイツ
			三上　紗也可	日本	ユースダイビングミート	高飛込	１位	ドイツ
			前田　花奈	日本	ダイビングミート	１m飛板飛込	２位	カナダ
			前田　花奈	日本	ダイビングミート	３m飛板飛込	５位	カナダ
			前田　花奈	日本	ダイビングミート	高飛込	５位	カナダ
2016	28年	飛込	安田　　舞	日本	アジア選手権	３mシンクロ	２位	日本
			三上　紗也可	日本	国際ドイツ選手権	３m飛板飛込	４位	日本
			三上　紗也可	日本	国際ドイツ選手権	高飛込	１位	日本
2017	29年	飛込	三上　紗也可	日本	FINA　GRANDPRIX	３mシンクロ	２位	プエルトリコ
			三上　紗也可	日本	FINA　GRANDPRIX	３mシンクロ	１位	マレーシア
			三上　紗也可	日本	FINA　GRANDPRIX	３mシンクロ	３位	オーストラリア
			三上　紗也可	日本	FINA　ワールドシリーズ	３mシンクロ	５位	日本
			安田　　舞	日本	CAMO	14-15　３m飛板飛込	２位	カナダ
			安田　　舞	日本	CAMO	14-15　高飛込	２位	カナダ
			三上　紗也可	日本	CAMO	16-18　３m飛板飛込	１位	カナダ
			三上　紗也可	日本	CAMO	シニア　３m飛板飛込	２位	カナダ

国内大会

年度			選手・チーム名	所属	大会名	種目	成績	開催地
西暦	平成							
1993	5年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	6位	香川
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	6位	香川
			宮本　基一郎	日本体育大学	日本選手権	1m飛板飛込	2位	松任市
			宮本　基一郎	日本体育大学	日本選手権	高飛込	7位	松任市
			宮本　幸太郎	尚徳中	日本選手権	高飛込	8位	松任市
			宮本　幸太郎	尚徳中	全国中学総体	飛板飛込	2位	神戸
			宮本　幸太郎	尚徳中	全国中学総体	高飛込	2位	神戸
			宮本　幸太郎	尚徳中	JOCジュニアオリンピックカップ	飛板飛込	1位	辰巳
			宮本　幸太郎	尚徳中	JOCジュニアオリンピックカップ	高飛込	1位	辰巳
		水球	鳥取県	由良育英高	国体		6位	香川
1994	6年	競泳	森田　直樹	鳥取県	国体	少男A　200m平泳ぎ	5位	愛知
		飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	2位	愛知
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	4位	愛知
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　飛板飛込	1位	愛知
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　高飛込	1位	愛知
			宮本　基一郎	日本体育大学	日本選手権	1m飛板飛込	6位	郡山
			宮本　基一郎	日本体育大学	日本選手権	高飛込	3位	郡山
			宮本　幸太郎	米子西高	日本選手権	高飛込	8位	郡山
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	飛板飛込	3位	高岡市
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	高飛込	1位	高岡市
			奥田　和也	境一中	全国中学総体	飛板飛込	1位	高岡市
			奥田　和也	境一中	全国中学総体	高飛込	1位	高岡市
			宮本　幸太郎	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	飛板飛込	1位	辰巳
			宮本　幸太郎	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	高飛込	1位	辰巳
1995	7年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	4位	福島
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	1位	福島
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　飛板飛込	1位	福島
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　高飛込	1位	福島
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	飛板飛込	1位	米子
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	高飛込	1位	米子
			宮本　幸太郎	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	飛板飛込	2位	岡山
			宮本　幸太郎	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	高飛込	1位	岡山
			奥田　和也	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	高飛込	7位	岡山
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	高飛込	8位	岡山
		水球	鳥取県	由良育英高	国体		6位	福島
			由良育英高	由良育英高	全国高校総体		8位	米子
1996	8年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	3位	広島
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	3位	広島
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　飛板飛込	2位	広島
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	少年　高飛込	2位	広島

			宮本　幸太郎	米子西高	日本選手権	１m飛板飛込	８位	辰巳
			宮本　幸太郎	米子西高	日本選手権	高飛込	７位	辰巳
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	飛板飛込	２位	緑丘
			宮本　幸太郎	米子西高	全国高校総体	高飛込	２位	緑丘
			宮本　幸太郎	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	飛板飛込	２位	辰巳
			常松　友美	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	飛板飛込	５位	辰巳
		水球	鳥取県	由良育英高	国体		８位	広島
1997	９年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	３位	大阪
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	５位	大阪
			野中　恵美	鳥取県	国体	成年　高飛込	６位	大阪
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	１位	相模原
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	６位	相模原
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	２位	相模原
			野中　恵美	米子DC	日本選手権	高飛込	５位	相模原
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	-11　飛板飛込	１位	辰巳
			井田　桃子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１m飛板飛込	７位	辰巳
1998	10年	競泳	末次　　勝	鳥取県	国体	成年男子　50m平泳ぎ	３位	神奈川
		飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	６位	神奈川
			宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	４位	神奈川
			野中　恵美	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	７位	神奈川
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	１位	辰巳
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	２位	辰巳
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	１m飛板飛込	３位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	３m飛板飛込	５位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	高飛込	７位	辰巳
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　飛板飛込	１位	辰巳
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	２位	辰巳
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　飛板飛込	８位	辰巳
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	６位	辰巳
			井田　桃子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	６位	辰巳
		水球	由良育英高	由良育英高	全高		８位	高松
1999	11年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	４位	熊本
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	２位	熊本
			野中　恵美	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	４位	熊本
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	１位	米子
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	２位	米子
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	高飛込	２位	米子
			野中　恵美	米子DC	日本選手権	１m飛板飛込	７位	米子
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１m飛板飛込	１位	横浜
			木下　勇飛	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	４位	横浜
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１m飛板飛込	６位	横浜
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	５位	横浜

		水球	鳥取県	由良育英高	国体		８位	熊本
2000	12年	競泳	末次　　勝	鳥取県	国体	成年男子　50m平泳ぎ	８位	富山
		飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	２位	富山
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	富山
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	１位	辰巳
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	２位	辰巳
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	５位	辰巳
			宮本　基一郎	鳥取SC	日本選手権	シンクロ	１位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	１m飛板飛込	４位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	３m飛板飛込	１位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	高飛込	６位	辰巳
			宮本　幸太郎	日本体育大学	日本選手権	シンクロ	１位	辰巳
			野中　恵美	米子DC	日本選手権	１m飛板飛込	８位	辰巳
			竹内　良平	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　飛板飛込	５位	横浜
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　飛板飛込	６位	横浜
			向井　将基	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	７位	横浜
		水球	由良育英高	由良育英高	全高		４位	大垣市
2001	13年	競泳	松下　広樹	鳥取県	国体	成年　50m背泳ぎ	８位	宮城
			松下・末次・ 本田義・本田貴	鳥取県	国体	成年 200mメドレーリレー	８位	宮城
		飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	２位	宮城
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	宮城
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	１m飛板飛込	１位	辰巳
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板飛込	３位	辰巳
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	高飛込	２位	辰巳
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	シンクロ	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	７位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	５位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	シンクロ	２位	辰巳
		水球	鳥取県	由良育英高	国体		２位	宮城
			由良育英高	由良育英高	全国高校総体		２位	熊本
2002	14年	競泳	松下・末次・ 本田義・本田貴	鳥取県	国体	成年 200mメドレーリレー	８位	高知
		飛込	安田　千万樹	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	５位	高知
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	１m飛板飛込	１位	富士市
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板飛込	１位	富士市
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	高飛込	２位	富士市
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	３mシンクロ	１位	富士市
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	５位	富士市
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	６位	富士市
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３mシンクロ	１位	富士市
		水球	鳥取県	由良育英高	国体		１位	高知
			由良育英高	由良育英高	全国高校総体		３位	ひたちなか市

2003	15年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	静岡
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	２位	静岡
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	１m飛板飛込	１位	横浜
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板飛込	１位	横浜
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	10mシンクロ	１位	横浜
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	１m飛板飛込	４位	横浜
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	２位	横浜
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	10mシンクロ	１位	横浜
			安永　元樹	東山中	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	７位	辰巳
		水球	鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	全高		４位	長崎
2004	16年	競泳	野嶋　央絵	鳥取県	国体	少女A　100m背泳ぎ	６位	埼玉
		飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	埼玉
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	３位	埼玉
			宮本　基一郎	溝口中学校	日本選手権	１m飛板飛込	２位	辰巳
			宮本　基一郎	溝口中学校	日本選手権	高飛込	１位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	６位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	高飛込	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	シンクロ高飛込	１位	辰巳
		水球	鳥取県	由良育英高	国体			埼玉
			由良育英高	由良育英高	全国高校総体		３位	江津市
2005	17年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	岡山
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	７位	岡山
			宮本　基一郎	溝口中学校	日本選手権	１m飛板飛込	３位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取SC	日本選手権	３m飛板飛込	６位	辰巳
			安永　元樹	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	８位	辰巳
		水球	鳥取県	鳥取中央育英高	国体		２位	岡山
			鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	JOCジュニアオリンピックカップ		４位	千葉
2006	18年	飛込	宮本　基一郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	２位	兵庫
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	３位	兵庫
			宮本　幸太郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板飛込	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	米子養護学校	日本選手権	高飛込	１位	辰巳
2007	19年	飛込	宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　飛板飛込	４位	秋田
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	１位	秋田
			安永　元樹	鳥取県	国体	少年　飛板飛込	５位	秋田
			宮本　基一郎	米子養護学校	日本選手権	高飛込	３位	辰巳
			安永　元樹	米子高	全国高校総体	３m飛板飛込	４位	佐賀
		水球	鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	JOCジュニアオリンピックカップ		８位	千葉
2008	20年	競泳	武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　100m平泳ぎ	１位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　50m平泳ぎ	４位	辰巳
		飛込	宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	４位	大分
			宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	２位	大分
			宮本　幸太郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板飛込	４位	辰巳
			宮本　幸太郎	米子養護学校	日本選手権	高飛込	８位	辰巳

			宮本　幸太郎	米子養護学校	日本選手権	３m飛板シンクロ	３位	辰巳
			安永　元樹	米子高	日本選手権	３m飛板シンクロ	３位	辰巳
			安永　元樹	米子高	全国高校総体	３m飛板飛込	６位	川口市
2009	21年	飛込	安永　元樹	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	４位	新潟
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	１m飛板飛込	５位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	３m飛板飛込	７位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	高飛込	２位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	３m飛板シンクロ	２位	辰巳
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	３m飛板シンクロ	２位	辰巳
			安田　竜大	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	１位	横浜
			清水　日向	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	７位	横浜
		水球	鳥取中央育英高	インフルエンザの為出場せず				
2010	22年	飛込	宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	２位	千葉
			安永　元樹	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	６位	千葉
			前谷　健佑	鳥取県	国体	少年　高飛込	２位	千葉
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	３m飛板飛込	６位	辰巳
			宮本　幸太郎	鳥取県体育協会	日本選手権	高飛込	２位	辰巳
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	３m飛板飛込	５位	辰巳
			前谷　健佑	米子南高	全国高校総体	高飛込	４位	沖縄
			宇田　恵理子	弓ヶ丘中	全国中学総体	３m飛板飛込	７位	福山
			宇田　恵理子	弓ヶ丘中	全国中学総体	高飛込	２位	福山
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	５位	浜松
			清水　日向	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	２位	浜松
		水球	鳥取県	鳥取中央育英高	国体		３位	千葉
2011	23年	競泳	松浦　稔	鳥取県	国体	成年男子　100m自由形	８位	山口
		飛込	宮本　幸太郎	鳥取県	国体	成年　高飛込	５位	山口
			安永　元樹	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	３位	山口
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	３m飛板飛込	７位	相模原
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	高飛込	３位	相模原
			宇田　恵理子	弓ヶ丘中	全国中学総体	３m飛板飛込	６位	大阪
			宇田　恵理子	弓ヶ丘中	全国中学総体	高飛込	５位	大阪
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　３m飛板飛込	５位	大阪
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	４位	大阪
			清水　日向	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	１位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	２位	大阪
		水球	鳥取県	鳥取中央育英高	国体		２位	山口
			鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	全国高校総体		５位	秋田
2012	24年	競泳	武良　竜也	鳥取県	国体	少年B　100m平泳ぎ	１位	岐阜
			石田　華子	鳥取県	国体	少女B　100m平泳ぎ	５位	岐阜
		飛込	安永　元樹	鳥取県	国体	成年　３m飛板飛込	４位	岐阜
			安永　元樹	鳥取県	国体	成年　高飛込	６位	岐阜
			宇田　恵理子	鳥取県	国体	少年　３m飛板飛込	８位	岐阜
			宇田　恵理子	鳥取県	国体	少年　高飛込	１位	岐阜

			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	３m飛板飛込	６位	辰巳
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	高飛込	５位	辰巳
			安永　元樹	日本体育大学	日本選手権	３m飛板シンクロ	１位	辰巳
			宇田　恵理子	米子西高	全国高校総体	３m飛板飛込	８位	新潟
			宇田　恵理子	米子西高	全国高校総体	高飛込	６位	新潟
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　３m飛板飛込	７位	千葉
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　高飛込	５位	千葉
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　３mシンクロ	４位	千葉
			柏原　紗羅	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　３m飛板飛込	５位	千葉
			柏原　紗羅	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	７位	千葉
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１m飛板飛込	４位	千葉
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	２位	千葉
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　３mシンクロ	４位	千葉
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	３位	千葉
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	８位	千葉
2013	25年	競泳	武良　竜也	鳥取県	国体	少年A　200m平泳ぎ	７位	東京
			落部　緋菜子	鳥取県	国体	少女B　100m平泳ぎ	８位	東京
			武良　竜也	米子北	全国高校総体	200m平泳ぎ	６位	長崎
			稲垣　大智	岸本中	全国中学総体	100m平泳ぎ	７位	静岡
			稲垣　大智	岸本中	全国中学総体	200m平泳ぎ	２位	静岡
			久本　遼太	NSIリプル	JOCジュニアオリンピックカップ	-10　50m自由形	１位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　100m平泳ぎ	８位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　200m平泳ぎ	２位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　100m平泳ぎ	７位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　200m平泳ぎ	５位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　200m平泳ぎ	７位	辰巳
			石田　華子	倉吉S	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　100m平泳ぎ	６位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　50m平泳ぎ	２位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　100m平泳ぎ	４位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　200m平泳ぎ	２位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　50m平泳ぎ	４位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　100m平泳ぎ	３位	辰巳
			武良　竜也	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　200m平泳ぎ	６位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　200m平泳ぎ	８位	辰巳
			石田　華子	倉吉S	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　50m平泳ぎ	４位	辰巳
		飛込	前谷　健佑	鳥取県	国体	成年　高飛込	８位	東京
			宇田　恵理子	鳥取県	国体	少年　高飛込	１位	東京
			柏原　紗羅	鳥取県	国体	少年３m飛板飛込	８位	東京
			三上　紗也可	米子DC	日本選手権	３m飛板シンクロ	２位	辰巳
			清水　　咲	米子DC	日本選手権	３m飛板シンクロ	２位	辰巳
			宇田　恵理子	米子DC	日本選手権	高飛込	５位	辰巳
			宇田　恵理子	米子西高	全国高校総体	３m飛板飛込	３位	福岡
			宇田　恵理子	米子西高	全国高校総体	高飛込	２位	福岡

			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　1ｍ飛板飛込	1位	大阪
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　1ｍ飛板飛込	2位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　1ｍ飛板飛込	5位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	7位	大阪
			柏原　紗羅	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　3ｍ飛板飛込	6位	大阪
			宇田　恵理子	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　高飛込	3位	大阪
		水球	鳥取県	鳥取中央育英高	国体		4位	東京
			鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	全国高校総体		5位	福岡
2014	26年	競泳	武良　竜也	鳥取県	国体	少年B　100m平泳ぎ	1位	長崎
			武良　竜也	鳥取県	国体	少年A　200m平泳ぎ	3位	長崎
			落部　緋菜子	鳥取県	国体	少女B　100m平泳ぎ	5位	長崎
			石田　華子	鳥取県	国体	少女A　200m平泳ぎ	6位	長崎
			武良　竜也	米子北	全国高校総体	100m平泳ぎ	2位	千葉
			武良　竜也	米子北	全国高校総体	200m平泳ぎ	3位	千葉
			石田　華子	鳥取中央育英	全国高校総体	100m平泳ぎ	8位	千葉
			稲垣　大智	岸本中	全国中学総体	100m平泳ぎ	4位	高知
			稲垣　大智	岸本中	全国中学総体	200m平泳ぎ	3位	高知
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　100m平泳ぎ	2位	辰巳
			稲垣　大智	米子SS	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　200m平泳ぎ	3位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　100m平泳ぎ	5位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　200m平泳ぎ	6位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　200m平泳ぎ	8位	辰巳
			石田　華子	倉吉S	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　50m平泳ぎ	8位	辰巳
		飛込	前谷　健佑	鳥取県	国体	成年　高飛込	8位	長崎
			清水　　咲	鳥取県	国体	少年　3ｍ飛板飛込	4位	長崎
			近藤　優妃	鳥取県	国体	少年　高飛込	8位	長崎
			三上　紗也可	後藤ヶ丘中	日本選手権	3ｍ飛板飛込	7位	辰巳
			三上　紗也可	後藤ヶ丘中	日本選手権	高飛込	4位	辰巳
			三上　紗也可	後藤ヶ丘中	全国中学総体	3ｍ飛板飛込	3位	春野
			三上　紗也可	後藤ヶ丘中	全国中学総体	高飛込	2位	春野
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　1ｍ飛板飛込	2位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　1ｍ飛板飛込	1位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	2位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　3ｍ飛板飛込	3位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	5位	大阪
			清水　　咲	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　3ｍ飛板飛込	2位	大阪
			本田　沙羅	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　高飛込	6位	大阪
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　1ｍ飛板飛込	2位	辰巳
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　1ｍ飛板飛込	1位	辰巳
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　1ｍ飛板飛込	3位	辰巳
		水球	鳥取県	鳥取中央育英高	国体		6位	長崎
			鳥取中央育英高	鳥取中央育英高	全国高校総体		5位	辰巳
2015	27年	競泳	横山　　雅	鳥取県	国体	少女B　50m自由形	8位	和歌山

			本田　海雅	箕蚊屋中	全国中学総体	50m自由形	６位	秋田
			上杉　了以	JSS米子	JOCジュニアオリンピックカップ	-10　50mバタフライ	８位	辰巳
			久本　遼太	NSIリプル	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　50mバタフライ	４位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　100m平泳ぎ	７位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　200m平泳ぎ	７位	辰巳
			上杉　了以	JSS米子	JOCジュニアオリンピックカップ	-10　50mバタフライ	２位	辰巳
			本田　航平	鳥取PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　100m平泳ぎ	５位	辰巳
			本田　航平	鳥取PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　200m平泳ぎ	６位	辰巳
		飛込	近藤　優妃	鳥取県	国体	少年　高飛込	８位	和歌山
			清水　　咲	筑波大	日本選手権	１m飛板飛込	８位	辰巳
			近藤　優妃	米子南高	日本選手権	高飛込	８位	辰巳
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	２位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１m飛板飛込	１位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　１m飛板飛込	２位	大阪
			佐々木　音華	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	２位	大阪
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	６位	大阪
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　高飛込	２位	大阪
			近藤　優妃	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　３m飛板飛込	６位	大阪
			近藤　優妃	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　高飛込	４位	大阪
2016	28年	競泳	本田　海雅	鳥取県	国体	少年B　50m自由形	３位	岩手
			本田　航平	鳥取県	国体	少年B　100m平泳ぎ	５位	岩手
			落部　緋菜子	鳥取県	国体	少女A　200m平泳ぎ	８位	岩手
			石田　華子	鳥取県	国体	成年　100m平泳ぎ	５位	岩手
			本田　航平	鳥大附属中	全国中学総体	100m平泳ぎ	３位	新潟
			本田　航平	鳥大附属中	全国中学総体	200m平泳ぎ	３位	新潟
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　200m平泳ぎ	８位	辰巳
			横山　　雅	鳥取PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　50m自由形	６位	辰巳
			落部　緋菜子	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	CS　100m平泳ぎ	８位	辰巳
		飛込	三上　紗也可	鳥取県	国体	少年　３m飛板飛込	６位	岩手
			三上　紗也可	鳥取県	国体	少年　高飛込	２位	岩手
			近藤　優妃	鳥取県	国体	成年　高飛込	６位	岩手
			安田　　舞	米子DC	日本選手権	１m飛板飛込	７位	辰巳
			安田　　舞	米子DC	日本選手権	３m飛板飛込	８位	辰巳
			安田　　舞	米子DC	日本選手権	３mシンクロ	１位	辰巳
			三上　紗也可	米子DC	日本選手権	３m飛板飛込	４位	辰巳
			三上　紗也可	米子DC	日本選手権	高飛込	３位	辰巳
			三上　紗也可	米子南高	全国高校総体	３m飛板飛込	１位	福山
			三上　紗也可	米子南高	全国高校総体	高飛込	２位	福山
			前田　花奈	福生中	全国中学総体	３m飛板飛込	２位	新潟
			前田　花奈	福生中	全国中学総体	高飛込	４位	新潟
			安田　　舞	弓ヶ丘中	全国中学総体	３m飛板飛込	３位	新潟
			佐々木　音華	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	２位	大阪
			中尾　亮太朗	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１m飛板飛込	８位	大阪

			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１ｍ飛板飛込	２位	大阪
			前田　花奈	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	２位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　３ｍ飛板飛込	１位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	４位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　３m飛板シンクロ	１位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　３ｍ飛板飛込	２位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　高飛込	２位	大阪
			佐々木　音華	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１ｍ飛板飛込	１位	辰巳
2017	29年	競泳	本田　航平	鳥取県	国体	少年B　100m平泳ぎ	４位	愛媛
			本田　航平	鳥取県	国体	少年B　200m個人メドレー	５位	愛媛
			平林　優花	鳥取県	国体	少女B　100m平泳ぎ	８位	愛媛
			石田　華子	鳥取県	国体	成年　100m平泳ぎ	３位	愛媛
			森　　慈	福米中	全国中学総体	200m平個人メドレー	５位	鹿児島
			上杉　了以	JSS米子	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　50mバタ	６位	辰巳
			上杉　了以	JSS米子	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　100mバタフライ	２位	辰巳
			上杉　了以	JSS米子	JOCジュニアオリンピックカップ	11-12　100mバタフライ	３位	辰巳
			柳　　遥貴	PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　200m背泳ぎ	７位	辰巳
			宮城　歩優	鳥取PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	13-14　100m背泳ぎ	８位	辰巳
			本田　航平	鳥取PAJA	JOCジュニアオリンピックカップ	15-16　100m平泳ぎ	５位	辰巳
		飛込	三上　紗也可	鳥取県	国体	少年　３ｍ飛板飛込	２位	愛媛
			安田　　舞	鳥取県	国体	少年　高飛込	６位	愛媛
			清水　　咲	鳥取県	国体	成年　３ｍ飛板飛込	６位	愛媛
			近藤　優妃	鳥取県	国体	成年　高飛込	５位	愛媛
			安田　　舞	米子DC	日本選手権	高飛込	７位	辰巳
			安田　　舞	米子DC	日本選手権	３ｍシンクロ	２位	辰巳
			三上　紗也可	米子DC	日本選手権	３ｍ飛板飛込	５位	辰巳
			三上　紗也可	米子DC	日本選手権	３ｍシンクロ	１位	辰巳
			中尾　亮太朗	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１ｍ飛板飛込	４位	大阪
			岡本　さくら	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	9-11　１ｍ飛板飛込	４位	大阪
			佐々木　音華	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　１ｍ飛板飛込	１位	大阪
			佐々木　音華	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	12-13　高飛込	２位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　３ｍ飛板飛込	１位	大阪
			安田　　舞	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	14-15　高飛込	１位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	16-18　３ｍ飛板飛込	７位	大阪
			三上　紗也可	米子DC	JOCジュニアオリンピックカップ	３ｍシンクロ	１位	大阪

一般財団法人鳥取県サッカー協会

県内初開催となった日本代表の国際親善試合。
なでしこジャパンvsノルウェー女子代表
鳥取市営サッカー場バードスタジアム（2018年11月11日）

昭和29年に県蹴球協会（初代会長・石谷貞彦）として設立された協会は、平成16（2004）年、(財)日本サッカー協会の活動方針の下、財団法人化され「鳥取県サッカー界を統括し代表する団体として、サッカー競技の普及及び振興を図り、もって県民の心身の健康な発達に寄与する」ことを目的とし活動を続けてきた。

法人化の前に、協会にとって重要な大会があった。平成７（1995）年に鳥取県で開催された全国高校総合体育大会のサッカー競技が、東部地区で開催されたことである。決勝戦の会場として建設された鳥取市営サッカー場バードスタジアムが、以降県協会の拠点となり、国際大会（平成28年）やＪリーグ戦（平成５年日本プロリーグのスタート）、全国大会等の開催が可能になった。この大会の強化指定校として、２校（米子東高・米子工高）が指定され、強化に取り組まれたが、両校とも初戦で敗退したことは残念な結果であった。

また、平成14（2002）年に日韓合同開催となったワールドカップに出場する南米エクアドルチームがキャンプ地としてこのバードスタジアムを利用し、東部地域と県のサッカーの普及に影響を与えた。この当時の会長は浜崎芳宏、理事長は廣江正であった。

平成16年に財団法人としてスタートした県協会は、理事21名（廣江正、佐々木守、池田洋二、小林幸平、黒見博、村上伸也、妹沢光将、内田淳、邨上克也、音田宝三、小林慎太郎、尾崎貴宏、本田忠勝、山本康彦、高田貴志、高田尚文、宮崎耕二、斉藤昌一、亘寛之、金本勝彦、吉岡正博）、評議員21名（徳高雄一郎、柏木大作、小岡亮司、堀場善智、小原毅、中谷佳広、林智也、松長俊和、伊藤克実、亀井修平、吉田達也、森下幸道、野口功、山﨑邦夫、小椋研、近藤泰知、矢木茂生、石河慎太郎、山野拓哉、山田雅一、福田守普）で、これらの役員で運営活動を行った。平成18年バードスタジアムの指定管理者に県サッカー協会が指定され、その後、鳥取市若葉台スポーツセンター（平成25年）の指定管理者となり、サッカー協会の規模が拡大した。

法人法の改正により、一般財団法人（平成25年）となった県サッカー協会は、会長１名、専務理事１名、理事９名、監事２名、評議員８名の役員で、今まで以上にサッカーの普及発展、地域貢献にスピード感を持って取り組めるようになった。

現在（平成30年）は、会長（池田洋二）、専務理事（髙田貴志）、理事（金本勝彦、村上伸也、亘寛之、小林幸平、黒見博、岩尾仁司、小林慎太郎、邨上克也、斎藤昌一）、監事（日置栄治、澤田明範）、評議員（高垣知博、柏木大作、坪倉亘、下山勉、西坂泰仁、野口功、小岡亮司、小椋研）により、年数回の理事会、評議員会及び各種別委員会等の活動を行っている。

平成25年には、大山町に人工芝のグラウンド１面を含む「フットボールセンター」ができ、主に西部地区の活動拠点となっている。平成29年現在の全県の状況は、県協会が年間利用している天然芝グラウンドは13面、人工芝グラウンドは３面となり、クレーグラウンド以外に16面の芝グラウンドで試合やトレセン活動、講習会等を行っており、選手・指導者にとってこの上ない素晴らしい環境に恵まれた協会になった。県協会事務局（バードスタジアム内）も常勤４名、非常勤２名、嘱託職員５名の職員で協会の運営を行っている。

法人化以前から、県協会を県サッカーの中心組織として、東部･中部･西部の各地区に支部を置き、それぞれ支部ごとに各種別の担当者を設け、各種別の委員長の下３支部との協力体制を整え県の行事を運営することとし、情報共有とスムーズな運営や課題等への対処ができるようしている。

鳥取県フットボールセンター若葉台

平成29年度の選手等登録数は、8,931人（県人口比約1.5％）になっている。

【平成29年度県サッカー協会登録数】

種別	チーム数	人数
1種（成年）	40	1,022
2種（高校）	23	879
3種（中学）	51	1,389
4種（小学）	78	1,971
女子	10	213
シニア	7	247
フットサル	36	616
審判員	—	1,950
指導者	—	644

平成22（2010）年以降鳥取県は、人口比に対する選手等登録数が常に全国上位となっている。しかし、それはあくまで人口比という基準においてであり、人口減や少子高齢化が進み、選手として登録する人数は減っており、そこに危機感を持っている。今後サッカーを普及振興していく協会として、国際大会の開催、日本代表のゲームや全国大会の誘致等によってサッカー競技の楽しさを知っていただき、スポーツ文化の醸成のため、社会貢献や普及、競技力の向上の活動に日々努めている。

１　１種（成年）の競技

県社会人リーグが昭和52（1977）年にスタートしてから、数多くの歴史を重ね、特に、昭和61（1986）年山梨国体優勝前後は本田忠勝委員長の下、レベルの高い県リーグが展開されていた。昭和58年に「鳥取教員団サッカー部」として県リーグからスタートしたチームが、国体優勝後の平成13（2001）年に「SC鳥取」と改称し、日本フットボールリーグ（JFL）に参戦、塚野真樹球団社長の下、平成19（2007）年「ガイナーレ鳥取」に改称した。平成23（2011）年Ｊ２リーグ昇格（３年間）した。鳥取県で初めてのプロサッカーチームとなり、地域貢献をしながら現在Ｊ３で活躍をしている。県

リーグも１・２部制になり、また、市リーグ等の社会人によるリーグ戦も行われている。

≪平成４年以降の委員長≫

～平成21年　本田忠勝　　平成22年～　内田淳

２　２種（高校生年代）の競技

平成７（1995）年に全国高校総合体育大会（インターハイ）サッカー競技の部が鳥取市で開催されることになり、主会場としてサッカー専用球場鳥取市営サッカー場バードスタジアム（収容人数約17,000人）が整備された。これにより各種別の県大会決勝戦に使用される施設となり、県サッカーの発展を支えている場となった。

平成５年以降、県高校総体・県選手権大会の優勝チームはいずれも西部地区高校となっている。平成21（2009）年のインターハイ「近畿まほろば総体（奈良県）」に参戦した米子北高は、鳥取県として初の準優勝に輝いた。当時２年生だった昌子源選手は、2018年「ワールドカップロシア大会」に日本代表として出場した。昌子源選手（鹿島アントラーズ）は、２種年代と鳥取県で過ごした日本代表選手である。（平成30年現在）

現在、優勝常連校の米子北高はプレミアリーグ（全国リーグ【西地区】）に平成29年から参戦している。中国地域リーグであるプリンスリーグには、米子北高、ガイナーレ鳥取U-18、境高、米子東高、八頭高の５チームが参戦している。

県内チーム数は過去30チーム以上登録していたが、平成30年には男子22チーム・女子６チーム（平成16年から女子の部創設）と全国で２種年代の最少チーム数の県となっている。

≪委員長（高体連）≫

～平成９年　佐々木守　　平成10年　中居泰人　平成11年～平成13年　池田洋二　　平成14年～平成25年　矢野直人　平成26年～平成28年　城市徳之　　平成29年～　山本康彦

≪２種委員長（クラブチームも含む）≫

平成26年～平成28年　郡上克也　　平成29年～　永林昭

３　３種（中学生年代）の競技

平成11（1999）年に後藤ヶ丘中が全国大会に出場して以来、県内チームの全国大会出場は途切れていた。平成30（2018）年８月、全国中学校体育大会サッカー競技が鳥取県（鳥取市）で行われたため、19年ぶりに鳥取南中が全国大会に出場した。過去には、箕蚊屋中４回、後藤ヶ丘中８回、境港三中３回、加茂中１回、湊山中１回、鳥取西中１回が出場している。その中でも、箕蚊屋中、境港三中が全国ベスト８入りを果たしている。県中学総体は、現在、郡市代表チームがなくなり、東部、中部、西部予選の各地区上位16チームによるトーナメントで争われ、成績上位チームが中国大会に出場している。現在、クラブチームも11チームに増え、中体連と合わせて52チームの登録数になっている。U-15サッカーリーグ（県リーグ）が行われ、１部８チーム・２部６チーム・３部（東部13、中部７、西部15）セカンドチームも含めての県リーグが行われている状況である。

≪委員長≫

～平成25年　音田宝三　　平成26年～　近藤泰知

４　４種（小学生年代）の競技

この年代の唯一の全国的な取り組みである「全日本少年サッカー大会」の出場を目指して各チーム取り組んでいる。平成27（2015）年に熱中症を避けるために夏から冬に開催期日が変更になり、また、11人制から８人制に変化した。以前は選抜チームでの出場であったが、現在はより身近な環境でサッカーに取り組めるよう、各チームでの出場となるように変わっている。現在の登録チームは78チーム、選手数は1,971人（平成29年現在）であり、2,600人を超えていた年と比較すると登録者数が25％減少しており、問題になってきている。県協会としては、保育年代のサッカー教室やイベントを通してサッカーをしたいという子どもたちを増やしたいという願いのもとに、普及活動に力を入れている。

平成10（1998）年からU10大会（４年生）、平

成９年からU11大会（５年生）など各学年での大会を開催している。
（第８章第７節参照）

≪委員長≫

～平成６年　柴田律男　　平成７年～平成23年　拝藤均　　平成24年～　小林慎太郎

５　女子の競技

初代女子チーム（米子コスモス）は、昭和60（1985）年のわかとり国体開催の年に「米子仲良しサッカー教室」として、弓ヶ浜小学校を拠点として指導していた横田英一が監督を務めるチームとしてスタートした。当時、米子市の小学校に女子サッカーブームが起こり、日吉津小、渡小、弓ヶ浜小を卒業した選手が中心となって結成されていた。翌年の昭和61年には中国大会初出場で初優勝して全国大会に出場した。初戦は、清水第八スポーツクラブと対戦０－16で敗退、２年連続で出場した全国大会も、読売サッカークラブ女子・ペレーザに０－９で敗退した。このチームに中学１年生から参加していた大部由美（現なでしこジャパン日本代表コーチ）は、高校卒業とともに、千葉の日興証券ドリームレディースに所属し活躍しており、なでしこジャパンのキャプテン経験もして、オリンピック代表（アトランタ、アテネ）に選ばれたのである。

近年鳥取県女子の現状は、社会人チームの鳥取レディースを中心に、県リーグ１部制で行われていたが、なでしこジャパンのW杯優勝から女子の部の取り組みが本格的になり、社会人３チームと中学校１チーム、高校６チームを入れた10チームが１部、２部制に分かれての県リーグを行っている。

≪委員長≫

～平成28年　吉岡正博　　平成29年～　松長俊和

６　シニアの競技

シニアの大会は、JFAとして40歳以上（０－40）・50歳以上（０－50）の全国大会を開催している。平成12（2000）年、40歳以上の全国大会のプレ大会として仙台市で行われた大会に、中国大会で優勝し、本県０－40シニアが出場、全国３位となる成績を残した。その後、県内ではシニアの活動が盛んになり、全国大会を目指すチームや生涯スポーツとして楽しく健康的にエンジョイスポーツとして行うチームが、少しずつ増えてきている。特に、平成18（2006）年に鳥取市で開催された50歳以上の大会「全国スポーツレクリエーション大会」が契機となり、サッカーを続けるシニアが増えた。平成29（2017）年には、７チームになり、年間を通してそれぞれの年代の交流戦及びリーグ戦を行っている。現在、０－30、０－40、０－50、０－60のカテゴリーに分かれ活動している。

≪委員長≫

平成15年～平成27年　本田忠勝　　平成28年～　香川登

７　フットサル競技

平成17（2005）年に県フットボールリーグ（９チーム）、女子フットサルリーグ（４チーム）でスタート。リーグ設立がその後の競技力向上に大きな役割を果たした。平成18年、第１回中国フットサルリーグへ奥山蹴球雑技団が参戦。平成22（2010）年、ヴォンタージ降格以降、長らく地域リーグ不在が続いたが、平成28（2016）年、タルタルーガ（ファレイア鳥取）が２部へ参入優勝し、平成30（2018）年、中国１部昇格となった。全国大会には、平成29（2017）年全国選抜フットサル大会に初出場（ファレイア鳥取を中心としたチーム）。平成22年には、全日本女子フットサル全国大会にエスペレンディローザが初出場している。また近年、U-12年代のバーモントカップでは予選突破できない状況が続いている。U-15年代は、平成29年にFCアミーゴが地域大会の壁を突破し、県内初の全国大会出場を果たしている。

≪委員長≫

平成17年～　尾崎貴宏

８　技術面の向上と指導者の育成

昭和60年、わかとり国体成年監督の吉岡正博氏と少年男子監督の中本崇氏の２名が、B級ライセンスを取得し、県の中心となって指導に当たっていた。平成９（1997）年に初めて県内指導者ライセンス講習会が開催され、指導者育成のスタートがなされた。平成29年現在、県内ライセンス保持者が644人である。それぞれの大会に、監督及び指導者としてライセンスが必要になり、県サッカー協会として、C級ライセンスまでの講習会を開催し指導者の育成に努めている。各年代のトレセン活動により、将来の日本代表選手等の育成を目指し、男女を問わず、チーム指導者が育成強化を行っている。委員会の大きな目標として、中国ブロック大会を突破し、本国体に出場し上位進出を目指して取り組んでいる。各カテゴリーの人選や、指導実践による能力の向上、評価検討等県内レベルの向上に尽力している。

≪委員長≫

平成４年～平成８年　吉岡正博　　平成９年～平成21年　池田洋二　　平成22年～平成28年　山本康彦　　平成29年～　邨上克也

９　審判の育成強化

平成７（1995）年鳥取インターハイにより、県内審判員の育成が進められた。平成30年現在1,950人の県登録審判員がいるが、過去を含めて国内最高の１級審判ライセンスを取得したのは西村洋志、西村幹也、横山卓哉の３名しかいないのが現状である。今後、上級審判員の強化をより進めていくことが必要である。平成30（2018）年、鳥取県で開催された全国中学校サッカー大会に向け２級審判員の育成を行ったが、過去の審判育成のやり方（有能な人材を審判員会で推薦方法）では試合数が増えてきた現状に対応できなくなってきている。審判講習会の開催を含めた審判育成の課題が残されたままである。こうした現状から、県内リーグ戦等にユース審判員等の中・高校生年代の審判員を積極的に活用し、10年後を見据えた普及・育成を進めていくことが求められている。

とりぎんバードスタジアムでの審判講習会

≪委員長≫

～平成７年　西村洋志　　平成８年～平成25年　西原賢　　平成26年～　斎藤昌一

10　協会の努力目標

先人のサッカー協会関係者の尽力により、今の（一財）鳥取県サッカー協会がある。過去を振り返ると、県協会の創設はもちろんのこと、鳥取県で開催された昭和60年「わかとり国体」、平成７年に開催されたインターハイがあったからこそ、今日の県サッカー協会の姿がある。（公財）県体育協会が100周年を迎えるにあたり、平成５（1993）年から平成30年までの25年間の資料提供で作成している資料だが、作成を通して、県内外含めてサッカー競技を愛する人たちの熱い思いを知らされた。

振り返ってみると、成年のわかとり国体５位となって、その翌年の「山梨国体」では優勝した。この時活躍した多くのメンバーが指導者や関係者となって、現在多くの人材の育成に当たっている。

また、インターハイの決勝会場として「鳥取市営サッカー場バードスタジアム」が建設された後、そのスタジアムを本拠地としてプロのサッカーチーム「ガイナーレ鳥取」が誕生し、Ｊリーグのチームがある県になった。県内初のプロ選手・塚野真樹氏が社長となり運営を進めている。今では、民間の競技場として米子に「YAJINスタジアム」（西部地区の本拠地）もでき、全国最少人口県内に２つのサッカー専用競技場を持つ環境になった。

協会としては、今後サッカーファミリーを増やしていくことを目指して、積極的に普及活動を行っている。また、鳥取県からも日本代表の選手を輩出できるように、４種（小学生年代）から２種（高校生年代）まで同じ方向性を持った指導者により育成強化を進めていくことにしている。これからは、選手、指導者、審判員など鳥取県サッカーで育った人材が、一人でも多く全国及び世界に羽ばたいていくことが大きな目標となるはずである。今後も引き続き、施設の整備、高いレベルの大会誘致等いろいろな刺激をサッカーファミリーに提供できるように、努力していきたい。

【歴代会長、理事長、専務理事】

◇会長

平成３年４月～22年３月	浜崎　芳宏
22年４月～29年６月	廣江　　正
29年６月～	池田　洋二

◇理事長

平成２年４月～16年10月	廣江　　正

◇専務理事

平成16年10月～22年３月	廣江　　正
22年４月～29年６月	池田　洋二
29年６月～	髙田　貴志

鳥取県テニス協会

前刊が、ジュニア育成に関わる課題で終わっていたので、その点を糸口にして、当協会の今日に至るまでの流れを見ていくことにする。

１　ジュニア育成の成果

顧みれば、「わかとり国体」が開催された昭和60（1985）年頃の県下のテニス事情は、脆弱なものであった。「成年男子」の構成団体は、鳥取大学と鳥取三洋電機だけであり、女子にいたっては無きに等しい状態であった。「少年男女」に関しては、当時「テニス部」を擁する高校は11校あったが、この「部門」だけは自力で選手育成していかねばならなかった。

「テニス」はいわゆる都市型のスポーツとしてのイメージが強く、東京・千葉・神奈川・大阪・兵庫・福岡などの勢力が絶大であった。それまでの「国体」でも、地方開催県の「少年」が得点することはほとんど不可能であった。ところが努力実って、予想に反して得点でき、山梨県や沖縄県以降の開催県の視察団員から驚嘆の言葉を貰った。

これを機に、ジュニア育成の機運は一層強まり、民間テニスクラブ、都市協会主催のテニス教室などが増加して、次第に小中学生の底辺が充実してきたものの、県内に留まることなく県外の高校に進学する生徒が増えていった。名門柳川高校（福岡）に、永清秀樹（平成12年）・小山慶大・高木智央（平成14年）・岩見直哉（平成19年）・西本誠司（平成22年）・若林龍（平成24年）などが立て続けに進学し、高木克典（平成12年・大阪履正社高校）・祐輔（平成14年・佐賀龍谷高校）兄弟、女子では夙川高校（兵庫）に村田優美（平成15年）・坂本茉里奈（平成18年）を初めとして、大竹愛香（平成18年・岡山学芸館高校）・大麻智尋（平成18年・兵庫駿台甲英高校）は、協会にとっても残念なことである。

２　テニスコートの整備

平成７（1995）年の鳥取インターハイ開催にあたり、テニスコートが絶対数不足の状況であったため、コートの整備が喫緊の課題となっていた。そこで、昭和63（1988）年10月軟式庭球連盟（当時）会長と硬式テニス協会（当時）会長連名のもと、当時の西尾邑次知事宛に布勢運動公園のテニ

スコート設置について陳情をした。そして、その完成をみたのは平成７（1995）年４月、まさにインターハイ大会開始４ヶ月前であった。その直後、管理棟や観覧スタンド等の付帯施設・設備に関する陳情をし、平成９（1997）年に実現した。その後も、「中部地区コートの充実を」、「西部コートの増設を」、「布勢コートを屋根付きに･･･」など、多くの陳情や要望をし、中には県議会で「趣旨採択」に至ったものもあったが、結果として実現したものはなかった。

３　鳥取インドアオープンテニスの成果

ジュニア育成も一定の成果をみせてきて、県協会の体制も次第に充実して、設立35年を迎えようとする平成２（1990）年、「山陰インドアオープンテニス大会」が始まった。（２年後「三朝館杯鳥取オープンインドアテニス大会」と改称する）。

日本テニス協会公認大会として、その年最初のオープン大会であるということに加えて、コートサーフェス（表面）が木の床であるという特異性から、国内トップ選手の間で話題になり、当時の有力選手が多く出場して、県内若手選手も多大の刺激を受けた。以後平成24（2012）年の23回大会まで続くことになる。この大会のもたらした波及効果は計り知れないものがあった。（詳細は第６章２節「鳥取インドアオープンテニス大会」の項参照）。

４　ルール変更の変遷

「テニス」熱が上がり、競技人口が増えてくるのと並行するように、「現代テニス」は、「技」から「スピード」へと進化していった。すると、それに呼応するように「試合のスピード化」が図られるような動きが出てきた。その顕著なものに「タイブレーク制度」がある。わが国では、昭和49（1974）年に正式採用され、翌50年の「全日本選手権大会」で実施された。

また、「セルフジャッジ」の正式採用年は不明だが、ＳＣＵ（ソロ・チェア・アンパイア）方式が昭和60（1985）年に導入され、平成２（1990）年に制度ルール化されたので、その頃から自然発生的に広がったものであろう。

「ノーアドバンテージ制度」・「セミアド方式」に関して日本テニス協会では共にいつ正式に採用したかは不明としているが、各地の「国体」で、時間短縮等運営上のために便宜的に生じたものが、凡例化したものではないかとしているが、平成15（2003）年の静岡国体から正式に採用されている。

５　県下テニスの現状と問題点

「高齢者のスポーツ活動」（第８章第５節）の項でも記述されているが、少子化・高齢化の煽りを受けて、テニス人口の漸減は否めない事実である。他の競技でも同様の傾向にあるであろう。

平成28（2016）年現在の県登録会員は、東部177人・中部51人・西部174人の個人会員と、高校・企業などの団体会員510人の、合計912人である。実際の競技者はこれに数倍するであろうが、なかなか正会員に登録するまでには至らない。試合に出て勝ち負けを争うよりも、「仲間内と楽しくゲームをしているほうがいい」、というのが正直なところである。

ところが、ここにこの底辺拡大の障害となっている大きな問題点があった。それは「屋根付きコート」が皆無に等しいということである。米子市に民営の「屋根付き」が４、５面あるのみで、県庁所在地に「屋根付きコート」の無いのは、唯一鳥取県のみであるという事実である。県下の現状からして、コートの数はほとんど足りている。しかし、一雨降れば、試合のできるコートはゼロである。山陰で天候を気にしながら運営するのは大変な心労を重ねることになる。「主要コートにぜひ屋根を付けて欲しい」というのが、協会の長年の願いである。

どの競技団体にも共通する問題だと思うが、「ジュニアの養成」というのが目先の大きな課題である。中学校に部を創り、中体連（全中連）に

加盟し、活動するのが夢である。そのためには、指導者の育成という問題が必然的に伴ってくる。そうなれば、社会体育面での指導の充実を待たねばならないことは明白である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和63年～平成６年　　名越　典由

７年～　　28年　　藤井　省三

29年～　　岡田浩四郎

◇理事長

平成５年～　　９年　　岸田　　悟

10年～　　15年　　山根　　長

16年～　　23年　　稲田　　睦

24年～　　浅倉　俊一

鳥取県ボート協会

第70回和歌山国体で優勝した少年女子ダブルスカル（左が高島美晴、右が永井理湖）

１　漕艇連盟からボート協会へ

明治33年に県下で初めてボートレースが行われ、やがて明治から大正へと移り変わり、さらに昭和に入り太平洋戦争で活動は中断したものの、昭和22年に米子漕艇協会を母体とし、「鳥取県漕艇連盟」が発足した。そして翌年の昭和23年に県体育協会へ加盟した。以来、県の漕艇界をリードし数多くの選手を輩出してきた。平成10年には中央団体である「日本漕艇連盟」が「日本ボート協会」に改名されたことにより、県でも「鳥取県漕艇連盟」から「鳥取県ボート協会」へ改称した。加盟団体は、鳥取市の湖山池で活動する鳥取ボート協会、米子市の錦海で活動するＮＰＯ法人米子ボート協会、境港市の中浜港で活動する境港ボート協会の３協会であった。それぞれの協会では、大学生、社会人、高校生や小中学生を中心としたクラブチームが活動を行い、また、各水域の特性を生かした市民レガッタの開催など、さまざまなイベントが開催されている。

２　４回目の全国高等学校選手権

平成７（1995）年に全国高等学校総合体育大会（ボート競技）が米子市の錦海ボートコースを会場に開催された。昭和35年（錦海）、昭和52年（錦

平成7年全国高校総体（錦海ボートコース）

海)、昭和61年（錦海）に鳥取県で開催されて以降、実に４回目の開催であった。

鳥取県では大会開催３年前に実行委員会を立ち上げ、当時の漕艇連盟も艇庫の建設、競漕用ボートの手配、ボートコースの整備、大会運営などに全力で取り組んだ。艇庫は前々回（昭和52年）のインターハイ開催時に建設された艇庫であり、昭和60年のわかとり国体時に建てられたプレハブの艇庫もあったが、ダブルスカル種目も増え艇庫も老朽化し、競漕艇の収容能力も低かったため、新しく県立米子艇庫が平成６年に新設された。そして、錦海特有の強い西風による波を干渉するため、大会時には1000mのボートコースに沿って海上に消波用のパイプが並べられた。

大会運営・役員は、米子市実行委員会が中心となり、漕艇連盟関係者、地元の高校教職員、市内高校生の補助員が、暑い中互いに協力し合い責任をもって遂行した。

大会期間中、風が一時強い時間帯もあり一時中断したものの、大会役員の的確な判断と波対策の消波パイプにより無事全日程を終了することができた。

鳥取県からは、地元開催ということもあり男子舵手付きフォア、男子ダブルスカル、男子シングルスカル、女子舵手付きフォア、女子ダブルスカル、女子シングルスカル各種目２クルーずつ計12クルーがこの大会に挑んだが、女子ダブルスカル、女子シングルスカルの２クルーが準決勝まで進んだのみで、残りのクルーは準々決勝で敗退し、いずれも決勝に進出は果たせなかった。

男子ダブルスカルレース風景

３　艇庫、練習環境の整備

米子市錦海ボートコースの艇庫は、平成７年のインターハイ開催に併せ、平成７年３月に旧艇庫の西側に県立米子艇庫が建設され、わかとり国体で使用していた平屋のプレハブ艇庫２棟は撤去された。そして、それまで高校生が使用していた艇庫は米子市に移管され、現在は米子ボート協会が米子市民レガッタやボート教室などで使用するカーボンナックル艇などを保管している。

平成８年には境港市竜ケ山に市民艇庫が建設され、境港ボート協会が境港市民レガッタなどで使用するナックル艇などが保管され活用している。わかとり国体時に設置した米子市錦海ボートコースの桟橋老朽化が進み危険な状態となり、平成19（2007）年、米子市によって改修された。選手の体力増強を図るため、バーベルなどのトレーニングが可能なトレーニング場の整備を長年要望していたが、平成24（2012）年にその要望がかない、県立米子艇庫東側に隣接して鉄骨造のトレーニング場が整備された。

また、湖山池ボートコース東側の艇庫も、昭和63年に建設されたもので老朽化が進み、各種レース艇の格納が必要なことから、平成29年に東側艇庫を艇の収容場所、部室、トレーニング場、会議室等も兼ね備えた機能を持たせるような増改築を行っている。そして、新しい県立湖山艇庫が完成した折には、県、県体育協会などの来賓を招き盛大に竣工式が行われた。

これらの環境整備により、東部、西部ともに県立艇庫にトレーニング場が完成し、シーズンを通

平成24年４月完成の県立米子艇庫トレーニング場

してさらなる選手強化が望めることとなった。

４　選手強化

平成６年から、県体育協会のアドバイザー制度を活用し、柳学園高校の山崎元和教諭を招聘し県内高校生の強化に取り組んだ。平成７年に地元開催のインターハイでは、地の利がありながら入賞者「ゼロ」という結果を反省して、これまで行ってきた強化の見直しを行った。これまで各高校・所属単位で編成し国体に参加していたが、それでは全国大会で入賞どころか出場も危ぶまれたのでこれを改め、国体に関しては所属団体の枠を超えベストメンバーでクルー編成を行い、国体ブロック大会に対応することとし、さらには鳥取県全体のレベルアップを図るため、各高校ボート部より選考された選手を一同に集め度々合宿を行った。度重なる合宿により選手同士がお互いに刺激しあい、競争性が増しさらには相乗効果が生まれることに繋がっていくこととなったのである。

そして、その結果は平成８年以降には徐々に現れ、インターハイ、国体で入賞するクルーが増えていくことになった。しかし、選抜クルーを組むことについては様々な問題が発生してきた。東部の選手と西部の選手がクルーを組んだ場合距離にして約100kmもあり、別水域の選手では普段から練習ができないため土日の練習となるので、土日だけの練習でよいのか、合宿費用の問題や選手の引率などの課題が出てきたが、とにかく国体で勝つという全員の目的を達成するため激論を交わし、何とかそれらの課題を一つ一つクリアし選抜クルーを組むこととなった。

そして、鳥取県初の県選抜クルーとして、少年男子ダブルスカルを鳥取西工高の濱本（卒業後、滋賀県の実業団東レ滋賀でボートを続け、世界選手権等に出場した。国体でもふるさと選手で活躍した。）、米子工高の稲田の両選手でクルーを組むこととなった。その結果、見事本国体で３位入賞を果たし、各指導者の期待に応えてくれたのである。これにより、国体に向けてはさまざまな垣根を取り払い県全体で取り組み、鳥取県代表選手として国体に取り組んでいくこととなり、以降国体に出場するにあたってはすべて「鳥取県選抜」クルーとしたのである。

５　全国大会上位入賞の幕開け

平成７年の地元開催のインターハイでの屈辱から１年が過ぎた平成８年から、ボート協会に明るい日差しが見え始めてきた。徐々にではあるがインターハイでは入賞が続き、平成８年の広島国体では決勝に進出するクルーが現れ、春の高校選抜大会でも決勝に進出する高校が増えてきた。その後、紆余曲折あったが、平成17年の岡山県（百間川）で開催された第60回国体では、米子工業高校、境高校、鳥取東高校の選手で少年男子舵手付きクォドルプルの選抜クルーを組み、春先からほぼ毎週のように合宿を行い、わかとり以来４人漕ぎ種目で初の国体８位入賞となった。

平成19（2007）年度から国体における得点方式が変わり、各種目における８位入賞までが競技得点になることとなったので、より入賞可能な種目を優先して選抜クルーを編成し強化することとなった。また、成年選手はこれまで単独の大学からのクルー編成はできないこととなっていたが、平成19年度からは単独の大学でクルー編成が可能となった。また、ふるさと選手制度がこの年から始まり、成年選手層の薄い鳥取県では今後大いに活用していくこととしている。

６　国体入賞ラッシュ

わかとり国体以降低迷し、国体での入賞が少数という状況であったが、国体で過去にない最も競技得点を獲得した年がある。それは、平成26（2014）年の第69回長崎国体である。少年女子・少年男子シングルスカル、少年男子ダブルスカルの３種目で優勝し、少年女子ダブルスカル５位、成年女子ダブルスカル７位、成年女子シングル２位、成年男子フォア４位と少年、成年ともに大健闘し、競技得点は県ボート協会史上過去最高の90点を獲得した。

第69回長崎国体表彰式（平成26年）

続いて、平成27年の第70回和歌山国体においても少年・成年女子のダブルスカルが優勝、少年・成年男子シングルスカルが３位と前年に引き続いて国体で活躍した。

第70回和歌山国体で優勝した成年女子ダブルスカル
（左・冨田千愛、右・相見春奈）

平成28年第71回岩手国体においても５種目で入賞を果たし、平成29年第72回愛媛国体においても６種目入賞を果たし87点を獲得、平成の黄金期を迎えた。

７　世界選手権大会等への出場

平成16（2004）年には、インターハイ、国体で活躍した米子工高出身の杉谷晃直が明治大学へ進学し、この年にスペインで行われた世界ジュニア選手権へ日本代表選手として出場した。

また、平成20（2008）年には米子東高の森田望が第６回全日本ジュニア選手権大会で６位となり、香港アジアジュニア選手権に女子ダブルスカル日本代表として出場した。

その後、平成26年には米子工高の古田直輝、米子東高の高島美晴両選手が全日本ジュニアを制し、ドイツ（ハンブルグ）で開催された世界選手権Ｕ19に出場し、台湾アジアジュニア選手権にも出場した。

2014世界選手権Ｕ19（左：高島美晴、右：古田直輝）

さらに同年には、明治大学の冨田千愛（米子東高出身）、一橋大学の藤田陸（米子東高出身）の両名がイタリア（バレーゼ）で開催された世界選手権U23に出場するなど、鳥取県出身の選手が日本代表として活躍した。そして、平成27（2015）年には、冨田千愛が大石選手（中部電力）とペアを組み、日本代表として2015年ユニバシアード大会（韓国）に軽量級女子ダブルスカルに出場し見事金メダルを獲得した。

2015年ユニバシアード大会優勝（右側が冨田千愛）

これは、日本ボート界初の快挙を成し遂げたもので、ボート関係者を大いに沸かせた。同年には明治大学の古田直輝（米子工高出身）がワールドカップ（イタリア、スイス）、ブルガリア世界選手権U23に出場した。さらに米子東高の高島美晴がブルガリアで行われたU23世界選手権に出場し、米子東高で高島と同級生の永井理湖が世界ジュニア選手権に出場（ブラジル）するなど２年連続鳥取県の選手が日本代表選手として活躍した。

平成29（2017）年には米子工高の境凌輔がアジ

アジュニア選手権（シンガポール）へ出場し、平成30年には米子西高の林原萌香がアジアジュニアボート選手権大会・アジアカップⅡ（韓国）に出場するなど、近年鳥取県選手の日本代表入りが際立ってきている。

８　県ボート初の女性オリンピアン誕生

冨田千愛は､2015年ユニバシアード大会（韓国）において、軽量級女子ダブルスカルで優勝後、リオオリンピックの年である翌年の2016年（平成28年）には大石選手とペアを組み、韓国で行われた2016アジア・オセアニア大陸予選に軽量級女子ダブルスカルに出場し優勝し、見事オリンピックの出場権を得た。

ブラジル・リオオリンピックでは、12位の結果に終わったが、これは、鳥取県のボート界では、かつてボート競技でオリンピックに出場した、県出身の福田紘史氏（昭和35年ローマ大会)、福益敏氏（昭和43年メキシコ大会）以来、実に48年ぶりのオリンピック出場であり、鳥取県のボート史上初の女性オリンピアンが誕生したのである。今後は、2020東京オリンピックを見据え、さらなる活躍を期待しているところである。

2016年リオオリンピック（手前が冨田千愛）

９　ジュニアの育成・強化

幼少期からボートに親しみ将来のトップ選手の育成を目的とし､米子ボート協会が平成２（1990）年から毎年、米子市錦海ボートコースで「夏休み少年少女ボート教室」を開催している。近年は毎年、延べ60名ほどの少年少女が参加しており、その中で興味がある子どもたちは米子漕艇クラブへ入会し、平日の夕方、土日祝日の練習に励んでいる。平成27（2015）年から、鳥取県が行う「チーム鳥取！発掘育成事業」のジュニアアスリート選手も参画し、平成29年には鳥取ジュニアローイングクラブが発足し、東部地区、西部地区でそれぞれ練習を重ねている。

平成29年の全日本中学選手権競漕大会で、米子漕艇クラブの女子ダブルスカル（松原優香、中井風桜）が悲願の初優勝を達成し、続く全国中学校新人競漕大会と平成30年３月の全国中学校選抜ボート大会では釜田佳典が優勝するなど、近年の中学生の各種全国大会、中国中学ボート選手権大会などでは常にトップレベルを維持しているのである。また、高校に進学後も引き続きボート競技を続ける選手が多くなり、中高一貫指導育成の取り組みの効果が見えてきた。

10　普及活動の活発化

県下３協会がボートの普及のため独自に活動を行っているが、大山を望み風光明媚な錦海ボートコースで行われる米子市民レガッタは、平成30年で第50回を迎え、中浜港で行われる境港市民レガッタは みなと祭のイベントの一つでもあり第46回を迎えた。また、湖山池ボートコースで行われる鳥取市民レガッタも第34回を迎え、それぞれ自然環境を生かし、特色のある市民レガッタを開催している。

そして、平成28年から錦海ボートコースでは、小中学生を対象に中海・宍道湖への親水及びボート競技を実施し、これを通じて、小中学生同士の交流を育むことを目的に「中海・宍道湖全国小中学生交流レガッタ」を開催し、小中学生の普及活動に努めている。

11　さらなる飛躍を目指して

これまで当協会が取り組んできた選手強化、普及活動などは一定の成果が出てきた。しかし、今

後のさらなる発展のためには、やはりスタッフの確保が絶対条件である。

現在、高校顧問が中心となり選手強化を行い、各地区協会が独自の普及活動を行っている。いずれにしてもボート競技に関する専門性の高いスタッフが必要となることは間違いないが、それらスタッフを確保するためには、高校、大学を卒業し地元に残り社会人となった経験者を、やがては指導者として確保していき、所属企業のボート競技に対する理解を得るよう取り組んでいく必要がある。また、２巡目の国体を数年後に控え、現在取り組んでいる小中高大一般の一貫指導体制を確立し、指導者も含め県内の成年選手が不足している現状を解決していかなくてはならない。さらに、選手・指導者だけでなく審判員の確保も重要な課題であり、スムーズな大会運営を行うには大会時の実働審判員を確保していかなければならない。これら諸課題に対してボート関係者は、今後一丸となって取り組んでいく必要がある。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成３年４月～12年３月	柳谷　　中
平成12年４月～26年３月	野津　一成
平成26年４月～	前田八壽彦

◇理事長

平成２年４月～10年３月	本池　辰郎
平成10年４月～20年３月	杉村　正男
平成20年４月～	竹田新太郎

国際大会（平成５年以降）

年度	大会名	チーム・選手名	成績
16年	世界ジュニア選手権（スペイン）	杉谷晃直（明治大：米子工）	
20年	アジアジュニア選手権（香港）	森田望（米子東）	
26年	世界選手権U19（ドイツ）	古田直輝（米子工） 高島美晴（米子東）	
	世界選手権U23（イタリア）	冨田千愛（明治大：米子東） 藤田陸（一橋大：米子東）	
27年	ユニバシアード大会（韓国）	冨田千愛（明治大：米子東）	
	ワールドカップ第Ⅱ戦（イタリア） ワールドカップ第Ⅲ線（スイス） 世界選手権U23（ブルガリア）	古田直輝（明治大：米子工）	
	世界選手権U23（ブルガリア）	高島美晴（米子東）	
	世界ジュニア選手権（ブラジル）	永井理湖（米子東）	
28年	オリンピックアジア大陸予選（韓国）	冨田千愛（明治大：米子東）	優勝
	リオオリンピック（ブラジル）	冨田千愛（明治大：米子東）	
29年	アジアジュニア選手権（シンガポール）	境 凌輔（米子工）	
30年	アジアジュニアボート選手権（韓国）	林原萌香（米子西）	

全国大会入賞者

年度	大会名	チーム・選手名	種目	成績
８年	第44回全日本高等学校選手権競漕大会	稲田（米子工）	男子シングルスカル	６位
	第51回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	３位
９年	第45回全日本高等学校選手権競漕大会	米子東	女子ダブルスカル	６位
10年	第53回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	６位
11年	第52回朝日レガッタ	小玉（米子工）	高校女子シングルスカル	３位
	第47回全日本高等学校選手権競漕大会	米子東	女子ダブルスカル	５位
	第54回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	３位
		鳥取県選抜	少年女子舵手付きフォア	４位
12年	第12回全国高等学校選抜大会	米子南	女子ダブルスカル	４位
13年	第54回朝日レガッタ	米子南	高校女子ダブルスカル	３位
	第49回全日本高等学校選手権競漕大会	米子南	女子゛ブルスカル	６位
	第56回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年女子ダブルスカル	５位
	第13回全国高等学校選抜大会	米子南	女子ダブルスカル	６位
14年	第50回全日本高等学校選手権競漕大会	米子東	男子ダブルスカル	４位
	第57回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	５位
	第14回全国高等学校選抜大会	杉谷（米子工）	男子シングルスカル	４位
		大江（米子南）	女子シングルスカル	８位
15年	第51回全日本高等学校選手権競漕大会	杉谷（米子工）	男子シングルスカル	２位
		大江（米子南）	女子シングルスカル	５位
	第58回国民体育大会ボート競技	杉谷（米子工）	少年男子シングルスカル	３位
16年	第59回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	成年男子ダブルスカル	８位
		杉谷（県選抜）	成年男子シングルスカル	８位
17年	第60回国民体育大会ボート競技	杉谷（県選抜）	成年男子シングルスカル	５位
		鳥取県選抜	少年男子舵手付きクォドルプル	８位
20年	第61回朝日レガッタ	米子東	高校女子ダブルスカル	１位
	第56回全日本高等学校選手権競漕大会	鳥取東	男子ダブルスカル	６位
		米子東	女子ダブルスカル	３位
21年	第57回全日本高等学校選手権競漕大会	池口（米子工）	男子シングルスカル	６位
	第64回国民体育大会ボート競技	池口（県選抜）	少年男子シングルスカル	４位
	第21回全国高等学校選抜大会	池口（米子工）	男子シングルスカル	３位
22年	第58回全日本高等学校選手権競漕大会	池口（米子工）	男子シングルスカル	２位
		米子東	女子舵手付きクォドルプル	４位
		小林（鳥取商）	女子シングルスカル	５位
	第19回全国中学新人大会	古田（(米漕ク）	男子シングルスカル	１位
23年	第66回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年女子舵手付きクォドルプル	７位
		石畑（県選抜）	少年男子シングルスカル	５位
		橋本（県選抜）	少年女子シングルスカル	６位

23年	第31回全日本中学選手権競漕大会	古田（米漕ク）	男子シングルスカル	３位
		石畑（米漕ク）	男子シングルスカル	８位
	第7回全国中学校選抜ボート大会	石畑（米漕ク）	男子シングルスカル	２位
24年	第65回朝日レガッタ	菱谷（米子東）	高校男子シングルスカル	２位
		米子東	高校女子ダブルスカル	３位
25年	第61回全日本高等学校選手権競漕大会	古田（米子工）	男子シングルスカル	１位
	第68回国民体育大会ボート競技	古田（県選抜）	少年男子シングルスカル	１位
		林原（県選抜）	少年女子シングルスカル	８位
		鳥取県選抜	少年女子ダブルスカル	８位
		冨田（県選抜）	成年女子シングルスカル	１位
		鳥取県選抜	成年女子ダブルスカル	８位
	第32回全日本中学選手権競漕大会	石畑（米漕ク）	男子シングルスカル	３位
	第25回全国高等学校選抜大会	林原（米子東）	女子シングルスカル	３位
		古田（米子工）	男子シングルスカル	１位
26年	第67回朝日レガッタ	米子東	高校女子ダブルスカル	２位
		高島（米子東）	高校女子シングルスカル	１位
	第62回全日本高等学校選手権競漕大会	野口（米子東）	男子シングルスカル	１位
	第69回国民体育大会ボート競技	古田（県選抜）	少年男子シングルスカル	１位
		鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	１位
		高島（県選抜）	少年女子シングルスカル	１位
		鳥取県選抜	少年女子ダブルスカル	５位
		鳥取県選抜	成年男子舵手付きフォア	４位
		冨田（県選抜）	成年女子シングルスカル	２位
		鳥取県選抜	成年女子ダブルスカル	７位
	第25回全国高等学校選抜大会	石畑（米子高専）	男子シングルスカル	２位
		米子東	女子ダブルスカル	１位
27年	第68回朝日レガッタ	石畑（米子高専）	高校男子シングルスカル	１位
	第63回全日本高等学校選手権競漕大会	高島（米子東）	女子シングルスカル	１位
		石畑（米子高専）	男子シングルスカル	２位
	第70回国民体育大会ボート競技	石畑（県選抜）	少年男子シングルスカル	３位
		鳥取県選抜	少年女子ダブルスカル	１位
		古田（県選抜）	成年男子シングルスカル	３位
		鳥取県選抜	成年女子ダブルスカル	１位
28年	第69回朝日レガッタ	種田（米子東）	高校女子シングルスカル	３位
	第71回国民体育大会ボート競技	鳥取県選抜	少年女子ダブルスカル	４位
		近藤（県選抜）	少年男子シングルスカル	７位
		鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	６位
		鳥取県選抜	成年男子ダブルスカル	６位

28年	第28回全国高等学校選抜大会	米子工	男子ダブルスカル	４位
	第25回全国中学新人競漕大会	松原（米漕ク）	女子シングルスカル	２位
	第12回全国中学校選抜ボート大会	松原（米漕ク）	女子シングルスカル	３位
29年	第70回朝日レガッタ	米子東	高校女子ダブルスカル	３位
		米子漕艇クラブ	中学女子ダブルスカル	２位
	第72回国民体育大会ボート競技	寺井（県選抜）	少年男子シングルスカル	３位
		鳥取県選抜	少年男子ダブルスカル	２位
		鳥取県選抜	少年女子舵手付きクォドルプル	５位
		古田（県選抜）	成年男子シングルスカル	３位
		鳥取県選抜	成年男子ダブルスカル	６位
		鳥取県選抜	成年女子舵手付きクォドルプル	４位
	第37回全日本中学選手権競漕大会	釜田（米漕ク）	男子シングルスカル	５位
		米子漕艇クラブ	女子ダブルスカル	１位
	第29回全国高等学校選抜大会	寺井（米子東）	男子シングルスカル	１位
		林原（米子西）	女子シングルスカル	１位
		米子東	女子ダブルスカル	３位
	第13回全国中学校選抜ボート大会	中井（米漕ク）	女子シングルスカル	３位
		三中（鳥取JrRC）	女子シングルスカル	５位
		釜田（米漕ク）	男子シングルスカル	１位
30年	第70回朝日レガッタ	寺井（米子東）	高校男子シングルスカル	１位
		中務（米子東）	高校男子シングルスカル	３位
		米子東	高校女子ダブルスカル	１位
		林原（米子西）	高校女子シングルスカル	１位
		米子漕艇クラブ	中学男子ダブルスカル	１位
		米子漕艇クラブ	中学女子ダブルスカル	１位

鳥取県ホッケー協会

リオデジャネイロオリンピックに出場し活躍する、本県出身の阪口真紀選手（左）

１　新体制と全中大会開催

平成６（1994）年、会長が今村時男から山根英明に変わり、同時に理事長が横山武男、事務局長坂田陽彦になった。平成８（1996）年には理事長が土橋義親となり、協会の体制が新しくなった。それまでは競技力向上を中心に選手強化に努めてきたが、新体制では役員組織の見直しや協会運営面での財源の確保を整備した。

平成８年には「第26回全国中学生ホッケー選手権大会」を八頭高校ホッケー場、郡家町民グラウンド（現郡家グラウンド）で開催し、鳥取県代表として男女とも中央中学校（現八頭中学校）が出場した。

大会運営を含め、全国大会を開くことのできる体制が整ったことが､大会開催に至ったのである。

２　活動拠点づくりー八頭高校ホッケー場ー

鳥取県では「わかとり国体」後、天然芝コートはなくなり、平成８年の全中大会はクレーコートで行われた。

ホッケー競技は、1996年のロサンゼルスオリンピックからそれまでの天然芝から人工芝グラウンドで行われ、日本でも人工芝ホッケー場が造られるようになり、インターハイや国体などの全国大会は人工芝会場で行われるようになった。

その流れに鳥取県は全国に遅れをとっており、強化並びに普及面からも人工芝ホッケー場設置はホッケー関係者にとっての悲願であった。協会関係者の働きかけや努力により、平成15年に待望の人工芝グラウンドが八頭高校に完成した。

それまでは人工芝グラウンドを求めて、県外に遠征することが多かったが、完成後は県外の強豪チームが八頭高校に来るようになった。大会と同じピッチで毎日練習ができ、強豪チームとの試合を重ね､八頭高校はインターハイ出場の常連校(中国地区代表）となった。

３　ジュニアチームの結成と中学校の創部

人工芝グラウンドが完成したこともあり、平成17(2005)年に､「第27全国スポーツ少年団ホッケー

交流大会」を八頭高校ホッケー場で開催した。

平成15（2003）年、郡家町（現八頭町）にそれまでクラブとして活動していた郡家東小学校に郡家東スポーツ少年団ができ、鳥取市には津ノ井スポーツ少年団が結成され、それぞれのチームが出場した。郡家西スポーツ少年団の男子が予選リーグを勝ち上がりベスト８となった。

その後、鳥取市には若葉台ホッケークラブ、米里スポーツ少年団も結成された。このようにチーム数とともにジュニア層のプレーヤーの数も増加していった。

また､中学校では中央中学校から平成18（2006）年に鳥取市立桜ヶ丘中学校に転勤した佐々木雅彦が同校にホッケー部を立ち上げた。

４　世界にはばたく鳥取県ホッケー

平成15年、韓国の富平西女子中学校が来鳥し、国際交流を行った。中央中学校、船岡中学校（現八頭中学校)、倉吉東中学校の選手で鳥取県選抜チームを結成して対戦した。翌年、鳥取県の中学校女子は富平西女子中学校を訪れた。韓国チームは非常に強く、当時中央中学校も全国大会に出場したチームであったが、大差で敗れた。滞在中、韓国チームの生徒たちはホームステイを行い、お互いに交流を深めた。

この交流に参加した生徒の中に、2012年（平成24）のロンドンオリンピック女子日本代表選手の佐藤雅子（中央中学校、八頭高校）がいる。本大会では韓国代表に０－１で敗れ、雪辱はならなかった。佐藤は全試合に出場し、日本代表は９位で大会を終えた。

平成18年には男子の「日本・韓国・チャイニーズタイペイU18ホッケー大会」を八頭高校で開催した。日本ユース代表、中国地区選抜、韓国の大元高校、台湾代表の４チームを招いての大会であった。外国チームの選手は協会役員の家庭でもホームステイを行うなど広く交流を深めた。

この年に八頭高校の阪口真紀がU18日本代表に選出されている。阪口は2016年（平成28）リオデジャネイロオリンピック女子日本代表に選出され、全試合に先発出場した。

このように二大会連続でオリンピック代表選手が鳥取県から出た。また、大家涼子（八頭高校出身）は二大会連続のバックアップメンバーとして両オリンピックに帯同した。いずれも、高校卒業後、大学に進学し、社会人チームに入り活躍した選手である。

また、中学生も鳥取県から男女ともU16日本代表選手に選出されている。オーストラリアに遠征して、国や州代表チームとの大会に出場して、海外経験を積んでいる。その中でも、2013年に女子の主将を務めた山根麻衣子（中央中学校・八頭高校）はU16日本代表として、2013年の第２回U16アジアカップで２位、2016年の第４回U18アジアカップでも２位の成績を収めた。このチームには同じ八頭高校の木下美咲、小林愛美も選ばれて出場している。

そして、八頭高校女子が平成21（2009）年度、高等学校国際スポーツ交流で韓国を訪れ、松谷女子高校と、27（2015）年度に県体育協会の鳥取県－江原道スポーツ交流事業では東海商業高校と試合をしている。

５　日本一を目指して

成年女子の鳥取女子短期大学クラブは、平成６（1994）年と８（1996）年に国体に出場し、８年には４位に入賞した。

八頭高校女子は平成５（1993）年から平成29（2017）年までの間､平成14（2002）年度､24（2012）年度の二度国体５位入賞を果たしている。インターハイに関しては人工芝グラウンドができる以前にベスト８に１回進んでいる。中国ブロックで出場が一枠しかない「全国選抜大会」にも４回出場し、３回ベスト８に進んでいる。

八頭高校男子は人工芝グラウンド完成後の13年間で12回インターハイに出場しており、ベスト８（２回）が最高である。

平成28（2016）年、人工芝をリオデジャネイロ

オリンピック仕様に真新しく張り替えられた八頭高校ホッケー場を主会場に「中国総体」が開催された。この大会では八頭高校女子が惜しくも準決勝で敗れたものの３位入賞を果たし、ベスト８の壁を越えたが､日本一には届かなかった。同大会、男子はベスト16であった。

男子は、同年､「中国新人戦大会」決勝戦で宿敵横田高校（島根県）に初めて勝利し､「全国選抜大会」に出場した。結果はベスト８であった。

中学校では、中央中学校や倉吉東中学校が「全国中学生大会」に出場してきたが､平成21（2009）年度に中央中学校がベスト８になるまで、なかなかベスト16の壁を超えることができなかった。選抜チームの鳥取県代表で出場する､「JOCオリンピックカップ都道府県対抗11人制大会」では平成24(2012)年度､３位となりベスト８の壁は越えた。

そして、平成27（2015）年度、八頭中学校女子がついに「全国中学生大会」の決勝戦に進出した。準決勝では中国大会決勝で敗れた横田中学校（島根県）に勝利し、あと一勝までにせまったが、朝日中学校（福井県）に１対２の惜敗で日本一を逃した。この年の「都道府県対抗11人制大会」は３位で決勝戦進出はならなかった。

そして、平成28年度､「今年こそは」と思い臨んだ「全国中学生大会」では危なげなく決勝戦まで進出した。相手はまたしても朝日中学校（福井県)であった。試合はお互い譲らず同点引き分け。SO（シュートアウト）戦で敗れ、あと一歩のところで全国制覇を逃した。この年の「都道府県対抗11人制大会」も決勝に進んだが、同じくSO戦で敗れた。

６　指導力の向上と今後の方向

日本一まであと一歩まで迫ってきたが、グラウンドの整備だけがこれまでのホッケーの強化につながったわけではない。

平成15（2003）年、矢澤光介が八頭高校の教員に採用され、女子部の顧問についた。矢澤はこれ以前に母校の中学女子チームを指導して全国大会で上位入賞に導くなど、人工芝ホッケーの指導に長けていた。赴任以降、平成24（2012）年まで毎年全国大会に出場させ、インターハイの中国枠が「１」となり出場できない年もあったが、平成28年見事に全国大会３位入賞を果たした。

平成17（2005）年、中央中学校に道端良之が採用になった。道端は前年のインターハイのため横田高校を指導しており、横田中学校の女子部の監督として平成15（2003）年度に全国制覇を成し遂げていた。中央中学校赴任後は、ほぼ毎年のように全国大会に出場させている。全国一の練習を行い､「全国中学生大会」２年連続準優勝に導いた。そして、U16日本代表の女子監督としてオーストラリアでの大会でチームを優勝に導くなど、その指導力は誰もが認めている。

平成26（2014）年には、道端の横田中学校時代の教え子の尾﨑孝明が八頭高校に赴任｡平成28年、母校の横田高校から勝利し、八頭高校男子を初めて「全国選抜大会」に出場させた。

また、平成25（2013）年に伊藤勇悟、平成26年に亀澤達也が県体育協会に採用になった。二人は成年男子の中心選手であり、八頭高校のコーチとして強化に取り組んでいる。

平成29年、八頭町教育委員会に加賀田知江がスポーツ指導員として採用された。加賀田は平成15(2003）年から長年スポーツ少年団の指導を行ってきた。八頭町の小学校が統合される中、鳥取市の児童との鳥取ジュニアスポーツ少年団を立ち上げ、早速、平成29年「全国スポーツ少年団交流大会」で男子を３位に導いた。新しく統合された八東小学校でもチームを立ち上げるなど、ホッケーの普及にも努めている。

これらの指導者以外にも、これまでの長年にわたるホッケー関係者の努力が鳥取ホッケーを全国区にあげたといえよう。

競技力の向上により、大学進学後も高いレベルでホッケーを続ける生徒が増えている。その経験を生かし、指導者として鳥取に帰ることが望まれる。

小中学校の統合により、チーム数や部員数が増加しているが、今後もホッケー人口を増やしていくことが望まれる。

そして、2020東京オリンピック代表選手が鳥取県から出ることを願うものである。

【歴代会長、理事長】

◇会長

昭和57年～平成５年　今村　時男
６年～　23年　山根　英明
24年～　福田　俊史

◇理事長

昭和63年～平成５年　加賀田幹夫
６年～　７年　横山　武男
８年～　28年　土橋　義親
29年～　坂田　陽彦

鳥取県ボクシング連盟

2016年第71回国民体育大会いわて国体
ボクシング競技鳥取県選抜チーム

１　ボクシングジムの誕生

昭和60年の鳥取国体を契機に、一時期飛躍した鳥取県のボクシング競技であったが、昭和62（1987）年の沖縄国体を最後に長い低迷期へと突入することとなった。

平成に入り、基礎となる高校ボクシング部は境港工業高校（現・境港総合技術高校）のみの活動となり、社会体育での選手育成、確保がスタンダートな姿になりつつある時代であった。ボクシング競技においては、これが全国的な流れでもあった。

鳥取県では、平成２（1990）年に米子市にシュガーナックルボクシングジムが誕生し、倉吉には北条ボクシングクラブが誕生した。境港工業高校、シュガーナックル、北条クラブの３団体が平成初期から現在までの鳥取県のボクシング界を担っていくこととなった。平成24（2012）年には、鳥取市にシュガーナックルボクシングジム鳥取店が開設され、現在は東部・中部・西部に活動の拠点が

できたことで、県内での競争性が担保されつつある状況にある。

２　国体等での選手の活躍

低迷化が顕著になるなか、昭和63（1988）年の京都国体から国民体育大会における競技方法が変わり、従来のフライ、バンタム、フェザー、ライト、ライトウェルターの５階級によるリーグ戦方式から、任意の５階級による勝ち点、順位点の県別合計点数制のトーナメント方式に変更された。

このことは当県のような層の薄い県においてはより厳しい要件となり、突出した選手１名より、平均して高レベルの選手を複数育成しなければならない環境になった。実際､1987年沖縄国体以来、平成20（2008）年大分国体に成年（白濱良二・西谷和宏・大住剛・松谷周平いずれも、北条クラブ所属）が出場するまでの間、少年、成年ともに予選突破できなかった。

しかしながら個人においては、全日本実業団ボクシング選手権大会で、平成13（2001）年バンタム級・加藤秀一、2002年ミドル級・徳岡靖之、2003年ライト級・薮内伸道、2005年～ 2007年長尾儀弘（３連覇)、2005年ライトウェルター級・西谷和宏（2009年プロ転向・2015年日本チャンピオン）などが､火を消すことなく活躍してくれた。

県ボクシング界にとって転機となったのが、平成14（2002）年から女子アマチュアボクシングを日本連盟が認定し、公式競技としてスタートしたことに加えて、競技者を高校生以上に限定してきた日本連盟が、指導者の要望、国際大会での競争性などから「幼年ボクシング」（現在はアンダージュニアと呼称）と称し、小学校５年生以上を対象とした競技会を、平成21（2009）年から都道府県レベルで、平成24（2012）年からは全国レベルでの大会を開催することとなったことだ。

県下においても全国の動きに合わせるようにアンダージュニア、女子の選手育成に努め、2012年第１回全日本幼年ボクシング大会(東京都日野市)小学生女子の部に入江聖奈（義方小学校）が出場した。

また、アンダージュニア全国大会である全国アンダージュニア大会は冬場に開かれていたが、平成26（2014）年からは各階級のチャンピオンを決める大会として、都道府県大会、ブロック大会、西日本予選を経て東西代表試合が大阪で開催されることとなった。2014年の第１回全日本アンダージュニアボクシング王座決定戦に、中学生男子52kg級で小川達也（後藤ヶ丘中学校）が準優勝し、中学生女子52kg級で入江聖奈（後藤ヶ丘中学校）が優勝している。2015年の第２回大会では、中学生女子48kg級で木下鈴花、52kg級では入江聖奈がそれぞれ日本一となった。

この小・中学生の活躍を機に、近年の県ボクシング界は鳥取国体以来の盛り上がりを見せている。

男子では、小川達也（境港総合技術高校～駒澤大学）が平成27（2015）年インターハイで１年生ながら５位入賞したのを皮切りに、高校選抜大会で３位、2016年インターハイでは３位、さらには2016年岩手国体少年ライトフライ級で優勝、2017年高校選抜大会ライトフライ級優勝、愛媛国体３位など、国内大会で常に上位の成績を残した。国際大会では、平成29（2017）年３月、第１回ユース国際ボクシングトーナメント（カザフスタン）において銀メダルを獲得した。さらにASBCアジアユース選手権大会などでも代表に選出され出場しており、平成30（2018）年に、大学に進学して東京オリンピックを目指し精進しており、活躍が期待されている。

川副悠河（境港総合技術高校）は、2016年岩手国体において１年生ながらフライ級で準優勝という華々しい全国デビューをし関係者を驚かせた。しかし、その後、腰痛等の故障によりブランクもあり高校では満足できる結果を残すことができなかったが、大学に進学し、ボクシングを続けているので今後に期待したい。

徳岡孝志朗（鳥取城北高校）も2017年愛媛国体のピン級で３位に入賞し、最後の大会で結果を残

してリングを去った。

国体において少年男子は、岩手国体が30年ぶりの出場であったが、岩手、愛媛と連続出場したことに加え、それぞれに入賞者を輩出することができたのも県内各ジムの指導者が小学生から継続して指導してきた成果である。

３　女子選手が各種大会で活躍

女子では、入江聖奈（米子西高校）がアンダージュニアからの豊富な経験をもとに2016年、全日本女子ボクシング選手権大会（愛媛県）ジュニアの部フライ級で全国初優勝すると、翌2017年地元米子市で開催された同大会でもフェザー級で優勝し２連覇を果たした。2019年大会では３連覇に挑む。2018年の高校選抜大会でも全国優勝するなど国内の高校生では突出した選手となった。国際大会においても、2017年AIBA女子ユース選手権大会（インド）バンタム級で銅メダル、2018年４月ASBCアジアユース選手権（タイ）フェザー級銅メダル、2018年８月AIBA世界ユース選手権大会（ハンガリー）フェザー級銅メダルなど、国際大会においてもユース世代では常にメダルを狙える位置で活躍している。今後は、エリート（18歳以上）世代で東京オリンピックを念頭にさらに上のレベルでの飛躍が期待される。

もう一人、木下鈴花（米子南高校）は、入江と幼馴染で入江の影響で中学生からボクシングを始めた。早々に才能が開花し、2016年広島インターハイで初めて公開競技として女子のボクシングが開催され、ピン級で出場した木下は一戦ごとに逞しくなり優勝した。そして、初代のインターハイチャンピオンに輝いた。その後も入江と共に出場したAIBA女子ユース選手権大会（インド）フライ級で銅メダル、2018年４月ASBCアジアユース選手権（タイ）フライ級銅メダルを取り、2018年８月AIBA世界ユース選手権大会（ハンガリー）フライ級にも出場した。2017年全日本女子ボクシング選手権大会（米子市）フライ級優勝、2018年の高校選抜大会フライ級優勝など、入江と共に日本の高校女子ボクシング界のトップを走っている。高校卒業後は、入江と共に進学し東京オリンピックを目指している。

2017年12月13日から12月17日、第69回全日本社会人ボクシング選手権大会・第16回全日本女子ボクシング選手権大会を米子市で開催した。鳥取国体以来の全国大会の開催で、準備に右往左往しながら鳥取県、米子市、会場である米子産業体育館などの支援を受け、大会を無事終了することができた。また、同大会でジュニア女子の入江、木下が優勝、社会人男子では、川端雅彦（もみの木福祉会）が準優勝と、地元選手の活躍で大いに盛り上がった大会であった。

４　今後の課題

これまでと同じく底辺の拡大に尽きるが、競技の低年齢化に合わせた普及方法を考え取り組むことが必要である。

県ボクシング界は、2020年東京オリンピックを現実的に見据える選手がいる一方で、競技人口の減少によりコンスタントに強い選手を輩出できるかというと厳しい現状である。県下の活動拠点において更なる選手確保に注力していかねばならないが、アンダージュニア大会の認定によって、かつてのように高校から競技を始めていては勝てない現実がある。小中学生にボクシング部活動がない状況では、アマチュアボクシングジムなどの民間の力に頼らざるを得ないのが現状である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年～平成11年	長谷川和夫
12年～　15年	手島　幸二
16年～	斉木　正一

◇理事長

昭和53年～平成７年	甲斐　清明
８年～　17年	松本　　功
18年～	林　　善博

鳥取県バレーボール協会

平成27年度全日本実業団女子選手権大会決勝
パナソニックブルーベルズ対イビデン（県民体育館）

１　鳥取県バレーボール協会の組織

鳥取県バレーボール協会は７つの連盟と５つの専門委員会および東中西の各地区協会から構成されている。連盟は、社会人バレーボール連盟・ママさんバレーボール連盟・ビーチバレーボール連盟・ソフトバレーボール連盟・高体連・中体連・小学生バレーボール連盟が所属している。各連盟は、各カテゴリーの大会運営を行うが、社会人バレーボール連盟は実業団とクラブを統括している。また、専門委員会は総務委員会・指導普及委員会・強化委員会・競技委員会・審判委員会が設置されている。その他、鳥取県を東部・中部・西部に分けて各地区協会を組織している。平成17年に就任した足立幹夫協会長が、機能する組織を目指してその構築に尽力した。

各カテゴリーの大会は原則として各連盟が運営するが、県協会直轄の大会として９人制の春季会長杯･秋季会長杯、国体鳥取県予選および天皇杯･皇后杯の県予選がある。このうち天皇杯・皇后杯は､中学生以上のカテゴリーを越えた大会であり、一般・高校・中学生などのチームが対戦する貴重な大会で､近年徐々に参加チーム数が増えており、中学生や高校生などへの意欲向上への良い刺激になっている。平成30年度は、男子14チーム・女子９チームの過去最多の参加チーム数で大いに盛り上がった。

中学校や高校におけるチーム数など、競技人口の減少に歯止めをかけることと、中国ブロック・全国で同等に戦える競技力の強化、そのために安定した財源確保など今後の課題は多い。

２　実業団・クラブチームの活動

企業内でのスポーツ支援が全国的に縮小する中で､鳥取県内でも実業団登録のチームは減少した。以前地域リーグに参戦していた三洋電機鳥取や、実業団登録し全国の実業団大会へ出場していた日立金属鳥取は企業の組織再編などにより現在は活動を終了している。ただ、実業団チームの功績は大きく、日立金属鳥取工場の支援で始められた日立金属杯鳥取県中学校バレーボール男女選抜優勝

大会は、日立金属フェライト電子株式会社に支援をいただきながら平成30年度で第23回を迎え、現在も中学校バレーの活性化とレベルアップに協力を得ている。現在は、鳥取市役所クラブなど数チームが実業団登録し、全国・中国の実業団大会へ出場している。

クラブチームは、平成30年現在男子14チーム、女子９チームが加盟している。このうち男子11チーム、女子６チームは６人制の日本海リーグに出場しており、県内の６人制の頂点を目指して活動しているほか、９人制でもチームを構成し大会に参加するチームも多い。加盟チームを見てみると、米子クラブ、気高クラブ、赤碕倶楽部、鳥取教員などの伝統あるチームだけではなく、piero、XXX（ターキー）、鰯。、LIPELALAなどの新しいチームもあり、社会人になってもバレーボール競技を続ける動きは喜ばしいことである。

県内で開催する中国大会や全国大会の予選大会を見てみると、近年９人制男子では気高クラブが力を発揮している。その実力は県外に出ても十分通用するものであり、平成26（2014）年中国９人制クラブカップで気高クラブが初優勝を遂げ、９人制の中国チャンピオンになったことは記憶に新しい。

また、６人制男子では、TEAM　RAIDが日本海リーグで平成21（2009）年から８連覇を達成するなど力を発揮しているが、気高クラブ、XXX、鰯。などのチームも力をつけてきており、県内大会でしのぎを削っている。女子は鳥取教員、米西クラブ、オリーブなどが６人制・９人制を問わず激戦を繰り広げているが、全国との壁は大きい状態である。

３　高校のバレーボール

高校の男子バレーボールは、平成６（1994）年以降約15年間にわたって鳥取商業高校と鳥取工業高校を中心に優勝争いが繰り広げられた。鳥取商業高校は、塚田忠雄監督指導のもと、後にＶリーグで活躍した矢野裕範選手や、平成20（2008）年北京オリンピックに日本代表として出場した山本隆弘選手らを中心に、県高校総体において優勝を重ねた。平成６年から13年の８年間で、実に７回の優勝は素晴らしい戦績である。

また、鳥取県チームが県外チームの壁に阻まれ、なかなかブロック大会以上で戦績を出せない中で、平成６年12月に広島県で開催された中国新人大会では、広島県の強豪崇徳高校を破り中国ブロック大会優勝を果たした。鳥取工業高校は、県高校総体で昭和38年に６人制種目になって以来、30回の優勝回数を誇っている。平成６年以降も10回の優勝を果たしており、常に上位に名を連ねる伝統あるチームである。近年では米子工業高校が県高校総体で３回、米子西高校が同大会で１回の優勝を果たしたほか、平成29年・平成30年には鳥取中央育英高校が連覇するなど、混戦状態となっている。

高校の女子バレーボールは、一時代を築いた市川裕監督率いる米子西高校の活躍をあげなければならない。昭和54（1979）年に県高校総体で初優勝を果たした米子西高校は、昭和61（1986）年から平成10（1998）年まで13連覇を達成する。平成６（1994）年に市川監督はインターハイ10回出場の表彰をされたが、この間指導した選手は今も県内のバレーボール界で活躍するなど、功績は大きい。

平成11（1999）年からは、古豪八頭高校が平成17（2005）年まで７連覇を果たし、その後も常に上位に名を連ねている。近年では、米子松蔭高校、鳥取東高校、米子北斗高校、岩美高校なども力を発揮し、女子も混戦状態となっている。

「春高バレー」の名称で行われてきた「全国高等学校バレーボール選抜優勝大会」は、平成21（2009）年度実施された第41回大会をもって終了した。平成22年度以降は、「春高バレー」の愛称を継続しながら、「全日本バレーボール高等学校選手権大会」として開催されることとなった。それまでは高校総体が選手権大会として開催されていたため、栄光の記録などはそれを引き継ぐ形で

平成22年の大会が第63回大会として開催された。

「春高バレー」の開催時期を以前の３月から１月に変更することで、３年生も出場できる高校バレー最高峰の大会として位置づけられた。高校でバレーボール競技をする者にとって、インターハイと春高バレーは大きな目標であるが、そのひとつである春高バレーがこのとき大きく変わった。県予選大会でも、上位チームの技術力の向上と好ゲームは見られるようになったが、３年生にとって進路活動と並行して部活動を継続することとなり、チームによっては３年生を残した活動に苦慮している。

近年全国の壁が厚く、インターハイでは初戦グループ戦の突破が、春高バレーにおいても初戦勝利がやっとであり、県内チーム全体のレベルアップが望まれる。

４　中学生のバレーボール

中学校では、生徒の減少から部活動の精選が進み､バレーボール部が無い学校が増えてきている。県協会加盟数は平成17(2005)年度87チームであったが、平成29（2017）年度には65チームとなっている。特に男子のチームが少なくなっており、平成29年度は12チームの登録であった。

このような現状の中でも、中体連を中心に大会運営や強化対策が行われている。平成30年度第32回目の開催となる全国都道府県対抗中学バレーボール大会（以前は「さわやか杯」「アクエリアスカップ」の名称で呼ばれ、平成13年の第15回大会以降は「ＪＯＣジュニアオリンピックカップ」と称され開催されている）には、毎年選抜チームを編成し全国大会に出場している。全国の壁は厚く苦戦を強いられているが､男子が平成24（2012）年と平成28（2016）年に、女子が平成26（2014）年と平成29（2017）年にそれぞれ予選グループ戦を２位通過し決勝トーナメントに進出した。今後は決勝トーナメントで勝ち上がることが期待されている。

また、平成26年には気高中学校男子が中学校選手権で準優勝に輝き、第44回全日本中学校バレーボール選手権大会へ出場した。気高中学校は予選グループ戦で小野中学校（福島）を２－１で破り決勝トーナメントに進出、決勝トーナメントではサレジオ（東京）に０－２で惜敗したが、この活躍は記憶に新しい。

このほか、日立金属グループの協力によって22回の開催を数える日立金属杯中学校バレーボール男女選抜優勝大会や、鳥取市と旧気高町バレーボール協会の努力によって23回の開催を迎える県外チームも招待したレベルの高い気高スカロップ杯などが、中学生バレーボールの活性化と技術力向上に大きく寄与している。

近年､中学校にバレーボール部が減少する中で、バレーボール競技に興味があり意欲を持った中学生に活動の場を与えるクラブチームができるようになった。現在では、東部地区に鳥取ドリームズ男子と鳥取ドリームズ女子が、中部地区に倉吉Pearsユース（男子）が､西部地区にＴＳエクシード（男子）とＴＳＣジュニア（女子）が存在する。ヤングやＵ－14の全国大会を目指して、大人のクラブチームと連携しながら活動しており、技術力の向上が見られる。

５　小学生のバレーボール

小学生のバレーボールチームは、保護者や有志が各地区の児童を対象に活動を進めているが、近年の少子化により登録チーム数は減少傾向にある。平成29年度で男子21チーム、女子68チームである。

平成２（1990）年に開催された第10回ライオンカップ（現全日本バレーボール小学生大会鳥取県大会）の参加チーム数が男女を合わせて128チームであったことを考えると、その減少は顕著である。しかし、依然として小学生のスポーツとして特に女子児童には根強い人気があり、現在も全日本バレーボール小学生鳥取県大会・鳥取県小学生バレーボール選手権大会・鳥取県小学生バレーボール新人大会等の開催を通して、児童の健全育

成に寄与しているところである。

小学生でバレーボール競技を経験した選手が、その後中学校・高校・一般へと継続して活動できる場をしっかりと確保することが必要である。

６　ママさんバレーボール

昭和50（1975）年に家庭婦人連盟として設立され、その後平成23（2011）年にママさん連盟と名称を変更して活動を続けている。現在、一般の部に39チーム、いそじの部に11チーム、ことぶきの部に３チームが登録しており、中央新報ママさんバレーボールリーグ、全国ママさんバレーボール大会県予選大会、鳥取県選手権大会などの大会を開催している。

生涯スポーツ・レクリエーションスポーツの代表であるママさんバレーを通して、技術面だけでなく、人間的な研鑽や正しい社会性を身につけるという理念にふさわしい活動が続けられている。平成29（2017）年12月には、第７回全国ママさんバレーボール冬季大会の全国大会を鳥取県民体育館・鳥取産業体育館を会場に開催し、成功裏に終えた。

７　ソフトバレーボール

年齢を問わずに誰でも参加できるソフトバレーボールは、学校ＰＴＡ活動の体育行事で取り入れられるなど広がりを見せた。その一方で、バレーボール経験者も参加し、技術力・競技力も向上した。平成30年に鳥取県ソフトバレーボール連盟が設立され、40チームが加盟し、ソフトバレー麒麟獅子カップ交流大会・県ソフトバレー全国中国地区大会予選・スポレクなどの大会を多く開催している。６人制や９人制に比べて、比較的少人数で活動でき、初心者でもプレーしやすいソフトバレーボールは、今後も普及していくことが期待される。

８　ビーチバレーボール

砂浜にネットを張ったコートで、２人１組のチーム同士で対戦するビーチバレーは、平成８（1996）年のアトランタオリンピックから正式種目となった。日本海に面した鳥取県では、境港市を中心に比較的早くから活動が始まった。境港市の新屋海岸に全国からトップレベルの選手が集まるSun-inビーチは平成29（2017）年度に第30回記念大会を迎えた。また、同海岸で開催される山陰両県の選手による境港ビーチバレー大会も、平成30年度で第23回の開催となった。境港だけではなく、岩美町浦富海岸の浦富海岸ビーチバレー大会や鳥取市賀露海岸のSand Dune Cup in賀露など、県内では盛んに大会が開催されている。

平成15（2003）年には、大阪で行われた高校生の大会、全日本ビーチバレージュニア男子選手権で、佐田山普佑･松本大翼が優勝を果たしたほか、平成25（2013）年東京で開催された第68回国民体育大会では、公開競技ではあったが松本大翼・庄司憲右が３位に入賞するなど活躍した。

９　国民体育大会への取り組み

中国ブロック大会を一位通過する必要があった成年種別では、平成６（1994）年以降本国体への出場は叶っていない。成年６人制は、男子ＪＴ（広島）、女子シーガルズ（岡山）といったＶリーグのチームが中国ブロック大会に出場してくるため､本県の本国体への出場はなかなか困難である。そんな中、成年９人制に中国ブロック大会突破の可能性をにらみながら、平成22（2010）年までの数年間は成年９人制男子の選抜チームを構成し、中国ブロック大会に挑んだ。しかし、善戦はするものの本国体への出場はかなわないまま、平成23年に９人制種別は国体では実施されなくなった。

少年種別は平成19（2007）年まで、男女が交互にブロック１代表と各都道府県１代表の本国体出場枠であった。本国体で通用するように、平成７（1995）年からは各都道府県１代表の種別において選抜チームを構成し出場した。平成８年には少年男子選抜チームが２回戦で愛媛を２－１で破り３回戦に出場。３回戦で兵庫に０－２で敗れた

もののベスト16入りを果たした。その後、平成20（2008）年からは少年種別も中国ブロック２代表となり、毎年選抜チームを構成し本国体出場を目指すが､中国ブロック大会の突破はできていない。引き続き、少年種別の強化を中心に取り組みが必要である。

平成29年の愛媛国体からビーチバレー競技が正式種目になった。平成29年・30年の中国ブロック大会では、鳥取県代表選手が今一歩のところで本国体出場を逃しており、今後強化して出場を目指していきたい。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和61年～平成７年		山口　　亨
８年～	16年	真壁　誠一
17年～	28年	足立　幹夫
29年～		八幡　　勝

◇理事長

昭和61年～平成７年		奥村　敏克
８年～	16年	小原　啓史
17年～	28年	八幡　　勝
29年～		松田　智之

鳥取県体操協会

平成以降の鳥取県体操協会は、わかとり国体以降の選手育成の方策や組織の在り方を模索し続けた。高校世代を中心に全国レベルで活躍できる人材を育成しながらジュニアレベルでも選手を発掘・育成し続けることは容易ではなく、強化部長を中心に校種間やクラブ間の連携を図り、鳥取県として体操競技の伝統を継承・発展させようと努力し続けている。

１　男子新体操の活躍

国民体育大会では、男女新体操が毎年上位に入る活躍を見せていた。しかし平成20（2008）年度を最後に､男子新体操が国体種目から除外（休止）されて以降、伝統校である智頭農林高校男子新体操部の活動も縮小の道をたどらざるを得なくなった。

それまでの智頭農林高校男子新体操部の活躍は、全国でも上位に入る常連校として素晴らしいものであった。

・平成５年12月　智頭農林高校新体操部後援会発足
・平成６年３月　全国高校選抜６位
・平成７年８月　全国高校総体２位（鳥取県開催）
・平成８年３月　全国高校選抜５位
・平成８年10月　国民体育大会４位
・平成12年８月　全国高校総体７位
・平成13年８月　全国高校総体７位
・平成14年３月　全国高校選抜　大原秀一　個人総合優勝

上記のほかにも智頭農林高校男子新体操部は中国高校選手権で平成13（2001）年度まで19連覇を果たしている。平成20年度にも中国高校総体では女子の鳥取西高とともにアベック優勝を果たし、また平成25（2013）年３月の全国高校選抜では11位と健闘している。

近年は智頭クラブの活動を通してジュニア選手層を育成し、男子新体操の復活を目指している。また米子松蔭高校体操部内に新体操部門が立ち上げられるなど新たな動きもあり、平成31年３月に鳥取市で開催される全国高校選抜大会を契機に、強化部長の岡田幸樹を中心とした地道な強化活動を通し、鳥取県男子新体操の伝統を継承・発展させていきたい。

２　女子新体操の活躍

わかとり国体以降も伝統ある鳥取西高校女子新

体操部を中心とし、求心力のある指導者が組織をまとめ、鳥取県として女子新体操の未来像をしっかりと描き、日々の実践に取り組んできたのが女子新体操であり、国体や高校総体においても常に全国の上位争いに加わり続けてきた。

女子新体操は早くからジュニア期のタレント発掘の重要性を認識し、県下のクラブチームが連携しジュニア指導力の向上を図り、小学校世代から中学、高校世代へと丁寧に選手を育て上げる体制を構築した。県体操協会では強化部長の山中幸を中心に、ジュニア、中体連、高体連、審判部の担当が連携を密にして、どの競技レベルの選手でも競技することに喜びを感じ、進んで練習に取り組めるような環境づくり、体制づくりに取り組んできた。

その絶え間ない努力の積み重ねが、毎年全国上位を争う代表選手の育成を可能にし、また少子化が叫ばれる現在においても、多くの小・中学生が競技に取り組んでいることにもつながっている。

以下、鳥取西高新体操部の主な成績である。

・平成６年３月　全国高校選抜８位
・　　７年３月　全国高校選抜６位
・　　７年８月　全国高校総体５位（鳥取県開催）
・　　13年８月　全国高校総体７位
・　　16年８月　全国高校総体７位
・　　17年３月　全国高校選抜７位
・　　18年８月　全国高校総体８位
・　　20年８月　全国高校総体５位
・　　20年10月　国民体育大会５位
・　　20年12月　全日本新体操選手権 種目別（フープ・クラブ）４位
・　　21年３月　全国高校選抜４位
・　　21年10月　全日本新体操選手権 種目別（リボン）４位
・　　22年３月　全国高校選抜２位
・　　22年８月　全国高校総体６位
・　　22年10月　国民体育大会７位
・　　27年３月　全国高校選抜８位

これら高校生の継続的な活躍を支えているのはジュニア期の適切な選手育成であり、幼児・小学生・中学生を一般のクラブと中学校が連携して育成し、大会で数々の成果を挙げている。以下は中体連主催の大会における中学生の主な成績である。

・平成13年８月　鳥取北中　全国中学選手権２位（鳥取県開催）
・　　14年８月　鳥大附中　全国中学選手権５位
・　　18年８月　鳥大附中　全国中学選手権４位
・　　21年８月　鳥大附中　全国中学選手権６位
・　　24年８月　鳥大附中　全国中学選手権６位
・　　26年８月　鳥大附中　全国中学選手権７位

ところで、このような全国的な活躍はメディアも注目するところとなり、平成22年から23年にかけて鳥取西高新体操部がテレビ局の密着取材を受け、平成23年１月から４月までの間、数回にわたり全国に放映され世間の注目を集めた。メディアの積極的な活用は新体操に限らず、今後もスポーツを普及・発展させる上で必要不可欠であろう。

鳥取県の女子新体操は、競技の一層の普及・発展を目指し、平成26（2014）年度には新たな大会『鳥取グランプリ』を創設した。ジュニアの育成においても鳥取県ジュニア新体操選手権大会に就学前の幼児の発表の場「ベイビーデモンストレーション」を設けるなど、内容の充実を図りクラブ間で共通の認識を持ち選手を育成するよう努めている。

指導者は多くの研修の機会を持ち、新たなルールに対応できる指導力を養い、また次代を担う指導者の育成にも努めている。実際に、指導の現場や競技会場では若手からベテランまで充実した人員が協力して活躍しており、今後も鳥取県女子新体操の伝統が継承され発展していくものと期待できる。

３　体操競技の現状

鳥取県の体操競技は輝かしい伝統をもち、諸先輩方の努力のおかげで学校やクラブで多くの選手が育てられてきた。しかし平成以降、県内の多く

の高校で部活動としての体操部が次々と休部、もしくは廃部となり、平成30（2018）年現在、公式に体操部が存在する高校は東部地区に１校、西部地区に３校を数えるばかりとなってしまった。中学校に至っては平成の半ばには部活動として完全に消滅し、現在では一般のクラブに所属し競技を続けている中学生が、自分が通う中学校の学校名を借りるようにして中体連主催の大会に参加しているのが現状である。

原因はさまざまに考えられるが、少子化の影響で各中学校は部活動の規模が縮小傾向にある。体操競技のように専門性の高いスポーツは存続させるのが物理的にも人員的にも難しく、平成年間はこれまでの学校部活動中心の活動形態から学校外での活動形態へと転換していく時期にあったといえるだろう。

その転換期において少年男子の中核となったのは、智頭農林高校である。監督の小野田博之（わかとり国体成年選手）が中心となり、選手を監督の出身地である岡山県津山市加茂町スポーツセンター体操場の恵まれた環境で丁寧に指導、育成してきた。その結果智頭農林高校は全国大会常連校となり、国体では連続して中国予選を突破し、本戦でも予選を突破し決勝進出することも珍しくない鳥取県少年男子チームにまで成長させた。

・平成18年８月　全国高校総体16位
・　18年10月　国民体育大会14位
・　19年８月　全国高校総体13位
・　21年８月　全国高校総体16位
・　24年８月　全国高校総体16位
・　24年10月　国民体育大会16位
・　25年８月　全国高校総体10位
・　25年10月　国民体育大会18位
・　27年８月　全国高校総体11位
・　27年10月　国民体育大会15位
・　28年３月　全国高校選抜　松永直也　種目別平行棒６位

智頭農林高校で育てられた選手は、卒業後も「ふるさと選手」として国体成年男子チームの一員となり活躍を続けている。

西部地区では、体操競技専用体育館を有する米子松蔭高校が拠点となり、男女体操競技の普及・発展が推進されてきた。当時の米子松蔭高校理事長で鳥取県体操協会副会長の永島武（故人）と、同校教諭で体操部顧問、鳥取県体操協会理事長であった二岡博（現副会長）の働きにより、平成12（2000）年に同校体育館にピットが完成し、安全な環境での技能の習得が可能となった。西部地区の多くの選手に施設は開放され、地域全体の競技レベルの向上に大きく貢献した。

また県内で開催する体操競技の主会場となる米子産業体育館には、全国規模の大会も開催可能な器具が揃えられ、そのような恵まれた環境のもとで西部地区の多くの男女競技者が育成されてきた。指導者の人数や体操クラブの数も多く、各クラブで切磋琢磨し選手の育成に当たった。男子は、種目によっては智頭農林高校の選手に優るような選手もおり、国体選手選考で代表に選ばれる者も増えてきた。女子は県内選手のほとんどが西部地区出身であり、ジュニアから高校生まで競技を続ける選手も少なくない。しかし全国の壁は厚く、高校総体や国体では苦戦が続いている。

その中で平成28（2016）年度、国体中国ブロック予選で少年女子が４位と僅差の３位で本国体出場権を得ることができた。これは各高校の指導者、クラブの指導者等が垣根を越えて強化合宿に当たり、選手がベストの状態で大会に臨めたためであろう。こういった喜びを知る選手を増やしていくことも、全国上位の活躍をさせることと同様に重要なことである。

４　トランポリンの普及

2019年度から正式に国体種目となるトランポリン競技は、もともと鳥取県体操協会の中の一部門として存在していたが、平成19（2007）年度に独立し、鳥取県トランポリン協会として活動を行ってきた。活動は競技トランポリンをはじめ、レクリエーショントランポリン、障がい者支援トラン

ポリンなど多岐にわたり、会員数も多く抱える団体に成長した。そして公式には、平成31年度から再び鳥取県体操協会の一部門となり、同様の活動を継続・発展させていく予定である。

平成30（2018）年７月には新たな競技用トランポリン２基が導入され、米子市皆生市民プールに付設されている体育館を拠点に大会の開催や競技力向上に役立てられる。現在の競技レベルは全国に通用するものであり、国体での得点も期待されている。10年以上にわたり独立して運営を行ってきた組織力や実行力には大きな勢いが感じられ、今後も鳥取県トランポリン競技の普及・発展に貢献できるよう、協会一丸となって取り組みたいと考えている。

５　一般体操

平成30年３月で第13回を迎えた『一般体操フェスティバルin米子』は、平成17（2005）年３月に始まり、生涯スポーツの観点から幅広い人々が一堂に会し、健康づくりや運動に関心をもってもらうイベントとして定着した。（第８章第５節に詳細）

６　今後の方向

平成の30年間で社会情勢は目まぐるしく変化し、体操界の様相も一変した。今や会員登録はWeb上で行われ、慣れ親しんだ10点満点の採点は平成20（2008）年度からD･Eスコアに改められ、器具の弾力性や着地マットの安全性が高まったこともあり、技の発展も目覚ましいものがあった。選手の育成も学校部活動中心から社会体育中心に移行しつつあり、トップアスリート育成のために低年齢期からの指導に多くの競技が目を向け始めた。

時代のスピードに遅れまいと、鳥取県でもインターネットへの対応や審判員採点研修、指導者の自己研鑽、そして労を惜しまぬ選手育成が日々行われた。高額な器具の導入については県体育協会をはじめ諸機関の協力によって成し遂げられ、以下のような全国大会や世界レベルの選手の合宿、演技報告会の開催が鳥取県で実現された。

・平成７年８月　全国高校総体（米子産業体育館）
・平成13年８月　全国中学選手権（鳥取県民体育館）
・平成15年７月　新体操世界選手権日本代表選抜チーム合宿（鳥取県民体育館）
・平成16年７月　全日本学生体操競技選手権（米子産業体育館）
・平成20年11月　北京オリンピック帰国報告（演技）会（米子産業体育館）（第４章第４節参照）

スタッフは県内外の体操協会関係者、教育関係者、そして多くの県民が関わり、それぞれの大会･報告（演技）会を成功に導いた。

平成31年３月には県民体育館を会場に第34回全国高校新体操選抜大会が開催される。全国から集う選手が実力を充分に発揮できるよう鳥取県の力を結集して大会運営に当たりたい。

平成13（2001）年に新会長として野田修が就任した。野田会長は、平成20（2008）年度に日本体操協会功労賞、平成27（2015）年秋の叙勲では旭日小綬章を受章された。また現副会長で中国ブロック体操協会会長の二岡博は平成18（2006）年度に生涯スポーツ功労者として文部科学大臣表彰を受けた。新体操強化部長の山中幸も平成24（2012）年度に同じく生涯スポーツ功労者として表彰された。

３氏ともにこれまでに多くの功績を残されたが、現在も県体操協会における重要な役職を担っており、変化の激しい時代であればこそ頼れる「軸」となっている。今後も鳥取県体操界を牽引していただくとともに、次の世代も伝統を引き継ぐ気概をもって事に当たらなければならない。そして小さな県だからこそ、あらゆる立場の関係者が強い絆で結びつき、活気に満ちて温かみのある組織をつくり、体操競技･新体操･トランポリン･一般体操の競技者や愛好者を支えていきたい。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成５年～	12年	柳谷　中
13年～		野田　修

◇理事長

昭和45年～平成８年		森畑　務
平成９年～	20年	二岡　博
21年～	22年	清水　伸
23年～	27年	小野田博之
28年～		山本　雅丈

一般社団法人鳥取県バスケットボール協会

１　高校のバスケットボール大会と成績

高校では、平成７（1995）年に鳥取県でインターハイのバスケットボール競技開催が決まり、各高校が切磋琢磨する中で、男子は鳥取東高が県高校総体で平成元（1989）年～平成９（1997）年まで９連覇した。そして中国大会では、鳥取東高が毎年２月に開催される中国高校バスケットボール新人大会で平成５（1993）年に初優勝し、平成７年に優勝候補に勝利しベスト４に入るなど、結果も残している。全国大会では、鳥取東高が平成６（1994）年の全国高等学校バスケットボール選抜大会で初戦突破するなど十分戦うことのできるチームとなった。そして、平成７年鳥取インターハイは、鳥取東高と鳥取西高が出場した。

鳥取インターハイを含めた平成年代は、30回開催された県高校総体で、鳥取東高は、前述の９連覇を含め優勝20回・準優勝３回と強さを見せつけた。倉吉北高、倉吉西高、鳥取西高、鳥取工業高などの各高校は、打倒鳥取東高を目標に取り組んでいた時代と考えられる。

全国大会ではなかなか初戦に勝利ができないが､鳥取東高がインターハイで平成23（2011）年、同25（2013）年に初戦突破している。中国大会では、倉吉北高が平成15（2003）年に中国高校バスケットボール新人大会で準優勝、鳥取西高が平成19（2007）年に中国高校バスケットボール新人大会で優勝、鳥取東高が平成24（2012）年に中国高校バスケットボール新人大会で３位になるなど、県内高校のチーム力は着実に向上していると考える。今後は、全国大会で戦うことのできるチーム作りを目指してもらいたい。

女子は平成元年以降、平成７年鳥取インターハイまでは県高校総体でほぼ毎年、倉吉北高と倉吉東高が決勝戦を戦うなど２校が競い合い、次いで鳥取東高などが追いかける状態であった。そして平成７年の鳥取インターハイには、倉吉東高と倉吉北高が出場した。鳥取インターハイを含めた平成年代は､倉吉北高が県高校総体で､平成８(1996)年～平成25（2013）年まで18連覇するなど、優勝24回･準優勝３回と強さを見せつけた時代である。鳥取インターハイ後は、米子東高、米子西高、鳥取商業高、米子南高などが打倒倉吉北高を目標に取り組んでいた時代と考えられる。

全国大会では、倉吉北高が平成５（1993）年に全国高等学校バスケットボール選抜大会で県勢初の初戦突破をした。その後、平成15（2003）年、22（2010）年、23年、24年、28（2016）年に初戦を突破している。インターハイで､平成13（2001）年、14年と２年連続初戦突破し、平成14年は県勢初のベスト16となった｡その後も平成17(2005)年、21（2009）年､23（2011）年に初戦突破している。

２　中学校のバスケットボール大会と成績

中学校男子は、平成の時代に入り鳥取県中学校総合体育大会で、倉吉西中が平成９（1997）年～11（1999）年に３連覇､福生中が平成24（2012）年、

25年に連覇するだけで、ほぼ毎年優勝チームが変わる状況で、各中学校が競い合い、熾烈な戦いが繰り広げられた時期となった。

その中で、平成10（1998）年に倉吉西中が鳥取県中学校総合体育大会で２連覇し、その後の中国中学バスケットボール選手権でも勝ち上がり、全国大会の切符をつかむ快挙を達成した。鳥取県勢としては、予選リーグは勝ち上がるが、あと一歩決勝リーグに届かなかった全国の切符である。平成18（2006）年には、東山中の岡本飛竜（現スサノオマジック所属）がＪＯＭＯバスケットジュニア日本代表に選ばれ、全国で戦うことのできる選手も輩出している。

中学校女子は、昭和63（1988）年～平成４（1992）年が北溟中、平成５（1993）年～７（1995）年が東郷中、平成８（1996）年・９年が北条中、平成11（1999）年・12年が鹿野中と、優勝チームの連覇が続く時代となった、その後、平成13（2001）年からは連覇するチームはなくなり、各中学校が覇権を競い合う時代となっている。中国大会等では、平成16（2004）年に鹿野中が広島で開催された全関西中学生バスケットボール交歓会で準優勝している。

鳥取県中学校選抜チームは、毎年11月頃に結成され、２月の中国５県対抗ジュニアバスケットボール大会、３月に東京で開催される都道府県ジュニアバスケットボール大会に出場しているが、なかなか中国・全国で勝ち上がることは難しい。

しかしながら、平成13（2001）年に男子が２月の中国５県対抗で準優勝し、３月の都道府県ジュニアバスケットボール大会で予選リーグを突破し、決勝トーナメント１回戦を勝ち、準々決勝で優勝した福岡県に61対64の３点差で惜敗したものの、鳥取県勢初の５位入賞を果たした。女子は、平成16（2004）年に鹿野中を中心としたメンバーで構成し、都道府県ジュニアバスケットボール大会の予選リーグを突破している。

３　小学生のミニバスケットボール大会と成績

ミニバスケットボールでは、毎年11月下旬～12月上旬に鳥取県ミニバスケットボール交歓大会を開催し、各チームが全国大会を目指して日々練習に取り組んでいる。鳥取県チームは、なかなか全国大会で勝ち上がることができなかったが、平成19（2007）年に、男子の高城ナイツミニバスケットボールクラブが鳥取県勢で初めて予選リーグを突破し、３位入賞した。

その後、平成22（2010）年に若葉台ミニバスケットボールクラブ、平成24年に高城ナイツミニバスケットボールクラブが予選リーグを突破している。平成27（2015）年の大会では、中国ブロックに出場権１枠が与えられ、中国ミニバスケットボール交歓大会で若葉台ミニバスケットボールクラブが優勝し、全国大会の切符を手にした。そして、全国ミニバスケットボール交歓大会では、県大会で優勝した福米西ミニバスケットボールクラブと中国大会で優勝した若葉台ミニバスケットボールクラブの両チームとも予選リーグを突破し、３位入賞している。

女子も男子同様全国大会で勝ち上がることができなかったが、平成27年に成徳ミニバスケットボールクラブが予選リーグを突破し、３位入賞している。このことから、近年ミニバスケットボールの競技力は向上しているが、少子化の影響もあり、登録チーム数、競技者登録数が減少している。特に女子が顕著であり、登録チーム数では平成22年に52チームであったが、平成29（2017）年は、44チームとなり、競技者登録では、平成22（2010）年に821人いた競技者が平成29年には645人と176人も減少している。子どもたちがバスケットボールを始める年代であるため、バスケットボールの面白さや魅力を伝え、普及に力を入れ、チーム数、競技者登録数を増やす努力が必要となる。

４　成年のバスケットボール大会

成年では、鳥取東クラブが県を制覇し、中国大

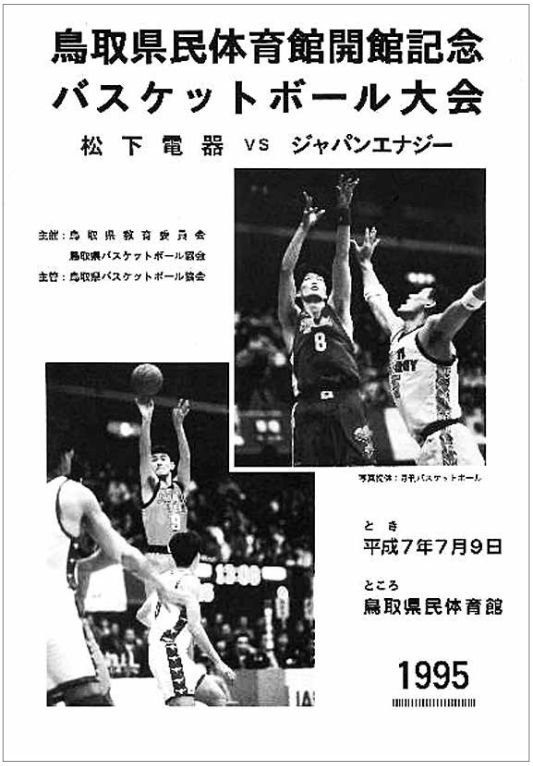
会に進出している。中国クラブバスケットボール大会で平成６（1994）年に初優勝、平成５年、７年にも準優勝して、全日本クラブバスケットボール選手権大会へ出場している。平成８（1996）年には、全日本総合バスケットボール選手権大会中国予選で鳥取県勢とし11年ぶりに優勝し、全国大会へ出場した。平成19（2007）年には、ＢＢＣＴが同大会に出場し、前回の優勝と同じく鳥取県勢11年ぶりに優勝し、全国大会に出場した。

５　国体での成績

国体には、県選抜チームを編成し中国ブロック国体突破を狙うが、突破ができない年が続く。その中で、成年男子が平成11（1999）年に中国ブロック国体を突破し、第54回国民体育大会熊本大会に出場した。少年男子は、平成22年に全県出場であった第65回国民体育大会千葉大会に出場し、２回戦を84対81で愛媛県に勝利し、続く３回戦は群馬県に77対76の１点差で辛勝し、準々決勝へコマを進めた。準々決勝の静岡県は61対87で負けはしたものの、全県が出場した大会での５位入賞の快挙となった。ここ近年は、なかなか中国ブロック国体で１勝することが難しい状況であるが、小学生年代からの一貫した強化策の効果が出始めて、全てのカテゴリーで他県と互角に勝負し、勝利することも多くなってきた。

６　施設・人材面での環境

バスケットを取り巻く環境として、平成７（1995）年鳥取インターハイに向けて、県民体育館が完成し、平成７年５月、こけら落としとして中国高校バスケットボール選手権大会を開催した。７月には、鳥取県民体育館開館記念バスケットボール大会として、男子トップリーグの松下電器対ジャパンエナジーの試合が行われた。前座試合として鳥取インターハイ出場チームの壮行試合も開催された。現在では、中国大会などの大規模大会でなくてはならない体育館となっている。



人材面では、平成11（1999）年に鳥取県で初めて宇田川貴生が国際審判員の資格を取得した。その後、平成26（2014）年、27年には、ＮＢＬ（ナショナル・バスケットボール・リーグ）で、２年連続してベスト・オブ・レフリーとして表彰され、平成28年に開幕したＢリーグの開幕戦で主審としてコートに立った。

７　鳥取県協会の法人化

設立時から任意団体として活動を行ってきた鳥取県バスケットボール協会であるが、平成26年11月に国際バスケットボール連盟から日本バスケットボール連盟が資格停止処分を受け、ガバナンスの再構築のため、都道府県協会の法人化の指示があった。鳥取県協会としても平成26年度よりガバナンス再構築、強化組織の強化のため、変革を進めていたが、法人化の準備も合わせて進め、平成28（2016）年４月１日に法人格を取得し、一般社団法人鳥取県バスケットボール協会として再出発することとなった。まだまだ未熟な法人ではあるが、バスケットボールの普及・発展に向けて活動し、法人として社会的責任を果たせるよう成長を

続けていく必要がある。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成３年～	16年	國富　三郎
17年～	20年	山根　成之
21年～		藤縄　喜和

◇理事長（平成28年より専務理事）

平成３年～	５年	清水　克哉
６年～	10年	荻原　　剛
11年～	16年	荒松　徳夫
17年～	24年	小倉　健一
25年～	28年	宇田川貴生
29年～		近藤　剛夫

鳥取県レスリング協会

「めざせ　2020　東京オリンピック出場」
グレコローマンスタイル男子82kg級の前田祐也選手(鳥取中央育英職員)
2018世界選手権代表プレーオフ大会で勝利を決める胴タックル

１　わかとり国体から鳥取インターハイへ

平成７年の鳥取インターハイのレスリング会場は、国体と同じく赤碕町農業者トレーニングセンターに決定し、赤碕高校西本広美教諭が赤碕町に出向して準備を進めた。

国体後３年間は、わかとり国体の選手の活躍もあり成年選手は国体等で好成績を収めたが、少年選手の低迷が続いた。平成３（1991）年、「わかとり戦士」だった井勢智則が日体大を経て倉吉工高教員になり、鳥取インターハイに向け、若い力を持って熱血指導のもと少年の強化が始動した。併せて選手育成のため、松田敏夫が平成３年に由良育英高校に赴任し、２年後レスリング部を発足させ、鳥取インターハイへ臨んだ。平成５（1993）年栃木インターハイ団体戦で倉吉工高がベスト16まで勝ち進み、翌年、富山インターハイでは斉藤和樹（由良育英高）が９年ぶりに３位入賞、愛知国体では、少年勢４名が入賞、中でも小竹宏明（倉吉工高）が２年生ながら３位入賞するなど、本番に向け順調に強化を進め鳥取インターハイを迎えた。団体戦では、倉吉工高、由良育英高とも３対４で惜敗したが、個人戦46kg級小竹宏明（倉吉工

鳥取インターハイ46kg級優勝の小竹宏明（倉吉工業高）

高）が１回戦からフォール、テクニカルフォール勝ちを続け快進撃、決勝戦でも圧倒的な強さで優勝し、関係者長年の夢であったインターハイチャンピオンが誕生し、当協会の歴史に新たな１ページを刻んだ。

２　鳥取インターハイ以降

平成８（1996）年に杉谷武志（由良育英高）が50kg級で３位、平成９年に岩佐康博、河本誠（倉由工高）が国体で３位と、個人では上位入賞者が出るものの、団体戦では全国の壁に阻まれ成績を残せなかった。

平成14（2002）年由良育英高に杉谷忍が監督として就任し、この壁を突破すべく「豊かな人間性を育むこと」「日々の生活の大切さ」「大きな目標も持つ」を重点に置き熱血指導を開始した。平成15年新会長に横山隆義が就任、さらに選手強化を進め、平成17（2005）年全国選抜大会で中国地区初となる念願の団体３位入賞を果たした。

次の年も全国選抜大会連続３位入賞、大阪インターハイでも３位入賞する快挙を成し遂げた。

また、この年の岡山国体では成年の山口竜志（拓大）がグレコローマンスタイル96kg級で優勝、杉谷武志（自衛隊体育学校）がフリースタイル60kg級で３位入賞、少年ではこのメンバーの活躍があり競技得点34.5を獲得し、わかとり国体以来の競技総合順位５位入賞を果たした。

そして、このメンバーが更なる高みをめざし大学へ進学し活躍した。特に岡太一選手は大学４冠を達成し、その後自衛隊体育学校へ進み全日本を制覇し、数多くの世界大会へ出場、日本を代表する選手となった。これを機に高校生の意識は高揚し、それまで大学進学者は毎年１人程度であったが、毎年複数が進学し、ふるさと選手として国体で活躍している。

全国高等学校選抜大会団体3位入賞の
鳥取中央育英高チーム（平成17年3月）

３　少年レスリングの普及

全国少年レスリング連盟登録チームは300を超え、全国の子どもたちが世界で活躍することを夢見てレスリングに取り組んでいる。特に女子では、吉田沙織、伊調馨たちが３歳ごろからレスリングを始め、オリンピックを連覇する偉業を達成している。

本県も昭和55年赤碕町レスリング教室、61年米子産業体育館レスリング教室を開校し普及に努めたが、練習環境、指導者の不足などから継続できなかったものの、平成11（1999）年、「ENJOY and NEVER GIVE　UP」を掲げ倉吉レスリングクラブが発足し、平成15（2003）年全国大会へ初出場して準優勝者１名、３位２名の好成績を挙げ、以降毎年上位入賞者を輩出している。平成21（2009）年米子産業体育館レスリング教室を再開し、少しずつではあるが小学生の競技人口の拡大を図っている。このような地域に根ざしたスポーツ振興と青少年の健全育成の地道な努力が認めら

平成23、24年全国少年少女レスリング選手権大会連覇の中江勇太選手（倉吉クラブ）

れ、平成14（2002）年度に鳥取県教育委員会から「社会体育功労団体」の表彰を受け、さらに平成16年度に文部科学大臣から「生涯スポーツ優良団体」として表彰された。

４　今後の課題

全国的な少子化の波は、子どもたちの部活動離れを加速的に進めている。指導者は毎年部員不足に悩み、選手獲得で苦労している。現在高校部活動の実施校は２校（倉吉総合産業高、鳥取中央育英高）にまで減ったうえ、両校とも団体戦のフルメンバーが組めない状態まで部員が減少している。少年レスリングの普及は徐々に進んでいるものの、中学校に部活動が無いため中学期の継続は難しく苦慮している。

今後、県教育委員会、中学校の協力を得ながら小中高一貫した指導体制を確立し選手を育てていかなければ、全国との力の差はますます開いてしまうだろう。また、高校の指導者確保が非常に困難で、鳥取県の教員採用試験の合格はかなり難しいうえ、大学に進学しても、練習時間を確保するためには、教員免許取得を断念しなければならない状況にあるようだ。進学の際、「指導者になりたい」という気持ちを強く抱かせるような指導をしなければならない。

また、個性の尊重、価値観の多様化という中で、体型だけはたくましいが、自己中心的で忍耐力が乏しく、線の細い子どもたちが増えている現在である。レスリングという２千年以上の長い歴史を持つ格闘技を通し､心身を鍛えることはもちろん、相手と組み合っていく中で、お互いに相手を尊重する心を養い、苦しい練習を乗り越えることで、忍耐力を身に着け、目的を定めそれを達成したときの充実感を味あわせてやることが大切なことであり、それを成しとげることが重要である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年～平成14年４月	花本　美雄
15年３月～	横山　隆義

◇理事長

昭和52年～平成22年３月	松田　敏夫
22年４月～	濱田　和久

【 大 会 成 績 】

主な国際大会　(種別Fはフリースタイル、Gはグレコローマン・スタイル)

西暦	大会名	団体・選手名	種別	成績
1969	世界選手権大会	松田　敏夫（日体大）	G48kg級	出場
1980	カナダジュニア	森脇　郁巳（徳山大）	F74kg級	２位
1985	アジアジュニア選手権	音田　佳崇（倉吉工高）	G75g級	３位
		林原　祐二（赤碕高）	G87kg級	３位
1985	コンコード国際	近藤　　務（陸自米子）	G100 kg級	４位

1990	コンコード国際	井勢　智則（県武道館）	G82kg級	出場
2006	アジアカデット選手権	岩間　奨平（中央育英高）	G85kg級	５位
	世界学生選手権	山口　竜志（拓殖大）	G96kg級	11位
2010	世界学生選手権	岡　　太一（拓殖大）	G84kg級	５位
2011	世界カデット選手権	前田　祐也（倉総産高）	G69kg級	17位
2012	アジアジュニア選手権	安田　　翔（国士大）	F96kg級	５位
2014	世界ジュニア選手権	前田　祐也（拓殖大）	G84kg級	15位
	世界学生選手権	前田　祐也（拓殖大）	G80kg級	９位
2015	世界選手権	前田　祐也（拓殖大）	G80kg級	17位
	アジアカデット選手権	三浦　紘明（倉総産高）	G46kg級	５位
2016	アジア選手権	前田　祐也（拓殖大）	G80kg級	17位
2017	U-23世界選手権	前田　祐也（中育英高職）	G80kg級	18位
2017	アジア選手権	前田　祐也（中育英高職）	G80kg級	７位
2018	アジア選手権	前田　祐也（中育英高職）	G80kg級	５位

成年の主な国内大会

西暦	大会名	団体・選手名	種別	成績
1970	全日本選手権	松田　敏夫（日体大）	G48kg級	優勝
1985	全日本選手権	水橋　　徹（青谷高教）	F90 kg級	２位
	全日本選手権	秋山　安成（陸自米子）	G130kg級	２位
1987	全日本選手権	井勢　智則（日体大）	G82kg級	３位
2002	全日本選手権	塚本　真紀（中京女大）	F67kg級	３位
2003	全日本選手権	塚本　真紀（中京女大）	F67kg級	２位
2004	全日本選手権	塚本　真紀（中京女大）	F67kg級	２位
2005	全日本選手権	塚本　真紀（倉吉体文）	F63kg級	２位
	全日本選手権	山口　竜志（拓殖大）	G96kg級	３位
2006	全日本選手権	山口　竜志（拓殖大）	G96kg級	２位
	全日本選手権	塚本　真紀（倉吉体文）	F63kg級	３位
	全日本選抜選手権	山口　竜志（拓殖大）	G96kg級	優勝
2010	全日本選手権	岡　　太一（拓殖大）	G84kg級	優勝
2015	全日本選手権	前田　祐也（拓殖大）	G80kg級	優勝
	全日本選抜選手権	前田　祐也（拓殖大）	G80kg級	優勝
2016	全日本選手権	前田　祐也（県武道館）	G80kg級	優勝
	全日本選抜選手権	前田　祐也（県武道館）	G80kg級	優勝
2017	全日本選手権	前田　祐也（中育英高職）	G82kg級	優勝
	全日本選抜選手権	前田　祐也（中育英高職）	G80kg級	優勝

主な高校生大会　上位入賞者

西暦	大会名	団体・選手名	種別	成績
1985	全国高校選抜大会	山根　　勝（鳥取工高）	F65kg級	３位
	インターハイ	山根　　勝（鳥取工高）	F65kg級	３位
1994	インターハイ	斉藤　和樹（由良育英高）	F54kg級	３位
1995	全国高校選抜大会	小竹　宏明（倉吉工高）	F50kg級	３位
	JOCジュニアオリンピック	小竹　宏明（倉吉工高）	F46kg級	２位
	インターハイ	小竹　宏明（倉吉工高）	F46kg級	優勝
1996	全国高校選抜大会	杉谷　武志（由良育英高）	F50kg級	３位
2000	全国高校グレコ選手権	矢谷　賢司（倉吉工高）	G63kg級	３位
2001	全国高校選抜大会	赤松　祐樹（赤碕高）	F50kg級	３位
2005	全国高校選抜大会	鳥取中央育英高	団体戦	３位
2006	全国高校選抜大会	鳥取中央育英高	団体戦	３位
		岩間　奨平（中央育英高）	F84kg級	３位
	JOCジュニアオリンピック	岩間　奨平（中央育英高）	G84kg級	優勝
	インターハイ	鳥取中央育英高	団体戦	３位
2007	インターハイ	徳山　利範（中央育英高）	F74kg級	３位
2008	全国高校選抜大会	遠藤　翔太（中央育英高）	F50kg級	３位
	インターハイ	遠藤　翔太（中央育英高）	F50kg級	３位

全国少年少女レスリング選手権大会　上位入賞者

西暦	団体・選手名	種別	成績	西暦	団体・選手名	種別	成績
1991	中橋　考志（赤碕ク）	３年40kg	２位	2012	中江　勇太（倉吉ク）	４年42kg	優勝
	浅野　雅和（赤碕ク）	４年34kg	３位		中本　翔琉（倉吉ク）	３年28kg	３位
2001	飯塚　　愛（米子ク）	３年女子24kg	優勝		北中　洸介（倉吉ク）	５年45kg	２位
2002	飯塚　　愛（米子ク）	４年女子26kg	２位		井勢　珠維（倉吉ク）	６年42kg	２位
	遠藤　翔太（米子ク）	６年39kg	３位		木井たから（倉吉ク）	６年女子36kg	３位
2003	飯塚　　愛（米子ク）	５年女子28kg	優勝	2013	渡部　琉海（倉吉ク）	４年30kg	３位
2007	徳井　綾香（倉吉ク）	６年女子40kg	３位	2014	中江　勇太（倉吉ク）	６年55kg	２位
2008	竹歳　莉子（倉吉ク）	３年女子33kg	３位		木井たから（倉吉ク）	３年女子26kg	３位
2009	木井たから（倉吉ク）	３年女子28kg	３位	2015	渡部　斗海（倉吉ク）	１年28kg	優勝
	竹歳　莉子（倉吉ク）	４年女子30kg	２位	2016	渡部　斗海（倉吉ク）	２年30kg	３位
2010	井勢　珠維（倉吉ク）	４年36kg	３位	2017	渡部　斗海（倉吉ク）	３年36kg	３位
2011	中江　勇太（倉吉ク）	３年36kg	優勝				

鳥取県セーリング連盟

１　団体の名称・目的の変更

（財）日本ヨット協会と（社）日本帆走協会は新組織の（財）日本セーリング連盟（JSAF）を発足させ、平成15（2003）年３月31日をもって統合に係る全ての作業を完了している。本県も「ヨット連盟」から「セーリング連盟」に名称の変更を平成13（2001）年に行った。

２　境港市新屋地区海岸の汀線の前進

昭和59（1984）年開所した境港公共マリーナに隣接する南側の新屋浜汀線は公共マリーナ南側スロープの付近にあり、マリーナ出入り口航路の水深もマイナス３ｍ以上で懐も広く、特有の東寄りの風に対しても波浪の崩れは少なく、安全に帆走できる状況であった。しかし、漂砂の堆積スピードは著しく、５年後にはビーチバレーに適したエリアが出現し、航路の安全水深確保が困難になる状況となった。

一方、夜見・富益地区では汀線近傍では浸食が激化し、深みが岸側へと接近する状況となっていたことから、国土交通省が皆生海岸保全施設整備事業として平成７年からサンドリサイクルによる保全事業を実施し、境港管理組合による浚渫工事も併せて航路の確保につなげることになった。

公共マリーナ開設から34年になる現在、漂砂の堆積は竹内埋め立て地に対し留まることはなく広く漂着し、波浪の破砕ポイントがマリーナ出入口の沖合付近となり、出入港が非常に危険な状態となった。風速が強くなると出入口は、波浪の状況が悪くセーリングのみならず、機走であっても出入港は難しい。現在もサンドリサイクル事業は継続中であり、航路浚渫で航路の水深確保は可能で

あろうが、漂砂に対する根本的な措置がなされなければ公共マリーナとして近い将来機能しなくなることが予想される。

３　新たな時代に舵を取ったセーリング連盟

平成20（2008）年度から強化部長に平岡丈夫が再任され、アドバイザーコーチに中村健一（JSAFナショナルコーチ西日本担当）を迎え、新たな強化体制が始まった。中村コーチの紹介で平成24（2012）年４月、鳥取県体育協会はセーリング指導員として山口国体470級の選手として活躍した阿部幸久（山口県光市出身）の採用を決定した。勤務は米子産業体育館とし境港公共マリーナでセーリング指導に当たることになった。

平成28年に強化部長を岩永（坂本）奈穂に、平岡丈夫は副理事長に就任した。平成27年度決算に係る財政的援助団体等事務監査を平成28年９月29日に受けたが、平成29年理事会でこの県監査委員の指摘事項を解消するため、連盟の規約を改訂するとともに組織図を現状に合わせて刷新すること、さらに財産目録等の整備や会計の明朗化などに努めることを決議した。

４　境港公共マリーナ五輪強化拠点

平成25（2013）年10月７日付で、(財）日本セーリング連盟は、日本オリンピック委員会（JOC）競技別強化拠点１か所をJOCに対して推薦することとし、公募する旨連絡があった。これを受けて県連盟は鳥取県・県体育協会・県教育委員会はじめ各関係先と協議し、11月15日付けでJOC競技別強化センター認定申請を送付した。さらに平井伸治知事が日本セーリング連盟河野博文会長を訪問し、認定承認をお願いした。

そして、平成26年３月24日に、JOC認定通知を受理した。４月26日に、JOCから届いた認定看板の除幕式が行われ、マリーナの正面玄関に看板を設置した。除幕式では、平井伸治知事が「ハード、ソフト両面の充実を図り、境港から五輪選手を輩出したい」、県セーリング連盟の安田優子会長が「看板の重みをしっかり受け止め、新たな第一歩を踏み出したい」とあいさつした。日本セーリング連盟の前田彰一専務理事、境港の中村勝治市長が祝辞を述べ、県セーリング連盟を代表して米子高専３年の平岡哲磨選手が「美保湾でしっかり練習し、全国大会で優勝したい」と決意表明した。

５　境港公共マリーナに新艇庫整備

平成27（2015）年１月、境港管理組合は（JOC）競技別強化拠点に認定された境港公共マリーナにヨットや大会運営用の機材などを保管する艇庫を整備することにした。セーリング競技強化の国内拠点として施設環境の充実を図り、トップチームの強化合宿誘致などにつなげる計画であった。

10月４日に新艇庫の完成式典があった。艇庫内であった完成式では、平井伸治知事が「オリンピックを控え、全国の選手に調整の場として活用してほしい」とあいさつ。県セーリング連盟安田優子会長が、「オリンピック選手を輩出する目標に向かって頑張りたい」と述べ、関係者がテープカットした。

６　JOC競技別強化拠点化に必要な人材の確保

JOC競技別強化拠点の認定が決まったことによって、目的に沿った活動ができるよう人材の確保が喫緊の課題となった。そこで、オリンピック出場を目指しレーザー級で活動をしている瀬川和正（龍谷大学卒）を平成27年４月、セーリング指導員として採用することになった。瀬川は平成26年10月に境港で開催された全日本レーザー級ヨット選手権大会で４位に入賞するなど、リオ五輪に向けて活動中の現役選手で、鳥取県から東京オリンピックを目指すことになった。平成28年岩手国体で２位、全日本選手権（江の島）優勝、平成29年愛媛国体で優勝、全日本選手権（山口県光市）では日本人１位の成績で、ナショナルチームとしてクロアチアのメンバーと共に海外遠征を中心に

レーザー級で活躍する瀬川和正

現在活動を続けている。

平成29（2017）年４月には、成年女子選手として山本佑莉（日本経済大学卒）・木村紗耶佳（明海大学卒）をセーリング指導員として採用することになった。二人はそれぞれ女子インカレで優秀な成績を残しており、オリンピックも目標に当面、国体成年女SS級選手・指導者として活躍が期待される。県地域振興部スポーツ課に籍を置いて日々精進している。阿部幸久コーチと共に優秀な選手が常時在籍することで強化拠点施設として利用促進が図られることになった。

７　オリンピック特別強化合宿の利用（トップアスリート合宿誘致プロジェクト事業）

トップアスリートの合宿誘致等がしやすくなり、平成27年・平成28年・平成29年にはレーザー級ユース世界選手権直前合宿（JSAFオリンピック特別強化合宿支援事業）が実施された。指導・支援艇及び練習艇は拠点施設に整備した艇をチャーターして事業が行われた。

８「さかい」に世界を

鳥取県は、2019年に日本で開催されるセーリング競技の「レーザー・レーザーラジアル世界選手権大会」について、境港公共マリーナへの誘致に乗り出した。平成28（2016）年２月28日、米子市内で関係者による誘致推進会議が開かれ、今後の取り組みを協議した。東京五輪を前年に控えた重要な大会で、東京都若洲も名乗りを上げていた。３月上旬に実施計画申請書（案）を関係団体に提出し、誘致に向けて要望活動を行うことを確認した。11月19日にイギリスのロンドンで開かれた国際レーザークラス協会の会合で「レーザー級世界選手権大会」の開催地が境港市に決まった。

2019年レーザー級世界選手権会場に決まり喜ぶ関係者

開催をめぐっては、セーリング連盟や県、境港市などが大会誘致に取り組んで来たのに対し、中米のバルバドスも開催に意欲をみせていた。28年11月21日、境港公共マリーナの新艇庫内で開催地決定の祝賀会が行われた。大会誘致に尽力した県、境港市、競技団体、競技者らの笑顔であふれ、マリーナや美保湾をマリンスポーツの聖地として世界にアピールするチャンスの到来に沸いた。

平成29年４月、県地域振興部スポーツ課東京オリンピック・パラリンピック・関西WMG担当、コーディネーターとして磯部君江が採用された。

９　レーザー級世界選手権大会の実行委員会設立総会

平成29年７月11日、大会実行委員会設立総会が「夢みなとタワー」であり、同年度の事業計画を決めた。

国際大会の成功に向け、総合企画、競技運営、選手の宿泊、広報活動などに取り組み、地域の盛り上げを図る。総会には、行政や競技、経済の各団体などの代表者ら約30人が出席した。委員長に就任した県セーリング連盟の安田優子会長は「浜らしい豪快で心温まるもてなしで世界にアピールしたい」と話し、協力を呼び掛けた。９月～10月に、大会ロゴマークの募集を行った。12月22日、「実行委員会連絡調整会」が境港市中央公民館会議室であり、境港公共マリーナへの事務局移転や平成30年度事業計画案を確認した。スポーツ課に置いていた事務局は、平成30年４月から公共マリーナの管理棟３階に事務局機能を移し４人体制を敷くことになった。この日は、大会ロゴマークの審査委員会もあり、全国から応募のあった301点から候補を選定した後、類似作品の有無を調査した上で、平成30年２月24日ロゴマーク発表・表彰式を境港市民会館大会議室で開催した。

採択作品作成者は丸田　杏さん（大阪市在住）である。セーリング（レーザー級の帆）・大山・美保湾の海を力強く、スピード感あふれる墨絵（日本の文化をアピール）で表現し、赤い四角の「鳥取境港」は、落款印をイメージしているという。

10　クロアチアアチームの合宿誘致

平成29年10月23日、2017年レーザー級世界選手権大会（クロアチア）で優勝したクロアチアアチームの選手と監督が境港市を訪れ、2019年の同大会の会場となる美保湾や公共マリーナを視察した。海上に出ることはできなかったが、管理棟の屋上から海上を眺め、レースエリアを関係者に尋ねたり写真を撮ったりして、風や波の自然環境を確認した。翌日には夢みなとタワーで平井伸治知事と面談し、2020東京五輪の事前合宿を市内で行うことを示唆した。「境港でのトレーニングを考えてみたい。すぐまたお会いしたい」と実現へ意欲を示した。

合宿について語ったのはコーチのヨゾ・ヤケリッチ氏（42）である。平井知事が五輪の事前合宿を支援する考えを伝えると、ヤケリッチコーチは練習環境を高く評価し、「世界選手権大会はもちろん、五輪に向けても考えてみたい」と回答したのだ。平成30年に開催される全日本レーザー級選手権大会に向けた合宿にも含みを持たせた。

そして、平成30年１月11日、クロアチアアチームが東京五輪などに向けて境港市で同年から３年にわたる境港市キャンプが決まった。キャンプ誘致を進めていた関係者が会見し、キャンプ地の決定を喜んだ。合同チームは、世界ランキング１位のパブロス･コンティダス選手（キプロス）や県セーリング連盟所属の瀬川和正選手ら４カ国計６人の選手が所属している。

会見には、県セーリング連盟の安田優子会長や平井伸治知事、松本敏浩境港市教育長、駐日クロアチア大使館の関係者が出席し、安田会長はキャンプ地決定の経緯を説明して、４月にも組織を立ち上げて受け入れ準備に取り組むと報告した。

また、クロアチアにいるヨゾ・ヤケリッチコーチが、インターネット電話「スカイプ」を通じて参加し、キャンプ地となる境港公共マリーナや美保湾を視察した際の感想を踏まえ、「充実した施設や美保湾の風や波の状況が良い。東京五輪に向けていい準備ができる」と期待した。平井知事は「山陰の良さを満喫しながら、メダルを目指してほしい」と呼び掛けた。県はチームの滞在をサポートすることになった。

11　JKモルナルインターナショナルセーリングレーザー級合同チームと「境港合宿包括協定書締結」

平成30年10月17日、夢みなとタワー１階ホールにおいて協定書締結式（協定書署名）が行われた。署名者は鳥取県知事　平井伸治、境港市長　中村

勝治、県セーリング連盟会長　安田優子、コーチ　ヨゾ・ヤケリッチ、立会人、駐日クロアチア共和国大使　ドラジェン・フラスティッチ、内閣官房オリンピック推進本部事務局参事官　荒井陽一の各氏であった。

12　国体成績と艇種

長い間国体艇種であったスナイプ級が、平成12年富山国体成年女子を最後に廃止となった。スナイプ級はお家芸として、わかとり国体以降も県勢を牽引し成績を残してきた種目であった。ダブルハンド艇の入賞は、平成12年富山国体少年女子FJ級準優勝以降、平成20年大分国体少年女子SS級６位入賞まで途絶えた。平成６年に成年男子に導入されたウインドサーフィン級では、高下翼選手（関東学院大）が宮城・高知・静岡国体と活躍してくれた。シングルハンド艇は平成５年東四国国体から平成19年秋田国体まで入賞者があり、競技得点を稼いだ。平成12年富山国体少年女子シーホッパーSR級で６位入賞した濱口睦美選手（鳥取西高１年）が３年生のとき平成14年高知国体で優勝し、早稲田大学進学後も成年として静岡・岡山・兵庫国体と入賞して戦力低迷期を支えてくれた。平成21年新潟国体から同22年千葉国体の間不振であったチームが、平成23年山口国体でシングルハンダー級成年男子八木谷充選手の７位入賞で復活の兆しが見え始め、平成24年岐阜国体で少年女子SS級が優勝、阿部幸久コーチ専従の成果が現れた。平成25年東京国体では成年男子シングルハンダー級８位、成年女子SS級８位であった。同26年長崎国体では成年女子SS級が準優勝し、少年女子シーホッパーSR級６位であった。平成27年和歌山国体では成年女子SS級が４位、成年男子レーザー級４位、少年男子420級８位、少年女子420級８位、少年男子レーザーラジアル級７位で天皇杯８位・皇后杯７位入賞した。平成28年岩手国体では成年女子SS級が８位、成年男子レーザー級２位、少年女子420級２位で皇后杯３位入賞した。翌29年愛媛国体では成年男子レーザー級で優勝し、成年女子SS級で４位、少年女子420級６位で、天皇杯８位・皇后杯４位に入賞した。平成30年福井国体では、成年女子SS級２位、成年男子レーザー級優勝で天皇杯８位・皇后杯６位に入賞した。

13　平成7年全国高校総体ヨット競技会

平成７（1995）年７月31日から８月６日の日程で、全国高校総体（鳥取インターハイ）ヨット競技が県西部で開催された。わかとり国体10周年記念の年に開催されるこの大会を新たな躍進の機会と位置付け、全国から集う高校生が十二分に力を発揮できるようサポートすることを基本方針に準備・運営に努めた。参加艇数は男子FJ級64艇・女子FJ級45艇、期間中は気象・海象にも恵まれ、予定レース７レース全てを成立させることができた。これは、毎年５月に開催している「全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）」で培ったレース運営ノウハウが役立った。また、救助・指導・競技運営艇として「わかとりⅡ世」が関係者のご尽力で竣工。合わせて救助・指導艇総体１号２号（RVゴムボート）も配備することができた。

14　美保湾におけるセーリング活動

平成20（2008）年、鳥取外洋ヨット協会はNPO法人美保湾ヨットクラブ（MBYC）と名称変更し、クラブの活動目標を明確にした。レース事業、一般普及事業、国際交流事業などを積極的に推進していくことを定めた。

レース事業では隠岐レース、オンザウインドポイントレース、カノン杯レース、舩澤杯レース、

美保湾大漁カップなど年間を通じて開催してきた。平成23（2011）年には日本海文化交流事業で北前船「みちのく丸」の寄港･展帆帆走に協力し、皆生トライアスロン、シーツーサミット等の支援や、さらに市民を対象にした体験クルーズなども積極的に計画・実施している。

ディンギーでは、国体以降レーザー境港フリートが中心になり、ヨット教室を開催してセーリングを互いに楽しむ姿が見受けられたが、近年活動が低迷している。

ウインドサーフィンは、スカラップ鳥取フリートが境港市麦垣町地先浜にベースを置いて、毎年「スカラップ杯」を主催するなど、全国でも多数艇の参加で知られていた。ただ近年は活動が低迷している。美保湾を疾走するウインドの姿が早く見られるよう関係者の努力に期待したい。

15　大学・高校ヨット部の活動

鳥取市の湖山池を活動拠点とする鳥取大学ヨット部の活動に期待したい。米子キャンパス医学部のヨット部は、平成19年その長い歴史の幕を閉じた。西部地区のリーダーとして牽引してきたので廃部は誠に残念である。高校ヨット部は、境高・境港総合高・米子高専の３校が公共マリーナで切磋琢磨しながら活動している。近年全国高校総体等での成績は芳しくないが、国体で成績を残せるようになってきている。指導者のマリーナ配置で指導体制は整いつつある。

16　各種表彰

【平成28年度鳥取県栄光のチャレンジャー賞】

庄司信吉さんが太平洋往復航海を達成（MBYC所属）したことで､平井伸治知事から授与された。自ら大改造したヨット「KAMOMEⅤ」で145日かけて単独で太平洋往復航海（境港―サンフランシスコ）に成功した。

【文部科学大臣表彰受賞（生涯スポーツ功労者)】

平成24年度　副会長　善波周

平成28年度　副理事　長平岡丈夫

平成30年度　鳥取県セーリング連盟（優良団体）

【日本セーリング連盟優秀指導者賞受賞（ジュニア育成)】

平成26年度　元理事　内藤武夫

【平成30年鳥取県教育委員会表彰（教育功労団体)】

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和59年～平成14年　長谷川和夫

15年～　安田　優子

◇理事長

平成５年～　19年　善波　周

20年～　富田　博司

国体成績（平成5年～ 30年）

年度	開催地	種目	順位	選手名
6	愛知	成男S級	2	坪倉靖志・黒柳和（ウルマン）
8	広島	成女S級	3	福田弘美・木村理恵組
9	大阪	成男S級	2	坪倉靖志・松本充（コーワ建設・鳥取三洋）
11	熊本	少女SR級	3	北國亜矢（境高）
12	富山	成女SR級 少女FJ級	2 2	作野英子（済生会境港総合病院） 原田弥沙・木下千史（境高）
14	高知	少女SR級	1	浜口睦美（鳥西高）
15	静岡	成男W級	2	高下翼（連盟）
18	兵庫	成女SR級	3	浜口睦美（早稲田大）

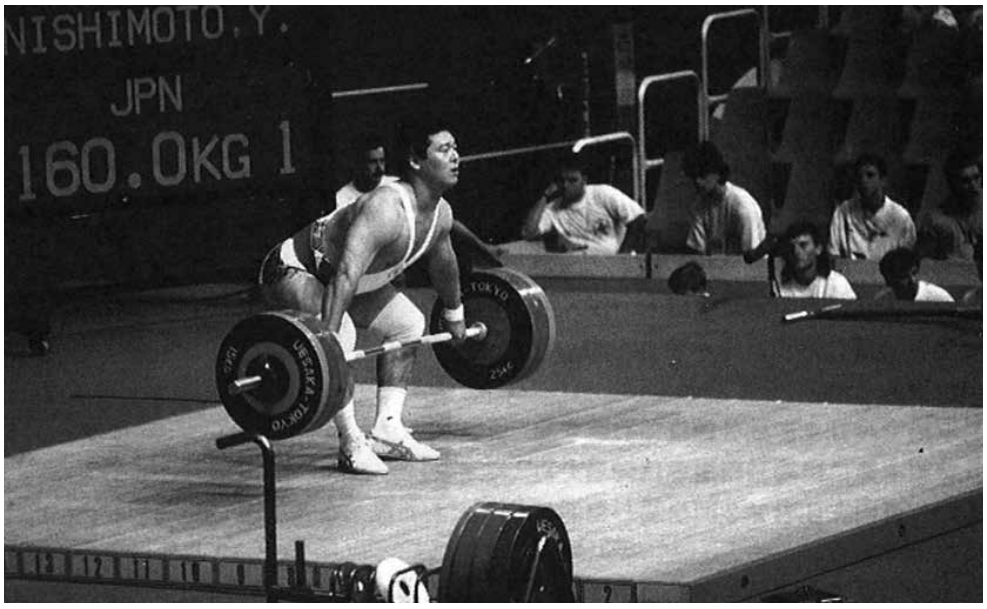
24	岐阜	少女SS級	1	平岡沙希・西尾知美（境高・米子高専）
26	長崎	成女SS級	2	平岡沙希・西尾知美（日本経済大・米子高専）
28	岩手	成男L級 少女420級	2 2	瀬川和正（米子産業体育館） 池渕砂紀・福田ゆい（境高）
29	愛媛	成男L級	1	産業瀬川和正（米子産業体育館）
30	福井	成男L級 成女SS級	1 2	瀬川和正（米子産業体育館） 山本佑利・木村沙耶佳（県地域振興部）

全国・中国大会開催（平成５年～ 30年）

開催年月	大会名	会場地
５年５月	第９回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
６年５月	第10回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
７年５月 ７年５月 ７年７月 ７年８月	第11回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 全日本オープン少年少女ヨット選手権大会 全日本レーザー級レディースヨット選手権大会 全国高等学校総合体育大会ヨット競技	境港市 米子市錦海 境港市 境港市
８年５月 ８年５月 ８年８月 ８年10月	第12回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 中国レーザー級ヨット選手権大会 中国スナイプ級・470級ヨット選手権大会 第23回全日本レーザー級ヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市 境港市
９年５月 ９年８月	第13回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 中国スナイプ級・470級ヨット選手権大会	境港市 境港市
10年５月 10年８月	第14回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第14回全日本OP級チームレース選手権大会	境港市 米子市錦海
11年５月 11年６月	第15回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第39回中国高校ヨット選手権大会	境港市 境港市
12年５月 12年８月	第16回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第25回全国少年少女ヨット大会	境港市 米子市錦海
13年５月 13年６月 13年８月 13年11月	第17回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 全日本レーザー級レディースヨット選手権大会 中国スナイプ・470級ヨット選手権大会 第54回全日本スナイプ級ヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市 境港市
14年５月 14年６月 14年10月	第18回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 西日本シーホッパー級ヨット選手権大会 中国レーザー級ヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市
15年４月 15年５月 15年６月	全日本レーザーラジアル級ヨット選手権大会 第19回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第43回中国高校ヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市
16年５月	第20回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
17年５月 17年７月	第21回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 全日本レーザー級ラジアルヨット選手権大会	境港市 境港市
18年５月	第22回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
19年５月 19年６月	第23回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第47回中国高校ヨット選手権大会	境港市 境港市
20年５月 20年６月	第24回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 西日本シーホッパー級ヨット選手権大会	境港市 境港市
21年５月	第25回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市

22年５月	第26回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
23年５月 23年６月 23年11月	第27回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第51回中国高校ヨット選手権大会 全日本レーザー級ラジアルヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市
24年５月 24年11月	第28回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第65回全日本スナイプ級ヨット選手権大会	境港市 境港市
25年５月	第29回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
26年５月 26年10月	第30回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第41回全日本レーザー級スタンダード・ラジアル・4．7選手権大会	境港市 境港市
27年５月 27年６月 27年７月 27年11月	第31回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 第55回中国高校ヨット選手権大会 中国スナイプ・470級ヨット選手権大会 第44回全日本470級ヨット選手権、第29回女子選手権大会	境港市 境港市 境港市 境港市
28年５月	第32回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会）	境港市
29年５月 29年６月 29年８月 29年９月	第33回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 中国スナイプ・470級ヨット選手権大会 第30回全日本420級ヨット選手権大会兼女子選手権大会 中国レーザー級ヨット選手権大会	境港市 境港市 境港市 境港市
30年５月 30年11月	第34回全国高校選抜ヨット選手権大会（鳥取大会） 全日本レーザー級ヨット選手権大会	境港市 境港市

鳥取県ウエイトリフティング協会



バルセロナオリンピック8位入賞の西本宣充

１　全国高校総体開催とオリンピック出場

1993（平成５）年、第65回世界選手権大会（オーストラリア）に西本宣充が99kg級に出場し８位となり、渡辺悦郎が全日本マスターズ選手権大会91kg級で優勝した。翌年1994（平成６）年には、後に全国大会で活躍することとなる岡山県出身の小

山隆次を迎え、成年選手強化が図られた。

同年、日本ＷＬ協会の三宅義行氏を迎え中国ブロック審判講習会を開催し、審判技術の向上を目指すとともに、松本和徳が鳥取西工業高校から開催地の岩美町実行委員会へ出向するなど、1995（平成７）年の全国高校総体に向けての準備を整えた。

わかとり国体開催10年目を記念して開催された全国高校総体（鳥取インターハイ）のスローガンは、「集え若人　はばたけ未来へ」であったが、全国から137校371名のＷＬ選手が集ったのである。本県から入江達雄総監督をはじめ上原正樹コーチ、鳥取西工業が監督・西本宣充、選手・明石圭市、谷口浩二。岩美高が監督・三好徹、選手・山内健太郎、山崎聡。米子高が監督・西村寿之、選手・安達一博が出場した。入賞には至らなかったが、選手は全力を尽くした。大会は、各方面から指導、協力をいただき、成功裏に終えることができた。

西本宣充は、この年の第67回世界選手権大会（中国）に99kg級で出場し15位となった。平成8年には、西本宣充が第28回アジア選手権大会（千葉）へ出場し、99kg級においてＳ（スナッチ）167.5kg、Ｃ＆Ｊ（クリン＆ジャーク）210kg、Ｔ（トータル）377.5kgのいずれも日本新記録で４位入賞した。これをもって日本ＷＬ協会は、西本を1996（平成８）年のアトランタオリンピック日本代表選手に決定したのである。同選手は、２大会連続の出場という栄誉を果たした。アトランタオリンピックでは、連続入賞とはいかなかったが、トータル355kg 15位と健闘した。西本宣充は、本協会の歴史の中で最も傑出した選手であり、優れた業績を残したのである。

２　選手の世代交代

平成９年（1997）、中嶋政幸が国内１級公認審判資格を取得した。県内では初めてとなり、審判のレベル向上に努めた。その後、平成12年には、国際２級公認審判資格を取得し、さらに2002（平成14）年には国際１級公認審判の資格を取得し、鳥取県はもとより中国地方に欠かせない存在となった。

平成７年の全国高校総体終了後、それまで、ＷＬ指導の第一線で活躍していた入江達雄、前川章三らが指導現場から遠ざかることを余儀なくされ、指導者は、西本宣充と升田友也へと変わっていった。

1998（平成10）年から1999（平成11）年には、岩美高校で前川章三が鳥取県で初めて女子選手を育成したが、前川の異動で升田友也がそのあとを引き継ぎ指導をはじめた。そして平成12年、駒井裕美（岩美高）が53kg級で、中国選抜大会で優勝し、鳥取県で初めて全国女子選手権大会へ出場したのである。翌年、同校の田中麻紀子が63kg級で出場を果たした。西本宣充は、鳥取西工業高校で教鞭をとり、山本徳広、川口貴裕、山本健介と次々と全国大会入賞者を育成していった。山本徳広（鳥取西工高）は、平成10年、56kg級で優勝した。山本健介（鳥取西工高）は、平成13年中国選抜大会85k級に優勝し、翌平成14年の同大会94k級においても優勝し、２連覇を果たした。この時のスナッチ競技においての大会記録は、いまだに破られていない。（平成30年現在）

2001（平成13）年に転機が訪れる。鳥取西工業高校と鳥取農業高校が統合し鳥取湖陵高等学校へと生まれ変わった。これまで多くの入賞者を輩出していた鳥取西工業高校は、2002（平成14）年の山本健介を最後にその歴史に幕を閉じた。この年、全日本マスターズにおいて、渡辺悦郎が85kg級で優勝している。

３　指導体制の変化と選手の活躍

入江達雄、前川章三が現場を離れざるを得なかったことで、それまで培ってきた指導体制が完全に途切れ、文字通りゼロからの出発となり、10数年にわたり選手強化に至らない時期が続いた。しかし、塚田啓介が米子工業高校へ赴任し、翌平成16年に同好会を発足させると指導体制に大きな変化が訪れた。

これまで岩美高校、鳥取湖陵高校の２校しかＷＬ部がなかったのだが、米子工業高校が加わることとなった。米子工業高校は、平成17年に部へ昇格し結果を残すこととなる。また、平成23年、石川県で行われた全国選抜大会では多田圭佑（米子工高）が出場し４位となった。同選手は、平成24年全国高校総体で、Ｓ２位、C&J10位、Ｔ４位という成績を収めた。さらに、国体では、Ｓ２位、C&J ６位、Ｔ６位となった。この年は、佐々木和人（鳥取湖陵高）が全国高校総体でS ８位入賞し、国体では、Ｓ６位入賞を果たすなど、少しではあるが着実に選手育成が軌道に乗り始めた。

平成25年には、錦織亮（米子工高）が第60回全国高校総体で53kg級S ２位、Ｔ４位、その年の国体で、少年男子53kg級S ３位となった。同選手は、翌平成26年の全国高校総体で、53kg級S １位、Ｔ４位、国体では56kg級でS ３位、Ｊ５位、Ｔ４位という成績であった。全国大会１位になるということは平成４年以来12年ぶりの快挙となった。その後も平成29年には岡村康広（米子工高）が第64回全国高校総体56kg級でS ４位、Ｔ６位、第72回国民体育大会で、Ｓ４位C&J ６位、Ｔ７位と入賞を果たした。平成30年の、第20回中国高校選抜大会69kg級の西川聡太（岩美高）がC&J競技で約15年ぶりの大会新記録を樹立し、優勝を果たした。

４　協会設立以来の課題

指導者の確保、選手の確保、役員の確保などの課題は、今もこれからも変わらない課題である。選手の育成については、平成30年現在、県内高校生選手の人数が増加傾向にある。そして、少人数ではあるが、高校から大学へ進学する選手も育ってきた。しかし、役員の世代交代等もあり、指導者の確保や県内役員の確保について、今のところ困難を極めている。いずれにしても、地道な活動が必要であり、県内一丸となって鳥取県ウエイトリフティング協会を支えていく必要がある。

～一人の教員から始まった協会、その火を消すまいと少数の協会員で支えあう～

◇歴代会長

昭和52年～平成11年	第４代	吉田	達男
12年	第５代	小玉	正猛
13年～　15年	第６代	中村	草春
16年～　22年	第７代	渡樌	由章
23年～	第８代	中嶋	政幸

◇歴代理事長

平成４年～　21年	中嶋	政幸
22年～　26年	三田	賢治
27年～	西本	宣充

鳥取県ハンドボール協会

１　全国大会への道のり

（１）鳥取国体まで

昭和43（1968）年発足の「境港市役所」が強豪の実業団チームを倒し、境港のチームとしてその名を馳せた。発足から17年後に山陰アシックス株式会社の協力で、国体チーム「アシックスクラブ」男女が誕生、女子監督に重栖悟（元山陰アシックス株式会社）、男子監督に明穂光也（現株式会社境港海上無線）が就任しチームをまとめ上げ、「わかとり国体」に臨んだのである。

（２）わかとり国体の遺産で全国優勝

一般男子は「アシックスクラブ」から名称変更した「境港市クラブ」が昭和60（1985）年・昭和61（1986）年と、２年連続の全国クラブ選手権優勝の偉業を成し遂げた。監督である明穂の指導力は自身の日新製鋼での選手経験を生かし、積み上げたものであった。また、米子工業高等専門学校も全国高等専門学校大会において活躍し、平成10

（2001）年に初優勝し、平成18（2006）年、平成19（2007）年には連覇を成し遂げた。

（３）全国大会での活躍と選手たち

昭和61（1986）年、全日本総合選手権へ出場した「アシックスクラブ」は本田技研と対戦、主力の児玉・古賀の退場から、逆転で惜敗したことが強く記憶に残っている。愛知国体（平成７年）成年男子は秋田「湯沢クラブ」と対戦し、残り３分、同点でペナルティーを得たが、遅延行為で罰則を取られ、やはり逆転で敗れている。高校男子は境高、境港工業高を中心に全国大会へ出場し、山梨インターハイ（平成８年）には境港工業高がベスト８、平成11（1999）年に境高が全国高校選抜大会ベスト16へ進出した。２校の他には、平成２（1990）年、米子東高が仙台インターハイに初出場を果たし、ベスト16となっている。

高校女子では境高女子部が全国での戦いに挑み続け、平成21（2009）年には京都インターハイでベスト16入りを果たしている。境高、境港工業高からは、日本リーグ「ホンダ」で選手、監督としてもリーグ優勝を果たした荒木誠司、荒木と同級生の「日新製鋼」で活躍した岡島真､「オムロン」･全日本のＧＫとしてリーグ優勝､全日本総合優勝、ＭＶＰなどの大活躍をみせた山口文子、「大崎電気」のＧＫ濱口靖など、全国、世界を舞台に活躍した選手を輩出した。そして､現在「トヨタ車体」でプレーし、元全日本メンバーでもある高智海吏は、若い県内選手の範として大きな声援を送られている。

（４）国体等への出場

平成８（1996）年広島国体に、成年・少年の男子が２種別出場を果たした｡強化部の田中宏明(当時境高）が少年男子の監督を務め、鳥取国体以降の粘り強い選手育成が芽を出し始めた結果であった。田中宏明はその後、中国ブロックでも山陽勢を撃破できるチームを育成し、少年男子は平成20（2008）年の大分国体にも出場した。男子強化部は今後、野口博史、竹安未央（現境高）に引き継がれていった。

成年男子は、地域リーグ「日本海ハンドボールリーグ」をチーム活動の基盤強化として、現在の成年男子を牽引する「弓ヶ浜クラブ」と「境港クラブ」が活躍している。

少年女子は、わかとり国体以来、実に26年を経て2011（平成23）年の山口国体に出場を果たした。監督･森本泰夫（現境高）とコーチ･藤原孝夫（現米子東高）に加え､一般女子チーム「オレンジバード」（当時監督・田崎秀徳）のスタッフ・選手との一体となった鳥取女子全体での強化が実を結び中国ブロック予選を突破したのである。

高校女子は、昭和60（1985）年のインターハイで､米子北高（監督･洋谷啓）が初出場を果たした。平成８（1996）年は米子南商高、翌平成９年は米子西高（監督・酒井 敏彦）が初出場した。また、平成25（2013）年から３年連続で米子東高がインターハイに出場している。境高女子は、創部から全国レベルまで育てあげた小澤から堀江薫雄が引き継ぎ平成20（2008）年度まで務め、全国で戦えるチームを作りあげることに情熱を注いだ。境高女子部の全国選抜大会は、平成元（1989）年に小澤監督の下で初出場を果たし、堀江の下で４回出場を果たしている。そして平成29（2017）年度、監督・藤井裕之（現米子西高）の下で全国高校選抜大会に出場を果たしている。

鳥取国体以降、女王境高に他校が挑み続けることで確実に県内競技レベルは向上し、現高体連委員長・牧野圭介（現倉吉総合産業高）を中心とした高校顧問団の結束力は堅く、今後の飛躍を期待したい。

中学生では、鳥取県で唯一、昭和62（1987）年全国中学校選手権大会へ出場している境港市立第二中学校女子部がある。監督・渡邉憲二（元境港市立第二中学校校長）が鍛え上げ、出場を果たした女子選手たちは、その後も県の高校、一般女子チームを牽引する活躍を続けていった。

ジュニアオリンピックカップ（ＪＯＣ）では、平成20（2008）年に「鳥取選抜」男子､平成21（2009）年に女子がそれぞれ出場した。

県内に長らく境港市内の三校しかない中学チームであったが、望月裕之（現境港第三中学校）、中山淳憲（当時境港第三中学校）、中村将人（当時境港第二中学校）、松田千里奈（現境港第三中学校）を中心とした地道な選手育成が続けられ、平成20（2008）年春の全国中学生大会では境港第一中学校男子部が、初戦突破を果たした。

２　小学生クラブチーム結成

ジュニア育成のため12年間実施していた鳥取県ハンドボール協会主催の「ジュニアハンドボール教室」は、中村将人（当時境港第二中学校）を主とし、多くのスタッフの協力を得て継続した。そして平成23（2011）年、小学生クラブチーム「マリンバード」を結成し、初の全国大会出場を成し遂げた。濱口靖（元大崎電気選手）が監督となり、スタッフの充実に力を入れ、保護者の熱烈な声援を受けた選手たちは、男女ともに全国小学生大会で１勝を挙げており、更なる高みへ向かって練習に励んでいる。

そして、マリンバードと県内予選会で激戦を遂げているのが「米子ジュニアハンドボールクラブ」である。惜しくも全国大会出場は果たせなかったが、監督･小澤美紀子の下、競技経験者であるコーチングスタッフの手厚い指導により急速に力を伸ばしている。小学生が楽しみながら勝利を目指し、和気藹々としたチーム作りは更なる普及へとつながっていくと期待される。

３　鳥取市でのハンドボール普及

協会草創期の鳥取工高を別とすれば、これまで県内は東部には中・高校のハンドボールチームはなかった。大学は、唯一鳥取大学ハンドボール部が存在するが、日本海リーグへの参加を主とするのみで、現実的な県内チームとの研鑽という機会は極めて少ないのが実情である。

そのような中、鳥取市に開校した青翔開智中高一貫校にハンドボール部が立ち上げられた。監督の三川沙紀は、ハンドボールの名門東京女子体育大学に学び、競技普及の熱意一つで鳥取に赴任し、東部地区の小中高校生にハンドボールの魅力を体感させている。中学生チーム、高校生チームとも県内公式戦にエントリーを果たし、活気をもたらしている。小学生も活動を開始し、「鳥取ハンドボールスクール」として鳥取砂丘でハンドボールイベントを開催するなど、積極的に地域へハンドボールの楽しさを紹介している。鳥取大学との連携も深まり、今後、鳥取県東部での普及に大いなる期待が持たれている。

４　日本海ハンドボールリーグ大会（地域リーグ）

40年間という長い歴史を持つ「日本海ハンドボールリーグ大会」が鳥取県にはある。一般男子の６～12チーム（チーム数変動）が年間のリーグ戦を実施する。地元紙である新日本海新聞社の協力を得て大会運営をしているが、なによりもスポーツ欄の一面を大きくハンドボールの記事で埋めることで、周りの応援も広がり、絶大な効果がある。メディアの力なくしては、この大会の継続はなかったといえる。このリーグ戦は、国体メンバーの強化試合となっていることや、特に米子高専チームの競技力には大きな影響があった。

これからもハンドボール発展のため、地域リーグが基盤となって、盛んになるよう継続することが望まれる。

そして、鳥取県ハンドボール協会はジュニアから一般のチームまで、たくさんの人によって支えられ、応援されるハンドボールを目指して活動していくことが大切である。

これまで鳥取県ハンドボール協会に携わってこられた多くの方々に感謝し、今後ともお力添えいただけるようお願いしたい。

[日本海ハンドボールリーグ　歴代優勝チーム]

昭和54年　境港市クラブ
　　55年　境港市クラブ
　　56年　境港市クラブ

57年　境港市クラブ
58年　中部クラブ
59年　アシックスクラブ
60年　アシックスクラブ
61年　境港市クラブ
62年　境港市クラブ
63年　境港市クラブＡ
平成元年　境港市クラブＡ
２年　境港市クラブ
３年　境港クラブ
４年　教職員クラブ
５年　境港クラブ
６年　境港クラブ
７年　境港クラブ
８年　境港クラブ
９年　丸八クラブ
10年　境港クラブ
11年　丸八クラブ
12年　弓ヶ浜クラブ
13年　いわしクラブ
14年　いわしクラブ
15年　弓ヶ浜クラブ
16年　弓ヶ浜クラブ
17年　弓ヶ浜クラブ
18年　弓ヶ浜クラブ
19年　弓ヶ浜クラブ
20年　いわしクラブ
21年　弓ヶ浜クラブ
22年　弓ヶ浜クラブ
23年　弓ヶ浜クラブ
24年　弓ヶ浜クラブ
25年　弓ヶ浜クラブ
26年　弓ヶ浜クラブ
27年　弓ヶ浜クラブ１
28年　弓ヶ浜クラブ１
29年　弓ヶ浜クラブ１
30年　はんどくり～む

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成３年～６年	嵯峨里二郎
７年～20年	石黒　豊
21年～28年	森岡　俊夫
29年～	浜田　一哉

◇理事長

平成３年～28年	小澤　敏正
29年～	森本　泰夫

鳥取県自転車競技連盟

H28（2016）年　全国高校総体が開催された倉吉自転車競技場での大会の様子

1　わかとり国体～1995年全国高校総体

昭和60（1985）年のわかとり国体開催以降、競技人口の拡大、ジュニア層の選手確保と強化、指導者の養成は継続的課題であった。1990年頃から、鳥取大学で自転車競技部を立ち上げた福井敬司、小里司、河田拓也らが県内大会を盛り上げ、国体にも成年選手として参加した。

その後、わかとり国体から10年後となる平成７（1995）年に、全国高校総体（インターハイ）が鳥取県で開催されることが決まり、国体で入賞実績を積んでいた福井敬司（現倉吉総産高教）が大学卒業後、倉吉西高校に教員として赴任し、自転車競技部を立ち上げ、倉吉工業高校とともに高校生の選手強化を図った。

平成７年の全国高校総体では入賞こそなかったものの、同年の福島国体で選手強化が実り、岩本晋也（倉吉西高）がエリミネイション・レースで８位入賞、また翌平成８年広島国体で、同じく岩本晋也がロードレース４位､沢住直行（倉吉工高）がスプリント３位に入賞した。

さらに福井敬司は、指導者として全国大会で入賞する選手を多く育成する一方で、自身も選手としても競技を続け、得意種目である１kmタイムトライアルでは、全日本アマチュア選手権で数々の入賞実績を挙げた。国体では優勝こそないものの、２位入賞が６回、８位内入賞が合計10回を数え、国内アマチュア界のトップ選手として活躍を続けた。中でも平成９（1997）年全日本アマチュア選手権では、先述の岩本や沢住とともに、チームスプリントで優勝して当時の日本記録をつくった。まさに第一人者として本県自転車競技を牽引した、その功績は大きい。

2　女子オリンピック選手の誕生

森本朱美選手（2000年シドニー）、和田見里美選手（2008年北京）の二人がオリンピック選手となった。

平成６（1994）年、当時用瀬小学校で教員をし

ていた森本朱美は、大学卒業後に趣味で始めたトライアスロンのトレーニングの一環で、広島で開催された全日本アマチュア選手権ロードレースに参加した。集団の駆け引きやアタックのタイミングなど一切わからず走っていたが、集団が牽制した間隙をついて思い切ってアタックをかけるとそのままトップでフィニッシュした。

優勝者がアジア大会の出場者に決まることなど意識していなかったが優勝して日本代表になり、同会場で開催された第12回広島アジア大会の女子ロードレースで９位の成績を収めた。高校時代バスケットの国体候補選手でもあった森本は、抜群の瞬発力と持久力を発揮し、競技歴はまだ浅いものの国内女子のトップを競うようになり、アジア大会以降も日本代表として、世界選手権やアジア選手権など数々の国際大会に出場した。

平成12（2000）年、群馬県前橋グリーンドームで開催されたシドニーオリンピック代表選考を兼ねた全日本選手権トラックのポイントレースでは､ライバル選手との優勝争いが熾烈を極めたが､終盤加点した森本が見事優勝し、そのままオリンピック代表の切符を勝ち取った。鳥取県初の自転車競技のオリンピック選手誕生となった。

本番のシドニーオリンピックでは、世界の強豪相手に積極果敢なレースを展開するが、ポイントがなかなか奪えず、完走16位の成績で終わった。

シドニーオリンピックでの森本珠美選手

鳥取県からは、両親とともに鳥取市後援会の応援団が駆けつけ現地で大声援を送ったのである。

平成15（2003）年、和田見里美（倉吉東高）は高校から競技を始めると、陸上競技で培った高い身体バランスと心肺能力でたちまち頭角を現した。同学年の河端あゆみ（倉吉総産高）とともに全国大会の上位で競うようになった。平成16（2004）年、平成17（2005）年には、先述の森本朱美や河端あゆみとともに全国都道府県対抗自転車競技大会で女子総合優勝２連覇を果たした。和田見は、2005年全国高校選抜大会、ＪＯＣジュニアオリンピックカップ大会で２kmインディヴィデュアル・パーシュートを制し、全日本選手権トラックではポイントレースで、高校生ながら大学生や一般選手を抑えて優勝したのである｡その後、初の国際大会となるオーストリアで開催された世界ジュニア選手権ロードレースに出場した。完走こそしたものの、世界の壁は厚く、スピード・持久力ともに全く及ばず、世界とのレベルの差を痛感したのであった。

和田見は高校卒業後、中京大学で競技を続け、大学４年間、得意種目である３kmインディヴィデュアル・パーシュートでは全日本アマチュア選手権と全日本選手権でそれぞれ４連覇を成し遂げた。また、大学１年時に日本代表として、2006年ドーハアジア大会やアジア選手権など国際大会を経験した。

そして2007年、大学２年時に、南アフリカで開催されたB世界選手権に出場するのだが、この大会の種目別優勝者にはオリンピック出場権が与えられることになっていた。和田見は、まず３kmインディヴィデュアル・パーシュートに挑んだが、惜しくも２位に終わった。奮起して臨んだ次のポイントレースでは、終盤エルサルバドルの選手を抑え､見事優勝した｡まさにその時､北京オリンピックの出場枠を獲得した瞬間だった。競技を始めて５年目の快挙で、森本朱美に続き２人目のオリンピック選手の誕生に県内関係者は歓喜に溢れた。

そして、2008年の北京オリンピックでは町内で

2008北京オリンピックポイントレースの和田見選手

スタートする2006兵庫国体チームスプリントチーム

激励会が開かれ両親や親戚と北栄町後援会の応援団がオリンピック会場の観客スタンドで見守る中、和田見の世界への挑戦がスタートした。強化してきたスピードで世界の強豪に食らいつき、ポイントを取るチャンスをうかがっていた。しかし、序盤集団のスピードが緩んだわずかの瞬間だった、2コーナー中央付近で他選手と接触し転倒し、そのまま走路下まで転がり落ちてしまった。しばらく経って、和田見はようやく立ち上がることができたが、結局レースには復帰できずあえなく途中棄権となってしまった。外国勢と互角に戦える実力が備わってきただけに、初挑戦のオリンピックは、何とも悔しい終わり方となった。

3　初代王者、国体チームスプリント優勝

人口最少県で、そして競技人口も少ない鳥取県の自転車競技であるが、全国に引けをとらない競技レベルであることを自負している。これは、特に国民体育大会で入賞し天皇杯得点を取ることや、連続入賞を続けることを重点目標として選手強化を図ってきた結果である。

平成18（2006）年兵庫国体から、国体改革により種目と参加人数の見直しが図られ、団体種目でチームスプリントが導入されることになった。この種目は過去に、鳥取県選抜チーム（岩本晋也、沢住直行、福井敬司）が、全日本アマチュア選手権で当時の日本記録をつくって優勝しており、鳥取県がいち早く取り組み、強化していた種目であった。

チームスプリントが導入された最初の兵庫国体では、岩本晋也（倉吉西高教）、河端朋之（県体協職員）、そして急遽メンバー変更し起用された桜井太士（中央大学）の３人で優勝を目標に臨んだ。予選は３人の息が見事にあい１位で通過した。優勝を決める１－２位決定戦では三重県が対戦相手となった。決勝は雨が降り、路面が滑りやすいコンディションの中でスタートした。１走でダッシュ力のある岩本がトップスピードに乗せ、２走の河端がそのスピードを維持して、３走桜井にリレーした。

桜井は前走者２名と練習ではほとんど合わせていなかったが、最後まで粘りの走りを見せ、対戦相手である三重県チームに先着し、見事優勝した。

2006兵庫国体チームスプリント優勝チーム

チームスプリント初代王者の３人は、満面の笑みで表彰台の中央に輝いたのである。

４　悲願の日本一、そして世界の舞台へ
～河端朋之選手～

2007秋田国体成年スプリントで優勝した河端朋之

平成19（2007）年秋田国体では、河端朋之がアマチュア最後の大会となり、スプリントで悲願の優勝を成し遂げた。河端は、倉吉工高３年時の2002年高知国体でスプリント３位に入賞して以降、2003年静岡国体３位、2004年埼玉国体４位、2005年岡山国体６位、2006年兵庫国体５位とスプリントで連続入賞してきた。

河端は高校卒業後、母校での実習助手や県体協職員などを経て、競輪選手を目指していた。その中で最後の年と決めて挑んだ秋田国体であった。圧倒的なスピードで他の強豪選手を下し、盤石に駒を進めた。決勝では三重県の選手との対戦となったが、冷静に相手の動きを見て、２本ともコーナー出口から一気に追い込みをかけ、フィニッシュ前でかわし、見事初優勝を成し遂げ、アマチュア最後の大舞台で有終の美を飾ったのである。スタンドでは多くの県関係者が声援を送り、その瞬間歓喜に沸いた。

河端はその後プロ選手に転向してナショナルチーム入りし、国際2007秋田国体成年スプリントで優勝大会出場を重ねる。2014年仁川アジア大会スプリントで銀メダル、2018年オランダで開催された世界選手権ケイリンで、日本選手として25年ぶりとなる銀メダルを獲得し、日本の自転車競技を牽引するトップ選手になっていった。2020年東京オリンピックでの活躍も期待され、世界の頂点を目指してその戦いを続けている。

2018世界選手権ケイリン銀メダルの河端朋之選手（先頭）

５　目覚ましい活躍をみせる高校生たち

鳥取県チームとしては河端朋之というエースが去り、国体入賞が途絶えしばらく停滞したが、平成22（2010）年千葉国体では、新エースが現れた。競技歴まだ半年ほどの佐伯亮輔（倉吉西高）が、スプリントに出場して、陸上で鍛えた天性のダッシュ力を発揮し、初出場にしていきなりの４位入賞と周囲を驚かせた。

佐伯の活躍はさらに続き、2011年山口国体１kmタイムトライアルで準優勝、全国高校選抜大会スプリントで優勝、そして３年時、2012年新潟インターハイ１kmタイムトライアルで準優勝、世界ジュニア選手権出場と高校トップレベルで活躍を続けた。そして高校生活の集大成として、2012年岐阜国体で１kmタイムトライアルに優勝を懸けて挑んだ。

佐伯が出走する直前の組で、地元岐阜県の選手がトップタイムをたたき出すと、目の前の観客スタンドは歓喜と興奮が最高潮に達した。佐伯は緊張とプレッシャーがあったものの、冷静に集中していた。そしてカウントダウンの合図と同時にスタートした。得意の弾丸ダッシュで加速させ

2012岐阜国体少年1キロメートルTT優勝の佐伯亮輔

ていく。強い向かい風が吹く中、いつもより長く腰を上げて加速させ、その後高速回転でペダルを回し、トップタイムでラップを刻み、課題だった残り200mもペダルを踏みきり、大会新となる１分５秒997のトップタイムをたたき出しフィニッシュした。恩師の福井敬司が獲れなかった優勝を見事掴みとり、師匠を超えた瞬間であった。

佐伯亮輔の活躍以降、少年勢で全国上位入賞する選手が相次いで現れる。

山根将太（倉吉西高）は、平成26（2014）年長崎国体で少年スプリント３位、2015年高校３年時に全国高校総体チームスプリント２位、ジュニア世界選手権日本代表、和歌山国体１kmタイムトライアル２位と活躍した。大学生になり2018年福井国体ケイリン２位、全日本選手権トラック１kmタイムトライアル２位と、国内屈指のスプリンターとして成長し、国体チームスプリントでは2014年長崎国体２位、2015年和歌山国体４位、2016年岩手国体優勝、2018年福井国体４位と大きく貢献したのである。

2015年和歌山国体では､金田優作（倉吉総産高）がポイントレースで優勝した。金田は、序盤から順調にポイントを重ね有利にレースを進め、後半でも集中力を切らすことなく加点して、ライバル選手を抑えての見事な優勝であった。この種目での優勝は、1988年京都国体の斎尾大丈夫（中央大学）の優勝以来で、鳥取県少年勢としては初の優勝であった。

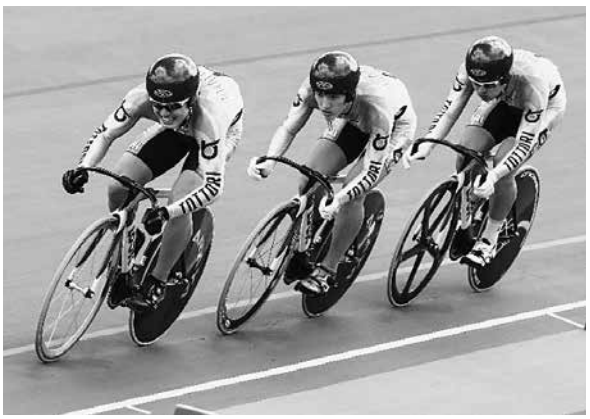
2015和歌山国体少年ポイントレース優勝の金田優作

2017年愛媛国体では､山根慶太（倉吉西高３年）がジュニア日本代表の意地を見せ、１kmタイムトライアルで見事優勝を収めた。国内では個人種目の優勝がなかっただけに、高校最後の国体を優勝で飾ることができた。山根は、夏の全国高校総体で、倉吉西高チームスプリントで３位入賞し、その後世界ジュニア選手権チームスプリントに出場し、日本記録更新にも貢献した。

６　再び、国体チームスプリント日本一に

チームスプリントは2006年以降優勝から遠ざかっていたものの、2016年岩手国体では優勝が狙えるスプリンターが揃った。前年2015年和歌山国体でも４位入賞したメンバーで、佐伯亮輔（中央大学)、先述の山根将太（中央大学)、そして弟の山根慶太(倉吉西高)の３名である。山根慶太(倉吉西高２年）は兄将太と同様に、抜群のダッシュ力を持つスプリンターである。優勝を狙える最強メンバーが揃い、岩手国体に臨んだ。鳥取県チームにとっては、会場となった岩手県紫波自転車競技場は、倉吉の競技場と同じ周長333.33m走路で特徴もよく知るところであった。

まず、予選ラウンドで、鳥取県チームはいつも通りのスタートを切った。山根慶太が加速させトップスピードに乗せ、兄・山根将太にリレーする。山根将太もそのままスピードを維持し、最終走者の佐伯につなぐ。佐伯も渾身の力でペダルを漕ぎ、見事大会新記録でフィニッシュした。翌日



2016岩手国体チームスプリント優勝の左から
山根慶太、山根将太、佐伯亮輔の各選手

の決勝では、地元岩手県チームとの争いになり、会場中が地元岩手県を応援する声援で溢れたが、３人の息が合い、集中力を切らすことなく走り切り、10年振りに優勝を勝ち取った。佐伯は競輪選手を目指すため、これが最後の国体であったが、有終の美を飾ることができ、満面の笑みで表彰台の中央に立った。

長野国体２位、和歌山国体４位、岩手国体優勝、福井国体４位、茨城国体２位と全国上位入賞をつづけており、まさに鳥取県競技スポーツを代表する存在となっている。

７　国体正式種目になった女子種目

オリンピックに出場した森本や和田見が活躍した以降も、女子選手が高校を中心に現れ全国大会で活躍するようになった。500mタイムトライアルで松本世良（倉吉東高）、２kmインディヴィデュアル・パーシュートで鈴木遊（倉吉総産高）や神庭睦実（米子東高）、スプリントおよび500mタイムトライアルで伊藤花歩（倉吉西高）らが、全国選抜大会やJOCジュニアオリンピックカップ大会などで入賞したのである。

県連盟としては、早くから女子選手の強化育成に取り組み、２人のオリンピック女子選手を輩出していることもあり、国体で女子種目が早く採用されることを望んでいた。

折しも、県連盟の理事長岡田行雄は、（公財）日本自転車競技連盟の常務理事として永く競技委員長を務め、日本体育協会に対して1990年後半頃から女子種目導入の交渉を継続的にしていたものの、なかなか採用されずに時間だけが経過していた。しかし、平成25（2013）年に2020年東京オリンピックの開催が決定したことで状況が変わるきっかけとなり、オリンピックに採用されている競技種目を国体でも実施することが決まり、2016年岩手国体から女子種目が導入されることになったのである。

記念すべき１回目は、伊藤花歩（鳥取短期大）と菅原朱音（倉吉総産高）が出場することになった。菅原朱音は、2016年倉吉で開催された全国高校総体でスクラッチ３位、JOCジュニアオリンピックで２kmインディヴィデュアル･パーシュート２位と好調で、本番の国体でも大学生や社会人選手も混じるスクラッチで見事６位に入賞した。菅原は、益田市で開催された全日本選手権ジュニアロードレースでゴールスプリントを制し日本一になり、大活躍の年となった。森本、和田見に続いて世界へ挑戦してほしいと期待するところである。

2016全日本ロードチャンピオン　菅原朱音

８　２度目の開催となった平成28年全国高校総体

平成28（2016）年は中国地区で全国高校総体の開催となり、自転車競技のトラックレースを鳥取県で開催することに決まった。平成７（1995）年開催の鳥取インターハイ以来の21年ぶりの倉吉市の自転車競技場での開催である。全国大会の受け入れとして、施設整備や駐車場の確保が課題であった。

21年ぶりに倉吉自転車競技場での開催は、全国から約600名の選手・監督が集まった。走路改修、新管理棟建設、駐車場などの整備は、県並びに県体育協会の支援で実現した。大会運営は倉吉市実行委員会を中心に準備が進められ、中部地区高校の補助員や倉吉市のスポーツ指導員、臨時駐車場では高城地区ボランティアスタッフの協力で、遠路来場した選手監督や応援関係者へおもてなしをした。またJA鳥取中央女性部などの飲食売店は

来場者に好評であった。競技運営面では本連盟関係者、自転車競技部OBやOGなど約50名が役員要請を受けて本番に臨んでくれたのである。

大会期間中は、多くの市民や地元高城小学校の児童たちが応援に駆け付け熱い声援を送った。肝心な鳥取県勢の活躍は、河藤相真（倉吉西高）のスクラッチ２位をはじめ、伊藤皓平（倉吉西高）がポイントレース５位、小泉雄持（倉吉総産高）が４km速度競走５位、女子では菅原朱音（倉吉総産高)がスクラッチ３位と４名の選手が入賞し、地元開催に花を添える大活躍で大会を盛り上げてくれた。

９　鳥取県自転車競技のさらなる発展に向けて

本連盟では近年、競技人口の拡大やジュニア層の普及・育成の観点で、春秋サイクルフェスティバルを年２回開催し、競技の導入のきっかけとして自転車競技の楽しさや面白さを体験する機会をつくっている。また県の事業と連携し、小・中学生のジュニア選手の発掘と育成にも取り組んでいる。

県内の自転車競技は、ロードを楽しむ愛好家は増加しているものの、競技登録者はなかなか増えず、その中心はほとんどが高校生である。今後、さらなる普及事業を進め、競技者増大や競技力向上の取り組みを継続し､全国大会で活躍する選手、オリンピックや国際大会に参加する選手が現れることを期待している。

また、2021年には関西ワールドマスターズゲームズ（関西WMG）の自転車競技トラックレース及びロードレースを倉吉市で開催することが決定しており、マスターズクラスの競技人口の増加、施設整備や役員養成が急務となっている。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成２年～13年	花本　美雄
15年～19年	藤原　義丈
20年～	上村　忠史

◇理事長

昭和63年～	岡田　行雄

国際大会出場者（1988年以降～）

	大会名	選手名	種目・成績
1994	第12回アジア大会（広島・中央森林）	森本朱美	女子ロードレース　９位
1997	アジア選手権（韓国）	森本朱美	女子ロードレース　３位
1999	アジア選手権（群馬・嬬恋村）	森本朱美	女子ロードレース　３位
2000	シドニーオリンピック	森本朱美	女子ポイントレース　完走
2003	ジュニアアジア選手権（韓国）	河端朋之	スプリント３位、ケイリン３位
〃	〃	〃	チームスプリント３位
2005	ジュニア世界選手権（オーストリア）	和田見里美	女子ロードレース　完走
2006	第15回アジア大会（カタール・ドーハ）	和田見里美	３kmインディヴィデュアル・パーシュート９位
〃	〃	〃	個人ロードタイムトライアル３位
2007	アジア選手権（タイ・バンコク）	和田見里美	３kmインディヴィデュアル・パーシュート３位、ポイントレース３位
〃	〃	〃	女子ロードレース　５位
2007	Ｂ世界選手権（南アフリカ・ケープタウン）	和田見里美	ポイントレース優勝、スクラッチ優勝
〃	〃	〃	３kmインディヴィデュアル・パーシュート２位

2008	世界選手権（イギリス・マンチェスター）	和田見里美	３kmインディヴィデュアル・パーシュート、ポイントレース
2008	北京オリンピック（中国・北京）	和田見里美	ポイントレース
2010	アジア選手権（アラブ首長国連邦）	和田見里美	３kmインディヴィデュアル・パーシュート５位
2012	ジュニア世界選手権（ニュージーランド）	佐伯亮輔	チームスプリント、スプリント、１kmタイムトライアル
2015	ジュニア世界選手権（カザフスタン･アスタナ）	山根将太	チームスプリント、ケイリン、スプリント
2017	ジュニアアジア選手権（インド･ニューデリー）	山根慶太	チームスプリント優勝　日本ジュニア新
〃	〃	〃	１kmタイムトライアル３位
〃	ジュニア世界選手権（イタリア･モンティキアーリ）	山根慶太	チームスプリント８位　日本ジュニア新

河端朋之選手の主な国際大会戦績

年度	大会名	開催地	種目・成績
2011	ワールドカップ１戦	カザフスタン・アスタナ	スプリント、チームスプリント
	ワールドカップ２戦	コロンビア・カリ	スプリント、ケイリン、チームスプリント
2012	ワールドカップ１戦	コロンビア・カリ	スプリント６位、ケイリン２位、チームスプリント２位
	ワールドカップ２戦	イギリス・グラスゴー	スプリント８位、チームスプリント９位
	ワールドカップ３戦	メキシコ・アグアスカリエンテンス	スプリント、チームスプリント
	世界選手権	ベラルーシ・ミンスク	スプリント
2013	ワールドカップ１戦	イギリス・マンチェスター	スプリント、ケイリン、チームスプリント
	ワールドカップ２戦	メキシコ・アグアスカリエンテンス	スプリント9"865、ケイリン、チームスプリント９位43"092
	ワールドカップ３戦	メキシコ・グアダラハラ	スプリント23位10"126、チームスプリント８位
2014	世界選手権	コロンビア・カリ	スプリント、チームスプリント
	アジア大会	韓国・インチョン	スプリント２位、チームスプリント３位
	ワールドカップ１戦	メキシコ・グアダラハラ	スプリント25位10"125、チームスプリント
	ワールドカップ２戦	イギリス・ロンドン	スプリント29位、チームスプリント
	ワールドカップ３戦	コロンビア・カリ	スプリント23位
	アジア選手権	タイ・バンコク	スプリント優勝
2015	世界選手権	フランス・パリ	スプリント30位
	ワールドカップ２戦	ニュージーランド・ケンブリッジ	スプリント38位
	ワールドカップ３戦	香港	スプリント25位
2016	アジア選手権	日本・伊豆ベロドローム	
	ワールドカップ１戦	イギリス・グラスゴー	ケイリン準決３位、スプリント17位10"112、チームスプリント
	ワールドカップ２戦	オランダ・アペンドールン	ケイリン12位、スプリント16位、チームスプリント
	ワールドカップ３戦	コロンビア・カリ	ケイリン４位

2017	アジア選手権	インド・ニューデリー	スプリント２位、チームスプリント３位
	世界選手権	香港	ケイリン13位、スプリント31位
	ワールドカップ１戦	ポーランド・プルシコフ	スプリント15位、チームスプリント９位
	ワールドカップ２戦	イギリス・マンチェスター	ケイリン13位、チームスプリント11位
	ワールドカップ３戦	カナダ	ケイリン11位
	ワールドカップ４戦	チリ	
2018	アジア選手権	マレーシア・ニライ	ケイリン１位、チームスプリント２位
	世界選手権	オランダ・アペンドールン	ケイリン２位、スプリント23位

国民体育大会・全国大会優勝者（1988年以降）

年度		大会名	種　目	選手名
1988	S63	第43回国民体育大会（京都）	ポイントレース	斎尾大丈夫（中央大学）
1994	H 6	全日本アマチュア選手権（広島）	個人ロードレース	森本朱美（用瀬小教）
1996	H 8	全日本アマチュア選手権（広島）	個人ロードレース	森本朱美（用瀬小教）
1997	H 9	全日本アマチュア選手権（日本CSC）	チームスプリント	岩本晋也・沢住直行・福井敬司
〃	〃	〃	１kmタイムトライアル	福井敬司（倉吉西高教）
〃	〃	全日本アマチュア選手権（広島）	個人ロードレース	森本朱美（若桜中教）
2000	H12	全日本アマチュア選手権（高知）	１kmタイムトライアル	福井敬司（倉吉西高教）
〃	〃	全日本選手権（群馬）	ポイントレース	森本朱美（若桜中教）
2004	H16	全国都道府県対抗大会（岡山）	女子ロード、ポイントレース	森本朱美（鳥取湖陵高教）
2005	H17	JOCジュニアオリンピックカップ（秋田）	２kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（倉吉東高）
〃	〃	全日本アマチュア選手権（日本CSC）	ジュニア女子ロード	和田見里美（倉吉東高）
〃	〃	全日本選手権（長野）	ポイントレース	和田見里美（倉吉東高）
〃	〃	全国都道府県対抗大会（兵庫）	個人ロードレース	森本朱美（鳥取湖陵高教）
〃	〃	〃	ポイントレース	和田見里美（倉吉東高）
2006	H18	全日本アマチュア選手権（宮崎）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	〃	チームスプリント	岩本晋也・河端朋之・福井敬司
〃	〃	全日本選手権（鳥取）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	第61回国民体育大会（兵庫）	チームスプリント	岩本晋也・河端朋之・桜井太士
2007	H19	全日本アマチュア選手権（新潟）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	〃	ポイントレース	和田見里美（中京大学）
〃	〃	全日本選手権（宮城）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	JOCジュニアオリンピックカップ（新潟）	500mタイムトライアル	松本世良（倉吉東高）
〃	〃	全国都道府県対抗大会（大分）	500mタイムトライアル	松本世良（倉吉東高）
〃	〃	第62回国民体育大会（秋田）	スプリント	河端朋之
〃	〃	Ｂ世界選手権（南アフリカ）	ポイントレース、スクラッチ	和田見里美（中京大学）

2008	H20	全日本アマチュア選手権（大阪）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	〃	ポイントレース	和田見里美（中京大学）
〃	〃	全日本選手権（群馬）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
2009	H21	全日本アマチュア選手権（山口）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	全日本選手権（山梨県）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	〃	ポイントレース	森本朱美（鳥取湖陵高教）
〃	〃	全日本大学対抗選手権（日本CSC）	３kmインディヴィデュアル・パーシュート	和田見里美（中京大学）
〃	〃	〃	ポイントレース	和田見里美（中京大学）
2010	H22	全国都道府県対抗大会（山口）	個人ロードレース	村出真一朗（鳥取県）
2012	H24	第67回国民体育大会（岐阜）	１kmタイムトライアル	佐伯亮輔（倉吉西高）
〃	〃	全日本選手権（伊豆ベロドローム）	スプリント、ケイリン	河端朋之
2013	H25	全日本選手権（伊豆ベロドローム）	スプリント	河端朋之
2015	H27	第70回国民体育大会（和歌山）	ポイントレース	金田優作（倉吉総産高）
2016	H28	第71回国民体育大会（岩手）	チームスプリント	山根慶太・山根将太・佐伯亮輔
〃	〃	全日本選手権（島根）	ジュニア個人ロード	菅原朱音（倉吉総産高）
2017	H29	第72回国民体育大会（愛媛）	１kmタイムトライアル	山根慶太（倉吉西高）

鳥取県ソフトテニス連盟

１　日野郡の牽引

日野郡は以前から軟式庭球（ソフトテニス）の盛んな地域である。小学校のグラウンドにはテニスのポールが建てられ、廊下にはラケットが並べられていて、誰でもいつでも軟式庭球ができる環境があった。

指導するのは学校の教員の他たくさんの愛好者たちで、地域全体で子どもを教えてきた。そうして軟式庭球は日野郡で“郡技”と呼ばれるようになり、昭和40年代後半から子どもの強化が実を結ぶようになった。

昭和50年代に入ると、中国大会、全国大会で好成績を挙げるようになり、その日野郡の流れが県全体を刺激して、他の郡市でも中国、全国大会で活躍する選手が出るようになった。その勢いが昭和60（1985）年のわかとり国体における競技別総合優勝につながり、現在までの好成績にもつながってきている。日野郡の指導者、選手たちが鳥取県を引っ張ってきたと言っても過言ではない。

２　中央講師招聘による刺激

鳥取県のレベルがまだ低かった頃、昭和45年から60年まで県連盟の理事長を務めた故松田信穂氏が、中央から有名な監督やコーチ、選手を招聘して講習会を度々開催した。県内の指導者・選手たちは、雑誌のグラビアでしか見たことのない名選手が目の前で見せるハイレベルのプレイに驚き、全国級の監督やコーチたちの教えに新鮮な刺激を受けた。これが何年にもわたって続けられ、全国レベルの技術が鳥取県に入って来た。

県内指導者・選手たちは自ら得たものを次の世代、更に次の世代へと伝えていき、次第に県内全体に浸透していった。そのことが平成５（1993）年以降の鳥取県の快進撃につながったと言える。

３　小学生・中学生の大活躍と全国優勝

こうして鳥取県の選手たちは強くなっていった。特に小学生・中学生たちは、中国地区大会では２位や３位は当たり前、優勝も珍しいことではなくなった。全国大会でもベスト８やベスト４、更には２位や１位に何度も入るようになった。ひ

と昔前には考えられないことだった。

全日本大会の優勝だけをみても、都道府県対抗全日本中学生大会では平成９（1997）年に男子団体戦で鳥取県選抜チームが、平成22（2010）年には女子団体戦で鳥取県選抜チームがそれぞれ優勝している。全国中学校大会（全中）では平成９年に団体戦で男子の江府中学校と女子の日野中学校がアベック優勝し、平成13（2001）年には女子個人戦で日野中学校の中川静香・中川佳奈美組が、平成14年には女子団体戦で日南中学校が優勝している。

４　高校生・大学生の活躍

日野郡をはじめとする県内の小・中学校で育った選手たちが高校や大学に進学して活躍した。主なものを挙げると、平成10（1998）年に米子西高の長谷部友紀・堀口栄子組が全国高校選手権大会（インターハイ）女子個人戦で３位、平成11年には米子西高の長谷部友紀・長尾裕美組がインターハイ女子個人戦で３位、JOC杯全日本ジュニア選手権大会でも３位に入った。神戸松蔭女子大に進学した長谷部友紀は平成14（2002）年の全日本選手権大会（皇后杯）で３位、西日本学生選手権大会シングルスで１位、翌15年には西日本学生選手権大会でダブルス・シングルスともに３位に入った。

平成26（2014）年には、米子松蔭高の小谷真由・松本美紀組がハイスクールジャパンカップ女子個人戦で優勝した。小谷真由は明治大学に進学して、平成28（2016）年の全日本学生選手権大会（インカレ）女子ダブルスで３位、平成29年には東日本インカレの女子ダブルスで３位、関東学生選手権大会の女子ダブルスで優勝した。その他、他県の中学・高校に進学した選手が全日本大会等で好成績を挙げている。

５　一般・レディース・シニアも大活躍

平成６（1994）年の中国地区選手権大会一般男子個人戦で、池本正紀・河上敏明組（陽光ク）が優勝した。山陽地区に全国級の選手が居並ぶ一般男子の部で鳥取県の選手が優勝したことは特筆もので、これから先二度と出ないかもしれない大殊勲と言える。レディースの部では、全日本レディース大会で平成９（1997）年に福田さとみ・長谷川由紀子組（米子ピュアーズ・湊山ク）がばらの部（38歳～ 45歳未満）で、平成11（1999）年には秋葉泉・長尾さゆみ組（フレンドシップ）がすみれの部（38歳未満）で優勝した。

シニアの部でも好成績が続いた。全日本シニア選手権大会で、平成９年に男子60歳以上の部で原田公夫・安田津知男組（久松ク）、12（2000）年に男子45歳以上の部で安達和紀（NTTデータ通信）、男子60歳以上の部で原田公夫（奥アンツーカ）、14（2002）年に男子50歳以上の部で安達和紀（同）、16（2004）年に男子50歳以上の部で安達和紀（同）、17（2005）年に男子65歳以上の部で原田公夫・森本勲組（奥アンツーカ・湊山ク）、19（2007）年に男子70歳以上の部で原田公夫・森本勲組（久松ク･湊山ク）が優勝した。

アジアシニア選手権大会では、平成８（1996）年に男子45歳以上の部で安達和紀（NTTデータ通信）、14年に男子65歳以上の部で原田公夫（奥アンツーカ）が優勝し、全日本教員選手権大会で平成７（1995）年に男子45歳以上の部で福田寛巳(米子西高教)が優勝した。

６　今後の課題

近年、少子化によりソフトテニスをする子どもが減ってきた。特にソフトテニスどころの日野郡でその傾向が強く、今までの快進撃をどう維持していくかが大きな課題である。

そして、今に始まったことではないが、県内の小・中学校で育った選手が他県の中学校や高校に進学しているが、県外に出て更に上達し、全日本などの大舞台で活躍する選手も多く、中には日野郡出身の選手同士がインターハイ個人戦の決勝戦で対戦する例もあった。選手たちが成長して飛躍すること自体は喜ばしいことではあるが、鳥取県

としては残念なことである。

これらの課題に有効な解決策があるわけではないが、課題を常に念頭に置いて今後の対策を考えていく必要がある。

7　県連盟表彰

県ソフトテニス連盟では県外大会で好成績を挙げた個人・団体の表彰を平成５年頃から始めており、平成６（1994）年度から「県連盟表彰規程」を制定して表彰してきた。しかし選手の戦績の資料収集するにあたり、追跡・把握し切れていない部分もかなりあり、その精査の作業で日野郡、中体連、レディース連盟関係の方には大変お世話になった。

8　好成績一覧

平成５年から29年までの好成績をあげた選手は、別掲のとおりである。追跡・把握し切れていないものもあると思われるが、掲載基準は紙面の関係で、次のとおりとした。（小学生の部は別途第８章第６節「ジュニアのスポーツ大会」を参照）

○中学・高校・大学・一般・成年の成績

中国大会１位以上

西日本大会１以上

全日本大会３位以上

○シニアの成績

西日本大会１位

全日本・アジア大会１位

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成２年	～	平成９年	木代　彰
10年	～	13年	松田　信穂
14年	～	28年	原田　公夫
29年	～		田中　一雄

◇理事長

昭和61年	～	平成13年	原田　公夫
14年	～	16年	田中　一雄
17年	～		安藤　健司

【アジア大会・全国大会・中国大会の成績一覧】　　ク…クラブ　D…ダブルス　S…シングルス

年度	大会名	チーム・選手名	種別	種目	成績	備考
平成５年	中国中学校選手権大会	石原寛哲･北野大輔（溝口中）	男子	個人	１位	
６年	全国中学校大会（全中）	江府中（大谷英･上原俊平･三輪功大･金田崇･田中陽助･加藤裕之･山下剛三･各務伸二）	男子	団体	３位	
	中国中学校選手権大会	江府中（大谷英･上原俊平･三輪功大･金田崇･田中陽助･加藤裕之･山下剛三･各務伸二）	男子	団体	１位	
	中国地区中学生インドア大会	日南中（高橋恵子･田中美里･久代円花･亀井麻未･西村直美･笹野裕子･三森奈津子･安達久美子）	女子	団体	１位	
		大谷英･各務伸二（江府中）	男子	個人	２位	
	中国地区選手権大会	池本正紀･河上敏明（陽光ク）	男子	個人	１位	一般の部
	中国地区選手権大会	福田さとみ･長谷川由紀子（米子ピュアーズ･湊山ク）	女子	個人	１位	成年の部
	全日本社会人選手権大会	安達和紀･福田寛巳（城山ク）	男子	個人	３位	45歳以上
7年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：高橋恵子･田中美里･久代円花･亀井麻未（以上日南中）･長谷部友紀･牧田佳恵（以上日野中）･	女子	団体	３位	

7年	中国中学校選手権大会	日南中（高橋恵子･田中美里･久代円花･亀井麻未･西村直美･笹野裕子･伊藤春菜･三森奈津子）	女子	団体	１位	
		高橋恵子･田中美里（日南中）	女子	個人	１位	
	中国地区中学生インドア大会	日野中（長谷部友紀･長尾裕美･谷口弘美･田辺有子･上原沙織･音田加奈子･西里美･織田優美子）	女子	団体	１位	
		長谷部友紀･長尾裕美（日野中）	女子	個人	１位	
	全日本教員選手権大会	福田寛巳（米子西高）	男子	個人	１位	45歳以上
８年	中国中学校選手権大会	江府中（加藤潤也･鷲見賢次郎、大谷匡史･佐々木祐人、中尾浩司･影山陽平、山口浩一･森谷哲郎）	男子	団体	２位	
	中国地区中学生インドア大会	江府中（大谷匡史･佐々木祐人･山口浩一･森谷哲郎･久木康裕･影山陽平･中原浩平･船越浩紀）	男子	団体	１位	
		日野中（谷口弘美･長尾裕美･生田結衣･梅林尚美･安達奈美･谷口真弓･伊田京子･西里美）	女子	団体	１位	
		大谷匡史･佐々木祐人（江府中）	男子	個人	１位	
	アジアシニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	45歳以上
	全日本社会人選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	３位	45歳以上
９年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：大谷匡史･佐々木祐人、山口浩一･森谷哲郎、久木康裕･影山陽平（以上江府中）、永井利明･杉原譲司（以上溝口中）	男子	団体	１位	
	全国中学校大会（全中）	江府中（大谷匡史･佐々木祐人･山口浩一･森谷哲郎･久木康裕･影山陽平）	男子	団体	１位	
	全国中学校大会（全中）	日野中（谷口弘美･長尾裕美･生田結衣･梅林尚美･安達奈美･西里美･伊田京子･谷口真弓）	女子	団体	１位	
		谷口弘美･長尾裕美（日野中）	女子	個人	２位	
		生田結衣･梅林尚美（日野中）	女子	個人	５位	
	JOC杯全日本ジュニア選手権大会	谷口弘美･長尾裕美（日野中）	女子１部	D	３位	13-17歳
	中国中学校選手権大会	江府中（大谷匡史･佐々木祐人･山口浩一･森谷哲郎･久木康裕･影山陽平）	男子	団体	１位	
		日野中（谷口弘美･長尾裕美･生田結衣･梅林尚美･安達奈美･西里美･伊田京子･谷口真弓）	女子	団体	１位	
		谷口弘美･長尾裕美（日野中）	女子	個人	１位	
		山口浩一･森谷哲郎（江府中）	男子	個人	２位	
	中国地区中学生インドア大会	日野中（生田結衣･梅林尚美･安達奈美･谷口真弓･伊田京子･牧田宏美･長谷部千晶･佐々木朋香）	女子	団体	１位	
	全日本レディース大会	福田さとみ･長谷川由紀子（米子ピュアーズ･湊山ク）	ばら	個人	１位	38-45歳
	全日本シニア選手権大会	原田公夫･安田津知男（久松ク）	男子	個人	１位	60歳以上
	西日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	45歳以上

10年	中国中学校選手権大会	生田結衣･梅林尚美（日野中）	女子	個人	１位	
	中国地区中学生インドア大会	日野中（川口美紀･佐々木朋香･長谷部千晶･牧田宏美･生田希衣･荒木彩子･生田恵子･川口友美）	女子	団体	１位	
	全国高校選手権大会（インターハイ）	長谷部友紀･堀口栄子（米子西高）	女子	個人	３位	
11年	全日本中学校大会	長谷部千晶･牧田宏美（日野中）	女子	個人	３位	
	中国中学校選手権大会	日野中（長谷部千晶･牧田宏美･川口美紀･佐々木朋香･生田希衣･中川佳奈美･荒木彩子･生田恵子）	女子	団体	１位	
	中国中学校選手権大会	生田希衣･中川佳奈美（日野中）	女子	個人	１位	
	全国高校選手権大会（インターハイ）	長谷部友紀･長尾裕美（米子西高）	女子	個人	３位	
	JOC杯全日本ジュニア選手権大会	長谷部友紀･長尾裕美（米子西高）	女子１部	D	３位	18-20歳
	全日本レディース大会	秋葉泉･長尾さゆみ（フレンドシップ）	すみれ	個人	１位	38歳未満
	全日本教員選手権大会	福田寛巳（米子西高）	男子	個人	３位	45歳以上
	西日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	45歳以上
12年	全国中学校大会（全中）	生田希衣･中川佳奈美（日野中）	女子	個人	３位	
	中国中学校選手権大会	智下玲羅･笹内多恵子（日南中）	女子	個人	１位	
	中国地区高校選手権大会	生田結衣･長尾裕美（米子西高）	女子	個人	１位	
	全日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	45歳以上
		原田公夫（奥アンツーカ）	男子	個人	１位	60歳以上
13年	全国中学校大会（全中）	中川静香･中川佳奈美（日野中）	女子	個人	１位	
	中国地区中学生インドア大会	日野中（田代裕二･生田翔平･高橋裕徳･大岩昭一･谷口芳一･槙原佑樹･松本雄紀･高橋裕也）	男子	団体	１位	
		頭本志穂･中川静香（日野中）	女子	個人	１位	
	中国四国学生選手権大会	田中陽助･大橋誠（鳥取大）	男子	個人	３位	
	西日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	45歳以上
14年	都道府県対抗全日本中学生大会	中川静香･頭本志穂（日野中）	女子	個人	２位	
	全国中学校大会（全中）	日南中（長谷部順子･山本百合恵･増田美香･吉川祐美･古垣内美沙･伊藤美樹･垰田光理･河上晴菜）	女子	団体	１位	
	JOC杯全日本ジュニア選手権大会	中川静香･頭本志穂（日野中）	女子１部	D	２位	13-17歳
	中国地区中学生インドア大会	日南中（岩崎礼佳･山中さゆり･立脇由美香･山形珠礼･末次優花･河上晴菜･伊藤美樹･垰田光理）	女子	団体	１位	
	全日本選手権大会（皇后杯）	長谷部友紀（神戸松蔭女大）	女子	個人	３位	
	西日本学生選手権大会	長谷部友紀（神戸松蔭女大）	女子	S	１位	
	中国･四国学生選手権大会	谷口弘美･吉田恵美（鳥取大）	女子	個人	１位	
	アジアシニア選手権大会	原田公夫（奥アンツーカ）	男子	個人	１位	65歳以上
	全日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	50歳以上

15年	中国学生選手権大会	谷口弘美･米村理恵（鳥取大）	女子	個人	１位	
	西日本シニア選手権大会	原田公夫･森本勲（奥アンツーカ･湊山ク）	男子	個人	１位	65歳以上
16年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：三好由佳子･箕浦愛･桐谷可奈（以上岸本中）･山形珠礼･小竹沙季･佐伯成美･山中さゆり･立脇由美香（以上日南中）	女子	団体	２位	
	全国中学校大会（全中）	日南中（山形珠礼･小竹沙季･佐伯成美･山中さゆり･立脇由美香･河上亜純･古垣内美香･末次春香）	女子	団体	２位	
		三好由佳子･箕浦愛（岸本中）	女子	個人	３位	
	中国中学校選手権大会	日南中（山形珠礼･小竹沙季･佐伯成美･山中さゆり･立脇由美香･河上亜純･古垣内美香･末次春香）	女子	団体	１位	
	全日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	50歳以上
	西日本シニア選手権大会	安達和紀（ＮＴＴデータ通信）	男子	個人	１位	50歳以上
17年	都道府県対抗全日本中学生大会	稲田浩明･伊田浩貴（日野中）	男子	個人	２位	
	全国中学校大会（全中）	古垣内美香･佐伯成美（日南中）	女子	個人	２位	
	中国地区中学生インドア大会	稲田浩明･伊田浩貴（日野中）	男子	個人	１位	
	全日本シニア選手権大会	原田公夫･森本勲（奥アンツーカ･湊山ク）	男子	個人	１位	65歳以上
18年	全国中学校大会（全中）	稲田浩明･伊田浩貴（日野中）	男子	個人	３位	
19年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：須藤瑞貴･梅林麻衣（以上江府中）･谷口優佳子（日野中）･小竹里奈･原このみ･上田真沙子･生田祐子（以上日南中）･長谷川萌子（岸本中）	女子	団体	３位	
	全日本シニア選手権大会	原田公夫･森本勲（久松ク･湊山ク）	男子	個人	１位	70歳以上
20年	全国中学校大会（全中）	江府中（三好悠也･藤田康博･車和樹･澤口尚平･須藤大貴･小林大介･岡田泰徳･森川圭二郎）	男子	団体	３位	
	中国中学校選手権大会	江府中（三好悠也･藤田康博･車和樹･澤口尚平･須藤大貴･小林大介･岡田泰徳･森川圭二郎）	男子	団体	１位	
		日南中（小竹里奈･上田真沙子･西村美咲･生田祐子･名越愛･原あづさ･木村理沙･松本美佳）	女子	団体	１位	
	中国地区中学生インドア大会	江府中（須藤大貴･小林大介･岡田泰徳･森川圭二郎･細田誉将･加藤敬三･車裕樹･藤田裕義）	男子	団体	１位	
	西日本シニア選手権大会	原田公夫･森本勲（久松ク･湊山ク）	男子	個人	１位	70歳以上
21年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：西村美咲･原あづさ･木村理沙･増田亜美（以上日南中）、神庭海優･山本愛･生田遥夏･須藤冴佳（以上江府中）	女子	団体	３位	
		須藤大貴･小林大介（江府中）	男子	個人	３位	
	全国中学校大会（全中）	江府中（須藤大貴･小林大介･岡田泰徳･森川圭二郎･細田誉将･車裕樹･藤田裕義･加藤敬三）	男子	団体	３位	
		西村美咲･原あづさ（日南中）	女子	個人	３位	
	中国中学校選手権大会	日野中（松原史奈･西村渚･松本美紀･加藤梨･杠杏実･坂本茉梨乃･小谷真由･國重裕子）	女子	団体	１位	
	全日本社会人選手権大会	足羽美穂子（日野ク）	女子	個人	３位	成年の部

22年	都道府県対抗全日本中学生大会	鳥取県チーム：生田遥夏･須藤冴佳（以上江府中）･木村理沙（日南中）･坂本茉梨乃･松本美紀･小谷真由（以上日野中）･毛利望佑･河本有紀（以上岸本中）	女子	団体	1位	
	西日本選手権大会	前田豊秋･福田寛巳（久松ク）	男子	個人	1位	60歳以上
23年	中国中学校選手権大会	西村渚･小谷真由（日野中）	女子	個人	1位	
24年	中国地区中学生インドア大会	日野中（坂本樹･稲田光･松本廉･小川滉生･松本流･小川晴生･西村匠平･山本龍星･松本来･石田新太郎･森川拓海･木山璃輝）	男子	団体	1位	
25年	中国地区中学生インドア大会	日野中（小川滉生･松本遙･松本流･松本来･石田新太郎･西田一生･森川拓海･木山璃輝）	男子	団体	1位	
	西日本シニア選手権大会	原田公夫（久松ク）	男子	個人	1位	75歳以上
26年	中国中学校選手権大会	江府中（宇田川智広･浜田直明･浜田恵太･車大輔･安部冴太･橋元颯太･宇田川翔平･北村誠人）	男子	団体	1位	
	ハイスクールジャパンカップ	小谷真由･松本美紀（米子松蔭高）	女子	個人	1位	
	中国地区高校選手権大会	小谷真由･松本美紀（米子松蔭高）	女子	個人	1位	
	西日本シニア選手権大会	原田公夫（久松ク）	男子	個人	1位	75歳以上
27年	第70回国民体育大会中国ブロック大会（ミニ国体）	鳥取県チーム：三好由佳子（日野ク）･三好佳帆子（関西外語大）･坂本茉梨乃（天理大）･松本美紀（久松ク）･小谷真由（明治大）	成年女子	団体	1位	予選通過
28年	全日本学生選手権大会(インカレ)	小谷真由（明治大）	女子	D	3位	

鳥取県卓球連盟

1　選手の強化対策

昭和60（1985）年鳥取国体開催に向けて行ってきた選手強化を国体以降も継続するべく、各加盟団体が努力するとともに、強化委員会が県内外の大会成績優秀者を対象に県外のオープン大会へ参加をさせながら強化を図ってきた結果、少しずつではあるが全国大会等で勝つことができ、全体の成績が良くなってきた。さらに、一層の競技力向上を求めて、平成19（2007）年から偉関晴光（中国出身：1988年ソウルオリンピック男子ダブルスチャンピオン）を年２回から６回招き、選手強化に努めている。

2　各種大会の成績

平成９（1997）年度は、田中由貴（倉吉市：社スポーツ少年団）が､全日本卓球選手権大会（ホープス・カブ・バンビの部）女子シングルスバンビの部で優勝し日本一になった。

平成10（1998）年度は、石塚美和子（米子市：啓成スポーツ少年団)が､東アジアグランプリホープス卓球大会で日本代表選手となり本大会に出場した。

平成11（1999）年度は、田中由貴（倉吉市：社スポーツ少年団）が､全日本卓球選手権大会（ホープス・カブ・バンビの部）女子シングルスカブの部で３位に入賞した。

平成12（2000）年度は、石塚美和子（米子市：啓成スポーツ少年団出身）が、JOCジュニアオリンピックカップ2000全日本卓球選手権大会（カデットの部）女子ダブルスで優勝し日本一になっ

た。

平成13（2001）年度は、国民体育大会少年女子《監督＝中村茂樹（鳥取女子高教員)、選手＝國松春佳（鳥取女子高)・茂森亜矢子（鳥取女子高)・十亀澄香（鳥取女子高)》が、中国ブロック大会少年女子の部で、ブロック２位となり本国体出場を決めた。

平成15（2004）年度は、山田安剛（倉吉市：倉吉卓協）が、全国ラージボール卓球選手権大会男子シングルス60代Bクラスで３位に入賞した。

平成16（2004）年度は、石塚美和子（米子市：啓成スポーツ少年団出身）が、全日本卓球選手権大会（ジュニアの部）女子シングルスで優勝し日本一になった。

平成19（2007）年度は、梶田未来（倉吉市：社スポーツ少年団）が､全日本卓球選手権大会（ホープス・カブ・バンビの部）女子シングルスカブの部でベスト８に入賞した。また、櫻井琢磨（青卓クラブ)・池口直也（近畿大学）が、全日本卓球選手権大会（一般の部）男子ダブルスの部でベスト16となった。

平成20（2008）年度は、国体成年男子《櫻井琢磨（青卓クラブ)・池口直也（近畿大学)・中山裕登（南山大学)》が、第63回国民体育大会成年男子の部でベスト16に入った。

平成21（2009）年度は、松本誠樹（久米中学校教員)・池口勝裕（鳥取中央育英高教員）が、第54回全国教職員卓球選手権大会男子ダブルスの部で３位に入賞した。

平成22（2010）年度は、梶田諒（倉吉市：社スポーツ少年団）が、全日本卓球選手権大会（ホープス・カブ・バンビの部）男子シングルスカブの部でベスト８に入賞した。

平成23（2011）年度は、津村優斗（鳥取市：明治Jr卓球クラブ）が､全日本卓球選手権大会（ホープス・カブ・バンビの部）男子シングルスカブの部で３位に入賞した。

さらに平成25（2013）年度には、津村優斗（鳥取市:明治Jr卓球クラブ）が､第22回東アジアホープス卓球大会国内選考会で勝利し、日本代表選手として本大会に出場し、日本代表は優勝した。

平成26（2014）年度は、社スポーツ少年団卓球部（監督＝小谷良二、選手＝山本歩・伊藤陸・石田怜央・渡辺悠一郎）が、全国ホープス卓球大会男子団体の部で、ベスト８に入った。

平成27（2015）年度は、国民体育大会成年男子《監督＝坂根康之（倉吉卓球クラブ)、選手＝櫻井琢磨（青卓クラブ)・矢城智弘（立命館大学)・広瀬貴之（北陸大学)》が、中国ブロック大会成年男子の部で、ブロック３位となり本国体出場を決めた。

３　国際・全国大会を開催

現在、県内卓球人口は日本卓球協会登録者が2600人余であり、少子化による人口の減少の中、卓球人口の増大と競技力向上を図ることを目的として、国際大会・全国大会の誘致に取り組んできた。

また､平成26年度から平成28年度までの３年間、日本卓球協会男子ホープスナショナルチームの合宿を誘致した。県･鳥取市の協力を得てコカ･コーラウエストスポーツパーク鳥取県民体育館サブアリーナで開催した。県からは鎌田和希（鳥取市、ＭＴＣ鳥取)、石田怜央（倉吉市、社スポーツ少年団)、津村真斗（鳥取市、 明治卓球クラブＪｒ）が参加した。

開催日	大会名	会場
平成５年	全国軟式卓球選手権大会	鳥取市
平成14年 11月14日～15日	JR西日本カップ卓球フェスタ	鳥取市
平成15年 11月14日～16日	温泉卓球「三朝温泉」大会	三朝町
平成16年 11月12日～14日	JOCジュニアオリンピックカップ（平成16年度全日本卓球選手権大会カデットの部）	鳥取市
平成18年 10月22日～24日	第19回全国スポーツレクリエーション祭	琴浦総合体育館

平成19年 11月16日～18日	温泉卓球「皆生温泉」大会	米子市
平成24年 ７月27日～29日	第一三共ヘルスケア全国レディース卓球大会	コカ・コーラウエストスポーツパーク鳥取県民体育館
平成29年 ３月24日～26日	全国ホープス選抜卓球大会	コカ・コーラウエストスポーツパーク鳥取県民体育館
平成30年 10月23日～31日	2018 ITTF World Cadet Challenge Tottori Japan	コカ・コーラボトラーズジャパンスポーツパーク鳥取県民体育館

４　課題と今後の飛躍

強化委員会を中心に選手強化を図り、全国大会等でも成果が出てきているが、今以上の成果を得るためには、選手の母体での練習が大切であることから、優秀な指導者の養成が必要である。

平成30年度から､強化委員会を中心に､県内ホープス・中学校の指導者を対象にした研修会、講習会を実施しながら、県全体の指導者のレベルアップを目的とした取り組みを行うこととした。

また、少子化による競技人口の減少、優秀な小学生・中学生選手の県外中学校、高校への流出の対策を早急に検討していく必要が求められている。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成元年	～　15年	伊勢　淳一
16年	～　29年８月	武田　一彦
29年９月～		依藤　典篤

◇理事長

平成２年	～　５年	西村　正美
６年	～　15年	武田　一彦
16年	～　23年	谷口　和敏
24年	～	松本　秀樹

鳥取県軟式野球連盟

１　米子市で全日本・西日本大会を開催

平成９年（1997）５月に第19回西日本軟式野球大会（２部）を、平成13年（2001）11月に第５回西日本軟式野球大会（１部）が米子市を中心に開催されている。更に平成17年（2005）９月は米子市民球場をメイン会場に天皇賜杯第60回全日本軟式野球大会が開催された。この大会では、鳥取県代表の三洋電機鳥取の活躍に野球ファンが大いに沸いたのである。

２　全国に名を馳せた三洋電機鳥取

平成５（1993）年の秩父宮妃賜杯で三洋電機鳥取が、平成６年の西日本大会（２部）で西部消防局野球部がともに準優勝し県勢のレベルの高さを示した。

平成11（1999）年の、高松宮賜杯（１部）全日本大会では西部消防局野球部がベスト４、平成12（2000）年の富山国体では三洋電機鳥取が４位入賞した。

平成13（2001）年11月に米子市を中心に第５回西日本軟式野球選手権大会を開催している。

更に平成17（2005）年９月に、米子市民球場をメイン会場に開催された天皇賜杯第60回全日本軟式野球大会では､三洋電機鳥取は準決勝に進出し、同年の岡山国体では５位入賞した。

平成19（2007）年の秋田国体では、前年の準決勝敗退の無念をバネに三洋電機鳥取が２度目の優勝を飾った。

平成23（2011）年には、三洋電機鳥取が岩手県で開催された天皇賜杯の決勝戦で大阪信用金庫を下し、大会２度目の優勝、11月に米子市･境港市･西伯郡で開催した第15回西日本軟式野球選手権大会では準優勝した。

また、この年には高松宮賜杯（２部）でダイヤ

天皇賜杯連覇のパナソニック鳥取

モンド電機野球部がベスト４入りした。

平成24（2012）年に沖縄県で開催された天皇賜杯でパナソニック鳥取野球部（旧三洋電機鳥取）が大会２連覇を達成し、11月に福岡県で開催された西日本選手権でも大阪信用金庫との決勝戦を制し、初優勝した。

平成25（2013）年、数々の輝かしい成績を残し、全国に名を馳せた三洋電機鳥取（パナソニック鳥取野球部）は会社組織の都合により、前年限りで廃部となり、旧メンバーを中心に結成した鳥取ベースボールクラブもこの年の１年限りで解散を余儀なくされた。

その後、平成26年、高松宮賜杯（２部）では養和会が、平成27（2015）年の西日本大会（２部）で鳥環スカイラークスがともに準決勝に進出し、若いチームの活躍も見えてきた。

養和会は平成28（2016）年に大阪市で開催された西日本軟式野球大会（１部）で５試合を勝ち抜き、見事優勝を飾った。

３　国体改革で軟式野球の隔年実施

平成15年３月に日本体育協会は「国体改革2003」を公表した。これは、国体開催県の負担軽減を図るため、実施競技・種別の縮小、参加選手数の削減など国体のあり方を改革しようとするものであった。

軟式野球はこの改革で、隔年実施種目にされ、全日本野球連盟は他の野球団体と協力して、反対署名活動をはじめ、120万人の署名を集めて日本体育協会に提出した。前田宏会長も県体育協会に反対要望書を提出し、支援を求めている。

平成21年３月の日体協の評議員会で、全日本野球軟式連盟の評議員の反対発言に次いで、鳥取県の評議員である田淵県体協会長が隔年実施の決定の方法、手順が不適切であり、再検討すべきであると発言したのであった。（第７章第２節参照）

４　課題と将来ビジョン

鳥取県軟式野球連盟は軟式野球を県民全般に普及し、その健全な発展を助成振興するとともに県民体力の向上及びスポーツマンシップの浸透と会員相互の親睦を図ることを目的とし、各種大会の開催、軟式野球の普及・発展、競技力向上などに取り組んできた。

大会の開催に関しては、昭和60年の「わかとり国体」をはじめ、天皇賜杯、高松宮賜杯、西日本大会などの全国大会やブロック大会を開催してきており、平成30（2018）年、2021年にも本県で全国大会を開催することとしている。

軟式野球の普及に関しては、少子高齢化が急速に進んでいる現状から学童の部で単独校のチームは減少傾向にあるが、野球を通じた青少年の健全育成は確実に定着しており、学童から壮年、還暦、古希に至るまで各年齢層で軟式野球の普及がみられる。

競技力向上に関しては、長きにわたり県軟式野球界を牽引した三洋電機鳥取の廃部によって、全国大会での活躍に一服感はあるが、これに続くチームを育成強化していくことが今後の課題である。

また、少年・学童の部についても全国大会で活躍できるよう、今後も競技力向上に努めていく必要がある。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和54年～平成14年　　本田　隆昭

15年～　29年　前田　宏
30年～　筒井　実

◇理事長
昭和63年～平成25年　筒井　実
26年～　27年　永田　浩
28年～　倉鋪　武志

鳥取県相撲連盟

第60回岡山国体で総合優勝を果たした鳥取県選手団

1　国体での活躍

～ 初優勝・競技別総合優勝 ～

国民体育大会相撲競技は第43回大会(平成元年)から少年種別１（少年男子)、成年種別３（成年男子Ａ、成年男子Ｂ、成年男子２部）の４種別で大会が行われていたが、競技者の減少、国体改革等の影響により第63回大会（平成20年）から少年種別１（少年男子）成年種別１（成年男子）の２種別での開催となった。

（成年男子２部については第50回大会で終了）

第43回大会から始まった新得点方式になってからも度々入賞をしてきた鳥取県であったが、ついに第54回熊本国体（平成11年）で少年男子が初めての団体優勝を果たした。その後も第60回岡山国体、第66回山口国体、第68回東京国体で優勝を果たしている。

また、平成17（2005）年に中国地区で開催された第60回岡山国体では、少年男子、成年男子Ｂで団体優勝、成年男子Ａが団体準優勝を飾った。競

第54回熊本国体で初優勝を果たした少年男子
上段左より、井上 俊男、石浦 外喜義監督、石前 辰徳
下段左より、桝田 貴博、田熊 貴彦、境澤 健一

技得点も85点という大量点を獲得し、鳥取県初となる悲願の競技別総合優勝（天皇杯）を手にした。翌年の第61回兵庫国体でも少年男子団体３位、成年男子Ａ団体優勝を果たし、競技得点54点で２年連続の競技別総合優勝を飾った。

その後も第66回山口国体、第68回東京国体で競技別総合優勝を飾っている。

【 国民体育大会の記録 】（１回～ 72回まで）

※上位入賞（３位以上）のみ記載

回数	種別	種目	順位
10回	少年男子	団体	第２位
39回	成年男子	個人	第２位
47回	少年男子	団体	第３位
48回	少年男子	個人	第３位
49回	少年男子	個人	第２位
52回	成年男子Ａ	個人	優勝
53回	成年男子Ａ	個人	優勝
54回	少年男子	団体	優勝
〃	〃	個人	第３位
55回	成年男子Ａ	団体	第３位
56回	少年男子	団体	第２位
58回	少年男子	個人	第２位
60回	少年男子	団体	優勝
〃	〃	個人	第２位
〃	成年男子Ａ	団体	第２位
〃	成年男子Ｂ	団体	優勝
61回	少年男子	団体	第３位
〃	成年男子Ａ	団体	優勝
62回	少年男子	個人	優勝
〃	成年男子Ｂ	団体	優勝
63回	成年男子	団体	優勝
64回	成年男子	団体	優勝
66回	少年男子	団体	優勝
〃	〃	個人	優勝
〃	〃	〃	第２位
〃	成年男子	個人	優勝
68回	少年男子	団体	優勝
〃	〃	個人	第３位
69回	少年男子	団体	第２位
71回	成年男子	個人	優勝
72回	成年男子	個人	第２位

２　全国大会での活躍

～ 高校相撲初の団体・個人完全制覇 ～

高校相撲は選抜高校相撲弘前大会、全国高等学校相撲選抜大会、高等学校相撲金沢大会、全国高校総合体育大会、全国高校相撲十和田大会、選抜高校相撲宇佐大会、国民体育大会の７大会が全国大会として毎年開催されている。（選抜高校相撲弘前大会は日本相撲連盟主催大会ではない）

その中でも高等学校相撲金沢大会においては平成28（2016）年度に第100回を迎え、日本で最も長く続いている全国大会として、その名を轟かしている。

鳥取城北高校に石浦外喜義監督が赴任してから数々の全国大会で優秀な成績をあげてきた鳥取県であるが、平成22（2010）年度に行われた全国高校総合体育大会（インターハイ）の団体優勝をもって、すべての全国大会で団体優勝を飾るという功績を残すことができた。

また翌年の平成23年には、開催された全ての全国大会で団体・個人ともに優勝するという高校相撲史上初となる完全制覇を達成した。（全国高等学校相撲選抜大会については東日本大震災のため中止）

このことは鳥取県相撲連盟としても栄誉ある出

平成23年度全国高校総合体育大会で
団体優勝を果たした選手

来事であり、鳥取県民に良い報告ができたのである。

【 平成23年の完全制覇大会記録 】

第25回選抜高校相撲弘前大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・福田） ・個人優勝　佐々木　・２位　木﨑信
第95回高等学校相撲金沢大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・ イチンノロブ） ・個人優勝　木﨑信
第89回全国高校総合体育大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・福田・ イチンノロブ・中島・木﨑伸） ・個人優勝　佐々木
第60回全国高校相撲十和田大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・ イチンノロブ） ・個人優勝　イチンノロブ　・３位　木﨑信
第54回選抜高校相撲宇佐大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・ イチンノロブ） ・個人優勝　イチンノロブ ・２位　佐々木　・３位　宮下
第66回国民体育大会 ・団体優勝（木﨑信・佐々木・宮下・福田・ イチンノロブ・中島・谷本） ・個人優勝　木﨑信　・２位　イチンノロブ

３　ジュニア世代の発掘・育成事業

～ 因幡相撲道場の発足 ～

鳥取県相撲連盟として県内相撲の発展と人材発掘・育成を目的として平成３（1991）年から鳥取県相撲選手権大会を開催していたが、相撲を一貫して行える環境が東部地区になかったことから、平成10（1998）年に因幡相撲道場を発足させたのである。

鳥取城北高校ＯＢで拓殖大学卒業の小村仁志と日本大学卒業の倉本慎太郎を指導者に置き、週３回程度の稽古を行った。当初は２名でのスタートであった因幡相撲道場だったが、鳥取県相撲選手権大会や桜相撲でPRしたほか、県内小学校に赴き、熱心なスカウト活動を行った。道場では鳥取砂丘での走り込みなど相撲以外の練習を取り入れるなどして、楽しく練習を行える環境作りを徹底した事により、数年後には30名を超える大所帯にまで拡大することができたのである。

こうした地道な努力が実を結び、道場で育った子が各種全国大会で優勝・入賞をするまでになった。現在では因幡相撲道場出身で高校時代にインターハイで個人優勝を果たした佐々木耕大が日本大学卒業後、県地域振興部スポーツ課でスポーツ指導員として活動し、自身の練習はもとより、後輩の育成に尽力している。

鳥取市立西中学校の相撲部は、全国中学校体育大会で好成績を残してきたが、同校には土俵がなく近くの鳥取城北高校で高校生と一緒になって練習に励んでいた。平成16年11月にかねてから鳥取市教育委員会に要望していた相撲場（平屋鉄工造）がオープンし、鳥取城北高校、日本大学出身の先輩らが教員として勤務することとなって、けいこが充実されることになった。そして鳥取城北高校に進学してさらに強くなっていった。

このような良い流れを、鳥取県相撲連盟として切らすことなく今後も継続させていく必要がある。

４　モンゴル人留学生の受け入れ

平成９（1997）年から始まった、モンゴル国中央県と鳥取県の友好交流を受け、平成11（1999）年に当時県体育協会副会長で県議会議員であり中央県友好交流会長の浜崎芳宏と鳥取城北高校相撲部監督の石浦外喜義で、モンゴル相撲の視察を行った。

当時、日本の大相撲がブームになりつつあったモンゴルでは、この視察に合わせてモンゴル相撲の大会が開催された。参加人数も100名を超える大規模な大会になり盛大に行われたのである。また、この大会を通してモンゴル人の身体能力の高さ、親を敬う真摯な気持ちに感銘を受けた浜崎芳宏と石浦外喜義は、成績上位の３名を留学生として受け入れることを決意し、翌平成12（2000）年、鳥取城北高校に通訳を含めた３名、鳥取西中学校に１名が留学生として来日した。（鳥取西中学校の留学生については３か月の短期留学）

来日当初は、モンゴルと日本の文化や相撲という競技の違いに戸惑いを覚えながら生活をしてい

た留学生だが、愚直なまでの向上心を見せ、１年後にはレギュラーに入るまでになったのである。

鳥取城北高校に留学をしていた２名は、高校卒業後大相撲の道に進み、城ノ龍関（オドゲレル・最高位十両筆頭)、星風関（アマルメンド・最高位十両３枚目）として大相撲に新風を吹き込んだのである。

５　大相撲での活躍

～ 53年ぶりの郷土出身関取の誕生 ～

これまで、琴光喜関（田宮啓司・最高位大関）や照ノ富士関（ガンエルデネ・最高位大関)、逸ノ城関（イチンノロブ･最高位関脇)、貴ノ岩（最高位関脇）など大相撲界で活躍してきた鳥取城北高校出身力士であるが、平成27（2015）年３月場所に、石浦外喜義監督の子息でもある石浦関（本名石浦将勝・宮城野部屋）が琴櫻関以来、実に53年ぶりとなる鳥取県出身関取になった。同関取は翌年の平成28（2016）年11月場所には、こちらも53年ぶりになる新入幕を果たし、10勝５敗の好成績で敢闘賞を獲得している。

また、新入幕の快挙と鳥取県中部地震の復興を祈願するため、11月場所前の2016年10月31日に鳥取市内でパレードが行われた。パレードには同部屋で兄弟子になる横綱白鵬関や中学校時代から同級生でライバルでもあった大喜鵬関も同席し、鳥取県庁から鳥取駅までの約２㎞という距離の沿道には､大勢の県民が集まった。その際石浦関は「鳥取は今､復興で大変だが自分が元気な相撲を見せ、勇気を与えたい」と県民に奮戦を誓った。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成５年～18年	藤井	省三
19年～24年	淵本	寿博
25年～	石破	茂

◇理事長

平成２年～18年	井田	雅夫
19年～	石浦外喜義	

鳥取県馬術連盟

１　国体での活躍

わかとり国体以降、少年選手であった北垣和宏と山林（藤谷）真由美は成年として国体に参加すると共に、少年選手の育成と競技馬の調教に尽力してきた。

国体では、山林真由美がわかとり国体以降も入賞12回という実績を挙げるなど、県勢の第一人者として活躍を続けており、福井国体でも２種目の入賞を果たしている。また、和歌山国体では国体出場回数30回という記録を打ち立てた。これは、体力面より技術力が大きくかかわる競技であることから成し得た結果である。このことは馬術競技が生涯スポーツとして行える競技であることを雄弁に物語っている。

少年選手育成でも効果を挙げており、特に団体障害飛越競技においては入賞回数が多く、近年では山口国体で原雅貴と西濱童夢の少年のペアで団体優勝し、福井国体では中高校生の本田萌果・青戸彬真・青戸友紀子が少年団体で準優勝したのである。

わかとり国体以降少年選手として活躍してきた山本一と祇園（山本）小百合姉弟は、自身も選手として国体に参加するとともに、少年選手の育成にも力を入れて、その努力は結果を出してきており、近年の少年種別の入賞に繋がっているのである。その一例として、福井国体では少年トップス

コア競技で青戸彬真とラコルZ号が個人種目で５位入賞を果たすことができた。今後の活躍が大いに期待できる。

２　競技馬の確保が困難

馬術競技は、競技用に生産された外国産馬が競技の大半を占めている。外国産馬が主流の中、県勢は競馬を引退したサラブレッドを再調教して国体に参加してきた。その中で、外国産馬と同等に戦い、入賞を果たしてきたことは、県勢の技術力の高さを示していることにほかならないだろう。

しかしながら、近年は競走馬から転用した競技馬では個人種目で入賞することは厳しくなってきており、千葉国体を最後に個人種目での入賞から遠ざかっていた。県勢でも外国産馬の導入が必要となって来ていたが資金面で実現できなかった。

そうした中で2015（平成27）年と2016年に、個人の所有馬としてラコルＺ号とルスティカーナ号を導入して国体に貸与していただいた。結果として、福井国体ではこの２頭で３種目の個人競技入賞を果たすことができた。しかし、所有者個人に掛かる負担は大きく、今後この体制を維持して行くのは非常に難しい状況である。

３　今後の課題

少年選手の継続的な確保については連盟として大きな課題と認識している。小学生時代に馬術に興味を持ったとしても、本格的に競技を始める中学生になった時に部活動を行わなければならず、部活動優先になってしまい、馬術競技を続ける子どもがいなくなってしまうという厳しい現状がある。

乗馬教室やふれあい体験を実施し、多くの子どもたちに興味を持ってもらい、底辺の拡大に努めていくことが望まれる。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年～平成17年	三森　政治
18年～　27年	小谷　茂
28年～	大川順一郎

◇理事長

昭和61年～平成13年	大川順一郎
14年～	山本　克己

鳥取県フェンシング協会

鳥取県選手権での熱戦

鳥取県のフェンシングは、昭和60（1985）年の鳥取国体における運営および天皇杯得点の獲得を目標に選手、役員が育成された。本国体では、成年男子総合優勝をはじめ少年男子７位、少年女子８位、総合２位の成績を挙げ、鳥取県の天皇杯･皇后杯獲得に大きく貢献した。本協会のスタートは鳥取国体であった。

１　輝く鳥取西工高の中国５連覇

鳥取市湖山町にある鳥取西工業高校は、平成13（2001）年に少子化による高校再編によって鳥取湖陵高校として統合再編されたが、わかとり国体後、県フェンシング競技のメッカとして、選手、監督が栄光をふたたび夢見て活動していた。当時の監督は玉木茂教諭で、鳥取国体では選手として活躍した。

鳥取西工高は、フェンシングをはじめウェイトリフティングも強く、フェンシング同様に国体で選手として活躍した監督が指導していた。生徒も高校から横一線でスタートするそれらの競技に、夢を追い、夢中になって努力する気運があった。

鳥取西工高フェンシング部の実績の中で、光り輝くのは、中国大会における男子団体５連覇である。

スタートは平成５（1993）年で、居川（故人）、小林、右近で優勝した。平成６年には、土谷、幾田､坂本で２連覇した。平成７（1995）年は､坂本、山田、光浪で３連覇、平成８（1996）年は、谷口、下田、田中で４連覇、平成９（1997）年には森本、田中、矢谷で５連覇したのである。

その後、鳥取工高、鳥取湖陵高、米子南高が中国大会で団体優勝するが、連覇はなく５連覇は偉業といえる。

当時の若き指導者と、夢追う選手が同じ目標達成を目指し努力し、そこに伝統が育まれた結果だろう｡「中国に鳥西工有り」と席巻したものだった。

２　女子選手の台頭

県内フェンシング競技の弱点は女子選手が少ないことであった。それは､平成14（2002）年まで、県内のフェンシング部は鳥取工高と鳥取西工高の２校しかなく、共に工業高校ゆえ女子の在籍者が少なかった。

平成５年、鳥取西工高の女子指導に岡本豊司が加わり、「有志必成」を部の信条として数人の女子部員を指導し、平成６年、柳田奈、中山、田中千で中国大会女子団体初優勝、平成７年、女子個人フルーレで田中が初優勝、平成８（1996）年柳田訓が県内初の女子個人でフルーレ、エペの２種目優勝を果たした。（２種目優勝はその後まだない）さらに平成９年、百田、幸山、岡本啓で栃木選抜大会で５位入賞を成し遂げた。

この頃から、大学に進学し上位のレベルで競技

を行う選手も出てきた。平成10（1998）年に幸山が専修大、平成11年に岡本が東京女子体大、平成13（2001）年に麻木が東京農大に進学して競技を続け、今日の成年女子の礎を築くことになったのである。

３　世界に羽ばたいた鳥取西工高選手

平成７年世界ジュニア・パリ大会（右から玉木、田中）

男女で躍進する平成７（1995）年から平成10（1998）年の間に鳥取西工高で快挙があった。平成７年１月、県勢として初めて挑んだＪＯＣ杯で、いきなり男子サーブルで坂本が２位、女子フルーレで田中が３位入賞し、世界ジュニア選手権の切符をアベックで獲得した。平成９（1997）年には、田中の弟の田中元もＪＯＣ杯サーブルを制し、スペイン大会に出場した。さらに平成10年に藪田がＪＯＣ杯エペを制し、ベネズエラ大会に出場した。藪田は、その年フィリピンで開催されたアジアユース大会に出場し５位入賞を果たした。

当時、世界大会と聞けば手の届かないものと感じていたが、一度突破すると選手の意識も変わってくる。「先輩にもやれたのだから」という気持ちになる。先に記した鳥取西工高の中国５連覇のときも同様だろう。

４　活動拠点を県外に置く選手も発憤

その頃、本県から大学進学後、その技量を見込まれ県外で所属し活躍した選手が２名いる。昭和61(1986)年鳥取工高卒の西垣仁志と平成元(1989)年鳥取西工高卒の下田正毅。西垣は平成３(1991)年国体開催の石川県に就職、下田は警視庁に就職した。ともに世界大会の出場経験のある選手に成長し、平成９（1997）年の神奈川全日本選手権において西垣がエペ、下田がサーブルで優勝し、ダブルで日本一に輝いた。当時、県関係者は大いに沸いた。

時代が移り、少子化、高校改革の中、鳥取西工高の体制を鳥取湖陵高が平成15（2003）年に完全に引き継いだ。玉木は平成13（2001）年から鳥取工高に転勤し休部状態の部の立て直しを始めた。鳥取湖陵高は、玉木とともに平成７（1995）年から指導している同校卒業の松本芳彦が引き継いだ。

全国の情勢も、平成10(1998)年頃から一変した。太田雄貴の登場である。太田は平成13年熊本インターハイを皮切りに個人フルーレで３連覇し、その後平成20（2008）年北京オリンピックで日本人初の個人銀メダルを獲得したのである。太田は小学生からジュニアクラブでフェンシングを始めたことが話題となり、全国各地でジュニアのフェンシングクラブが林立した。その頃からインターハイ等では、ジュニアクラブで育った選手が上位を占めるようになった。いわゆるユニフォームに日の丸を付けたＪＡＰＡＮの台頭である。

平成７年に中国地方で先駆けて世界大会出場選手を輩出した本県であったが、気がつけばジュニアの普及に出遅れた感は否めなかった。

５　鳥取ジュニアフェンシングクラブの発足

平成18（2006）年12月、鳥取国体少年男子の候補選手であった田中雅規の声かけで、鳥取ジュニアフェンシングクラブが始動した。スタートは田中の息子を含め小学５年生３名であった。会場は鳥取工高。毎週土曜日の午後、鳥取工高フェンシング部員も協力して活動し、徐々に定着して今日

まで11年間、延べ31名のメンバーを輩出した。メンバーの中で、高校進学後も競技を続ける者も出てきた。高校にフェンシング部がない場合もあったが、高体連を通して各校にお願いし、大会参加を了解していただいた。時勢として社会体育のクラブも認めていく流れも出てきたことも幸いであった。

高校進学後も競技を続けたジュニアクラブの選手を下記にまとめた。普及が徐々に実ってきたといえる。

田中翔人	H26鳥西卒	H25大分インターハイ出場
井上　諒	H26鳥西卒	H25大分インターハイ出場
小倉大樹	H29鳥工卒	H29山口インターハイ出場
杉本心萌	鳥工３年	H30愛知インターハイ出場
山本和奈	敬愛３年	H30県高校総体出場

６　米子南高の始終

鳥取国体成年女子の主将であった高岡智奈美（旧姓岡田）は､国体後県西部地区に転勤しバレーボール部の顧問をしていた。

しかし、平成16（2004）年開催の鳥取インターハイ実行委員会の井谷に依頼され、競技役員を引き受けることになった。このことが契機となり、平成17年に、高岡は当時勤務していた米子南高校のフェンシング同好会を部に昇格させ、本格的な活動を行った。部費もない中､自費で用具を揃え、強化するため隣県のフェンシングの強豪高安来高校に定期的に出向いた。その後選手は、着実に力を付け、平成17年の県高校総体に初参加した。鳥取県初の東、西の戦いがスタートしたのである。

米子南高の選手・監督（H20埼玉インターハイ会場）

県高校総体の歴史をみると、女子個人エペで平成17年の足立の優勝を皮切りに、平成20（2008）年の川口まで同種目４連覇を達成している。さらに平成20年は県高校総体女子団体初優勝を成し遂げ、埼玉インターハイに出場している。また平成20年の岩国での中国大会では、川口、吉川、田總でリーグ戦４戦全勝で初出場初優勝の快挙を成し遂げた。この強豪米子南高女子チームはその年のミニ国体も優勝し､第63回大分国体にも出場した。少年女子監督は高岡であったことは言うまでもない。

その後、平成22（2010）年に黒見が女子個人エペで沖縄インターハイ出場した。黒見は、平成23年の青森インターハイも同種目連続出場し、米子南高初の個人ベスト16入りに輝いた。

その後、高岡は平成25（2013）年に米子東高に転勤となった。転勤先でもフェンシング同好会を立ち上げ、今も普及に努力している。

平成30年３月、米子南高の部員減により、かねてより部活動の縮小を検討していた同校は、フェンシング部の廃部を決定した。当時１、２年生がいないとはいえ、５名の３年生がインターハイを目指して頑張っており、非情な決定に関係者は言葉を失った。

県フェンシング協会関係者は、米子南高の14年間の活動に敬意と感謝の心を持ち、いつの日か復活することを信じて待ちたいと望みをもっている。

７　全国大会入賞の歴史

米子南高の廃部が決まり、残念な思いがよぎるものの、それを乗り越え、鳥取のフェンシングを未来につなぐことが一層大切である。ジュニアクラブの普及もある。さらに全国で活躍してきた高校生の歴史がある。

平成９（1997）年、京都インターハイでの鳥取西工高田中元(はじめ)の男子個人フルーレ７位、

サーブル３位の２種目入賞が筆頭だ。１種目の入賞も至難だが、２種目入賞者は今後出ることはないかもしれない。

さらに、平成15（2003）年長崎インターハイにおける女子団体鳥取湖陵の３位入賞が特筆される。平成13（2001）年に創立された鳥取湖陵高校は、完成年度として初めてインターハイに参加した。無名の鳥取湖陵は、鳥西工出身の山田監督のもと、抜群のチームワークで優勝候補を撃破しての３位入賞を果たした。「やればできる」を示した大会であった。

平成６（1994）年以後、今日までインターハイ個人入賞者は13名となり、特に平成９（1997）年から平成16（2004）年までの８年間は連続入賞を果たしている。鳥取国体以後伝統を引き継いでおり、まさに「お家芸」と言っても過言でなかろう。

別表に平成６年以後の全国大会の入賞をはじめ中国大会の優勝および全国で活躍した入賞の歴史をまとめた。

８　２巡目国体に向けて

鳥取国体で産声をあげた本協会も33年を過ぎ、歴史とともに競技実績、大会運営能力も全国と肩を並べるものとなった。そして、いよいよ２巡目国体が現実となるようだ。具体的なものはこれからだが、次の３点を柱として協会を再構築の必要がある。

（１）一層の普及

鳥取のジュニアクラブは10年の歴史となるが、一層活性化し、ミニムからカデット、ジュニアそしてシニアへと繋いでいくことがのぞましい。また高校に部がなくても競技会に参加できる体制を常に準備することが必要である。

さらにシニアクラブの発展が不可欠である。各校の卒業生が選手として趣味として継続できる環境を整備することと、ジュニアクラブとシニアクラブが連携することが望まれる。

（２）全国級の大会の開催

現在平成25（2013）年から毎年５月に、全日本選手権の中国地区予選を開催している。会場は鳥取産業体育館で立地条件も良く、県外選手から好評を得ている。さらに、平成30年は同会場でジュニアの中四国少年大会も開催した。フェンシング競技をメジャーにするためには、観客を集めて一般の方に見てもらうのが一番である。定着させるために、今後も引き続き全国級の大会運営などに努めることが肝要である。

（３）新たな強化策を

輝かしいインターハイの歴史があるものの、気がつけば　平成24（2012）年から今日まで入賞がない。さらに国体においては平成20（2008）年の大分国体以後10年間、少年男女の出場がない。従前の強化に頼らず、強化の見直しが急務である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和59年～	山口　享

◇理事長

昭和59年～平成16年	前田崇明
17年～	山宮順一

ジュニアクラブの躍進
西日本大会での活躍（平成26年12月）

鳥取県 高校フェンシング栄光のあゆみ

年度	中国大会優勝者			インターハイ入賞者				全国高校選抜大会入賞者			
	会場	種目	校名・名前	会場	種目	成績	校名・選手（監督）	会場	種目	成績	校名・選手（監督）
Ｈ６	福山	男子フルーレ	土谷宣彦（鳥西工）	婦中	男子エペ	16強	林隆夫（西工）	和歌山	男子団体	４位	鳥西工高 上田、坂本 山田、光浪 藤原（玉木）
		男子サーブル	土谷宣彦（鳥西工）		男子団体 5-0東海一 5-0甲陵 1-5東亜	16強	鳥取西工 土谷、幾田 上田、坂本 光浪（玉木）		女子団体	予選敗退	鳥西工高
		男子団体	鳥西工高								
		女子団体	鳥西工高		女子団体シード 5-1諫早 1-5岐女商	16強	柳田奈、中山 田中、米村 柳田訓（岡本）				
Ｈ７	安来	男子フルーレ	光浪潤一（鳥西工）	安来	男子サーブル	16強	坂本豪志（西工）	箕輪	男子団体	予選敗退	鳥西工高
		男子サーブル	坂本豪志（鳥西工）		女子エペ	16強	田中るり子（鳥工）		女子団体	予選敗退	鳥西工高
		女子フルーレ	田中千穂（鳥西工）		男子団体シード 5-1東亜 5-3札幌 0-5埼栄	５位	鳥取西工 上田、坂本 山田、光浪 藤原（玉木）				
		男子団体	鳥西工高								
Ｈ８	鳥取	男子サーブル	田中　元（鳥西工）	甲府	男子サーブル	16強	下田直樹（西工）	栃木	男子団体	５位	鳥西工高 森本、矢谷 渡邊、勢登 藪田（松本）
		女子フルーレ	柳田訓子（鳥西工）								
		女子エペ	柳田訓子（鳥西工）						女子団体	16強	鳥西工高
		男子団体	鳥西工高								
Ｈ９	岡山	男子サーブル	田中　元（鳥西工）	京都	男子サーブル	３位	田中元（西工）	札幌	男子団体	予選敗退	鳥西工高
		男子団体	鳥西工高		男子フルーレ	７位	田中元（西工）		女子団体	予選敗退	鳥西工高
		女子団体	鳥西工高			16強	森本研吾（西工）				
					男子エペ	16強	森本研吾（西工）				
					男子団体シード 5-2北陸 5-1愛工 4-5粕屋	５位	鳥取西工 森本、矢谷 田中、石原 藪田（松本）				
Ｈ10	平生	優勝なし		牟礼	男子エペ	８位	藪田光昭（西工）	岩国	女子団体	予選敗退	鳥西工高
					女子エペ	16強	岡本啓子（西工）				
Ｈ11	福山	男子サーブル	石原　顕（鳥西工）	岩手	男子サーブル	７位	松葉大作（西工）	岐阜	男子団体	５位	佐野、石原 池澤、中本 山元（松本）
		女子エペ	麻木由記子（鳥西工）		女子エペ	16強	麻木由記子（西工）				
					女子団体 5-3和東 5-3梅花 2-5聖霊	16強	鳥取西工高 坂本、麻木 末吉、梶川 （玉木）				

H12	岡山	男子エペ	池澤諭司 (鳥西工)	岐阜	男子サーブル	４位	石原顕 (鳥西工)	大山崎	男子団体	予選敗退	鳥西工高
		男子サーブル	石原　顕 (鳥西工)		男子団体 5-0首里 5-3札幌 4-5一関二	16強	鳥取西工高 佐野、石原 山元、池澤 池澤春(松本)				
					女子団体 5-2諫早 5-2同志社 5-4田名部 2-5豊府	５位	鳥取西工高 麻木、末吉 梶川、村上 恒松（玉木）				
H13	鳥取	男子フルーレ	池澤春光 (鳥西工)	熊本	男子サーブル	３位	池澤春光 (西工)	川俣	女子団体	予選敗退	鳥西工高
		男子サーブル	池澤春光 (鳥西工)		女子フルーレ	16強	梶川奈緒子 (湖陵)				
		男子団体	鳥西工高								
H14	安来	男子エペ	山本竜二 (鳥工)	茨城	男子エペ	５位	西土井悠作 (鳥工)	福岡	男子団体	予選敗退	鳥取工高
		男子サーブル	松本拓海 (鳥西工)								
		女子エペ	恒松直美 (鳥西工)								
		女子団体	鳥西工高								
H15	平生	男子団体	鳥取工高	長崎	女子フルーレ	16強	寺坂沙織 (湖陵)				
					女子団体 5-3剣見川 5-4鷲谷 5-1埼栄 5-0諫早 3-5大川東	３位	鳥取湖陵高 寺坂、児島 山本、保木 本小林(山田)				
H16	鳥取	男子サーブル	近藤祐樹 (湖陵)	鳥取	男子サーブル	８位	近藤祐樹 (湖陵)	上天草	男子団体	予選敗退	鳥取工高
		女子エペ	小林淳子 (湖陵)		女子団体シード 5-0札幌 2-5米沢東	16強	鳥取湖陵高 小林、谷口 中川、田中 坂本（松本）				
H17	玉野	男子フルーレ	小坂真吾 (鳥工)	松戸				米沢	男子団体	１６強	鳥取工高
									女子団体	予選敗退	鳥取湖陵
		男子サーブル	小坂真吾 (鳥工)								
H18	福山	男子フルーレ	田村昇平 (鳥工)	大山崎	男子サーブル	７位	田中志朗 (鳥工)	新座	男子団体	予選敗退	鳥取工高
									女子団体	予選敗退	鳥取湖陵
		男子サーブル	田中志朗 (鳥工)								
		男子団体	鳥取工高								

H19	安来			佐賀	女子サーブル	３位	眞田美幸 （湖陵）	一関	男子団体	予選敗退	鳥取工高
									女子団体	予選敗退	米子南高
					男子エペ	16強	有澤知輝 （鳥工）				
					女子団体 シード 5-3諫早 5-3田名部 0-5美萩野	５位	鳥取湖陵高 中原、眞田 田中、中江 （森本）				
H20	岩国	男子エペ	有澤知輝 （鳥工）	新座	男子エペ	６位	山根啓敬 （鳥工）	三重	男子団体	予選敗退	鳥取工高
									女子団体	予選敗退	鳥取工高
		女子エペ	吉川由華 （米南）								
		男子団体	鳥取工高								
H21	福山	男子フルーレ	田中宏和 （鳥工）	宇陀	男子サーブル	５位	田中宏和 （鳥工）	高松	男子団体	予選敗退	鳥取工高
		男子サーブル	田中宏和 （鳥工）		男子エペ	16強	浦林昂平 （鳥工）				
		女子団体	鳥取工高		男子団体 5-0本庄 5-3石山 3-5愛工	16強	鳥取工高 田中、浦林 角村、岸本 高木（玉木）				
H22	玉野			沖縄				前橋	東北地震のため中止		
H23	鳥取	男子サーブル	有澤孝輝 （鳥工）	青森	男子サーブル	８位	浦林勇太 （鳥工）	知多	男子団体	予選敗退	鳥取工高
					男子フルーレ	16強	山根一貴 （鳥工）				
					女子個人エペ	16強	黒見友紀子 （米南）				
H24	安来			富山				諫早	男子団体	予選敗退	鳥取工高
									女子団体	予選敗退	鳥取湖陵
H25	岩国			日田	女子個人エペ	16強	能勢葉月 （湖陵）	秋田	男子団体	予選敗退	鳥取工高
H26	福山			藤沢	女子サーブル	16強	杉本かりん （鳥工）	橿原	男子団体	16強	鳥取工高
H27	玉野			奈良	男子エペ	16強	小倉大樹 （鳥工）	岩国	男子団体	予選敗退	鳥取工高
H28	鳥取			岩国	女子サーブル	16強	山本ありさ （鳥工）	甲府			
H29	安来			宮城	男子サーブル	16強	中村光 （鳥工）	金沢			
H30	岩国			愛知				愛媛			
H31	福山			鹿児島							

鳥取県柔道連盟

1　連盟の設立

昭和24年５月１日、戦前戦後を通じた柔道愛好家により鳥取県柔道協会が設立され、初代理事長に若林文吾が就任（会長ポストは未設置）、鳥取県体育協会に加盟した。昭和26年４月に名称を鳥取県柔道連盟に改称、初代会長に坂口平兵衛が就き、理事長は若林が留任し、新体制の下で活動を開始した。

2　連盟の組織体制の確立

（1）強化に向けた組織体制

平成21（2009）年に本会会長として常田享詳が就任すると、本県柔道水準の向上を図るため、組織体制の確立と役割分担を明確化した。

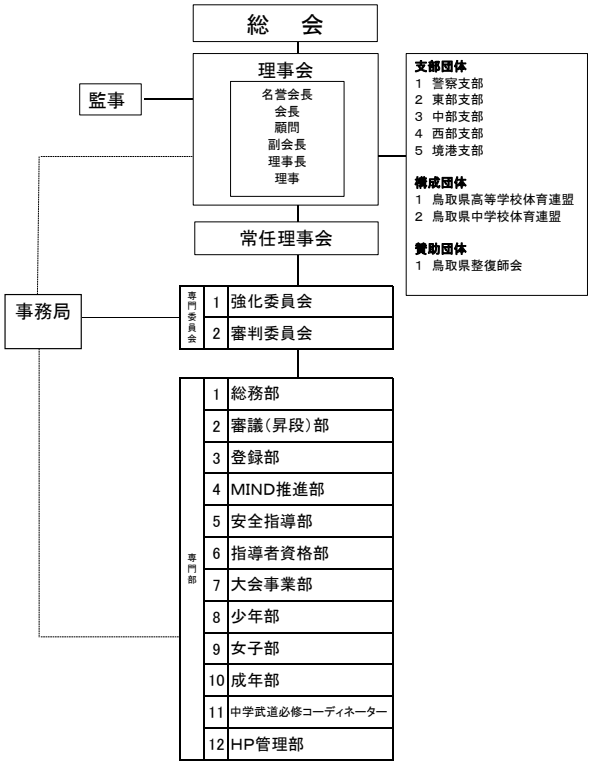
従来、執行部である会長、理事長及び事務局の下、強化部、登録部、審議（昇段）部、登録部などが存在したが、中体連柔道部や高体連柔道部との連携や役割分担があいまいで、当連盟の選手強化に必ずしも適切でなかったとの反省があった。このため、会員の意見を汲み上げながら組織体制を組み上げた。（右図）

また、下部組織として地域別の東部・中部・西部、境港及び警察支部の５支部で構成している。

（2）オンラインWEB登録の開始

平成27（2015）年４月からオンラインWEB登録が始まった。インターネット経由で登録入力すると請求書が発行される。登録料をコンビニ等で支払うと登録完了となる。従来は、当連盟傘下５支部の登録担当が個別に徴収し、当連盟登録担当がそれをまとめて全日本柔道連盟（全柔連）に送金していた。それに比べると、各自の責任で登録申請して登録料もコンビニ等での支払いなので、登録担当は相当量の業務の軽減化を実感できている。

鳥取県柔道連盟　組織図



3　各年の成果と課題

（1）少年

少年柔道については、スポーツ少年団や柔道教室などさまざまな形態で存在している。

団体では福庭柔道教室が６連覇していたが、ここ数年は米子市少年柔道団が席巻している。

平成18（2006）年津山少年柔道錬成大会で溝口柔道少年団が団体３位に、足立泰祐（福庭柔道教室）が小学1年で優勝、酒井翔梧（福庭柔道教室）が小学３年で優勝した。同年西日本少年柔道大会で中原翔大（福庭柔道教室）が小学２年で５位に入った。

平成25（2013）年全国少年柔道大会で牧浦太陽（鳥

鳥取県少年柔道選手権	
年	1位
H18	福庭柔道教室
H19	福庭柔道教室
H20	福庭柔道教室
H21	福庭柔道教室
H22	福庭柔道教室
H23	福庭柔道教室
H24	大山柔道クラブ
H25	鳥取柔道クラブ
H26	鳥取柔道クラブ
H27	米子市柔道少年団
H28	米子市柔道少年団
H29	米子市柔道少年団
H30	米子市柔道少年団

取柔道クラブ）が小学５年でベスト16に入った。

平成28（2016）年全日本女子ジュニア強化合宿に神田舞里花（米子市柔道少年団）が本県で初めて召集され参加した。

（２）中学校

①中国中学選手権の成績

平成６（1994）年に大栄中が男子団体でベスト４に入った。

平成７年に女子48kg級で生田尚美（北条中）が優勝、男子78kg級で石川勝秀（北溟中）も３位になった。

平成９（1997）年は大山町で開催され、男子78kg級で村口譲（北溟中）が優勝、女子52kg級で國本美津子（智頭中）が３位になった。

平成10年、女子56kg級で本庄妙子（溝口中）が３位となった。

平成11（1999）年は女子52kg級で野間ひかり（北溟中）が３位、女子56kg級の本庄妙子（溝口中）が２年連続３位であった。

平成12（2000）年、男子66kg級で桑田俊治（河北中）が優勝、女子48kg級で木嶋美緒（溝口中）が３位、同70kg級で安達麻衣（溝口中）が３位であった。

平成13（2001）年は女子44kg級で芝田優（箕蚊屋中）、同48kg級で妻由舞（大栄中）、同63kg級の妻由愛（大栄中）の３名が３位であった。

平成14年は男子81kg級で内田大介（法勝寺中）が２位、同55kg級で奥谷祐介（北条中）、同60kg級で山下聡（箕蚊屋中）、同66kg級で桑村龍司（北溟中）、女子48kg級で芝田優（箕蚊屋中）、妻由舞（大栄中）が、いずれも３位になった。

平成15（2003）年、女子57kg級で助谷あずさ（大栄中）が優勝、男子60kg級で奥谷祐介（北条中）、女子44kg級で山枡加奈（北条中）が３位であった。

平成16（2004）年は男子90kg超級で宮本裕一（岩美中）が２位、同81kg級で岡本和馬（中央中）が３位であった。

平成17（2005）年に男子60kg級で古川太一（北条中）、女子70kg級で森綾香（赤碕中）が２位、男子73kg級で野坂陽太郎（尚徳中）、同81kg級で岡本和馬（中央中）、女子70kg超級で有本紗知（鳥取南中）が、ともに3位であった。

平成18年は、女子48kg級で西村葵（名和中）が３位となった。

平成19年は男子90kg級で徳山英仁（大栄中）、女子52kg級で西村葵（名和中）が３位であった。

平成20（2008）年、男子90kg級で徳山英仁（大栄中）が２位と健闘、女子70kg超級の高塚ふゆみ（岸本中）が３位であった。

平成21年は男子90kg超級で酒井翔梧（北溟中）が２位、女子48kg級で山本岬（北溟中）が３位になった。

平成22（2010）年、女子52kg級で吉田咲也花（後藤ケ丘中）が優勝し、男子55kg級で小椋雄輝（三朝中）、同73kg級で高原大河（岸本中）、女子44kg級で圓岡穂乃果（中山中）、同48kg級で福本美穂（赤碕中）が３位であった。

平成23（2011）年は女子団体で中山中が準優勝したことは特筆すべきである。同大会では、男子55kg級で森達哉（溝口中）、女子44kg級で大場智加（中山中）が２位、男子60kg級で足立廉太郎（河北中）、女子48kg級で林原悠（中山中）、同57kg級で古志野遥（後藤ケ丘中）、女子63kg級で長見花（北条中）が３位であった。

平成24（2012）年は男子90kg級で中原翔太（東伯中）、女子48kg級で大場智加（中山中）が３位であった。

平成25（2013）年は、男子90kg級で中原翔太（東伯中）が２位、同50kg級で山根慶太（北溟中）、同55kg級で内海佑介（福米中）、同90kg超級で加藤玄将（北条中）が３位であった。

平成26（2014）年、男子60kg級で山根慶太（北溟中）が優勝、女子52kg級で上定真子（箕蚊屋中）が２位、男子66kg級で青木瑞樹（東郷中）、同90kg超級で結城仁（福米中）と山崎俊太郎（美保中）が３位であった。

平成27（2015）年、女子63kg級で清水菜々子（倉吉西中）が２位、男子55kg級で内海宏平（福米中）、

女子52kg級で大場遥加（中山中）が３位であった。

平成29年には女子57kg級で福井綾乃（河北中）が優勝した。

②西日本少年柔道大会の成績

古川太一（北条中）が男子55kg級で平成15年に４位、16年に５位と健闘した。

平成27年西日本少年柔道大会で清水颯真（鳥取南中）が男子90kg級で２位となった。

③中国中学新人選抜柔道大会の成績

鳥取Aチーム（松本拓磨＝境港一中・内海瑛作＝福米中・高原大武＝岸本中・小林岳＝八頭中・新井巧＝南部中・清水颯真＝鳥取南中）が男子団体６人制で３位となった。中国地域において男子団体でベスト４以内に入ったのは平成６年以来となる快挙であった。

（3）高校

①全国高校選抜柔道選手権の成績

ベスト16に入ったのは、平成５（1993）年に女子52kg級で小谷晃代（鳥取東高）、同56kg級で中島美紀（米子東高）、平成７（1995）年に女子56kg級で水本恵（鳥取西高）、平成９（1997）年に男子無差別級で古川武（鳥取城北高）、平成10年に女子48kg級で上井世津子（倉吉北高）、平成12（2000）年に女子52kg級で國本美津子（倉吉農高）、平成14（2002）年に女子57kgで中嶋恵（八頭高）、平成15（2003）年に女子57kg級で山本はるか（八頭高）平成26年に男子60kg級で森達哉（米子東高）、女子無差別級で小笹奈々（日野高）である。

②全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の成績

平成10（1998）年男子66kg級で古川武（鳥取城北高）は５位となった。前年に全国高校選抜柔道選手権無差別級でベスト16に入ったことが大いに自信となった結果であろう。

平成18（2006）年には男子90kg級で杉川康平（境高）が２位に入ったことは特筆すべきである。続いて平成20（2008）年に古川太一（倉吉北高）が男子66kg級で５位となった。同大会では女子

平成18年インターハイ柔道90kg級準優勝
（左監督足立先生、右杉川選手）

57kg級で森綾香（倉吉農高）がベスト16に入った。平成21年には女子48kg級で田中杏沙美（八頭高）、同63kg級で前田有岐（八頭高）がベスト16に入ったことも喜ばしい。また平成22年には男子100kg級で徳山英仁（倉吉農高）がベスト16に入った。

③中国高校柔道選手権の成績

平成５年に女子66kg級で加賀田友絵（八頭高）が２位、平成７年に女子48kg級で西口帆津江（鳥取東高）が２位、男子軽重量級で濱口憲彦（鳥取城北高）、女子61kg級で東里香（倉吉北高）が３位であった。平成10年に女子57kg級で村口貴美子（倉吉北高）が２位に、平成12年に女子52kg級に國本美津子（倉吉農高）が３位、平成14年に女子63kg級で本庄妙子（米子北高）と同70kg級で淀瀬純子（倉吉北高）が３位になった。

平成15（2003）年、女子78kg級で遠藤あかね（倉吉農高）が２位に、翌16年も同級で３位になった。同大会では男子60kg級で奥谷祐介（倉吉北高）も４位になった。平成17（2005）年に女子52kg級で妻由舞（倉吉東高）が４位に、平成18年に男子60kg級で奥谷祐介（倉吉北高）が２位になった。平成19年には女子70kg級で河口友香（八頭高）が優勝し、男子100kg級の湯川純（八頭高）と女子52kg級の清水真砂美（八頭高）が３位になった。平成20年、男子73kg級で山本雄太（八頭高）が３位になった。平成21年と翌22年には女子48kg級で田中杏沙美（八頭高）が２位に、同63kg級の前田有

岐（八頭高）が３位になった。

平成22（2010）年には八頭高が女子団体で５位に入った。平成24（2012）年には吉田咲也花（八頭高）が女子57kgで優勝、同48kg級で鳴瀬唯乃（倉吉北高）と同52kg級で妹山美沙希（八頭高）が３位に、また男子100kg超級で酒井翔梧（倉吉北高）が３位と大活躍だった。平成25年は男子90kg級で岡本竜斗（八頭高）が３位になった。平成27（2016）年、28年には男子100kg級で中原翔太（倉吉北高）が３位になった。また平成28年には女子78kg超級に河野志織（鳥取東高）が３位になった。平成29年は、男子66kg級で小田竜誠（倉吉北高）が２位になった。

④その他の大会の成績

平成23（2011）年に吉田咲也花（八頭高）が中国地区予選で第２位となり、全日本ジュニア体重別柔道選手権大会に出場した。

また、平成26年に全日本カデ体重別柔道選手権大会に本県で初めて福本美樹（倉吉農高）が選抜された。初戦で敗れたものの特筆すべき事項である。

（４）一般

鳥取県柔道選手権では、瀬尾麻世（西部支部）の10連覇が光る。また、近年では男子は古川太一（県警）、女子は川口友香（米子工高教員）の活躍が目立っている。

山陰柔道選手権では長らく島根県の牙城を崩すことがかなわなかったが、平成18（2006）年杉川康平、平成20（2008）年湯川純、平成21年村上俊太、平成22年湯川拓及び平成25（2013）年再び湯川純が３位に食い込んだ。その流れの中で、平成28（2016）年には古川太一（県警）が２位、中村竜平（鳥取刑務所）と高原優樹（近大）が３位を獲得した。そして、平成29年には美濃大将（鳥取刑務所）が優勝、三橋和真（県警）が２位と頂点を独占した。平成30年には美濃大将が連覇、中村竜平が２位、古川太一が３位と好成績を持続し、本県柔道水準の高さを実証した。今後に大いに期待したい。

山陰選手権2連覇（平成30年）美濃大将（鳥取刑務所）

平成26年全国教員柔道大会団体優勝
（左から奥谷、森、古川）

全国教員柔道大会男子団体３人制の大会では、平成25年に口田教寅、奥谷祐介、森大吉で２位を、平成26年には古川太一、奥谷祐介、森大吉で優勝。連覇をかけて参加した平成27年には口田教寅、奥谷祐介、森大吉で惜しくも２位であった。教員大会でのこのような高成績は初めてであり特筆すべきことであった。

４　今後の課題・方策

2021年には本連盟がワールドマスターズゲームズ2021関西（国際大会）の柔道競技を主管、実施

することが決定している。そのための準備委員会会長に当連盟理事である足立富士夫が就任した。小さな組織とはいえ精いっぱい努力する覚悟である。

本県でも柔道競技人口は年々減少している。海外での興盛と比較すると非常に悲しいことがあるが、指導者の増員と資質向上を継続的に啓蒙する必要がある。

中学校での武道必修化で柔道競技に触れる機会が増えるのは歓迎すべきだが、指導者の確保等、授業の実施そのものが危うい実情も否定できないのである。

鳥取県柔道選手権				
年	男子		女子	
H５	髙橋佑樹	鳥取武道館	山田裕美	倉吉北高
H６	桐林俊和	県警	東　里香	倉吉北高
H７	髙橋佑樹	倉吉東高教員	岩田幸子	鳥取西高
H８	髙橋佑樹	倉吉東高教員	本間加織	鳥取女子短大
H９	林　昌平	倉吉武道館	田中美奈子	鳥取女子短大
H10	髙橋佑樹	倉吉東高教員	田中美奈子	鳥取女子短大
H11	桐林俊和	県警	中島美紀	倉吉武道館
H12	山岡士朗	米子東高教員	中島美紀	倉吉武道館
H13	山岡士朗	県立武道館	瀬尾麻世	西部支部
H14	西森　大	NHK鳥取	瀬尾麻世	西部支部
H15	西森　大	NHK鳥取	瀬尾麻世	西部支部
H16	山岡士朗	県立武道館	瀬尾麻世	西部支部
H17			瀬尾麻世	西部支部
H18	山岡士朗	県立武道館	瀬尾麻世	西部支部
H19	杉川康平	境高	瀬尾麻世	西部支部
H20	湯川　純	八頭高	瀬尾麻世	西部支部
H21	湯川　純	森木板金	瀬尾麻世	西部支部
H22	村上俊太	県警	瀬尾麻世	西部支部
H23	丸山正峰	日本トラック	前田有岐	八頭高
H24	丸山正峰	日本トラック	妻由　愛	大栄育成会
H25	村上俊太	県警	妹山美沙希	八頭高
H26	古川太一	中部支部	川口友香	鳥取工高教員
H27	古川太一	県警	川口友香	鳥取湖陵高教員
H28	古川太一	県警	川口友香	米子工高教員
H29	古川太一	県警	川口友香	米子工高教員
H30	美濃大将	鳥取刑務所	川口友香	米子工高教員

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成３年　～　11年	野坂　　勉
12年　～　20年	山田　禎彦
21年　～　29年	常田　享詳
30年～	吉村　昭吾

◇理事長

昭和56年　～平成５年	永原　　昭
６年　～　14年	下口　哲司
15年　～　22年	前田　秀司
23年　～	稲田　　一

全国大会の成績					
年		チーム・選手名	種別	種目	成績
H５	全国高校柔道選手権	小谷晃代（鳥取東高）	女子個人	52kg級	ベスト16
H５	全国高校柔道選手権	中島美紀（米子東高）	女子個人	56kg級	ベスト16
H７	全国高校柔道選手権	水本　恵（鳥取西高）	女子個人	56kg級	ベスト16
H９	全国高校柔道選手権	古川　武（鳥取城北高）	男子個人	無差別級	ベスト16
H10	全国高校柔道選手権	上井世津子（倉吉北高）	女子個人	48kg級	ベスト16
H10	全国高校総合体育大会	古川　武（鳥取城北高）	男子個人	66kg級	５位
H12	全国高校柔道選手権	国本美津子（倉吉農高）	女子個人	52kg級	ベスト16

H18	全国高校総合体育大会	杉川康平（境高校）	男子個人	90kg級	２位
H20	全国高校総合体育大会	古川太一（倉吉北高）	男子個人	66kg級	５位
H20	全国高校総合体育大会	森　綾香（倉吉農高）	女子個人	57kg級	ベスト16
H22	全国高校総合体育大会	徳山英仁（倉吉農高）	男子個人	100kg級	ベスト16
H25	全国少年柔道大会	牧浦太陽（鳥取柔道クラブ）	個人	５年	ベスト16
H25	全国教員柔道大会	口田教寅、奥谷祐介、森大吉	男子団体	３人制	２位
H26	全国教員柔道大会	古川太一、奥谷祐介、森大吉	男子団体	３人制	１位
H27	全国教員柔道大会	口田教寅、奥谷祐介、森大吉	男子団体	３人制	２位
県内開催の全国大会					
開催年月日	大会名	会場地			
H13	全日本実業団柔道大会	米子市			

鳥取県ソフトボール協会

H23.10　第66回国民体育大会少年女子5位入賞

鳥取県ソフトボール協会は昭和24年11月創立以来長い歴史の中、山あり谷あり、さまざまなドラマを作りながら今日を迎えた。

１　昭和から平成へ

昭和60（1985）年「わかとり国体」では成年女子・少年女子が優勝。成年男子・少年男子は準優勝し、総合優勝と女子総合優勝を成し遂げた。本県のソフトボール競技は大きく飛躍し、その後に開催された61年の山梨国体、63（1988）年の京都国体、平成３（1991）年の石川国体で成年男子がそれぞれ準優勝に輝くとともに、平成４年には山

形国体に出場し、惜しくも３位ではあったが着実に実力発揮した。

わかとり国体を成功に導き、数々の功績を挙げた森田隆朝会長の米子市長就任に伴い、平成４（1992）年に岡田端が新しく会長に就任した。新理事長には権代真廣を選出し、新たにスタートした。

平成11（1999）年12月、米子市内のホテルで関係者約100名が出席し、創立50周年の節目を祝った。式典では、岡田会長が「わかとり国体、日本リーグ開催といろいろな思い出がある。それぞれの歴史を顧み次の代に繋ぐことが大切」とあいさつ。権代理事長が協会の50年のあゆみを披露した。またこの年指導者資格について、日本体育協会の指導者資格を取るか、準指導員（日本ソフトボール協会公認指導者）の資格を取得することがチーム監督の必要条件となった。

２　米子と鳥取にスポーツ広場が整備

県内にソフトボール専用球場がなかったが、わかとり国体を期に米子市に東山スポーツ広場が、平成６（1994）年には鳥取市に待望のソフトボール専用球場を含む倉田スポーツ広場が整備され、県内で中国大会以上の大会を行うことができるようになった。平成７（1995）年、全国高校総合体育大会の男子大会が淀江町と米子市で開催された。平成８年、指導者には（公財）日本体育協会公認スポーツ指導者資格の取得が義務化された。また、平成９（1997）年、米子市制70周年記念事業の一環として日本女子リーグ１部最終節を誘致し、米子市民球場で開催した。

３　久しぶりの国体出場

平成11（1999）年熊本国体に７年ぶりに少年男子が出場するも１回戦で敗退した。平成12(2000)年は、ソフトボール界に大きな夢を与えた。それは、シドニーオリンピックで日本女子チームが大活躍して待望の銀メダルを獲得し、国民に大きな夢と感動を与えてくれたことであった。2000年富山国体に成年男子選抜が８年ぶりに出場した。岡田会長をはじめ権代理事長・河津事務局長が激励に駆けつけ期待されたが、初戦で強豪千葉県と対戦し、不運もあり０－１で惜しくも敗退した。

４　激動の20世紀から21世紀へ

平成13（2001）年、米子市制75周年記念として、70周年記念に誘致した日本女子リーグに続き、日本女子のトップスターが集う国内最大規模の権威と伝統のある全日本総合女子選手権大会を、権代真廣理事長の日本協会への熱心な誘致活動により米子市で開催することとなった。また、県協会にとって慶祝すべきこととして、権代真廣理事長が「平成13年度体育功労者」として文部科学大臣表彰を受賞し、東京都のホテルで表彰式が行われた。

平成14年は役員改選期で、長年県協会の振興発展にリーダーとして尽力した岡田端会長が勇退。後任に斉木正一副会長が第４代会長に就任し、新体制がスタートした。

本県では初めての全日本総合女子選権大会が９月、米子市民野球場を主会場に、この春に全面改修整備された市営米子東山スポーツ広場と淀江野球場の４会場で、全国からのオリンピック選手を含む強豪32チームが一堂に会し熱戦を繰り広げた。地元テレビ局の度々の放映も功を奏し、連日多くの観客が詰めかけ、最終日の決勝戦（日立高崎対ミキハウス戦）には約3500人ものファンでスタンドは大声援に包まれた。当地ではめったに生では見ることができない日本トップレベルの生きた投・攻・守とスピード感あふれるプレーの続出に観客は魅了されたのである。

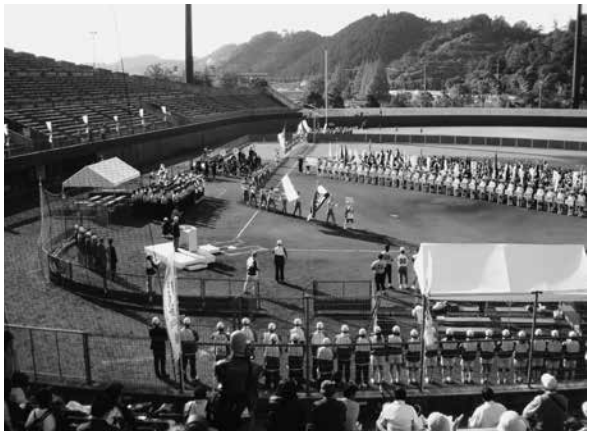
平成15（2003）年２月７日、中・高一貫指導者講習会が、田中大鉄氏（日本リーグ１部豊田自動織機女子ソフトボール部監督）を講師に招いて開かれた。

ジュニアクラブ指導者と中学・高校の指導者が一堂に会し、指導方針や発育段階に応じた強化方法等の共通理解を図ろうと、効果的な競技力向上を目指して多くの受講者が詰めかけた。

平成16（2004）年は、４年ぶりに埼玉国体に出場した成年男子選抜が１回戦で愛媛選抜と対戦し、わずか１本の本塁打に泣いた。

５「スポレク鳥取2006」開催

平成18（2006）年、前年度から本県ソフトボール協会の総力を結集して取り組んできた生涯スポーツの祭典である全国スポレク祭「スポレク鳥取2006」の女子ソフトボール大会が開催され、全国から30歳以上の48チームの選手、監督約700名が参加した。米子コンベンションセンターで盛大な開会式が行われ、引き続き淀江会場を含む８球場で熱戦が繰り広げられた。本県から、米子わかとりレディース、ＨＩＲＯＳＨＩ、ハイブリッド、育英フレンズ、鳥取クローバーズの５チームが出場。米子わかとりレディース、ハイブリッド、育英フレンズが予選リーグを勝ち抜き決勝リーグに進出した。ハイブリッドと育英フレンズは惜しくも準決勝で敗退したが、わかとりレディースは予選リーグから４戦全勝で見事ブロック優勝（３回目）に輝き、スポレク賞を受賞した。



「スポレク鳥取2006」での入場行進　（米子市民球場）

６　ジュニア選手の育成、高校生の活躍

平成19（2007）年､成功裏に終了した全国スポーツレクリエーション祭女子ソフトボール大会の余韻が残る中、第59回全国高校女子選手権大会に米子松蔭（福田敦子監督）が、初のベスト８に進出し５位入賞を果たし、長らく低迷気味だった高校勢に明るい話題を提供してくれた。

平成20（2008）年は県協会役員改選の年で、16年の長きにわたり要職を務め数々の大会を誘致し功績を残した権代真廣理事長が、県協会の副会長に就任した。新理事長に出西弘道が、事務局長には伊藤泰博が就任した。

ルール改正があり、ＤＨ，ＤＥＦＯ制、延長戦８回よりタイブレーカールールが採用された。

平成20年、北京オリンピックで悲願の金メタルを女子日本代表チームが獲得した。このことが、次回のロンドンで正式種目から消えていく運命にあるところ、日本協会の旗振りにより“Back Softball　2016”の機運を高める運動が、2020年開催地の東京招致運動と併わせて日本全国を駆け巡ることなった。同時に日本協会は、ヨーロッパ、アフリカを重点に普及宣伝活動に総力を傾注した。県協会も、日本や鳥取県でも一人でも多くの子どもたちがソフトボールを愛し、また競技を続けてもらえるよう東京開催に向けて誘致運動に取り組んだ。

平成21（2009）年、日本ソフトボール協会主導で、将来の日本のソフトボール界をリードする優秀選手の一貫育成システムのジュニア育成中央研修、いわゆるＮＴＳ（National Training System）の中国地区選考会が、本県では初めて９月に倉吉総合産業高校を会場に、中国各県の選抜された中学生女子を一堂に集め実施された。各県の技術強化委員および中学校顧問教師の指導の下、各県からの優秀選手50名が技術の披露と研鑽をした。その中から、本県の米子市立東山中学校の村端夢乃選手が全日本強化合宿のメンバーに選ばれた。

また鳥取城北高校女子部が衝撃的なデビューをした。春の中国高校県予選会に１年生だけで編成されたチームで登場し、あれよあれよの準優勝。県高校総体でも春に続いての準優勝そして新人戦でも準優勝。いずれも米子松蔭高校に惜敗であったが、その後の県高校ソフトボール界に大きな一石を投じた。

鳥取城北高校の山科麻由佳選手が、ISFイース

H22.6　第45回鳥取県高校総体初優勝　鳥取城北高

トン・ファンデーション・ユースワールドカップ（チェコ／プラハ、８/ ９～ 16）の女子U16日本代表に選ばれ出場し、金メダルを獲得した。上記のNTSによって、前年広島県で中学生のときに日本協会のジュニア強化選手に選ばれていた。その後の本県のレベルアップに貢献することが期待された。

本県のソフトボールは、人口最小県とはいえこれまでにそれなりの成績を残してきた。特に団体競技による得点が有効である仕組みの中で、ソフトボール協会は50周年記念誌にあるとおり、何回も良い得点を取り貢献してきた。この年の中国予選会では、４種別の内、特に成年男子、少年女子は紙一重の実力の差で惜敗した。少年男子も今一歩であった。県の関係機関と連携の上、その後の強化の取り組みに更なる工夫が望まれた。

７　県協会創立60周年記念式典

平成21（2009）年11月、創立60周年記念式典を倉吉市内のホテルで開催した。斉木正一会長の挨拶に続き出西弘道理事長から県協会の10年の歩みが披露されたあと記念表彰が行われ、特別栄誉彰を和田哲昭、権代真廣が受賞した。また、特別功労賞・功労彰が授与された。来賓の（財）鳥取県体育協会川口一彦専務理事から来賓祝辞を賜わり記念式典を祝った。

８　鳥取短期大学ソフトボール部を強化指定

平成22（2010）年12月に鳥取短期大学と鳥取県教育委員会、県体育協会の３者は、競技力向上と高大連携の強化を目的とした「スポーツ振興に関する協定書」を結んだ。そして、２年連続６度目の全日本大学選手権大会出場を果たした「鳥取短期大学ソフトボール部」を強化指定した。しかし、その後部員数減少で廃部となった。

９　鳥取県初の「ソフトボールフォーラム」開催と国体での活躍

平成23年７月、ソフトボールの普及、発展を目的に日本ソフトボール協会主催の「ソフトボールフォーラム」が、倉吉総合産業高校を会場に、小･中・高・チーム関係者、保護者等400名が参加して盛大に開催された。2000年、2004年五輪日本代表監督の宇津木妙子氏と２人のオリンピアーの指導を得ながら本県のアスリート育成に向けた取り組みを行った。

10月に開催された東日本大震災復興支援第66回国民体育大会「おいでませ！山口」国体に、鳥取県選抜少年女子が25年ぶりに出場、準々決勝まで勝ち進み、これまで無失点で勝ち進んできた大阪と対戦した。６回まで２対１で負けていた鳥取だが、最終回２死３塁と負け濃厚の場面、佐伯彩佳（倉吉総産高）が起死回生の同点打を放ち試合を振り出しに戻した。両チーム決め手が無いまま迎えた10回裏、１死２、３塁から大阪が放ったサードゴロを、１塁へ送球した際、送球がランナーと交錯し逸れる間に決勝点が入りサヨナラ負けを喫した。惜しくも準決勝には進めなかったが第５位に入った。優勝した大阪は、鳥取以外はすべて完封試合であった。

チーム結成時からスタッフの意思統一である「ディフェンスを意識したチーム作り」が功を奏し、投手力を中心としたディフェンスは全国レベルであったと言える。

平成24（2012）年、中国ソフトボール協会の総会において役員改選が行われ、本県から会長に斉木正一、理事長に出西弘道、事務局長に伊藤泰博が選任された。また、日本ソフトボール協会では

出西理事長が協会の理事及び小学生委員長に就任した。

平成25年、９月の台風による大雨で、鳥取市の千代川河川敷内の「倉田スポーツ広場」に土砂が流入し、ソフトボール場等が使用不能の状態になり、東部地区でのソフトボール大会の開催が困難となり、早期の復旧が待たれた。

10　ジュニアチームの誕生

少子高齢化により中学・高校のソフトボール部の登録チーム数が減少してきている中で、春に、鳥取県初のジュニアチーム「南部ジュニアソフトボールチーム」（南部町小学生）が結成された。何とかしてジュニア層の選手を育て少しでも協会へ恩返し、地域貢献を行いたい思いのあるスタッフが集まり、子どもたちに声掛けを行い７人の部員からスタートした。指導の狙いは、まずは挨拶、マナー、そして仲間たちと思いやり協力し合って、一年を通して木・土・日曜と場所を変えながらソフトボールを楽しむことを基本に活動を始めた。

11　久しぶりの全国大会開催と国体入賞

平成25（2013）年、「第27回全日本シニアソフトボール大会」が10月に３日間の日程で、どらドラパーク米子市民球場、淀江野球場、大山野球場など８面で開かれ、都道府県代表48チームが参加した。鳥取県勢は鳥城クラブが２回戦に勝ち進んだが、淀江白鳳クラブ、鳥取砂丘クラブは惜しくも１回戦で敗退した。

平成26（2014）年、第69回国民体育大会が長崎で開催され、本県からは、島根県で開催された中国ブロック予選会で岡山と広島との２試合を共に１対０の完封勝利した少年女子鳥取選抜が出場。メンバーは鳥取城北高６人と倉吉総産高５人を主体に米子松蔭高の２人を加えた13人で、４強入りを懸けた２回戦から出場し、強豪栃木選抜と対戦。鳥取選抜は５回まで３点リードされた６回表、若本歩美（城北）が内野安打で出塁し、小川浩司監督のヒットエンドランのサインで、１死２塁から西嶋亜由美（城北）が初球を２遊間に運び１点を返し、さらに１死２塁の好機に角好華（松蔭）の適時打で西嶋が本塁に滑り込んで２点を返したものの、あと１歩及ばず３対２で惜敗したが健闘の５位入賞だった。山本清人強化部長は「女子は中高の連係がうまくいき、全国４強が狙えるようになってきた」と評価していた。

日本ソフトボール協会は、将来の日本代表を育成するため、U16日本女子選抜チーム台湾遠征に、日本ソフトボール協会理事及び小学生委員長である本県の出西理事長を団長の下、中体連専門委員長で北条中学校の吉田央教諭がコーチとして参加した。続いて翌年の平成26年には吉田教諭はヘッドコーチ（監督）として参加し、代表17人を率いる重責を任され「将来の日本を代表する選手育成につなげたい」と力を込める。吉田央教諭は北条中学校の女子ソフトボール部の監督を務め、日本ソフトボール協会の公認コーチの資格を取得しており、ＮＴＳ中国ブロック担当者として選手指導及び選手選考に携わり日本チームを支えた。

平成27（2015）年、「第36回全日本クラブ女子ソフトボール大会」が開催された。開会式は倉吉体育文化会館で行われ、全国から24チームが出場し選手らが健闘を誓った。同大会が鳥取県で開催されるのは２回目であった。また全国大会が中部地区で開催されるのは初めてで、倉吉市と北栄町の４会場で熱戦を繰り広げた。開会式では、日本ソフトボール協会の福島派遣理事のあいさつに続

第36回全日本クラブ女子ソフトボール大会開会式で宣誓する鳥取県の中村主将

き、林昭男県副知事、石田耕太郎倉吉市長が激励した。選手を代表し､地元の「砂女」(サンドガールズ)チームの中村明里主将が選手宣誓を行った。「砂女」チームはこの大会に合わせて急きょ編成したチームで、監督に木下重揮が就任、初戦の２回戦で神奈川県のチームと対戦したが、力及ばず涙をのんだ。

12　役員の改選とルール改正等

平成28（2016）年、県協会役員改選に伴い、出西理事長、伊藤泰博事務局長が４期８年間の任を退任し、新理事長に徳田博明が、事務局長には山本清人が就任した。また、斉木正一会長が鳥取県議会議長に就任したことに伴い、県協会の役員に新たに「会長職務代理」を設け、出西弘道が就任した。

また、平成29（2017）年には、山本清人事務局長が一身上の都合により事務局長を退任し、新たに牧田礼次郎が事務局長に就任した。また、斉木正一会長が鳥取県議会議長を退任したことに伴い、出西弘道の「会長職務代理」を解き、新たに「会長代理」に就任した。

ルール改正があり、テンポラリーランナーのルールの一部改正などで、同一のスパイクシューズをそろえることがなくなった。

平成28年、鳥取県中部地区を震源地としてマグニチュード6.6の大地震が発生し、中部地区で開催予定の中国一般男子ソフトボール選手権大会が急きょ中止された。

2020年東京オリンピック・パラリンピックに、ソフトボールと野球が追加種目に正式決定し､「北京オリンピック」での女子ソフトボール優勝の感動をもう一度味わえることへの期待が膨らんだ。

13　西日本ハイシニア大会開催と小学校女子の全国大会出場

第13回西日本ハイシニアソフトボール大会が、西日本各地から20チームの参加を得て開催された。試合会場は前年の台風で被害に遭い、大会前に改修整備が完了した鳥取市の千代川河川敷の「倉田スポーツ広場」で盛大に開催する予定であったが、またもや、大会前に発生した大型台風よる大雨でグラウンドが押し流され無惨な姿となり使用できなくなった。大会関係者の大会に懸ける思いから、鳥取市で大会が行えるよう急きょ代替の球場となる鳥取環境大学等のグラウンドを確保し、どうにか大会を開いたが、この時も秋雨前線の影響により大会２日目の準決勝以降の試合が雨で中止となり、４チームを優勝として大会を終えた。鳥取県からの出場のチームは、予選を勝ち抜いたチームと地元枠・補充枠として、ハイシニア鳥城クラブ、ハイシニア打吹クラブ、ハイシニア伯耆クラブの３チームが出場しが、いずれも初戦で惜しくも敗戦した。

平成29年、平成25年に結成された､「南部ジュニアソフトボールクラブ」がようやく試合に臨める選手が22名（小１～小６）集まるようになり、千葉県で行われた「第31回小学生女子ソフトボール選手権全国大会」の出場を果たした。

初戦敗退ではあったが、チームにとってはとても良い体験となり、試合への意識が高まるきっかけとなった。その後､他県との交流も深まったが､県内には他の小学生チームが無く、遠征は県外が中心であった。しかし、このチームができたことにより、年々減少傾向にあるジュニア層のソフトボール競技人口を食い止めることができればありがたい存在である。さらにこれに続くチームが誕生することが待たれる。

14　国体強化の今後の課題と取り組み

ここ３年の中国ブロック大会の結果を見てみると、成年男女については山陽側の投手力と選手層の厚さに圧倒され苦戦を強いられており、特に強力な投手等の補強が必要である。少年については男女とも善戦をしているが、特に女子は１点差での敗戦で苦杯をなめている。守備力の強化は勿論であるが、得点力のアップに繋がる努力と対策が今以上に必要である。

ソフトボール競技人口が減少している中、特にジュニア層（小学生）の育成は喫緊の課題である。また、少年・一般の選手・チームの確保に取り組むことが必要である。そのため、全国大会等、質の高い大会を積極的に誘致しソフトボール競技の魅力を発信し、競技人口の増員に繋げたい。

そのため、中学・高校の一貫した育成体制の確立や、各年齢層に関わっている指導者相互の連携及び研修体制を構築し選手強化を図り、強いチームを育成することに努めたい。

【歴代会長・理事長】

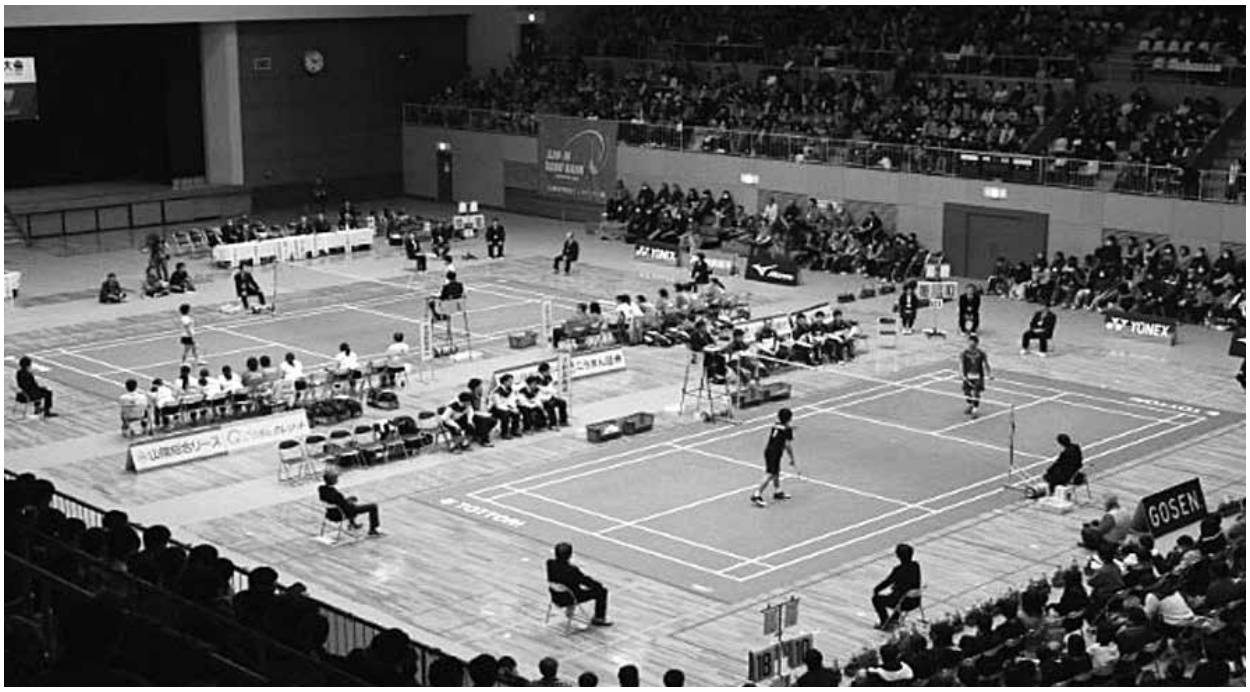
◇会長

平成４年	～	平成13年	岡田　　端
14年	～		斉木　正一

◇理事長

平成４年	～	平成19年	権代　真廣
20年	～	27年	出西　弘道
28年	～		徳田　博明

鳥取県バドミントン協会



全国大会のＳ／Ｊリーグ米子大会の試合風景　平成30年１月　米子産業体育館

１　県下三地区で社会人リーグが発足

昭和60年のわかとり国体の前後に、組織の強化と会員増を図るため、県下東・中・西地区で社会人バドミントンリーグ戦がはじまった。東部地区では、男子３部、女子２部の参加により、夜間に総あたりの大会として（昭和53年に東部地区のメインの大会として発足）開催され、バドミントンの普及に努めた。中部地区では、昭和57年に11会場で男子３部、女子２部が開催された。この大会は平成６年から春季と秋季の年２回開催とされ、地区の会員組織の強化と交流の大会として現在に至っている。

また、西部地区では、第１回大会が平成２年に２市２郡で男子９部、女子４部が７会場で年２回

開催され、組織の強化と交流の大会として、現在も継続している。平成５年には、一般社会人の登録区分がA、B、Cの三区分からA、Bの二区分に改定されている。

２　日本リーグ戦と全国大会の開催

（１）日本リーグの開催

平成８（1996）年11月、13年ぶりに鳥取市布勢の県民体育館で開催された。対戦カードは、男子がトナミ運輸対NTT関西、女子が三洋電機対NTT東京であった。約2,000人の観客は、国内トップクラスの選手のプレーに感動した。平成17年12月に二度目のリーグ戦が県民体育館で開催され、多くの観客が日本トップ選手のプレーを観戦している。

さらに、平成20（2008）年12月に３度目のリーグ戦が鳥取市のコカ・コーラウエストスポーツパーク県民体育館で開催され、北京五輪代表で「オグシオ」の愛称で親しまれている小椋久美子、潮田玲子両選手が出場し、世界レベルのプレーに会場を埋めた約2,500人のファンが沸いた。

（２）全国大会の開催

バドミントン競技の普及、組織と選手の強化を目的に、各種の全国大会を開催した。

①第17回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会

平成５（1993）年８月、米子市で開催され、鳥取県の選手は、女子シングルの稲田真由子、ダブルスの稲田・岩佐組がそれぞれ３位に入賞した。なお、高専の全国大会は、平成24年にも米子産業体育館で第36回大会を開催している。

②第20回全日本シニアバドミントン選手権大会

平成15（2003）年11月、鳥取市の県民体育館ほか３会場で開催した。参加選手は約1,500人、競技役員は延べ約800人で、大会はトラブルもなく日本協会から高い評価を受けている。

③第19回全国スポレク祭バドミントン競技大会

平成18（2006）年10月、鳥取県で開催された全国スポレク祭のバドミントン競技が倉吉市の倉吉

第20回全日本シニア選手権大会　試合風景
鳥取県民体育館

体育文化会館で開催された。市内のホテルで行われた倉吉市主催の歓迎会には、韓国選手団２チームをはじめ全国各地からの多くの選手、役員が参加し盛況であった。

県バドミントン協会主催の歓迎会も２回開催し、前年韓国に派遣された選手団を中心に、日本協会役員も参加して交流を深めた。

この大会では、地元鳥取県の選手団が勝者グループ戦で優勝し、大会運営も事故なく成功裏に終了したのである。

④第50回全日本社会人バドミントン選手権大会

平成19（2007）年９月、鳥取市の県民体育館と鳥取産業体育館で６日間にわたって開催された。県協会が総力で競技運営に取り組み、日本協会から好評を得ることができた。

⑤第28回全日本ジュニアバドミントン選手権大会

平成21（2009）年10月、米子市の米子産業体育館と米子市民体育館で４日間の日程で開催した。

⑥「2010グランドシニアバドミントンフェスティバルin鳥取」

レディース連盟の山川会長の発案でヨネックスの協賛を得て鳥取市で開催された。平成26(2014)年からは米子市での開催となり、県内外の生涯スポーツの振興、普及交流の場として定着し、現在に至っている。

⑦第10回全日本レディースバドミントン競技会

平成27（2015）年12月、県民体育館を主会場として、中部、西部地区の各会場の三会場で競技運

営にあたり、盛会のうちに終了した。

⑧第55回全日本教職員バドミントン選手権大会

平成28（2016）年８月、鳥取市の県民体育館と鳥取産業体育館で開催され、盛会のうちに終了することができた。日本教職員連盟会長から「気持ちの良い素晴らしい大会であった」とのコメントがあった。この大会で地元選手が健闘し、一般男子団体と一般男子ダブルス、30代男子ダブルスで優勝するなどして総合成績で４位と素晴らしい結果をあげている。

⑨バドミントンＳ／Ｊリーグ米子大会

平成30（2018）年1月、35年ぶりに米子産業体育館で、平井知事、山本県教育長、油野県体協会長、伊木米子市長を迎えて開会式を行った。男子は日本ユニシス対ＪＲ北海道、女子はシングルス世界ランキング２位の山口茜選手が所属する再春館製薬対山陰合同銀行の対戦ではじまった。

会場には、地元チームを応援しようと約2,600人がつめかけた。観戦した多くの人は、日本のトップ選手の試合に熱い視線を送っていた。

また、県体育協会の助成を受け、本大会で２面のコートマットを初めて使用し、選手から好評を得るとともに大会運営に米子市の協会はじめ、県協会が総力で取り組んで成功裏に終了した。

バドミントンS/Jリーグ　2017米子大会

３　国民体育大会と高校総体

平成20（2008）年の第63回国体「チャレンジおおいた国体」で、成年女子の鳥取県チームがわかとり国体以来の５位入賞を果たした。監督山本明良、選手は藤原由衣、地神加奈子、田中妙美恵の三人であった。

平成22（2010）年の第65回国体「ゆめ半島千葉国体」でも成年女子の県チームが２年ぶりに入賞、初の４位となった。広島ガスで活躍していた境港出身の日野由希江（県教委）が加わり、バランスの取れたチーム構成で力を出し切ったのである。監督山本明良、選手は日野由希江、宮崎優花、藤原由衣であった。

また、平成23年の第66回国体「おいでませ山口国体」で昭和61（1986）年以来の全種目（４種目）出場を果たしたが、成年女子のベスト４に入賞したほかはふるわなかった。監督、選手は前年のメンバーと同じであった。

さらに、平成24（2012）年の第67回国体「岐阜国体」でやはり成年女子が５位に入賞した。選手は、宮崎優花、西川（旧姓藤原）由衣、井田詩であった。

平成29（2017）年の第72回国体「愛顔つなぐ愛媛国体」で、成年女子チアフル鳥取（高橋真理、岸田洋子、高瀬秀穂）が５年ぶりに５位に入賞した。

近年の国体入賞は、成年女子の活躍が光っている。今後、成年男子、少年の活躍を期待したい。

平成７（1995）年に鳥取県で開催された全国高等学校総合体育大会バドミントン競技会では、当協会としては、万全の準備をして高体連に協力して大会運営にあたったが、鳥取県の選手は健闘むなしく入賞にはならなかった。

平成16（2004）年の「中国04総体」の名称のもと全国高校総体バドミントン競技が、県民体育館ほか３会場で開催され、競技運営にあたった役員が高い評価を得た。

県協会は、この大会の運営のために、公認審判員の増強を図る必要性があり、平成14年から審判員の養成、競技力の向上、運営のリハーサルとして平成15年開催の全国シニア大会、全国高校総体（平成16年）大会を位置づけ、さらに中国地区大会の２大会を開催して競技役員の技術向上を図

るとともに、新設された準３級（高校生）の取得を増やす講習（資格審査検定会）を行い、一挙に364人が取得して、これまでの公認審判員と合わせて合計で527人の審判員を確保したのである。

なお、辻中孝彦（県教職員連盟）が県内初のＡＢＣ認定国際審判員資格を取得している。

４　韓国・ロシアとの国際交流

平成17（2005）年に日韓スポーツ交流で、シニアチーム「鳥取県選抜」と「中部選抜」の２チームを韓国に派遣し、国民生活体育競技会に出場して交流を深めた。この年には、ロシア沿海地方のウラジオストクから選手が来鳥して、鳥取県の選手と交流試合をしている。

平成19（2007）年には、鳥取県の中学生代表をロシア沿海地方のウラジオストクに派遣している。また、平成21年に米子北高校の選手男女８名を鳥取県バドミントン青少年交流団として、ウラジオストクに派遣し、ロシアオープン競技大会に参加した。

さらに日本海沿岸サミットに関連して開かれた三地域の鳥取県、韓国江原道、ロシア沿岸地方の青少年スポーツ交流事業であるバドミントン交流大会が平成22年にスタートした。もちろん、この大会に鳥取県代表チームが参加している。

第１回三地域青少年交流　集合写真　鳥取県開催

５　組織の強化充実

平成９（1997）年、「わかとり国体」以降11年間務められた今村時男会長が勇退され、山根怜副会長が後任会長に就任した。また、加藤博司理事長が（財）日本バドミントン協会の理事（平成14年まで）に就任し、中央の重要な情報が入手しやすくなり、また、日本協会の運営手法を取り入れることにより、県協会の組織強化が図られることになった。

平成10年には、協会の活性化を目指して、大幅な規約等の改正と役員改選を実施し、従来の５委員会から７に細分化し、７名の副理事長が各委員長として業務を行うこととした。さらに、役員総会を総会に改め、代議員制度を導入することを決めたのである。

しかし、平成13年にこの７委員会制を廃止し、３本部制が導入され、本部会を理事会に先駆けて開催し、本部会での報告事項や決定した計画を理事会に提案し、協議することとした。この３本部は、管理本部、事業本部、強化本部とした。その後、平成16年の役員改選で、山根怜会長が顧問に、加藤博司理事長が会長に就任、副会長に小谷章公、理事長補佐に岩垣毅がなり、新体制が決まった。平成26年に第５代理事長に宮本義夫が就任し、平成28年に源憲治に交代した。

さらに、平成29年度第２回代議員会が北栄町で開催され、規約の改正と30年度の事業計画、予算の決議後に役員改選が行われ、顧問に中林正樹、宮本義夫、副会長に浜橋喜幸、三村俊彦が決まった。

６　主催大会の新設等

平成13（2001）年、理事会で主催大会として、小学生の学年別大会を加えて小学生の競技力の向上に向けた取り組みを進めること、全国スポレク祭、全日本社会人、日本マスターズの予選会、全日本中学生大会の代表選手選考会の４大会を新設し、開催することを決めた。

このほか、協会の運営、大会の運営等について改めたこととして、次のようなことがあげられる。

・情報提供して、色々な意見、要望を聞くことで、開かれた活力のある協会を目指すため、「県協会だより」の発行を決め、平成10年11月に第１号を2,500部発刊し配布した。平成12年

からは年２回発行している。

・小学生連盟（全国組織）が日本協会の傘下組織となったことから､会員登録規定を改正し、小学生、中学生の登録を有料化し、１人当たり600円とした。そして、各郡市の協会等に還元金として、登録人数１人当たり100円の返還金制度を新設した。

・大会使用球については、試合条件の公平化を図るため、大会を主管する協会・連盟が一括購入したものを、当日各選手が購入して持ち寄ることに変更し、これまで選手個人が持ち寄っていたシャトルの質の格差をなくすることにした。

・平成14年度に、懸案事項であった「協会ホームページ」を４月から開設した。内容は、協会のお知らせ、大会日程･結果、クラブ紹介、過去の記録、掲示板、リンク等であった。

７　ジュニアの選手強化

協会が取り組んだ選手強化事業としては、国体選手強化事業、ジュニアサーキット、全国大会代表強化練習、優秀コーチ招へい、他県の強豪チーム招待に加え、わかとり塾が設立されてジュニアの強化体制が一層整備された。

また、県体協主催の奥原希望選手バドミントン教室が平成30年６月５日鳥取市の県民体育館で開催され、県バドミントン協会は、登録小中高校生約200人を参加させ、日本トップ選手の手ほどきを受けた。

奥原選手は、同年５月にタイ・バンコクで開かれた第27回ユーバー杯で37年ぶりの日本の優勝に貢献、前年の世界選手権シングルス優勝、2016リオオリンピックシングルス銅メダルの選手で、指導を受けた生徒たちは感激していた。

奥原希望選手を迎えてのバドミントン教室

８　協会創立50周年・60周年記念

平成14年、創立50周年を迎えた協会は、実行委員会を設けて記念事業を行った。

記念誌は関係団体､会員に原稿依頼し刊行され、記念式典・祝賀会は平成16年８月に鳥取市内のホテルで盛大に行われた。この模様は、日本海テレビが「スマッシュを重ねて半世紀」と題して、協会の歩みを放送した。

また、平成26年６月に創立60周年を記念して、潮田玲子さんを招き、小・中学生約200人が、午前と午後に分かれてあこがれの選手から上達のコツを学んだのである。記念式典・祝賀会は鳥取市内のホテルで加藤会長の叙勲受賞祝賀会と併せて開かれた。50周年記念の時と同じく、記念誌「60年の記録」を発刊した。

〔表彰〕

平成８年	公認スポーツ指導者賞（日本体育協会長）	山根　怜
15年	体育功労賞（文部科学大臣）	加藤博司
16年	功労賞（日本体育協会長）	山根　怜
19年	功労賞(日本バドミントン協会長)	加藤博司
23年	日本体育協会創立100周年記念功労者賞	山根　怜
	スポーツ少年団指導者賞（日本体育協会長）	幸田英俊
24年	生涯スポーツ功労賞（文部科学大臣）	岩垣　毅
	公認スポーツ指導者賞（日本体育協会長）	宮本義夫
26年	旭日双光章（叙勲）(内閣総理大臣安倍晋三)	加藤博司

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和61年４月～平成９年３月　今村時男
９年４月～　16年３月　山根　怜
16年４月～　加藤博司

◇理事長

昭和61年４月～平成19年３月　加藤博司
19年４月～　25年３月　岩垣　毅
25年４月～　28年３月　宮本義夫
29年４月～　源　憲治

〈国際大会〉

年度	大会名	チーム・選手名	種目	成績
平成23年度	2011年アジアユースU19 バドミントン選手権大会	櫻本　絢子 （鳥取敬愛高校）	女子 ダブルス	３位
平成24年度	大阪インターナショナルチャレンジ 2012	堂本　克樹・西川由衣 （パナソニック鳥取）	混合 ダブルス	３位

〈全国大会〉

年度	大会名	チーム・選手名	種目	成績
平成５年度	第17回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	岩佐　美佳・稲田真由子 （米子高等専門学校）	女子 ダブルス	３位
〃	第17回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	稲田真由子 （米子高等専門学校）	女子 シングルス	３位
〃	第32回全日本教職員 バドミントン選手権大会	米田　哲巳（もみの木園）	60歳以上男子 ダブルス	３位
〃	第４回全日本都市職員 バドミントン選手権大会	片山　　学（鳥取市役所）	30歳以上男子 シングルス	３位
６年度	第11回全日本シニア バドミントン選手権大会	高真　　広（ＪＲ西日本）	40歳以上男子 シングルス	優勝
〃	第33回全日本教職員 バドミントン選手権大会	正木　拓雄 （倉吉市教育委員会）	30歳以上男子 シングルス	３位
〃	第５回全日本都市職員 バドミントン選手権大会	片山　　学（鳥取市役所）	30歳以上男子 シングルス	２位
７年度	第19回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	稲田真由子 （米子高等専門学校）	女子 シングルス	３位
〃	第12回全日本シニア バドミントン選手権大会	高真　　広・出石　　勉 （米子市）	40歳以上男子 ダブルス	３位
〃	第34回全日本教職員 バドミントン選手権大会	瀬尾　昌玄・米田　哲巳 （米子市）	60歳以上男子 ダブルス	３位
８年度	第12回若葉カップ全国小学生大会	美保クラブ	男子団体	３位
10年度	第15回全日本シニア バドミントン選手権大会	出石　　勉　（米子市）	40歳以上混合 ダブルス	優勝
11年度	第23回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	宮崎　　篤・大上　真樹 （米子高等専門学校）	男子 ダブルス	３位
〃	〃	宮崎　　篤 （米子高等専門学校）	男子 シングルス	３位
12年度	第16回若葉カップ全国小学生大会	大栄バドミントン育成会	男子団体	３位
〃	第９回全国小学生 バドミントン選手権大会	森本　貴則・森本　智則 （大栄バドミントン育成会）	５年男子 ダブルス	３位

13年度	第25回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	宮崎　　篤・筒井　達也 （米子高等専門学校）	男子ダブルス	３位
〃	第18回全日本シニア バドミントン選手権大会	松下　泰司　（ＪＲ西日本）	40歳以上男子 ダブルス	３位
〃	第44回全日本社会人 バドミントン選手権大会	薄　　智彦・川口　桐香 （鳥取三洋）	混合 ダブルス	３位
〃	第10回全国小学生 バドミントン選手権大会	鳥取県選抜	男子団体	３位
〃	第10回全国小学生 バドミントン選手権大会	森本　貴則・森本　智則 （大栄バドミントン育成会）	６年男子 ダブルス	２位
14年度	第41回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取県スポセン） 山口　優介（岩美高校）	一般男子 ダブルス	２位
15年度	第27回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	野口真奈美・下村美奈子 （米子高等専門学校）	女子 ダブルス	２位
〃	第42回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取県スポセン） 山口　優介（岩美高校）	一般男子 ダブルス	３位
16年度	第43回全日本教職員 バドミントン選手権大会	鳥取県選抜	女子団体	３位
〃	第21回全日本シニア バドミントン選手権大会	出石　　勉　（米子市）	45歳以上男子 ダブルス	３位
〃	第43回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取東高校） 佐藤　伴哉（鳥取県スポセン）	一般男子 ダブルス	３位
16年度	第43回全日本教職員 バドミントン選手権大会	狩野　千晴（東山中学校） 池田久美子（北条中学校）	40歳以上女子 ダブルス	優勝
17年度	第34回全国高校選抜 バドミントン選手権大会	湯谷　亮介　（鳥取工業高校）	男子 シングルス	３位
〃	第６回全国小学生ＡＢＣ大会	森田　慎司　（飛鳥クラブ）	男子Ｂの部 シングルス	３位
〃	第44回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取東高校） 佐藤　伴哉（鳥取県スポセン）	一般男子 ダブルス	３位
〃	第22回全日本シニア バドミントン選手権大会	若槻　　敦　（米子市）	40歳以上男子 ダブルス	３位
18年度	第23回全日本シニア バドミントン選手権大会	出石　　勉　（米子市）	45歳以上混合 ダブルス	３位
〃	第45回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取東高校） 佐藤　伴哉（鳥取県スポセン）	一般男子 ダブルス	優勝
〃	〃	山本　正人　（岩美北小学校）	50歳以上男子 シングルス	３位
〃	第１回全日本レディース バドミントン選手権大会	瀬川　友紀・黒田こずゑ （米子市）	２部Ａブロック ダブルス	優勝
19年度	平成19年度全日本総合 バドミントン選手権大会	清水　隆志　（鳥取市）	混合 ダブルス	３位
〃	第２回全日本レディース バドミントン選手権大会	瀬川　友紀・黒田こずゑ （米子市）	２部Ａブロック ダブルス	２位
20年度	平成20年度全日本総合 バドミントン選手権大会	堂本　克樹・西川　由衣 （三洋CE）	混合 ダブルス	３位
〃	第47回全日本教職員 バドミントン選手権大会	清水　隆志（鳥取敬愛高校） 佐藤　伴哉（鳥取県スポセン）	一般男子 ダブルス	優勝

21年度	第38回全国高校選抜 バドミントン選手権大会	井田　詩織　（鳥取敬愛高校）	女子 シングルス	３位
22年度	第65回国民体育大会 バドミントン競技	鳥取県選抜	成年女子	４位
〃	第27回全日本シニア バドミントン選手権大会	松下　泰司　（ＪＲ西日本）	50歳以上男子 ダブルス	３位
23年度	第66回国民体育大会 バドミントン競技	鳥取県選抜	成年女子	４位
〃	第28回全日本シニア バドミントン選手権大会	瀬川　友紀　（米子市）	35歳以上女子 シングルス	３位
25年度	第52回全日本教職員 バドミントン選手権大会	鳥取県選抜	男子団体	２位
27年度	第54回全日本教職員 バドミントン選手権大会	山本　正人（鳥取市）	男子60歳以上 シングルス	優勝
〃	第２回全日本レディース バドミントン選手権大会	日野由希江・西川　由衣	女子複	２位
〃	〃	湯谷　佳菜・林　　舞依	女子複 ２部Ａブロック	優勝
〃	〃	若杉　芙希・渡辺　淳美	女子複 ２部Ａブロック	３位
〃	〃	中西　雅代・前畑　充栄	女子複 ２部Ｂブロック	２位
〃	第24回全国小学生 バドミントン選手権大会	馬屋原光太郎・中嶋　関太	男子複 ６年生以下	３位
28年度	第33回全日本シニア バドミントン選手権大会	花本　大地（鳥取市）	男子単 35歳以上	優勝
〃	〃	花本　大地（鳥取市）	男子複 30歳以上	３位
〃	第55回全日本教職員 バドミントン選手権大会	青木　　洋・小林　寛哉	一般男子複	優勝
〃	〃	出石　哲也・清水　隆志	男子複 30歳以上	優勝
28年度	第40回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	生本　和規 （米子工業高等専門学校）	男子単	優勝
〃	第55回全日本教職員 バドミントン選手権大会	鳥取県選抜	一般男子団体	優勝
〃	第40回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	米子工業高等専門学校	男子団体	３位
29年度	第72回国民体育大会	鳥取県チーム 高橋　真理・岸田　洋子・ 高瀬　秀穂	成年女子	５位
〃	第56回全日本教職員 バドミントン選手権大会	青木　　洋・小林　寛哉	一般男子複	２位
〃	〃	小林　寛哉	一般男子単	２位
		青木　　洋	一般男子単	３位
〃	〃	山本　正人・三村　俊彦	男子複 60歳以上	３位

〃	〃	山本　正人（鳥取市）	男子単 60歳以上	２位
〃	第34回全日本シニア バドミントン選手権大会	花本　大地・出石　哲也	男子複 30歳以上	３位
〃	〃	地神加奈子	女子複 30歳以上混合	優勝
30年度	第57回全日本教職員 バドミントン選手権大会	教職員鳥取	一般男子団体	優勝
〃	〃	青木　洋・福原　忠宣	一般男子複	３位
〃	〃	山本　正人・三村　俊彦	男子複 60歳以上	３位
〃	〃	山本　正人（鳥取市）	男子単 60歳以上	２位
〃	第35回全日本シニア バドミントン選手権大会	花本　大地・出石　哲也	男子複 30歳以上	３位
〃	〃	花本　大地（鳥取市）	男子単 35歳以上	優勝
〃	第42回全日本高等専門学校 バドミントン選手権大会	米子工業高等専門学校	男子団体	２位

鳥取県弓道連盟

県立武道館弓道場（平成14年竣工）

１　草創期から現在までの組織の動き

県弓連の草創期を振り返ってみると、東部における学校弓道の復活運動が原点となっている。昭和26年に教育現場にも弓道の導入が認可された時期に、いち早く中学・高校に弓道部設立の働きかけをした先人達がいた。

その主な弓道人をあげてみると、後に戦後初めて全日本弓道連盟から範士の称号を授与されるこ

とになる坂田郁太郎（以下敬称略）は鳥取西高に弓道部をつくられ、県高体連弓道部長も務められた河本晴正、八頭高校に弓道部をつくられた富山良正、倉吉西高校の初代師範、進藤康文、鳥取南中に弓道部をつくられた松村顕太郎、また一般の部では県内弓道の普及に尽力された植田勅治があった。植田先生は国体選手の育成にも力を注がれ、自らも選手として国体に出場され、後に監督をされた。その功績は大きく、後に第６代県弓連会長に就任された。こうした先人たちの努力によって、県弓連の基盤は確固たるものになったのである。

そして、県弓連の組織づくりが進み、やがて東部・中部・西部の３支部ができた。組織が固まってくると、弓道人口もふえ、登録会員は数百人になり、一般、高校、大学も含めた大きな組織となった。支部数としては草創期の支部数をはるかに超えるものとなった。

一般の部が鳥取市弓道協会、白兎弓道会、境港弓道協会、王子製紙米子工場弓道部、米子弓道会、鳥取県教職員弓道連盟の６支部、大学が鳥取大学弓道部、鳥取環境大学弓道部、鳥取大学医学部弓道部の３支部、高校が鳥取東高校、鳥取西高校、鳥取工業高校、鳥取湖陵高校、鳥取敬愛高校、八頭高校、青谷高校、倉吉西高校、米子東高校、米子西高校、米子南高校、米子北高校、米子高校、米子工業高校、境高校、境港総合技術高校の16高校の弓道部が高校の部として一つの支部を形成し、中学は鳥取東中、鳥取南中、高草中、鳥取西中、鳥取北中、桜ヶ丘中、中ノ郷中、岩美中、東山中の９中学校が中学の部として支部を形成している。従って、支部数が一般６、大学３、高校はまとめて１、中学もまとめて１で、合計11支部となったのである。

また、学校弓道がここまで盛んになった功労者の中に特筆すべき先人がいた。それは昭和60年に倉吉西高校の弓道部の初代師範になった進藤康文である。進藤は単に一高校の指導にとどまらず、鳥取県全体の競技力向上に努力し、県内高校弓道部が全国大会で大活躍をする基礎をつくった。また、高校生の指導だけでなく、県内他の指導者にも指導法を教えた。その指導法は「進藤マジック」とも称されたほどである。現倉吉西高の監督・福光善太は、在学中に進藤の教えを受け、その教えに独自の指導法を加えて今日の倉吉西高弓道部の隆盛に発展させた。

２　本県における施設の充実と弓道の発展

昭和58（1983）年、米子市東山公園内に県内最大の10人立弓道場が落成した。これは昭和60年のわかとり国体で、弓道が米子市で実施されることになったため米子市が整備したのだ。弓道場完成の翌年昭和59年に、国体のリハーサル大会として全日本勤労者弓道選手権大会が実施され、県代表の専売公社チームが準優勝という健闘ぶりをみせて、国体への取り組みに大きな励みとなり、昭和60年鳥取わかとり国体を、会員数が少ないなか県弓連全員一丸となり、成功裏に終了することができた。

当時、若手の弓道連盟会員であった人たちが現在の県弓連を支えていることをみても、全国大会を二つも運営し成功させたことが、西部地区における弓道の発展につながっていく要因となったといえる。

平成29（2017）年10月現在の県弓連の称号者は、教士七段４名、教士六段が11名、錬士六段が８名、錬士五段が10名で、五段以上の称号者合計が33名となっている。これは県弓連登録の一般会員115名の28.7％にあたる。（他県の３千名以上の会員数を誇る弓道大県おいては、称号者の割合は14％台）しかし、一般会員数が少ないことも意味するもので、県弓連としては年間目標のひとつに休眠会員の掘り起しや、新規会員数の増加をあげて全力で取り組んでいるところである。

平成14（2002）年、全国に誇れる素晴らしい弓道場が県立武道館（米子市両三柳）の中に完成した。これは遠的場も備えた設備の充実した弓道場であり、県弓連の行事、高体連の行事のほとんど

がここで実施されている。また、弓道教室の開催により会員数の拡大に大きく貢献している。

東部においては、平成25（2013）年に鳥取市布勢に10人立の市営弓道場が完成し、東部における弓道人の修練の拠点となっている。また、弓道教室や講習会などを実施し、中学・高校生の弓道の隆盛に大きく寄与している。

なお、鳥取市武道館にあった弓道場は、鳥取西高校の整備（進入路設置）に伴い、廃止されている。

このように県内に大規模な道場が三つもできたことは、鳥取県弓道の発展に大きく貢献することになった。

３　全国大会での県勢の活躍

平成５（1993）年以降、わが県は一般（国体では成年男子、成年女子）選手の活躍には目覚ましいものは少ないが、平成10（1998）年神奈川県国体で、齋木幸雄監督（前県弓連会長）率いる成年男子が遠的優勝を遂げている。その時の選手が、加藤速美（現県弓連会長）、福住正道（現県弓連副会長）、山根宏典の諸氏であった。また平成12（2000）年には富山国体で、成年女子が遠的２位となった。その時の選手は大石陽子、木川こずえ、有澤千秋、監督は渡邉美喜江であった。平成21（2009）年には成年女子が新潟国体において、近的２位、遠的３位、総合２位という好成績を挙げたことが大きな成果であった。その時のメンバーは井手添悦子（監督兼務）、國森由香里、藤田菜扇子であった。平成29（2017）年度には、全国教職員弓道選手権大会で、本県代表の小川貢司（米子高校）、澤田恭成（鳥取工業高校）、福田賀博（鳥取西高校）の３教諭が団体戦３位入賞を果たした。これは本県初の快挙であった。

４　全国大会での中高校生の活躍

近年は、高校生の活躍は目覚ましく、全国に鳥取県ありと喧伝されるほどの成果を挙げている。過去の国体、全国高校総体、全国高校選抜大会の三大大会のうち優勝（団体戦・個人戦の合計）の回数をまとめると次のとおりである。（優勝一覧は別表を参照）

※国　　体　　優勝10回
※高校総体　　優勝13回
※選抜大会　　優勝５回

また、中学生も近年、全国大会で上位入賞するという活躍をしている。平成19(2007)年には桜ヶ丘中の田中緑が全国大会個人優勝、平成25（2013）年には第10回全国中学生弓道大会で、鳥取東中の木下寛章が男子個人優勝を果たし平成28（2016）年には第13回全国中学生弓道大会では桜ヶ丘中の男子が団体３位入賞、平成29（2017）年第14回全国中学生弓道大会で東山中男子が団体３位入賞という好成績を挙げているのである。

このように、高校生や中学生の全国大会での活躍には目を見張るものがあり、県弓連としても誇りに思うところである。この好成績のほとんどが倉吉西高校の活躍に負うところがあり、その活躍のおかげで県弓連が全日本弓道連盟から表彰されることとなった。

倉吉西高の指導にあたっている福光はその功績を称えられて、平成29年４月に公益財団法人「エネルギア文化・スポーツ財団」から第23回エネルギアスポーツ賞を授与された。これは県弓連初のことであり、今後の弓道指導者への励みとなるものである。

鳥取県の県弓連の活躍は全日本弓道連盟からも注目されており、全国都道府県弓道連盟の中で、その年度に全国大会で活躍した県を最優秀地連、優秀地連として表彰しているが、平成16（2004）年度は本県弓道連盟も優秀地連表彰を受けたのである。また平成27（2015）年度は最優秀地連の表彰を受けて、扁額を全日本弓道連盟よりいただいた。

この扁額には「忠恕」（ちゅうじょ）と書かれている。これは論語の中にある孔子の教えで、「自分の真心を尽くし、他人に対し

倉吉西高校弓道場・練習風景と監督の福光善太

て思いやりがある」と言う意味で、まさに私たち弓道人の有るべき姿を示唆する言葉である。

県弓連としては、本県における弓道のさらなる充実と発展を期して重点目標をかかげて努力しているところである。その重点目標のなかには、「弓道人口拡充運動の推進」・「学校弓道の普及と育成」をあげており、地道な継続した努力が将来結実することを信じている。

〔県弓連会員数（平成29年４月現在）〕

一般	大学	高校	中学	合計
115名	96名	507名	307名	1025名

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和61年～平成11年		阿部　嘉男
12年～	16年	妹澤　　徹
16年～	17年	樋口　和彦
17年～		齋木　幸雄

◇理事長

昭和61年～平成５年		鶴原　英男
６年～	11年	野々村禮彦
12年～	15年	羽戸　豊二
16年～	21年	岡川　仁司
22年～		山中　志郎

◎高校弓道三大大会の優勝記録

〈全国高校総体〉

開催年	種　目	チーム・選手名（所属高）
昭和48年	男子個人	広沢　遵（鳥取西）
平成６年	男子団体	倉吉西　藤井　潤、丸橋　洋平、沖　康平、花田　賢洋、西尾　正樹 増田　純吾
平成９年	女子個人	吉田　洋子（倉吉西）
平成13年	男子個人	藤原　享（八頭）
平成15年	女子個人	酒井　美穂（八頭）
平成16年	女子団体	鳥取西　坂本　美菜子、中村　美希、田中　直子、佐々木　菜保 田中　佳那、谷口　麗
平成25年	男子団体	倉吉西　藤井　貴宏、今井　徹、加藤　陸、佐々木　和哉 大西　哲司、宮坂　大成
	男子個人	今井　徹（倉吉西）
	女子個人	山本　璃奈（倉吉西）
平成26年	男子団体	倉吉西　岡本　裕也、宮口　峻、宮坂　大成、青砥　龍一 日山　界、灘尾　遼
	女子団体	倉吉西　山本　璃奈、岩本　真奈、磯江　ほのか、鵜沼　芳子 柳川　鈴佳、平林　真歩
	女子個人	田中　彩生（米子）
平成27年	女子団体	境港総合技術　植田　美里、内田　楓、村﨑　亜美、笠原　茜 永見　栞子、岩野　真由美

〈国民体育大会〉

開催年	種　目	チーム・選手名（所属高）
平成11年	少女団体近的	県選抜　　松本　佳子（境港工）、杉信　裕美、浦川　愛（倉吉西） 広岡　涼子（青谷）
平成15年	少女団体遠的	県選抜　　前畑　恵子、森本　良子、平信　千恵（倉吉西） 吉川　峰央（鳥取西）
平成20年	少女団体遠的	県選抜　　舩越　美菜子、戸﨑　泉（倉吉西）、山下　夏希（青谷）
平成25年	少年団体近的	倉吉西　　藤井　貴宏、今井　徹、加藤　陸
平成26年	少年団体近的	県選抜　　宮坂　大成、宮口　峻、岡本　裕也（倉吉西）
平成27年	少女団体近的	県選抜　　岩本　真奈、磯江　ほのか（倉吉西）、永見　栞子（境港総合技術）
平成29年	少年団体遠的	県選抜　　前田　航平、東本　永遠（倉吉西）、足立　康輔（境港総合技術）
平成30年	少年団体近的	県選抜　　東本　永遠、田熊　健太（倉吉西）、田中　佑樹（米子工）
	少年団体遠的	
	少女団体遠的	倉吉西　　絹見　翼、石笠　のあ、西　菜央

〈全国高校選抜大会〉

開催年	種　目	チーム・選手名（所属高）
平成11年	女子個人	杉信　裕美（倉吉西）
平成14年	男子団体	境港工業　　中野　卓哉、増田　渉、堀　裕之、木村　雄太
平成24年	男子個人	加藤　陸（倉吉西）
平成26年	男子団体	倉吉西　　長田　博志、中田　智也、岡本　裕也、杉本　尚斗
平成27年	女子個人	西田　瞳（倉吉西）

鳥取県ライフル射撃協会

ビームライフル射撃競技会の様子

1　鳥取県営ライフル射撃場の老朽化

ライフル射撃場は昭和60（1985）年の「わかとり国体」開催に伴い、昭和57（1982）年に当時としては他県に比べてもまったく引けを取らない射撃場が完成した。

当射撃場は、大会運営がしやすいよう50m射撃場、10m射撃場の２射撃場が横一列になった造りで、当時全国的に注目を集めた施設だった。わかとり国体では当県の選手６人が入賞するなど活躍した射撃場だったが、完成後10年を過ぎたころから、射座と通路の仕切りフェンスのほとんどが破れ、出入り口の鉄門が腐食し、射場の鉄柱は囲いの木がはがれて危険性が指摘された。県は協会に管理費として年間40万円を補助していたが、管理棟の警備や光熱費を払うのがやっとで、補修まで手が回らないのが現状であった。

2　射撃場の改修工事

協会から県に改修工事の要望をしていたところ、平成７（1995）年から順次要望が認められ、雨漏りのする10m射撃場の屋根の張り替えや、危険性が指摘されていた傷んだ防弾板の取り替え工事が進められた。

ビームライフル射撃場の施設も当射撃場内に設置されておらず、地区の体育館や公民館を借りて練習をしていた。射撃競技を一カ所に集約して練習することでライフル銃、空気銃それにビームライフルのそれぞれの選手を一カ所で指導することができることから、わかとり国体後に協会員の努力により、射撃場の敷地内に中古プレハブ小屋を設置した。これでビームライフル練習場が完成し、会員の練習も盛り上がり、その成果は即国体で入賞者を出すなど、会員の活動が活発になり、各大会において優勝する選手が続出した。

しかし、中古のプレハブ小屋は長くはもたない状況で、協会員の奉仕作業で屋根のペンキ塗りを続け何とか練習場を確保するも、老朽化で雨漏りがしてきたところから、これ以上維持することができないと決断、10m射場の一部を遮蔽すればビームライフル練習場を確保できると判断し、県

に施設の確保を要望したところ受け入れられ、６射場の練習場が出来上がった。

３　設備の改修

わかとり国体開催時の射撃競技は標的を自ら交換していたが、平成８（1996）年ごろからは競技規則が変更になり、自動的に標的交換できる装置を導入している射撃場が全国的に増え、また標的も変更になった。

当射撃場の設備が全国的レベルに劣ることから設備を変更しなければならない状況になった。

県内の選手は新規の標的になじめず、これが大会成績不振の原因として表出してきた。10m射場だけでも新規の標的交換機を設置したいが、１射座10万円からの経費が掛かることから、県に要望すると協会と県が支出することで話がまとまり、10射座だけではあるが、標的交換機を設置することができた。これにより練習環境は格段に良くなった。

平成13（2001）年ごろから、射撃場にかかわる鉛汚染問題が全国的に浮上してきた。国内の射撃場で使用されている弾丸は鉛を主成分とする鉛弾がほとんどであり、当射撃場も鉛弾を使用する施設である。

場内に鉛弾や鉛を含む土壌が存在すること自体を土壌環境保全上の問題とするのではなく、射撃場周辺土壌の汚染や公共用水域での水質汚濁および地下水の汚染といった、鉛による環境保全上の問題を生じさせないようにすることが必要になってきた。

協会として、10m射場は標的交換機を設置したことにより、鉛弾を交換機により回収することから問題は解決。50m射撃場について対策を講じなければならなくなった。時期を同じくして西伯町議会から同町設置の射撃場鉛公害について懸念が浮上、他県でも同じように鉛公害が表面化し問題となってきた。

このままでは使用禁止となり、国体に向けての選手強化に影響が出ることになるので、標的交換機の設置を早急に進める必要があった。予算面で苦慮していたところ、京都府射撃場廃止の情報があり、即50m標的交換機５台を譲り受けることができた。また高知県射撃場が国体開催にともない標的交換機を入れ替えることになり、即５台を譲り受けることができた。合わせて10台の50m標的交換機がそろったものの中古品である。補修などの費用が結構掛かることから、当時の県教育委員会体育保健課に相談し、鉛公害対策費用として話が進み、50m射撃場の標的交換機を10台設置することができた。これにより当射撃場の鉛公害対策が完了した。

2018年ライフル射撃場（入り口側から。左側管理棟、右手前10㍍射撃場、奥10㍍射撃場）

４　鳥取県西部地震による被害

平成12（2000）年10月６日、鳥取県西部を震源とした震度６強の地震が発生した。震源地が米子市南方約20kmであり、震源地に近い県営射撃場は地面が割れ、設置していたビームライフルの機器が落下し破損、10m射撃場は柱が陥没、50m射撃場は床のコンクリートがひび割れする等甚大なる被害を受けた。地震が概ね収まると県はすぐに災害復旧工事に取り掛かった。

５　県立日野高校ライフル射撃部

平成16（2004）年、日野高校に射撃同好会が発足した。同校教諭・木村三三男が指導し、国体の少年の部に鳥取県代表として幾度となく出場し頑

張った実績が認められ、平成18（2006）年５月10日、日野高校の生徒総会で「射撃同好会を部に昇格する」案が可決された。鳥取県内では初の射撃部となった。

同校にビームライフル銃や機器を貸し出すなどしてバックアップしてきた協会としては「長年の夢がかなった」と喜んだ。実績を積み上げて県高校体育連盟に加盟することを目標に、国体や各大会に出場した成果が認められ、平成29（2017）年４月に待望の県高校体育連盟に加盟することが認められた。

６　指定管理者の指定

平成17（2005）年、県は県立スポーツ施設など公の施設における指定管理者の指定手続きに関する条例を施行した。県営射撃場についても公募があり、当協会も応募した。そして、平成18年４月１日からライフル射撃協会が施設を管理することに決まり、３年、後にさらに５年間継続して管理を任されている。

しかし、維持管理費が少ないことから協会員に奉仕作業を委ねるところが多く、また射撃場を常時開放とはいかず、土・日曜日を中心に協会員が交代で日直当番をして開放しているのが現状である。

７　教習射撃場の指定認可

平成21（2009）年に銃砲刀剣類所持等取締法が大幅に改正となり、空気銃・ライフル銃を所持する際の条件がかなり厳しくなった。これに伴い、協会員の中から銃の所持を断念するものが現れた。ライフル銃の所持に関し県外の射撃場で技能講習を受講していたが、協会として、このままでは競技人口が減少すると危機感を感じ、当射撃場で受講できるよう公安委員会へ申請した。平成21年12月に教習射撃場として指定を受け、空気銃所持者がライフル銃所持への移行が容易になった。

８　協会員の競技成績

毎年、西日本大会等数多くのライフル射撃競技大会にエントリーし、それなりの記録を出し、鳥取県ライフル射撃協会の選手として全国にアピールすることができた。国体では、平成６（1994）年の第49回愛知わかしゃち国体の成年エア・ライフル（膝射）20発競技で長谷川謙二が188点で５位入賞、平成９（1997）年の第52回大阪なみはや国体の成年女子エア・ライフル（立射）20発競技で松本和恵選手が191点で８位入賞した。

なみはや国体での松本選手不動の居銃姿勢

平成15年第58回静岡県でのＮＥＷ!!わかふじ国体では、成年女子ビーム・ライフル（肘射）60発競技で桝田紀子選手が702.7点で５位入賞という輝かしい成績を収めた。この時の試合は、上位８人が10点満点の連続で、粘って勝ち得たタイトルであった。

桝田選手の入賞後は国体での入賞は遠のき、試練の時期を迎えた。競技規則が変更となり、国体などのトップレベルの大会では電子標的が採用された。当県には導入されていない装置である。紙標的で練習している我々は不慣れで、中国地方では唯一広島県のライフル射撃場に電子標的が設置されていることから、広島での合宿を増やして電子装置に慣れるように努めた。その後は各大会で得点が得られるようになり、国体でもあと一歩で入賞を得るレベルまで向上してきた。

特に少年女子選手の中口遥は、中学生から射撃を始めてぐんぐん実力が向上、平成24年の第67回ぎふ清流国体に、初めて中学３年生で出場した。その後、試合を重ねメキメキと成長してきた。県立日野高校に進学後、射撃部に入部してさらに実力を身に付け、平成26年第69回長崎がんばらんば国体では、少年女子10㍍エア・ライフル（立射）40発競技で182.1点を獲得し３位入賞に輝いた。本県少年競技では初のタイトルであり、今後が期待されるまでに成長した。

射撃競技中の中口遥選手

中口選手は高校卒業後、同志社大学に進学、同大学の射撃部に入り、さらに実力をあげた。平成28年第71回岩手県での希望郷いわて国体成年女子10㍍エア･ライフル（立射）40発競技で７位入賞。平成29年第72回愛媛県での愛顔つなぐえひめ国体成年女子エア･ライフル（立射）40発競技で３位入賞。日本ライフル射撃協会U20アスリートに選ばれた。

９　ジュニアの育成指導

当協会ではジュニアの指導を鳥取・米子を拠点に指導している。鳥取については布勢運動公園内で、因幡シューティングクラブと称して小・中学生を対象にビームライフル射撃競技の指導を行っている。米子については、市内の公民館と南部町の県営ライフル射撃場で鳥取と同じく小・中学生にビームライフル射撃を指導している。

指導員が講師となり射撃競技規則を学習するとともに、実戦練習によりアスリートの育成に努めている。平成28（2016）年からは、鳥取県が主催している「世界に羽ばたく鳥取ジュニアアスリート発掘事業」の卒業生が毎年３人程度ライフル射撃競技に進みアスリートを目指して練習に励んでいる。

平成29年度全日本大会出場選手

平成27年からは、中国小学生・中学生ライフル射撃競技大会を当協会が主催して広島県で開催し、以後毎年開催している。中国地方の各県でジュニアの育成を行っているが、競技会に参加する機会がなかったため、当協会が中国４県のライフル協会の賛同を得て大会を毎年開催することができた。この大会において、わが県は優勝者を毎年出すなど、日ごろの練習の成果を存分に出している。平成28年からは全日本中学生ライフル射撃競技選手権大会に出場し、全国の中学生と戦っている。

平成29年度第３回全日本中学生ライフル射撃競技選手権大会で、ビームピストル少年女子40発競技に出場した坂田光穂（鳥取北中）が319点で３位に入賞した。鳥取県の中学生では初の入賞者である。

競技中の坂田光穂選手

10　今後の課題

（１）射撃場施設の改修

平成20（2008）年以降は国体等全国大会において、電子的標的機器を設置しなければならないと、日本ライフル射撃協会から指導を受けている。国際ルールは電子的標的のルールであり、国内競技大会も国際ルールに準じて開催される。しかし、地方の競技団体としては、設置変更は経費の面で難しい。当射撃場の設備は屋外であり、もし電子標的を採用すると建物から変えていかなければならない。次期本県開催の国体を開催するには問題が多く、課題が山積みである。

中国地方では広島県のライフル射撃場が電子標的を採用している。維持費については協会独自の運営であり、ある程度会員が集まり、年間を通じて各大会を誘致しなければ運営が難しいという。

さらに、平成28（2016）年の春に熊本地震で甚大な被害を受け１年で復活した熊本県ライフル射

撃場の場合は、すべての射座が電子標的を採用している。同射撃場においても県内外の大会を誘致して維持管理している。

（2）ライフル射撃スポーツの普及および指導

昭和30（1955）年７月に鳥取県ライフル射撃協会を設立して、ライフル射撃競技の普及に努力してきて現在に至っているが、協会会員は50 ～ 60人を推移している。法律で制約された競技ではあるが、他県に比べても少ない現状である。

平成21（2009）年の法律改正で銃砲所持が難しくなったが、年少者に対する射撃年齢が緩和された。今後は小学生・中学生、それと高校生までの一貫指導を充実することにより、ジュニアの会員を増やし、各年代の選手を確保することで競技力向上を図る必要がある。

また、体験会等普及活動を実施することによって年少者の発掘に努め、低年齢からの育成強化を図ることも重要である。

（3）指導者の育成

指導者は単に選手の競技力の向上指導だけでなく、選手の人間力（インテグリティー）を向上させる役割も求められる。

トップアスリートを育て上げることを目標に、指導者は選手の資質、インテグリティー（誠実さ・真摯さ・高潔さ）を高め、自らの価値や知識の向上を図り、正しい倫理観や道徳心を有するアスリートを育成することが求められる。

地方から日本を代表するアスリートを育て上げることが最重点課題である。そのため公認コーチ資格を有する質の高い指導者を育成する必要がある。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和57年～平成10年	井上万吉男
11年～	戸田　　至

◇理事長

平成３年～	４年	坂根　一郎
５年～	６年	井上　一男
７年～	11年	椎木　孝明
12年～		松本　雅文

鳥取県剣道連盟

第65回中国五県剣道大会（広島市）2018・6・10

１　運営組織の強化等

剣道連盟設立以来60余年を経過する中で、剣道は少年剣道、女子剣道の普及等により、着実に復興し、戦前をしのぐ発展を遂げることができた。

そのため、昭和27年連盟設立以来改正していなかった会則も現状に対応し、かつ又、今後の発展を図るために平成17（2005）年に大幅に改正した。

特に、年々増える各種剣道大会、あるいは講習会等を円滑に推進し、本県剣道の更なる振興発展を図るために、事務局の執行体制の整備、理事の責任体制の強化（大会運営部･講習会部･強化部･審査部・女子剣道部・居合道部を設置）等を図ったところである。

２　鳥取県立武道館の建立

平成12（2000）年９月１日、国際大会・全国大会の公式大会が開催できる機能を備え、武道の多くの競技に対応した総合武道館が米子市両三柳に建設された。

同年９月にこけら落としとして、全日本剣道連盟主催、鳥取県剣道連盟主管で、第46回全日本東西対抗剣道大会を開催した。全国一流の選手の充実した試合を観戦することができたが、中でも本県の山中洋介選手は見事な二本勝ちをおさめ、優秀選手に選ばれた。

また、同年11月に、日本武道館と共催で鳥取県青少年剣道大会を開催した。開館以来各武道団体が全国大会、研修会、稽古会等を開催し、本県が誇る総合武道館として発展が期待されている。

３　鳥取県剣道連盟創立50周年記念剣道祭

平成13（2001）年12月、鳥取県剣道連盟創立50周年記念剣道祭が鳥取市武道館で２日間にわたって開催された。

第１日は、武道館前庭で記念碑の除幕式が挙行された。記念碑には故太田義人範士九段

建設された記念碑

書で、鳥取藩校の指針「文武併進」が刻まれている。次いで武道館内で本県剣道発展のために尽力した、個人74名、団体３者に表彰状、感謝状が贈呈された。

第２日は、記念大会。各地区から選抜された小学生62名、中学生52名、高校生42名、一般58名、計214名が参加。東西に分かれて熱戦が展開されたのである。

４　外国との剣道交流

（１）韓国江原道との交流

平成13年、鳥取県と韓国江原道友好協定７周年記念行事として、県体育協会と江原道体育会のスポーツ交流が開始された。

剣道は第１回から第４回まで一般、第10回から第13回までは高校生を対象に交流が行われた。

第２回目の交流時に江原道剣道会会長高鶴在（コ・ハクチェ）氏から鳥取県剣道連盟と江原道剣道會の交流会が提案され、その後も交流協定のことが話題となった。平成24年４月、鳥取県剣道連盟役員総会において交流実施が承認され、平成25（2013）年11月、交流協定を締結した。

第１回の交流は、平成26年７月に江原道から役員10名が来県し、第２回は平成27年９月に本県から10名の役員を派遣し、以来成年を中心に交流を続けている。

（２）ウラジオストック剣道連盟との交流

平成18（2006）年に台北市で第13回世界剣道選手権大会が開催されるに先立ち､平成16(2004)年、ロシア剣道連盟から、以前より交流のある東伯郡剣道連盟吉田朋幸に「鳥取県で世界剣道選手権大会の調整合宿をしたい」という依頼があり、ロシアナショナルチームの鳥取県訪問が実現した。

ロシアチームは大歓迎を受け、鳥取市、倉吉市、米子市を中心に地元の選手と積極的に稽古・調整に励んだ。倉吉では倉吉東中学校を訪問し、授業にも参加した。この鳥取県合宿をきっかけにして平成21（2009）年７月、ロシア沿海州剣道会との剣道交流が実現し、高校生たち10名（男子７名、女子３名）がウラジオストクを訪れ、現地の青少年と剣道交流を行った。

５　各連盟の活動

（１）鳥取県学校剣道連盟

鳥取県学校剣道連盟により鳥取県教職員大会の開催、全国教職員剣道大会への選手派遣、中学校剣道選手権大会の開催、指導者研修会等が行われている。

・全国教職員剣道大会

個人

小学校教員の部　義務教育の部

平成４年：岸田勇人３位

平成５年：岸田勇人２位

平成17年：二子石晶３位

高校・大学・教育委員会の部

平成６年：山中洋介優勝

平成７年：竹中健太郎優勝

平成17年：竹中健太郎３位

平成19年：竹中健太郎３位

平成20年：菊川省吾優勝

女子の部

平成21年：岸田夏奈ベスト８

団体

平成13年：３位（竹中健太郎、菊川省吾、岸田勇人、山中洋介、岸田芊）

平成14年：優勝（菊川省吾、岸田勇人、竹中健太郎、山中洋介、岸田芊）

平成17年：３位（二子石晶、菊川省吾、竹中健太郎、山中洋介、佐伯友茂）

特に、平成14年８月11日、第44回全国教職員剣道大会（兵庫県）において、鳥取県チームが初の全国大会優勝を成し遂げた。先鋒 菊川省吾（鳥取西高教員）、次鋒 岸田勇人（中ノ郷中学教員）、中堅 竹中健太郎（八頭高校教員）、副将 山中洋介（鳥取西高教員）、大将 岸田　芊（倉吉北高教員）のメンバーである。前年の大会で３位に入賞し、全国での手応えを感じてはいたが、優勝への道のりは遥かに遠いものと思っていた。福岡県、

佐賀県と剣道王国の九州勢を連破し、４回戦は数度の優勝を誇る茨城県を破った。これだけのチームと戦えば、選手は満身創痍の状態であったが、準決勝の難敵鹿児島県を選手一丸となって下し、いよいよ決勝戦は千葉県で、両チーム相譲らず、大将戦となった。千葉県小林選手が一本先取したが、鳥取県岸田選手が相手の突きを返して面を決め、引き分けに持ち込んだ。代表決定戦は、副将の山中（鳥取）、関川（千葉）の両雄対決であったが、両者とも面を得意とし、じりじりと間を詰め、意を決して飛び込んだ山中選手の初太刀の面が決まったのである。

この年の１月、会長の山根幸惠範士が急逝された。鳥取県の剣道界、そして全日本学校剣道連盟の重鎮でもあり、常に激励し導いてくださった範士の突然の逝去に、我々はただ愕然とし悲嘆にくれていた。そんな中での全国大会初優勝であった。岸田監督初め選手は先生の墓前に全国大会初優勝を報告し、範士も黄泉の国でこの快挙をさぞお喜びのことと拝察したことであった。

人口60万人を割った鳥取県は、中学校60校、高等学校30校あり、そのうち剣道部のある学校はその半数あまりで、学校剣道連盟の会員は総勢100人にも満たない状況である。その鳥取県学校剣道連盟の会員が全国大会優勝を成し遂げたのである。

秋には、県教育長や体育協会会長が出席し、県下の剣道関係者で優勝祝賀会を催した。その宴席の大画面に映し出される一人一人の選手の勇姿に出席者一同拍手喝采したあの喜びの時を忘れることはできない。

・中学校剣道選手権大会

中学校剣道選手権大会は県学校剣道連盟が主催する大会で、試合の機会のない冬場に県内中学生を対象にして設定した大会である。対戦方法は抜き勝負である。昭和62年から始まり、第１回は男子が倉吉西中学校、女子は三朝中学校が優勝した。今日まで連綿として継続している。

・指導者研修会

中学校・高等学校の剣道指導者が少なく、解決のため、部活指導の在り方を求める指導者研修会が、倉吉北高校、続いて三朝中学校で開催された。平成21（2009）年には、全日本学校剣道連盟の主催で「中学武道必修化に伴う剣道指導者講習会」が開催され、県教委体育保健課指導主事吉田朋幸、県中学校体育連盟剣道専門員久住茂の２名が派遣された。

・鳥取県学校剣道連盟の課題

なお、鳥取県学校剣道連盟の課題は次のことが挙げられる。

①少子化に伴う剣道部員数の減少傾向。

②新規教職員採用数の減少による学校現場における指導者不足。

③全日本学校剣道連盟への要望として、剣道部活動に未経験の指導者でも指導できるような具体的な手引書、あるいは指導資料の発行。

（２）鳥取県中学校体育連盟剣道専門部

わかとり国体以降、鳥取県中学校指導者が代わった。専門委員長は田中義雄から福井伸一郎へ交代し、さらに平成に入ってから福井伸一郎から寺谷英則に代わった。指導者もわかとり国体で活躍した久住茂、岸田勇人などが中学校の指導者に加わった。

平成９(1997)年以降活躍した中学校は、男子は、倉吉西中学校、淀江中学校、鳥取東中学校、境港第一中学校、大山中学校、桜ヶ丘中学校などである。

同じく女子は東伯中学校、溝口中学校、日野中学校、湖東中学校、倉吉東中学校、後藤ヶ丘中学校、倉吉西中学校、米子北斗中学校などである。

平成18（2006）年の教育基本法の改正、平成20(2008）年の中学校学習指導要領の改訂により、平成24（2012）年度から剣道、柔道など武道が、体育での選択必修科目（１年・２年）となったのである。

このことは、さらに剣道の普及振興を図る上からも良いチャンスであり、全日本剣道連盟、県教育委員会の指導のもとに、指導者の養成、各学校

に対する啓蒙普及等積極的に取り組んだところである。

しかしながら、指導者の確保が困難、剣道具が高価等との理由で県下中学校の30％程度の学校しか実施していない現状であり、その上、近年の少子化等により部員数が減り、団体戦のチームが組めなかったため、剣道部の休部あるいは廃部になる中学校が出てきた。

そういう意味からも、せっかく武道が必修化になったこの機会に多くの学校が剣道を採用するよう引き続き働きかけていく必要があるし、一方では、社会体育で良い指導を受けた選手が中学入学後成果を上げている例も多くあることを見逃してはならない。

県体育協会が提唱している学校単位という垣根を越えた部活のあり方も真剣に取り組む必要がある。

（３）鳥取県高等学校体育連盟剣道部

わかとり国体後、目に見える成果は挙がっていないなかで、倉吉西高が昭和63（1988）年の全国高校総体で開催地の赤穂高を下しているが、これ以外、他県の厚い壁に阻まれ続けている。強化を目指し平成２（1990）年に第１回白狼旗剣道錬成大会を三朝で開催することになったが、この後毎年全国強豪100余チームが集まって２泊３日の練習試合を行い、強化を図ってきた。

平成７（1995）年、鳥取県で全国高校総体が開催された。剣道競技の団体戦出場校は、男子は鳥取城北高と米子東高、女子は倉吉東高と米子商業高（後に米子松陰高）であった。個人戦男子は宮内彰、安東晃吉（鳥取城北高）、坂本和信（八頭高）、正司智福（米子北高）、個人戦女子は森本さやか、米原真由美（米子商業高）、福原直子、鎌田美由紀（八頭高）であった。試合結果は、団体戦で鳥取城北高が予選リーグを勝ち抜き決勝トーナメントに進出したが、群馬前橋第四高に敗れた。個人戦女子では森本、米原（米子商業高）が三回戦で惜敗した。この大会で安東（鳥取城北高）が優秀選手に選ばれた。他県の壁は厚く容易には破れなかった。

平成10（1998）年、従来、新人戦の優勝校が出場していた全国高校選抜大会について、あらたに県予選会を設けることになった。平成10年第８回大会から全国高校選抜大会鳥取県予選会を実施した。また、中国高校新人剣道大会が開催されることになった。平成10年から第１回中国高校新人剣道大会が始まったのである。

平成10年ごろから高校の指導者が代わった。全国大会で活躍した経験を有し、技量も高く、熱意を持つ指導者が多くの高校に登場した。佐伯友茂、安部旬史、山中洋介、種子憲司、竹中健太郎、菊川省吾、二子石晶、北堀泉、山本真也等の指導者たちである。特に竹中の指導する八頭高の健闘があり、平成19（2007）年中国新人戦の大会に真田泰希が優勝した。女子では、佐伯の指導する米子松蔭高校、佐伯の後は佐伯の指導を受けた北堀泉が指導を継承している。

平成20年以降の大きな流れをみると、男子では八頭高と米子松蔭高が中心となって展開している。この２校の他に米子東高、鳥取西高、鳥取城北高の参入が見られる。女子では米子松蔭高を中心に展開し、鳥取城北高、倉吉北高、鳥取西高などの伝統校が参入している。

中国大会は成果がなかなかみられなかったが、次第に活躍する選手が登場し始めた。平成20（2008）年、団体戦男子で米子松蔭高３位、21年、八頭高が団体戦２位となり、個人戦で男子浅田大輝（米子松蔭高）が３位であった。24（2012）年には、個人戦女子で齋江照美（米子松蔭高）が準優勝した。また、平成25（2013）年、団体戦男子で米子松蔭高が優勝した。これは、昭和34（1959）年の境高以来54年ぶりの優勝であった。平成26年、団体戦女子で米子松蔭高が準優勝した。個人戦男子で佐々木健介（八頭高）が優勝、個人戦女子の前田ひかり、有澤菜月（２人とも米子松蔭高）が３位となった。

中国新人戦をみる。平成22（2010）年、八頭高男子が準々決勝で西大寺高（岡山）を破り、さら

に準決勝で広島翔洋高に勝ち、決勝戦では津山工高に敗れたが準優勝した。

個人戦男子は高橋駿太（米子松蔭高）が準優勝し、優秀選手に選ばれた。平成23年、個人戦男子で笹山慶一（八頭高）３位に入り、個人戦女子は齋江照美（米子松蔭高）が県勢女子で初優勝し、優秀選手に選ばれた。平成24年、個人戦男子で齋江貴大（米子松蔭高）が優勝、女子の初鹿野美幸（米子松蔭高）が３位となった。25年、団体男子で米子松蔭高が３位、個人男子の佐々木健介（八頭高）が２位、鈴木領起（鳥取城北高）が３位となり、個人戦女子の前田ひかり（米子松蔭高）が２位であった。平成26年、団体女子で米子松蔭高が３位となっている。

全国高校総体では、平成21（2009）年に八頭高は予選リーグで小牛田農林高に２－１で勝利するが、帝京五高に引き分けし、勝者数で帝京五高に及ばず決勝トーナメントに進出できなかった。平成24年、団体戦女子の米子松蔭高は予選リーグで松代高（長野）に３－２で勝利し、つづいて琴平高（香川）にも代表者戦で勝利した。決勝トーナメントでは鹿屋女子高と対戦し、代表者戦となり惜敗した。

今後の課題として一つは、剣道をする高校生の激減である。剣道部のある高校が20年前の半数以下となっている。これにどのように対処するか。二つ目は、全国で闘うことができる兆しが見えてきたなかで指導者の引き継ぎをどのようにするかである。

（４）鳥取県剣道道場連盟

昭和38（1963）年、剣道の普及発展を図ることにより、青少年の心身の健全育成に寄与することを目的として全日本剣道道場連盟が設立された。

本県においても、昭和45年に全日本剣道道場連盟鳥取県支部として発足したが、当初は加盟道場も少なく３道場であった。

その後初代会長である太田義人範士八段をはじめとした多くの指導者の努力により加盟道場は着実に増えていった。

昭和51年には、鳥取県剣道道場連盟として再発足し、加盟道場も22道場となった。

①道場連盟の主な事業

・全日本都道府県対抗剣道優勝大会県予選会の主管
・鳥取県少年剣道錬成大会（平成22年には第30回記念大会を開催）
・鳥取県少年学年別個人剣道錬成大会
・各支部少年剣道錬成大会（東、中、西部）
・鳥取県剣道少年作文発表会
・全道連・鳥取県剣道連盟等の主催による講習会等への参加

②全国大会等での主な成績

平成14（2002）年全日本少年剣道錬成大会（団体）２位

平成21（2009）年全日本都道府県対抗少年優勝大会（団体）ベスト８

本県の少年剣道は、加盟道場の指導者・保護者の熱心な指導・バックアップにより、競技力等は着実に向上してきた。

平成30（2018）年の加盟道場は31道場となった。

（５）居合道

昭和47（1972）年11月、山根幸恵を中心として県内居合道の愛好者を募り、鳥取西高校において第１回鳥取県居合道合同稽古会を行った。昭和53（1978）年９月、鳥取県居合道段別優勝大会が始まった。その後、居合道稽古会・段別試合を開催し、全国大会、全国講習会、県外での大会や講習会に積極的に参加した。また、全国的に著名な範士を迎え指導を受け、技量のレベルアップを図り、六・七段の合格者も増加した。全国大会において昭和59（1984）年、第19回山口で行われた全国大会五段の部で田長清が第３位となった。以後、居合道の全国大会出場者が増加し、成果を挙げている。

平成19（2007）年度から、中断していた鳥取県居合道選手権大会が鳥取県剣道選手権大会と並行して行われるようになった。

全国大会の成績は、次のとおりである、

第34回山形大会　　平成11年10月23日

七段の部ベスト８　　田長　清
第39回宮崎大会　　平成16年10月16日
五段の部ベスト８　　福永正博
第40回千葉大会　　平成17年10月15日
五段の部ベスト16　　福永正博
第45回新潟大会　　平成22年10月16日
六段の部ベスト16　　森本進一
第50回福岡大会　　平成27年10月17日
七段の部第３位　　森本進一

（６）鳥取大学体育会剣道部

昭和29(1954)年､部長鳥取大学農学部･長(おさ)智男助教授、師範白井定彦師範、副師範中野知之の指導の下に活動を開始した。良き指導者の下に順調に剣道部は活躍してきた。昭和41年卒業の湯村正仁は平成２（1990）年八段に合格している。平成15（2003）年、木村靖、中武幸男、乗本志考が全日本学生選手権大会に出場した。乗本志考はその後、目覚ましい活躍をする。西日本医科学生大会個人３連覇、卒業直後の平成19（2007）年には鳥取県剣道選手権者となり５連覇を果たしている。湯村正仁が師範復帰後、平成20（2008）年中四国大学学生選手権大会４位、21年３位、23年２位となった。

個人戦である学生選手権大会では毎年１～２名が全国大会に出場し、平成21、22年に播本尚嗣は２年連続で３回戦まで進んでいる。

（７）杖道

全日本剣道連盟に杖道が加入してから50余年になるが、未加入県が数県あるなど、全国的に普及が遅れている。

本県においても、西部地区で平成17（2005）年に松本千春により創始された。境港市民体育館や県立武道館で週１～２回、同志十数名が稽古をしている。また、月１回奈良県杖道部から東充久、溝口真也を講師に招き、稽古会を実施しており、会員数も20名を超え、有段者も出てきた。

また、東部地区においても、平成24（2012）年ごろから、尚徳錬武館で居合道を修行している同好の志を中心にして杖道の修行が行われている。

６　今後の課題等

少子化に伴い、減少しつつある剣道人口をどう歯止めしていくか、指導者の確保・競技力の向上をどう進めていくかということが喫緊の課題である。そのため、あらゆる機会を通じて剣道の啓発普及と指導者の講習会等を積極的に実施している。更には、平成25（2013）年度から強化選手の認定制度を創設し、小学生、中学生、高校生、一般について毎年40名の強化選手を認定し、競技力の向上と本県剣道のレベルアップを図っているところである。

又、本県連盟の組織の健全な発展と責任体制の強化、社会的に信用を得るためにも、近い将来、公益法人化を図る必要がある。全国でも既に24県が、また中国地区においても、島根、鳥取を除く３県が法人化している。併せて、ホームページとソーシャルメディアを活用して､発信機能を高め、情報の充実と正確かつ迅速な情報発信に努める必要がある。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和62年～平成10年		平林　鴻三
11年～	13年	山根　幸恵
14年～	18年	飯塚　幹夫
19年～	28年	宮石　憲士
29年～		岸田　　芊

◇理事長

昭和54年～平成10年		山根　幸恵
11年～	12年	湯村　正仁
13年～	28年	岸田　　芊
29年～		山根　國弘

全国大会等での主な成績

年　度	大　会　名	選　手　名	種　　目	成績
平成５年	第41回全日本選手権大会	山中　洋介	個　人	３位
〃	第35回全国教職員剣道大会	岸田　勇人	個　人 （小学校の部）	２位
平成６年	第36回全国教職員剣道大会	山中　洋介	個　人 （高・大・教委の部）	１位
平成７年	第37回全国教職員剣道大会	竹中健太郎	個　人 （高・大・教委の部）	１位
平成11年	第20回中倉旗（内閣総理大臣杯争奪戦）	菊川　省吾	個　人	３位
平成13年	第43回全国教職員剣道大会	竹中、菊川、岸田勇、 山中、岸田芊	団　体	３位
平成14年	第44回全国教職員剣道大会	竹中、菊川、岸田勇、 山中、岸田芊	団　体	１位
〃	第37回全日本少年剣道錬成大会	真田浩、長尾、豊島、 真田泰、足立、梶谷	団　体	２位
平成17年	第47回全国教職員剣道大会	二子石　晶	個　人 （義務教育の部）	３位
〃	〃	竹中健太郎	個　人 （高・大・教委の部）	１位
〃	〃	二子石、菊川、竹中、 山中、佐伯	団　体	３位
〃	第40回記念全日本少年剣道錬成大会	真田　裕行	個　人	２位
平成18年	第24回全日本小・中学生女子剣道錬成大会	阿部　恵美	個　人	２位
平成20年	第50回全国教職員剣道大会	菊川　省吾	個　人 （高・大・教委の部）	１位
〃	第26回全日本小・中学生女子剣道錬成大会	齋江　照美	個　人	３位
〃	第29回神武館旗争奪少年剣道選手権大会	渡辺　龍真	個　人 （小２年の部）	１位
〃	第29回神武館旗争奪少年剣道選手権大会	渡辺　龍真	個　人 （小２年の部）	３位
平成21年	第22回全国健康福祉祭剣道大会	山本、米澤、松本	団　体 （女子の部）	３位
〃	全国お通杯剣道大会	池口　佳子 （40台の部）	個　人	２位
平成23年	第52回全国郵政剣道大会	門原　久美	個　人	１位
平成24年	第53回全国郵政剣道大会	門原　久美	個　人	１位
平成25年	第54回全国郵政剣道大会	門原　久美	個　人	２位
平成26年	第８回全日本学生剣道オープン大会	佐藤　　和 （二段以下の部）	個　人	２位
〃	〃	迫　琴加里 （二段以下の部）	個　人	３位
〃	〃	岡本　俊平 （三段以上の部）	個　人	３位
平成27年	第13回全日本選抜剣道八段優勝大会	山中　洋介	個　人	３位

平成29年	全国お通杯剣道大会	森田真智子 (40台の部)	個　人	１位
〃	第65回全日本選手権大会	真田　裕行	個　人	入賞

県内開催の全国大会

年　度	大　会　名	会　　場	出場選手	備考
平成12年	第46回全日本東西対抗剣道大会	鳥取県立武道館	山中　洋介 米澤　幸美	優秀選手賞

鳥取県ラグビーフットボール協会

１　高校ラグビー強化と小学生及びジュニアの普及育成

昭和60（1985）年のわかとり国体以降は、高校以下中学校やスクールの育成を主たるターゲットに協会が動いた時代でもあった。

それまでの着実な取り組みで、県外に出ていたラグビー経験者が徐々に県内に帰ってきて社会人リーグを盛り上げ､県外遠征のみならず海外(NZ)遠征を実施するなど顕著な動きが起こった。一時期低迷した社会人の競技人口も回復の兆しが見えてきた。

従って､今後の県内のラグビーを俯瞰したとき、若い世代の強化育成が必要不可欠であり、高校生以下の育成に力を注ぐことが最重要課題と位置付けられた。

高校では島根県代表に勝って初めて全国大会（花園）への出場権が得られたそれまでの形態から、完全な１県１代表になり、全国大会での１勝が常に合言葉になった。

県内の高校では米子工業高校、倉吉工業高校の２強時代から倉吉東高校や米子東高校、米子北高校を含めた群雄割拠の時代が10年ほど続き、平成８（1996）年から米子東高校が長く県内NO １の座を続けることとなった。

高校生の試合

タグ・ラグビーの様子

その中で平成11（1999）年、県代表の米子東高校が石川県代表の羽咋工業高校を12対10の僅差で破り、悲願の県勢花園１勝をあげたことは大変喜ばしいことであった。

近年になってからは、倉吉東高校が５連覇を果たしたことをきっかけに倉吉総合産業高校、倉吉北高校など中部勢の優勢が続いている。（2016年度は米子工業高校が栄冠を手にした。）

小学生を対象としたラグビースクールの普及においては、当時から野球やバスケットボール、近年ではサッカー人気に押され、その競技人口は伸びなかった。

県内スクール最古参の米子ラグビースクールも参加人数が伸び悩み、倉吉も波はあるもののトータルとして競技人口は増えなかった。これまで比較的動きの少なかった東部で念願の県内３番目の湖山ラグビースクールが発足したが、競技人口の増加は容易ではなく、県協会としての普及育成の方針が結果を伴うまでには至らなかった。

その中で、全国的な流れに乗り、近年タグ・ラグビーの普及が急速に進んでいる。タックルなど接触プレーが無く、安全に行えるスポーツとして県内小学校の体育の授業に取り入れる学校が増加している。ラグビー競技普及の一助となっていることは、大変喜ばしいことである。

中学生対象のジュニアの普及育成においても困難を極めた。県内は言うまでもなく中国地方の中学校にラグビー部がほとんどない状況であり、一時的に東部地区の中学生が仲間を呼び、何とか他県と試合を行ったことはあったが、あくまでもそれは単発的であり継続して競技者を確保するという状況には至らなかった。

やっと、近年、県体育協会の「トップアスリート」事業を利用して毎年数名のラグビー競技者の確保は行ってはいるが、単独でチームを組める状況にはない。

２　トップリーグ開催及び2015年ワールドカップのジャパン躍進を追い風にして

ラグビー競技に追い風が吹いている。平成15（2003）年に国内最高峰のラグビーリーグであるジャパントップリーグが始まり、平成27（2015）年のワールドカップではラグビー強豪国である南アフリカを撃破するなど、空前のラグビーブームと言っていいほどの状況である中で、平成31（2019）年はワールドカップの日本開催が決定している。

県協会においても平成26（2014）年９月には鳥取市のコカ・コーラウェストスポーツパーク鳥取を会場として、東芝対近鉄の両古豪の試合を誘致し、平成28（2016）年10月には、ともに日本代表を輩出しているチームのコカ・コーラ対ＮＴＴコミュニケーションの試合を同じ会場で開催した。

県内のみならず多くのラグビーファンの来場をもたらしたこの出来事は、再び県内のラグビーを盛り上げ、競技人口の増加に繋げる契機になると期待している。

実際にこれらのイベントはそれまで他県と比し

We are one. Tottori rugby

て立ち遅れていた感のあった女子ラグビーにおいても、本格的に始動するきっかけとなった。

３　国体出場を目指して

鳥取県選抜チームは、鳥取国体以来、国体出場を果たせていない状況である。

成年男子がこれまでの15人制から2013年に７人制に移行し、女子も2016年より７人制として新たに加わった。本県においても男女とも選抜チームを形成し、本国体出場に向け日々練習に励んでいる。

今後も普及育成と強化を同時に行い、他県とのレベルを縮めていくことが急務である。

本国体出場を県内ラグビーの発展及び今後の県協会興隆の試金石にしたいところである。

【歴代会長・理事長】

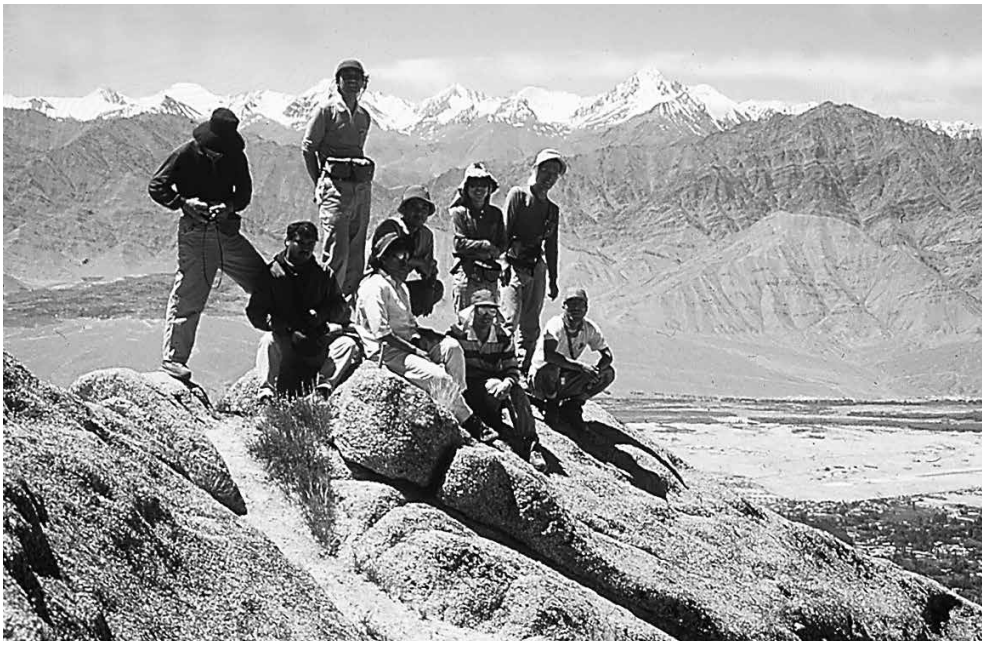
◇会長

昭和43年～平成５年		松本　正威
６年～	10年	戸口田和也
11年～	22年	河本　義永
23年～		長見　奠文

◇理事長

昭和46年～平成22年		長見　奠文
23年～	28年	松原　貞夫
29年～		土橋　達也

鳥取県山岳・スポーツクライミング協会



協会創立30周年記念海外登山
中央右奥の最高峰がストックカンリ（インド・6,150m）平成８年７月～８月

１　スポーツクライミングの普及と本県の活動

一般的な登山から沢登りや岩登り、ひいては厳冬期の氷壁登攀に至るまで、およそ山岳スポーツは挑む相手が人ではなく、岩壁であったり、山そのものであることから、人と相競い合って順位をつけるという単純明快な図式を理解することに、われわれは長い間なじめずにいた。国民体育大会での山岳部門の競技化に伴い、それをいち早く競技スポーツとして消化していった他県は、きちんと結果を出していたが、いつまでも消化しきれずにいた本県は、国体中国ブロック予選会（各県出場枠のある成年男子を除く）では万年４位か５位の定位置に甘んじ、本国体への出場は果たせていなかった。

そのような中、欧米から新たなフリークライミング（後にスポーツクライミングに名称統一）の潮流が日本にも入ってきた。それは人工の壁で純粋にクライミングの技術を競い合う競技スポーツとして、やがて本県でも萌芽することとなる。その契機となったのが平成８（1996）年のクライミング委員会の発足であり、鳥取西工業高校での手作り壁による初のクライミングコンペや、翌年の山陰夢みなと博で２週間にわたって行ったクライミングフェスティバル・コンペで気運を盛り上げていったのである。

その後、行政への地道な陳情活動が実り、平成13(2001)年には名和農業者トレーニングセンター体育館内に本協会設置の常設人工壁が完成し、クライミング競技への第一歩を踏み出す礎を築いた。

そして、翌14年から高校生のクライミングが国体で正式種目化される中、由良育英高校（現鳥取中央育英高校）の山岳部顧問に就任した安井博志（現ＪＯＣヘッドコーチ）の指導の下で、体育館に簡易な施設の整備を受けてその力を養っていったのである。

結果はすぐに現れた。その後の国体山岳競技では、少年男子や少年女子が常に入賞を含む上位成績を残し、やがて全国屈指の山岳競技強豪県とし

て名を馳せていくこととなった。

平成20（2008）年以降は国体山岳競技がクライミングのみとなり、他県もこれに特化して強化を図るようになったが、とりわけ中国地区は山口県や広島県が熱心であり、国体の中国ブロック予選会突破は全国屈指の困難さであった。それでも毎年、少年男子・女子は予選を突破して国体出場を果たしていくことができた。

そうして育っていった者の中から、鳥取中央育英高校山岳部の出身者である瀬戸啓太や高田知尭（ともあき）がスポーツクライミングのワールドカップに出場を果たすようになり、活躍の場は世界へと広がっていくことになっていった。近年、高田知尭は日本代表選手の一人として世界を転戦するようになり、高田の妹、高田こころもユースの日本代表選手として活躍している。

平成26（2014）年からは、倉吉体育文化会館で当協会主管によるユース世代のスポーツクライミング全国大会を毎年開催している。そして、倉吉体育文化会館には平成29(2017)年度までにスポーツクライミング３種目全ての競技ができる壁が整備されたところであり、本協会としても、ここをスポーツクライミングの聖地とすべく、行政と一体となった活動を行っている。

平成27(2015)年度にスポーツクライミングリード壁の設置について、スポーツクライミング競技の日本選手権大会誘致を主とした理由により、鳥取県の競技力向上及び選手の遠征費負担軽減などを踏まえ、中部地区に設置することが決まり、平成28年３月に倉吉体育文化会館敷地内に設置された。

スポーツクライミングが東京オリンピックの追加競技に決定されたことを受け、平成30年７月にはスポーツクライミング日本代表合宿が行われ、野口啓代選手、楢崎智亜選手をはじめ11名の選手が参加し、地元高田知尭選手も参加した。同年11月にはＩＦＳＣ－ＡＣＣクライミングアジア選手権大会が開催され、14か国117名の参加があった。

一方、登山の部門では継続的活動として専門委員会（指導・普及・遭難対策・自然保護・競技・海外）を中心に多岐にわたる活動を続けてきた。中でも、大山の遭難防止活動や救助活動では長年にわたり関係機関との協力が続いており、大山の頂上緑化保護活動も30年以上継続してきた。これらは全国に誇れる活動となっている。（各委員会の活動については後述する。）

海外登山としては、平成８（1996）年に本協会創立30周年事業として８名の精鋭がインドヒマラヤ・ストックカンリ峰（6,153m）に全員登頂し、華々しい成果を挙げた。また、創立40周年記念登山では12名が韓国･智異山の天王峰を目指したが、折からの集中豪雨で入山禁止となり、やむなく周辺の九曲山（961m）に変更し、全員登頂した。

現在、本協会への加盟団体は高等学校体育連盟登山専門部（７校）を含む14団体となっているが、近年はスポーツクライミングの急速な普及に伴い、その競技団体としての役割が一段と高まっている。

このようなことから、今後のスポーツクライミングの普及や選手・指導者の育成、競技環境の整備等、競技団体としての立場を明確にし、登山とスポーツクライミングを車の両輪として活動していくという意味で、協会の組織体制や名称を変更することとなり､平成30（2018）年４月１日付で、「鳥取県山岳協会」から「鳥取県山岳・スポーツクライミング協会」へ名称変更したところである。

２　自然保護委員会の活動

大山の自然保護活動は、昭和40（1965）年頃から始まった。

保護活動は、「国立公園大会」が奥大山鏡ヶ成で開催された時、周遊観光自動車道路建設をはじめ、もろもろの自然開発が大山周辺で計画されていたことがきっかけで始まった。

国立公園内の自然破壊を無視しての国立公園大会はあり得ないと、鳥取県山岳協会は60名の参加者を送り、チラシを配布し、破壊現状を訴えたのである。そして代表者会議を要請し、「国立公園

における自然保護」をテーマに協議し、我が国初の「自然保護憲章制定」の決議が採択されることとなった。（現在、奥大山鏡ヶ成に自然保護憲章の碑が設置されている）

その後、大山山頂のゴミ問題が加わり、活動はやがて大山山麓とその周辺まで広がっていった。

この活動には、当初県高体連の協力をいただき、夏休みに各高校の山岳部員が交代で大山頂上小屋に合宿をしながら、山頂に散乱しているごみの回収をするという大変な作業であった。

この取り組みから、大山頂上のゴミ箱を撤去し、全国では前例のない「ゴミ持ち帰り運動」が提唱されることとなった。このゴミ持ち帰り運動は、やがて大山一斉清掃へと受け継がれ、今日まで続いている。

また、昭和40年代後半からの登山ブームで多くの登山者が大山を訪れ、登山者の靴によって頂上の表土が剥がされていった。剥がされた表土は厳しい自然の強風や雨にさらされ、流出し、完全に裸地となってしまった。草木の無くなった頂上は崩落が激しく、更に雨や雪解けの水で地面が侵食され、深い侵食溝も作りだされていった。

こうした状況を何とか食い止めようと国、県、町、民間団体等と連携し「大山一木一石運動」の取り組みを始めたのである。

この運動は、侵食溝の埋め戻しと緑を復元するという大事業になり、30年をかけようやく緑が定着する状態にまでなった。そして、40年たった今もこの運動は継続して取り組まれている。

その他、植物の調査、登山道の点検整備や近年では、奥大山鏡ヶ成湿原の保全作業、登山者へマナーアップの呼びかけ、トイレの問題など多岐にわたって、各種団体や組織と連携しながら自然保護活動に取り組んでいるところである。

３　遭難対策委員会の活動

委員会の活動について述べる前に、「大山遭難防止協会」について説明する。これは大山山系での山岳遭難の防止および捜索救助を目的としたもので、近隣５市町、地元自治会、大山旅館組合、県、警察、消防その他多くの関係機関により組織されたもので、当協会も顧問として参加している。

救助技術研修会の様子（平成28年７月）

遭難対策委員会では、大山遭難防止協会の事務局である警察と連携して、12月末～３月末にかけて「大山冬山パトロール」、５月連休には「大山春山パトロール」にパトロール員を派遣している。これは、期間中の全ての土曜日および休日に、当協会の会員（以下「協会員」）と警察官が一緒に大山山頂まで登りながら、軽装者や体調不良者への声掛け、悪天候時の注意喚起、及び避難小屋入り口の除雪などを行っている。また、これとは別に、山岳遭難発生時には警察からの要請を受けて、遭難者の捜索・救助活動も行っている。

そのほかの活動として、安全登山講習会、救助技術研修会の実施や、県警や県消防学校での山岳救助訓練への講師派遣など、山岳遭難防止や救助技術向上のための活動を行っている。

４　登山技術委員会の活動

平成30（2018）年４月から、指導委員会と普及委員会を統合して登山技術委員会がスタートした。

かねてから、指導委員会は日本スポーツ協会（以下ＪＳＰＯと呼ぶ）などの指導員資格保有者で組織され、無雪期、積雪期の指導者の研鑽と技術の普及に努めており、毎年２月には長らく西日本の各岳連をとりまとめ、大山で西日本積雪期合同研

修会を開催（主催は各岳連持ち回り）していたが、平成21（2009）年から、この研修会は日本山岳・スポーツクライミング協会（以下､日山協という）の公式の研修会になり、中央から講師陣が派遣され、西日本ばかりでなく全国から研修生が参加するまでに定着している。

そのほか県内では、無雪期の沢登りや、岩登りなどの登攀技術の講習(研修)を開催しているが、スポーツクライミング（以下ＳＣという）の隆盛に伴い、クライミングボードの施設を持たず、アルパインクライミングを中心に活動している高校山岳部の部員にＳＣの体験講習会を開催するなど、多くの若者が新しい競技に触れ、基本的な技術と楽しさを体感する取り組みを続けている。

近年、登山ウエアがファッショナブルになり、「山ガール」の出現と中高年の登山ブームが遭難にも反映しており、全国で山岳遭難は増加の一途を辿っているが、ここ大山においても例外ではない。

登山愛好者の人口は、全国で600万人とも650万人とも言われ毎年増加の傾向であるが、そのほとんどが、どの団体にも所属しない無組織の個人登山者であり､増加する遭難の原因は､バリエーションルートでのチャレンジ的な登山ではなく、一般ルートで基本的な登山技術、知識の未熟さから起こるものが多いと言われている。

現在、日山協では、遭難対策委員会と指導委員会が中心となって、増加する一般登山者の遭難を未然に防止するための対策として、国際山岳連盟のスタンダートに準拠し、ＪＳＰＯの指導者制度のカテゴリーにとらわれない､「夏山リーダー」の育成制度の取り組みの準備を進めている。

登山技術委員会としても今後、指導員の研鑽や育成、ＳＣの普及活動に加えて、積極的に安全登山の普及活動を進めなければいけない必要性に迫られるようになってきた。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和61年～平成11年		細木　明男
12年～	15年	牧田　正大
16年～	19年	永見　俊介
20年～	23年	河合　　登
24年～		大西　一俊

◇理事長

平成元年～	19年度	亀尾　　崇
20年～		小坂　秀己

鳥取県カヌー協会

わかやま国体　少年男子スプリント・カナディアンペア（500m）（沢田拓矢・岡村真鳥）　2015/10

１　県東部でもカヌースポーツ普及

鳥取県内でカヌーコースのある場所は、中部の東郷湖カヌースプリントコースと西部の日野町の日野川カヌースラローム・カヌーワイルドウォーターコースであったが、平成３（1991）年頃から東部の用瀬町の千代川でもカヌースポーツを楽しむ仲間が集まり始めた。

「流しびなカップカヌー選手権大会」と銘打って「流しびなの館」前の千代川で、西村勝や長谷川浩司が中心となりカヌースラローム大会を開催している。平成７（1995）年にはカヌーイストの野田知佑氏を呼び、用瀬町から河原町まで一緒に川下りを楽しんだ。その後、長谷川浩司が中心となり鳥取ジオパークのカヌー体験や日野町ラフト川下りを企画し実現している。

２　東郷湖カヌーセンターの整備

平成12（2000）年、東郷池畔に鳥取県ほか関係各位のご尽力で待望のカヌー艇庫が完成した。それまで台風が来たり、東郷池の水位が上がるたびにプレハブ建ての艇庫は水浸しになり大変な思いをしていたが、新築の艇庫があやめ池スポーツセンター隣りに頑丈な造りで完成した。艇庫には100杯以上の艇が収容でき、研修室、更衣室、便所、倉庫も整備された。

東郷湖カヌーセンター

こけら落としの大会が、平成13（2001）年10月18日から「日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会兼日本ジュニア・ジュニアユース世界に挑む記録会」と銘打って盛大に開催された。この大会で男子カナディアンシングルの藤井功輔（倉吉工高）と女子カヤックシングルの反甫貴美

（倉吉産高）が４位、女子カヤックシングルの長田いづみが８位に入った。

この年の８月、足立理事長の尽力により第一回カヌードラゴンレースが開催され、多くのカヌーファングループが参加している。

３　若き指導者の急逝

昭和60（1985）年わかとり国体カヌー競技優勝の立役者の一人である本坊幸子（倉吉産業高校教員）が平成11（1999）年に45歳の若さで逝去した。

本坊は、わかとり国体の前年の昭和59年に倉吉産業高校の教員として赴任し、優勝するためにトレーニング計画を一から練り直し、合宿に次ぐ合宿で選手を鍛え上げ、全国カヌー関係者の中で有名な存在であった。本坊の教え子たちの中には今でも国体で優勝して鳥取県に貢献している福本かな子選手らもいる。

平成15（2003）年には、鳥取県カヌー協会が設立した時からスラローム、ワイルドウォーター競技の中心的存在で、ユーゴスラビアの世界選手権大会へも参戦の経験ある広池善博が42歳の若さで事故で逝去した。

広池善博はカヌー競技が国体で正式競技となった昭和57年から11年間連続入賞を続けた逸材である。指導者となってからは鳥取県カヌー協会の強化部長としてスラロームとワイルドウォーターの選手強化に奔走した。また、国体では会場のテレビで各レースをわかりやすく解説している姿があり、競技を盛り上げた。

また、鳥取県カヌー協会の電光石火の立ち上げから組織づくり、現場での選手集めから強化・普及まで、カヌーに関する何から何まで「鳥取県カヌー協会の父」とも言える足立高光前理事長が平成17（2005）年に69歳で逝去された。

４　選手たちの活躍（スプリント）

指導者の死という悲しい思いを乗り越えて選手たちは更に上を目指した。

長田いづみは福本かな子と組んで平成４（1992）年山形国体でレーシング少年女子K-２の300m４位、同500mで３位入賞した。これを皮切りに平成９（1997）年大阪国体においてレーシング女子K-１（400m）で４位入賞。翌年、日本カヌー連盟の推薦によりレーシングカヌー世界選手権大会（ハンガリー）に派遣された。また、同年12月タイのバンコクで開催されたアジア大会へも選出された。平成10（1998）年神奈川国体ではレーシング女子K-１で２種目６位入賞すると、平成17（2005）年岡山国体まで連続９年間、レーシングK-１で入賞を続けた。

松本めぐみ（倉吉産高３年）は、平成８（1996）年国際カヌー競技大会（ドイツ・ボフォルム）で日本代表として出場したジュニア女子K-１で５位、女子K －４で８位に入り、初の海外大会でのダブル入賞に輝いた。その年の広島国体で松本めぐみはレーシング少年女子K-１（500m）で３位入賞を果たした。

藤井功輔は平成13（2001）年宮城国体でレーシング少年男子C-１の200mと500mで４位ダブル入賞した。誰にも負けないハードな練習量をこなしての入賞であった。平成15（2003）年の静岡国体でもレーシング成年男子C-１の500mで３位入賞、同200mで８位入賞した。以降平成20（2008）年大分国体まで連続８年間、上位入賞を続けた。特に平成18（2006）年兵庫国体では就職も決まり、レーシング成年男子C-１（500m）で準優勝を勝ち取った。

５　選手たちの活躍（スラローム、ワイルドウォーター）

広池善博は、カヌー競技が国体の正式競技種目になった昭和57（1982）年島根国体の５位入賞以来、平成６（1994）年まで毎年国体入賞を続けた。平成３（1991）年５月には世界カヌースラローム選手権大会に日本代表としてユーゴスラビアのターセンを訪れている。また、平成15年には日本カヌー連盟の依頼でカヌースラローム競技普及のため単身インドネシアへ行き尽力した。

真島祐二は広池の後を継いでスラローム競技で活躍した。持ち前のパワフルな漕ぎで平成９(1997)年大阪国体のスラローム男子K-１(15ゲート）で６位入賞、同じく25ゲートで７位入賞。平成11（1999）年熊本国体のスラローム男子K-１(15ゲート）で６位入賞を果たしている。また、平成10（1998）年日本カヌースラローム・ワイルドウォーター選手権大会の男子K-１（25ゲート）で優勝し日本一に輝いた。

小林直美はワイルドウォーター成年女子K-１で平成５（1993）年東四国国体ワイルドウォーター女子K-１（500m）で５位入賞し、以降平成８（1996）年広島国体まで入賞を続けた。また、平成７（1995）年には日本カヌー連盟の代表として世界ワイルドウォーター選手権大会(イギリス)へ参戦した。

福本かな子は高校生（倉吉東高）の時、本坊幸子（倉吉産高教員）の指導を受け、長田いづみとペアやフォアを組み、平成４（1992）年山形国体でのレーシング少年女子K-２で３位と４位のダブル入賞を果たした。翌年の東四国国体でも長田いづみとペアを組み２種目ダブル３位入賞した。

その後、福本はワイルドウォーターに転向し広池善博の指導を仰いだ。そして平成11（1999）年熊本国体の成年女子ワイルドウォーター（1500m）で７位入賞して以来、平成20（2008）年までの10年間、連続国体入賞を果たしている。さらに平成27（2015）年から平成30（2018）年までの４年間はすべて500m優勝、1500m準優勝を果たした。現在、養護学校の教師として忙しい毎日の中にも寸暇を惜しんでカヌートレーニングに精進し、レース時の誰にも負けない集中力でこの成績を残している現役選手である。

都田祐道は、現在鳥取県カヌー協会の強化部長として東奔西走の日々を送っているが、学生時代はスプリントの選手として、30年ほど前からはワイルドウォーターの選手兼強化部長として「二足の草鞋」を履いて活躍している。平成９（1997）年大阪国体でワイルドウォーター成年男子K-１（500m）７位入賞、平成19（2007）年秋田国体、平成20年大分国体で、いずれも1500m５位入賞を果たしている。

遠藤絵里子は、高校時代（米子東高）ボート部に所属して大学一年生で初めてカヌーに乗った大器晩成の選手である。平成16（2004）年埼玉国体で女子スラロームK-１（25ゲート）でいきなり５位入賞、以降平成29（2017）年までの14年間連続で国体入賞を果たしており、特に近年は上位入賞が多く、平成29年愛媛国体ではスラローム女子K-１（15ゲート）で初優勝を飾った。遠藤は前年、カヌー競技会で知り合った選手と結婚式を挙げており、この初優勝は二重の喜びであった。なお、平成25（2013）年、日本代表としてカヌースラローム世界選手権（チェコ・プラハ）ほかワールドカップ２戦に参戦した。

都田輝夏は平成22（2010）年日本の代表としてジュニア世界カヌースラローム選手権大会（フランス・フォア）に参戦し、以降平成27（2015）年

愛媛国体での福本かな子（高知県本山町）

愛媛国体で優勝した遠藤絵里子（高知県本山町）

愛媛国体で準優勝を飾った福馬つばさ（高知県本山町）

和歌山国体で準優勝を飾った
岡村真鳥（前）と澤田拓矢（後）

まで米国、豪州、ブラジル等、毎年国際大会へ参戦している。

福馬つばさは、小学６年生であった平成23（2011）年のＢ＆Ｇ杯全国少年少女カヌー大会の「フラットスラロームの部」と「５・６年生Ｂ＆Ｇ仕様普及艇の部」の両方で優勝した。これを契機にカヌースラロームにのめり込み、地元の川だけでは飽き足らなくなり、カヌー大会を求めて全国へ。そして日本代表として平成28(2016)年(ポーランド・クラコー）と29年（スロバキア・プラスチラバ）の２年連続、世界カヌースラロームジュニア選手権大会に参戦した。福馬は、平成29年愛媛国体からスラローム女子Ｃ-１が正式競技種目になることを見越して２年前からトレーニングを開始した。その成果が見事に発揮され、スラローム女子Ｃ-１(25ゲート)、スラローム女子Ｃ-１(15ゲート）の両方で準優勝を飾った。

６　平成27年和歌山国体での大活躍

スプリントは平成20(2008)年から平成26(2014)年まで、スラローム、ワイルドウォーターは平成21年から平成24（2012）年まで低迷して高得点を取ることができなかった。しかし、平成27（2015）年はスプリントが大活躍した。

この年、高校総体から好成績を挙げ、国体ではスプリント少年男子Ｋ-４（500m）で倉吉総産高が６位入賞、岡村真鳥・澤田拓矢（ともに倉吉総産高）ペアがスプリント少年男子Ｃ-２（200m）で準優勝。同じく500mで７位入賞した。

この成果は、生徒の努力はもとより、指導者の土井康弘監督はじめ金田裕之コーチ、澤まことコーチたちの長期にわたる熱心な指導があってのことである。もちろんスラローム、ワイルドウォーターも活躍し、スラローム女子Ｋ-１（25ゲート）で遠藤絵里子が４位入賞。ワイルドウォーター女子Ｋ-１では福本かな子が500m優勝、同1500mで準優勝を勝ち取った。

この年は藤井一博会長の就任の年であり、この成績は新会長就任に花を添えた。

国体の好成績に、日ごろご支援いただいている県体育協会はじめ多くの関係者出席の下で盛大な祝賀会を開催した。

７　鳥取県カヌー協会の充実と発展

競技力の観点から国体のカヌー競技獲得得点の推移を見る限り、スプリントは平成21（2009）年以降停滞している。その原因は、中部に３校あったカヌー部のある高校が学校統合などで減り、現在倉吉総合産業高校１校となり、鳥取短期大学カヌー部も指導者がいないとのことで廃部となった。スプリントの競技力向上を図るには指導者の確保とカヌー部のある学校の増加が必須である。

スラローム、ワイルドウォーターの国体カヌー競技獲得得点の推移は平成25（2013）年以降安定

して20点以上を継続して獲得している。福本かな子選手と遠藤絵里子選手の長期上位入賞継続のおかげである。

課題は、福本選手、遠藤選手に続く若い選手が育っていないことであり、環境も整っていない。

カヌー競技力向上のためには小学生からカヌーを経験させ、その楽しい思いを継続させることが重要である。そのためには、学校帰りに自転車で気楽にカヌーができる所へ行けること、すなわちカヌーコースがあって更衣室やトイレ付きの艇庫のあることが望まれる。

このように指導者の確保と学校カヌー部の増加およびカヌー艇庫の充実がカヌー協会の発展に欠かせず、大きな課題である。

８　本県で開催した全国大会（スプリント）

平成13年10月18日から20日まで東郷町の東郷池のカヌー競技場で、日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権兼日本ジュニア・ジュニアユース世界に挑む記録会を開催した。地元からは倉吉産業高校の生徒が出場している。

（本文種目注釈）

K-１　＝　カヤックシングル
K-４　＝　カヤックフォア
C-１　＝　カナディアンシングル
C-２　＝　カナディアンペア

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年～平成26年	藤井　省三
27年～	藤井　一博

◇理事長

昭和56年～平成13年	足立　高光
14年～	林原　　潤

全国大会（スプリント）

（姓のみは他県のペア選手）

年度	大会名	チーム・選手名	種別	種目	成績	備考
平成５年	日本カヌーレーシング長距離選手権大会	藤本美穂・由谷（東女体大）	女子	カヤックペア・1000m	１位	埼玉県・戸田
	カヌーレーシング海外派遣選考会	藤本美穂・由谷（東女体大）	女子	カヤックペア・500m	２位	香川県・府中湖
	日本カヌーレーシング選手権大会	藤本美穂・由谷（東女体大）	女子	カヤックペア・500m	２位	
		藤本美穂・田村さとみ・由谷・藤本（東女体大）	女子	カヤックフォア・500m	２位	
		藤本美穂	女子	カヤックシングル・300m	３位	山形県・月山湖
		藤本美穂・由谷（東女体大）	女子	カヤックペア・300m	１位	
		藤本美穂・田村さとみ・由谷・藤本（東女体大）	女子	カヤックフォア・300m	１位	
平成６年	日本レーシング選手権兼アジア大会代表選考会兼海外派遣選手選考会	藤本美穂・由谷（東女体大）	女子	カヤックペア・500m	３位	
		澤まこと・田村さとみ・高橋・青木（東女体大）	女子	カヤックフォア・500m	２位	香川県・府中湖
		澤まこと・安孫子（東女体大）	女子	カヤックペア・200m	３位	
		澤まこと・田村さとみ・藤谷・由谷（東女体大）	女子	カヤックフォア・200m	１位	
平成７年	日本カヌーレーシング選手権大会	澤まこと・高橋（東女体大）	女子	カヤックペア・500m	１位	
		澤まこと・高橋・田中・飯野（東女体大）	女子	カヤックフォア・500m	１位	
		福本かな子・長田いづみ・辛島・後藤（東女体大）	女子	カヤックフォア・500m	３位	香川県・府中湖
		澤まこと・高橋（東女体大）	女子	カヤックペア・200m	２位	

平成７年	日本カヌーレーシング選手権大会	澤まこと・福本かな子・高橋・後藤（東女体大）	女子	カヤックフォア・200m	２位	香川県・府中湖
		長田いづみ・田中・辛島・飯野（東女体大）	女子	カヤックフォア・200m	３位	
平成８年	日本カヌーレーシングジュニア・シニア選手権大会	岩山浩二・大内・松林・大槻（関学大）	男子	カナディアンフォア・1000m	１位	
		福本かな子・石川（東女体大）	女子	カヤックペア・200m	３位	
		松本めぐみ	女子	ジュニアカヤックシングル・500m	２位	
平成９年	日本フラットウォーターレーシング選手権大会	長田いづみ・辛島（東女体大）	女子	カヤックペア・200m	１位	広島県・八千代
		米原弥生・松本めぐみ・中島・香川（鳥女短大）	女子	カヤックフォア・500m	３位	
		松本めぐみ・右田（鳥女短大）	女子	ジュニアカヤックペア・500m	３位	
平成10年	全国中学生カヌー大会	松本雄大（北条中）	男子	カヤックシングル・500m	３位	山形県・月山湖
	日本カヌーフラットウォーターレーシングジュニア選手権大会	松本雄大（北条中）	男子	カヤックシングル・200m	１位	水俣湾
	日本レーシング選手権大会	松本めぐみ・右田（鳥女短大）	女子	カヤックペア・1000m	１位	琵琶湖
		長田いづみ	女子	カヤックシングル・1000m	３位	
		松本めぐみ・右田（鳥女短大）	女子	カヤックペア・200m	３位	
平成11年	日本レーシング選手権大会	長田いづみ・飯野	女子	カヤックペア・1000m	１位	石川県・木場潟
		長田いづみ・飯野	女子	カヤックペア・500m	１位	
		鳥女短大A（澤田・安村・木田・蓑田）	女子	カヤックフォア・500m	２位	
		鳥女短大B（山際・新谷・岡野・大背戸）	女子	カヤックフォア・500m	３位	
平成12年	カヌーフラットウォーターレーシング海外派遣選手選考会	安村　香･蓑田恵美（鳥女短大）	女子	カヤックペア・500m	１位	香川県・府中湖
	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	長田・飯野・綱・鈴木（鳥取県カヌー協会）	女子	カヤックフォア・500m	１位	琵琶湖
平成13年	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	長田いづみ	女子	カヤックシングル・1000m	３位	鳥取県・東郷湖
		長田・北本・綱・鈴木（鳥取県カヌー協会）	女子	カヤックフォア・500m	１位	
平成14年	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	長田いづみ	女子	カヤックシングル・1000m	３位	山梨県・精進湖
		長田いづみ・飯野	女子	カヤックペア・1000m	１位	
平成15年	カヌーフラットウォーターレーシング海外派遣選手選考会	長田いづみ・飯野	女子	カヤックペア・500m	３位	香川県・府中湖
平成16年	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	長田いづみ	女子	カヤックシングル・1000m	３位	石川県・木場潟
平成17年	カヌーフラットウォーターレーシングシニア・ジュニア海外派遣選手選考会	藤井功輔	男子	カナディアンシングル・1000m	２位	香川県・府中湖
		藤井功輔・阿部（大正大学）	男子	カナディアンペア・200m	２位	
		藤井功輔・阿部（大正大学）	男子	カナディアンペア・500m	２位	
		藤井功輔・阿部（大正大学）	男子	カナディアンペア・1000m	１位	
	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	藤井功輔・阿部（大正大学）	男子	カナディアンペア・1000m	３位	
		藤井功輔・阿部・小島・岩崎（大正大学）	男子	カナディアンフォア・1000m	１位	
		藤井功輔・阿部・小島・岩崎（大正大学）	男子	カナディアンフォア・500m	２位	
平成19年	日本カヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	藤井功輔	男子	カナディアンシングル・1000m	２位	
		藤井功輔・岩崎	男子	カナディアンペア・500m	１位	
		藤井功輔・岩崎	男子	カナディアンペア・1000m	１位	
平成20年	2008Ｂ＆Ｇ杯全国少年少女カヌー大会	松田奈々（倉吉市関金B&G海洋センター）	女子	カヤックシングル（普及艇・４年生以下）	２位	山梨県・精進湖
		中江香那（倉吉市関金B&G海洋センター）	女子	カヤックシングル（普及艇・４年生以下）	３位	

平成20年	第29回オリンピック競技大会アジア大陸予選会日本代表選手最終選考会	藤井功輔（鳥取県カヌー協会）	男子	カナディアンシングル・500m	１位	香川県・府中湖
		藤井功輔（鳥取県カヌー協会）	男子	カナディアンシングル・1000m	１位	
平成21年	2009Ｂ＆Ｇ杯全国少年少女カヌー大会	足立泰祐 （倉吉市関金Ｂ＆Ｇ海洋センター）	男子	カヤックシングル （普及艇・小学５・６年生）	３位	山梨県・精進湖
		松田奈々 （倉吉市関金Ｂ＆Ｇ海洋センター）	女子	カヤックシングル （普及艇・小学５・６年生）	２位	
平成26年	2014Ｂ＆Ｇ杯全国少年少女カヌー大会	山脇慎也 （倉吉市関金Ｂ＆Ｇ海洋センター）	男子	カヤックシングル （普及艇・４年生以下）	２位	山梨・精進湖
平成27年	全国高校総合体育大会	倉吉総産高 （岡村真鳥・澤田拓矢）	男子	カナディアンペア・200m	２位	京都府・久美浜

国際大会（スプリント）

年度	大会名	選手名	種別	種目	成績	備考
平成５年	第５回アジアカヌー選手権大会	藤本美穂・由谷・北口・種池	女子	カヤックフォア・500m	３位	広島・八千代湖
平成６年	国際大会	藤本美穂・由谷	女子	カヤックペア・500m	３位	オランダ
平成８年	第43回国際カヌー競技大会	松本めぐみ・足立	女	カヤックペア・200m	５位	ドイツ ボフォム
		松本めぐみ・足立・八鍬・川股	女	カヤックフォア・500m	８位	
平成９年	レーシングジュニア国際大会	松本めぐみ	女	カヤックシングル・500m	９位	オーストリア・リンツ
	世界ジュニアカヌー選手権大会	松本めぐみ・足立・佐竹・八鍬	女	カヤックフォア・500m	出場	フィンランド
	第７回アジアカヌー選手権大会	松本めぐみ・阿部・佐竹・八鍬	女	ジュニアカヤックフォア・500m	３位	韓国
平成10年	世界レーシング選手権大会	長田いづみ・鈴木	女	カヤックペア・200m	出場	ハンガリー セゲド
		長田いづみ・鈴木・菅野・足立	女	カヤックフォア・200m	出場	
平成14年	第９回アジアカヌー選手権大会	長田いづみ	女子	カヤックペア・200m	３位	イラン・テヘラン
平成18年	第35回世界カヌーフラットウォーター選手権	藤井功輔	男子	カナディアンシングル	出場	ハンガリー
	第15回アジア選手権大会	藤井功輔・安保泰斗	男子	カナディアンシングル・500m	５位	カタール ドーハ
		藤井功輔・安保泰斗	男子	カナディアンペア・1000m	３位	
		藤井功輔	男子	カナディアンシングル・500m	５位	
平成19年	第12回アジアカヌーフラットウォーターレーシング選手権大会	藤井功輔・岩崎	男子	カナディアンペア・1000m	７位	韓国・ファチョン

全国大会（スラローム・ワイルドウォーター）

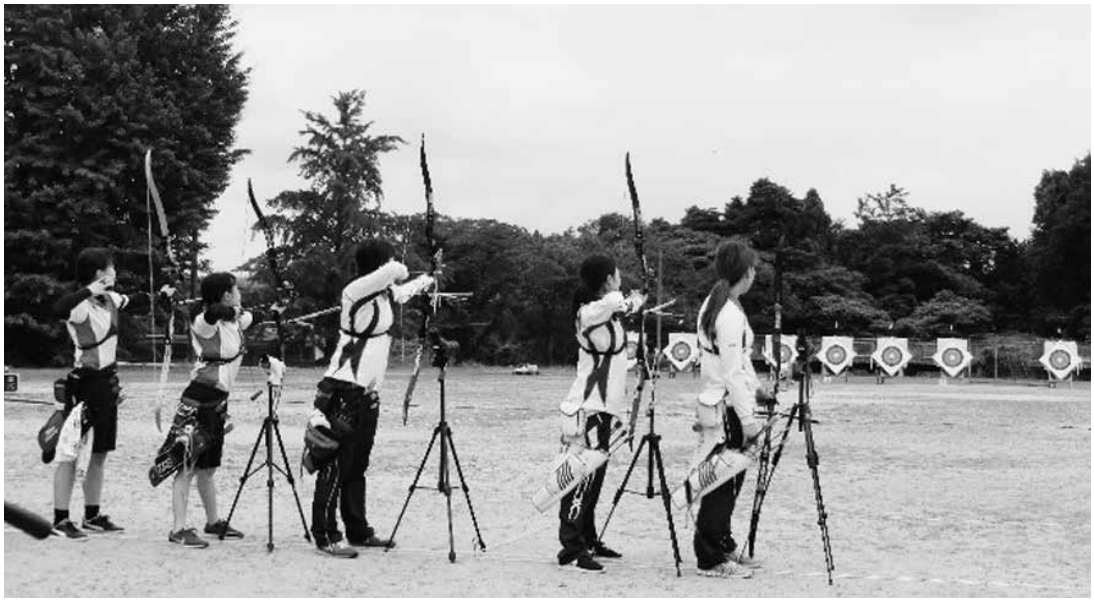
年度	大会名	選手名	種別	種目	成績	備考
平成６年	日本スラローム・ワイルドウォーター選手権大会	広池　善博	男子	ワイルドウォーター・ カヤックシングル・500m	２位	福島県二本松市
	日本スラローム・ワイルドウォーター選手権大会	小林　直美	女子	カヤックシングル・500m	２位	福島県二本松市
平成10年	日本スラローム・ワイルドウォーター選手権大会	真島　祐二	男子	スラロームカヤックシングル 15ゲート	１位	熊本県人吉市
平成15年	日本スラローム・ワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター カヤックシングル	２位	徳島県鷲敷町
平成17年	日本ワイルドウォーターシニア選手権大会	福本かな子	女子	カヤックシングル	２位	愛知県豊田市
平成19年	日本ワイルドウォーターシニア選手権大会	福本かな子	女子	カヤックシングル	３位	愛知県豊田市
平成22年	日本カヌースラロームジュニア選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	３位	東京都青梅市

平成23年	日本カヌースラロームジュニア選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	１位	愛知県豊田市
平成23年	B&G杯少年少女カヌー大会	福馬つばさ	女子	カヤックシングル（５・６年生普及艇の部）	１位	山梨県富士河口湖町
	B&G杯少年少女カヌー大会	福馬つばさ	女子	スラロームの部	１位	山梨県富士河口湖町
平成25年	第36回ＮＨＫ杯全日本スラローム競技大会	遠藤絵里子	女子	カヤックシングル	２位	富山県富山市
	日本カヌーワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター	２位	山口県萩市
平成26年	日本カヌースラロームジュニア選手権大会	恩田　晃壮	男子	スラロームカナディアンシングル	１位	岐阜県
平成27年	日本カヌーワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター	２位	東京都青梅市
平成28年	日本カヌーワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター	１位	東京都青梅市
平成29年	日本カヌーワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター	１位	岐阜県
	日本カヌースラロームジュニア選手権大会	福馬つばさ	女子	スラローム	１位	岐阜県

国際大会（スラローム・ワイルドウォーター）

年度	大会名	選手名	種別	種目	成績	備考
平成８年	世界カヌーワイルドウォーター選手権大会	小林　直美	女子	ワイルドウォーター	出場	イギリス・バラ
平成16年	世界カヌーワイルドウォーター選手権大会	福本かな子	女子	ワイルドウォーター	出場	ドイツ・ガルミッシュ
平成21年	カヌースラロームジュニアＷＡＶＥ2009	都田　輝夏	女子	スラローム	出場	チェコ・プラハ
平成22年	カヌースラロームジュニア世界選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	58位／63	フランス・フォア
平成24年	カヌースラロームジュニア世界選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	37位／38	アメリカ・ウォーソー
平成25年	ユースオリンピックフェスティバル	都田　輝夏	女子	スラローム	７位／13	オーストラリア・シドニー
	カヌースラロームワールドカップ第２戦	遠藤絵里子	女子	スラローム	出場	ドイツ・アウグスブルグ
	カヌースラロームワールドカップ第２戦	遠藤絵里子	女子	スラローム	出場	スペイン・セウウルゲル
	カヌースラローム世界選手権大会	遠藤絵里子	女子	スラローム	出場	チェコ・プラハ
平成26年	アンダー23世界カヌースラローム選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	出場	オーストラリア・ペンリス
平成27年	アンダー23世界カヌースラローム選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	31位／37	ブラジル・イグアス
平成28年	カヌースラローム世界ジュニア選手権大会	福馬つばさ	女子	スラローム	34位／54	ポーランド・クラコー
	カヌースラローム・アジア選手権大会	福馬つばさ	女子	スラローム	２位	タイ・ナコンナヨック
	カヌースラローム・アジア選手権大会	杉村　靖彦	男子	スラローム	58位／63	タイ・ナコンナヨック
平成29年	カヌースラロームジュニア世界選手権大会	福馬つばさ	女子	スラローム	出場	スロバキア・ブラチスラバ
	カヌースラロームU23世界選手権大会	都田　輝夏	女子	スラローム	34位／51	スロバキア・ブラチスラバ

鳥取県アーチェリー協会



第74回国民体育大会（第75回冬季大会）県予選会

１　高校生を中心に強化

鳥取国体（わかとり国体）では活躍した県勢であったが、その後は残されたメンバーで高校生を中心に強化が行われた。全国で常に上位とはいかなかったものの、個人を中心に成果を挙げた。平成５（1993）年には、この年から正式にインターハイ種目となった栃木インターハイで、大東憲吾（米子北高）が個人７位、翌年の平成６年富山インターハイでは堀池一徳（鳥取商高）が個人８位に入った。平成７（1995）年第50回福島国体では、少年女子鳥取県選抜が小林恵美（鳥取商高）、平山真弓（同）、後藤美絵（米子北高）のメンバーで３位に入賞した。同じ年の全国高校選抜では、日置健生（倉吉農高）が個人４位になった。また、平成８（1996）年の第51回広島国体では少年男子鳥取県選抜が日置健生、田中健一（米子北高）、川口寛明（同）のメンバーで８位に入賞した。

平成10年インターハイ女子団体決勝戦の鳥取商高

２　若い指導者たちの帰郷とインターハイでの活躍

こうした中、平成２（1990）年に全国高校選手権２位になり、その後日体大に進んだ樋口彰紀（倉吉農高～日体大）が平成７（1995）年に帰郷し、選手強化に尽力した。平成７年、８年の国体入賞に貢献したとともに、平成９（1997）年から鳥取商高で教鞭をとり、競技の指導はもちろん、選手の心的面から指導にあたり成果を挙げた。

平成９年の京都インターハイでは、鳥取商が横山佳織、平田陽子、谷口香織、清水優のメンバーで７位に、同年の第52回大阪国体では、少年女子鳥取県選抜（横山佳織、清水優、山本千恵（いずれも鳥取商高）が７位入賞を果たした。次年の平成10（1998）年には、香川インターハイで鳥取商が澤麻美、清水優、山本千恵、石田景子のメンバー

で県勢女子としては初の団体優勝を飾った。また同年の第53回神奈川国体でも、少年女子鳥取選抜（澤麻美、清水優、山本千恵）が８位入賞となった。

また、同じ年の平成10年には、平成３年度の全国高校選抜で６位に入賞した石原真樹（現姓谷本、倉吉東高～同志社大）も母校倉吉東高を香川インターハイへと導いた。さらに石原の指導した本内絵美子（倉吉東）は平成13（2001）年熊本インターハイで３位入賞を果たした。また、平成12（2000）年には上田幸史（米子北）が岐阜インターハイで６位に入った。ここまでは毎年のように高校生が全国での入賞を果たすことができた。

３　めまぐるしいルール改正

この間、アーチェリー競技はめまぐるしいルール改正が行われてきた。アーチェリー競技は、見ていてもどこが勝っているのか分からない競技であった。実際競技中は、競技者自身も今誰がどのチームが勝っているのか分からない競技で、結果が出るのは競技が終了してから30分から１時間経った後であった。

まず、ルールが変わったのはこれまでのハーフラウンド（50m・30m各36射）のみの競技から、ハーフラウンドを予選ラウンドとして、その後１対１の対戦で行う決勝ラウンドの導入であった。さらに普及段階のハーフラウンドから、本来の競技であるシングルラウンド（男子90m・70m・50m・30m、女子70m・60m・50m・30m各36射）へ変更されていった。さらに、シングルラウンドに続いて現在行われている70mラウンド（70m×２）へと変更された。

決勝ラウンドの戦い方も、当初は個人18射、団体24射であったが、個人12射、団体18射に、さらにトータルスコアからセットシステム（個人３射ごと、団体６射ごとの勝敗でのポイント制）に変更となった。行射時間も６射５分から６射４分へ、特に決勝ラウンド団体では３人の選手が入れ替わりの６射で２分（単純計算で１射20秒）となるなど、よりスピーディーに、よりスリリングとなり、見る者を楽しませるアーチェリーへと変貌を遂げている。したがって、選手の指導も射形はもとより、早く射つこと、メンタルの強さの指導など多岐にわたる指導が必要となってきた。

４　新しい部の設立と廃部

平成13（2001）年以降高校勢は入賞と遠ざかることとなるが、その間に平成12年、樋口が米子南高へ転勤、部員を集め活動を始めた。多くの高校が切磋琢磨し、お互いを高め合うことは競技力向上につながることからとても喜ばしいことであった。その一方、昭和58年ころからの歴史を持つ鳥取東高が平成17（2005）年に活動を終えた。人口の少ない鳥取県で、競技人口の少ないアーチェリー競技では大きな痛手であった。いったんは増えた県内の高校はまた５校となり、選手確保、競技力向上の大きな課題となっている。

５　成年層の活躍

以前のような常勝鳥取と言えないまでも、コンスタントに高校レベルで全国大会入賞を果たしてきたが、高校生の強化の成果として、その卒業生である成年層の活躍も少しずつではあるが目立ってきた。

平成16（2004）年の第59回埼玉国体には、熊本インターハイ個人３位の本内絵美子（倉吉東項～同志社大）、平成14（2002）年度中国高校個人優勝の山崎麻衣（鳥取商高～近畿大）、大学から競技を始めた山根麻貴（関西学院大）の成年女子が、本内の個人６位の活躍もあり鳥取国体以来の３位入賞を果たした。また、米子高専時代に国体入賞経験のある安治直人は弓をリカーブからコンパウンドに変え、平成17（2005）年度第15回全日本室内選手権、平成18年度第16回全日本室内選手権で２連覇を果たしている。

これ以降、安治は国内外の大会で活躍し、平成23（2011）年には世界選手権に日本代表として出場、平成24年には地元開催枠とはいえ、世界のトップ８しか出場できないワールドカップファイナル

東京大会に出場するなど活躍した。また、安治は地元鳥取市で積極的にアーチェリー教室を開くなど競技人口拡大にも一役買っている。

６　地道な強化による高校生の活躍

平成21年インターハイ女子団体優勝の米子南高

平成13（2001）年度以降５年間、高校生の全国入賞から遠ざかっていたが、樋口を中心とした地道な強化が着実に成果を現し始めた。

平成18（2006）年度には全国高校選抜で大川詩織（鳥取商）が８位入賞を果たした。平成20（2008）年関東インターハイ（埼玉）では米子南高が松林夏美、寺田仁美、内田未南美、川中香緒里のメンバーで５位に入賞した。さらに平成21（2009）年近畿インターハイ（滋賀）では、米子南高が陶山愛梨、川中香緒里、松本ゆりあ、入澤有加のメンバーで優勝した。また、個人でも松本ゆりあが３位入賞を果たした。同年の第64回新潟国体では、少年女子鳥取県選抜が陶山愛梨、川中香緒里、松本ゆりあのメンバーで４位入賞、個人でも川中が優勝を果たした。

平成23（2011）年度全国高校選抜では松下文香（米子北高）が３位入賞をし、日本代表として海外の大会でも活躍した。平成25（2013）年北部九州インターハイ（佐賀）では、米子南が中島由圭利、野口麻里、松本ありさ、井畑菜那子のメンバーで３位入賞、個人でも中島由圭利が６位となった。平成27（2015）年度全国高校選抜では坪倉結実（米子北高）が２位に、平成28年度全国高校選抜では尾崎空斗（倉吉農高）２位と２年連続で上位入賞を果たした。

７　私設のアーチェリー場を新設

目覚ましくルールが変わったアーチェリーで、高校では鳥取商高、倉吉農高、米子南高で新ルールに対応したアーチェリー場ができたが、他の高校や公設のアーチェリー場では未整備であった。前理事長で米子北高の黄金期の指導者である木村哲二は、平成20（2008）年に100m×40mの本格的なアーチェリー場（アーチェリーランド米子）を新設（私設）、以降米子北高の練習場として、さらに一般やジュニアの選手の練習場として大きな貢献をしている。

８　夢のオリンピック銅メダルの川中

米子南高出身の川中香緒里（米子南高～近畿大）は高校３年のインターハイで団体優勝したものの、個人では１回戦敗戦の悔しさから、大学でアーチェリーを続けることを決意、大学日本一の近畿大学に進んだ。大学では２年生の平成23（2011）年、日本代表として世界選手権に出場したが、自身の不調から次年のロンドンオリンピック出場権を得られなかった。ロンドンオリンピック最終予選では川中の活躍もあり団体３位で、ロンドンオリンピックの最後の団体枠を手中にした。

そして迎えたロンドンオリンピックでは準決勝で常勝韓国に敗れたものの、３位決定戦でロシアを破り見事銅メダルを手にした。この３位入賞で後に県で二人目の県民栄誉賞を受賞した。

ロンドンオリンピックでの川中香緒里

その後も日本の第一人者として活躍しており、平成28（2016）年のリオデジャネイロオリンピックにも出場を果たした。

現在も国内外の大会で活躍しており、国体でも平成24（2012）年第67回岐阜国体で個人３位、平成26（2014）年第69回長崎国体、平成27年第70回和歌山国体、平成29年第72回愛媛国体で成年女子としては３度の個人優勝、団体でも鳥取県成年女子として、松下文香（米子北高～近畿大)、和田茜（米子南高～関西大）のメンバーで長崎国体５位、和歌山国体８位の成績を残した。また、川中は平成28（2016）年の世界室内選手権では団体優勝を果たし、平成29年には全日本ターゲット選手権で念願の初優勝を果たした。

９　身障者の活躍

祖田正治、森田政則の２人のパラリンピック出場者を出している鳥取県だが、近年も、安治の指導でコンパウンドを始めた車いすアーチャーの寺坂真一、西脇正和が活躍している。２人ともそれぞれの種目で平成23（2011）年のイタリアパラ世界選手権に日本代表で出場した。また寺坂は国体ふれあい大会で複数回の優勝を果たしている。

１０　小中学生の育成

鳥取県では、アーチェリーは高校生から始める競技であった。全国的には、小中学生で始めた選手が他競技と同様活躍している。鳥取県アーチェリー協会としても、教室等で選手確保を図ったがなかなか長続きしなかった。平成27（2015）年度から鳥取県が始めた東京オリンピック・パラリンピック選手育成事業に参加している。現在はその「チーム鳥取」のメンバー以外にもアーチェリーを始める小中学生が多く、今後の成長が楽しみである。

平成29年度は、全国小中学生大会で稲垣奈那が中学生女子７位、武田悠冶が小学生男子５位、有田向陽が小学生女子５位、塚口あかねが小学生６位と全員入賞した。また、同年の西日本小中学生大会では塚口あかねが小学生女子２位に入った。現在、「チーム鳥取」では１期生から３期生まで10名が活動しており、今後の活躍が楽しみである。

１１　課題は山積み

全国や世界で活躍する選手が出ている一方、課題は山積みである。まずは社会人登録者の少なさである。高校ではそれなりに全国で入賞できているが、卒業後に選手・役員として残るものは少ない。現在の社会人登録者は20名ほどで、競技会に参加する選手は10名ほどである。今後、国体等全国規模の大会を運営するには社会人登録者の確保が課題である。社会人登録者が少ないのは練習環境の悪さもその一因である。

前述したとおり国体種目の70ｍの練習ができる公設練習場は全くない。選手は私設の練習場や高校での限られた時間の練習に参加するしかない。特にアーチェリーは危険を伴うスポーツであり、安全な練習場の設置が急務である。さらに指導者の確保も課題である。鳥取国体からの指導者は定年を迎える時期であり、当時、若い指導者と言われた樋口らも40代後半に入る。小学生から社会人までの選手の指導をするためにはそれぞれの指導者の配置に加え、その連携が必要となる。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和53年～平成10年		角田　勇一
11年～	28年	川上　義博
29年～		杉原弘一郎

◇理事長

平成２年～	18年	木村　哲二
19年～		山根　俊一

国際大会

年度（平成）	大会名	選手氏名	種目	成績
22年度	第８回世界学生選手権	川中　香緒里		団体３位
22年度	第16回アジア競技大会	川中　香緒里		団体５位
23年度	2011パラアーチェリー世界選手権	寺坂　真一	ＣＰ	出場
23年度	2011パラアーチェリー世界選手権	西脇　正和	Ｗ１	出場
23年度	第46回世界選手権	川中　香緒里	ＲＣ	出場
23年度	第46回世界選手権	安治　直人	ＣＰ	出場
23年度	第26回ユニバーシアード	川中　香緒里	ＲＣ	団体４位、個人６位
24年度	ロンドンオリンピック	川中　香緒里		団体３位
24年度	第１回インターシティー選手権	松下　文香		団体２位
24年度	ワールドカップファイナル2012	安治　直人		出場
25年度	2013パラアーチェリー世界選手権	寺坂　真一	ＣＰ	出場
26年度	第17回アジア競技大会	川中　香緒里	ＲＣ	団体３位
26年度	2014アジアパラ大会	寺坂　真一	ＣＰ	出場
27年度	第47回世界選手権	川中　香緒里		団体４位、個人７位
28年度	第13回世界室内選手権	川中　香緒里		団体優勝
28年度	リオデジャネイロオリンピック	川中　香緒里		団体８位

全国規模の大会

年度（年度）	大会名	選手氏名	種目	成績
５年度	平成５年度全国高校総体	大東　憲吾		７位
６年度	平成６年度全国高校総体	堀池　一徳		８位
７年度	第50回国民体育大会	鳥取県選抜少年女子 （小林恵美、平山真弓、後藤美絵）		３位
７年度	第15回全国高校選抜	日置　健生		４位
８年度	第51回国民体育大会	鳥取県選抜少年男子 （日置健生、田中健一、川口寛明）		８位
９年度	平成９年度全国高校総体	鳥取商業 （横山佳織、平田陽子、谷口香織、清水　優）		７位
９年度	第52回国民体育大会	鳥取県選抜少年女子 （横山佳織、清水　優、山本千恵）		７位
10年度	平成10年度全国高校総体	鳥取商業 （澤　麻美、清水　優、山本千恵、石田景子）		優勝
10年度	第53回国民体育大会	鳥取県選抜少年女子 （澤　麻美、清水　優、山本千恵）		８位

12年度	平成12年度全国高校総体	上田　幸史		６位
13年度	平成13年度全国高校総体	本内　絵美子		３位
16年度	第59回国民体育大会	鳥取県選抜成年女子 （本内絵美子、山崎麻衣、 山根麻貴）		３位
17年度	第15回全日本室内選手権	安治　直人		優勝
18年度	第25回全国高校選抜	大川　詩織		８位
18年度	第27回全日本社会人Ｆ選手権	安治　直人		２位
18年度	第16回全日本室内選手権	安治　直人		優勝
19年度	第36回全日本社会人Ｔ選手権	安治　直人		２位
19年度	第28回全日本社会人Ｆ選手権	安治　直人		２位
20年度	平成20年度全国高校総体	米子南 （松林夏美、寺田仁美、 内田未南美､川中香緒里）		５位
21年度	平成21年度全国高校総体	米子南 （陶山愛莉､川中香緒里、 松本ゆりあ、入澤有加）		優勝
21年度	平成21年度全国高校総体	松本　ゆりあ		３位
21年度	第64回国民体育大会	鳥取県選抜少年女子 （陶山愛莉､川中香緒里、 松本ゆりあ）		４位
21年度	第64回国民体育大会	川中　香緒里		優勝
22年度	第20回全日本室内選手権	安治　直人		３位
23年度	第30回全日本社会人Ｆ選手権	安治　直人		２位
23年度	2011ジャパンパラリンピック	西脇　正和	Ｗ１	３位
23年度	2011ジャパンパラリンピック	寺坂　真一	ＣＰ	６位
23年度	第30回全国高校選抜	松下　文香		３位
24年度	第51回全日本学生選手権	川中　香緒里		優勝
24年度	第67回国民体育大会	川中　香緒里		３位
25年度	平成25年度全国高校総体	米子南 （中島由圭利、野口麻里、 松本ありさ､井畑菜那子）		３位
25年度	平成25年度全国高校総体	中島　由圭利		６位
25年度	第55回全日本Ｔ選手権	安治　直人		２位
25年度	第52回全日本学生選手権	川中　香緒里		優勝
26年度	第69回国民体育大会	鳥取県選抜成年女子 （川中香緒里､和田　茜、 松下文香）		５位
26年度	第69回国民体育大会	川中　香緒里		優勝
26年度	第14回全国身体障がい者スポーツ大会	寺坂　真一		優勝
26年度	第56回全日本Ｔ選手権	川中　香緒里		３位
27年度	第44回全日本社会人Ｔ選手権	川中　香緒里		優勝
27年度	第33回全国高校選抜	坪倉　結実		２位

27年度	第70回国民体育大会	鳥取県選抜成年女子 （川中香緒里、和田　茜、 松下文香）		８位
27年度	第70回国民体育大会	川中　香緒里		優勝
27年度	第15回全国身体障がい者スポーツ大会	寺坂　真一		２位
27年度	第34回全国高校選抜	尾崎　空斗		２位
28年度	第71回国民体育大会	中島　由貴		４位
29年度	第72回国民体育大会	川中　香緒里		優勝
29年度	第12回全日本小中学生選手権	稲垣　奈那		７位
29年度	第12回全日本小中学生選手権	武田　悠治		５位
29年度	第12回全日本小中学生選手権	有田　向陽		５位
29年度	第12回全日本小中学生選手権	塚口　あかね		６位
29年度	第59回全日本Ｔ選手権	川中　香緒里		優勝

W1=車いす使用の四肢麻痺者（頸髄損傷）クラス　　RC=リカーブボウ　　CP=コンパクトボウ

鳥取県空手道連盟

2009（平成21）年新潟国体で優勝した宇佐美里香選手

１　国体のレガシーを生かす

わかとり国体が成功裏に終わり、県外から来た成年組手重量級の翁長勇助は出身の沖縄に、成年組手無差別級の山口真弘は家業を継ぐため出身の東京に戻った。わかとり国体が終わってからの10年間は、県空手道連盟全体で進めて来た強化の遺産を次の時代にどう活かして行くか、前理事長の井上慶身、前選手強化委員会委員長の岡村行雄、同委員会委員の中山三枝を中心に模索していった時代であった。

その間も、日本屈指の技術力・指導力を誇った前理事長、井上の下には、日本各地からナショナルチームの選手、また海外からもトップ選手が来県して指導を仰ぐようになり、また他県の国体の

技術アドバイザーコーチも要請されるようになり、井上は県外および海外選手の指導でますます多忙になっていくのであった。そのため、井上の技術を土台にしつつ、県内の強化は岡村、中山を中心に進められるようになり、空手道の基礎・基本を大切にしながら選手の技術的な土台を地道に作り上げて行く方針のもと、競技力向上に取り組んでいった。

２　国体での得点獲得

平成６（1994）年からの10年間は、その土台作りから少しずつ結果が出て来た時代であった。井上、岡村、中山など優秀な指導者に加え、他県から全日本のトップ選手が鳥取で稽古する中、それらの優秀な選手と一緒に稽古できることが刺激になり、国民体育大会では、成年女子形では若林春日、また少年女子形でも入賞者が相次いだ。この流れを絶やさぬよう繋いでいくことを強化の柱とする一方で、選手強化委員会では国体での組手競技における得点の獲得、特に得点の大きい組手団体戦での得点も見据えて強化を進めていったのである。

３　スポーツ競技としての成熟

平成４（1992）年に始まった中学生の全国大会（第１回全国中学生空手道選手権大会）に続き、平成13（2001）年には小学生の全国大会（第１回全日本少年少女空手道選手権大会）が始まり、「空手道競技のルールは一つ」のスローガンのもと、小学生は「全日本少年少女空手道選手権大会」、中学生は「全国中学生空手道選手権大会」、高校生は「全国高等学校空手道選手権大会」、成年一般は「全日本空手道選手権大会」と、小学１年生から大人まで統一したルールで全国大会が繋がった。

また小学生の大会からテレビ中継も入るようになるとマスコミで取り上げられることも多くなり、選手・指導者の意識も変化する中で、スポーツ競技としての空手道が成熟進化していく時代に入っていくのであった。

小学生選手は小学生日本一、中学生選手は中学日本一、高校生は高校日本一を目指す中で、スポーツ競技としての空手道の戦術戦略が年々進化し、またスポーツ競技としてルールが一本化したことから、空手の会派流派の垣根を超えてオープン大会や交流試合の数も増え、組手競技における技術的交流や研究がますます盛んになっていくのである。鳥取県空手道連盟選手強化委員会でも、このような競技空手道としての戦術戦略を取り入れながら選手強化を進めていくようになっていった。

４　宇佐美里香の黄金時代

宇佐美里香は、岡村の母校である国士館大学空手道部に在部していた縁で鳥取に稽古に来た折、井上と岡村に見出された選手である。当時、岡村は、宇佐美の形の演武を見た時、この選手には花があり、素質もある。将来は必ず世界チャンピオンになると直感し、大学在学中から井上の下で稽古が出来るよう、宿泊などの環境条件を整えバックアップしていった。

形競技の稽古は、ほとんどが地道な基本の繰り返しである。良い指導者の指導や周りのバックアップに加え、宇佐美自身が、地道な基本稽古を繰り返しこなし、勝つための努力を惜しまないことが大きな飛躍に繋がっていった。

この後、平成21（2009）年の第64回国民体育大会（新潟）での成年女子形優勝を皮切りに、国民体育大会同種目で４連覇、全日本空手道選手権大会女子個人形で５度（４連覇含む）優勝した。そして平成24（2012）年には、念願であった世界空手道選手権大会女子個人形優勝など女子形の牽引者として黄金時代を築いていったのである。これにより、平成25年２月４日に県からスポーツ顕彰を受賞している。

５　組手競技の強化

鳥取県空手道連盟選手強化委員会では、国体での形競技の得点以外に、組手競技における得点の

獲得、特に得点の大きい組手団体戦での得点獲得という方針から、岡村が、平成26（2014）年、母校の国士舘大学空手道部の須田芳広（御殿場西高校空手道部卒・平成21年インターハイ個人組手優勝）、米山英弥（おかやま山陽高校空手道部卒・平成21年インターハイ個人組手準優勝）を鳥取に呼び寄せた。

さらに翌平成27年、同じく国士館大学空手道部の岡村将広（平成26年東日本大学空手道選手権大会優勝・鳥取城北高校空手道部卒）が卒業して地元鳥取に就職し、この３選手を中心に組手の強化策を進めていったのである。

３名の選手が国体の組手得点の獲得源として活躍する一方で、鳥取県空手道連盟選手強化委員会の強化委員の若返りを図るという方針から、須田は選手強化委員会副委員長、岡村は選手強化委員会委員として就任し、彼ら若い強化委員を中心にして小中高校生の組手強化にもあたり、岡村の「会派流派を超えてオール鳥取での強化」の方針のもと、毎週土曜日、鳥取の道場でのオープン稽古（会派流派を超えて誰でも選手参加可）や県外でのオープン大会への参加や出稽古の奨励など、競技空手道としてお互いが切磋琢磨できるオープンな強化指導体制を整備していった。

その成果は、小中学生の組手競技力の向上として表われる。以前の県内選手は、全日本少年少女空手道選手権大会に出場しても県外選手に気後れすることが多く、負けて当たり前の雰囲気だったが、技術的に互角に戦うことができるようになってくると、負けると悔しくて涙を流す選手が出てくるようになった。

このことは、ここ数年で小中学生の組手の競技力が格段にアップした証拠であり、この流れを中・高と繋いでゆくには、今後、強化指定選手を絞りながらの鳥取県空手道連盟選手強化委員会による集中強化はもちろん、中学校・高等学校の空手道指導者の育成、中体連への空手道競技の加盟、高体連空手道専門部との協力連携を進めていく必要がある。

県連盟の強化練習会で稽古に励む参加者

６　「空手王国鳥取」へ向けて

平成27（2015）年５月、鳥取県空手道連盟を長年牽引して来た井上前理事長が亡くなった。鳥取県空手道連盟の技術的・精神的に大きな支柱を失ったことは大変な痛手であったが、井上の遺志を継いで鳥取県空手道連盟をさらに発展させて行くことこそが残された連盟役員の使命である。

平成27年から新たに理事長に就任した岡村は、井上前理事長の意思を継ぎ、海外トップの形選手を受け入れて指導し、また母国に返すという体制を続けている。

また、組手競技を含む鳥取県空手道連盟全体の技術力アップを掲げて強化を進め、才能ある若い大学生をスカウトし、就職支援などオール鳥取のメンバーとして活躍できるよう環境整備に取り組みながら、スカウトした優秀な選手が国民体育大会や実業団の大会で活躍してくれることで、地元の子どもたちにも大きな刺激を与えるという、良い循環がうまれるよう取り組んでいるところである。

後々、この体制をさらに磐石なものとし“空手王国鳥取”というスローガンのもと、指導力・技術力・選手層の厚さでどこにも負けない鳥取県空手道連盟を発展させていく必要がある。

７　オリンピック競技としての空手道

去る2016（平成28）年８月４日、空手道は東京オリンピック追加種目に選ばれ、諸先輩方をはじめ、空手道に携わる全ての者の悲願が達成され

た。我が国固有の伝統文化である空手道が世界中に普及し、世界最大のスポーツの祭典であるオリンピック競技に入ったことは、競技スポーツとしての空手道の普及・振興のみならず、武道の文化が世界中に認知されていくうえで大変意義あることである。

今後、オリンピックにおいて、メダル獲得を目指すということは、マスコミで取り上げられる機会もより多くなり、空手道に対する国民全体の注目度や認知度も格段に向上していき、メダリストは子どもたちの憧れとなり、競技人口の増加、空手道の普及・振興に大きな力となることは間違いない。

一方で、空手道に対する注目度が高くなればなるほど、我々指導者が「オリンピックスポーツとしての空手道」に携わる者として「責任ある行動と自覚を持つ」ということを再確認し、自覚することが大切であり、今後、オリンピックスポーツとして、組手競技における安全な展開、観客・テレビを意識した競技運営・判定方法の研究も必要となる。

我が国固有の伝統文化である空手道の精神は、自分自身を高めていくというオリンピック精神と相反するものでなく、空手道がオリンピック競技というカテゴリーの中で、オリンピックスポーツとしてどう高めていけるか、また、東京以後のオリンピック種目としての採用にどう取り組んで行くかが今後の課題であり、鳥取県空手道連盟としても役員および会員一同がこのことを意識して活動していくことが肝要である。

8　未来へ繋いでいく組織作り

平成20年代から空手道の競技としての進化成熟のスピードには目を見張るものがある。鳥取県空手道連盟の強みは技術力・指導力であり、この強み・財産を支柱にしながら鳥取県空手道連盟が空手道競技にどう対応していくか、空手道競技の変化に合わせどう変化させていくかが今後10年間で問われることになる。

県連盟ジュニア強化練習に集まった小中学生たち

また、オリンピック競技の種目として注目されることで、今まで以上に自らを律し、礼と節を重んじる武道精神にのっとり、諸規程を遵守し、空手道の健全性・高潔性を保ち続けることが求められることから、全都道府県空手道連盟でスポーツの健全性・高潔性を保ち続けるための組織体制の整備､諸規程の整備に取り組んでいく必要がある。

このような競技力向上のための施策と組織の改革は、この先10年の取り組みが２巡目に開催される鳥取国体へと繋がり、さらに次世代へと繋げていくことが大切である。また、空手道は単なる技術の習得のみに偏らず、礼節を重んじる武道であり、武道としての空手道の精神を正しく普及させていくことが我々連盟に携わる者の使命であり、鳥取県空手道連盟が空手道に携わる選手や指導者にとってより良い組織になるようにしていくことが重要であると確信している。

宇佐美里香 栄光の奇跡

【国民体育大会】

年　度	種　目	成績
平成21年	女子形	１位
平成22年	女子形	１位
平成23年	女子形	１位
平成24年	女子形	１位

【全日本空手道選手権大会】

年　度	種　目	成績
平成19年	女子形	１位
平成21年	女子形	１位
平成22年	女子形	１位
平成23年	女子形	１位
平成24年	女子形	１位

【アジア競技大会】

年　度	種　目	成績
平成22年	女子形	１位

【アジア空手道選手権大会】

年　度	種　目	成績
平成21年	女子形	１位
平成23年	女子形	１位
平成24年	女子形	１位

【世界空手道選手権大会】

年　度	種　目	成績
平成22年	女子形	３位
平成24年	女子形	１位

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成３年４月～８年３月　　岩見　誠次
８年４月～27年３月　　田村　泰明
27年４月～　　大塚　　巖

◇理事長

昭和53年７月～平成27年３月　　井上　慶身
27年４月～　　岡村　行雄

鳥取県銃剣道連盟

シドニー市のオリンピックパークで形の演武をする瀬尾憲次範士八段（左）（平成28年）

１　全日本銃剣道連盟の改革

全日本銃剣道連盟は、平成20年代に入り公益社団法人として新たな体制確立のため邁進してきた。

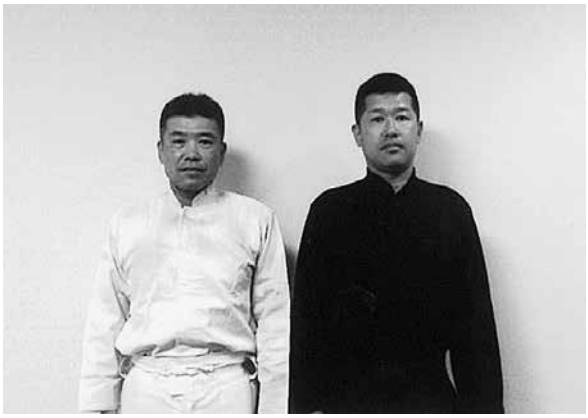
その重視事項として、先ずは会員の増勢、指導者及び審判の育成、ジュニアの育成強化、国際普

及活動、女性の育成と活用及び財務基盤の維持を掲げて普及振興を図ってきた。中でも減少する会員については、新規加入者の獲得、会員の減勢防止、会員の掘り起こし等の対策及び青少年・女性の育成活用により、是が非でも会員を一定数確保することで財務基盤の維持をして運営面を円滑にすることが大切である。

近年は世の中がめまぐるしくＩＴ化、グローバル化するなか､加えて急速な少子化の影響もあり、銃剣道に限らず武道全般に競技人口が減少している。

とりわけ、一般の方々、特に女性及び少年の加入が少ない要因として、銃剣道の場合は､「突く」という行為がややもすると危険を伴うイメージがあり、始めてみようと思う人には若干抵抗があるようである。そんなマイナスイメージを払拭し、銃剣道は安全であるという前提のもとに、如何にすれば注目されるか、関心を示してもらえるかを検討した結果、試合審判規則（服装規則も含む)、銃剣道教則の大幅な改正がされた。これからの銃剣道は、誰もが「やって楽しい、見て楽しい銃剣道」そして、洗練された品格のある技の駆使と公正､適格な審判による「分かり易く､スピーディーで美しい」試合を具現しようとするものである。

なお、併せて試合者についても従前のズボン形式から袴、道衣へ、そして審判員は白ズボンからグレーズボンへと服装が更新された。これらの改正により、以前よりも一般の方々に、銃剣道に対



更新された試合者の服装（平成９年）
左側がズボン形式、右側が道衣・袴

する理解がなされたものと確信している。

このことから、鳥取県銃剣道連盟においては、会員の大半が自衛官であることから、一般の会員への奨励、特に元会員の方々への再入会、県連等活動等への参加そして女性及び少年少女への勧誘に重点を置いている。

女性については、比較的軽易で護身術としても役立つ短剣道への導入を図ることとしている。

２　低迷する国体の成績

銃剣道は、平成に入ってから国体での成績は低迷している。特に成年は､平成27(2015)年まで(平成28年は隔年開催のためなし）一度も入賞がなく天皇杯の得点が獲得できていない。その低迷する要因として、強化選手要員が少人数のため競争意識が低いためと思われるので、関係団体へ人員の増員を図るよう強く要望している。

少年は低迷が続いていたが、平成12（2000）年９月に米子市に県立武道館が設立され、それに伴い練習環境が整うとともに、県立武道館の事業である銃剣道教室で生徒の募集を始めた。

その結果、少人数ながら中学･高校生が集まり、自衛隊ＯＢの清友真治、瀬尾憲次の両名による熱心な指導により、平成16年の中国ブロック大会で見事優勝し、埼玉国体への切符を掴むことができた。実に17年ぶりの国体出場であった。メンバーは小林伸太郎、川越麻央、中村俊太の３名で、戦績は予選リーグで惜しくも敗退した。

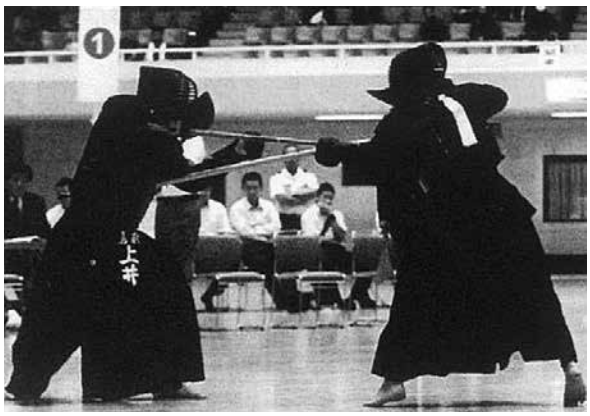
翌年の中国ブロック大会も小林龍太郎、川越麻央、篠垣翼のメンバーで２連覇して岡山国体へ出場した。

結果は、１回戦で敗退したが、指定トーナメント戦で見事な逆転勝ちを収め第８位となり、地元わかとり国体以来の入賞を果たした。

それ以後も、中国ブロック大会で健闘するものの国体からは遠のいている。

３　全国の主要大会での成績

毎年４月に開催される全国銃剣道優勝大会（平



第20回全日本銃剣道選手権大会準々決勝戦で
健闘するも惜しくも敗退したが県勢初のベスト８の
上井周平（左）（平成24年）

全日本少年少女錬成大会で入賞した２名
（左が小学４年の部３位の糸原心温、
右が中学１年の部ベスト８の松本樹）

成４年までは全日本銃剣道選手権大会（個人戦も含む））では、防衛省のみの出場で一般の部は平成10年から参加選手がなく、かつて県東部で編成して再三上位入賞していた面影はない。防衛省の部は団体戦は３回戦までの進出が最高で、ベスト８への壁が依然として厚いものがある。

また、平成５（1993）年から、個人の日本一を決定する高松宮杯全日本銃剣道選手権大会が新設された。錬士六段以上で30歳以上（現在は、年齢制限なしの錬士六段以上）が出場資格となっている。これには、平成24（2012）年第20回大会で陸自米子の上井周平が県勢初めてのベスト８まで勝ち上がり、惜しくも準々決勝で涙をのんだ。

また、年齢が25歳以下の全国青年銃剣道大会においては、平成12（2000）年第31回大会で、第13回大会に参加して以来、団体戦、個人戦ともに初入賞を果たした。団体戦は、初戦からチームワークよく接戦を勝ち抜き、見事ベスト４まで勝ち上がり第３位と健闘した。メンバーは柏田祐一、若竹直樹、竹内登の３名であった。また、個人戦では女子の部で、西世古文子が初出場で健闘し、第３位と女性初の入賞を果たした。

平成５年の愛知国体開催を記念して開催される平成21（2009）年度第16回わかしゃち全国銃剣道大会では、落合渉、金坂大輔、竹下昌裕の３名が第３位と初入賞した。

その４年後の平成25（2013）年第20回大会においては筒井大輔、坂本龍一郎、若槻隆志の３名が、初戦から勢いに乗って決勝戦まで勝ち上がり、見事初優勝を成し遂げた。

これら新鋭の台頭で、今後の国体及び全日本優勝大会での活躍が期待されたが、その後は、足踏み状態が続いている。

一方、ジュニア世代については、平成29年度全日本少年少女銃剣道錬成大会において、小学４年生以下の個人の部で糸原心温が第３位（敢闘賞）と頑張った。同じく中学１年の部で松本樹が２年ぶり２回目のベスト８（努力賞）と健闘した。両名は、県立武道館の銃剣道教室で 週２回の練習をしており、この活躍で生徒の増加につながってくれたらと願っている。

４　中四国ブロック大会での好成績

中四国地区銃剣道選手権大会は、平成６（1994）年度第22回大会の地元開催で見事期待に応え４年ぶりに優勝を飾った。メンバーは高松剛、井上孝行、岡睦士、垣田秀則、上野興宏の５名で、翌年も勝って２連覇し10回目の優勝を果たした。個人戦でも高松剛が平成４（1992）年から２連覇し、３連覇を狙ったが惜しくも決勝戦で涙をのんだ。その後は、勝てない時期が続き悔しい思いをしていたが、平成18（2006）年度第35回大会で実に12年振り12回目の優勝を果した。メンバーは上井周平、稲葉匡太、今泉隆一、古川智之、中原渉の５

名であった。

また、６年後の平成24（2012）年度第41回大会では、上井周平、落合渉、稲葉匡太、竹下昌裕、川端友道の５名で３連覇していた陸自山口に対し、見事な逆転勝ちで13回目の優勝を果たした。個人戦では、落合渉が平成26年度第42回大会で粘り強く勝ち上がり、初優勝した。

この大会や中四国地区での輝かしい伝統をもつ陸自米子は近年やや勢いがなく、かつて６連覇という前人未踏の大記録を作った往年の勢いが見られないのが残念である。

今一度、体制を見直して計画的な錬成をする必要がある。

５　今後取り組むべき課題

銃剣道は、未だ認知度は低く、一般の方々への広報が必要である。そのためには、銃剣道の全国規模の大会及び指導者養成講習会等を誘致することが普及振興の早道と考え、関係団体等へ働きかけているところである。

加えて､少年の育成が喫緊の課題である。現在、県内唯一の活動拠点である県立武道館において銃剣道教室を瀬尾憲次、松本直貴、糸原純二の３名で指導しているが、生徒の確保は依然として厳しいのが現状である。さらに、銃剣道競技は国体開催が平成27（2015）年から隔年となり、ますます少年の獲得が厳しいものとなっており、少年の中国ブロック大会への参加すら危ぶまれるほどの危機的状況である。近年は、少子化で武道離れの傾向もあり厳しい中ではあるが、県立武道館銃剣道教室では、女子児童も含めて、ジュニア期からの養成に着手して計画的な錬成を始めた。将来は、少人数ながらも現在活動する小学生が中学校での部活動として実施することができたなら、中学校武道必修化の授業につながってくれるものと大いに期待している。

とりわけ、平成29年度から中学校武道必修化に関し、次期学習指導要領に実施可能種目として武道９種目を並列明記されることとなったことは将来への明るい材料である。併せて、日本武道館協議会設立40周年記念事業としてその周知徹底と中学校武道必修化の充実を目的として、中学武道必修化指導書とＤＶＤが全国の中学校、都道府県・市町村教育委員会、武道団体及び関係団体等々に配布された。

この指導書とＤＶＤを、平成21（2009）年度から毎年開催している県立武道館と日本武道館が実施する共催事業の青少年銃剣道錬成大会で少年少女に活用したところ､非常に分かり易いと好評で、初心者への指導書として大いに成果があった。今後とも引き続きＤＶＤを活用して教育することが肝要である。

また、競技団体としては今後中学校における銃剣道の授業化を目指し、普及活動が必要だと考えているところである。一方、成年の部では以前のように多くの人員での養成が期待できないので、少数精鋭主義での錬成となっているため、競争意識がやや低下しているのが懸念される｡このため、全国及び中四国ブロック研修会には積極的に参加し選手自ら研鑽することで、選手層の底辺の拡大と、併せて指導者の指導能力の向上等が必要である。

同時に、競技力向上のためには県外遠征が必須であり、九州の強豪県への遠征を継続して計画しているところである。

６　その他特記事項

日本武道協議会が計画する日本武道代表団の海外派遣代表団の一員として、鳥取県から平成17（2005）年度にはイタリア共和国へ上萬淳範士八段が、平成28（2016）年度はオーストラリア連邦へ瀬尾憲次範士八段がそれぞれ派遣され、両国の親善普及に寄与した。

特にオーストラリア連邦での演武、ワークショップにおいては大盛況で他武道に比して人気があった。今後とも日本武道代表団で派遣される機会があれば、積極的に銃剣道の紹介活動をすることとしている。

また、各種表彰においては、平成24年度に公益社団法人全日本銃剣道連盟から特別功労賞を上萬淳範士九段が、平成28年度には清友真治範士八段が受賞した。さらに、翌年には上萬淳範士九段が武道界最高の武道功労賞を受賞した。

これらの表彰は、長年にわたって県内外において銃剣道の普及振興に地道に取り組んだことが認められたものである。現役の選手達も先人のよき面を見習い、精進することを望みたい。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和50年４月～平成17年３月		相澤　英之
17年４月～		赤沢　亮正

◇理事長

平成４年４月～	15年３月	福井美代二
15年４月～	26年３月	上萬　　淳
26年４月～		瀬尾　憲次

全国大会等での主な成績

〈全日本銃剣道選手権大会・全日本青年銃剣道大会〉

年　度	回　数	チーム・選手名	種　別	成績
平成12年	第31回	陸自米子（柏田祐一、若竹直樹、竹内　登）	団　体	３位
平成12年	第31回	西世古文子	個　人	３位
平成24年	第20回	上井　周平	個　人	５位

〈全国銃剣道わかしゃち大会〉

年　度	回　数	チーム・選手名	種　別	成績
平成21年	第16回	陸自米子（落合　渉、金坂大輔、竹下昌裕）	団　体	３位
平成25年	第20回	陸自米子（筒井大輔、坂本龍一郎、若槻隆志）	団　体	１位

〈中四国地区銃剣道選手権大会〉

年　度	回　数	チーム・選手名	種　別	成績
平成６年	第23回	陸自米子（高松　剛、井上孝行、岡陸士、垣田秀則、上野興宏）	団　体	１位
平成７年	第24回	同　上	団　体	１位
平成18年	第35回	陸自米子（上井周平、古川智之、稲葉匡太、今泉隆一、中原渉）	団　体	１位
平成24年	第41回	陸自米子（上井周平、稲葉匡太、落合渉、竹下昌裕、川端友道）	団　体	１位
平成25年	第42回	落合　渉	個　人	１位

〈全日本少年少女銃剣道錬成大会〉

年　度	区　分	選　手　名	種　別	成績
平成27年	小学５年	松本　樹	個　人	５位
平成29年	中学１年	松本　樹	個　人	５位
平成29年	小学４年	糸原心温	個　人	３位

鳥取県クレー射撃協会

1　県東部・西部の射撃場で選手育成

（1）米子国際射撃場が再び公認射撃場に

米子国際射撃場（西伯郡南部町鴨部）は、昭和52（1977）年に個人経営で開設されて以来、県内唯一の日本クレー射撃協会（以下「日本クレー」）公認射撃場として地方公式大会も開催されていた。

昭和60（1985）年のわかとり国体に向けて昭和58年に鳥取市内に新たに公認射撃場、鳥取クレー射撃場（鳥取市覚寺）が完成し、県協会主催の競技会がこの射撃場で開催されるようになると、昭和61年を最後に米子国際射撃場で競技会が開催されなくなるとともに、日本クレーの公認も継続されることはなかった。

公認射撃場ではなくなっても県西部のシューターに愛用されていたが、当時の射撃場経営者から射撃場閉鎖の意向が示された。これに危機感を抱いた県西部の主要なシューターらが協力して、平成８（1996）年に有限会社米子国際射撃場を設立し、同射撃場の経営を引き継いだ。また、これを機会に再び日本クレーの公認射撃場となり、平成９年からは地方公式大会も開催された。

県協会主催の競技会が県西部の米子国際射撃場と県東部の鳥取クレー射撃場で開催されることとなったことは、その後の県内シューターの育成と競技力の向上に大きな意義があった。

トラップ射撃を楽しむシューター（米子国際射撃場）

（2）鉛弾による環境汚染問題

鳥取クレー射撃場は、昭和58年に鳥取市教育委員会所管のスポーツ施設として開設され、鳥取市クレー射撃協会が委託を受けて運営を行っていた。

平成10年代になると、鉛弾により射撃場周辺の環境が汚染されているとして、全国的に休場を余儀なくされる射撃場が相次いだが、鳥取クレー射撃場も市議会などで問題視され、平成16（2004）年に休場した。

休場後は、２年をかけて場内の表土をはぎ取り新しい土と入れ替える工事が行われた。

平成18（2006）年３月に工事を終えて、鳥取市クレー射撃協会が指定管理者となって営業を再開したが、休場によって遠のいた客足は回復しなかった。さらに、レジャーの多様化や銃刀法等の規制強化などの影響もあってシューター、ハンターの減少は著しく、射撃場利用者は休場前の半数以下となり苦しい経営を余儀なくされた。翌平成19年には借地料支払いの目途が立たず指定管理者を解除されたが、その後、新たな指定管理者が見つからず、平成20（2008）年度から再び休場することとなった。

一方、米子国際射撃場においては、平成20年から21年にかけて(社)日本猟用資材工業会、(社)全日指定射撃場協会及び(社)日本火薬銃砲商組合連合会の３団体による環境問題対策協議会が実施する鉛散弾回収等助成事業を活用して、鉛散弾の回収が行われた。

（3）鳥取クレー射撃場の再整備

里山の荒廃やハンターの減少といったことから、イノシシやシカによる農林業への被害が拡大し、鳥獣被害防止を目的としたハンターの育成、確保が全国的な課題となった。特に鳥取県東部でシカによる被害が深刻な状況に陥り、危機感を

持った県みどり豊かな自然課が中心となって、平成23(2011)年に射撃場再開に向けた協議が始まった。

協議の末、平成26 (2014) 年から鳥取市、岩美町、八頭町、智頭町、若桜町の１市４町により農林水産省と鳥取県の補助を受けて再整備が行われ、平成28（2016）年９月15日に鳥取市の管理運営により新たにオープンした。

この施設整備によって県東部のシューターの育成と競技力の向上が期待されたが、従来のスポーツ施設からハンター育成施設へと目的も変わり、日本クレーの公認を受ける目途もないことから、県内外のシューターにとって利用しにくい施設となったことは残念である。

２　国体で鳥取県選手が活躍

（１）トラップ選手の活躍

平成３（1991）年の石川国体（羽咋市散弾銃射撃場）で国体に初出場した金谷満は、翌平成４年の山形国体（東根クレー射撃場）においてトラップ個人５位に入賞し、昭和60年の地元わかとり国体の池上和典（トラップ５位）以来の個人入賞を果たした。

平成６（1994）年の愛知国体（愛知県総合射撃場）では、安田正信、御古武男、金谷満がトラップ団体７位と健闘し県勢初の団体入賞となった。

さらに、平成７年の福島国体（二本松市総合射撃場）では、金谷がトラップ個人優勝の快挙を達成した。３人が96点で並んだ競射で金谷は24点を撃ち、見事に優勝を勝ち取った。金谷はこの国体を「楽しい射撃を味わうことができた」と振り返った。この優勝により金谷は、翌年、アメリカのアトランタで開催されたプレオリンピック大会に日本代表として派遣された。

続く平成８（1996）年の広島国体は、広島国際射撃場で実施された。トラップ団体は、安田、御古の常連に11年ぶり国体出場の池上和典のメンバーで挑み、見事に６位に入賞。県勢団体成績で過去最高順位と大健闘した。

平成４（1992）年から８（1996）年の５年間で団体、個人あわせて４回の入賞は、県トラップ界の黄金期だったといえよう。

平成10年頃からは、これまでのベテラン勢に加えて藤井暁彦、石口亮尚、小島康男らの若手の台頭により、国体出場メンバーの世代交代が進んだ。平成15（2003）年から19（2007）年まで５年間連続でこの３人で国体に出場し、いずれもトラップ団体10位台と健闘したが入賞まであと一歩であった。

この中で、平成17（2005）年の岡山国体（岡山県クレー射撃場）で、藤井がトラップ個人５位入賞を果たした。

（２）スキートの競技力が向上

平成５（1993）年は、県協会スキートチームにとって記念すべき年となった。国体全県ストレート出場のトラップに対し、スキートは中国ブロックからの出場枠は２県で、中国ブロック大会（ミニ国体）の突破が長年の悲願であった。

この年、既に中国ブロック内ではトップ選手であった服部薫、田子信朗に加えて徐々に実力を付けてきた北尾忍の活躍により、初めてブロック大会を突破し、東四国国体（穴吹クレー射撃場）への出場を果たした。わかとり国体以降、一貫して

福島国体トラップ個人優勝の金谷満（左から２人目）

県スキート界をけん引してきた服部の喜びはひとしおであった。結果は団体20位であったが、この３人を中心にその後のスキート選手の競技力の向上がみられるようになり、平成８（1996）年の広島国体(広島国際射撃場)へもこの３人のメンバーで出場した。

平成12（2000）年から、スキートの国体出場県数が各ブロック１増の32県となり、中国ブロックは３県が国体出場権を得ることとなった。この年の中国ブロック大会は、地元の鳥取クレー射撃場で行われた。１枠増えたことで期待が高まる中、３位でブロック大会を突破し、富山国体（福光射撃場)へは田子､北尾と新たに高橋浩二のメンバーで出場した。この後、平成14（2002）年、16年、17年にもこの３人のメンバーで国体に出場した。

中国ブロック内では常に実力トップクラスで、国体でも入賞まであと一歩の成績が続いていた田子が、平成19（2007）年の秋田国体（秋田総合射撃場)、平成21（2009）年の新潟国体（長岡国際射撃場）で、ともにスキート個人６位入賞を果たした。

スキート団体では、田子、高橋と田辺万聡で挑んだ平成23（2011）年の山口国体（熊毛総合射撃場）で､ついに団体８位で初の入賞を成し遂げた。

山口国体スキート団体8位初入賞
（左から高橋浩二、田子信朗、田辺万聡）

３　組織力と競技力の向上を願って

（１）会員数の減少と競技力の低下

かつては60名以上を擁した本協会の会員数は年々減少の一途を辿り、平成29（2017）年度には24人にまでになった。鳥取、倉吉、米子、境港に各支部を置き、それぞれが15名前後の会員数で、支部ごとに射撃大会を催すなどの活動もされていたが、現在、支部は有名無実となっている。

会員数の減少が顕著になったのは、平成16(2004）年に鳥取クレー射撃場が閉鎖されてからである。閉鎖直後に鳥取支部と倉吉支部の会員数が一挙に減少し、現在、会員の８割以上は県西部在住者となった。

その後も銃刀法規制の強化､レジャーの多様化、景気の低迷などさまざまな要因により、退会こそすれ新たな会員の入会は数年に一人と寂しい限りである。射撃人口の減少は、鳥取県だけではなく全国的な問題となっている。

会員数の減少により、競技力の低下が顕著となった。

クレー射撃も数ある趣味の一つであるから、シューターそれぞれに違う楽しみ方があってよいのだが、特に、国体を目指す会員が減り県内選手による競争が希薄になってしまったこと、新しい会員が入らず旧来からの会員の高齢化が進んだこと、指導者の養成と指導体制の未整備が主な要因と考えられる。

（２）若手・新人選手の発掘を

クレー射撃は、法律による規制の中で限られた銃砲所持者のみに許されたスポーツであるから、新人の発掘は容易ではない。

全国的に銃砲所持者の高齢化と減少が著しい中にあって、有害鳥獣駆除の観点からハンター養成の必要性が叫ばれている。この機運に乗じて、射撃競技に興味を持った新たなシューターが誕生することを期待したい。

国体出場表彰（平成４年～平成29年）

・出場10回表彰

安田　正信（平成６年）
御古　武男（平成11年）
藤井　暁彦（平成20年）

田子　信朗（平成22年）
金谷　　満（平成25年）
高橋　浩二（平成25年）

【歴代会長】

昭和46年～平成19年　　浜崎　芳宏
20年～　21年　　安木　　顕（会長代行）
22年～　24年　　安木　　顕
25年～　　金谷　　満

国民体育大会　出場者・成績（平成４年～平成29年）

【トラップ】

回	開催年	開催地	射撃場	団体順位	監督	選手			個人入賞
47	Ｈ４	山形県	東根	19	安木　顕	安田正信	安木　顕	金谷　満	金谷⑤
48	Ｈ５	東四国	穴吹	35	永井浩爾	安田正信	渡部龍洋	金谷　満	
49	Ｈ６	愛知県	愛知	⑦	安木　顕	安田正信	御古武男	金谷　満	
50	Ｈ７	福島県	二本松	13	安田正信	安田正信	御古武男	金谷　満	金谷①
51	Ｈ８	広島県	広島	⑥	永井浩爾	安田正信	御古武男	池上和典	
52	Ｈ９	大阪府	堺特設	42	安木　顕	安田正信	御古武男	金谷　満	
53	H10	熊本リハ	熊本	18	安田正信	安田正信	石橋広紀	藤井暁彦	
54	H11	熊本県	熊本	11	安田正信	安田正信	御古武男	小島康男	
55	H12	富山県	福光	38	服部　薫	安田正信	御古武男	藤井暁彦	
56	H13	宮城県	宮城	38	安木　顕	藤井暁彦	森　静文	小島康男	
57	H14	高知県	ミロク	30	服部　薫	藤井暁彦	森　静文	石口亮尚	
58	H15	静岡県	静岡	15	安木　顕	藤井暁彦	石口亮尚	小島康男	
59	H16	埼玉県	長瀞	19	服部　薫	藤井暁彦	石口亮尚	小島康男	
60	H17	岡山県	岡山	13	服部　薫	藤井暁彦	石口亮尚	小島康男	藤井⑤
61	H18	兵庫県	岡山	14	阿部俊郎	藤井暁彦	石口亮尚	小島康男	
62	H19	秋田県	秋田	14	北尾　忍	藤井暁彦	石口亮尚	小島康男	
63	H20	大分県	熊本	28	藤井暁彦	藤井暁彦	石口亮尚	金谷　満	
64	H21	新潟県	長岡	35	高橋浩二	岩﨑裕司	景山慎一	阿部俊郎	
65	H22	千葉県	京葉	39	高橋浩二	岩﨑裕司	景山慎一	阿部俊郎	
66	H23	山口県	熊毛	14	高橋浩二	岩﨑裕司	石口亮尚	金谷　満	
67	H24	岐阜県	白川	32	高橋浩二	岩﨑裕司	景山慎一	金谷　満	
68	H25	東京都	成田	33	岩﨑裕司	岩﨑裕司	景山慎一	金谷　満	
69	H26	長崎県	熊本	45	岩﨑裕司	岩﨑裕司	景山慎一	近藤英義	
70	H27	和歌山県	伊勢原	45	岩﨑裕司	岩﨑裕司	景山慎一	近藤英義	
71	H28	岩手県	花巻	44	岩﨑裕司	岩﨑裕司	景山慎一	阿部俊郎	
72	H29	愛媛県	ミロク	31	高橋浩二	岩﨑裕司	近藤英義	金谷　満	

○数字は入賞

国民体育大会　出場者・成績（平成４年～平成29年）

【スキート】

回	開催年	開催地	射撃場	団体順位	監督	選手			個人入賞
48	Ｈ５	東四国	穴吹	20	永井浩爾	服部　薫	田子信朗	北尾　忍	
51	Ｈ８	広島県	広島	20	永井浩爾	服部　薫	田子信朗	北尾　忍	
53	H10	熊本リハ	熊本	19	安田正信	高橋浩二	田子信朗	北尾　忍	
55	H12	富山県	福光	26	服部　薫	高橋浩二	田子信朗	北尾　忍	
57	H14	高知県	ミロク	22	服部　薫	高橋浩二	田子信朗	北尾　忍	
59	H16	埼玉県	長瀞	27	服部　薫	高橋浩二	田子信朗	北尾　忍	
60	H17	岡山県	岡山	14	服部　薫	高橋浩二	田子信朗	北尾　忍	
62	H19	秋田県	秋田	28	北尾　忍	高橋浩二	田子信朗	田辺万聡	田子⑥
64	H21	新潟県	長岡	9	高橋浩二	高橋浩二	田子信朗	田辺万聡	田子⑥
65	H22	千葉県	京葉	13	高橋浩二	高橋浩二	田子信朗	田辺万聡	
66	H23	山口県	熊毛	⑧	高橋浩二	高橋浩二	田子信朗	田辺万聡	
67	H24	岐阜県	白川	17	高橋浩二	高橋浩二	田子信朗	田辺万聡	
72	H29	愛媛県	ミロク	32	高橋浩二	高橋浩二	淺野真一朗	田辺万聡	

○数字は入賞

国際大会　出場者・成績（平成４年～平成29年）

出場年	大会名	開催地	種目	順位	選手	備考
1996年 （平成8年）	アトランタ プレオリンピック大会	アメリカ アトランタ	トラップ 男子	83	金谷　満	
1997年 （平成9年）	アジアクレー射撃選手権大会	ブルネイ	トラップ 男子	33	金谷　満	団体③
2005年 （平成17年）	世界クレー射撃選手権 イタリア大会	イタリア ロナト	トラップ 男子	106	小島康男	
2005年 （平成17年）	アジアクレー射撃選手権大会	タイ バンコク	トラップ 男子	MQS	小島康男	

○数字は入賞

鳥取県なぎなた連盟

平成14年12月、鳥取県立武道館で開催された
皇后盃 第47回全日本なぎなた選手権大会で
富山県選手と戦う鳥取県代表・鳥飼明子選手（左）
＝新日本海新聞社提供

１　会員増加、平成５～９年は最盛期

平成の初めは、昭和60（1985）年のわかとり国体で活躍した選手たちが指導者に成長し、成年選手としても活躍しながら地域の道場、中学校・高校の部活動で子どもたちの指導を活発に行った。その影響もあり、県内の競技人口が最も多くなった時期であった。毎年夏に行われる鳥取県なぎなた大会は多くの参加者に恵まれて大いに盛り上がり、一日中子どもたちの元気な歓声が会場に響き渡った。そこで本連盟では、ジュニア世代のさらなる競技力向上を図るため、昭和62年度から「鳥取県なぎなた春季大会」を毎年２～３月頃に開催することとした。夏と春、年２回の鳥取県大会開催により、なぎなたを愛好する子どもたちの実力を試す機会が増え、上達につながっていった。

この時期の勢いはジュニア世代だけではない。平成４（1992）年10月、山形国体において太田縁（尚徳錬武館）・望月史代（鳥取西高教）チームが成年女子・演技競技８位に入賞したのだ。久しく国体入賞から遠のいていた県勢に、明るいニュースをもたらした。同チームは、４年後の平成８（1996）年５月に大阪府豊中市で開かれた第37回都道府県対抗なぎなた大会でも６位に入賞。稽古に稽古を重ね、円熟味を増した演技が評価されたことは、同チームにとって大きな自信となったことだろう。

２　望月、西日本選手権優勝の快挙

演技競技のみならず、試合競技での活躍も見られたこの頃。平成５（1993）年11月、大阪府豊中市で行われた第36回西日本なぎなた選手権大会の個人試合において、望月史代が並み居る強豪を次々と倒し優勝を飾った。西日本選手権大会での優勝は鳥取県初のことで、大きな快挙であった。

望月は、わかとり国体の少年選手として鳥取県に総合優勝をもたらした立役者の一人。鳥取西高卒業後、当時“向かうところ敵なし”だった名門大阪体育大学のなぎなた部で４年間厳しい修錬を積み、その実力をさらに磨き上げた。元来有していた運動能力の高さも手伝って、平成元（1989）年８月には山形県で開催された全日本学生なぎなた選手権大会で演技競技優勝、団体優勝を果たすなど、数々の戦績を挙げてきた。

大学卒業後は帰郷、母校である鳥取西高なぎなた部顧問として高校生を指導するかたわら、自身も現役選手として日々稽古したのである。しかし、学生のときほど練習時間が取れず、なかなか思うような結果を出せないでいた。そんな歯がゆさの中、ようやく勝ち取った西日本選手権優勝であった。周囲の誰もが「あなたならいつか獲れると思っていた」と、惜しみない賞賛を送った。

３　高校なぎなた界の躍進

平成４（1992）年以降は、高校なぎなた界もめざましい発展を遂げる。鳥取西高なぎなた同好会は、わかとり国体の少年選手育成・強化のために創部され、以来全国優勝・入賞など数多くの戦績を積み重ねてきた。その功績が認められたこと、そして鳥取西高生徒会の熱心な後押しがあり、平成４年、ついに「同好会」から念願の「部」に昇格したのである。当時の部員たちはもちろん、卒業生や保護者などの関係者は喜びに沸いた。

平成５年には、全国高体連になぎなた専門部が設置された。鳥取県高体連にもなぎなた専門部が生まれ、初代専門委員長に鳥取西高なぎなた部顧問の望月が就任した。望月の尽力により、同年６月５日、鳥取城北高剣道場で、鳥取県高校総体なぎなた競技の部が初めて開催された。当該高校生、卒業生らはもちろん、大会運営の応援に駆けつけた本連盟役員・会員も記念すべき第１回大会開催を祝い、これからの高校なぎなた競技の盛り上がりに期待を寄せた。同大会の初代優勝者は、団体の部･鳥取西高、演技の部･山根千幸･信夫直子チーム（鳥取西高）、個人の部・中村理佐（鳥取西高）であった。

続く平成７（1995）年６月には、岡山県・児島高体育館で第１回中国高校なぎなた選手権大会が華々しく開催された。団体の部には鳥取西高が出場。２回戦で出雲北陵高に０－１で惜敗したが、演技競技の部では小村啓子・八幡智子チーム（米子東高）が準優勝を飾った。八幡智子は個人の部でも活躍し、県勢においてただ１人４回戦に進出した。そこで惜しくも優勝した岡山県立勝間田高校の石川直美にメンを取られて負けたが、延長戦３回にまでもつれ込む熱戦であった。

４　地元で全国高校選手権開催

平成７年の夏は、鳥取県を主会場として中国５県で行われた鳥取インターハイが盛大に開催されたが、そのタイミングに合わせて第34回全国高校なぎなた選手権大会が鳥取県で行われることとなった。会場地は、わかとり国体でも大変お世話になった岸本町（現伯耆町）。当時本連盟の会長であった平林澄江、副会長の八幡博挙が岸本町に協力を依頼すると、「町政30周年記念行事の一環として行う」として快諾してくれた。

こうした町を挙げてのバックアップにより、雄大な大山を仰ぎ見る山麓に、全国からなぎなたを愛好する高校生が集い、熱い戦いを繰り広げることができた。

中国高校選手権の勢いをそのままに臨んだ県勢は、団体の部に鳥取西高が出場したが、埼玉県・埼玉栄高に０－４で惜敗、予選リーグを突破することはできなかった。

演技の部の予選リーグには、坂本奈緒・米原晴子チーム（鳥取西高）、森田陽子・松本智子チーム（鳥取西高）、武田綾子･牧野千絵子チーム（鳥取西高）、小村啓子・八幡智子チーム（米子東高）の４チームが出場した。中国高校選手権で活躍した小村・八幡チームは佐賀県・佐賀東高に５－０で、三重県・高田高に３－２で勝利し、県勢で唯一予選リーグを突破した。決勝トーナメント１回戦で東京都・文化学園大学杉並高に０－５で惜敗したものの、基本に忠実な美しい演技で善戦した。

第34回全国高校なぎなた選手権大会を成功に導いたことが評価され、岸本町ならびに本連盟関係者に高体連より感謝状が授与された

個人の部には、鳥取西高の米原晴子、坂本奈緒、鳥取女子高（現鳥取敬愛高）の坂田知津枝、米子東高の八幡智子の４選手が出場した。ここでも八幡が新潟県・北越高の長谷川妙子選手に勝利し、

予選リーグを突破。決勝トーナメント１回戦で大分県・大分女子高の中島麻里選手に一本負けしたが、地元応援団を沸かせる戦いぶりであった。

なおこの大会の運営は、岸本町の多大なる協力はもとより、鳥取インターハイの鳥取県実行委員会が選手・監督の宿泊等の面でサポートしてくれたことが成功につながった。

５　インターハイの正式種目に

平成９（1997）年の京都インターハイからなぎなた競技が正式種目となり、高校なぎなた界の盛り上がりは最高潮に達した。全国高校選手権大会の歴史は長いが、「インターハイ」という位置付けではなかったため、なぎなたを愛好する高校生たちはどこか疎外感を感じていた。それだけに全国各地の高体連なぎなた専門部やなぎなた連盟関係者の尽力によって正式種目になったことは喜ばしく、「インターハイ出場」という大きな目標があることにより、高校生たちのモチベーションが向上していることが確実となったのである。

さらに平成17年度からは全国高校なぎなた選抜大会も開催されるようになり、高校なぎなた界の発展が期待されている。

６　男子への普及

なぎなたは、源流をたどれば平安～江戸時代頃まで戦いの武器として主に男性が扱っていたものであるが、明治以降は婦徳のかん養として、また高等女学校の課外活動として取り組まれていた。その流れから「女子の武道」として普及・発展してきた。第二次世界大戦後、ＧＨＱ（連合国軍総司令部）の指令により武道の全面禁止が実施されたが、まもなく「新しいなぎなた」として復活している。そのときもやはり女子の競技としての印象が強かったのであるが、男子の愛好者も、数は少なくとも全国各地に徐々に増えていった。

鳥取県でも、戦後なぎなたが復活して指導者が育ち、地域の道場での活動が活発になるにつれて、なぎなたを習っている親と一緒に道場に通うようになった者、剣道などほかの武道をやっていたが、長物を扱うなぎなたに興味を持った者など、少しずつ男子の愛好者が増えていった。

各都道府県がそうした地道な普及を重ねる中、平成７年５月に広島県・道後山高原総合体育館で行われた第36回都道府県対抗なぎなた大会において、男子個人競技の部が公開競技として設けられた。全県参加ではないものの、活躍の場所を待ち望んでいた男子選手が日本各地から参集した。男子ならではのスピード感と力強さ、大きな動き、思いもよらぬ多彩な技が繰り広げられ、女子の試合とはひと味違う面白さに観客の目は釘付けになった。

平成７年のこの大会には鳥取県の男子選手の出場はなかったが、平成８年、９年には鳥取県代表として森村仁志（尚徳錬武館）が出場した。なぎなた歴は数年とまだ浅かったが、剣道をしていた経験から飲み込みが早く、試合での攻めや間合いを詰める勘が非常に良い選手であった。また平成12年の大会には、小学校１年生のときから母親とともに稽古に励んできた宮田征宜（福生クラブ）が出場した。幼い頃からの修錬により基本の動きがしっかりと身に付いており、なぎなたの特性を生かした試合を展開したのであった。

７　男子の全日本選手権大会開催

平成13（2001）年からは、全日本男子なぎなた選手権大会として正式に男子の大会が設けられた。女子選手が出場する全日本選手権大会の前日に行われ、記念すべき第１回大会の参加者は60名であった。鳥取県からは前年に引き続き宮田征宜が出場し、３回戦まで勝ち進んでベスト16入りを果たした。以降10年間、宮田は全日本男子選手権に毎年出場し、第10回大会では10年連続出場の賞を授与された。

現在、全国において男子の普及は徐々に進んでおり、近年では大学・高校の課外活動で男子が懸命に稽古する姿を見かけることも珍しくなくなった。男子メインの歴史を歩んできた他競技は女子

への競技普及を進めているところだが、女子の競技として発展してきたなぎなたでは男子への普及が大命題となっており、全日本連盟もそれに注力し、男子のみの研修会、男子ジュニアの強化などが盛んに行われている。また、全国高校選抜大会では男子個人の部が設けられているし、平成28年からは幸村杯全国高校男子なぎなた選手権大会が和歌山県九度山町で毎年開催されている。

このように、全国的には男子への競技普及の動きが活発で、その人数は次第に増えているが、鳥取県においては思うように進んでいないのが現状である。子どもから大人までを数えても男子はわずか５名程度であり、子どもの頃はなぎなたをやっていても、成人してもなお続けるという者はなかなかいないのだ。今いる男子の愛好者を足がかりに「なぎなたは男子もできる」という認識を広めていき、なんとか男子競技者の数を増やしていきたいところである。

８　全日本選手権大会の地元開催

平成12（2000）年９月に鳥取県立武道館が完成し､そのこけら落としの一環として､平成14(2002)年に第２回全日本男子なぎなた選手権大会ならびに皇后盃 第47回全日本なぎなた選手権大会が開催された。

７年ぶりの全国大会誘致、しかも始まったばかりの男子選手権大会、そして皇后盃を頂いている女子の選手権大会の開催とあって、本連盟関係者は円滑な運営ができるよう気を引き締めて準備に臨んだ。

競技役員は、なぎなた経験者・関係者だけでは足らず、米子工業高等専門学校の剣道部の学生が協力をした。そして、全日本連盟の故河盛敬子理事長が、当時既に病に冒されていた体をおして当地に足を運び、弱小な本連盟に対して温かな激励と的確な助言をしてくださったことはありがたいことであった。体調不良に苦しみながらも大会あいさつを述べられ、選手の戦いを観戦されていたそのお姿は今も関係者一同の胸に今でも焼き付いている。

女子に先んじて11月30日に行われた男子選手権では、男子への競技普及・競技力向上の一環として公開競技で行われていた演技競技に、幼い頃からペアを組んでいた湯浅星悟･宮田征宜チーム（福生クラブ）が出場。息の合った力強い演技を披露した。試合競技には宮田が出場し､１回戦で強豪･和歌山県の榊清史選手と対戦した。勢いのある戦いぶりであったが、惜しくも敗退した。

翌日12月１日、女子の全日本選手権には鳥取県代表として鳥飼明子（鳥取海洋センターなぎなたクラブ）が出場した。全日本選手権は３回目の出場で、前年春に第二子を出産したばかりのママさん選手であった。地元開催の晴れ舞台とあって子育ての合間を縫って稽古に励み技を磨いてきたが、１回戦、富山県･野崎容子選手と対戦し、粘ったものの惜敗した｡それでも｢１回でも勝ちたかったが、いい動きができたので悔いはない」と、爽やかに大会を終えた。

男女ともに県代表選手の競技成績は振るわなかったものの、大会では歓迎アトラクションとして地元の少年少女による「がいな太鼓」、郷土芸能「荒神神楽」が披露され､大いに盛り上がった。大会副委員長を務めた八幡久美子理事長は、競技人口の少ない鳥取県で大きな全国大会をやり遂げた喜びに「大会を陰で支えてくださったすべての方に感謝したい」と述べた。

立派な鳥取県立武道館で記念すべき大会に出場できた誇りに胸を張る鳥取県選手団（左から佐々木登志子監督、湯浅星悟選手、宮田征宜選手、鳥飼明子選手）

９　競技人口の増加が課題

高校なぎなた界の発展、全国大会の地元開催、男子選手の活躍など大きな進歩がある一方で、平成10（1998）年以降は本連盟の底力が試される時代であった。平林澄江会長をはじめ、故大塚矩仁枝、田中武子、佐々木登志子ら本連盟の発足メンバーが高齢となり、徐々に第一線から退いていったのである。それに伴い役員も若返りが図られていったが、組織の中心的存在を失った不安が漂っていた。また、思いもよらぬトラブルが起こりそのことに何年も悩まされ、舵を失った船のように荒波に翻弄された日々もあった。

しかしそんな中、わかとり国体当時、岸本町実行委員会として大会を成功に導いた石田保（岸本町収入役）が、平林会長からバトンを引き継いで平成16（2004）年度より会長に就任した。そして、石田会長のもと役員・会員が心を一つにして、階段を一歩一歩上るように組織を立て直していった。

平成30年７月現在の加盟クラブは、鳥取海洋センターなぎなたクラブ、鳥取なぎなたクラブ、尚徳錬武館なぎなた教室、鳥取西高なぎなた部ＯＧ会、鳥取西高校なぎなた部、鳥取敬愛高校なぎなた同好会、福生クラブ、しらさぎ、鳥取県立武道館なぎなた教室の９クラブがあり、大学に進学し、全日本学生なぎなた連盟に所属している大学生も数名ある。

クラブ数はそう変わりないが、会員数は減少する一方で、昨今の子どもたちの武道離れや少子高齢化が進んだことによると思われる。以前は90人程いた会員数は、平成20年前後から徐々に減り始め、現在は50名程度と40％も減っている。どうにか悪い流れを止めようと、鳥取県体育協会等が主催するスポーツ体験会に参加するなどして競技人口を増やす努力をしている。

小さい頃から手塩にかけて育てても、大学生、社会人になると離れていってしまう者がほとんどで、次世代の成年選手や指導者がうまく育っていないのが悩みの種だ。

１０　ジュニアの活躍に光明

そうした逆境の中でも、少数ながら力のあるジュニア世代が育っており、一筋の明るい光が差し込んでいる。近年でいえば平成27(2015)年11月、鳥取県立武道館で開催された中国なぎなた選手権大会で、三中成珠・三中心花チーム（鳥取海洋センターなぎなたクラブ）が演技競技・小学校高学年の部で３位に入賞し、試合競技・小学校高学年の部では男子選手の足穂日向大（鳥取県立武道館なぎなた教室）がベスト４入り、中学男子の部では足穂春日（鳥取県立武道館なぎなた教室）が２位に入賞した。翌平成28年の同大会では、三中心花・足穂日向大チームが演技競技・小学校高学年の部で優勝し、小学校低学年の部で大野寧希・山田素子チーム（鳥取県立武道館なぎなた教室）が２位、中学校の部で藤原あかり・片山千那チーム（鳥取海洋センターなぎなたクラブ）が４位の成績を挙げた。さらに平成29年の同大会では、試合競技・中学男子の部で足穂日向大が悲願の優勝を成し遂げた。

ジュニアにこのような好成績が見られるようになったのは、なぎなたが好きで、上手になりたい、強くなりたいと地道に稽古を積み重ねる子どもたちと、その思いに応えて熱心に指導する各道場指導者の奮励の結実というほかない。この機運が続いていくよう今後も努力を続けていきたい。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和52年８月～平成16年３月		平林　澄江
16年４月～	24年３月	石田　　保
24年４月～		八幡久美子

◇理事長

昭和52年８月～平成８年３月		大塚矩仁枝
８年４月～	10年３月	佐々木登志子
10年４月～	24年３月	八幡久美子
24年４月～	26年３月	宮田　挙子
26年４月～		鳥飼　明子

【全国大会の入賞記録】

年度	開催年月日	大会名（会場）	種別 種目	選　手　名	成績
昭和63	昭和63年10月16～18日	第43回国民体育大会 （京都府・木津町中央体育館）	少年女子 演技競技	森原芳子・初鹿野多恵 チーム（鳥取西高）	８位
平成４	平成４年10月５～７日	第47回国民体育大会 （山形県・山形市蔵王体育館）	成年女子 演技競技	太田縁・望月史代 チーム	８位
平成５	平成５年11月３日	第36回西日本なぎなた選手権大会 （大阪府・豊中市立豊中体育館）	成年女子 個人試合	望月史代	優勝
平成８	平成８年５月25～26日	第37回都道府県対抗なぎなた大会 （大阪府・豊中市立千里体育館）	成年女子 演技競技	太田縁・望月史代 チーム	６位

【県内開催の全国大会】

年度	開催年月日	大　会　名	会　場
平成７	平成７年８月８～10日	第34回全国高等学校なぎなた選手権大会	岸本町民体育館
平成14	平成14年11月30日	第２回全日本男子なぎなた選手権大会	鳥取県立武道館
平成14	平成14年12月１日	皇后盃 第47回全日本なぎなた選手権大会	鳥取県立武道館

鳥取県ボウリング連盟

レジャーとして急速に普及したボウリングであるが、ボウリング人口が増えてくるに従って技術面にも高い関心が持たれるようになり、スポーツとしてのボウリング（スポーツボウリング）への脱皮が図られるようになった。背景には、オイルショック後の不況とボウリング熱の冷え込みがある。最盛期には県内に公認競技場だけでも９カ所、少数レーンの競技場を含めると20カ所近くもあったボウリング場だが、昭和50年代半ばには、公認競技場は米子市のクイーンボウル１カ所だけという事態に陥った。

一方で、スポーツボウリングとしての再出発を図る努力が続けられ、昭和57（1982）年に県体育協会に仮加盟、翌58年３月に正式加盟となり、同時に全国組織が日本体育協会に加盟した。平成元（1989）年には少年の部が国体の正式種目になり、その後、国体では成年男女など多くの種目が実施されてきた。平成30年現在、県内の公認競技場は鳥取市の鳥取スターボウル、米子市のクイーンボウル、YSPボウルの３施設が公認競技場として運営している。

現在、公認競技場に所属してスポーツボウリングに取り組んでいる県連盟の会員は、小学生から成人まで合わせて約100名である。会員数が少ない中、県連盟では国体をはじめ全国規模の大会へも積極的な挑戦を続け、国体などでの入賞者を出している。他県に比べ会員数に格段の差があり、力量にも一歩及ばない面があるのが実情である。

会員数の増加、中でも、現状は10人前後しかいないジュニア層（小学生）を含めた少年の育成が急務となっている。かつてのように、中高校生を対象にしたボウリング教室の実施に取り組むことが大きな課題となっている。

主な大会の入賞者はつぎのとおりである。

平成７年　寺西　　覚　　第50回国体成年男子２部個人２位

平成13年　松波　徳仁　第56回国体成年男子ミドルの部５位
　　坂田　和子　第56回国体成年女子ハイミドルの部５位
平成19年　坂田　和子　日本スポーツマスターズ個人総合1位
　　加藤　幸雄　全日本シニア個人総合２位
　　加藤　幸雄　アジアシニア個人二人組３位
平成21年　加藤　幸雄　アジアシニア個人二人組１位、個人戦２位、四人組３位、個人総合２位
平成22年　加藤　幸雄　全国都道府県個人総合１位
　　加藤　幸雄　西日本シニア個人総合１位
平成23年　加藤　幸雄　全日本選手権マスターズ６位
　　新井　正雄　全日本シニア個人総合２位
　　新井　正雄　西日本シニア個人２位
　　加藤　幸雄　アジアシニア個人二人組３位、個人戦２位、四人組１位
平成24年　角　真理子　第62回国体成年女子マスターズの部２位
　　新井　正雄　全日本シニア個人戦３位
　　加藤　幸雄　西日本シニア個人戦２位
　　浦川　澪奈　全日本中学校選手権個人総合６位
平成25年　久末　達男、新井　正雄　日本スポーツマスターズ二人組２位
　　加藤　幸雄、柳原　寿史、久末　達男、新井　正雄　日本スポーツマスターズ四人組７位
平成26年　新井　正雄　全日本シニア個人戦２位
　　加藤　幸雄　アジアシニア四人組１位
平成28年　加藤　幸雄　西日本シニア個人戦２位
　　浦川　澪奈　全日本高校選手権個人総合２位
平成29年　浦川　澪奈　第62回国体少年女子個人１位
　　浦川　澪奈、浦川　莉音　第62回国体少年女子団体２位
平成30年　新井　正雄　全日本シニア個人戦３位

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年～平成14年　井上万吉男
15年～　18年　廣江　　弐
19年～　稲田　寿久

◇理事長

昭和62年～平成６年　加藤　　勉
７年～　13年　加藤　幸雄
14年～　15年　森　　亮輔
16年～　加藤　幸雄

鳥取県ゴルフ協会

明治期にヨーロッパから日本に渡ってきた代表的なスポーツとしてサッカー・テニスとともにゴルフがあった。

国内で最初にゴルフ場としてオープンしたのは明治34（1901）年に４ホールで開場した神戸ゴルフ倶楽部であり、初めてゴルフ競技が開催されたのは明治36（1903）年。場所は同じく９ホールで行われた神戸ゴルフ倶楽部のクラブ競技とされている。

オリンピックでは1900年のパリ大会、1904年のセントルイス大会で開催されたのち競技種目から外れるも、2016年リオ大会で復活し、2020年東京大会では霞ヶ関カンツリー倶楽部で開催される予定である。

鳥取県ゴルフ協会は、その前身である鳥取県ゴルフ連盟が平成８（1996）年４月に発足し、同時に県体育協会に加入し、平成20（2008）年に鳥取県ゴルフ協会と改称した。それにともない県内のアマチュア競技者を統括し、これを代表する団体としてジュニアの育成及びゴルフの健全な育成、発展に努めているところである。

鳥取県ゴルフ協会は一般財団法人中国ゴルフ連盟に加盟し地区予選となる競技会、国体選手選考となる競技会、また社会福祉協議会と連携したシルバー競技会、ジュニア育成のゴルフスクールなどを主催し、鳥取県内のゴルフの普及活動を続けている。

その中でも鳥取県ゴルフ選手権は昭和46(1971)年に始まり歴史も古く、鳥取県を代表する競技会となっている。大会には県内のトップアマが参加、文字通り県内一を争う大会として定着しており、歴代優勝者はベテランが名を連ねる。その中で、平成に入ると中高校生ら若手も活躍を始めた。平成11（1999）年の大会では、草瀬大志（湊山中２年）が並み居るベテラン実力者を押しのけて、大会史上初めて中学生チャンピオンとなった。３位も中学生の波当根春道であった。（歴代優勝者は文末に記載）

平成11（1999）年第54回国民体育大会からゴルフ競技が開催されることとなり、ゴルフが国民スポーツとして認知されるようになった。鳥取県の国民体育大会における成績は、平成22（2010）年第65回千葉国体で成年男子７位・女子８位、翌年の平成23（2011）年第66回山口国体では成年男子個人で桐谷龍平選手が優勝・女子６位と好成績を収めた。

中高校生時代に国内大会や世界大会で活躍する選手も現れるようになった。先述の草瀬は高校２年の時、世界ジュニアゴルフ選手権日本代表に選抜されたほか、石川裕貴（境港市）は全国高校選手権で２連覇を成し遂げた。これに先立って、波当根弓彦は全日本学生チャンピオンになった。

こうして活躍した若手の中からは、石原端子、波当根兄弟、石川裕貴、草瀬大志、永田あおい、鈴木愛らがプロ入りしてツアーなどで活躍している。鈴木愛は平成29（2017）年度の年間賞金王（賞金女王）に輝き、賞金女王の最年少記録を更新したことは記憶に新しい。

【歴代会長】

平成８年～19年	坂口平兵衛
20年～22年	河上　滋
23年～	安住　庸雄

◇鳥取県ゴルフ選手権歴代優勝者◇

開催年	氏　名	所　属
昭和46年	市谷　甚衛	大　山
47年	市谷　甚衛	大　山
48年	藤沢　友輔	米　子
49年	市谷　甚衛	大　山
50年	豊田　翔二	大　山
51年	米沢栄三郎	大　山
52年	豊田　翔二	大　山
53年	田渕　義夫	大　山
54年	持田　広行	平　原
55年	豊田　翔二	大　山
56年	豊田　翔二	大　山
57年	濵納　一志	吉　岡
58年	濵納　一志	吉　岡
59年	間崎　一徳	鳥　取
60年	藤岡　治信	三　朝
61年	豊田　翔二	大　山
62年	濵納　一志	吉　岡
63年	持田　広行	平　原
平成元年	濵納　一志	吉　岡
２年	豊田　翔二	大　山
３年	濵納　一志	吉　岡
４年	朝田　脩三	大　山
５年	藤瀬　尊史	平　原
６年	藤瀬　雅史	グリーン
７年	濵納　一志	吉　岡
８年	濵納　一志	吉　岡
９年	高垣　武志	鳥　取
10年	持田　広行	平　原
11年	草瀬　大志	グリーン
12年	山本　和明	平　原
13年	澤田　英巳	平　原
14年	澤田　英巳	平　原
15年	持田　広行	平　原
16年	澤田　英巳	平　原
17年	澤田　英巳	平　原
18年	桐谷　龍平	グリーン
19年	野口　正史	朝　日
20年	小谷　一弘	三　朝
21年	桐谷　龍平	グリーン
22年	小谷　一弘	三　朝
23年	小谷　一弘	三　朝
24年	桐谷　龍平	グリーン
25年	小谷　一弘	吉　岡
26年	齊藤　拳汰	協　会
27年	桐谷　龍平	アーク
28年	米原　海斗	アーク
29年	桐谷　龍平	アーク
30年	桐谷　龍平	アーク

鳥取県綱引連盟

1　連盟の設立

昭和55（1980）年に日本綱引連盟が結成され、国際連盟の正式ルールによる綱引競技を取り入れ、昭和56（1981）年２月、東京在住の県人会を中心に第１回全日本綱引選手権大会として､東京･晴海の国際貿易センターで開催された。

この大会は、全国にテレビで放映され大きな反響を呼び、我が国における綱引きブームの発端となった。

これがきっかけとなり、昭和59（1984）年４月12日に鳥取県綱引連盟が設立され、平成４年５月に鳥取県体育協会に加盟して現在に至っている。

2　各種大会と記録

（1）全日本綱引選手権大会

鳥取県綱引連盟からの本大会の出場は、第４回大会、昭和59（1984）年から第33回大会まで男子チームが連続出場した。一方女子チームは、第５回大会（昭和60（1985）年）から第23回大会まで連続出場したが、それ以降女子チームが消滅し出場がなくなってしまった。何とか女子チームの結成をと努力をしてきたが、現在まで結成チームが無い状態が続いている。

大会結果でみれば、男子の倉吉打吹タガース台風８号は、過去３位が２回、ベスト８が10回、大栄Ｔｃはベスト８が１回と好成績を残し、全国に強豪として名を残している。一方女子の打吹レディースは、過去優勝１回、準優勝１回、３位２回と男子を上回る成績を残している。

（2）KOBECUP及びおおさかシティ全国選抜綱引大会

昭和62（1987）年から平成26（2014）年まで男子の倉吉打吹タガース台風８号が出場し、優勝２回、準優勝２回、３位３回、一方女子の打吹レディースは平成３（1991）年から平成13（2001）年まで出場、優勝１回、準優勝１回、３位１回と男子女子とも好成績を残している。

（3）全日本軽量級綱引選手権大会

平成６（1994）年から平成11（1999）年まで男子の倉吉打吹タガース台風８号が出場し、優勝１回、準優勝１回、一方女子の打吹レデイースは、平成６(1994)年から平成12(2000)年まで出場し、準優勝１回と男子女子とも好成績を残している。

（4）中国綱引選手権大会

昭和62(1987)年第１回大会から男子が出場し、倉吉打吹タガース台風８号が優勝18回、準優勝３回、３位６回、フェニックスが優勝１回、３位３回、一方女子の打吹レデイースは、優勝４回、準優勝２回、３位３回とレベルの高い成績を残している。

（5）国体の公開競技

第70回2015紀の国わかやま国体、第71回2016希望郷岩手国体､第72回2017愛顔つなぐえひめ国体、第73回福井しあわせ元気国体に出場した。

平成27（2015）年から国体の公開競技が本大会１カ月前に行われることとなった。綱引公開競技はブロック代表と開催県合わせて10チームの２ブロックによる予選リーグと決勝トーナメント方式で実施されており、鳥取県は中国ブロック代表として第70回大会から４年連続出場し、ブロック代表の競技でレベルが高く、平成30（2018）年の第73回福井しあわせ国体で見事４位を勝ち取った。

（6）全国スポーツ・レクリエーション祭

全国スポーツ・レクリエーション祭には、第３回平成２（1890）年から第24回平成23（2011）年の大会最後の年まで参加した。なかでも１位グループでの優勝３回（平成18年鳥取大会含む）と輝かしい成績を残している。

3　今後の課題・方策

鳥取県綱引選手権大会が始まった昭和59年の大会の出場チーム数は、男子44チーム、女子17チー

ム合計61チームの盛大な大会で、その後も数多くのチームが大会を盛り上げていたが、年がたつにつれテレビ放映もなくなりチーム数も激減し、現在は男子の３チームと寂しい大会となってしまった。綱引連盟役員一同参加を呼びかけているが、なかなか出場チームが増えなくて苦慮している現状であり、各地区で行われている大会等に積極的に参加し、指導講習に努め綱引チームの拡大を図りたい。

○表彰等

平成６（1994）年　全日本綱引選手権大会10年連続出場（男子倉吉打吹タガース台風８号）
平成９（1997）年　倉吉市第１号市民栄誉賞受賞（打吹レディース）
平成10（1998）年　平成10年度鳥取県教育表彰（男子倉吉打吹タガース台風８号）

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和59年～平成６年	藤井　敏郎
７年～　12年	松田　好哉
13年～　24年	広江　　弐
25年～　28年	尾澤　三夫
29年～	松田　　正

◇理事長

昭和59年～平成10年	小杉　　光
11年～　14年	岸田守之助
15年～　24年	柴田　利幸
25年～	川福　正光

鳥取県少林寺拳法連盟

少林寺拳法は、宗道臣が1947（昭和22）年に香川県の多度津で創始した教育的内容の深い比較的新しい武道である。

鳥取県の少林寺拳法の歴史は、鳥取大学に入学した学生が、愛媛県で支部長をしていた合田清一（2015年逝去・大範士九段）を監督として迎え、1966（昭和41）年に鳥取大学支部として発足したのが始まりである。

合田は土曜日の夜から日曜日の朝にかけ、愛媛県から車で駆け付け指導をしていたということである。

1971（昭和46）年に関西で修行した中村俊雄が米子支部を設立し、1972（昭和47）年には大学を卒業して帰省した松下俊長（駒沢大学少林寺拳法部創始者）が、鳥取中部支部を設立した。

その後、現在までに延べ24の支部が設立され、一時期県内では400名以上の拳士が修行していた。

現在では諸般の事情により、支部数・拳士数ともに半減している。

連合体としては、当初1972年に鳥取・島根・兵庫北で少林寺拳法山陰連合として発足した。

1979（昭和54）年に兵庫北を分離し鳥取・島根で山陰少林寺拳法連盟に移行した。

1990（平成２）年には鳥取県少林寺拳法協会を設立し、1992（平成４）年、鳥取県体育協会に加盟した。

この頃から鳥取県は鳥取県連盟として山陰連盟から独立したかったが、島根県の支部数が少なく島根県単独では島根の連合体を設立できなかったため、鳥取県の独立は見送ってきた。

ようやく2000（平成12）年に山陰少林寺拳法連盟を解消して鳥取と島根が分離し、単県の鳥取県少林寺拳法連盟となった。

毎年県大会を開催しているが、これは全国大会の予選も兼ねており、優勝者は全国大会に出場することができた。

全国大会は持ち回りで行われており、主なところでは、東京武道館・大阪城ホール・福岡ドーム・名古屋ドーム等で行われ、会場は全国の拳士で満席となった。残念ながら、鳥取県の拳士の技術は全国レベルに達しておらず、全国大会の入賞者は今まで出ていない。

現在、武道団体では全国的に人数が減少しており、少林寺拳法でも拳士数の増加が今後の大きな課題となっている。

教育的内容の多い少林寺拳法では、中学の武道必修化授業に力を入れており、全国で50近くの中学で授業を行っているが、まだ剣道・柔道には遠く及ばない。

鳥取県連盟でも各地区の中学校の授業に取り入れてもらうべく、資料を本部から取り寄せ準備中である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

～平成13年		石破　茂
14年～	17年	（空　席）
18年～	25年３月	広江　弐
25年４月～		赤沢　亮正

◇理事長

～平成５年		木村　弘史
６年～	10年	松下　俊長
11年～	14年	津田　勝
15年～	22年	大田　勝則
23年～		土堂　誠

鳥取県少林寺拳法連盟支部等設立の歩み

年　次	支部の設立等	演武会	全国大会・地区大会
1966年 （昭和41年）	鳥取大学支部		
1971年	米子支部 米子高専支部		
1972年	鳥取中部支部 山陰地区連合発足		
1973年	米子東部支部	第１回山陰地区連合会公開演武会	
1974年		第２回山陰地区演武会	
1975年		第３回山陰地区演武会	
1977年	米子東部支部を米子東支部に改名	第４回山陰地区演武会	少林寺拳法創立30周年記念全国大会（日本武道館） 第１回山陰地区大会
1978年	鳥取国府支部	第５回山陰地区演武会	第２回鳥取県大会
1979年	山陰地区連合会を鳥取・島根と兵庫北部区に分けて活動開始。 鳥取・島根を山陰連盟として移行	第６回山陰地区演武会	第３回鳥取県大会
1980年	鳥取義和支部 鳥取国府支部を鳥取白蓮支部に改名 境港支部 美保基地支部	第７回山陰地区演武会	全国大会（日本武道館）
1981年		第８回山陰地区演武会	全国大会（日本武道館）
1982年	鳥取湖山支部	第９回山陰地区演武会	全国大会（静岡県）
1983年	鳥取倉吉支部 鳥取義和支部と鳥取白蓮支部を合併し、鳥取義和白蓮支部を開設	第10回山陰地区演武会	米子東支部設立10周年記念大会 全国大会（大阪市）
1984年	鳥取気高支部	第11回山陰地区演武会	全国大会（愛知県）

1985年	NTT鳥取支部 鳥取淀江支部	第12回山陰地区演武会	全国大会（国際親善大会） （日本武道館）
1986年	鳥取東支部 米子西スポーツ少年団 米子南支部	第13回山陰地区演武会	
1987年	鳥取西部・鳥取東部・島根ブロック体制開始 米子西スポーツ少年団支部を米子西支部に改名	第14回山陰地区演武会	少林寺拳法創立30周年記念全国大会（日本武道館）
1988年	米子支部を米子後藤ヶ丘支部	第15回山陰地区演武会	全国大会（香川県）
1989年 （平成元年）		第16回山陰地区演武会	
1990年	鳥取県少林寺拳法協会発足	第17回山陰地区演武会	第１回鳥取東部ブロック大会 全国大会（京都府）
1991年	少林寺武道専門学校山陰地方開校	第18回山陰地区演武会	第２回東部ブロック大会兼鳥取市大会 全国大会（奈良市）
1992年	鳥取県少林寺拳法協会、鳥取県体育協会へ加盟	第19回山陰地区演武会	第３回東部ブロック大会兼鳥取市大会 全国大会（日本武道館）
1993年		第20回山陰地区演武会	第４回東部ブロック大会兼鳥取市大会 山陰連盟設立20周年記念大会 全国大会（大阪市）
1994年		第21回山陰地区演武会	全国大会（千葉市）
1995年	鳥取県警支部	第22回山陰地区演武会	全国大会（福岡市）
1996年		第23回山陰地区演武会	
1997年		第24回山陰地区演武会	国際大会97・創設50周年記念大会（日本武道館）
1998年 （平成10年）		山陰少林寺拳法連盟設立25周年記念大会	全国大会（神戸市）
1999年	鳥取西支部	第26回山陰地区演武会	全国大会（新潟市）
2000年	鳥取県連盟設立 鳥取義和支部休部		鳥取県大会 全国大会（日本武道館）
2001年	美保基地支部休部		鳥取県大会 国際大会（パリ）
2002年			鳥取県大会 全国大会（大阪市）
2003年	倉吉サンピア支部 伯因梨花スポーツ少年団 鳥取県警支部休部		鳥取県大会 全国大会（仙台市）
2004年	米子祇園支部		鳥取県大会 全国大会（名古屋市）
2005年		米子市錬成大会 日本武道館主催少年錬成大会 （県立武道館）	鳥取県大会 全国大会（福井市）
2006年	倉吉サンピア支部を鳥取倉吉支部に統合		鳥取県大会 全国大会（札幌市）
2007年		県立武道館主催鳥取県青少年武道大会	鳥取県大会 全国大会（日本武道館）

2008年 （平成20年）	鳥取大学医学部支部 鳥取浜坂支部		鳥取県大会 全国大会（岡山市）
2009年			鳥取県大会 全国大会（青森市）
2010年			鳥取県大会
2011年	鳥取県淀江支部休部		鳥取県大会
2012年			鳥取県大会 全国大会（横浜市）
2013年			鳥取県大会 全国大会（大阪市）
2014年	鳥取気高支部休部 鳥取倉吉支部休部		鳥取県大会 全国大会（さいたま市）
2015年	鳥取気高支部再開		鳥取県大会 全国大会（京都市）
2016年			鳥取県大会 全国大会（別府市）
2017年			鳥取県大会 少林寺世界大会（カリフォルニア）
2018年 （平成30年）	鳥取中部支部休部		鳥取県大会 全国大会（高崎市）

鳥取県ゲートボール協会

1　ゲートボールの始まり

ゲートボールは古くからヨーロッパで親しまれてきたスポーツ「クロッケー」をヒントに、昭和22（1947）年に北海道芽室町の鈴木英二が、青少年育成のために考案した日本生まれのスポーツである。

今では日本はもとより、世界50カ国以上の国や地域で1,000万人以上が楽しむ、世界的なスポーツに成長している。

2　鳥取県ゲートボール協会のあゆみ

昭和54（1979）年12月、鳥取市などの協会が設立され、翌55年７月に鳥取市、倉吉市、境港市の協会で、鳥取県ゲートボール協会が発足した。

昭和60（1985）年、県下39市町村すべての協会が県協会に加わって全県組織となり、平成４（1992）年５月、県体育協会に加盟した。この年、会員数5,569名（過去最高）となる。しかし、バブル崩壊後会員数が激減し、平成30（2018）年には会員数は400名弱となってしまっている。

3　活動状況

協会設立後から、県下各支部の大会はもとより県大会を年数回開催している。また、毎年行われている日本連合主催の日本選手権･全国選抜大会･中国選手権大会等に参加している。

平成16（2004）年度には文部科学省の「スポーツ優良団体表彰」を受賞した。

日韓生涯スポーツ交流大会は、平成27（2015）年に鳥取市で開かれ、参加人数は18名であった、また､平成28（2016）年には韓国原州市で開かれ、16名が参加した。

平成26年９月の世界大会（開催地・新潟市）に出場した「上昇気流チーム」は､準優勝を勝ち取っ

た。また、翌年８月には国体公開競技に参加（中国地区で１チーム）した。同じく平成29（2017）年の愛媛国体にも参加するなど活動している。

これ以外にも中国から招待を受けた中国交流大会に参加するなど活動を広げている。

鳥取県ゲートボール協会成績

〈文部科学大臣杯　全日本ゲートボール選手権〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2016年	松山市	上昇気流		５名
2017年	芽室市	上昇気流		５名
2018年	浦安市	上昇気流		５名

〈笹川良一杯　全国選抜大会〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2017年	岡山市	津田クラブ	３位	５名
2018年	指宿市	鳥取女子		５名

〈世界選手権大会〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2014年	新潟県	上昇気流	準優勝	５名

〈全国福祉祭　ねんりんピック大会〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2010年	熊本県	佐陀GB		５名
2016年	山口県	鳥取		５名
2017年	長崎県	富益		５名

〈国民体育大会（公開競技）〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2018年	福井県	鳥取県		６名

〈中国選手権大会〉

開催年	場所	チーム	成績	人数
2007年	岡山県	上昇気流	優勝	５名
2008年	鳥取県	上昇気流	準優勝	５名
2011年	広島県	上昇気流	３位	５名
2012年	岡山県	上昇気流	優勝	５名
2013年	鳥取県	小田タンポポ	優勝	５名
2014年	島根県	米子クローバーZ	３位	５名
2016年	広島県	湯田クラブ	優勝	５名
2017年	岡山県	湯田クラブ	準優勝	５名

【歴代会長・理事長】

◇会長

～平成９年	小谷　金夫
10年～　15年	杉本　益信
16年～　18年	石原　知治
19年～　29年	中村孝太郎
30年～	坂本　喜好

◇理事長

～平成12年	矢野　聨蔵
13年	石川　寿雄
14年～　17年	太田　宗一
18年～　27年	西村　為吉
28年～　29年	坂本　喜好
30年～	出村　昭一

鳥取県武術太極拳連盟

スポレク鳥取2006全国大会のアトラクション（カンフー体操）に参加した用瀬町の子どもたち
（平成18年10月、用瀬中学校体育館）

1　「武術太極拳」の特色

太極拳の起源は中国の明代末、清代初め（1640年代）といわれる。ただし「陰陽思想」の哲理に基づく運動でもあるので、紀元前400 ～ 600年頃から連綿と伝わってきた。

日本での普及は、昭和62（1987）年の日本武術太極拳連盟の創立を嚆矢とする。社会的意義は①多世代交流型スポーツ②地域普及型スポーツ③高齢者の介護予防体操―の３点である。武術太極拳というのは、青少年対象の「カンフー」（武術）と、力を使わずリラックスして行う「生涯スポーツ」（太極拳）という二面性を追求したものである。（説明の内容は公益社団法人日本武術太極拳連盟の資料）

2　鳥取県での普及の沿革

鳥取県武術太極拳連盟の発足は、平成９（1997）年である。初代会長は、岩美町長・元参院議員の吉田達男日中友好協会副会長であった。都道府県連盟としては全国46番目の設立。副会長は小玉正猛（県議会議員）、松本昭夫（北条町議会議員）＝いずれも当時。理事長は前田慶一郎（鳥取太極拳協会）、事務局長は山田優明（現中部太極拳協会）であった。設立時加盟団体は鳥取太極拳協会、紅友会連星クラブ（現太極拳連星クラブ）、北条太極拳協会（現中部太極拳協会）、米子太極拳協会（現米子気功太極拳協会）の４団体約100名であった。

県内活動の開始は、平成10年（1998）年11月15日の第一回鳥取県武術太極拳交流大会（会場は鳥取市寺町のNTT体育館、参加６団体）だった。この交流大会で特に記すべき事柄は、３名の全国レベルの中国武術家が来賓演武を披露してくれたことだった。全国の水準を会員が目の当たりにすることができたのは大きな成果であった。演武を披露した来賓は谷川大（現日本武術太極拳連盟伝統武術委員会委員長）、勝部典子（現日本武術太

極拳連盟ジュニア強化コーチ)、前原剛彦（現千葉太極武術院講師）の３名であった。これらの優れた中国武術家の指導で鳥取県の太極拳の基礎固めができたのは大きな僥倖であった。日本の太極拳の黎明期にいち早く昭和63（1988）年に東京中国武術協会が結成されたのだが、３名はその創設メンバーであり、また鳥取県連盟の前田理事長も学生時代にその一翼を担ったという前史があったのである。３名が来賓演武として紹介した内容は、谷川大が戳脚・戳脚翻子・陳式剣、勝部典子が南拳・剣術、前原剛彦が八極拳などの中国伝統武術であった。

以降､この交流大会は毎年開催しているが､ジュニアの参加が少ないのが現状である。

３　競技活動

全国競技大会として、春に「全日本武術太極拳競技大会」(2016年まで）及び「JOCジュニアオリンピックカップ」、夏に「全日本武術太極拳選手権大会」がそれぞれに開催されている。生涯スポーツの全国大会としては、厚生労働省等の主催による全国健康福祉祭（ねんりんピック）で正式種目として「太極拳交流大会」が行われている。これらの大会への参加予選として毎年秋に県連盟で選抜大会を実施している。

大きな競技実績としては、前田慶一郎が「全日本武術太極拳選手権大会」において、以下のとおり成果を継続的に挙げている。

第７回平成２（1990）年～15回　呉式太極拳部門１位
第16回　同部門２位
第17回～24回　同部門１位
第25回、28回、29回　伝統器械部門３位
第30回　同部門１位

平成13（2001）年には国際大会である第１回アジアジュニア選手権がベトナム・ハノイ市で開催され、武信二三枝（大栄太極拳協会）がA組・女子太極拳で優勝し金メダルを獲得している。

また、毎年５府県（大阪、京都、愛知、神奈川、兵庫）持ち回りで開催される「JOCジュニアオリンピックカップ」では、第９回に太極拳Bで１位、第10回は同部門２位、第11回には総合太極拳で２位の成績であった。

４　県連普及活動

平成18（2006）年に、鳥取県で開催された「全国スポレク祭」で、鳥取市用瀬町の用瀬中学校体育館で武術太極拳大会を主管した。

県内活動も公益社団法人日本武術太極拳連盟の行事参加を目標としたものだが、その全国大会は主に下記の５大会である。①全日本武術太極拳選手権大会(年１回夏)。②JOCジュニアオリンピックカップ(毎年春)。③ねんりんピック（毎年秋)。2023年第36回大会は鳥取で開催。④中国ブロックジュニア武術太極拳交流競技大会（2018年より毎年夏)。⑤国民体育大会(2019年茨城国体より「公開種目」として武術太極拳も参加)。

前田慶一郎県連盟理事長が中国ブロックジュニア普及委員長を務めており、県連盟も大きな目標として視野に入れてきた。

2019年現在の加盟団体は15団体219名で、役員は、会長藤井一博（県議会議員)、副会長松本昭夫（北栄町長)、理事長前田慶一郎、事務局長山田優明である。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成13年～	21年	小玉　正猛
22年～	26年	石村　祐輔
28年～		藤井　一博

◇理事長

平成13年～	前田慶一郎

鳥取県グラウンド・ゴルフ協会

グラウンド・ゴルフ国際大会YURIHAMA2019　湯梨浜町泊「潮風の丘とまり」（令和元年5月）

1　小さな村から誕生

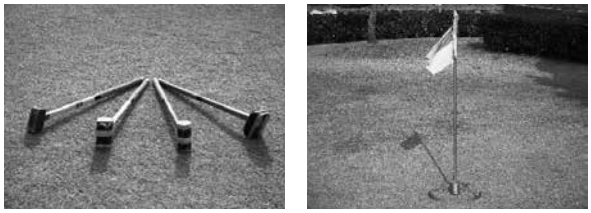
グラウンド・ゴルフは、昭和57（1982）年、鳥取県のほぼ真ん中にある人口3500人の小さな村である東伯郡泊村の当時社会教育主事（スポーツ担当）が考案して誕生した。当時の村長であった宮脇三巳氏（故人）が生涯スポーツ活動推進事業の情報を得て鳥取県や文部省（当時）にお願いし、この事業の指定市町村50の中に加えてもらった。

第24回発祥地大会での様子
（湯梨浜町泊「潮風の丘とまり」）

この事業は、地域の少年及び高齢者に対し、それぞれに適したスポーツ活動を育成・推進しようとするものだった。

2　専門委員会の設置と用具の開発

大阪教育大学の島崎仁・助教授（当時、故人）の指導の下、泊村生涯スポーツ活動推進専門委員



開発当初のクラブ（左）とホールポスト（右）

現在のクラブ、ボール、ホールポスト

会を設立し、新競技の考案と同時に用具の開発にも着手した。

試行錯誤の結果、現在の競技ルール、クラブ、ホールポスト、ボールが誕生したのである。

３　協会設立の経緯

専門委員会において、全国的な協会設立へ向けて具体案を協議していった。その結果、昭和58（1983）年７月９日に鳥取県グラウンド・ゴルフ協会が発足した。｛会長・三枝俊作（故人）泊村教育長｝その後、各市町村の教育委員会及び体育指導委員会の協力により、実技講習会の開催などを通して愛好者が誕生し、各市町村に協会が次々と設立された。

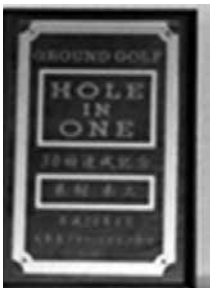
また、この頃から新聞、テレビなどのマスコミによる全国各地への紹介が続き、グラウンド・ゴルフへの関心が増していった。全国への普及活動も本格的にスタートしたグラウンド・ゴルフは、ルールが簡単であることに最も好評を得ており、この新スポーツの大きな特徴となっている。どこでも出来て、準備も簡単で、時間制限もなく、高度な技術もいらないという面から「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる楽しいゲームの特徴が備わっているといえる。

４　会員減少傾向と委員会活動

協会設立当初は200人余の会員だったが、次第に愛好者が増え、ピーク時は6000人（2013年）を超え、鳥取県人口の約１％に達したこともあった。現在では鳥取県の全市町村が協会に加盟しているが、5000人を割ってしまったのが現実で、人口減もあって会員数は年々減少傾向にあり、協会の大きな課題となっている。

協会内の組織も検討を重ね、総務委員会・指導者育成委員会・国内交流委員会・女性委員会・広報委員会を設置し、各委員会で事業を展開している。

少しでも会員の減少歯止めにつながればとの思いから、総務委員会では年間行事・予算等の取り



決め、指定大会においてのホールインワンカードの発行、ホームページの開設を行っている。指導者育成委員会では指導者の資質向上を目指して普及指導員研修、また小学生を対象としたグラウンド・ゴルフの普及活動、協会主催大会への協力、国内交流委員会では県外協会との交流を目的とした訪問・受け入れを行っている。女性委員会では東部・中部・西部の３地区でのレディス大会の開催・運営を、また県協会が2013年には第７回全国レディス交歓大会を、発祥の地「潮風の丘とまり」を会場に、全国各地から665人の女性プレーヤーの参加を得て開催した。この全国大会は参加プレーヤーから高い評価をもらい、県協会の今後の大きな励みとなった。

広報委員会では現在、年２回の広報誌の発行、各大会や県外交流事業等の取材を行い、会員増加へ努めている。

５　国民体育大会公開競技へ

2015（平成27）年からグラウンド・ゴルフは国体の公開競技となった。県協会では年４回開催している県大会に出場することが絶対条件であり、その４大会の合計打数の少ない方から、男性６名・女性６名の12名が選出されるということもあり、会員相互が支えあい、励ましながら県大会へ挑んでいる。第71回岩手国体（2016年）では団体の部３位入賞、また個人の部においては山本道孝（鳥取市）が第１位という快挙を遂げた。翌年の第72回愛媛国体（2017年）では、台風接近という悪条件の中、鳥取県選手団は団体の部２位という成績を収めた。

第72回愛媛国体鳥取県選手団（2017年）

６　今後の協会の課題

2017（平成29）年には、協会設立35周年を迎えたが、協会として抱える問題も多々あり、特に会員数減少は大きな問題である。少子高齢化の波はグラウンド･ゴルフにも大きな影響を与えており、「高齢になったから運転免許証を返納した、だから県協会主催の大きな大会に行けなくなった」「高齢になり人を乗せて事故を起こしてしまったら周りに迷惑がかかる」「県外へ行くバスの移動時間が辛くなった」等の理由から、会員にならなくても自分の地区･同好会でのプレーができればいい、という方も年々増加しているのが現実であり、県協会としてどのように対応していくか、が今後の大きな課題である。

また「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる楽しいゲームの特徴を持ち親しまれてきたグラウンド・ゴルフだが、近年、競技性の部分も出てきてしまい、上位を狙い不適切なプレー、マナーの悪いプレーをする方も出てきてとても残念なことである。県協会指導者育成委員会でも、講習会や大会等の中で注意喚起するのだが、なかなか直らないのが実情である。

７　国際交流と国際大会

グラウンド・ゴルフは今や国内だけのスポーツではなく、広く海外の方にも注目されるスポーツへと成長した。2017年にはモンゴルで行われた国際大会へ協会員を派遣し、大会に参加してもらった。2021年には発祥の地である湯梨浜町泊（旧泊村）において「関西ワールドマスターズゲームズ2021」が開催されることが決定している。今後、海外への派遣･普及も増えていくと確信している。

日本の小さな村から誕生したグラウンド・ゴルフに誇りを持ち、恥じることがないよう、そして「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる生涯スポーツとして、さらに成長していくことを願っている。

【歴代会長・理事長】

◇会長

昭和58年		三枝　俊作
57年～平成９年		宮脇　三巳
９年～	13年	池田　武夫
14年～	18年	清水　照明
19年～	20年	徳永　昭良
21年～	29年	石丸　美嗣
30年～		山本　久夫（代行）

◇理事長

昭和58年～平成８年		原田　達夫
９年～	26年	河本　清廣

【年間大会等】

全国	全国レディス交歓大会
	全国交歓大会
	国民体育大会
	ねんりんピック
中国５県	中国地区交歓大会
	中国地区２・３級普及指導員研修交歓大会
県協会	因伯シルバー大会（主管）
	鳥取県民スポーツレクリエーション祭（主管）
県大会	（主催・年４回）

【主要年表】

1983年（昭和58）７月　県協会設立

11月　第１回県大会開催

1985年10月　県協会旗誕生
1988年８月　第１回全国交歓大会開催
1989年（平成1）10月　県協会が文部大臣表彰受賞
1994年８月　第１回中国地区交歓大会開催
1996年４月　鳥取県体育協会加盟
2005年４月　サイパン友好親善ツアー実施
2006年４月　台湾友好親善ツアー実施
10月　第19回全国スポレク祭開催
2007年８月　第１回世代間交流大会開催
2008年（平成20）11月　創立25周年記念式典・記念誌発行
2013年６月　第７回全国レディス交歓大会開催
2014年10月　第15回県民スポレク祭
2015年６月　県社会福祉協議会へ車を贈呈
2017年11月　創立35周年記念誌発行
2018年（平成30）３月　創立35周年記念式典
４月　第77回県大会（35周年記念大会）開催

● **鳥取県グラウンド・ゴルフ協会シンボルマーク**

昭和60年県協会のシンボルとなるマークを県民から募集。同年10月審査が行われ鳥取県の鳥とグラウンド・ゴルフのスティック（現在はクラブ）、ボールを図案化し、円で協会員の努力と団結を表し、県協会の成長と発展を鳥の羽ばたく姿に託したもの。有田進氏（鳥取市）の作品に決定。翌月の県大会で協会旗として披露し、現在も大会等で活用。

鳥取県トライアスロン協会

１　協会の設立、団体が取り組んだ事項

水泳・自転車・マラソンの３種目で競うトライアスロン競技の歴史は浅く、1974年サンディエゴ（アメリカ）で誕生した。その後1977年ハワイ（アメリカ）で開催されたレースにより世界的に広がっていった。

日本国内では昭和56（1981）年、鳥取県米子市で皆生トライアスロン‘81’（現在は全日本トライアスロン皆生大会）が初の国内トライアスロンレースとして開催され、以降、国内各地で数多くの大会が開催されるようになった。

しかし、急速なペースで大会は増加したが、競技ルールが整備されておらず、競技スポーツとして確率された存在ではなかった。

昭和から平成に移るころ、国内には日本トライアスロン協会（ＪＴＡ）と日本トライアスロン連盟（ＪＴＦ）の２つの競技団体が全国組織として併存していたが、全国統一団体結成に向けて機運が高まり平成６（1994）年４月、２団体が合併して日本トライアスロン連合（ＪＴＵ）が誕生した。

こうした国内組織の統合に呼応して同年４月、鳥取県トライアスロン協会（ＴＴＡ）が誕生した。

協会発足時には、全日本トライアスロン皆生大会（皆生大会）が既に全国屈指の人気大会として開催されており、本協会設立当初の登録者の殆どが皆生大会を目指す選手であった。前述のとおり、当時は統一された競技ルールの下で運営されていなかったため、さまざまな問題が指摘されていた。

本県協会は後発団体であったが、大会の公平性や安全性を維持するために多くの審判員を大会に派遣並びに育成に努めてきた。現在では伝統ある皆生大会の競技全般を管理する主要団体として大会を支えている。また皆生大会で培った大会運営ノウハウは、後述する県内で開催される数多くの大会の誕生へと繋がっていった。なお、平成10年４月に県体育協会に加盟している。

２　県内で開催された大会

（１）エイジ対象大会

① 全日本トライアスロン皆生大会（米子市）
開催期間　昭和56年～現在
参加対象　一般
日本初のトライアスロン大会でアジアでも初

② ハワイトライアスロンin湯梨浜大会
開催期間　平成21年～平成28年
参加対象　一般／中学生／高校生
県内で開催された初のオリンピックディスタンス大会（水泳1.5㎞、自転車40㎞、マラソン10㎞）

③ 鳥取砂丘トライアスロン大会
開催期間　平成28年～現在
参加対象　一般／中学生／高校生

（２）キッズ・ジュニア対象大会

① 皆生チビッ子トライアスロン大会（米子市）
開催期間　昭和59年～平成４年
参加対象　小学生
小学生を対象とした国内初のトライアスロン大会

② オールジャパンジュニアトライアスロンin伯耆大会（伯耆町）
開催期間　平成７年～現在
参加対象　小学生／リレー（小・中学生／一般）
皆生チビッ子トライアスロン大会に代わる大会として地元経済団体と岸本町（現在は伯耆町）が中心となって開催

③ リトルアスリートCUP（倉吉市）
開催期間　平成12年～平成13年
参加対象　小学生
中部地区の経済団体が中心となって開催

④ 鳥取砂丘ジュニアデュアスロン全国大会（鳥取市）
開催期間　平成13年～平成22年
参加対象　小学生
マラソンと自転車の組み合わせによる競技
シドニーオリンピック日本代表・小原工選手の功績を記念し次代を担うトップ選手育成を図るために開催

⑤ 岩美キッズトライアスロン全国大会
開催期間　平成23年～現在
参加対象　小学生／中学生／リレー（一般含む）
前年まで開催していた鳥取砂丘ジュニアデュアスロン全国大会を岩美町に移し、競技も３種目のトライアスロンに内容を変更した本格的なレースであり、ジュニア大会では全国でも珍しいオープンウォーターを使用するコースである。

３　事業推進上の課題

毎年行われている協会主催事業では、生涯スポーツの側面が多く、また協会員の年齢構成からも競技性より健康維持や親睦を優先する事業が多いのが特徴の一つに挙げられる。その中でも５月のゴールデンウィーク中に開催される「バイクカーニバル」は、皆生大会の自転車コースを実走するイベントで、皆生大会を目指す選手や一般のサイクリスト総勢約300名が全国から集まる大がかりな練習会である。また地域の歴史・文化とマラソンを組み合わせたランニングイベントなど、年間を通じてさまざまな事業を実施している。

トライアスロン競技は、競技場などクローズされた場所で行う競技とは異なり一般の公道を競技会場として広範囲に行うため、大会実施に際して地域住民の協力は不可欠である。そのためには、地域と競技団体との相互理解が重要な要素となっている。「大会ありき」だけではなく、地元との調和を考慮しながら競技運営を行う必要がある。競技団体とはいえ、地域のさまざまなイベントや事業に対してボランティア参加し、地域貢献することで同競技に対する理解を深めてもらう必要がある。

４　競技力向上に向けた課題

2000年シドニーオリンピック、2016年岩手国体

での正式種目採用などを機に、国内の競技人口は順調に増加している。またこれに伴い大会数も大幅に増加している。

しかし順調に推移している競技者数もその大多数を中高年者が占めており、競技の過酷さから「鉄人レース」と評されるが、実際は生涯スポーツとして普及しているのが現状である。

本県協会登録者に占める割合は20歳未満が20％を割っており、逆に35歳以上の割合が70％を超えて、年齢構成分布が逆三角形となっており、若年層の競技者の割合が極端に少ない状況となっている。

その主要な要因は、小・中・高校の学校体育での導入ができていないため、各世代の体育連盟が主催する全国大会が開催されておらず、全国的な傾向として選手育成が立ち遅れており、それにより若い世代の競技者数が極めて少なくなっているのが現状である。

本県協会では発足当時より小学生を対象に年間を通じ毎年10数回のトライアスロンセミナーを実施し、競技の普及と基本スキルの体得を目指してきた。

現在は、協会主催のセミナーに加えシドニーオリンピック日本代表の小原工（ＮＰＯ法人皆生スポーツアカデミー理事長）により、トライアスロンスクールを日常的に行って社会体育での普及にも努めている。

とはいえ、より広範な普及のためには学校体育の果たす役割は大きく、特に中・高校体育連盟へ加盟することは、選手の活動の場を広げ普及並びに競技力の向上に必須条件である。

５　特記すべき事項（別表　国際大会、全国大会）

第12回（1992年）皆生大会で優勝した小原工はその後、郷里･米子を離れ実業団チーム（兵庫県）に移籍していたが、郷里への強い思いから登録を鳥取に残し世界の舞台で活躍していた。トライアスロン競技が正式種目としてオリンピックに採用された2000年シドニーオリンピックに小原は日本代表として選出された。奇しくもこの年、皆生大会は第20回記念大会ともなり小原のオリンピック出場は同競技国内発祥地の大会に花を添えた。

オリンピック出場を機に組織された小原工後援会には7000名を超える応援者が加入し、さまざまな活動を通じて小原の出場を祝った。大会には40名を超す後援会大応援団が現地に赴きレースを見守った。その声援を受けて小原はバイクで一時トップを走り、その存在を世界にアピールした。結果は21位と目標であったメダルには届かなかったが、地元から世界に羽ばたいていった小原の活躍は、メダルと遜色ない輝きを放っていた。

そしてこの年、ＪＴＵは小原のこれまでの活躍に対して「ミスター・トライアスロン」の称号を付与した。また類い希な支援活動を行ったとして「小原工後援会」は特別賞を受賞した。

鳥取県が名実ともにトライアスロン競技のトップランナーであることを証明した年となった。

【歴代会長、理事長】

◇会長

平成６年～　　築谷　敏郎

◇理事長

平成６年～　　福嶋　佑二

鳥取県エアロビック連盟

1980年代半ばごろから、ダンス形式の有酸素運動、健康と美容を兼ねた新しいスポーツとしてエアロビックが普及しはじめた。県内でも民間のフィットネスクラブや公民館活動などで急速に愛好者が広がった。こうした中､1985（昭和60）年、三朝町総合スポーツセンターを会場に「ヘルス・アンド・フィットネスカーニバルin三朝」を開催した。カーニバルの効果もあり、愛好者も増えてきたので、より一層の普及には体制づくりが不可欠と1994（平成６）年３月９日、全国に先駆け県連盟を設立、会長には油野利博鳥取大学教授（当時）に就任いただいた。

当時、スタッフも若くやる気に満ち溢れ、定期的に講習会、教室の開催など、あらゆる角度からエアロビックの底辺拡大､普及に努めたのである。

地道な活動をする中で、三朝町での大会に来県した日本エアロビック連盟の理事長と吉田秀光三朝町長（当時）が片山善博知事（当時）を訪問し、日本連盟理事長から、韓国との交流を目的とした日韓友好交流イベント「エアロビックガーデンin鳥取」開催の提案がなされた。片山知事は同席していた三朝町長に対して「吉田さん一緒にやりましょう！」と即決、国際イベントの開催が決定した。

大会は鳥取県、三朝町、日本連盟の三者が主催し、県連盟は運営を担った。2000（平成12）年から2002（平成14）年の３年間、県の東中西部の３会場で同時に開催した。韓国から愛好者約100人が来日、県内からは約200人の参加者があった。イベントではエアロビックの初心者体験セミナーも実施するなど、韓国の愛好者も交えた交流を深めることができた。この日韓交流イベントを開催したことは連盟のいい意味での自信として今日につながっている。

第34回ラジウムカップ大会の様子（シニアの部）

以後、地道な活動を続ける中で､「ヘルス・アンド・フィットネスカーニバルin三朝」は、現在の「ラジウムカップエアロビック選手権大会」と名称を変え、当連盟の一大イベントとなり、平成30年は35回目の開催になる。この大会は、全国から毎年350人程度の参加があり、人口わずか8000人の三朝町が躍動感溢れる時となったのである。

現在、県内の愛好者人口は横ばい傾向で、かつて数人いた選手レベルの上級競技者がいないのが悩みである。選手権大会に出場できる競技者育成とチャンピオンシップ的な指導ができる指導専門員の養成が当面の当連盟の急務となっている。

連盟スタッフも少なくなっているが、めまぐるしく変わる時代のスピードにも惑わされず､「マイペースで行かで！」を合言葉に、地道にエアロビックの普及発展に取り組んでいきたい。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成６年～15年	油野　利博
16年～	横山　隆義

◇理事長

平成６年～16年	佐々木一郎
17年～23年	井原ひろみ
24年～	植木　文雄

鳥取県スポーツチャンバラ協会

昭和46(1971)年､神奈川県横浜市の田邊哲人が、遊戯としてあったチャンバラと武術・小太刀護身道を基にして､ルールや用具を開発した「護身道」を創出した。後に現在の｢スポーツチャンバラ(スポチャン)｣に名称を改めた。武器は空気を使うエアーソフト剣、防具はアクリル面という軽い用具を使うことによって安全に十分な配慮をし、性別、年齢に関係なく「気軽に楽しめる」と愛好者が増えていった。

鳥取県内には昭和63（1988）年、愛好者によってスポーツとして初めて導入された。

平成６（1994）年３月､鳥取県協会が設立され、さらに平成13（2001）年、協会組織の充実強化を図り、第30回全日本スポーツチャンバラ大会の県内開催に向けて、鳥取県東部・中部・西部でそれぞれイベントを企画、運営及び指導を開始したほか、審判養成にも力を入れ、大会開催に向かって一歩を歩み始めた。

平成16（2004）年の「全国レクリエーション祭in鳥取」での第30回全日本スポーツチャンバラ大会（全国を巡る最後の大会）は、選手･スタッフ･応援の方々約500人が集い、熱のこもった大会となった。この成功に意を強くし、平成18（2006）年の「スポレク鳥取2006」に向けて、県内小・中学校のクラブ活動・親子会及び地区公民館での指導・指導者養成と取り組んだ。取り組みは平成18年の「第19回全国スポーツ・レクリエーション祭スポレク鳥取2006・スポーツチャンバラ大会」の成功として結実した。

平成19（2007）年には県体育協会に加盟し、福祉施設・授産施設での指導を開始した。会話のなかった入所者が声を発することができたり、待つことができたり、落ち着きが出てきたなどの効果がみられ、徐々に障がい者スポーツとしても普及し始めた。

また､「礼に始まり礼に終わる」と心・技・体を学ぶことから、青少年育成の一環としてスポーツ少年団の指導・公民館活動・学童に愛好の輪が広がっていったのである。

平成22（2010）年頃から世界選手権大会、全日本選手権大会に参加し、上位に入賞する県内の選手が次々と出てきた。

平成23（2011）年の第66回国民体育大会（おいでませ山口国体）から、スポーツチャンバラがデモンストレーション行事となった。鳥取県の指導者も審判として大会に参加した。

平成24（2012）年、県障がい者協会にも加盟した。障がいの有無にかかわらず、同じカテゴリーで試合ができるスポーツとして、注目され、関心が寄せられるようになった。

平成25（2013）年の「スポーツ祭東京2013全国障がい者スポーツ大会（第13回全国障がい者スポーツ大会)」でも、スポーツチヤンバラがデモンストレーションで開催され、鳥取県の選手６名が出場した。個人戦では６名全員がメダル入賞、

団体戦では開催県東京都に次ぐ２位の成績を収めた。

主要大会の県内選手の主な成績は次のとおりである。

＜国際大会＞

平成23年　第37回世界大会
（国立オリンピック記念青少年センター）
山中幸輝　　小太刀　３位

24年　第38回世界大会
（国立オリンピック記念青少年センター）
広芳寛治　　二刀　３位

26年　第40回世界大会
（駒沢オリンピック公園総合運動体育館）
中川羚夏　　小太刀　３位

26年　第8回アジア・オセアニア大会
（ニューカレドニア）
広芳寛治　団体打突　１位
長剣　３位

29年　第10回アジア・オセアニア大会
（駒沢オリンピック公園総合運動体育館）
町田澪星　　楯長剣　３位

＜全国大会＞

平成22年　第36回全日本大会
（横浜文化体育館）
大山秀樹　フェアプレー賞

26年　第13回全国幼稚園大会
（横浜平沼記念体育館）
中川羚夏　基本動作　２位

29年　第72回愛媛国民体育大会
（笑顔つなぐえひめ国体）
広芳寛治　基本動作　５位

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成10年～23年	初田　勲
23年～	上村　忠史

◇理事長

～平成21年	中田　利幸
22年～　28年	津島　稔
29年～	西村　和文

鳥取県バウンドテニス協会

バウンドテニスは、メルボリンオリンピック・レスリングのゴールドメダリスト・笹原正三によって昭和55（1980）年に考案・開発され、昭和59（1984）年から本格的な普及活動が開始された。

バウンドテニスとは、バウンド（弾む）、バウンダリー（限られたスペース）に由来し名付けられた。

コートの広さは、人工芝（３ｍ×10m）、ネットの高さ50㎝、ラケットの長さ50㎝と定めており、テニスコートの六分の一の面積でプレーができ、場所を選ばず楽しめるニュースポーツである。

このバウンドテニスは、競技面積も狭いため馴染みやすく、小学生から高齢者まで気軽にプレーができ、体力、年齢に応じた運動量を得ることができる。

競技はシングルス戦、ダブルス戦に加え、レクリエーションとして６人構成の自チームを３人ずつ向かい会い、ラリーの回数を競う、他の競技に見られない「ＢＴラリー戦」もある。競技種目は、男子、女子、混合戦があり、年齢によりフリー、ミドル、シニアに区分している。

主な大会は、都道府県代表とブロック代表による全日本選手権大会があり、延べ1,000人を超える本大会は、毎年東京体育館で２日間にわたり熱戦が繰り広げられている。鳥取県からは毎年シングル及びダブルスで15～20人程度参加し、ベスト４、ベスト８になったこともある。

また、全国スポーツレクリエーション祭（現在開催されていない）には平成３（1991）年から参加し、全国ゴールド大会は60歳以上の方を対象にした３日間の大会で、最終日は観光が計画されるなど、愛好者の交流を深めることを目的とした全国持ち回りのシニアの全国大会であった。

地方大会として中国ブロック選手権大会があり、各種目の優勝者はシード選手として全日本選手権大会の出場権を獲得することができた。また中国ブロック親善交流大会があり、中国５県の持ち回りで親善交流を深める楽しいイベントとなっている。

そのほかに、都道府県または市町村協会主催の広域大会や合同練習会などが催され、全国各地で多くの愛好者が心地よい汗を流し､楽しんでいる。

鳥取県では、平成３（1991）年の全国スポーツレクリエーション祭熊本大会の初参加を機会にバウンドテニスが普及しはじめ、一般財団法人日本バウンドテニス協会及び先進県による講習会等を経て、平成12（2000）年12月に高見則夫会長、井上浩理事長を擁し鳥取県協会を設立した｡同時に、一般財団法人日本バウンドテニス協会に加入し、普及活動に加え全国大会、ブロック大会等への参加、そして県内の各種大会で活動を続けている。

平成16（2004）年度には中国５県による中国ブロックバウンドテニス連絡協議会が設立され、各県協会相互の連絡と親睦を図り、バウンドテニスの管理運営をすることとしている。

また平成27（2015）年には県体育協会へ加入し、スポーツの振興により一層寄与できるようにと、決意を新たにしたところである。

歴史の浅いバウンドテニスではあるが、本来のスポーツ性を損なうことなく、競技性を保ちながら生涯スポーツ、レクリエーションスポーツとしての特徴を活かし活動していくことを考えている。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成12年～29年	高見　則夫
30年～	福田　俊史

◇理事長

平成12年～18年３月	井上　　浩
18年４月～	霜村　丈明

ペタンク連盟

第19回全国スポーツ・レクリエーション祭　平成18年10月22日八頭町八東総合運動公園

1　鳥取でのペタンク揺籃期

（1）ペタンクのはじまり

ペタンクの起源は、古代ギリシャ、古代ローマ時代にまで遡るようだ。地中海地方でブールと呼ばれるボール競技が何世紀にも亘って親しまれていたものから、1910年にフランス南部プロヴァンス地方の港町ラ・シオタで生まれた。親しまれる理由は、どこでも少しの場所があればプレーができ、１球で形勢を有利にしたり、大量得点を取ったりできるところが面白く、作戦や投球がうまくいったときの爽快感である。ボールさえあれば、いつでも、どこでも、だれでも手軽にできるスポーツである。

（2）全国健康福祉祭（ねんりんピック）に参加

少なくとも昭和62（1987）年の秋頃までは、県内では「ペタンク」という言葉をほとんどの人が知らなかったはずである。当時は、全国的に高齢化への対策が急務と言われた頃であり、鳥取県では昭和61（1986）年に県庁に高齢者対策課が設置さればかりであった。

昭和63年秋に兵庫県で第１回ねんりんピック（全国健康福祉祭）が開催され、競技種目にペタンクという競技があることがわかった。

そして、県は鳥取県社会福祉協議会ことぶき高齢者事業センターの事業として、ねんりんピックに選手を派遣することを決めた。事務所は鳥取駅南の県民ふれあい会館にあったので、昼休みには隣接する鳥取鉄道記念物公園でペタンクが行われ、そこから競技の輪が広がっていった。「フレアイ」「ふれあい」というチーム名で県内外の大会に多くの方々が参加されたのである。

昭和63（1988）年６月４日に、旧鳥取大学附属小中学校跡地（現県立図書館、県民文化会館付近）で県内初めての講習会が開催された。実技等の講師は芦屋ペタンク協会に依頼した。雨でぬかるんでいたグラウンドだったので、ボールが土に埋まるなど、苦戦したが、降雨となったので、県職員会館体育館に移動し、フロアにマットを敷いての実技講習となった。参加していた現連盟役員は、その当時の高齢者対策関係者であった。同年10月には前述のように神戸市を中心に兵庫県内で第１回ねんりんピックが開催され、本県からも３人が

チームを組んで参加した。そして予選リーグを勝ち抜き、決勝トーナメントに進出し、３位という好成績を収めたのである。

２　鳥取県ペタンク協会設立と大会の開催

（１）ペタンク協会設立

平成元（1989）年に入り、前年に燃え上がった熱の冷めないうちにと､平成２(1990)年２月11日、県協会設立準備会を開催することとなった。倉吉駅前のレストランの会議室で発起人打ち合わせ会を開催し、規約、役員の選出方法、事業計画等を協議した。

設立総会は、同日午後、同会場で開催した。102名中79名（委任状を含む）の出席により、規約は一部修正の上、承認された。役員も選考委員会を設け、会長に安田真一郎（当時三朝町長)、副会長に岩谷四郎、理事長に福井尚、各地区計12名の理事も決まった。なお、平成27年６月に県体育協会に加盟した。

（設立発起委員）　岩谷四郎、西山源昭、林壽延、西川一枝、黒田靖二、青砥輝美、村山繁、伊藤博、福田忠司、西村信義、田中實

（２）ペタンクの県内でのはじまり

普及活動の中心は、実技と併せて普及指導員の養成講習であったが､資料も少ない時代であった。理事長が手作りで資料を作成し、初心者にわかりやすくするなどの工夫がされていた。これらの資料を持参しながら各役員が各地での講習会に奔走した時期であった。

現在は市販されているポータブルサークルを使用するが、当時は直径35cm ～ 50cmの円（サークル）を描いて、その中から投球していたので、針金等でサークルを作成して、練習や普及活動に活用してきた。

ペタンクも徐々に広まってきたころ、雨天、冬季（積雪期）でも練習ができるようにと、農業用のビニールハウスを利用して練習場を確保している熱心なチーム（地域）に出会うことがあった。

後日談であるが、ソルボンヌ大学大学院に留学していた西井一成氏が昭和46（1971）年に帰国の際にボールを持ち帰り、昭和51（1976）年、鳥取市にある日本きのこセンターに勤務し、職員とともに鳥取でペタンコ（西井氏はこう表現していた。）を再開したようで、記録に残る鳥取県での最初のペタンクの実践であったと言われている。

鳥取市古郡家にある我が国唯一のきのこの研究所「日本きのこセンター菌蕈研究所」では、研究を通じてフランスとの行き来があり、敷地内でペタンクは以前からやっていたとのことである。

（３）地域大会の開催

最初の大きな大会は、平成２（1990）年８月のキュリー祭に合わせた三朝大会であった。ペタンクならフランス。フランスなら友好交流している三朝町で大会を開催してはと村山、福田の話から始まった。協会設立と期を同じくして、鳥取県でレベルの高い競技が見られるようにと、三朝町などと連携してフランス大使館やフランスつながりの選手等の参加、県外各地からの参加を可能にした国際交流大会（一般の部と高齢者の部）の創設であった。

愛知県や京都府、兵庫県、大阪府などの近畿各府県、四国などからの参加があった。当時から競技力の高いチームの参加が多数あったが、その中で一般の部では本県の日本きのこセンターが第３回、４回大会で優勝をしたことが特筆される。

３　競技力の向上と幅広い普及と課題

（１）生涯スポーツと競技スポーツとしての両立

「いつでも､どこでも､だれでもできるペタンク」をキャッチフレーズに本県に導入されたペタンクである。競技スポーツの経験もなく、年齢にとらわれず、上肢が健常であれば障がいの有無にかかわらず参加できる競技である。このことから、中江貴美江や車いすを使用している山田武一らの尽力で､「車いすの会」をはじめとする下肢に障がいのある方々が参加できるようになった。

しかし、ねんりんピックへの参加を当初の目標に取り組んできた経緯から、普及の対象者が高齢

者（概ね60歳以上）であったため、ペタンクは高齢者のスポーツというイメージがぬぐえなかった。

身近なところで大会が開催されるようにと、圏域ごとに実施する大会の開催を企画してきた。定着もしているが､普及（会員の拡大）という点で、ジュニアから若者への普及が進んでいないので、今後、市町村ごとに体制を整え重点的に取り組むことが課題である。

生涯スポーツとして、また、競技スポーツとしての両立を目指して運営に努める必要があり、ペタンクの持つ特性を生かし、社会参加の促進と健康の維持増進のために、ペタンクの普及に努めていくことが重要である。

（2）日本ペタンク選手権大会で優勝

現在では、平成６（1994）年から実施している鳥取県ペタンク選手権大会が日本ペタンク選手権大会の予選を兼ねているが、平成２（1990）年に開催された第５回大会（兵庫県芦屋市）への参加が日本選手権への初陣であった。昭和63（1988）年にペタンクの講師として招聘した芦屋市在住の講師からぜひ参加をと勧められ､“ふれあいＡ､Ｂ､Ｃ”の３チームを編成し、参加した福井尚は「善戦の甲斐なく上位進出ならず。全国の壁の厚さを知る」と自身が発刊した“PETANQUEペタンク３号”に記している。

それから２年後、平成４（1992）年10月、第７回大会（山梨県三珠町）で鳥取フレアイ（福井尚、米村健治、東原美智子）がトリプルスの部で優勝した。平均年齢67歳のフレアイに対し、決勝戦の相手は対照的な若手チーム（北海道十勝池田Ｇ）である。ナイターの優勝戦となり前半は０対６でリードされ、夕闇の三日月を仰ぎながら一球一球に戦力伯仲だったが、後半の大逆転、13対９で優勝した。勝因は慎重なプレー、チームワークの良さが逆転に結びついたのである。日本ペタンク協会が企画したニューカレドニアペタンク親善大会（平成３年２月）に参加した米村は、「ニューカレドニアの教訓を生かして､戦術と集中力の猛練習、

第7回日本選手権大会で優勝した
福井尚、東原美智子、米村健治

併せてマナーとチームワークの重要さが逆転の勝利に結びついた」と述懐している（“PETANQUEペタンク３号”）。

平成10（1998）年９月、第13回大会（神奈川県小田原市）で鳥取ふれあいＣ（東原美智子、守山末子）がダブルスの部で準優勝した。

日本ペタンク選手権大会という権威ある全国規模の大会で優勝と準優勝という素晴らしい結果がもたらされた。ふれあい会館に隣接する鉄道記念物公園や美保公園多目的広場で毎日練習を行ってきた“ふれあい”の実力を全国に発信してきた。

平成10年代後半には、鉄道記念物公園のグループに対抗して、美保公園多目的広場をホームグラウンドにする鳥取市役所を中心とする鳥取クラブが頭角を現してきた。平成19（2007）年10月の第22回大会（島根県東出雲町）で鳥取クラブＡが男子の部３位に入賞した。

また､大山町(旧名和町)御来屋では､名和カローが着実に実力をつけ、同大会で名和カローＴ（法橋登志子、仲川照美）が女子の部３位に入賞するなど実力を発揮してきた。

この時期に練習仲間、指導者でもあった西村信義と浅井康之は、マナーや競技規則の周知、確認はもとより、投球技術についても熱心に議論したものであった。どんな競技場（テラン）でも、どんな状況でもスピンの効いた生きた球をどうしたら投げられるか、また、直接、相手の球に当てて、有利な状況へと変える技術（ティール）について

など、彼らの経験や熱心な議論は技術力を向上させるのに有用であった。

（３）全国健康福祉祭（ねんりんピック）での活躍

昭和63（1988）年に第１回大会（神戸市、兵庫県内）に参加した鳥取県チームについてはすでに記載したとおりであるが、平成３（1991）年に開催された第４回大会（岩手県）では決勝トーナメント１回戦で敗退したが、同時に実施されたティール合戦で福井尚は個人で３位に入賞した。

平成９（1997）年の第10回大会（山形県）でも、鳥取ふれあい（福井尚、三谷晃、三谷和代）が３位に入賞した。

そして、平成25（2013）年の第26回大会（高知県）では、名和カロー（仲川操、法橋登志子、岡本孜）が熱戦の末に準優勝を収め、室戸市の会場で表彰式が行われた。

（４）西日本ペタンク選手権大会の開催

第１回大会は、平成13（2001）年７月に岡山県清音村（現総社市）で開催された。その大会は選手６人（５人の時もあった）がシングルス、ダブルス、トリプルスの３種類の趣の異なった試合の結果により勝敗を決めるものであった。

本県では第３回大会（平成15年９月27日～28日：三朝町営陸上競技場）と第14回大会（平成26年11月８日～９日：鳥取環境大学グラウンド）の２回開催し、運営に当たってきた。第14回大会は西日本各地から62を超えるチームが参加した。本県からは６チームが参加したが、決勝トーナメントに進んだのは鳥取県協会Ａ（岡田公則､河村敏、澤田孝昭、仲川操、法橋登志子、石田世利子）であった。決勝トーナメントは雨模様の中での試合となり、雨合羽を着ての試合であったが、１回戦（２対０芦屋)､２回戦（２対１熊取町)､準決勝（２対０京都府Ａ）と勝ち、決勝は岡山県Ｄとの対戦となった。雨も味方につけ、２対１で粘って優勝を勝ち取った。

優勝した鳥取県協会Ａ（河村敏、仲川操、法橋登志子、岡田公則、澤田孝昭、石田世利子）

４　ペタンク普及の課題

（１）幅広い世代への普及（競技力の向上）

ジュニア大会の開催、初心者を対象にした大会（講習会）など各種の試みが行われてきた。

鳥取市気高町においては、公民館活動を中心に児童生徒に声掛けして定期的に練習会を開催し、競技会にも参加できるようになってきた。そして、平成29（2017）年（兵庫県宝塚市）の日本選手権（ジュニアの部）に参加した鳥取県Ａ（山本磨周、松本拓也）が３位に入賞した。翌30年の長崎県諫早市の日本選手権でも鳥取県Ａ（山本磨周、松本拓也)、鳥取県Ｂ（船本将吾、名内礼舞)、鳥取県Ｃ（山本樹里亜、松本直也）が優勝、準優勝、３位を独占した。

今後は、県内各地でジュニアも含めた練習会の定例化が定着するよう地域を支援するとともに、組織的に取り組んで行かなければならない。また、ジュニアが成長して進学した高等学校､大学等で、

優勝した鳥取県Ａ（山本磨周、松本拓也）

卒業して社会人になってからも競技が継続できるよう、環境の整備に取り組まなければならない。

社会人については、鳥取クラブ（鳥取市役所）をモデルにしながら、事業所でも職員の親睦や研修のレクリエーションに導入するなど、事業所の取り組みの支援が行えるよう検討してゆく必要がある。

また平成27（2015）年には県体育協会へ加入し、スポーツの振興により一層寄与できるようにと、決意を新たにしたところである。

（2）大規模な大会誘致のための会場の確保

過去にも、日本選手権大会をはじめ比較的大きな大会を誘致し運営に当たってきたので、今後も大会運営については蓄積された経験を活用できると考えるが、最大の課題はグラウンドの確保である。鳥取県では芝生化が進められており、今まで使用できたグラウンドが確保できなくなっている現状がある。

2023年の全国健康福祉祭（ねんりんピック）は鳥取県で開催される予定である。競技場の確保の問題と運営スタッフの養成などの課題があるが、円滑に運営できるよう備えなければならない。

（注）ペタンク（PETANQUE）はピエタンケ（PIED-TANQUE、両足をそろえる）が訛って発音されるようになった。

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成２年～	９年	安田真一郎
10年～	29年	吉田　秀光
30年４月～		松浦　弘幸

◇理事長

平成２年～	９年	福井　　尚
10年～	11年	田中　　実
12年～	26年	林　　壽延
26年４月～		村山　　繁

全国大会等の成績

〈日本ペタンク選手権大会〉

年度	大会名	チーム・選手名	種別	成績
平成4年（1992）	第７回大会 (山梨県三珠町)	鳥取フレアイ （福井尚・米村健治・東原美智子）	トリプルス	優勝
平成10年（1998）	第13回大会 (神奈川県小田原市)	鳥取ふれあいＣ （東原美智子・守山末子）	ダブルス	２位
平成19年（2007）	第22回大会 （島根県東出雲町）	鳥取クラブＡ （岡田公則・玉木一義・河村敏）	トリプルス	３位
平成19年（2007）	第22回大会 （島根県東出雲町）	名和カローＴ （法橋登志子・仲川照美）	ダブルス	３位
平成29年(2017)	第32回大会 （兵庫県宝塚市）	鳥取県Ａ（山本磨周・松本拓也）	ジュニア	３位
平成30年(2018)	第33回大会 （長崎県諫早市）	鳥取県Ａ（山本磨周・松本拓也）	ジュニア	優勝
平成30年(2018)	第33回大会 （長崎県諫早市）	鳥取県Ｂ（船木将吾、名内礼舞）	ジュニア	２位
平成30年(2018)	第33回大会 （長崎県諫早市）	鳥取県Ｃ（山本樹里亜・松本直也）	ジュニア	3位

〈西日本ペタンク選手権大会〉

年度	大会名	チーム・選手名	種別	成績
平成26年（2014）	第14回大会（鳥取市)	鳥取県協会Ａ（岡田公則・河村敏・澤田孝昭・仲川操・法橋登志子・石田世利子）	シングルス ダブルス トリプルス	優勝

〈全国健康福祉祭（ねんりんピック)〉

年度	大会名	チーム・選手名	種別	成績
昭和63年（1988）	第１回(神戸市・兵庫県)	鳥取県（伊藤博・岡村芳秋・森久）	トリプルス	３位
平成3年（1991）	第４回(岩手県)	ふれあい鳥取（福井尚・米村健治・東原美智子）	ティール合戦	３位
平成9年（1997）	第10回(山形県)	鳥取ふれあい（福井尚・三谷晃・三谷和代）	トリプルス ティール合戦	３位 ３位
平成25年（2013）	第26回（高知県）	名和カローＮ（仲川操・法橋登志子・岡本孜）	トリプルス	２位

県内開催の国際・全国大会

開催時期	大会名	会場地	備考
平成11年10月23日～24日	第14回日本ペタンク選手権大会	三朝町営陸上競技場	
平成16年９月19日	第58回全国レクリエーション大会 in とっとり	鳥取市美保公園多目的広場	2004年種目別交流大会
平成18年10月22日	第19回全国スポーツレクリエーション祭	八頭町八東総合運動公園	2006年ペタンク大会

第２節
郡市体育協会

鳥取市体育協会

第60回鳥取市民体育祭開会式
（平成29年６月　鳥取市民体育館）

１　市民総スポーツ運動の推進

（１）鳥取市民体育祭

本市の市政制施行70周年を記念して昭和33（1958）年に誕生した「市民体育祭」は、平成29（2017）年に60周年を迎えた。この間、常に市民総スポーツ運動の推進を提唱し、市民の健康増進や生涯スポーツの推進に向け、時代に応じた競技種目の変更や対応を行ってきた。

第43回（平成12年度）大会から得点種目14種目とオープン種目６種目、１市８町の市町村合併後初の大会となった第48回（平成17年度）大会からは全48校区を人口規模別にＡ，Ｂ，Ｃの３グループに分け、得点種目14種目とオープン種目５種目とした。第55回（平成24年度）大会からはペタンク競技を得点種目に加え、得点種目15種目とオープン種目４種目とした。

なお、第50回（平成19年度）の記念大会の総合開会式では、卓球女子の強豪校である大阪の「四天王寺高校」によるデモンストレーションが行われた。また、第59回（平成28年度）大会では、「鳥取市スポーツ推進計画」の策定を受け、障がい者スポーツの普及促進を目指して、パラリンピアンを招へいし、市民との交流や競技が行われた。

参加者数は第60回（平成29年度）の大会で、延べ２万３千人が熱戦を繰り広げ、Ｂグループの津ノ井校区は８年連続、Ｃグループの修立校区は３年連続の優勝を果たした。

鳥取市民体育祭（第60回）

（２）鳥取市新春健康マラソン

平成21（2009）年度まで毎年１月３日に開催されていた「鳥取市山の手マラソン」を廃止し、平成22年度に新たに「鳥取市新春健康マラソン」を開始した。これは、平成19年度～ 21年度の３年間が積雪の影響で中止となり、コースの「久松公園～山の手通り～鳥取西高校玄関前」の道路が狭くて危険であると以前から指摘されていたことによるものである。こうした背景を踏まえ、天候に左右されにくく安全で走りやすいコカ・コーラウエストスポーツパーク（現コカ・コーラボトラーズジャパンスポーツパーク）が今新たなコースとして設定された。

なお、記念すべき第１回（平成22年度）大会は、記録的な大雪で中止となったものの、第２回（平成23年度）大会以降、参加者は増加を続けており、第８回（平成29年度）大会では762人が、元気に新春の空を駆け抜けた。

鳥取市新春健康マラソン（第８回）

２　全国高等学校総合体育大会

平成７(1995)年度「全国高等学校総合体育大会」が鳥取県を主会場に、中国５県で分散開催された。本市で開催された競技は、陸上、新体操、バスケットボール、サッカー、テニスの５種目であった。

この準備に向けて、平成４（1992）年12月24日に「平成７年度全国高校総体鳥取市準備委員会設立総会」を開催、平成５（1993）年４月には「全国高校総体対策室」を設置し、全市民挙げての取り組みにより見事に大会を成功させた。

市体育協会は、後援として各種所属団体を中心に大会運営に協力した。最終的に、この大会の参加者数は6,113人、総観客数は約104,500人にのぼった。

３　市営サッカー場「バードスタジアム」が完成

「全国高等学校総合体育大会サッカー大会」が平成７年に鳥取市で行われるのを契機に、平成５年３月に新しく市営サッカー場を建設する計画が発表された。平成７年７月25日に完成した新しいサッカー場は「とりぎんバードスタジアム」と命名され、総工費約40億３千万円。鉄筋コンクリート造り一部鉄骨造り三階建て、約１万６千人が収容可能なスタンドに、広さ約２万９千㎡のメイングラウンドが整備された。

とりぎんバードスタジアム

平成７年10月には、県内初となるＪリーグの公式戦「サンフレッチエ広島対ベルマーレ平塚」の対戦が行われ、約１万３千人の観客が詰めかけた。

平成13（2001）年12月には「2002ワールドカップ日韓大会」に出場する南米エクアドルチームのキャンプ地に決定し、平成14（2002）年５月に選手団が来鳥。５月23日に本市で初の開催となる国際Ａマッチ「エクアドル対セネガル」の親善試合が実現し、セネガルが１- ０で勝利を収めた。

その後、Ｊリーグの京都パープルサンガやサンフレッチェ広島の試合も行われ、サッカーファンが多数観戦している。

平成19（2007）年度からはＪＦＬ所属の「ガイナーレ鳥取」が活動拠点を本市に移し、ホームスタジアムとして利用を始めた。このことは、プロスポーツチームの無かった鳥取市にとって、子どもたちが身近で見て学ぶことのできる絶好の機会

となり、大人にとってもプロスポーツを楽しめる環境が実現したのである。

４　「鳥取市若葉台スポーツセンター」が完成

ガイナーレ鳥取の活躍もあり、サッカー競技の人気も高まる一方で、サッカーができる施設が不足する状況が続いていた。

経済界・体育団体からの要請もあり、平成23年に新たな施設の整備に着手。平成25（2013）年４月に敷地面積約２万５千㎡、トレーニングルームや会議室等を備えたクラブハウスを併設する「鳥取市若葉台スポーツセンター」が完成した。

５　「鳥取市弓道場」が完成

鳥取城址の麓にあった旧鳥取市弓道場が老朽化したうえに、施設自体が手狭であったことから建て替えの機運が高まっていた。折しも、鳥取城址大手橋の改修と鳥取西高への進入路の整備もあって、関係団体との調整を行った結果、平成17(2005)年度に、アクセスが良く、他の運動施設との連携が行いやすい布勢総合運動公園の近接地に立地することが決まった。そして、平成25年７月に床面積約６千㎡、近的射場（10人立）、遠的射場（６人立）を完備した新しい「鳥取市弓道場」が完成した。

両施設の完成により、スポーツを行う環境が今まで以上に充実し、市民体育祭をはじめとする各種大会から日々行う運動まで、市民がより良い環境でスポーツを行うことができるようになった。

鳥取市弓道場（第59回市民体育祭）

６　「鳥取市スポーツ推進計画」の策定

本市はスポーツに関する施策を総合的に推進する指針として、平成28（2016）年に「鳥取市スポーツ推進計画」を策定した。

本計画では「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と前文に明記した「スポーツ基本法」に基づき「すべての市民がいつでもスポーツ活動を実践できる環境を整え、スポーツ活動を通じて、生涯にわたって活力に満ちた豊かな生活を送ることができる鳥取市～年齢や性別、障がい等を問わず、関心、適性等に応じてスポーツに親しむことができるまち～」を基本理念（めざす姿）としている。

この基本理念を実現すべく４つの基本方針を定め、鳥取市のスポーツの推進を図ることとした。

（１）子どものスポーツ機会の充実
　①乳幼児期から体を動かす遊びや運動の実践
　②学校体育・社会体育への支援
（２）生涯スポーツ社会の実現
　①市民総スポーツ運動の推進
　②誰もが参加しやすいスポーツ環境づくり
（３）地域におけるスポーツ活動の推進
　①地域活力の創出に向けたスポーツ振興
　②スポーツ交流の推進
（４）競技力向上につながるスポーツ環境の整備
　①競技人口の増加をめざした施策の展開
　②施設をはじめとするスポーツ環境の構築

７　加盟団体及び実施事業

現在の加盟団体数は、陸上や軟式野球などの競技団体28団体に加え、小学校・中学校体育連盟、スポーツ少年団、地域体育会連合会、スポーツ推進委員協議会など、合計33団体で構成されている。

事業は、鳥取市民体育祭、鳥取市スポーツ・レクリエーション祭、姫路市との交歓大会、鳥取市新春健康マラソン等イベントの開催のほか、体育功労者や優秀指導者、優秀な成績を収めた選手等

を表彰するスポーツ表彰式、県民スポレク祭への派遣手続き、スポーツ教室、小学生の全国大会派遣の支援、ニュースポーツ用具の貸し出しなど、本市のスポーツの普及発展につながる事業に取り組んでいる。また、事務局も平成25年から２人体制とし、本市のスポーツ振興を強力に推し進めている。

８　運動の機会の増加が課題

スマートフォンやインターネットの普及などにより、さまざまな情報のやり取りが増え、趣味の選択肢も多種多様にわたる中、子どもたちの体力水準は低下し、自主的にスポーツを行う時間を持ちたいと考える子どもが半数近くまで低下している。

スポーツを行うことは、日ごろの健康を維持するとともに、体力低下等による骨折等の予防や転倒等に起因する寝たきり介護の予防にもなる。国においても健康寿命の延伸により社会全体での医療費抑制につなげるため、平成29（2017）年３月に第２期スポーツ推進計画を策定し、スポーツを通じた健康増進を進めている。

地域住民の多様な健康状態やニーズに応じたスポーツ活動を行うことで、市民のライフステージに合った豊かな人生を送れるよう、あらゆる場面でスポーツが行える場や機会を提供していかなければならないと考えている。

【歴代会長、理事長】

◇会長

平成２年６月～	14年３月	西尾　迢富
14年４月～	26年３月	竹内　　功
26年４月～		深澤　義彦

◇理事長

昭和62年３月～	平成６年３月	高見　則夫
７年４月～	９年３月	中尾　恭治
９年４月～	18年３月	岩成　潔一
18年４月～	25年３月	中川　俊隆
25年４月～	29年３月	木下　法広
29年４月～		尾室　高志

９　気高郡体育協会

近年の気高郡体育協会は、青谷町、鹿野町、気高町各町に結成された体育協会を加盟団体とし、会長は町長の輪番制、協会事務局を会長所在の町教育委員会に置くとともに、理事長も同町から選出していた。

気高郡体育協会主催の行事は、郡民体育大会と郡内一周駅伝とし、そのほか鳥取県民スポーツ・レクリエーション祭や鳥取県民体育大会、米子－鳥取間駅伝競走大会に選手を派遣した。

気高郡内一周駅伝のスタート

平成13（2001）年度の郡民体育大会の競技は、バレーボール、ソフトボール、卓球、ソフトテニス、テニス、バスケットボール、バドミントン、グラウンド・ゴルフ、ゲートボール、ロードレースの10競技で、550名が参加している。

また郡内一周駅伝には、地区対抗の部、一般の部合わせて13チームが出場し、30㌔のコースを７区間でたすきをつないだ。

平成16（2004）年11月、鳥取市と気高郡３町を含む近隣８町が広域合併し気高郡がなくなると、青谷町、鹿野町、気高町それぞれの町体育協会が鳥取市体育協会の支部となり、大正９年に創設された気高郡体育協会はその長い歴史を閉じることになった。

これにより郡民体育大会はなくなったが、郡内一周駅伝は西地域交流駅伝大会として毎年行われており、平成29年度には旧気高郡内から11チーム、その他の地域や団体から18チームと以前より増加している。

また、米子－鳥取間駅伝競走大会にも旧気高郡内の選手がチームを組み毎年参加しており、気高郡体育協会で培った強いスポーツのつながりは、現在においても地域スポーツの振興に大きく寄与している。

【気高郡体育協会の歴代会長、理事長】

◇会長

平成５年度	川瀬　保男
６年度～７年度	森本　成人
８年度～９年度	姫田　員新
10年度～11年度	川瀬　保男
12年度	森本　成人
13年度	森山　鐵雄
14年度～15年度	中原　義喜
16年度	川瀬　保男

◇理事長

平成５年度	田中　正人
６年度～７年度	池原　隆秋
８年度～９年度	若木　行寿
10年度	高田　　守
11年度	徳重　　收
12年度～13年度	池原　隆秋
14年度～15年度	山根　　恵
16年度	飯田　修三

米子市体育協会

屋内スポーツ施設の殿堂として市民に親しまれている米子市民体育館

１　米子市民の各種大会での活躍

平成４（1992）年のバルセロナ・オリンピックの卓球競技には、依藤典篤（当時米子高教員）が、わが国からただ一人の審判員として派遣され、最終試合の男子シングルス決勝の主審を務めた。さらに、同年の日中国交正常化20周年記念の日中友好都市卓球カーニバルに米子市チームを再び派遣した。平成５（1993）年には、米子東高が全国高

等学校サッカー選手権大会において、鳥取県勢初のベスト８進出を果たしたほか、米子北高男子がアーチェリー全国総体参加記念大会で優勝を飾った。

平成６（1994）年３月には、翌年の全国高等学校総合体育大会開催に先立ち、錦海漕艇場に鉄骨平屋建て約800平方㍍で、82艇が収容できる全国でも有数な規模の艇庫である「県立米子艇庫」が完成した。

平成７（1995）年には、高校生のスポーツの祭典である全国高等学校総合体育大会（インターハイ）を、鳥取県内を主会場として開催した。米子市では、漕艇、水泳、体操、ソフトボールの４競技を開催し、それぞれの競技で熱戦が展開された。水泳競技では、宮本幸太郎（米子西高）が男子飛び板飛び込み、男子高飛び込みの２種目で優勝した。宮本幸太郎は、平成６年にもインターハイで優勝しており、２年と３年にインターハイの飛び込み競技を制した兄の基一郎（米子高）に続いての連覇となった。宮本兄弟は、平成10年代にかけても、国体や日本選手権をはじめ数多くの全国規模の大会で優勝を重ねたほか、国際大会の舞台でも活躍を見せた。

平成10年代に入り、10（1998）年には、井中将貴（米子商高）がインターハイの陸上競技男子3000m障害で優勝した。トライアスロンの小原工は、アジア選手権に５回優勝したのち、11年に日本トライアスロン選手権に優勝、12（2000）年にワールドカップで３位に入賞し、シドニーオリンピックに日本代表選手として出場するという快挙を達成した。

２　スポーツ施設の整備充実

平成11年に、東山陸上競技場のトラックを全天候化するなどの大規模改修工事を実施した。さらに、翌12年には、県内の武道の普及と競技力向上の拠点施設として、国際・全国レベルの公式競技の大会にも対応できる設備と機能を備えた「県立武道館」が開館し、こけら落としとして、第46回全日本東西対抗剣道大会が開催された。なお、これまでの県営米子式道場は米子市に移管された。

平成13年には、東山水泳場で第41回全国中学校選抜水泳競技大会が開催され、全国各地から中学生約1,000人が出場し、炎天下の下で熱戦を繰り広げた。

３　全国大会の開催と米子市出身選手の成績

平成17(2005)年３月31日には、平成の大合併で、米子市と西伯郡淀江町が合併し、新しい米子市が発足したことに伴い、米子市体育協会も淀江町体育協会と合併した。平成17年９月には、天皇賜杯第60回全日本軟式野球大会を米子市民球場で開催した。平成18（2006）年には、第19回全国スポーツ・レクリエーション祭「スポレク鳥取2006」が鳥取県内13市町村で開催され、米子市では、女子ソフトボール、年齢別ソフトテニス、インディアカの種目別大会を開催した。また、全国障害者スポーツ大会において、平成18年に権代美佐子が水泳競技で、平成19年に角佳樹が陸上競技で、それぞれ優勝した。

平成20年代は、多くの選手が全国規模の大会や国際大会で優秀な成績を残した。アーチェリー競技の川中香緒里（米子南高）、セーリング競技の西尾知美（米子高専）、馬術競技の原雅貴（箕蚊屋中学校）と西濱童夢、水泳競技の武良竜也（米子北高）と飛び込み競技の宇田恵理子(米子西高)、漕艇競技の永井理湖（米子東高）、ボクシング競技の小川達也（境港総合高）が国体、アーチェリー競技女子団体の米子南高、弓道競技の田中彩生(米子高)、ウエイトリフティング競技の錦織亮（米子工高)、漕艇競技の野口晧平（米子東高)、ボクシング競技の木下鈴花（米子南高)、水泳の飛び込み競技の三上紗也可（米子南高）がインターハイでそれぞれ優勝した。

そのほか水泳の飛び込み競技の安田舞（弓ヶ浜中）と佐々木音華（和田小)、ボクシング競技の入江聖奈（米子西高）が全国大会で優勝し、水泳競技の武良竜也（米子北高）と上杉了以（福米東

小)、飛び込み競技の三上紗也可は国際大会で優勝した。そのほか漕艇競技では、古田直輝（米子工高）と高島美晴（米子東高）が国体とインターハイ、さらには国際大会でそれぞれ優勝を飾り、米子市出身の冨田千愛がリオデジャネイロオリンピックに出場するという快挙を達成した。

また、障がい者スポーツの選手も優秀な成績を数多く残した。平成23（2011）年には、手島阿友美がスペシャルオリンピックス夏季世界大会の水泳競技で２位になったほか、全国障害者スポーツ大会においても、角佳樹、難波浩之、藤井真夜、谷悠聡、森卓也、渡翔雅が陸上競技、松井健太郎、村田静也、中村仁士が水泳競技、森住和彦がフライングディスク競技でそれぞれ優勝した。このほか、日本パラ陸上競技選手権大会においても安野祐平と森卓也が優勝した。スポーツ施設の整備としては、平成24年に東山陸上競技場のトラックを県内の陸上競技場では初めて、ゴム走路からウレタン走路に変更した。

平成30（2018）年には、米子北高が全国高等学校サッカー選手権大会において、鳥取県勢25大会ぶりのベスト８進出を果たした。

４　米子市体協の事業の充実

米子市体育協会は、平成30年度、34の競技団体が加盟し各スポーツの振興に努めている。また、米子市と協力して、小中学生を対象とする少年スポーツ教室、小学生を対象とする各種大会、年齢や経験を問わず市民の誰もが気軽に参加できる各種スポーツ大会、公民館地区または中学校区単位のチームで参加する市民体育祭を開催しており、市民に対して、積極的にスポーツの機会を提供することによって、スポーツに対する理解を深めるとともに生涯スポーツや地域におけるスポーツ活動の推進に努めている。

毎年体育の日には、未就学の子どもとその保護者を対象に米子市親子体力づくり大会を開催しており、子どもたちが体を動かすことに親しみを持てる機会の充実を図っている。参加者数も増加傾向にあり、第43回の大会を迎えた平成29年度には、300名を超える参加者があった。

第43回米子市親子体力づくり大会
（平成29年10月９日、米子市民体育館）

毎年元旦に開催している米子市正月マラソン大会も、米子市の元旦の恒例行事として定着しており、近年のマラソンブームもあいまって、参加者数も年々増加傾向である。平成30年元旦には第54回目の大会を迎え、約900名の参加者が、２㎞と４㎞のコースに分かれ、和気あいあいと健脚を競いあった。

第54回米子市正月マラソン大会
（平成30年１月１日、東山陸上競技場）

また、米子市体育協会では、優れた成績を残した選手や永年にわたって体育、スポーツの振興及び選手育成に顕著な功績を残した方に対して、スポーツ表彰を実施している。平成29（2017）年度には、257の個人及び団体を表彰した。

米子市体育協会は、今後とも、米子市及び加盟各競技団体と連携し、市民の体育、スポーツ活動を活発にするほか、有望な選手の育成に努めることにしている。

平成29年度米子市体育協会スポーツ表彰式
（平成30年３月10日、米子市文化ホール）

【歴代会長、理事長】

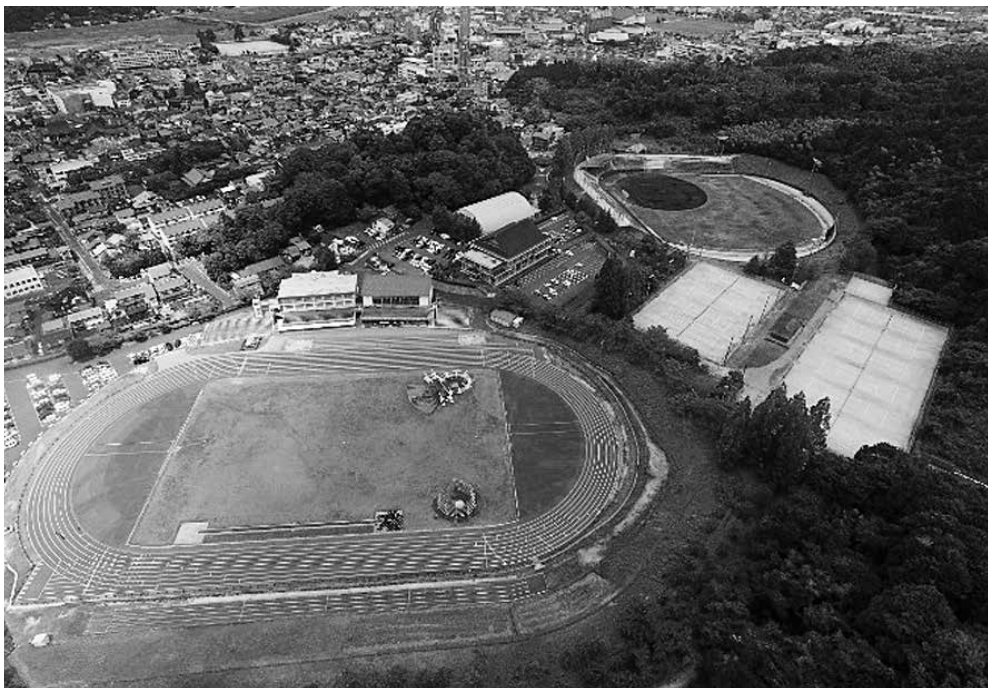
◇会長

平成３年度～14年度	森田　隆朝
15年度～28年度	野坂　康夫
29年度～	伊木　隆司

◇理事長

平成元年度～４年度	福井　徳明
５年度～８年度	山田　禎彦
９年度～11年度	木村　敬郎
12年度～22年度	角　　秋児
23年度～25年度	斉木　伸夫
26年度～28年度	福田　順一
29年度～29年度	塚田　武志
30年度～	長谷川　秀樹

倉吉市体育協会



打吹山から見た運動公園

１　体育協会の発展

倉吉市体育協会発足当時16団体であった加盟団体は、市民スポーツ活動の盛り上がりと昭和60（1985）年に開催された「わかとり国体」の総合優勝を目指した県の施策を受け、現在23団体と成長している。

また、国体の総合優勝の実現のために日本トップレベルの競技力を維持・継続するための努力を倉吉市体育協会と競技団体が一体となり推進したことで、体育協会はその存在感を示し発展した。

その中でも、児童期から競技に慣れ親しみ、スポーツを通じた青少年の健全育成を図るととも

に、環境を整え各種目の普及・強化を目指したスポーツ少年団の育成。中学校、高等学校部活動を主体とする体育連盟との連携・強化を図ることで競技力向上に力を注ぎ、倉吉市体育協会の活動はさらに活発化した。

２　地域スポーツ（生涯スポーツ）の推進

平成５（1993）年頃からスポーツ・レクリエーションとして生涯スポーツの普及が促進され、各地区公民館でも盛んに各種ニュースポーツやヨガ等の教室が開催されるようになると、市民の関心は高まり参加者は増大した。

また、全国的にマラソンやウォーキングが人気となり各地で盛んに行われ始めたことから、市内でも初のウォークラリーやナイトウォークなどが各地域事業として実施され、平成12（2000）年には第１回「ＳＵＮ・ＩＮ未来ウォーク」が開催され､今も大きな賑わいを倉吉市にもたらしている。

このように、生涯スポーツは身近なスポーツ活動として地域に根付き､子どもから高齢者までが、気軽に楽しく体を動かすことができるスポーツとして市内全域に急速な広がりをみせた。

３　倉吉市教育振興事業団の設置

倉吉市体育協会として課題としていた「施設不足の解消」は、わかとり国体を契機に急激に進展した。

これは、県下全体で競技力の向上が図られるとともに、倉吉市が市民総スポーツ運動を展開し、競技・地域スポーツの発展・充実を強力に推進した結果、スポーツ活動の多様性が進み、そのニーズに応えるための施設の建設又は改築が必要となったためである。

当初は、陸上競技場と野球場だけであった市施設も各競技団体からの要望を受け、体育館、武道館､テニス場､ラグビー場､そして倉吉市のスポーツの中核を担うスポーツセンター等を次々に開設し、平成４（1992）年度時点で16カ所の体育施設が設置され、平成13（2001）年には倉吉パークスクエアのオープンと共に、念願であった市民プール「倉吉市営温水プール」が開館した。これにより、多くの市民が「いつでも、誰でも、気軽にスポーツを楽しめる」場所の提供が可能となった。

しかし、増加した施設の運営、維持・管理を限られた市職員だけで行うのは困難であることから、倉吉市は、スポーツ施設の維持・管理及び運営をスムーズに実施し、多様化するスポーツニーズに迅速に応える拠点団体として「倉吉市教育振興事業団」を昭和58（1983）年に設立した。

設立の目的は、施設の維持・管理のほか、住民ニーズに合わせた多種多様な事業を実施することで住民福祉を促進し、豊かで健康で活力ある倉吉市の形成を図るものである。目的達成のためには体育協会をはじめとする競技団体並びに地域団体と共働し、競技・生涯スポーツの両面から倉吉市のスポーツを支える仕組みの構築が求められた。

４　体育協会の役割

体育協会と加盟団体の努力により本市体育施設の整備・充実が図られ、環境は整ったことから、競技・生涯スポーツ活動は活性化し市民のスポーツ実施率も向上した。

そして、平成７（1995）年には県営の自転車競技場と体育文化会館を会場に全国高等学校総合体育大会（インターハイ）の自転車競技と剣道競技が開催され、倉吉市体育協会も今までの経験から大会運営だけでなく選手の育成･強化等に協力し、多くの優秀な選手を輩出して、その役割を果たしている。

また、平成18（2006）年には全国スポーツ・レクリエーション祭のボウリング競技とバドミントン競技が開催され、競技力向上だけでなくレクリエーションとしてのスポーツ活動にも積極的に協力し、競技・生涯スポーツともに倉吉市体育協会の存在感を示している。

しかし､インターハイ及びスポーツ･レクリエーション祭に協力して見えてきたものは、競技スポーツと生涯スポーツ（レクリエーションスポー

ツ）の区分は非常に曖昧なものであることであった。

５　競技スポーツと生涯スポーツ

現在は、地域活動等で実施される生涯スポーツと体育協会が基軸とする競技スポーツと区分されることで各スポーツ事業が推進されてきたが、昨今のスポーツ・体育を取り巻く環境は多種多様化し、現状で生涯スポーツと競技スポーツを明確に区分することは非常に難しい状況となっている。

そもそも生涯スポーツとは、地域活動や個々の生活の中で行うスポーツ活動であり、余暇の活用、健康増進を目的として、年齢や性別を問わず誰もが気軽に楽しめるスポーツ活動として発展したが、ニュースポーツとして生まれた新規の活動も徐々に競い合うことが目的となり競技化され、倉吉市体育協会にもバウンスボール、スポーツチャンバラの二つのニュースポーツ団体が加盟したのをはじめ、ソフトバレーボールも中部バレーボール協会の中に任意団体として協会を設立した。

このことからも、生涯スポーツは対象者を「だれでも」としているが、競技スポーツと同様に「より速く、より高く、より遠くへ」の要素が強くなり、互いに競い合い勝利を目指すスポーツに変容し始めている。

また、各競技においても現役を引退した人たちによるマスターズ大会が盛んに行われるようになり、2021年に日本で初めて開催される「ワールドマスターズゲームズ2021関西」をはじめ多くの大会が世界各地で行われるようになった。

このような状況から、競技スポーツと生涯スポーツは明確な区分をすることが困難となり、体育協会をとりまく環境は時代と共に大きな変革を迎えている。

６　平成の大合併と加盟団体

平成17（2005）年３月、倉吉市が関金町と合併したことに伴い、倉吉市体育協会と関金町体育協会も合併し、その拠点を倉吉市に置いた。

この合併は、各加盟団体間の調整が事前に行われ、各団体単位で合併したことで、スムーズ且つ円滑に実施された。体育協会としては、加盟団体数の増こそなかったものの、活動範囲は広がり人数は大きく膨れ上がった。

このため、活動の更なる充実と合併後の各加盟団体をはじめとする事業調整等を行う必要があったが、施設数が増えたことで加盟団体の活動の活性化が見込まれ、施設の経年劣化等を考慮すると、市当局へ施設修繕等の大きな負担がかかることは明白であった。

７　新たな課題とスポーツを取り巻く環境

既存施設のバリアフリー化や競技施設としての新基準設定、築年数の経過による老朽化が進行することで、各施設の修繕･改修の要望が高まった。

このため、体育協会として「より安全に、より安心してスポーツに親しめる環境の整備」を目指し市当局へ申し入れしているが、平成の大合併により施設数が増加したことで、危険度等を考慮した優先順位による改修計画の立案が求められている。

また、スポーツを取り巻く環境は時代と共に変化し、競技スポーツだけでなく、年齢や性別を問わず楽しむことができる生涯スポーツの普及、障がい者スポーツへの取り組みなど、従来の体育協会の活動枠を大きく広げる必要に迫られている。

さらに、日本スポーツ協会は、スポーツには「する」「見る」「支える」の３つのスポーツがあると提唱している。

これは、実践することだけがスポーツとして存在するのではなく、スポーツを取り巻く環境全てがスポーツであることを示しているため、体育協会として何ができるのか整理が必要となっている。

そして、平成28（2016）年に行われたインターハイの開催に合わせ、倉吉市自転車競技場は利便性を向上させる改修が行われ、さらには中部地区出身者がスポーツクライミング日本代表コーチとして就任したことで、県立倉吉体育文化会館は「倉

吉スポーツクライミングセンター」として整備されるなど、2020東京オリンピックを起点としたインバウンド等、倉吉市だけでなく全国のスポーツを取り巻く環境は、時代への対応と変革を求められている。

8　指導者の育成

新たな課題が多く発生している中で、倉吉市体育協会が最も注目し早期に着手したのは指導者の育成、つまり「支えるスポーツ」の根幹を成す指導者の確保に繋がる事業である。

倉吉市体育協会で活動する指導者は年々高齢化が進み、若手指導者の確保が難しくなっている中で、スポーツ界はパワーハラスメントなど多くの問題が噴出し指導者の資質向上を求められている。

また、スポーツ分野のさまざまな研究が進み、競技力向上や子どもたちの発育・発達等に関する医・科学的研究結果が数多く発表され、インターネット上は情報過多となり、指導者は情報の取捨選択を迫られている。

こうしたことから、体育協会としては、幅広く研修を実施することで次期指導者を育成し指導体制の好循環を図ることを目的として、倉吉市スポーツ推進委員協議会、倉吉市スポーツ少年団と協力し、平成18年から指導者と活動を支援する保護者等関係者へ研修会を実施している。

これにより、従前から行われている各種研修内容のほか、最新の医・科学的知識を広め、家庭や地域からスポーツ愛好者を支える仕組みを構築し、指導者の確保と資質向上を図っている。

また、近年では鳥取県理学療法士会、鳥取県スポーツ栄養研究会、アスレティックトレーナー等と協力し、情報の選択や基本的生活習慣の見直しなど､広く学習する機会を年に数回実施している。

9　鳥取県中部地震の発生とスポーツ施設の被災

平成28（2016）年10月21日、倉吉市を最大震度６弱の地震が襲った。鳥取県中部地震の発生である。

この震災は、関東地方から九州地方まで震度1以上の揺れを観測し、大阪市では、あべのハルカスや梅田スカイビルなどの高層ビルでエレベーターが緊急停止するほど広範囲に影響を与えた。倉吉市においても多くの公共施設や民家に13,090軒の甚大な被害を受けた｡これにより､平穏であった市民生活は一変し、市内は大きな不安に襲われ混乱した。

体育施設も震源地に近いスポーツセンター、陸上競技場、武道館、庭球場、野球場、温水プール等倉吉市のスポーツを支える中核施設全てが被災した。

被害概要は次の表のとおりである。

武道館	給排水管破損、天井落下、駐車場クラック等
スポーツセンター	進入路法面、駐車場歪み・クラック等
陸上競技場	トラック歪み、沈下・隆起、アナウンス室破損等
市営野球場	スタンド、記者席破損等
庭球場	コートクラック・沈下、トイレ破損等
射撃場	射台破損、場内クラック等
温水プール	流水プール本体断裂、各ポンプ浸水、ろ過器破損、ダクト支持金具断裂等
関金海洋センター	外壁クラック等

また体育センター等被害の少ない体育館は、市役所に近いことから物資保管庫として利用され、多くの加盟団体は一時的に活動の場を失ったため、体育協会として市当局に対し震災からの早期復興を要望した。

10　震災からの復興

被災した体育施設は互いに隣接していたことから､各工事をほぼ同時並行で進めることで効果的･効率的に復旧することを目指した。

しかし、余震での被害拡大等のため、当初判明していない破損個所が工事の進捗とともに判明し、施設によっては工期延長等が発生した。

このため、当初予定していた完了時期から大幅に遅れる施設もあったが、工法等の工夫により陸上競技場の平成29（2017）年９月完了を皮切りに、12月には射撃場を除き全ての施設が従前の機能を十分に果たせるまでに復旧した。

また、温水プールは人的被害こそなかったもののプール槽が破断したことから、人命に関わる大事故に繋がらないよう、本震災と同規模以上でも耐えうるよう補強を加えながら、改修を実施し、７月の夏休みに合わせ工事を完了、営業を再開した。これにより倉吉パークスクエア・倉吉未来中心は再び賑わいを取り戻した。

工事費は体育施設全体で約３億２千万円。工事期間は射撃場が再開した平成30（2018）年６月を最終として約１年８ヶ月の期間を要した。

利用できること、有ることが当たり前となっていた体育施設の「有り難さ」を再認識するとともに、大切な財産である施設を次世代へ引き継ぐため、倉吉市体育協会として市当局、加盟団体等と協力し施設の維持・保全に努める必要があることを改めて痛感した震災であった。

11　倉吉市体育協会のこれから

震災からの普及を終えた各施設は、通常利用が可能となり加盟団体は市内での活動を再開し、各施設は少しずつだが子どもたちの声が響き賑わいを取り戻している。

そして、来る2020年の東京オリンピック・パラリンピック、また2021年の関西ワールドマスターズゲームズ等、スポーツへの関心を高める世界のスポーツ祭典が日本で開催されることが決定し、倉吉市では生涯スポーツの世界的祭典「ワールドマスターズゲームズ2021関西」の自転車競技が開催されることが決定した。

今までのスポーツイベントは、規模の大小に関わらず「競技者＝する」ことが主目的であり主役であったが、東京オリンピック等を契機に日本スポーツ協会は「する」スポーツだけでなく、「観戦・応援＝見る（見せる）」「指導者、保護者、ボランティア等＝支える」もスポーツ活動の大切な一翼であると示し、その推進を図っている。

このため、倉吉市体育協会としても、その波及効果と目的を明確にしていくことで、体育協会の存在意義を示せるものであると考え、多くの市民がスポーツ活動へ気軽に参加できる環境の整備を図る必要がある。

また、本祭典へ積極的に関わりを持つことで、個々のニーズに合わせたスポーツ活動の推進が図れると考えるため、加盟団体にない競技であるが積極的に協力し、「見る」「支える」のスポーツを推進し、施設の計画的な改修及びスポーツ環境の整備等多くの課題はあるが、倉吉市体育協会の「あるべき姿」を模索する。このため、「誰もが」「気軽に」「いつでも」楽しめるスポーツ環境の創出を市当局、関係団体と協働し目指すこととしている。

子どもたちには、地元選手等の活躍から自身の夢を描き、可能性を広げ努力できる環境を、マスターズの皆さんには目標に向かい日々努力できる環境を提供できるよう努め追及することで、地域から信頼され持続的に成長できる倉吉市体育協会を目指している。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

平成２年～13年	早川　芳忠
14年～19年	長谷川　稔
20年～25年	桑本　圭二
26年～	生田　正範

◇理事長

平成２年～14年	谷田　篤美
15年～16年	福井　時雄
17年～19年	桑本　圭二
20年	福光　純一
21年～25年	福井　伸一郎
26年	進木　智朗
27年～29年	谷田　富穂
30年～	種子　真一

境港市体育協会

１　基本方針と事業の実施

境港市体育協会は、加盟競技団体、関係機関との連携を密にして、競技力の向上はもとより、社会体育・スポーツの普及発展と市民体力の向上を図るため、各種の事業を実施している。

市民総合体育大会を開催し、種目ごとの選手強化と役員養成、大会運営能力の向上を図るとともに、広く市民に参加を呼びかけ、スポーツに対する認識と理解を深めている。

さらには鳥取県民スポーツ・レクリエーション祭に選手を派遣し、県内に活動の輪を広げ、生活を豊かにする生涯スポーツの振興を図っている。

市民を対象としたスポーツ教室を開催し、広く市民にスポーツ活動の喜びを認識してもらい、体育・スポーツの普及振興を図っている。

各種講習会・研修を実施して指導者を育成するとともに、スポーツクラブ・グループの拡大・確立に努めている。また、加盟団体の組織整備と体育協会機能の充実を図り、自立の気風を涵養している。

２　加盟競技団体

平成２（1990）年にグラウンドゴルフ協会が加わり、加盟競技団体は25団体となった。平成18（2006）年度に銃剣道連盟が退会、平成28年度にゲートボール協会が退会し、現在23団体が加盟している。

３　ターゲットバードゴルフ場の整備

平成21（2009）年、境港市民体育館敷地内の屋外庭園部分にターゲットバードゴルフ場が整備された。

ターゲットバードゴルフは、傘を逆さにしたようなネットにバドミントンの羽根のようなものを取り付けた合成樹脂製のボールをゴルフクラブで打ち、ホールアウトするまでの打数を競うものであり、ゴルフクラブ１本で手軽に出来る個人競技スポーツで、メンバーとスコアを競う競技だが、ゴルフの経験の無い者も参加できる生涯スポーツとして導入された。

ターゲットバードゴルフは、シャトルボールを使用することから、羽根が飛距離を押える働きをするため狭い場所でもでき、ボール自体も軽量で安全性の高いスポーツである。また、ボールはふわりと高く打ち上げる技術が要求されるので難度性も高く、ホールインの喜びや狭いコースでも思い切り打てる爽快感がある。

子どもから老人まで幅広い年齢層で手軽に楽しむことができるニュースポーツとして取り入れ、市民の健康増進、スポーツ振興の一助となっている。

４　海のスポーツ

境港は、「みなとまち」であることから、海のスポーツに力を入れている。

境港ボート協会では、昭和24（1949）年から昭和38（1963）年にかけて境水道において、「みなと祭」の協賛事業として港レガッタ（現在の境港ボートレース大会）を開催し、ボート競技の発展に努めていた。

しかし、高度経済成長期に港湾の整備などが行われ、拠点が境水道から中浜港に移された。このことにより昭和38年を最後に港レガッタは中断し、協会の活動も一時停滞した。

昭和62（1987）年に、今まで中断していた境港ボートレース大会を復活させ現在に至る。

平成８（1996）年には、念願であった市民艇庫が完成した。また、同時に境港ボート協会が中心になり寄付を集め、カーボンナックル艇を購入した。

平成17（2005）年から親睦事業である「境港ボートマラソン大会」や、平成18年から中海圏域の交

流の場としての「中海レガッタ」を開催している。

平成27（2015）年には、「中海レガッタ」第10回大会を機に松江ボート協会・米子ボート協会と実行委員会組織を立ち上げ、中海・宍道湖圏域へ交流の場を拡大し、昭和57（1982）年の「くにびき国体」のボート競技会場を復活させた「中海・宍道湖レガッタ」を実施している。

息をそろえて、前へ（平成26年、中海レガッタ）

境港では、ビーチバレーの歴史も長く、昭和63（1988）年に境港青年会議所が第１回山陰ビーチバレーボール大会を開催し、歴史を重ねている。現在は、境港市バレーボール協会を中心に、ビーチバレーの愛好家やママさんバレーボールチームなどで実行委員会組織を作り、会場設営や運営を行っている。当初市民の大会としてスタートした大会も「Ｓｕｎ-ｉｎビーチバレー大会」と名称を変え、日本ビーチバレーボール連盟の公認大会となり、全国から数多くのトッププレーヤーがこの境港に集い、熱戦を繰り広げている。

また、Ｖプレミアリーグが創設される前の実業団チーム時代から、全日本選手を呼び大会を盛り上げるとともに小学生バレーボール教室を開催し、バレーボールの普及に取り組んでいる。

そして、平成８（1996）年から「鬼太郎に会えるまち境港」のＰＲとバレー愛好者の方々が気軽に楽しめることを目的に「きたろうカップビーチバレー大会」も始めている。

５　駅伝のまち境港

境港市では駅伝も盛んで、平成13（2001）年より毎年、「鬼太郎に会えるまち境港」のＰＲも兼ねて、「鬼太郎カップ境港駅伝競走大会」が開催されており、境港陸上競技協会も運営に携わっている。この大会のコースである日本陸連公認「サカイマリンマラソンコース」はその名のとおり、海からの心地よい潮風と、“港町”境港の風景を感じることができる魅力あるコースとなっている。また、境港市の平らな地形は、高低差が少なく走りやすいと選手から好評をいただいている。

部門は「一般」、「大学」、「自衛隊」、「高校」の四部門あり、「自衛隊」部門は、自衛隊の基地が置かれている境港市ならではの全国でも珍しい部門となっている。

第10回からは、境港市とロシア・ウラジオストク市､韓国･東海市を結ぶＤＢＳクルーズフェリーの就航を記念し、韓国、ロシアの両チームを招待し、「日韓ロ国際交流鬼太郎カップ境港駅伝競走大会」が開催されている。駅伝を通じて、国際交流の推進につながっている。

「全国高等学校駅伝競走大会鳥取県予選会」も毎年境港市で開催され、高校生ランナーが健脚を競っている。そして、中国５県輪番で実施されている「中国高等学校駅伝競走大会」も、５年に１度境港市で開催されている。

６　加盟団体の独自事業

加盟団体もこれ以外に独自の事業に取り組んでおり、軟式野球協会の社会人野球大会をはじめ、陸上競技協会が小学生対象のジュニア陸上教室、スキー協会がジュニアスキースクール、ソフトテニス協会が夢みなとルーセントカップ、柔道協会が青少年育成柔道大会、弓道協会が弓道技術講習会、相撲協会がすもう選手権大会、水泳協会が体育の日の水泳祭り、卓球協会が審判講習会、バスケットボール協会がバスケットボールカーニバル、バドミントン協会が小・中学生大会、ハンドボール協会がハンドボール教室、サッカー協会が境港ジュニアサッカーフェスティバル、おさかなカップ、テニス協会が講習会、ヨット協会がセー

リング体験会、グラウンドゴルフ協会が普及指導員講習会などを行っている。

7　境港市体育協会表彰

表彰規程に基づき、境港市のスポーツの発展に功績のあった個人及び団体に、体育功労賞・優秀監督賞・スポーツ賞・スポーツ奨励賞を贈り、スポーツに取り組む機運を醸成している。平成29（2017）年度は、スポーツ賞を個人16名、団体２団体、スポーツ奨励賞を個人57名、団体25団体が受賞している。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

平成４年６月～15年５月	黒見　哲夫
16年６月～21年５月	渋山　国雄
22年６月～28年５月	梅木千賀子
28年６月～	高木　敏行

◇理事長

平成４年６月～10年５月	水嶋　　清
10年６月～14年５月	池田　建二
14年６月～18年５月	松本　雅人
18年６月～22年５月	善波　　周
22年６月～	平松　謙治

岩美町体育会

浦富海岸健康マラソンの様子

1　平成の大合併で岩美郡体育協会が消滅　岩美町体育会へ

平成17（2005）年、岩美郡体育協会が平成の大合併を機に消滅し、岩美町体育会が名称もそのままに引き継ぐこととなり今日に至っている。体育会主催の大会は、年間14種目、参加者は、延べ約900名である。また、町が主催する全国規模のスポーツイベント２種目に関わっている。

一つは、浦富海岸健康マラソン（山陰松島健康マラソンを改称）である。わかとり国体に向けて町内のスポーツ熱の盛り上がりを受け町内の有志が提案し、国体後の昭和61（1986）年、第１回山陰松島健康マラソンとして実施した。最長10kmの部は、起伏とカーブが多いが美しい海と島々の大自然と一体となったリアス式海岸の中を走るコースで人気を博している。平成27（2015）年の30回

記念大会は、ゲストに有森裕子氏を迎えたこともあり参加者が、3,413人にもなった。危険回避のため、翌年28年からウオーキングの部を廃止し、定員を2,500人に設定し行っている。また、浦富海岸健康マラソンと名称変更し、10㎞グループチャレンジの部を新設して実施している。

二つ目は、「山陰海岸ジオパーク岩美キッズトライアスロン大会」である。山陰海岸が世界ジオパークに認定されたのを契機に、前身の「鳥取砂丘ジュニアデュアスロン全国大会」を発展させて、平成23（2011）年からは従来のバイク、ランにスイムを加えて全国規模の大会として運営している。平成29(2017)年の参加者は全国から276人。県外の選手のレベルが高く、町内の選手のレベルアップが課題となっている。

２　各競技団体の主な活動と全国大会入賞者及び出場者

【陸上競技】

平成29年、町村合併後から出場の途絶えていた米子鳥取間駅伝への15年ぶりの復帰を果たした。過去、優勝２回を誇るこの大会への復帰は、関係者の喜びひとしおであった。しかも中学生２名が区間賞に輝くという快挙を成し遂げた。

・陸上競技協会歴代会長

平成８年～　　小原　大忍
15年～　　薮田　　潔
21年～　　赤坂　清志
29年～　　中村　義昭

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第32回浦富海岸健康マラソン大会
第60回岩美町駅伝大会

・全国大会入賞者

平成８年（全国中学）小谷彰　走り高跳び６位
９年（全国中学）小谷彰　走り高跳び１位、三種Ａ２位
14年（全国小学）小林弘之　走り幅跳び　２位
18年（国民体育大会）澤田研二　少年男子共通5000m競歩６位
20年（全国障害者大会）堰本将平　男子100m　３位、走り幅跳び１位
21年（国際・全日本マスターズ大会）山内壽一　走り幅跳び３位、走り高跳び４位
（夏季デフリンピック台北大会）堰本将平　男子400mリレー６位
22年（全日本マスターズ大会）山内壽一　走り幅跳び優勝、走り高跳び２位
（全国障害者大会）堰本将平　男子100m・走り幅跳び　優勝
25年（全国高校総体）大森太楽　3000m障害８位
28年（全国高校総体）大森太楽　3000m障害８位

・全国大会出場者（平成８年～平成30年）

園山裕史、村上浩一、岡村憲利、田村大輔、小林陽介、駒崎恭平　田中聡、奥谷海、河合亮祐、米田渉、石名望、山田真美、鈴木英太、山田真美、井筒結希、濱崎里菜、中本唯愛

【水泳競技】

「水泳・岩美」と称され多くの名スイマーを輩出した昭和時代に比べ、平成に入るとやや低調だが、郡小体連が４年生以上全員参加の方針で水泳大会を実施したのを契機に選手層も厚くなり、生涯スポーツとして水泳を続けている選手も多く、小中高校の選手を中心に復活の兆しが見えてきている。

・水泳協会歴代会長

平成７年～　　吉田好一
12年～　　植田武郎
21年６月～　　河合芳和
25年～　　濵田和文

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第49回岩美町水泳大会（岩美中学校プール）

・全国大会入賞者

平成６年（全国身体障害者大会）山岡昭男

50m自由形１位
13年（日本身体障害者水泳大会）山岡昭男
25m平泳ぎ・背泳ぎ３位
（国民体育大会）川口　望
100m平泳ぎ２位
14年（全国身体障害者大会）山岡昭男
25m平泳ぎ１位、自由形４位
19年・20年（全国マスターズ水泳大会）
植田武郎　25m背泳ぎ１位
（全国マスターズ水泳大会）植田綾子
25m背泳ぎ３位
26年（ねんりんピックとちぎ水泳大会）
植田武郎　50m背泳ぎ優勝
29年（ＪＯＣ夏季ジュニアオリンピック）
西本卓誠　100m自由形14位
・全国大会出場者（平成７年～平成29年）
川口望 、仲山桃代、西本拓真

【野球】

昭和50（1975）年、野球を通して町民の体力向上と親睦を図るために発足し、鳥取県内では初めてリーグ戦を開催（６チーム）するなど県内の先駆けとなった。平成15（2003）年には東部社会人壮年野球大会で岩美クラブが優勝し、日本海新聞スポーツ大賞を受賞するなど輝かしい実績を残しているが、近年の少子化、他競技の人気の高まりを受け少年野球人口の減少に歯止めがかからず、低迷が続いている。

・野球連合会歴代会長
平成７年～　　岩見誠次
16年～　　中嶋政幸
・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第63回岩美町野球大会（岩美町総合運動場野球場・岩美中学校グラウンド）
・全国大会入賞者
平成24年（明治神宮野球大会）濱田昂輝、尾下竜成（鳥取城北高）ベスト４
26年（全国中学野球選手権大会）清水響、鍵井怜緒（鳥取ボーイズ）ベスト４
28年（カル・リプケン12歳以下世界少年野球大会）出井斗哉　優勝
・全国大会出場者（平成15年～平成29年）
岩美北少年野球クラブ、濱田昂輝、尾下竜成、植田陽介、前田翔平、澤率雄、太田全哉

【ソフトボール】

昭和59（1984）年東因ソフトボールリーグが発足（代表、前田宏氏）以後、30年の長きに亘り、町のソフトボールの中心となって大会等運営をしてきた。平成５（1993）年網代新港に専用グラウンドが完成した。毎年、開幕日に海岸清掃を行い、平成14（2002）年にはその功績が評価され、日本海新聞スポーツ大賞を、また、平成26（2014）年には地域を元気にする取り組みが認められて、同ふるさと大賞地域貢献賞が授与された。創立30周年記念式典を盛大に開催した。

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第41回岩美町40歳以上ソフトボール大会（東因球場・岩美西小学校グラウンド）

【卓球】

昭和44（1966）年設立以来、町選手権、初心者大会など年間５～６回大会を開催している。

ＰＴＡ卓球大会は、合併以後も岩美郡卓球大会として福部・国府と共催で継続している。

スポーツ少年団は、蒲生地区が早くから熱心に取り組み優秀な選手を輩出してきた。平成15（2003）年には、山陰小学校大会団体で優勝した。その後も全国・西日本の大会に度々出場して、卓球岩美の名を高めてきた。その後、岩美南小に継続し今日に至っている。数多くの名選手を輩出しているが、特筆すべきは昭和時代の鈴木清（院内）、小谷小夜子（宇治）、山中教子（陸上（くがみ））であろう。特に山中は、全日本選手権で２度の優勝した。世界選手権にも３度出場した。小谷は全日本学生選手権で優勝し現在もシニア選手権で活躍している。

・卓球協会歴代会長

平成７年～　　吉田達男
９年～　　田村幸男
22年～　　山本達雄

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第60回岩美町卓球大会（岩美町民体育館）

・全国大会入賞者
平成17年　井本かおり　全国定時制通信制体育大会卓球競技　個人３位

・全国大会出場者（平成７年～平成21年）
蒲生スポーツ少年団女子チーム、平井翔子、佐々木大輔、平井亮輔、福田美由紀、中村悦子平井憲子、梶田涼、日下部結女、岩美南小学校岩美南小学校卓球部女子、内田結人、西川翼、山根悠、浜田亜友美

【ウエイトリフティング】

昭和55（1980）年設立。昭和60（1985）年わかとり国体成年の部の会場となり町民体育館が新築され、同時に練習会場も完成、協会が結成された。とともに町民に競技への理解と関心が高まり、そのわかとり国体少年の部に出場した西本宣充（大谷）は、大会新・高校新記録の見事な成績を収め、その後国際大会で活躍し、平成４（1992）年バルセロナオリンピックで８位入賞している。現在、高校教諭として熱心に後進の指導に当たっている。選手層も厚く、毎年、全国大会へ出場させている。

・ウエイトリフティング協会歴代会長
平成７年～　　吉田達男
９年～　　寺谷和徳
14年～　　中嶋政幸

・全国大会入賞者
平成７年（国民体育大会）西本宣充１位、升田友也６位
８年（国民体育大会）西本宣充１位、山内大輔５位、升田友也５位、小山隆次８位
９年（国民体育大会）西本宣充１位、升田友也５位
９年（全日本選手権大会）升田友也２位、小山隆次５位
10年（全国高校総体）川口貴裕１位
11年（国民体育大会）升田友也２位、川口貴裕６位
（全国高校総体）川口貴裕３位
28年（全国高校女子選手権）依藤そら４位

・全国大会出場者（平成６年～平成27年）
山内健太郎、田中麻紀子、中嶋哲也、小林克巳、川口優樹、沖島昂哉、高橋伸幸、山部雅弥

【バスケットボール】

昭和56（1981）年、早川竹義氏を初代会長として発足した。当初は、一般の競技人口が少なく、小中学校で教師の指導で課外活動として行われていた。その後、ミニバスケットの対外試合にも出場するようになり、県大会でも優秀な成績を収めるようになった。平成９（1997）年岩美中学校が中国大会へ出場するまでになった。平成６(1994) 年から武井皇志氏を大会委員長として「鳥取IWAMIカップ」ミニバスケット交歓大会を主催し、西日本各地から男女約60チームが集い、現在のバスケット人気の礎となっている。

・バスケットバール協会歴代会長
平成５年～　　早川竹義
15年～　　福本博文
29年～　　濱田恒治

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第35回岩美町バスケットボール大会（岩美町民体育館）

・全国大会入賞者
平成18年（国民体育大会）中島章恵　少年女子ベスト８入賞

・全国大会出場者
山下恭平

【バレーボール】

伝統的に盛んで選手層も厚い。成年を中心に岩美クラブが結成され、鳥取県リーグでも優秀な成

績を収めている。近年は、１部に昇格し、小中学生の指導にも力を入れている。岩美高等学校女子チームが、平成28年度より町内外から優秀な選手が入学し、強化に努め全国大会に出場するまでになった。

・バレーボール協会歴代会長

平成７年～　小西康隆
15年～　前田俊一
21年～　中島宗男
25年～　川口耕司

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第60回岩美町バレーボール大会（岩美町民体育館）
第16回岩美町ソフトバレーボール大会（岩美町民体育館）

・全国大会入賞者

平成21年（全国高校定時制通信制総体）
浜田亜友美　ベスト８
25年（全国ヤングバレーボール大会）
浜岡亜美、元部瑞稀、宇和田百花　16位

・全国大会出場者（平成６年～平成29年）

岩美バレーボールクラブ（男子）、西山竜一、田中智也、難波大輔、河本文俊、嶽　浩充、山根悠也、森本一斗、山本竜也、谷岡　武、山本文也、岩田涼太、田村力輝、濵田亮太、大西祐太、松野泰河、片山祐希、沢田美七海、幸田海成、野津あかね、三田和香奈、引田瑛樹、河口裕宇、北村理佐子、髙村日菜、三谷杏子、中嶋妃風、西﨑彩葉、 宮本紗江、宮本真里、博田莉生、三浦智夏、松上詩歩、高橋紗友、下雅意朱子、黒田実音、小島健太郎、高垣新生、澤大成

【バドミントン】

・バドミントン協会歴代会長

平成19年　横川隆弘
20年　松村孝也
21年～　土海邦男
25年～　田中伸吾

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第37回岩美町バドミントン大会（岩美町民体育館）

・全国大会出場者（平成８年～平成23年）

村上菜穂子、土海　哲、澤　昌樹、日下部里美、日下部智章

【グラウンド・ゴルフ】

・グラウンド・ゴルフ協会歴代会長

平成７年　松本善之助
８年～　小谷　和助
18年　田中　　貢
19年～　山本　知正
25年～　岡本　晴夫

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第28回岩美町グラウンドゴルフ大会（岩井グラウンドゴルフ場）

・全国大会入賞者

平成28年（国民体育大会希望郷いわて大会）大
崎正春　団体第３位

【ゲートボール】

・ゲートボール協会歴代会長

平成８年～　博本　暁
18年～　山田　満
26年～　山本知正

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第37回岩美町ゲートボール大会（岩美町民総合運動場ゲートボール場）

・全国大会出場者

いわみチーム

【テニス（硬式・軟式）】

・テニス協会歴代会長

平成７年～　中村勝彦
13年～　澤　勝則
24年～　澤田和恵

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）

第30回岩美町テニス大会（岩美町民体育館）

第49回岩美町ソフトテニス大会（岩美町民体育館）

【剣道】

・全国大会出場者（平成15年～平成29年）
岩美剣道クラブ団体、出雲彩香、出雲大輔、小倉　大、田中潤之介、小倉　和

【サッカー】

・全国大会入賞者
平成29年（全国高校サッカー選手権大会）鍛治川　友貴（米子北高校）ベスト８

【フェンシング】

・全国大会入賞者
平成10年（全国高校総体）藪田光昭８位
11年（全国高校総体）松葉大作７位
・全国大会出場者（平成17年～平成29年）
中川智絵、田中志朗、村上厚貴、岡村悌志、村上欣希、吉浦拓志、中村颯太、井筒麟太郎、西岡菜々子

【柔道】

・全国大会出場者（平成15年～平成24年）
牧田大助、尾﨑正文、鯉口美華、宮本裕一、鯉口　尊、恵美須大地、寺谷大輔、川口味希、岩美中学校男子柔道部、磯見明夫、米村和也

【空手道】

・全国大会出場者（平成８年～平成29年）
高垣絵梨子、上野　桜、岩淵大和、若松寛大、赤坂宇宙、岩淵　優、入江春奈、黒部将健

【弓道】

・全国大会入賞者
平成７年（全国通信弓道大会）高橋顕尚２位
（全国通信弓道大会）岩美中学校弓道部（男子）２位
（全国通信弓道大会）岩美中学校弓道部（女子）３位
20年（全国高校総体）牧野大樹４位
21年（全国高校総体）杉村香苗(女子団体)３位
・全国大会出場者（平成７年～平成25年）
山下真紀、木村拓海

【アーチェリー】

・全国大会入賞者
平成10年（全国高校総体）澤　麻美１位
（国民体育大会）澤　麻美８位
・全国大会出場者（平成16年）
松本繭子

【トライアスロン】

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第７回山陰海岸ジオパーク岩美キッズトライアスロン全国大会
・全国大会入賞者
山陰海岸ジオパーク岩美キッズトライアスロン全国大会
平成23年　石名　萌３位、山本和寛６位
24年　石名　萌２位
25年　石名　萌３位

【スキー】

・全国大会出場者
平成29年　西岡妃菜

【ボート】

・全国大会入賞者
平成10年（国民体育大会）大西教文８位
24年（全国高校総体）小西貴大16位
29年（国民体育大会）橋本恵美６位
・全国大会出場者（平成８年～平成21年）
澤　留美子、橋本明子、西浦健吾、四井賢司、宮本健司、河上和秀、岡田倫枝、平井里茄、森文香、谷口優香、中村佳那美、上村悠珠

【登山】

・全国大会出場者（平成10年～平成18年）
橋本修一、元井大喜、八杉耕平

【なぎなた】

・全国大会出場者（平成20年～平成21年）
池口　瞳

【ドッジボール】

・全国大会出場者（平成13年）
IMミラクルファイターズ（岩美南小）

【新体操】

・全国大会入賞者
平成15年（全国中学校総合体育大会）
早竹恵梨奈５位

【ホッケー】

・全国大会出場者（平成20年～平成21年）
高田沙貴

【レスリング】

・全国大会出場者
平成24年　鍛治川太佑

【ラグビーフットボール】

・全国大会出場者
澤　脩都、引田瑛樹

【ライフル射撃競技】

・全国大会出場者
平成27年　石名　萌、野嶽孝太

【バウンスボール】

・町（体育会）主催大会開催状況（平成29年）
第３回岩美町バウンスボール大会（岩美町民体育館）

【日本海新聞ふるさと大賞（スポーツ功労賞）受章者】

2009年	堰本　将平（陸上競技）
2010年	山内　寿一（陸上競技）
2011年	谷口　美帆（陸上競技）
2012年	岩美中学校陸上部
2013年	大森　太楽（陸上競技）
2014年	植田　武郎（水泳）
2015年	岩美町グラウンドゴルフ協会
2016年	出井　斗哉（野球）
2017年	岩美高等学校女子バレーボール部

【歴代会長、理事長】

【岩美郡体育協会】

◇会長

平成５年～６年	木村　　肇
７年～８年	村田　梅雄
９年	吉田　達男
10年	榎本　武利
11年～12年	木村　　肇
13年～14年	山部紘一郎
15年～16年	榎本　武利

◇理事長

平成５年～６年	加藤　保雄
７年～８年	老門　辰生
９年～10年	大黒　啓之
11年～12年	加藤　保雄
13年～14年	老門　辰生
15年～16年	大黒　啓之

【岩美町体育会】

◇会長

平成５年～６年	澤　徳次郎
７年～８年	北村　広美
９年～14年	小原　大忍
15年～20年	澤口　　宏
21年～24年	植田　武郎
25年～30年	寺本　　努

◇理事長

平成５年～８年	小原　大忍

９年～14年	前田　俊一	21年～24年	中島　宗男
15年～20年	田村　幸男	25年～30年	福田　照実

八頭郡体育会

八頭郡体育会旗

八頭郡の体育の先覚者たちは、時代を先取りしながら体育の振興と普及に尽力した。その流れを受け継いだ八頭郡体育会は、郡民の体力や技能を向上させるとともに郡民が相互の親睦と交流を図りながら、心を一つにして活力あるふるさとづくりを念頭に「八頭郡は一つ」という大きな理想と構想をもって歩んできた。

体育会は、その目標の達成を目指して組織を強化し、斬新な企画・運営をしながら競技力の向上を図るとともに各種スポーツの普及と発展に取り組んできた。

１　八頭郡体育会の理念

八頭郡体育会は、「スポーツの振興は競技力の向上と底辺の拡大を車の両輪として考えられなくてはならない。スポーツは文化であって、私たちの暮らしを高め、社会の進歩に大きく貢献するものでなければならない」という理念に基づいて活動してきた。

２　八頭郡体育会の組織・運営

体育会の運営には、次の３つの特色がある。

（１）八頭郡の体育のまとまりとして、郡内の競技団体は体育会のもとに「八頭郡体育会○○部」と位置づけており、体育会長や事務局を郡民だれでも明確に即答できるほど郡民に浸透している。

（２）体育会長が郡内の町村長の中から互選により選出されることと事業の推進は郡町村会で編成された予算で運営されることにより、各競技部の関係は対等となり、事業の推進や運営にバランスが保たれるとともに、全郡体制がとりやすい組織運営がなされている。

（３）郡内「○○部」の競技会には主催者として

体育会長が出席する等、本部独自の取り組みをしている。

３　体育会の基盤の確立

体育会は花原勇、高木嘉一、山本勲、中村勝実、梶川宗行などと森尾善治町村会事務局長が連携して、八頭郡体育の振興に尽力し、確かな基盤を確立し発展させた。その主たる取り組みとして八頭郡駅伝競走大会、米子～鳥取間駅伝競走大会、八頭郡民体育大会、県民体育大会、県民スポーツ・レクリエーション祭等が上げられる。

八頭郡駅伝競走大会は、「八頭郡は一つ」を合言葉に郡内全８町村を回り、沿道では選手に熱烈な声援を送る秋の風物詩として、地域住民を巻き込んだローカル色豊かな盛大な大会として発展した。

また、米子～鳥取間駅伝競走大会は郡駅伝競走大会の延長線上に位置づけ、八頭郡体育会としてチームを編成し出場する体制づくりをした。

さらに、八頭郡民体育大会は、八頭郡の最大のイベントとして、「八頭郡民が一堂に相集まり、スポーツに対する関心を深めると共に、相互の親睦と体位の向上を図る」ことを目的として体育会が企画・運営の中心となって発展させた。

また､県民体育大会や県民スポーツ･レクリエーション祭の予選会は、主催者として体育会長が出席し､会場を全８町村に振り分けて開催するなど、常に全ての八頭郡民を対象とした運営を行った。このことは、スポーツの普及と振興に努めるとともに、地域の活性化をも考えて取り組んだことによるものである。

４　伝統の継承

継続は力なりといわれるが、平成に入り体育会の基盤を確立した役員が勇退した後、小倉晧二、高橋吉三郎、加藤憲雄、中尾等などが受け継ぎ、入江文代町村会事務局長と連携し、円滑な世代交代をしながら平成16（2004）年度まで堅実な運営をしてきた。

町村合併後の平成17（2005）年以降は、事務局を体育会長就任の教育委員会事務局に設置し、瀧田修、山本公義、加藤憲雄、中尾等などを中心に、林敦司、岡崎浩一、小坂二郎、大坪紘司などが組織の運営に務めている。

八頭郡体育会視察研修

５　たゆまぬ研鑽

八頭郡の先覚者北畠良一郡長は、大正時代に極東オリンピックや国内先進地の体育指導者講習会に指導者を派遣するとともに、時代の先端を行く講師を招くなど、八頭郡体育の振興と発展に尽力した。その流れを引き継ぎ、時代を牽引した先達は研鑽を重視し積極的に各種大会や研修会に指導者を派遣した。

（１）オリンピック視察団の派遣

八頭郡体育会は、昭和39（1964）年の東京オリンピック大会に視察団を派遣し、大きな収穫を得た。以後、ソウル・バルセロナ・アトランタ・シドニーの各オリンピック、広島・バンコク・釜山の各アジア大会に視察団を派遣し研鑽を重ねた。

（２）指導者の育成

国内で開催される国民体育大会、先進地の研修会、講習会、各競技団体が主催する大会等へ指導員等の関係者を派遣した。

６　確かな基盤と堅実な歩み

（１）陸上競技・駅伝

八頭郡民の多くは伝統的に運動会、マラソン、駅伝を好み関心を持って関わっている。運動会は昭和20年代の小学校区規模の小地域での開催から町規模まで郡内各地で継続して行われている。ま

た、長距離・駅伝・マラソン大会を郡内全８町村が独自の構想をもって主催・後援し、周辺や全国にまで呼びかけて開催した。

陸上競技では国民体育大会、ジュニアオリンピック大会、全国高校総体で優勝者や入賞者が出ている。

駅伝競走では、米子～鳥取間駅伝競走大会の郡市の部で数回の優勝に輝くなど常に上位に位置してきた。女子も郡市対抗日本海女子駅伝競走大会で高校・一般の部、中学校の部で優勝するなど実績を残している。また、県中学校駅伝競走大会では八東中学校、中央中学校、八頭中学校が優勝し、全国大会でも活躍した。

（２）水泳

隼プールを起点とした水泳競技は、隼プールで育った選手や指導者、関係者の尽力により郡内で裾野を広げ、小・中学校を中心に確かな歩みを続けている。一方でスイミングスクールへ通う児童、生徒が活躍する時代が到来した。智頭リプル（智頭温水プール）で育った智頭中学校の女子選手が県中学校総体、中国中学校総体で総合優勝、全国中学校総体でも活躍するなど選手強化の方策が顕著になった。このような中で水泳は大衆化し、水泳の愛好家や競技者が各世代に広がっている。八頭町隼地区では公民館が中心となって「隼プール祭り」が毎年開催されていたり、プールでの健康づくりやマスターズ大会等へ参加したりするなど多くの郡民が水泳を楽しんでいる。

（３）バレーボール

起点を戦前の女子師範学校、八頭高等女学校として昭和の女子バレーボールの活躍は目覚ましく全盛期であった。平成に入ると婦人バレーで往年の選手が活躍しているが、小学生でもスポーツ少年団女子バレーボールクラブが活躍し、中学校へ受け継がれ全国大会に出場する選手を輩出するなど実績を残している。また、一般男子で高校時代に活躍した選手を中心に、八頭クラブなどが日本海リーグで活躍している。

（４）バスケットボール

起点を戦前の女子師範学校として教員が中心となって普及し発展させてきたが、だんだんと教員以外の関係者が中心となって活動している。小学生がミニバスケットボールで基本を学び、中学校、高等学校で継続して活動している。近年は、少子化による競技人口の減少という課題を受けながらチームを編成して大会に出場するなど地道に活動している。

（５）ソフトテニス

大正時代に競技大会が開催され、中高年層に愛好家が多い。近年は小学生が携わる機会がなく、中学校の部活動も人数が限られてきている。こうした中で成年男子は県民体育大会、県スポーツ・レクリエーション祭で実績を残している。

（６）卓球

昭和８年ごろの河原卓球クラブの設立を起点とし、昭和20～30年代は全盛期で現在も中高年層には愛好家が多い。競技人口は以前より少なくなってきているが、各種大会の開催や県大会への出場など堅実に活動している。

（７）野球

八頭郡での野球の始まりは、昭和20年代前半である。その後、中学校で優れた指導者により戦力は常に県下のトップレベルを維持し競技力の向上と野球熱を盛り上げた。また、小学生はスポーツ少年団活動として家族・地域ぐるみで活動し、大盛況となった。さらに、八頭高等学校が全国高等学校野球選手権大会（夏）に８回、選抜大会に１回出場したことで郡民の関心が高まり、野球が郡内の隅々まで浸透することとなった。

郡内には、ナイター設備が数多く完備されるなど施設や環境が充実し、小学生からシニア世代まで随所の施設で試合が行われ野球を楽しんでいる。

（８）バドミントン

郡として組織的な導入は昭和40（1965）年智頭町那岐地区で発足し、郡内に働きかけ発展させた。小学校、中学校で携わる機会がなく、学生時代の

経験者も少ない。社会人になってから町村のクラブで楽しみながら練習し、根気強く地道な取り組みを重ねて競技力を向上させ各種大会に出場している。

（9）柔道

昭和24（1949）年に河原町同好会が創設されたのが始まりで、昭和51（1976）年には郡柔道協会が設立され、卓越した指導者により各町村に道場が開設された。県内でも屈指の柔道伝統地域として、小学生から一般まで優秀な選手が多数育ち全国大会にも出場している。

（10）剣道

歴史は古いが、近年は各町村の剣道教室で育った小学生が中学校の部活動で継続して取り組み、各種大会に出場し活躍している。近年は指導者の高齢化と少子化の課題を抱えながら堅実に活動している。

（11）スキー

日本スキー連盟が創設される以前の大正７年に北畠郡長により郡家町に源を発し､女子師範学校、智頭町、若桜町に受け継がれた。その後、地理的条件に恵まれた「わかさ氷ノ山スキー場」を中心に若桜山岳会、若桜氷ノ山クラブが普及と振興に努め、スキー人口が増えるとともに県を代表する選手を輩出した。

平成６（1984）年にはフロンティアスキークラブが結成され、アルペン競技の選手強化に向けた取り組みが始まった。近年になって、若桜町をはじめとして郡内各地域からも国体や全国中学校大会に出場する選手が次々と出てきた。一方、クロスカントリー競技も中学校の優れた指導者により中学生が全国大会に出場している。

（12）山岳

歴史は古く、起点を明治時代末期として郡内に登山愛好家は多い。平成時代は部長を中心に山岳の基礎・基本を重視しながら着実に活動し発展させてきた。近年、競技人口は少なくなったが、山岳強化訓練キャンプ、登山訓練など、着実な活動をしてきた。

（13）ゲートボール

昭和50年代に各町村が導入し、熱心な指導者により高齢者を中心に急速に普及し発展した。郡大会、各町村大会などが数多く開催され、全国大会には毎年出場し実績を残した。しかしながら、近年は高齢化が進み競技人口が減少している。

（14）グラウンド・ゴルフ

歴史は新しいが、誰にでも手軽にできるスポーツとして、特に高齢者層に愛好家が多く競技人口は一番多い。大会は目白押しで、郡内はもとより県内いたるところで開催されている。そのような中、県大会でも優勝者を出すなど上位の成績を残している。

７　全郡体制で大会開催と参加

（１）八頭郡民体育大会

昭和26（1951）年に発足し、体育会は第１回大会から総力をあげて大会運営に携わった。

大会は、各町村長を先頭に小学生からシニアまで一堂に会し、町村対抗で覇を競うとともに、郡民が一体となって体位の向上と相互の親睦を深めるスポーツ大会に発展し、平成12（2000）年には第50回記念大会を挙行した。

この大会が八頭郡最大のイベントとして発展し継続したのは、長年にわたり郡町村長会をはじめとして、郡内の諸団体の理解と支援のもとに地域住民が一体となって推進したことによる。

中でも発足当時からその中核となり、万難を排して大会運営に携わり大会発展に尽力した花原勇、高木嘉一、山本勲、中村勝実、梶川宗行、森尾善治、河上進、梨原巖らの功績が大きい。

50回大会を終えて、総括と今後の大会のあり方について諮問委員会を設置して審議し、それを受けて体育会長は、郡町村会長会に諮り継続することが決定した。

そして、51回大会では、千数百人の郡民が参集し、盛大な大会となった。しかしながら、町村合併により、平成15（2003）年の第52回大会をもって終幕となった。本大会は半世紀にわたりその果

たした役割は郡民周知のとおりである。また、八頭郡のまとまりとしてアピールする他郡市に例をみない大会であった。

第52回八頭郡民体育大会

（２）米子～鳥取間駅伝競走大会

郡駅伝競走大会を選考会として位置づけ、全町村から代表選手を選出するように配慮しながら選手団を結成した。団長は体育会長、監督を駅伝部長とし、体育会は物心両面にわたり支援した。代表チームは合同練習会、合宿練習、試走会を重ね競技力の向上と郡代表としての自覚を持ち、郡民の期待を担って出場した。

大会には、体育会長を先頭に体育会役員が２日間にわたり宿泊所と沿道で激励し、応援に駆けつけた郡民と一体となって選手に熱い声援を送った。選手は八頭郡のナンバーカード「53」をつけて走ることに憧れと誇りを持ち郡代表として輝かしい成績を残した。

８　国体の財産と競技の発展

昭和60（1985）年の「わかとり国体」において、八頭郡では智頭町で空手道競技、河原町でフェンシング競技、郡家町（現八頭町）でホッケー競技と軟式野球競技が開催地となった。軟式野球競技は国体以前から基盤が確立していたが、空手道競技とホッケー競技は国体財産として関係者の尽力により地域に根付き発展している。

（１）空手道競技

昭和50年頃から郡内の各地域で青少年の健全育成を目指して空手道教室が開設されたが、それぞれ所属する流派が違い、統一した大会の開催は困難であった。

「わかとり国体」の開催地が智頭町に決定したのを契機に、各組織の関係者が連携して体育会に加入し組織の強化に取り組んだ。この組織化が「わかとり国体」では大きな力を発揮した。

国体の成功はさらに組織の強化につながるとともに、企画・運営や指導の面で大きな財産となった。

平成５（1993）年には、八頭郡少年少女空手道選手権を郡内各地区持ち回りで開催するようになり、高校生も含めた大会へと発展した。平成15（2003）年からは、一般男女の組手・形の種目を設け八頭郡空手道選手権として形の整った大会に成長した。

空手道は確かな基盤を築くとともに競技としても発展し国体選手を輩出し、各流派の大会では数多くの選手が優勝、入賞している。

（２）ホッケー競技

郡内・郡家町（現八頭町）には縁のない競技であったが、昭和53（1978）年に「わかとり国体」ホッケー競技の開催地が郡家町に決定したのを契機に、町教育委員会を中心に関係者が精力的に取り組んだ。昭和54（1979）年に郡家町で成年男子、女子のチームが結成され、中学校にホッケー部が創部された。その後、郡家町の小学校にホッケークラブが、町内にある八頭高等学校にもホッケー部が創部され、国体に向けての基盤づくりを始めた。

成果として、国体は大成功し子どもから大人に至るまで幅広く地域住民に親しまれるようになった。町では国体の盛り上がりを継続していくため、県ホッケー協会と連携し各種大会を誘致するなど、町民が一体となって競技力の向上と発展に積極的に取り組んできた。

小学生はホッケースポーツ少年団活動として取り組み、中学生は部活動として選手の育成に力を入れ全国大会に出場する常連校となった。卒業後は地元の八頭高等学校に進学して、さらに競技力を向上させ、大学や実業団で活躍している。八頭

高OBのうち、ロンドンオリンピック大会には佐藤雅子選手、リオデジャネイロオリンピック大会には阪口真紀、大家涼子選手が出場した。

今日、郡家地域は確かな基盤と地域内で小、中、高と一貫して競技できる環境にあり、更なる躍進が期待できる「ホッケーの町八頭町」となっている。

９　町村合併後の体育会

（１）事務局の設置と運営

平成17（2005）年から体育会は体育会長就任の町教育委員会に事務局を設置し、従来通り運営することとなった。

（２）八頭体育の現状

各部の振興と発展は確かな基盤と優れた指導者の存在にかかっている。

陸上、駅伝、水泳、スキー、野球、柔道、剣道、ゲートボール、グラウンド・ゴルフ等各競技は、競技人口の多少はあるが基盤と指導者が健在で、堅実な活動をしている。陸上や水泳は全ての小、中学校で学校体育として基礎基本を習得し、全校体制で競技会に出場し基盤が確立している。中でも、中学校県駅伝競走大会は、伝統を受け継ぎ全国大会に出場するなど実績を挙げている。水泳部は各種大会への出場者は多いがスイミングスクールの強化選手が活躍する時代になった。野球部、スキー部は基盤が盤石で、小学生から社会人まで交流試合や各種大会を開催し、活動が盛んである。柔道部、剣道部は平成12（2000）年に開設された郡家町民武道場を中心に、郡合同練習会や大会を開催し、確かな基盤で堅実な活動をしている。ゲートボール部、グラウンド・ゴルフ部は高齢者を中心に基盤が確立し、活動が盛んである。

一方、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部は少子化の影響が大きく、小学生でのスポーツ少年団活動として携わる少年団が減少し、中学校でも部活動が継続できない学校が出てきた。さらに、平成時代初期頃までは教員の指導者を中心に、県民体育大会や各種大会を目指して八頭郡チームを編成し、合同練習会を重ね技術の向上と共に後継者の育成を図ってきたが、教員の優れた指導者が高齢化し現場から退くなど基盤が弱くなった。このような中、バレーボール競技で中学校女子選手の全国大会出場や成年女子チームの活躍があった。ミニ・バスケットにおける教員以外からの若い指導者の台頭など明るい展望も見えてきた。また、バドミントン部、ソフトテニス部などは指導者の尽力により、社会人になってからの愛好者で練習を重ね大会に出場している。

全般的に見ると、県民体育大会から県民スポーツ・レクリエーション祭に移行したのに伴い各種スポーツは各町村で普及してきたが、各部では、各種郡大会や郡合同練習会が減少し、後継者の育成や競技力の向上に課題が出てきた。

（３）森下広一杯八頭町マラソン大会

町村合併後、八頭町と、森下広一監督と手をつなぐ会、体育会などが協力し、平成18（2006）年に八頭町主催でトヨタ自動車九州の後援により第１回大会が開催された。

大会には、トヨタ自動車九州陸上競技部の強豪選手が出場し、参加者は毎年アスリートと一緒に走ることや、走りを間近に見たりすることができる。

大会は、毎年「体育の日」に行われ、全国から集うランナーと町民の参加者で2,000人規模である。

大会当日は町役場職員総出で、体育協会役員、スポーツ推進委員等が一体となって、全国から参加した選手を大切にしながら町民のための大会としている。

１０　今後の課題

郡民が一堂に会するスポーツ大会の開催や指導者の育成と競技力の向上を図るほか、各町体育協会との連携の強化を進めることなどがあげられる。

【歴代会長】

平成５年～６年　　山根君太郎

７年～８年	谷口　弘幸	19年～20年	小林　昌司
９年～10年	和田　哲也	21年～22年	寺谷誠一郎
11年～12年	右近　利夫	23年～24年	平木　　誠
13年～14年	下石　義忠	25年～26年	小林　昌司
15年～16年	寺谷誠一郎	27年～28年	寺谷誠一郎
16年～17年	宮本　義雄	29年～30年	吉田　英人
17年～18年	平木　　誠		

東伯郡体育協会

１　東伯郡民体育大会の開催

東伯郡民総参加のもと、生涯スポーツの普及と振興、また郡民の生活を明るく豊かにするため、現在まで東伯郡民体育大会を開催している。東伯郡９町村がまとまり17競技に各町村対抗で熱戦が繰り広げられ､総参加人数では第39回（平成５年）は5,930人であったが、平成17（2005）年の町村合併（９町村から４町に減）により、平成18年度の総参加人数は4,683人にと、12年間で１,247人の減少となり、さらに平成30（2018）年は3,966人となった。

合併後には郡民体育大会の閉鎖も取りざたされ検討会も開催されたが、本会の代議員である吉田秀光三朝町長、宮脇正道湯梨浜町長、田中満雄琴浦町長､松本昭夫北栄町長及び理事（17競技理事）の熱意で、合併にもめげず郡民体育大会の存続意識は高くなり現在に至っている。

平成23（2011）年までは相撲競技も実施していたが、選手の参加減少と競技役員の高齢化などにより休止を余儀なくされた。その後、相撲競技に代わる新スポーツ種目導入を検討した結果、軽スポーツの取り込みを図ることとし、ソフトバレーボールを平成25（2013）年から開始した。同種目は毎年一般男子、女子、混合の各種目に約130名の選手が爽やかな汗を流し交流を含めて楽しんでいる。

開催場所は従来どおり、三朝町、湯梨浜町、琴浦町、北栄町を輪番に主会場町として、競技施設のない町については他の町が応援している。開会式は主会場町の野外グラウンドで従来どおり行い、主会場町教育委員会と学校の教員に協力を得て、小学生の金管バンドによる演奏で開会式に華を添え盛大に行われていた。しかしながら、近年の天候不順と教員の業務多忙や児童の減少により、平成28（2016）年からは小学生の金管バンド演奏を廃止し屋内開催としている。

東伯郡体育協会の執行責任者として理事長を昭和61（1986）年４月１日から平成10（1998）年３月31日まで原田達夫氏が先頭に立って盛り上げていただき、その後、藤原義丈氏が引き継ぎ平成19（2007）年４月20日までご協力いただいた。藤原氏退任後は、各競技をまとめる経験者のある適任者を模索し、平成26（2014）年４月18日までは各町の教育長にお世話になっていた。平成26年に適任者として、鳥取中央育英高等学校長黒松悟司氏のご理解を得て理事長に就任していただき、組織内容も充実してきている。

本大会の趣旨も、以前は競争が主体であったが近年の健康増進が主体へという社会の変化もあり、2019年度からは、東伯郡民体育大会の名称を「東伯郡民スポーツ・レクリエーション祭」に変更することとなった。

２　中部地区駅伝競走大会の開催

平成５（1993）年（第47回）当時の参加チームは市町村の部10チーム、中部地区高等学校の部８

チームの計18チームで熱き戦いを繰り広げていたが、中部地区高校生の長距離ランナーの減少等も絡み、平成19（2007）年（第61回）ごろから鳥取中央育英高等学校のみの出場となってきていた。そのため、当時、倉吉市陸上競技協会名誉会長の福井時雄氏、中部地区陸上競技協会長の足立猛氏らの尽力により、参加資格の改正、コースの短縮等（当初８区間54.4㎞、現在８区間48.04㎞）の検討を重ね、現在では市町の部５チーム、一般の部11チーム、高校の部１チーム計17チームと、参加チームの回復傾向が見られてきた。この中からは、米子～鳥取間駅伝競走大会で活躍している選手も生みだしている。

３　今後の課題

各町のご理解をいただきながら幅広い層からの参加者が集うことができる軽スポーツ種目の増加と、各競技理事の発掘に努力することとしている。

４　東伯郡民体育大会の足跡

	男子総合優勝	女子総合優勝
平成５年	東伯町	東伯町
６年	大栄町	大栄町
７年	大栄町	大栄町
８年	東伯町	大栄町
９年	大栄町	大栄町
10年	大栄町	北条町
11年	大栄町	北条町
12年	大栄町	北条町
13年	東伯町	北条町
14年	東伯町	東伯町
15年	三朝町	北条町
16年	東伯町	北条町
17年	大栄町	大栄町
18年	琴浦町	北栄町
19年	北栄町	北栄町
20年	北栄町	湯梨浜町
21年	北栄町	琴浦町
22年	琴浦町	琴浦町
23年	琴浦町	北栄町
24年	琴浦町	琴浦町
25年	琴浦町	琴浦町
26年	琴浦町	北栄町
27年	琴浦町	北栄町
28年	琴浦町	琴浦町
29年	琴浦町	琴浦町
30年	琴浦町	湯梨浜町

【歴代会長、理事長】

◇会長

平成４年６月～７年５月	安田　真一郎
７年６月～９年５月	宇田川　義徳
９年６月～９年11月	竹田　哲男
９年11月～11年５月	宮脇　洋一
11年６月～13年５月	米田　義人
13年６月～15年５月	井上　正直
15年６月～16年８月	田中　満雄
16年10月～18年９月	吉田　秀光
18年９月～21年５月	松本　昭夫
21年６月～23年５月	宮脇　正道
23年６月～25年５月	山下　一郎
25年６月～27年５月	吉田　秀光
27年６月～29年５月	松本　昭夫
29年６月～	宮脇　正道

◇理事長

昭和61年４月～平成10年３月		原田　達夫
10年４月～	19年４月	藤原　義丈
19年４月～	21年５月	岩垣　博士
21年６月～	21年７月	米村　繁治
21年７月～	23年５月	土海　孝治
23年６月～	24年10月	永田　武
24年10月～	25年５月	小林　克美
25年６月～	26年４月	朝倉　聡
26年４月～		黒松　悟司

西伯郡体育協会

平成28年　西伯郡民体育大会陸上競技の部の様子

西伯郡体育協会は、大正12年１月の設立以降、米子市、境港市の市制に伴う離脱を経て、西伯町、岸本町、会見町、日吉津村、大山町、淀江町、名和町、中山町の８町村の枠組みとなり、その後、平成の大合併により南部町、伯耆町、日吉津村、大山町の４町村の枠組みとなった。

県民スポレク祭の予選を兼ねた郡民体育大会、郡駅伝、県民スポレク祭への選手派遣、成績優秀者と功労者の表彰、専門競技部の運営補助を主な事業としている。

１　専門競技部の活動

専門競技部は、陸上、水泳、野球、ソフトボール、排球、籠球、卓球、庭球、柔道、剣道、バドミントン、相撲、体操、スキー、サッカー、ゲートボール、グラウンド・ゴルフの17団体が所属している。いくつかの団体においては活動の停滞がみられ、原因としては会員の高齢化が考えられる。若者は協会の活動に縛られないクラブチームや同好会などに所属する傾向にあり、競技力向上や底辺拡大を目指す体育協会の活動の活性化を図ることが課題となっている。

２　体育施設の整備

昭和60（1985）年の「わかとり国体」に向けて、各町村に体育館等の体育施設整備が進んだが、平成５（1993）年以降にも各種の体育施設等が整備された。

まず、大山町（旧名和町）では、総合運動公園「名和スポーツランド」が平成６年に完成した。陸上競技場、夜間照明付野球場、テニスコート、農業者トレーニングセンター（体育館）を有し、中でも陸上競技場は日本陸連第三種公認の競技場で、全天候型トラックは、当時、鳥取市の県営布勢陸上競技場に次いで県内二番目に整った施設として、県レベルの大会や実業団等の利用が期待され、以後、西伯郡民体育大会陸上競技の部はこの施設で開催されることとなったほか、全県の小学生大会や中学生大会にも利用されている。

また、伯耆町（旧岸本町）では、総合スポーツ

公園が平成７（1995）年に完成した。

このスポーツ公園は、ラグビー場、多目的グラウンド、夜間照明付野球場、ゲートボール場、Ｂ＆Ｇ海洋センター（体育館・プール）等を有し、中でもＢ＆Ｇ海洋センターのプールは25m短水路ではあるが、上屋シート付で濾過循環装置により衛生面にも配慮されており、以後、西伯郡民体育大会水泳競技の部はこの施設で開催されることとなった。

平成27年　西伯郡民体育大会水泳競技
（伯耆町総合スポーツ公園プール）

南部町（旧会見町）では、平成７（1995）年に屋内テニスコートを完備した「あいみドーム」を併設した総合福祉センター「いこい荘」が完成した。同じく南部町（旧西伯町）では、平成10（1998）年に温水プールやトレーニングルームを併設した総合福祉センター「しあわせ」が完成し、住民の健康増進を図るための拠点施設となった。

日吉津村では、平成５（1993）年に野球場とサッカー場を有する河川敷運動公園が整備された。また、平成13（2001）年には海浜運動公園に芝生広場が追加で整備され、キャンプ場・テニスコート・ゲートボール場・多目的広場・芝生広場を有するスポーツ・レジャー施設となった。

南部町総合福祉センター「しあわせ」トレーニングルーム

このように、体育施設や健康増進施設の充実により、西伯郡体育協会の陸上・水泳・球技・格技の運営環境の向上、住民の健康増進や競技力向上に環境整備が図られた。

日吉津村海浜運動公園　多目的広場

３　功労者等の表彰と課題

西伯郡体育協会では、成績優秀者と功労者の表彰を毎年行っているが、スポーツ優秀賞の被表彰者は年々増加し、平成29（2017）年度は119の団体・個人を表彰している。中には全国大会の上位入賞者もあり、今後オリンピック等の世界大会への出場者も出てくることが期待される。

少子高齢化や人口減少が進む中、誰もが気軽に運動・スポーツに親しむことで健康寿命を伸ばし、活力のある明るい社会とするためには、ますますスポーツ振興を推進する必要がある。今後開催される東京オリンピック・パラリンピックを契機に、西伯郡体育協会が今後ますます発展することを願うものである。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

平成４年～５年	下地　忠正
６年～７年	亀尾　太洋
８年～９年	宇田　　学
10年	野口　辰猪

11年	河合　　勝
12年～13年	益田　信夫
14年～15年	田口　勝蔵
16年	黒田　隆弘
17年	山口　隆之
18年～19年	坂本　昭文
20年	住田　圭成
21年	森安　　保
22年～23年	石　　操
24年～25年	森田　増範
26年～27年	坂本　昭文
28年～29年	森安　　保
30年～	石　　操

◇理事長

平成４年～５年	松本　寿男
６年～７年	野口　　喬
８年～９年	高橋　　稔
10年～11年	藍田　　泉
12年～13年	田中　淳郎
14年～15年	田口　立身
16年	建部　　愿
17年	山田　　晋
18年～19年	永江　多輝夫
20年～21年	圓山　湧一
22年～23年	山西　敏夫
24年～25年	山根　　浩
26年～27年	永江　多輝夫
28年～29年	後藤　　弥
30年～	井田　博之

日野郡体育協会

１　日野郡体育協会の黎明

日野郡は鳥取県南西部に位置し、中国山地で岡山・広島・島根と県境を接した地域である。大正年代初期から体育熱が勃興し、郡の教育会などが中心となって大正11年８月、日野郡体育協会が創設された。当時の構成町村は八郷村を含む17町村であった。発会式は黒坂小学校において挙行され、初代会長に郡長の中島知道が就任した。会員は青年団、在郷軍人、教員が中心となり、競技は、陸上、庭球、体操指導等あらゆる方面に努力した。

昭和15年11月、紀元2600年記念事業として建設された日野郡公設グラウンド（現日野高校グラウンド）が完成した。17町村の郡民の汗の結晶であり、青年団や処女会、奉仕隊、日野農林学校、根雨高等女学校生徒など延べ１万人の勤労奉仕があった。社会体育のメッカにふさわしく約1.6ヘクタールの規模であった。11月４日に竣工式典、11月15日に完成記念全郡体操会を盛大に開催している。

昭和16～20年は戦争で郡体協は有名無実となっていたが、昭和21年４月に再建されて以降、脈々と今日に至っている。その間、昭和・平成の大合併で元の17町村は、日南、日野、江府の３町となった。しかしながら、体育スポーツ熱は冷めることなく、郡民の体力・競技力の向上に努力している。特に、郡体協会長を昭和37（1962）年から平成11（1999）年まで務めた松原一男は、先駆者の教訓を継承し、郡民の体育スポーツ振興発展に尽力し、その功績は顕著である。

また昭和60（1985）年わかとり国体は、地域全体がスポーツの活性化を図る大きな機会となった。現在は主な周年事業として、

① 日野郡民総合体育大会
② 県民スポレク（夏季・秋季・冬季）
③ 四県四郡市総合体育大会
　昭和25年～（鳥取県体育協会史577ページ参照）
④ 米子～鳥取間駅伝

などを開催している。

さらに日野郡体育協会では、表彰規定にもとづき、その年度に県・中国・全国・世界等々で優秀な成績を収めた個人、団体、功労者を表彰している。

日野郡民総合体育大会と四県四郡市体育大会の沿革

開催年度	郡大会開催町	郡大会優勝町	四県四郡市大会開催地
平成５年	江府町		仁多郡
６年	溝口町		比婆郡
７年	日南町		日野郡
８年	日野町		新見・阿哲郡
９年	江府町		仁多郡
10年	溝口町		庄原市
11年	日南町		日野郡
12年	日野町	溝口町	新見・阿哲郡
13年	江府町	溝口町	仁多郡
14年	溝口町	溝口町	庄原市
15年	日南町	溝口町	日野郡
16年	日野町	日野町	新見・阿哲郡
17年	江府町	日野町	仁多郡
18年	日南町	日野町	庄原市
19年	日野町	日野町	日野郡
20年	江府町	日野町	新見市
21年	日南町	日南町	仁多郡
22年	日野町	日野町	庄原市
23年	江府町	日南町	日野郡
24年	日南町	日南町	新見市
25年	日野町	日南町	仁多郡
26年	日野町	日野町	庄原市
27年	江府町	日南町	日野郡
28年	江府町	日南町	新見市
29年	日南町	日野町	仁多郡
30年	中止		庄原市

２　日野郡が生んだアスリート

大正時代からの日野郡の体育熱は多くの優れたアスリートを輩出した。古くは、日南町下石見に生まれた浅川正一は、鳥取師範学校（現鳥取大学）陸上部に入部し、全山陰110mH、200mHで優勝し、関西では110mH日本新記録で優勝し、200mHでも優勝した。東京高等師範学校（現筑波大学）時代は110mHで再三全国優勝し、極東オリンピックで４位に入賞した。昭和35年のローマオリンピックで日本選手団の陸上競技ヘッドコーチを務めた。

平成に入ってから特筆されるのは陸上の池田大介・愛の兄妹である。

兄の大介は、日南中１年の平成11年、ジュニア

オリンピック走り高跳びで優勝し、翌年の同大会ではジャベリックスロー（やり投げ）でも優勝した。３年生の全中大会では３種競技A、Bとも優勝し、高校時代も世界ユース日本代表、世界ジュニア日本代表となった。その後、インターハイ８種競技で優勝し、日本ジュニア選手権10種競技でジュニア日本新で優勝した。大学時代には10種競技で世界陸上選手権日本代表、日本陸上選手権優勝など、活躍は著しく陸上万能ぶりを見せた。妹の愛は松江西高時代、インターハイ円盤投げ２位、日本陸上選手権ハンマー投げ13位と素質を見せ、大学進学後も日本学生陸上対校選手権、全日本学生陸上チャンピオンシップでハンマー投げ優勝など、投擲競技で活躍した。

３　過去に県内トップレベルの卓球選手を輩出

日野郡の卓球は、昭和40年代から50年代にかけて、根雨中学校・根雨高等学校から次々と鳥取県チャンピオンを輩出するなど全盛期があった。

戦後、妹尾勇（日野町根雨）が普及に努め、日野郡、なかでも日野町の卓球の基礎を築いた。妹尾の息子６人は、全員が卓球部に所属し、県内外での活躍もあった。

昭和41年、有力選手であった中西宣男（鳥取大学卒）と石差英旺（島根大学卒）の両名が、教員あるいは県職員として同時に日野町内に赴任し、中高生の指導にあたり、この時期から根雨中学校、根雨高校の卓球部員のレベルがさらに向上した。

団体では、当時、根雨高で鍛えられた小谷澄男（日野町根雨）らが、高校卒業後、日野郡の代表として、中西、石差らとともに、県民体育大会で優勝し、さらに近県硬式卓球選手権大会（鳥取市）においても、準優勝に輝いている。

このころ、鳥取、島根、岡山県内からトップクラスの選手が参加した日野郡卓球選手権大会も根雨高体育館で開かれた。

個人では、昭和40年代に、小谷の影響を受けて、表ソフトラバーの前陣速攻型となった妹尾盛秀と妹尾敬信が、中学、高校ともに優勝した。盛秀は中国高校選手権大会で準優勝を飾っている。昭和50年代には、中田幸広（現姓森）らが同じく続いた。

この後、地元に残った小谷澄男らは、学生の指導に努めるとともに、日野郡の卓球振興に貢献した。平成に至っては、溝口中学校、日南中学校からも、県内で活躍する選手を輩出している。

なお、日野郡卓球協会は、郡内各町の卓球部で構成し、過疎化、少子高齢化が進む中、各種大会の参加や部員の交流、後継者の育成に努めている。

［郡卓球協会歴代会長］

細田光明　昭和51年～平成６年（日野町根雨）
小谷澄男　６年～　21年（日野町根雨）
妹尾秀博　22年～　（日野町根雨）

４　日野郡が誇るソフトテニス

平成以降の日野郡ソフトテニス界は、ジュニアの活躍に特に目を見張るものがある。小学生（スポーツ少年団）については、中国大会はもとより、西日本、全日本の大会において上位入賞を何度も果たしている。全小においての最高成績は、団体は平成26（2014）年の２位（女子）であり県選抜の中に日野郡の選手が多数含まれている。個人は平成28（2016）年の同じく２位（松本、大田組）である。

中学生は平成９（1997）年の全日本中学生大会団体、男女アベック優勝（男･江府中、女･日野中）、平成13（2001）年の個人戦（中川佳、中川静組）、平成14（2002）年の日南中女子の優勝など、全中での上位入賞は数多い。さらに都道府県対抗では、平成22（2010）年優勝の女子も主力は日野郡の選手であった。

高校生はインターハイで平成10（1998）年３位（長谷部）、11年３位（長谷部、長尾組）に入賞し、平成26（2014）年にはハイスクールジャパンカップで優勝（小谷、松本組）を射止めた。平成11年の国民体育大会においては少年女子が中国予選を突破し本大会で７位入賞を果したが、そのチーム

６人中５人が日野郡の選手であった。

大学・一般については、平成14（2002）年全日本選手権女子（皇后杯）で３位（長谷部）、平成21（2009）年全日本社会人女子成年の部３位（足羽）、平成28（2016）年全日本学生選手権女子で３位（小谷）、平成９（1997）年全日本レディースすみれの部３位（安達）などがある。国民体育大会においては、平成５（1993）年、平成19（2007）年、平成27（2015）年に成年女子が中国予選を通過しているが、このチームにも多数の日野郡の選手が含まれていた。（第９章第１節の鳥取県ソフトテニス連盟の項に掲載の成績一覧を参照）

また郡内においては、富田杯陰陽ソフトテニス大会は平成29（2017）年で43回、日野クラブ杯大会は37回を数えるまでになっている。過疎、少子化により参加組数の減少、運営面での困難さは否めないが、郡ソフトテニス協会（一般、OBを含めて）の頑張りで何とか持ちこたえ、近年は四県四郡市大会（広島、岡山、島根、鳥取の県境で隣接する郡市対抗の大会）においては、男子、女子共に連勝が続いている。この勢いを駆ってこれからの日野郡のソフトテニス界の伝統を継承、発展させて行きたいものである。

[郡ソフトテニス協会歴代会長]

～平成５年　　伊達　隆光
６年～　　徳岡　健男
10年～　　三森　不二夫
13年～　　福田　敦人
15年～　　秋葉　　武
27年～　　田辺　克文

５　米子～鳥取間駅伝への出場

平成17（2005）年３月、郡陸協役員会で、米子～鳥取間駅伝（第60回）の監督は矢田川民雄から山川洋介にバトンタッチが決定していた。米子～鳥取間駅伝（第60回）は11月。おりしも安達才智が県教育委員会に派遣中で、取りあえず参加申し込みをしてもらった。しかし、実際は選手が揃わない。諦めかけていた時、池岡がサッカー、テニスの選手に声をかけ、無事出場できた。これが米子～鳥取間駅伝の「日野郡」のスタートだった。その後、選手育成のため道後山クロカンで、焼肉会と練習会を実施したり、秋のマスターズ駅伝（一般の部）に参加するなど選手確保に努めているが、多くの方面のご協力をいただいてばかりだ。駅伝イコール「ありがたい」の連続である。

選手の確保では、日野高野球部員には毎年助っ人で走ってもらっている。平成23（2011）年は佐伯健太が連走し大活躍した。池岡（次期監督）のデザインで、20年ぶりに新調した新ユニフォーム効果か、日南中の川田（区間３位）、江府中の安部（同４位）、日野中の野田（同５位）が快走した。一方資金面では、三町長、役員、石見駅伝OB会、日南体協より援助をいただき、初日は日野郡指定の倉吉「牧田旅館」に宿泊させていただいている。

今後は、地元選手の育成が重要である。地元の日野高長距離選手が不在のため、それ以外のOBに声をかけ、「日野高存続」も兼ね、走る仲間を集めている。多くの皆さんに支えられ参加を続けている。どんなに少子高齢化、人口減になっても、かつての先輩達の「タスキ」を、這ってでもつなぎたいものだ。

６　今後の課題

昭和15年に郡民の勤労奉仕で創設された日野郡公設グラウンドは、老朽化が進み殆ど使用出来なくなり、早急な整備が切望されている。陸上競技場（公認）がないため郡民挙げて要望が高まっている。併せて生涯スポーツの普及振興、障がい者

スポーツ施設の整備など、課題は山積している。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

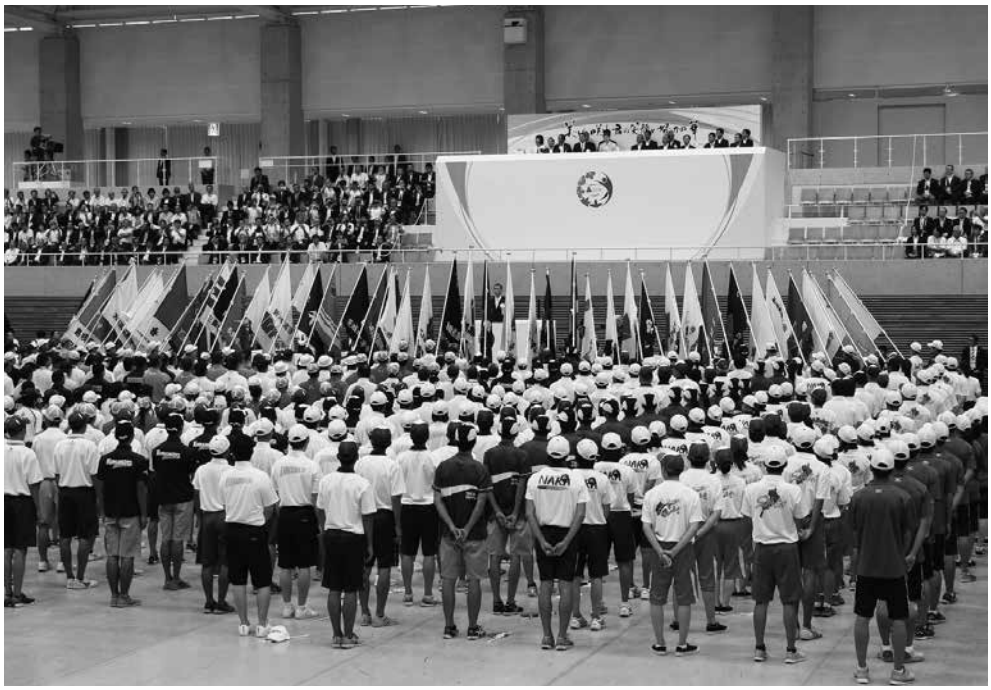
昭和37年～平成11年　　松原　一男
12年～　　27年　　生田　秀正
28年～　　松本　豊文

◇理事長

昭和53年～平成６年　　三上　秋次
７年～　　11年　　生田　秀正
12年～　　19年　　松本　豊文
20年～　　小谷　澄男

第３節
学校体育団体・大学等

高等学校体育連盟



（平成28年度　全国高等学校総合体育大会 「2016 情熱疾走 中国総体」 総合開会式より）

１　県高体連の変遷

本連盟の前身である、県中等学校体育連合設立以来、70年を越える歴史を刻んできた鳥取県高等学校体育連盟は、現在35専門部を抱えるまでに発展した。発足当時は、高校スポーツの組織も、高校スポーツの在り方についても明確な方向付けがなかったようで、県高体連が現在の礎を築くまでには、紆余曲折があった事は容易に想像できる。県高体連は、高校生の健全な発達とともに、21世紀に活躍する若人の教育の場として発展するよう、高校体育の方向づけを行うとともに県高体連の組織運営を行ってきた。21世紀となった現在、その思いは脈々と受け継がれ、本連盟は、高校スポーツ界で活躍する選手を支えるとともに、本県の体育・スポーツ界の核となる大きな組織に発展した。

２　組織の改革

組織として成長していくための努力は、いつの時代もさまざまな場面で行われ続けてきた。本連盟の組織運営のよりどころとなる規約・規定の改訂をはじめさまざまな改革が、県教育委員会主管課の指導・助言のもと行われてきた。平成23年度には、専門部独自の会計処理だったものから、新たな会計システムの導入により、高体連事務局会計、各専門部における会計処理を統一した。併せて、組織の適正で円滑な運営の継続を目指し、本連盟の基礎財源の確保にも努めた。

県高体連は、幾多の改革を重ねることで、公明正大かつ透明性のある組織へと発展し続けてきたといえる。

３　躍進する若い力

本県において昭和41（1966）年度に始まった鳥

取県高等学校総合体育大会は、第53回大会を数えるまでになった。また、昭和38（1963）年度から開催が始まったとされている全国高等学校総合体育大会（インターハイ）も、幾多の変遷を経ながら、現在では30種目が開催される大会となった。

鳥取県でも、平成７（1995）年度に「鳥取インターハイ」（第６章第２節参照）を開催し、平成28（2016）年度には「中国ブロック総体」（平成23年度からインターハイはブロック開催となる）が開催された。鳥取県では相撲（県民体育館）、ホッケー（八頭高校、布勢総合運動公園）、自転車（倉吉自転車競技場）、弓道（県立武道館）を開催した。この大会で、団体では７種目、個人で20種目の入賞を果たし、本県のスポーツ競技力を支える高校生の活躍が見られた。また、競技成績だけではなく、大会運営等においても、高校生の若い力が躍動するとともに数々の成果を残した。

さらには、全国高等学校ラグビーフットボール大会や全国高等学校駅伝競走大会をはじめとする多くの全国大会にも、毎年数多くの選手を派遣するとともに、高校生の活躍は、県下の高校部活動の発展にも大きく寄与してきた。

４　これからの高体連

高校体育の方向付けの一角として、各学校で行われる運動部活動があげられる。現在、部活動は学校教育の一環として学習指導要領に明確に位置づけられているが、その活動こそが、鳥取県高体連の発展の源動力であるとともに、本県の高校スポーツに大いなる発展と躍進をもたらした。しかし、時代の変遷とともに、学校における部活動の在り方は大きな転換期を迎えようとしている。少子高齢化が進み生徒数の減少が顕著になり、部活動の縮小が危惧される。また、一方では、働き方改革が叫ばれ、ブラック部活動と言う言葉も出現するなど、部活動の在り方を問われる時代となってきた。しかし、部活動は、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等といった人間関係の形成に資するものだとして、その意義を認められ学校教育の一環として根付いてきた。転換期を迎え変化せざるを得ない部活動の在り方に伴い、高等学校体育連盟の在り方や今後の活動にも、少なからず何らかの影響や変化があるだろうと考える。

しかし、どれだけ世の中が移り変わろうと、いつの時代においても、高等学校体育連盟という組織が、学校体育の発展とともに歩みながら、高校スポーツ界を支える存在であり続けなければならない。故に、これからも時代とともに幾多の変遷を続けながら、鳥取県高等学校体育連盟の発展を願い、努力していかなければならない。

【歴代会長、理事長】

◇会　長

平成３年～５年	山田　　廉
６年～８年	足立　　猛
９年～11年	田中　昭文
12年～15年	田中　隆義
16年～17年	柏木　建司
18年～19年	田村　純一
20年～24年	大原　洋二
25年～27年	小倉　健一
28年～29年	橋本　代里子
30年～	中島　靖雄

◇理事長

昭和62年～平成５年	宮部　妃佐雄
６年～８年	佐々木　政顕
９年～16年	前田　達雄
17年～19年	石田　則男
20年	加藤　淳一
21年～28年	宇田川　貴生
29年～	望月　史代

中学校体育連盟

1　県中体連の歩み

本連盟は、昭和23（1948）年に、当時の鳥取東中学校長小川清と東郷中学校長浅村忠晴が発起人となり、淀江中学校長田口源蔵を初代会長に「鳥取県中学校体育連合会」として設立された。

昭和47（1972）年12月15日に「鳥取県中学校体育連盟」と改称され、まもなく70周年を迎えようとしている鳥取県中学校体育連盟は、平成９（1997）年度にホッケー競技が正式加盟し、平成30（2018）年度現在で21専門部を有するまでに発展した。加盟校については現在61校である。

平成５（1993）年度以降の本連盟の諸事業を振り返ってみると、生徒負担金の改訂、全国中学校体育大会の開催（３回）、日本中学校体育連盟研究大会発表（６回）など、運営の見直しや改善、全国大会開催や研究発表など、さまざまな諸事業に取り組み、成果を残した25年間であったのではないかと思われる。

本連盟の主事業である鳥取県中学校総合体育大会も本年で第44回を迎えた。これまでの東部、中部、西部の各地区持ち回り開催に、熱中症対策として全ての屋内競技を空調設備の整った施設での固定開催を導入するなど、危機管理の万全な体制つくりも確立しつつある。各年の事業の経緯詳細は以下のとおりである。

2　主な事業の各年の経緯

平成５年度以降の事業は、次のとおりである。

平成７年　県中体連生徒負担金300円に改訂
　　日本中体連研究大会発表(広島)
　９年　日本中体連研究大会発表(姫路)
　　ホッケー専門部正式加盟
　11年　全国中学校体育大会準備委員会設立
　12年　県中体連生徒負担金400円に改訂
　　全国中学校体育大会実行委員会設立
　13年　全国中学校体育大会開催
　　（水泳、体操･新体操、相撲）
　14年　日本中体連研究大会発表(東京)
　17年　市町村合併に伴い中体連組織の再編
　18年　スケート県内会場閉鎖　他県での開催
　19年　日本中体連研究大会発表(静岡)
　20年　全国中学校体育大会準備委員会設立
　21年　全国中学校体育大会実行委員会設立
　22年　全国中学校体育大会開催
　　（陸上競技、相撲競技）
　23年　鳥取県中学校体育連盟60周年事業
　　県中総体スキー高体連と合同開催開始
　24年　日本中体連研究大会紙上発表(島根)
　25年　日本中体連研究大会発表(鹿児島)
　28年　全国中学校体育大会準備委員会設立
　29年　全国中学校体育大会鳥取県及び中国実行委員会の設立
　30年　全国中学校体育大会開催
　　（サッカー、ソフトボール）
　　日本中体連研究大会発表(徳島)
　　県中総体屋内競技会場の固定化実施

3　中体連の事業

平成29年度の事業は次のとおりである。

平成29年度　鳥取県中学校体育連盟事業報告

〈期　日〉	〈事業内容〉	〈開催場所〉
4月18日	第１回中体連理事会・評議員会	倉吉体育文化会館
5月２日	第１回中国中体連理事長会	広島県広島市
5月９日	第１回県中総体実行委員会	倉吉体育文化会館
5月10日	全中サッカー五者会議	東京都
5月12日	中国大会（本県開催種目）打合せ会	県民体育館
5月16日	全中ソフトボール五者会議	東京都
5月23日	中体連研究部会	倉吉体育文化会館
5月29日	平成30年全中鳥取県実行委員会設立総会	倉吉体育文化会館
5月25・26日	中国中体連第１回理事会	鳥取県鳥取市
6月２日	日本中体連　定時評議員会	東京都
6月20日	第２回県中総体実行委員会	倉吉体育文化会館
7月15日～24日	第43回鳥取県中学校総合体育大会	西部地区中心
8月２日	県中総体駅伝競技第１回実行委員会	後藤ヶ丘中学校
8月１日～	中国中学校選手権大会選手派遣	中国ブロック各県
8月４～６日	第38回中国中学校新体操選手権大会	県民体育館
8月４～６日	第41回中国中学校ソフトボール選手権大会	倉吉市・北栄町
8月６～８日	第51回中国中学校体操競技選手権大会	米子産業体育館

８月10日	中体連研究部会	倉吉体育文化会館
８月17～25日	全国中学校体育大会選手派遣	九州ブロック
８月16～20日	全中ソフトボール、サッカー視察	鹿児島、熊本
９月22日	第２回中国中体連理事長会	岡山県
９月22日	県中総体スキー討ち合せ	大山町
10月５日	県中総体駅伝競技関係者合同会議（JA・NKT）	ホテルモナーク鳥取
10月10日	県中総体駅伝競技監督会議	淀江町
10月11・12日	中国中体連第２回理事会	広島県広島市
10月13日	日本中体連実務担当者会議	東京都
10月14日	県中総体スケート競技の部	岡山国際スケートリンク
10月17日	第43回鳥取県中学校駅伝競走大会	米子市
11月16・17日	第34回日本中体連体育連盟研究大会	北海道札幌市
11月21・22日	中国中体連第３回理事会・専門委員長合同会議	岡山県岡山市
11月28日	県中体連郡市会長会議	日本海新聞社中部ホール
12月５日	表彰委員会・第２回県中体連評議員会	日本海新聞社中部ホール
12月26日	県中総体駅伝競技第２回実行委員会	後藤ヶ丘中学校
１月10・12日	県中総体スキー競技の部	大山スキー場
１月26・27日	第３回中国中体連理事会	岡山県岡山市
２月22・23日	中国中体連第４回理事会	島根県松江市
３月13日	全中常任委員会	倉吉未来中心
３月30日	県中体連会計監査会	鳥取北中学校・東郷中学校

（第43回鳥取県中学校総合体育大会駅伝競走の部）

４　今後の課題と方策

まず、毎年開催される県大会や８年に１度ブロックで開催される全国大会開催のための運営費や、中体連事業実施に対する資金の確保があげられる。現在、専門部については21競技と、着実に幅を広げてきているが、加盟校数については昭和20～30年代発足当時の96校から61校と35校も減少している。

これは少子化による生徒数の減少、学校統合や廃校などによるものである。生徒数においては約１万５千５百人であり、発足当時の２万３千人から約７～８千人の減少となっている。県中体連生徒負担金については、平成12（2000）年度に400円（100円増額）に改訂して以来18年間負担金は据え置きの状態であるが、今後のさらなる少子化を考えると運営に支障を来す時期がやってくることは必至であり、負担金の増額についても見直しが必要となってくるとともに、県をはじめ関係諸機関からの補助金や協賛業者を募るなど、新たな取り組みが必要となってくると思われる。

次に、部員数の減少による休部や廃部に対しての対応策があげられる。特にチーム競技である野球やバレーボールなどで、部員が確保できずに休部や廃部を余儀なくされる学校が増えつつある。現在は合同部活動の制度を活用し、単独校ではメンバーが組めなくても、他校との合同チームで大会に出場できるが、日常の練習を定期的にすることが難しい状況であり、充実した活動のための方策を検討していくことが重要である。

その他、部活動ガイドライン、部活動指導員の導入、地域との連携など、取り組んでいくべき課題は山積みではあるが、方策を模索しながら今後の中体連事業の発展のために努力をしていきたい。

【歴代会長、理事長】

設立功労者　小川　　清

◇会長

平成４～６年	徳安	儀親
７～９年	山下	旭
10年	伊藤	浩
11～15年	小谷	知載
16～19年	田中	宣彦
20～22年	安藤	敦仁
23～25年	大東	治巧
26～28年	小椋	勝美
29年～	西村	晃

◇理事長（※昭和44年度より理事長制導入）

平成３～６年	田中	義雄
７～10年	山本	清人
11～15年	小林	裕幸
16～19年	山宮	順一
20～22年	岸田	勇人

23～25年　　坂口　　剛　　29年～　　上川　　禎
26～28年　　長見　圭司

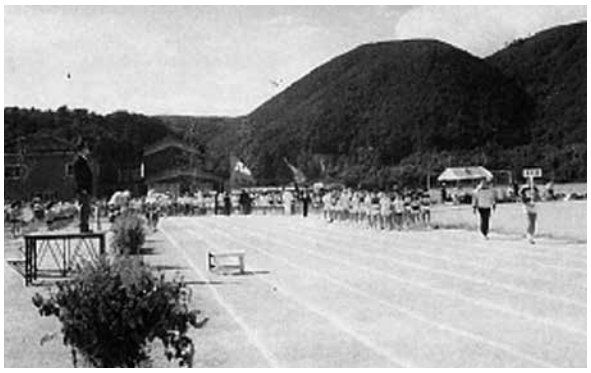
小学校体育連盟

1　小学校体育連盟の発足

昭和60（1985）年開催の第40回鳥取国体を前にして、昭和51（1976）年12月、県スポーツ振興審議会は、県教委からの体育振興策の諮問に「体育スポーツに対する意欲を起こさせるため、小学校体育連盟を組織し、県大会等の開催をするよう勤めること」と答申し、公表した。このことを受けて、県教育長・県教委体育保健課長から小学校体育連盟を組織してほしいという度重なる要請があった。当時文部省次官通達においては、小学校児童の対外試合は禁じられていたので、それを敢えて行うことに各関係からの反対が凄まじかった。後に初代小体連会長となった三上秋次会長は、各郡市体育研究会への説得、校長会への要望、地教委の協力要請のため走り回っていた。

議論を重ねるうちに序々に設立の機運が高まり、小学校体育連盟結成準備委員会を発足させた。そして、昭和52（1977）年５月17日、中部総合事務所において結成大会が行われた。

小体連結成の準備が整うと、第１回水泳大会を昭和52年８月に大栄中学校で開催し、第１回陸上大会を倉吉陸上競技場が改修中であったことから倉吉工業高校グラウンドで開催された。初めての大会は、水泳・陸上共に選手の健闘で盛況極まる大会となった。



第１回陸上大会（倉吉工業高校）入場行進の様子

2　小学校体育連盟発足からの20年

平成８（1996）年に小体連は発足20年を迎えた。発足当初、審判役員は中学校・高校の教員に依頼していたが、第20回大会では水泳69名、陸上99名の競技役員は小学校教員で回せるようになっており、年を経るごとに充実発展してきた。出場選手をみると、第１回水泳大会は94校380名の出場であったが、第20回大会では128校786名の出場と約二倍となっている。第１回陸上大会は141校1000名の出場であったが、第20回大会では157校1266名の出場となっており大きな大会へと発展してきた。

小体連発足から10年後の昭和60年のわかとり国体では、小体連の大会で活躍した選手が大活躍し総合優勝に貢献した。小体連発足のきっかけとなったわかとり国体が成功し、小体連活動の目的は方向転換していった。発足からの20年を見ていくと、試行錯誤しながら以下のように充実発展してきた。

○第７回大会（昭和58年）から、学校体育の一環としての大会であるということを明確にするために陸上競技大会から陸上大会と名称を変更した。内容においても、予選・決勝の形式からタイムレースとする、各郡市のリレーチームを２チームに増やす、全員に記録証を渡すなどの工夫がなされ好評を得た。

○第14回陸上大会（平成２年）は、６年女子400mリレーで55秒４の大会新記録を出した花見小リレーチームが、全国大会で見事優勝した。

○第16回大会（平成４年）は、倉吉市営陸上競技場が改修で10月中の使用が困難となったため、

中部地区のいろいろな会場について検討したが、条件が整わず開催を断念した。そのため、県内各郡市記録会で終了した。

○第20回陸上大会（平成８年）は、前日からの降り続く雨で開催が危ぶまれた中、早朝雨があがっていたことで開催した。しかし、午後からは時折激しい雨となり選手にとっては厳しいコンディションの大会となった。この年以降、選手の控えテントが設置されるようになった。

３　まぼろしの陸上大会

県小体連陸上大会の歴史の中で、中止となったのが平成４（1992）年の倉吉市営陸上競技場の改修と平成12（2000）年の鳥取西部地震の時の２大会であった。

平成12年の県陸上大会は、10月12日が開催予定日で、プログラムも完成してあとは大会を待つばかりであった。そして、10月６日、西部地震（震度６強）が発生した。境港市街地の液状化をはじめ、日野町・米子市などで住宅の倒壊があるなど甚大な被害を被った。西部では道路が寸断され、県内1200人の選手を輸送するのは困難を極めることであった。

中西宣男会長・尾﨑祥彦理事長・谷岡眞史陸上部長は、開催方法を検討するため全県の会長や理事長を数回、臨時に招集した。なんとか延期して一ヶ月以内で実施することはできないかと方法を模索したが、地震による被害は大きく、西部地区の役員から復旧に時間がかかり参加は難しいという意見が出されたことから、残念ながら中止という決定をした。後に尾﨑理事長は、すでに弁当以外の予算執行は済んでおり、中止になった後の処理も苦労したと語っている。

４　小体連の目的・ルールの見直し

平成に入り、「不登校・いじめ問題」「学校週五日制」など学校をめぐるさまざまな課題が出てきて、学校全般の見直しや事業の見直しが検討されるようになった。小体連の大会についてもそのあり方についての議論が挙がってくるようになり、平成７（1995）年、平井孝也会長は、小体連の目的をはじめ、あり方について見直しを検討した。その結果、心身ともにたくましい児童の育成と生涯にわたってスポーツ活動の基礎を養うことは、本連盟の目的と合致するものであり、今後とも本連盟の事業の円滑な運営と充実を図り、目的達成のために一層の努力を傾注していくことを確認している。

また、平成元（1989）年の鳥取県小学校児童数は50,391人であったが、平成14（2002）年の児童数32,216人にまで減少し、少子化時代となり児童数が毎年大幅に減っていく中、小体連の大会でも見直しが必要となってきた。平成14年度は、中西宣男会長、山根俊道理事長、谷岡眞史陸上部長が中心となって、各郡市とも児童数が減りＢクラス（５、６年の学級数が３学級以下）の学校が増えてＡクラス（５、６年の学級数が４学級以上）とＢクラスのバランスが悪くなったことをきっかけに、リレー以外のＡクラス、Ｂクラスというクラス分けを廃止した。また、６年生は走り高跳び、５年生は走り幅跳びとしていた種目を両方の学年で走り幅跳び･走り高跳びを実施することとした。このことによって、２年間を通した指導の連続性があり大会新記録が多く生まれた。

第22回大会（平成10年）で林邦臣会長、森谷哲郎水泳部長は、スタートを日本水泳連盟のルールと同じ１回制、半自動計時機を導入して、多人数の水泳大会の円滑な運営となるようルールの見直しをした。

５　最高の環境へと会場の変更

平成21（2009）年、陸上大会・水泳大会の会場をコカ・コーラウエストパーク陸上競技場と、どらドラパーク米子水泳場に変更した。

大会が定着するにつれて、保護者の応援が多くなり、駐車場の確保が大きな課題となってきた。当時の田口浩一郎会長は「次々に到着する車を駐車場へ誘導し整理する仕事は、想像を超える厳し

コカ・コーラウエストパーク陸上競技場での開催

さがある」と言っている。

特に、陸上大会は年々応援する車の台数が増え、違法駐車で近隣の方に多大な迷惑をかけているが、近隣に駐車場が少なく解決の方法がないのが実態であった。会場の問題について将来的に陸上は倉吉陸上競技場からコカ・コーラウエストパーク陸上競技場に、水泳は北栄町立大栄中学校から、どらドラパーク米子東山水泳場へ移して実施することを平成20（2008）年度に決定した。

翌平成21年度、篠原重義会長の時に会場を変更して実施された。両会場とも、選手輸送時間に二時間以上かかるのが課題であった。それを克服するために、開会式の時間を遅らせたり、閉会式の簡素化を図ったりした。大会は、県内最高の最新の設備を誇る各会場で行ったことで近年まれに見る大会新記録のラッシュとなった。

どらドラパーク米子水泳場での開催

６　県体育協会への加盟

平成23（2011）年、石脇昭弘会長の時に、鳥取県体育協会から、小中高の一貫性を持たせるために小学校体育連盟の県体育協会への加盟の誘いがあった。小体連総会で協議をし、各郡市に持ち帰ったが学校体育の一環であり競技スポーツと切り離したいという考え方が多く、積極的に加盟をしたいという意見は少なかった。加藤昭二理事長が県体育協会との具体的な調整を行った。そして、２年間の協議を重ねて、平成25年、古都好治会長の時に小体連総会において県体育協会へ加盟することを決定した。中体連・高体連・各種スポーツ団体とつながることで将来も体育スポーツに関わって生きる人を育てたいという考え方での決定であった。そして、平成26（2014）年、県体育協会へ加盟し、初の評議員会には森田二郎会長が参加した。

県体育協会に加入したことにより、陸上大会の開会式後、体育協会の協力で、長崎国体110mハードルで４位入賞した西澤真徳選手の100mを走る姿をエキシビションとして披露していただき、参加選手の励みとなった。また、八頭郡小学校水泳競技大会では、県体育協会から国体高飛び込み入賞の宮本幸太郎体育指導員を招聘してデモンストレーションを行った。

７　水泳スタート方法の一部規則改正

平成28（2016）年に、県中部の小学校で水泳の課外授業中に飛び込み事故が起きマスコミでも取り上げられた。事故に至った経過の中で、誤った飛び込みの指導法に起因していることが問題となった。これを受けて県教育委員会は、公立小学校での飛び込み指導を原則禁止とした。ただし、必要な講習を受けた教員などには例外的に指導を認めるという通知を出した。県教委は指導者講習会を２回実施し、各学校から指導者が参加して安全な飛び込み指導の周知を図った。

平成29（2017）年、県小体連の野口高幸会長は、各郡市の代表者を集めて水泳大会におけるスタート方法について協議を重ねた結果、県大会はスタート台、スタートデッキ、水中のいずれかから行うこととした。各郡市の大会は、実態が違う

ことを配慮して、それぞれの運営に任せることとした。各郡市の大会では、今まで通りの飛び込みスタートするところから、全員水中スタートとする郡市までさまざまであった。郡市の大会と条件が違う中での県大会ではあったが、大きな混乱なく競技を進めることができた。

【歴代会長、理事長】

◇会長

昭和63年～平成元年	明穂　邦雄
２年～　５年	引田　俊一
６年～　９年	平井　孝也
10年	林　邦臣
11年～　15年	中西　宜男
16年～　17年	浜根二三雄
18年～　19年	田口浩一郎
20年～　21年	篠原　重義
22年	升田　弘法
23年	石脇　昭弘
24年	村山　洋子
25年	古都　好治
26年	森田　二郎
27年	嘉賀　収司
28年	野口　高幸
29年	明徳　一志
30年	西村　浩二

◇理事長

平成３年～　５年	竹本　和史
６年～　７年	中嶋　武士
８年～　10年	森本　愛彦
11年～　12年	尾崎　祥彦
13年	圓山　俊朗
14年～　16年	山根　俊道
17年～　18年	能藤　善彦
19年～　20年	山本　英世
21年～　22年	盛山　勝美
23年	加藤　昭二
24年～　25年	永見　文彦
26年	加藤　昭二
27年	西村　浩二
28年～　29年	小田切浩二郎
30年	児島　浩二

（水泳大会記録（平成30年現在））

		5年 男子				5年 女子			
種目		氏名	学校	時間	年	氏名	学校	時間	年
自由形	50	潮　晋平	福米東	30”20	1989	田中　輝	鳥大附属	32”63	2012
	100	川田　勇介	賀露	1’09”60	2015	野嶋　央絵	明道	1’09”76	1998
平泳ぎ	50	稲垣　大智	八郷	37”76	2010	稲垣　杏奈	八郷	39”60	2017
	100	山根　健史	明徳	1’22”94	2004	大山　志保	日新	1’27”32	1997
背泳ぎ	50	西村　啓伸	日吉津	35”83	2017	宮城　歩優	羽合	36”89	2015
バタフライ	50	上杉　了以	福米東	31”33	2016	中野　双葉	啓成	32”95	2007
		6年 男子				6年 女子			
自由形	50	西本　拓真	岩見西	28”73	2017	田中　輝	鳥大附属	31”13	2013
	100	潮　晋平	福米東	1’01”90	1990	道前　志保	余子	1’06”41	2007
平泳ぎ	50	稲垣　大智	八郷	34”69	2011	稲垣　杏奈	八郷	35”90	2018
	100	笹岡　亮介	河崎	1’19”09	1997	落部緋菜子	車尾	1’20”44	2010
背泳ぎ	50	柳　遥貴	岸本	34”36	2015	井田みなみ	中浜	34”99	2006
バタフライ	50	上杉　了以	福米東	28”78	2017	岡崎　結衣	会見	31”77	2017
200リレー		伯仙（本田、安田、吉岡、坪井）2’07”35（2014）				渡（高岡、中山、濱坂、濱）2’15”40（1999）			
200メドレーリレー		福米東（吉持、太平、上杉、永田）2’27”24（2016）				中浜（井田み、池田、井田す、本角）2’25”08（2016）			

（陸上大会記録（平成30年現在））

100m	５男子	新　憲太郎　（住吉　H14）　13秒24	
	５女子	西口　そら　（八橋　H28）　13秒87	
	６男子	古田　涼介　（富桑　H27）　12秒13	
	６女子	角　良子　（崎津　H27）　13秒30	
800m	５男子	杉村　宗哉　（土師　H21）　2分25秒38	
	６男子	坂本　創　（鳥大附属　H18）　2分17秒31	
600m	５女子	谷本　彩愛　（小鴨　H30）　1分47秒23	
	６女子	中村　仁香　（名和　H30）　1分44秒01	
走り幅跳び	５男子	松本　泰弘　（住吉　S59）　4m55	
	５女子	岡村　和子　（佐治　S59）　4m30	
	６男子	足立　遼太　（大篠津　H28）　5m10	
	６女子	坂本　佳世　（住吉　H19）　4m47	
走り高跳び	５男子	安部　勇旗　（加茂　H17）　1m33	
	５女子	小林　天　（車尾　H28）　1m31	
	６男子	石見　だいや　（八橋　H30）　1m47	
	６女子	本多　桃花　（上北条　H23）　1m42	
ソフトボール投げ	５男子	片山　隼　（富桑　H23）　70m63	
	５女子	加治佐　和花　（大篠津　H30）　52m78	
	６男子	村上　浩泰　（浦富　S58）　81m30	
	６女子	瀬田　鈴華　（根雨　H28）　62m55	
４×100m リレー		Aクラス	Bクラス
	５男子	鳥大附属　56秒52　H26 （本多・山口・山田・竹本）	八橋　57秒40　H18 （藤井・高松・杉山・大久保）
	５女子	美保　57秒9　H9 （小嶋・浦田・末武・山崎）	上北条　57秒74　H22 （仲倉・本多・山田・宮坂）
	６男子	境　52秒1　H6 （吉田・濱・平野・杉山）	修立　52秒86　H24 （吉澤・森岡・岡村・前田）
	６女子	浦富　55秒1　H6 （谷本・竹中・新田・杉本）	上北条　54秒27　H23 （仲倉・本多・木天・宮坂）

鳥取大学体育連合会

ラフティング世界大会（ニュージーランド）種目別競技で銅メダルを獲得した鳥取大学探検部チーム

鳥取大学（４学部：地域学部・医学部・工学部・農学部）には、体育系サークルが鳥取地区と米子地区を合わせると83サークル（平成30（2018）年現在）存在し、彼らは日々研鑽に励んでいる。これらの中で、近年の競技優秀成績（原則中国地区大会第１位以上、国立大学のみの大会は除く、医学系大会は別途掲載）を調査した。調査に当たっては、大学の広報誌記録・課外活動学長賞記録に各サークルの申告を受けてデータを収集した。ただし、大学の制度として、課外活動の成績を調査し賞を与え記録に残すことは、平成14（2002）年度から始まったもので、それ以前の記録は調査が困難なことが判明した。したがって、ここでは平成14（2002）年度～平成24（2017）年度までの16年間の収集データ計214件を基に、種目ごとに主だった成績を紹介する。

１　水上スポーツ・水泳

まず近年最も活躍した競技として、世界大会に日本代表として出場したラフティングが挙げられる。上記の写真は、2013年IRF White Water Rafting World Championshipsに出場しスプリント部門で３位に入ったもので、このとき総合成績でも６位になっている。この成績に至る過程として、2002年に第９回長良川WWF選手権で総合３位に入り、2004年（第28回）、2005年（第29回）、2006年（第30回）、2007年（第31回）、2010年（第34回）、2011年（第35回）の日本リバーベンチャー選手権で優勝し、2012年には19回長良川WWF選手権で優勝し、2013年に世界大会選考会を兼ねた「みなかみX-TREME2013」で優勝して世界大会

全日本大学選手権で７位入賞の佐藤良祐・池田康馬

の出場権を得たという活躍の経緯があった。

ボート競技では、平成29（2017）年第44回全日本大学選手権（埼玉県戸田ボートコース）で、男子ダブルスカルの佐藤良祐・池田康馬が７位入賞を果たした。

佐藤・池田ペアは同年、愛媛で開催された第72回国民体育大会にも鳥取県代表として出場、また同国体に成年女子舵手付きクォドルプルで出場した岡田愛・濱部智絵が４位に入った。漕艇部は、その他にも平成22（2010）年に第21回関西学生秋季選手権（加古川レガッタ）男子舵手付きフォアで優勝、同年第54回中国学生選手権で女子シングルスカルが優勝、翌年第22回関西学生秋季選手権で男子舵手付きフォアが優勝、その後も2012年、2013年、2014年、2015年、2016年に中国学生選手権男子舵手付きフォアで優勝、また2015年には、第70回国体中国ブロック大会で、成年男子ダブルスカル、舵手付きフォア、成年女子舵手付きクォドルプルが優勝、第26回関西学生秋季選手権でも同種目が優勝、平成28（2016）年第１回西日本競漕大会で女子ダブルスカルが優勝、同年の第27回関西学生秋季選手権でも同種目が優勝するなど多岐にわたる活躍である。

セーリングは、帆に受ける風を主な動力として滑走する帆走船を示し、モーターを動力源とするヨットと区別されて用いられている。本学体育会ヨット部はセーリングを中心に活躍しており、2004年の第３回西日本スプリングレガッタ国際スナイプ級で優勝、2003年～2005年及び2009年には中四国学生選手権や中国学生選手権で優勝している。また、2009年からは国際470級で2010年、2013年、2014年、2016年と中四国学生選手権で優勝している。

水泳競技については、自由形（50m、100m)の上田由紀子が2003年第38回中四国学生選手権で優勝し、翌年も50mで優勝した。また、2013年第23回中国四国学生春季記録会では、野口裕生が100m自由形で、横川淳が50m、100m背泳ぎで、男子400mフリーリレーでそれぞれ優勝した。翌年の第24回同大会でも横川淳が50m背泳ぎで優勝した。

２　陸上競技

平成18（2006）年第90回日本選手権に山根愛子が女子七種競技に出場し4865点をあげた。同年の日本学生選手権には400m障害で横原和真が７位入賞を果たした。山根愛子は前年の第58回西日本学生選手権走り幅跳びに出場し、５m85cmを記録している。また、第57回中国四国学生選手権では、山根愛子が女子走り幅跳びで、改野由佳が400m障害で優勝した。同年の全山陰競技会では3000m障害で大西直幸が、400m障害で横原和真が、三段跳びで森本真司がそれぞれ優勝した。その後中国四国学生選手権で、横原和真は400m障害で、山根愛子は七種競技と走り幅跳びでは平成20（2008）年まで圧倒的な強さをみせ、2006年には七種競技で中国学生新記録を樹立している。また、2005年には医学部生の我妻慶祐が第28回中国四国学生選手権3000m障害で優勝した。

七種競技や走り幅跳びで活躍した山根愛子

平成２（2009）年第63回中国四国学生対校選手権と2010年第33回中国四国学生選手権では、男子十種競技で雁津佳英が優勝し、2014年第37回中国四国学生選手権では、男子3000m障害で小林毅司が優勝した。2015～2017年（第38～40回）中国四国学生選手権で医学部の池田弘佑が400mや800m、4×400mリレー（松久昴平・犬持智・前垣雅哉・池田弘佑）などで優勝した。また平成29（2017）年の日本学生個人選手権（shonanBMWスタジアム平塚）400mで６位入賞、第72回愛媛国体では成年男子400mで７位に入賞した。また、

400m、800m、4×400mリレーなどで活躍した池田弘佑

医学部生の前垣雅哉は走り幅跳びで７m42cmを跳び第40回中国四国学生選手権で優勝している。

３　球技

卓球で、平成28（2016）年第83回全日本大学総合選手権女子シングルスに佐々尾若奈が出場した。佐々尾は2015年の第66回中国学生卓球連盟幹事長杯女子シングルスで優勝し、2016年の第67回中国学生選手権女子シングルスと同ダブルス（佐々尾若奈・原田幸子）でも優勝し、中国学生五大学競技大会でも４連覇している。

軟式テニスでは、2016年第23回全日本シングルス選手権に木下貴史と浅田深志が出場した。木下貴史・山本祐樹は、2015年第70回天皇賜杯皇后賜杯全日本選手権に出場した。また、森田晃・馬場祥多・山本祐樹は、2011年第18回全日本シングルス選手権に出場し、馬場翔多・出口恭平は2015年第70回天皇賜杯皇后賜杯全日本選手権にも出場した。2002年には第４回中国学生選手権女子シングルスで谷口弘美が優勝し、同年と翌年の第48回・49回中国四国学生選手権女子ダブルスで谷口弘美・吉田久美が優勝した。

硬式テニスでは、2002年に中国学生トーナメント男子ダブルスで城戸・北畠が優勝した。

バドミントンでは、2009年・2010年、第34回・第35回中国学生選手権男子級ダブルスで山崎竜次・的場勇人が２連覇し、同2010年は男子A級シングルスで山崎竜次が優勝した。2011年の同第36回では的場が男子A級シングルス優勝した。2014年と2016年、第39回第41回中国学生選手権では、混合ダブルスで小原美咲・山本海帆が優勝した。

フットサルでは、2016年中国学生リーグにおいて優勝した。

４　武道

剣道では、平成22（2010）年第58回全日本選手権に医学部生の乗本志考が出場し４回戦（８強）まで進んだ。乗本は2009年第57回全日本選手権にも出場している。県内でも第31回鳥取県選手権から同35年まで５連覇を成し遂げ、国体にも成年男子として出場した。

弓道では、2002年（第50回）、2003年（第51回）、2007年（第55回）、2009年（第57回）2010年（第58回）、2011年（第59回）、2012年（第60回）、2015年（第63回）、2017年（第65回）の全日本学生大会に男女団体及び個人で出場している。その間、中国学生大会では、2007年第40回中国学生競技会個人で小林琢磨が優勝し、2008年第41回同大会で男子団体が優勝、2010年第43回同大会でも男子団体で優勝、2011年第44回同大会でも男子団体で優勝、2017年第50回同大会でも男子団体で優勝し、男子最高的中者として日山界が表彰された。

空手は、2012 ～ 2014年第37 ～ 39回中国四国学生選手権女子個人形で山下胡桃が３連覇した。

少林寺拳法では、2004年第２回中国学生大会男女複合の部で實友･坂口組が最優秀賞を得ている。

５　その他

アルペンスキーでは、平成28（2016）年国体冬季競技大回転に堤晴彩が成年女子Aで出場し41位だった。堤は2013年第14回ぬかびら源泉郷スプリングス大会に大回転で第１戦第２戦ともに優勝している。

器械体操では、2010年第43回中国四国学生競技大会男子鞍馬で松本直記が優勝した。

馬術では、2011年第13回春季中国四国大会小障害飛越Bで近藤謙二が優勝し、同年第25回夏季中国四国学生大会小障害飛越Eで野村恭章が、小障

害飛越Cで菱川翔平が、スラローム競技で野口彩花が優勝した。その後2015年にかけて、岩松賢太郎、菱川翔平、林将、松田理沙、近藤賢二、野口彩花、前田紗希、高崎春奈、中村真菜が各部門で優勝している。一時期部員不足で低迷していた馬術部も大会で最優秀馬に選ばれた「ハクト号」の存在にも助けられ活躍した。

中国四国学生大会で最優秀馬に選ばれた「ハクト号」

ハンググライダーでは、平成17（2005）年ハンググライディング日本選手権in遠野女子の部で加味根あかりが優勝し、2006年の世界選手権（Florida）に出場した（写真）。その後2013年には学生リーグで団体優勝し、2016年全日本ハンググライダー学生選手権in足尾Expert Classで菊池裕貴が優勝するなど活躍がみられる。

山岳競技のボルダリングでは、平成27（2015）年第２回日本学生スポーツクライミング対校選手権ボルダリング種目男子団体で２位に入り、2016年第71回岩手国体の山岳競技ボルダリング成年男子で高力秀幸が６位入賞を果たした。

６　医学系大会

国体や全日本選手権で活躍した剣道の乗本志考は、医学系大会でも、2004 ～ 2006年の中四国医科学生大会個人戦で優勝した。医学部剣道部は団体でも、2006年第58回、2009年第61回西日本医科

ハンググライダー世界選手権出場の加味根あかり
（加味根あかり後援会HPより）

学生総合体育大会（以下西日本医体）で優勝し、個人では、小松宏彰、播本尚嗣、河野紘輝、土江麻衣子、西海朱里、宮内孝一らが中四国大会で優勝している。

陸上競技では、我妻慶祐が平成17（2005）年第12回関西医歯薬対校競技会800mで優勝し、同13回14回大会では5000m、1500mでも優勝した。また同13回大会で大竹紀子が女子3000mで優勝した。2009年第61回、2010年第62回西日本医体では、福島健志が走り高跳びで優勝し、2013年第65回、2014年第66回、2015年第67回、2016年第68回西日本医体では前垣雅哉が走り幅跳びで４連覇した。第68回西日本医体では、藤田佳委も3000m障害で優勝した。2017年第69回西日本医体では、国体で400m ７位入賞の池田弘佑が優勝し、3000m障害で藤田佳委が、三段跳びで前垣雅哉がそれぞれ優勝した。

球技系種目でも、バレーボールが平成15（2003）年、2006年に中四国大会で、2009年には中国大会で男子が優勝し、2010年、2012年、2015年の中四国大会では女子が優勝している。また2011年、2014年には日本医歯薬大会で女子が優勝した。

バスケットボールは、中四国大会で2006年に女子が、2014年と2017年に男子が優勝した。

ラグビーは2014年と2016年に中四国大会で優勝した。

硬式テニスは2004年に中四国大会で男子が優勝

し、2014年に西日本コメディカル大会個人で石野亮が優勝した。

軟式テニスは、平成28（2016）年に全日本医科学生大会個人戦で岡田・上月が３位に入り、2017年同大会で女子が団体優勝した。

バドミントンでは、2004年～ 2006年に中四国大会で女子が団体優勝し、個人でも末吉都が優勝し、また2012年～ 2017年にかけても中四国大会で何度も団体優勝し、個人では松本有未、増田快飛らが活躍した。

卓球では、2011年に中四国大会で男子が団体優勝し、2012年には全日本医歯薬学生大会シングルスで中西敦之が、ダブルスで中西・萩元が優勝した。

サーフィンは、平成18（2006）年第23回全日本医科学生選手権で団体総合優勝を果たし、個人ではBBクラスで中原健太が優勝し、その後も同大会第24回大会で団体総合優勝、同第26回大会でも団体総合優勝とＡクラスで小池宏幸が優勝した。

弓道では、平成24（2012）年に中四国大会個人戦で清水敬太が優勝し、2013年には第９回西日本看護学生大会で女子が団体優勝した。また、2015年の第67回西日本医体で吉田基志が個人戦で優勝した。

＜おわりに＞

過去16年間の鳥取大学の競技優秀成績を振り返ってみたが、調査に漏れて優秀な成績が見逃されている場合もあると思われる。ご容赦いただきたい。また調査にあたっては、鳥取大学生活支援課に多大な協力をいただいた。

それにしても、優れた成績の種目がラフティングやボート、セーリングなどの水上スポーツに多くみられることは、大学の傍にある湖山池の存在が大きい。また、以前は教育学部に体育専攻の学生（山根愛子、横原和真ら）が活躍したが、次代に期待したい。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

平成元年～６年	林　真二
７年～12年	高橋　和郎
13年～17年	道上　正規
18年～24年	能勢　隆之
25年～	豊島　良太

◇理事長

～平成８年	野田　英明
９年	村松　惠三
10年～12年	河野　烈
13年～15年	岩本　一成
16年～18年	山田　三千夫
19年	二瀬　勝康
20年～22年	高﨑　一成
23年～24年	宮田　育征
25年～27年	柴田　栄治
28年～	久保　拓史

米子工業高等専門学校体育連合会

ヨット部女子　第67回国民体育大会優勝

1　平成30年には体育系部活動16競技

本校は、５学科を擁する国立工業高等専門学校として昭和39（1964）年に設置され、平成26（2014）年度に50周年を迎えた。

体育連合会は昭和40（1965）年４月１日、陸上競技部をはじめ８部で発足したが、その後順調に増加し、平成30（2018）年４月には体育系16部で活動している。全学生の46.5％が体育系の部活動に所属している。

なお、県体育協会への加盟は昭和44年６月である。

体育活動にとって望ましい環境を目指して、平成28年度は第１体育館・第２体育館、さらに平成29年度は武道場の改修を行い、設備を整えている。

近年は、高専生のための大会だけでなく、高体連等の高専以外の諸団体が主催する大会へ出場し、活動の場を広げる部活動も増えてきた。

また、鳥取県代表として、インターハイや国民体育大会等の全国大会へ出場するのも珍しいことでなくなりつつあり、今後ますますの活躍を期待するところである。

2　各種大会で女子学生の上位入賞続出

ヨット部は、全日本女子スナイプ級選手権大会において、両見（りょうけん）知美が平成10（1998）年度・同11年度と２年連続２位に入賞した。また、西尾知美は、平成24（2012）年第67回国民体育大会セーリング競技において、少年女子の部優勝、平成26（2014）年第69回国民体育大会では、成年女子の部２位と大活躍した。これらの活躍は、平成29年の増田美悠の国際大会に出場する快挙に繋がっている。

近年、女子学生の増加により、全国高専体育大会の女子種目として、陸上競技、卓球、剣道、バドミントン、ソフトテニスが設けられ、目覚ましい活躍を挙げている。

特に、剣道競技では女子団体２年連続入賞、テニス競技においても平成25年度からシングル、ダブルスとも毎年全国大会出場を果たし、上位入賞している。さらに、卓球競技においては、女子ダ

ブルス（大畑ひかり・但井友美ペア）が全国３連覇して、特別表彰を受賞するなど、活躍した。

第47回全国高等専門学校体育大会（卓球競技）
男子団体準優勝及び女子ダブルス２連覇

３　第50回大会を迎える中国地区大会

中国地区高専体育大会は平成26年度に、全国高専体育大会は平成28（2016）年度に、第50回大会として盛大に開催された。

中国地区大会は、平成９年度、同14年度、同17年度、同20年度、同22年度、同25年度及び同29年度に、本校が当番校として開催され、特に、平成14年度、同20年度及び同29年度は本校が主催校となり、他高専協力校のもと開催された。

全国高専体育大会は平成５年度、同13年度及び同24年度に中国地方で開催され、特に、平成５年度及び同24年度は、本校が全国高等専門学校体育大会の主管校となり開催された。本校は４競技（陸上競技・バスケットボール競技、剣道競技、バドミントン競技）を受け持ち、学生が大いに活躍した。

第47回全国高等専門学校体育大会（陸上競技）
閉会式後の教職員・学生

特に、ハンドボール競技は、平成13年度に初優勝を成し遂げて以来、全国体育大会２連覇、入賞は複数回を数えている。その他、卓球部男子団体優勝、陸上競技部男子100mの遠藤俊は全国大会３連覇に伴って特別表彰を受賞するなど、全国高専のなかでも結果を残している。

第41回全国高等専門学校体育大会（ハンドボール競技）
団体　優勝（翌年度も２連覇）

４　技術向上と底辺拡大に力を入れる

県体育協会と県教育委員会との協定による競技力向上対策事業費補助金の運動部指定強化事業として、平成25年度から平成27年度はヨット競技及びボート競技、平成28年はヨット競技、平成29年度からはヨット部及びテニス部が強化指定校に認定されている。

普及・強化活動は、各部とも外部指導のコーチを招き、平成30年度からは、部活動指導員として専門的な指導者を配置し指導を受けている。

今後も、県内・県外で開催される各種大会に多数の学生が参加できるよう、技術の向上を図りたい。

第44回全国高等専門学校体育大会（卓球競技）
男子団体＆女子個人ダブルス　優勝

【歴代会長、理事長】

◇会　長

平成３年度～７年度	服部　　信
８年度～14年度	鈴木　　充
15年度～17年10月	杉浦　哲郎
17年10月～21年度	水島　和郎
22年度～27年度	齊藤　正美
28年度～	氷室　昭三

◇理事長

平成４年度～	池本　幸雄

〈国　際　大　会〉

年　度	大　　会　　名	監督氏名	選　　手　　名	備　　考
平成４年	470級ジュニア世界選手権大会		舩澤　泰隆・澤　洋人	出場 フィンランド
11年	スナイプ級女子世界選手権大会		両見　知美	出場 アメリカ・ アナポリス
13年	ＦＪ級世界選手権大会	澤　洋征	林　誠司・浅田　祐輔	出場 山形県温海市
17年	2005レーザーラジアル級世界選手権大会		廣田　俊	出場 ブラジル
29年	2018Australian Youth Championships	鈴木　義弘	増田　美悠	出場 オーストラリア

〈全　国　大　会〉

年度	大　　会　　名	チーム・選手名	種　　目	成　績
平成３年	第26回全国高等専門学校体育大会	米子高専	陸上競技　400mリレー	３位
		千代丸　勝	陸上競技　100m	１位
			陸上競技　200m	１位
	第14回全国高等専門学校テニス選手権大会	石倉　祥大・若林　良弥	個人ダブルス	３位
	全日本ＦＪ級選手権大会	舩澤　泰隆・山中　俊治	ヨット・ＦＪ級	２位
４年	第27回全国高等専門学校体育大会	佐川　素彦	陸上競技　100m	３位
		河村　正之	陸上競技　やり投	２位
	第15回全国高等専門学校テニス選手権大会	米子高専	団体	３位
	全日本470級ジュニア選手権大会	舩澤　泰隆・澤　洋人	ヨット・470級	３位
５年	第28回全国高等専門学校体育大会	米子高専	硬式野球	３位
		佐川　素彦	陸上競技　100m	３位
	第16回全国高等専門学校テニス選手権大会	長谷川　将司	男子個人シングルス	３位
		長谷川将司・小村　宣義	男子個人ダブルス	２位
		細谷　薫	女子個人シングルス	３位
		二岡　淳子	女子個人シングルス	３位
		二岡　淳子・細谷　薫	女子個人ダブルス	１位
	第17回全日本高等専門学校バドミントン選手権大会	稲田　真由子	女子個人シングルス	３位
		岩佐美佳・稲田　真由子	女子個人ダブルス	３位
	第20回全国高等専門学校 ハンドボール選手権大会	米子高専	ハンドボール	３位
６年	第29回全国高等専門学校体育大会	米子高専	陸上競技　4×100m	２位
		佐川　素彦	陸上競技　100m	１位

７年	第30回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	３位
			陸上競技　4×400mR	１位
		佐川　素彦	陸上競技　100m	２位
		黒永　英和	陸上競技　走高跳	２位
		飛田麻里子・二岡ひとみ	テニス　女子個人ダブルス	３位
		佐藤　久美・稲田真由子	バドミントン　女子個人ダブルス	２位
		稲田　真由子	バドミントン　女子個人シングルス	３位
８年	第31回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	３位
		飛田麻里子・二岡ひとみ	テニス　女子個人ダブルス	１位
９年	第32回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	２位
10年	第33回全国高等専門学校体育大会	森安紗也加	陸上競技　女子砲丸投	２位
		佐々木　究	水泳　男子平泳100m	１位
			水泳　男子平泳200m	１位
		荒木　友子	水泳　女子背泳50m	３位
		石田　夕佳	テニス　女子個人シングルス	３位
11年	第34回全国高等専門学校体育大会	石田　真弓・大西　秀美	テニス　女子個人ダブルス	１位
		宮崎　篤	バドミントン　男子個人シングルス	３位
		大上　真樹・宮崎　篤	バドミントン　男子個人ダブルス	３位
	全日本女子スナイプ級選手権大会	両見　知美	ヨット・スナイプ級	２位
12年	第35回全国高等専門学校体育大会	森安紗也加	陸上競技　女子砲丸投	２位
		大西　貴子・足立　歩	ソフトテニス　女子個人ダブルス	３位
		河野純之助	卓球　男子個人シングルス	１位
		内藤　祐次・渡邊　大輔	テニス　男子ダブルス	２位
		石田　真弓・大西　秀美	テニス　女子ダブルス	１位
		山本　和美・杉山　葵	テニス　女子ダブルス	２位
13年	第36回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	１位
			卓球　団体	３位
		森安　紗也加	陸上競技　女子砲丸投	２位
		山田　隆文	水泳　男子バタフライ200m	２位
		宮崎　篤・筒井　達也	バドミントン　男子個人ダブルス	３位
14年	第37回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	２位
		森安　紗也加	陸上競技　女子砲丸投	２位
		山田　隆文	水泳　男子バタフライ200m	３位
15年	第38回全国高等専門学校体育大会	河野純之助・有田　直樹	卓球　男子個人ダブルス	３位
		山田　隆文	水泳　男子バタフライ200m	３位
		野口真奈美・下村美奈子	バドミントン　女子個人ダブルス	２位
16年	第39回全国高等専門学校体育大会	月谷　昌也・冨田　一馬	テニス　男子個人ダブルス	３位
17年	2005全日本レーザーラジアル級ヨット選手権大会	廣田　俊	シニアクラス	３位

18年	第41回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	１位
		遠藤　俊	陸上競技　男子100m	３位
			陸上競技　男子200m	３位
	第５回全国高等専門学校女子剣道大会	米子高専	団体	３位
19年	第42回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	１位
		遠藤　俊	陸上競技　男子100m	１位
			陸上競技　男子200m	２位
		河野　芙雅・大畑　諒輔	卓球　男子個人ダブルス	２位
		瀬田　梢	テニス　女子個人シングルス	３位
	第６回全国高等専門学校女子剣道大会	米子高専	団体	３位
20年	第43回全国高等専門学校体育大会	遠藤　俊	陸上競技　男子100m	１位
			陸上競技　男子200m	３位
20年	第43回全国高等専門学校体育大会	森　智広	陸上競技　男子400m	２位
		古礒　和樹・森　智広・番原　脩介・遠藤　俊	陸上競技　男子4×100mR	１位
		河野　芙雅・大畑　諒輔	卓球　男子個人ダブルス	３位
		瀧　康之介・黒見　諒輔	卓球　男子個人ダブルス	３位
21年	第44回全国高等専門学校体育大会	米子高専	バスケットボール男子	２位
			卓球　団体	１位
		遠藤　俊	陸上競技　男子100m	１位
		古礒　和樹	陸上競技　男子100m	３位
			陸上競技　男子200m	３位
		河野　芙雅・大畑　諒輔	卓球　男子個人ダブルス	１位
		黒見　晃平	卓球　男子個人シングルス	３位
		宮原　亮太	バドミントン　男子個人シングルス	３位
22年	第45回全国高等専門学校体育大会	古礒　和樹	陸上競技　男子100m	２位
		南口　弓子	柔道　女子48kg級	３位
		村尾　太一	水泳　男子平泳ぎ200m	３位
23年	第46回全国高等専門学校体育大会	米子高専	バスケットボール女子	３位
		中曽　哲史	柔道　男子90kg級	３位
		南口　弓子	柔道　女子48kg級	３位
		村尾　太一	水泳　男子平泳ぎ200m	２位
24年	第47回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	３位
		大畑ひかり・但井　友美	卓球　女子個人ダブルス	１位
		南口　弓子	柔道　女子48kg級	３位
		横山　大志・藤村　駿造	テニス　男子個人ダブルス	３位
	第67回国民体育大会	西尾　知美	セーリング競技　少年女子ＳＳ級	１位
25年	第48回全国高等専門学校体育大会	米子高専	卓球　団体	２位
		山脇　克海	陸上競技　走幅跳	２位
		大畑ひかり・但井　友美	卓球　女子個人ダブルス	１位
		中曽　哲史	柔道　男子90kg超級	３位
		南口　弓子	柔道　女子48kg級	２位
		岡田　彩	テニス　女子個人シングルス	３位

26年	第49回全国高等専門学校体育大会	山脇　克海	陸上競技　走幅跳	３位
		大畑ひかり・但井　友美	卓球　ダブルス女子	１位
		小笹　祐	柔道　女子63kg級	１位
		岡田　彩	テニス　女子個人シングルス	３位
		岡田　彩・坂本　美優	テニス　女子個人ダブルス	３位
		生本　和規	バドミントン　男子個人シングルス	３位
	第69回国民体育大会	西尾　知美	セーリング競技　成年女子ＳＳ級	２位
		石畑修一郎	ボート競技　少年男子ダブルスカル	１位
	第26回全国高等学校選抜ボート大会		男子シングルスカル	２位
27年	第50回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	３位
		中国地区チーム	卓球　女子地区対抗戦	２位
		田川　桜	陸上競技　女子やり投	１位
27年	第50回全国高等専門学校体育大会	田川　桜	陸上競技　女子円盤投	３位
		小笹　祐	柔道　女子63kg級	１位
		岡田　彩・春山　あすか	テニス　女子個人ダブルス	２位
	第68回朝日レガッタ	石畑　修一郎	高校男子シングルスカル	１位
	平成27年度全国高等学校総合体育大会ボート競技大会		男子シングルスカル	２位
	第70回国民体育大会		少年男子シングルスカル	３位
28年	第51回全国高等専門学校体育大会	米子高専	ハンドボール	３位
			バドミントン　男子団体	３位
		中国地区チーム	卓球　女子地区対抗戦	３位
		田川　桜	陸上競技　女子やり投	１位
			陸上競技　女子円盤投	３位
			陸上競技　女子砲丸投	３位
		岡田　彩	テニス　女子個人シングルス	１位
		岡田　彩・春山　あすか	テニス　女子個人ダブルス	１位
29年	第52回全国高等専門学校体育大会	田川　桜	陸上競技　女子やり投	２位
			陸上競技　女子円盤投	２位
		大場　遥加	柔道　女子63kg級	１位
		岡田　彩	テニス　女子個人シングルス	２位
		岡田　彩・春山　あすか	テニス　女子個人ダブルス	２位
	2017　Laser All Japan Championships	増田　美悠	レーザーラジアルクラスユース	２位

〈県内開催の国際・全国大会〉

年度	大　　会　　名	会　　場　　他	備　　考
平成5年8月	第28回全国高等専門学校体育大会	鳥取市・米子市	
平成13年8月	第36回全国高等専門学校体育大会	鳥取市・米子市	
平成24年8月	第47回全国高等専門学校体育大会	鳥取市・米子市	

鳥取短期大学体育連合会

鳥取短期大学は鳥取県教育委員会及び鳥取県体育協会と「スポーツ振興に関する協定書調印式」を行い、ソフトボール部は鳥取県体育協会強化指定を受けた（平成22年）

鳥取女子短期大学（昭和46年開学）は、開学時から体育施設は十分ではなく、特に室内競技では講堂を使用しての活動であったため、バレーボールやバスケットボール、バドミントンといった競技は、高さや床のクッション性、照明など、活動するうえで必要となる条件を満たしているとは言い難たく、競技の実施には難しい環境であった。また、屋外を活動場としているソフトボール部や軟式テニス部にとっても、室内競技同様に整備されていないグラウンドとテニスコートがあるだけであった。そうした練習場環境を理解してか、大会出場を目指すような競技部も少なく愛好会的な取り組みが大半で、活動人数もさほど多くはなかった。

そうした中、昭和47（1972）年創部の卓球部と昭和55（1980）年創部のソフトボール部はともに学生（大学）連盟に籍を置き、上昇志向を持った取り組みをしていた。その後、「わかとり国体」を契機に昭和61年にカヌー部、昭和63年には柔道部が学友会クラブに仲間入りした。また、「わかとり国体」以降も鳥取県の強化チームとして活動していたホッケー部が、平成９年に学友会所属クラブとして活動を行うようになり、本学における競技スポーツの充実期を迎えた。

１　卓球部　　中国学生連盟一部で団体優勝

昭和47年創部後、本学唯一の競技部として中国学生連盟に所属し活動していた卓球部は、昭和56（1981）年に中国学生連盟の二部で優勝を果たし、翌57年には四年制大学が一部を成す中で、短期大学が団体優勝を飾るといった快挙を成し遂げ、本学を中国一の卓球部へ引き上げた。優勝の原動力となったのは、昭和56年に入学した矢城明美・弘美の姉妹の活躍で、在籍した２年間では団体優勝のほかに個人でも中国地区２位になるなど、鳥取女子短期大学、そして矢城姉妹の名を中国地区の大学に知らしめることとなった。

矢城姉妹の卒業後は、暫く成績が振るわなかったが、平成元（1989）年に二部で優勝を果たし一部へ昇格、翌年には一部で団体準優勝、ダブルス

岡・石井組が準優勝し、同年開催の中四国学生選手権大会でも同様の成績を残す活躍をした。また、平成６（1994）、７年（平谷･柴山）、９年（尾崎･山崎）にはダブルスで全日本学生選手権大会、全日本大学対抗卓球大会へ出場・活躍し、第二期黄金期を迎えたが、部員の入れ替えの激しい短期大学では、力を長く持ち続けることは困難で、その後、活動は続けるも徐々に部員数が減少し、休部を強いられることとなった。

その後、暫くの間、休部状態であったが平成29年度に入って、男子学生を中心に活動を再開し、学生連盟へチーム登録するまでに至った。しかし、コーチ不在の学生主体の活動のため、活動をどこまで盛り上げていけるかが、今後の課題ではあるが、先ずは存続重視で取り組んでいくこととしている。

２　ソフトボール部　インカレB4全日本短大準優勝

昭和56年創部以来、早々に大学ソフトボール連盟へ加盟し、全日本大学選手権大会30回出場（うちＢ４－１回）、西日本大学選手権大会33回出場（うちＢ４－４回）、全日本短期大学７回出場（準優勝１回、三位３回）、全日本総合女子選手権大会３回出場（うちB16－１回）など、全国大会に多数出場を果たしている。中でも昭和60（1985）年には、増井啓子投手を擁し臨んだ西日本大学・全日本大学選手権大会では共にベスト４に入る活躍をした。その後、平成９（1997）年には全日本短期大学で準優勝するなど、大学連盟主催大会で好成績を残し、短期大学でも十分に戦えることを全国の短期大学に示した。またこの前年に開催された､平成８年の「広島国体」へは現役学生（小原、内田、岡本）、本学OG（奥田、牧田、前田）でチームメンバーの半数を編成し、ミニ国体では実業団チームに競り勝ち「わかとり国体」以降、初めて本国体への出場を果たした。その後も全日本総合女子選手権大会や全日本大学選手権大会への出場を果たし、平成22年12月には県教委と県体協の協定により「強化指定」を受け活動してきたが、平成25年頃から部員の確保が難しくなり、平成30年には全く活動できなくなり38年間の活動を閉じることとなった。

受賞歴：平成30年度鳥取県体育協会表彰体育功労章（逢坂秀樹）

ソフトボール部

３　カヌー部　松本めぐみ　日本代表に

昭和62年に創部され、初年度から全日本学生、関西学生、全日本選手権大会などの大会で好成績を挙げ、短期間で全国レベルへと上り詰めた。その要因となったのは、指導者（旧倉吉産業高校　本坊幸子教諭）と、そして練習環境に恵まれていたことで、初年度から選手が全国から集まり、優秀な成績を挙げた。昭和62年には関西学生リレーで優勝、翌年には全日本学生で総合３位、平成元年には関西学生で総合１位になっている。中でも平成９年には、松本めぐみが日本代表選手に選考され、海外の大会に出場した。

カヌー部

創部来指導いただいていた本坊先生が平成10（1998）年に亡くなるまでの約10年間は、各種大会で好成績を挙げ、鳥取県「スポーツ賞」個人で吉野訂子（昭61,62）、川田美智恵（61,62）、安達

章代（62,63）、若林由美（62,63）、中本美和（63）、伊藤摂子（63）、笠田やすよ（63）が受賞している。

また卒業生の多くは、出身県に帰り活動を継続し国体選手として本国体へ出場し活躍した。

受賞歴：鳥取県知事表彰、鳥取県体育協会表彰

４　ホッケー部

「わかとり国体」の選手強化の一環として、鳥取県ホッケー協会の要請を受け、学外よりコーチを招聘し発足したクラブチームで、本学チームとしての活動はなく、あくまで国体チームとしての活動で、練習場も学外に設けられ活動していた。選手は週末になる度に倉吉と鳥取・郡家を往復し練習に励み、「わかとり国体」で４位、「福岡国体」では３位に入賞するなど強化事業の目的を十分に達成し、学生の努力が報われる結果となった。その後も「愛知国体」、「広島国体」に出場した。

本学のクラブとして認められたのは、部員も増え本学単独でチーム編成できるようになった平成９年度からである。この年度から、学生連盟に登録し主催大会へ出場し二部で優勝し、一部へ昇格する活躍をした。続く、平成10年には全日本学生選手権大会へ中四国地区の代表として出場したが、次第に選手を確保することが困難となり、チームの維持ができなくなり廃部に至った。

受賞歴：鳥取県知事表彰、鳥取県体育協会表彰、倉吉市体育協会表彰

ホッケー部

５　柔道部

昭和63年創部。部員の多くは初心者に近いレベルの集まりで、また学内に柔道を行う環境も整っておらず、すべてが一からのスタートであった。日々の練習は、近くの中学校や倉吉武道館で行っていた。本学の特待生制度を活用し選手強化を図り、中四国学生柔道連盟に加盟することで、各種大会へ出場する機会を増やした。そうした取り組みの結果、平成８（1996）年には全日本女子柔道体重別選手権大会へ個人の部に出場し、平成９年には鳥取県女子柔道選手権大会に田中美奈子が出場し優勝した。平成11（1999）年には中四国学生体重別選手権大会へ出場して本庄栄子が準優勝し、学内に柔道場のないハンディを乗り越え実績を挙げてきた。その後も活動は続けているが、柔道場が学内にないことは活動を続けていく上で致命的とも言え、近年では学外施設へ出向く時間的余裕もなく活動を休止している。

以上、卓球部、ソフトボール部、カヌー部、ホッケー部、柔道部は、それぞれの種目の連盟に所属し、国民体育大会や各種選手権大会への出場を目指し、日々の活動に取り組んできた。しかし、短期大学の特性から活動期間が２年間と少なく、特にチームスポーツ種目では部員の確保が難しく、多くのクラブが休部や廃部に追いやられてきた。現在活動しているクラブも同様に、危機感を持って活動に臨んでいる。

６　男女共学後の歩みと課題

鳥取女子短期大学は、平成13年度から男子学生を受け入れ男女共学の鳥取短期大学として新たにスタートした。

平成12年までは、「わかとり国体」の強化の流れからクラブ活動も活発に行われ、鳥取県国体チームに選手を輩出していたが、徐々に各クラブの選手層も薄くなり活動も衰退していった。

平成13（2001）年に男女共学となり、女子中心であったクラブに男子部員が加わり、また男子を中心としたクラブも立ち上げられ、再び学内に活気が戻ってきた。その一番手となったのが野球部や硬式テニス部であった。

このころのクラブの取り組みは、唯一女子ソフ

トボール部がチャンピオンシップ大会への出場を目指し活動するのみで、その他のクラブはスポーツを楽しむことに重きを置く、同好会や愛好会といった活動が中心で、かつこれまでのクラブの既成概念にとらわれない自由な発想から、多くの軽スポーツがクラブ化して楽しまれた。

同時に、取り組みの様相にも変化が起こり、大会へ出場して好成績を得るのではなく、「好きな時に、好きな時間、好きな友と、体を動かし楽しみを分かち合う」といったタッチのものに変化し、ゲーム性を求めるクラブであってもチャンピオンシップ的なレベルを求めるのではなく、地元クラブとの交流を前面に置いたものが多くなった。

このことについては、専門の指導者がいなく学生の主体的運営によるクラブが増えたことや、学生の志向の変化、学内活動環境（時間）などの変化が挙げられるが、最大の要因として考えられるのは、教育課程表の変更により、本格的に活動を続けることが困難になってきたことが挙げられる。

そうした中、平成27年には開学40周年記念事業として、念願であったシグナスホール（体育館）とテニスコートが新設され、室内競技の活動環境が整い、これまで学外施設で活動していたバスケットボール部やバレーボール部が学内へ活動場所を移した。しかし、活動内容に変化はなく、またメンバーも授業時間に合わせて日替わりで楽しく活動をしている。体育館新設後は、放課後の学生の動きが活発になり、以前にも増して活気を感じるようになった。

今後は、楽しむ活動も続けていってほしいが、新設された施設を活用して、学連の主催大会や国民体育大会、選手権大会への出場を目指すクラブもが育つことを期待したい。

クラブの変遷

現存のクラブ ・卓球部、・硬式テニス部、・軟式テニス・バドミントン部、・バスケットボール部、・バレーボール部、・ダンス部、・柔道部、・野球部ほか
休部・廃部クラブ ・ホッケー部、・カヌー部、・ソフトボール部、・体操部 ・サッカー部、・フットサル部、・アーチェリー部、・陸上部、・駅伝部ほか

７　学外クラブで国体へ

本学は、すべての種目に対応できるクラブがあるわけではないため、学生の中には出身校や一般のクラブで活動している学生も少なくない。そうした活動を通して本国体へ出場する学生も少なからずいる。

過去においては（本学の記録にあるものについて）、アーチェリーの松林夏美（66回山口国体）、自転車競技の伊藤花歩（72回岩手国体）、ライフル射撃の長尾拓哉（72回岩手国体）などが国民体育大会の出場を果たしている。

【歴代会長・理事長】

◇会　長

～平成６年	島雄　満子
７年～８年	羽根田　真弓
９年～13年	荒井　優
14年～15年	亀崎　幸子
16年～17年	渡部　容子
18年～20年	大江　節子
21年～23年	近藤　剛
24年	池谷　千恵
25年	亀崎　幸子
26年	岩本　健一
27年～	逢坂　秀樹

◇理事長

～平成５年	斉木　恭子
６年～７年	荒井　優
８年～９年	逢坂　秀樹
10年～11年	齊木　恭子

12年～13年	井出添　陽子	22年～23年	三沢　英貴
14年～15年	杉本　千恵	24年～26年	雛倉　千恵子
16年～17年	浅井　秀子	27年～28年	吉田　八須子
18年～19年	野津　あきこ	29年～	河本　明美
20年～21年	國本　真吾		

鳥取県高等学校野球連盟

選手権大会100回を記念して、新調された県大会優勝旗（平成30年7月）（朝日新聞社提供）

1　選抜大会の軌跡

（鳥取西高）

平成５（1993）年、第65回選抜高等学校野球大会は、記念大会のため出場校が32校から34校になり、中国地区からは４校が選抜された。本県からは前年秋の中国地区大会でベスト４入りした鳥取西が選出され、３年ぶり４回目の選抜出場となった。秋田経法大付属と対戦し、９－４で勝利した。エース長谷川の好投と16安打を放った打線がうまく噛み合い、実に60年ぶりの選抜校歌となった。続く３回戦は長崎日大と対戦し、長谷川投手の腰を痛めるアクシデント、打っては１安打完封され０－５で念願のベスト８進出はならなかった。

（米子東高）

平成８（1996）年、第68回選抜高等学校野球大会は、19年ぶりの出場となった米子東が、初戦に岩手県代表の釜石南と対戦した。前日、２回裏途中で雨のためノーゲームとなり再試合となったが、初回に５点を先制した。しかし、太田投手の調子が上がらず、後半相手打線につかまり一度は逆転を許した。粘りの米子東は９回に打線が奮起し３点を返して再逆転に成功した。実に30年ぶりの選抜大会での勝利であった。続く２回戦は、大阪学院大高と対戦。初回の３失点をすぐさま２回に同点として振り出しに戻したが、相手の地力の前に徐々に劣勢となり、中盤から後半に失点が重なり善戦むなしく４－８で敗れ、８強進出は果た

せなかった。

（八頭高）

平成20（2008）年、第80回記念選抜高等学校野球大会に八頭が初出場。宇都宮南（栃木）と対戦し、八頭が１－０で勝利を飾った。初出場八頭のマウンドはエース平木。３回裏まで、両チームとも１安打。両エースが好投を続ける中、均衡を破ったのは八頭。５回裏、先頭の７番山住が初の四球を選ぶと、８番平井の送りバントで二塁へ。すかさず１番中谷が左前適時打を放ち、生還。八頭が１点を先制した。８回まで両投手の投げ合いが続き、平木は、ここまで相手打線を２安打、無死四球に抑え、２回を除くすべての回を三者凡退に封じて見事な投球を見せた。試合時間１時間27分は両投手の制球力とテンポの良さを物語るデータだった。続く３回戦は東洋大姫路（兵庫）と対戦。３回まで、両チームとも走者を出しながら決め手に欠き、得点を挙げることができない。東洋大姫路はここまで３安打。対する八頭は無安打に抑えられた。東洋大姫路は６回には打者３人が計３球で凡打に抑えられるなど、平木投手を攻めあぐねた。八頭も、相手投手に６回まで１安打に抑えられ、三振６個を喫した。試合が動いたのは８回表の東洋大姫路。９番三谷が、この日３打数３安打となる左前安打で出ると、１番藤井の送りバントで二塁へ。２番松葉の内野安打で一、三塁とした後、二塁ゴロを二塁手が処理に手間取る間に三塁走者三谷が生還。決勝の１点を先制した。八頭は、相手投手に三振10個を奪われ、２安打完封負けを喫したが、エース平木投手の制球力が光る試合内容であった。本大会ベスト４の東洋大姫路と互角に渡り合えた八頭の戦いぶりは見事だった。

（鳥取城北高）

平成24（2012）年、第84回選抜高校野球大会開会式直後の第１試合、鳥取城北は前年の鳥取県秋季大会で準優勝して、中国地区大会へ出場。すると、勢いそのままに中国地区で優勝。さらに明治神宮大会でもベスト４と、鳥取城北の名を全国区に押し上げて臨んだ初の選抜大会だった。開会式直後の第１試合に登場した鳥取城北は、三重高校にいきなり先制点を許したが３回に逆転し、鳥取城北は聖地で初めてのリード。その後、同点に追いつかれて７回終わって３－３。８回表、鳥取城北がチャンスを逃すと、その裏、相手校に決定的な３点が入り勝ち越された。しかし、鳥取城北も粘りを見せ２ランホームランで１点差に詰め寄り、逆転のチャンスを作ったが、反撃もここまで。結果は５－６の惜敗だった。

平成25（2013）年、第85回記念選抜高等学校野球大会派遣審判委員制度により中国地区を代表して吉田正博審判員が甲子園球場で溌溂とジャッジをした。

（４）米子北高

平成27（2015）年、第87回選抜高校野球大会は、春夏通じて初出場の米子北が、２年ぶり８回目出場の常総学院（茨城）と対戦し１－14で敗退した。相手校は着実に得点を重ね、計16安打を放ち、米子北のミスも加わり、大会記録へあと１に迫る計13盗塁と足を絡めた攻撃で追加点を入れ、試合を優位に展開し勝敗を決めた。米子北も８回に２本の長打で１点を入れ意地を見せたが、先発高橋の制球が定まらず、守りのリズムが乱れて自滅の形で初戦敗退となった。選抜大会の14失点は県勢で最多となった。

２　選手権大会の軌跡

○平成５（1993）年、第75回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会決勝戦は、鳥取西がエース長谷川の力投により鳥取城北に４－１で快勝した。第75回全国高等学校野球選手権記念大会に出場の鳥取西は春夏連続の出場を果たした。昭和55年の倉吉北以来、13年ぶりであった。

第75回全国高等学校野球選手権記念大会に出場した鳥取西は２回戦で不二越工（富山）と対戦し、序盤から打線が爆発して11－１と大勝し、選抜大会に続いて初戦突破した。これは鳥取県勢としては33年ぶりであった。続く３回戦は京都西と対戦、長谷川投手の力投むなしく１－２で惜敗し、

ベスト８進出はならなかった。しかし、鳥取西の戦いぶりが評価され東四国国体の出場校に選出された。さらに、長谷川投手は日本高野連が欧州に派遣する日本選抜メンバーに選ばれた。

○平成６年、第76回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝戦は、八頭対境の対戦となった。乱打戦の末、９－７で八頭に軍配が上がり７年ぶり２回目の出場を決めた。

第76回全国高等学校野球選手権大会に出場した八頭は、山形県代表の鶴岡工と対戦し、粘り強さを発揮し５－４で競り勝ち、悲願の甲子園初勝利を挙げた。続く３回戦は茨城県代表の水戸商と対戦したが、攻守のリズムがかみ合わず１－３で敗れ、ベスト８進出はならなかった。しかし、八頭の戦いぶりが認められ、第49回国民体育大会出場校に選ばれた。

○平成７年１月17日､阪神淡路大震災が発生した。その年の第77回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝戦は、堅実さを発揮し続けた倉吉東と「ミラクル根雨」と呼ばれるほどの勢いを持った根雨との間で行われた。５－１で倉吉東に栄冠は輝いたが､両校の活躍は､選手の気持ちが一つになり､勢いが発揮されれば勝ち上がれることを示してくれた。なお、倉吉東は創部82年目にして初の夏の甲子園出場の切符を手にした。

第77回全国高等学校野球選手権大会に出場した倉吉東は１回戦で秋田県代表の金足農と対戦した。相手校の力強い打力、脚力を生かした攻撃と倉吉東の守りのミスが重なり、４－11で敗れた。

○平成８年、第78回全国高等学校野球選手権鳥取大会では、計17本の本塁打が出る打撃が勝る大会であった。そんな中、八頭が大会初の４試合連続本塁打を記録した２年生岩越、２年生エース兵頭の活躍で決勝戦も鳥取城北を相手に６－０と完勝し、２年ぶり３回目の甲子園出場を決めた。

第78回全国高等学校野球選手権大会に出場した八頭は、２回戦で福井商と対戦。八頭のミスと福井商の18長短打、11盗塁のそつのない攻めに前半で勝負が決してしまい、０－11で敗れた。

○平成９年、第79回全国高等学校野球選手権鳥取大会も前年同様、打高投低の大会でもあった。優勝した八頭は堅実な守りと、鍛え上げられた強力な打線とにより順調に勝ち上がった。決勝戦はエース河西の踏ん張りで勝ち上がった米子商との対戦となったが、序盤から八頭打線が爆発し長短22安打を放ち、11－５で八頭が２年連続４回目の甲子園出場を決めた。

第79回全国高等学校野球選手権大会出場の八頭は、前年の大敗を胸に、山梨県代表の甲府工と対戦したが、持ち味を出し切れないまま０－９と完敗した。

○平成10（1998）年、第80回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会の決勝戦は、境対米子北の西部勢同士の対決となった。境がエース岩出の投打の活躍もあり、３－２で米子北を退けた。境は８年ぶり６回目の夏の甲子園を決め、平成２年に続いて県大会春夏連覇を飾った。

第80回全国高等学校野球選手権記念大会、境は西埼玉代表の滑川と対戦した。立ち上がりに４失点し、毎回の17安打を浴びながらも粘りの野球を展開したが、６－７で惜敗した。

○平成11年、第81回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、倉吉北エース柏と米子西エース橋田の両エースの投げ合いでゲームが進んだ。９回裏２－２から倉吉北の代走越村が、２盗・３盗を試み、米子西守備陣のミスを誘い、越村が歓喜のホームインで劇的な幕切れとなり、倉吉北が７年ぶり４回目の甲子園出場を決めた。

第81回全国高等学校野球選手権大会､倉吉北は、古豪静岡と対戦した。相手左腕投手の力のあるストレートと鋭く曲がるカーブに苦しみ、７連続を含む17個の三振を喫し、三塁を踏むことなく完敗した。

○平成12年、第82回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝戦は、シード校同士の対戦となった。米子商の礒山と由良育英の山下、両エースの投げ合いとなったが、米子商が由良育英を２－１の僅差で破り、昭和63年以来２回目の甲子園切符を手

に入れた。

20世紀最後となる第82回全国高等学校野球選手権大会が開幕し、米子商は仙台育英と対戦した。エース礒山の好投で序盤は相手校を1点に抑える好投を見せ、再三のチャンスをつくり押し気味に試合を進めたが中盤の失点が重くのしかかり、主砲市川の本塁打による１点のみにとどまり、終わってみれば１－７のスコアとなり初戦突破はならなかった。

○平成13（2001）年、第83回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝戦は、接戦の末、八頭が由良育英を２－１で破って４年ぶり５回目の甲子園出場を決めた。２年連続決勝進出を果たした由良育英にも惜しみない拍手が送られた。

第83回全国高等学校野球選手権大会、八頭は長野県代表、塚原青雲と対戦した。４点を追う八頭は７回に一気に５点を挙げ逆転。鳥取県勢７年ぶりの勝利かと思われたが最終回に連打で逆転を許し、涙をのんだ。

○平成14年、第84回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝戦は、大接戦の末に倉吉北が鳥取西を７－６で破り、３年ぶり５回目の甲子園出場を決めた。倉吉北エースの左腕小谷のピッチングが光った。

第84回全国高等学校野球選手権大会に臨んだ倉吉北は、西東京代表の桜美林と対戦。初戦突破をかけて挑んだ倉吉北は初回に先制してリズムに乗ったが、３回に一気に逆転を許し、願いは届かず１－６で敗れた。

○平成15（2003）年、第85回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会の決勝は、八頭が機動力を存分に発揮したゲーム内容であった。５犠打･２盗塁･４内野安打を生み出した。結果、八頭が倉吉北を４－２で破って２年ぶり６回目の甲子園出場を決めた。

第85回全国高等学校野球選手権記念大会の開会式、記念大会で全国から一人選ばれた鳥取西の能藤朗誉主将が入場行進を先導した。さらに、八頭の山田主将が選手宣誓をするなど鳥取県勢が大役を務めた。また、初戦の栃木県代表小山を３－２と見事な逆転勝ちで下し、鳥取県勢としては９年ぶりの初戦突破を果たした。２回戦は静岡と対戦し、粘りの野球を披露した。８回に同点に追いつき、９回に力投を続ける河野投手をバックが盛り立てたが、力及ばず２－３で惜敗した。

○平成16年、第86回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝は、鳥取商がシード校の鳥取西を９－２で下して初の甲子園出場を果たした。エース山本が切れのあるスライダーを武器に相手打線を抑え、自慢の打線が爆発した。

第86回全国高等学校野球選手権大会に初出場の鳥取商は福島県代表の聖光学院と対戦。自慢の打線は、抜群の制球力を誇る相手投手の前に沈黙。11個の三振を奪われ、０－６で完封負けを喫し、県勢２年連続の初戦突破はならなかった。

○平成17年、第87回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝は、鳥取西が米子西を８－０で下し、12年ぶり22回目の優勝を決めた。鳥取西は序盤から打線が爆発し、投げてはエース浜本が落ち着いた投球で、強打の米子西打線を６安打無得点に抑えた。

第87回全国高等学校野球選手権大会に出場の鳥取西は、千葉県代表の銚子商と対戦し、１－７で敗れた。鳥取西は１回表、衣笠の犠飛で１点を先制したが､その後は相手投手の前に13三振を喫し、好機を作ることができなかった。先発の浜本は粘り強く投げたが、終盤につかまり力尽きた。

○平成18年、第88回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝は、倉吉北が倉吉東を10－４で下し、４年ぶり６度目の甲子園出場を決めた。初の「倉吉対決」は倉吉北が猛打で制して甲子園への切符をつかんだ。

第88回全国高等学校野球選手権大会は県勢３年ぶりの勝利を願ったが、長野県代表の松代に15安打を放ち、押し気味に試合を進めたが終盤に追いつかれ、延長11回、６－７のサヨナラで敗れた。

○平成19年、第89回全国高等学校野球選手権鳥取大会の決勝は､境が７－３で倉吉総合産業を下し、

９年ぶり７回目の甲子園出場を決めた。倉吉総合産業の甲子園初出場はならなかった。

第89回全国高等学校野球選手権大会は山梨県代表の甲府商と対戦。境は、先発の山本をはじめ継投した３投手も打ち込まれ、１－14で敗れた。それでも、チームで掲げた「全力疾走」で最後まで戦い抜いた選手たちにスタンドからはいつまでも拍手が送られた。

○平成20（2008）年、第90回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会の決勝は、鳥取西が鳥取城北を２－１で破り、３年ぶり23回目の優勝を果たした。この試合、鳥取西は９回０－１からの逆転。エース小畑が大会直前に故障をしたが、左腕の鈴木が見事に穴を埋めて投打に大活躍し、投打にバランスの取れたチームに成長した。

第90回全国高等学校野球選手権記念大会に出場した鳥取西は木更津総合（東千葉）と対戦し、１－６で敗れた。鈴木の粘りある投球、小畑の大会第１号本塁打など、各々の奮闘にスタンドからは大きな声援が送られた。エースに成長した鈴木だが、２年の夏、調子を落として練習試合で打たれた経験が尾を引き、急にストライクが入らなくなった。３年の春までの半年間、投球練習をしていなかった。それが、小畑のけがで県大会直前に大役が回ってきた。西村監督は「流れを大事にしたい」と甲子園の舞台も鈴木の左腕に任せた。

○平成21年、第91回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、鳥取城北が鳥取商を６－３で下して春夏通じて初の甲子園出場を決めた。夏の鳥取大会決勝５度目で悲願を達成した。

第91回全国高等学校野球選手権大会に出場の鳥取城北は、南北海道代表の札幌一に３－６で敗れ初戦突破はならなかった。相手を上回る10安打だったが、けん制死や失策で波に乗れず、初陣の壁にはね返された。

また、今大会に鳥取県審判部審判委員の仲田正則氏が選手権大会への派遣審判委員制度により中国地区を代表して派遣された。

○平成22年、第92回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、八頭が米子北に４－１で競り勝ち、７年ぶり７度目の甲子園出場を決めた。エース上川の力投と堅い守りで米子北を退けた。米子北は12年前の決勝に続いて甲子園へあと１勝で涙をのんだ。

第92回全国高等学校野球選手権大会に出場の八頭は、守備の乱れと岐阜県代表の土岐商の先発全員安打を浴び２－15と振るわなかった。中盤以降に反撃はしたが、立ち上がりの大量失点が重すぎた。

○平成23年、第93回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、鳥取商が劇的なサヨナラ勝ちを収めて７年ぶり２回目の甲子園出場を決めた。３－３で迎えた９回裏鳥取商１死二塁、吉多の左越え二塁打で４点目が入り、４－３のサヨナラ勝ちとなった。

第93回全国高等学校野球選手権大会に出場の鳥取商は、２度のビハインドをはね返し延長に持ち込んだが、バントミスやチャンスに１本が出ず、北北海道代表の白樺学園に延長11回、２－３で競り負けた。

○平成24年、第94回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、鳥取城北が初優勝を狙った鳥取育英に７－６で勝利した。鳥取城北は３年ぶり２度目の優勝を飾り、選抜大会に続いての甲子園出場を決めた。県勢の春夏連続の甲子園出場は平成５年の鳥取西以来19年ぶりであった。

第94回全国高等学校野球選手権大会は、鳥取城北は香川県代表の香川西に３－１で勝利した。平成21年夏、平成24年春の選抜に続いて３度目の甲子園で悲願の初勝利となった。また、県勢の初戦突破は平成15年の八頭以来９年ぶり。先発のエース平田は11安打されながらも要所を締める粘りの投球で１失点完投した。続く２回戦は、奈良県代表の天理に２－６で敗れた。２回に４失点し流れをつかめないまま試合が終了した。

○平成25（2013）年、第95回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会決勝戦は、鳥取城北が八頭を７－４で下し、２年連続３度目の夏の甲子園出場を

決めた。２連覇は平成９年の八頭以来16年ぶりであった。

第95回全国高等学校野球選手権記念大会に出場の鳥取城北は熊本工に２－３と惜敗し、２年連続の初戦突破を逃した。互いに10安打を打ち合う接戦となり、鳥取城北は終盤追い上げたが競り負けた。

○平成26年、第96回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、八頭が鳥取城北に２－１で勝利し、４年ぶり８度目の夏の甲子園出場を決めた。３連覇を狙う鳥取城北を相手に先発左腕の鎌谷が要所を締め１失点で、リードを守った。

第96回全国高等学校野球選手権大会に出場した八頭は、初出場の秋田県代表の角館に６－１で逆転勝ちを収めた。第76回大会の同校以来、県勢20年ぶり16強入りを果たした。さらに、同校11年ぶり、県勢２年ぶりの初戦突破となった。続く３回戦は優勝候補の大阪桐蔭との対戦となった。分厚い壁に挑み、最後まで集中力を切らさずに戦い続けた。夏の甲子園３度優勝の大阪桐蔭に対し、０－10で敗れた。県勢として58年ぶりの２勝はならなかったが、強豪相手に持ち前の粘り強さを発揮し、一歩も引かなかった。

○平成27年、第97回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、鳥取城北が鳥取西に９－６で勝ち、２年ぶり４度目の夏の甲子園出場を決めた。東部勢同士の争いとなった試合は、序盤から激しい点の取り合いとなったが、鳥取城北はリードを許しながらも追いつき、６回に逆転。７、８回に加点して逃げ切った。鳥取西のエース川上の気迫あふれる投球が印象に残ったゲームであった。また、地元対決に溢れる観客のため、コカ・コーラウエストスポーツパーク野球場の外野席を開放するほどの観客数であった。

第97回全国高等学校野球選手権大会に出場の鳥取城北は、山形県代表の鶴岡東に６－９で敗れた。鶴岡東は甘い球を見逃さずに16安打を放った。特に３点を挙げた５回、４点を追加した７回とも、コンパクトな振りで重ねた短打が攻撃に勢いを与えた。鳥取城北は４回２死満塁で無得点に終わり、リードする展開に持ち込めなかったのが痛かった。

○平成28年、第98回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、境が米子松蔭を19－４で下し、９年ぶり８度目の夏の甲子園出場を決めた。境は初回、勝部の今大会３本目の本塁打で３点を先制し、９回には９得点を挙げての優勝となった。

第98回全国高等学校野球選手権大会に出場の境は高知県代表の明徳義塾と対戦。明徳義塾は初回、２点先行。境も一度は追いついたが、４回の守りのミスで失点すると、その後も小刻みに得点され、２－７で敗れた。境は３回に浜の２点本塁打で同点とし息を吹き返したが、５失策と守備の乱れが響いて勢いを失った。

○平成29年、第99回全国高等学校野球選手権鳥取大会決勝戦は、２回に打線がつながった米子松蔭が４点を先制。米子東の追い上げを振り切り、５－２で米子商時代以来17年ぶり３回目の優勝を果たした。２年生エースの左腕辰巳、二遊間の堅い守りが光った。

また、今大会に鳥取県審判部審判委員の高松浩司氏が甲子園への派遣審判委員制度により中国地区を代表して派遣され、聖地でキビキビとした

一塁塁審を務める高松審判委員

ジャッジを披露してくれた。

第99回全国高等学校野球選手権大会出場の米子松蔭は、平成29年の選抜高校野球（第89回選抜高等学校野球大会）で優勝し、２度目の春夏連覇を狙う大阪桐蔭と対戦した。大阪桐蔭は、１回裏に大阪大会で打率６割を超える主将福井のライトポール際へのホームランで先制すると、以降小刻みに得点を重ね、終わってみれば犠打や盗塁を絡めての12安打８得点で勝利を挙げた。米子松蔭は７回表に一死ランナーなしの場面で、３番津島がライトへ３塁打を放ち、返球がそれている間に一気に本塁を陥れ、１点をもぎ取った。結果は１－８だった。

試合当日の８月11日は好カードが組まれ、米子松蔭も観客数47,000人の大観衆の中で試合ができた喜びを感じ、さらに日本一を目指すチームとの差を痛感した試合でもあった。

○平成30年、第100回全国高等学校野球選手権記念鳥取大会の決勝に進出したのは、３年ぶりの鳥取城北と13年ぶりの米子西だった。お互いがノーシードから勝ち上がり、鳥取城北は３年ぶり５度目、米子西は初となる夏の甲子園出場を懸けての戦いとなった。試合は攻守ともに鳥取城北が米子西を上回り、８－０で鳥取城北が夏５度目の甲子園出場を決めた。米子西は３安打と打線が沈黙したが、米子西ナインが最後まで笑顔でプレーしていたのが印象的な決勝戦だった。100回という大きな節目の大会、決勝戦の始球式は米子東ＯＢで鳥取県勢最高位タイのベスト４進出時（第38回大会(1956年)）のエースだった長島康夫さんにお願いし、決勝戦に花を添えていただいた。異常気象が顕著に表れた年でもあった。「平成30年７月豪雨」の水害被害で広島県大会は審判委員不足が生じた。鳥取県審判部からも５名の審判委員が急遽派遣される事態となった。さらに、本県のみならず全国的な猛暑から多くの選手や観客、応援団が熱中症を発症したことから、本県独自の対策として５回終了時に５分間の休憩時間を設け、選手・審判委員・応援団等の全員に水分補給を義務付ける措置をとる暑い夏の大会であった。

「金足農業旋風」、「タイブレーク制度導入」と話題の多かった第100回全国高等学校野球選手権記念大会には３年ぶり５回目の鳥取城北が出場した。相手は、甲子園春夏通算100勝を目指す京都府代表の龍谷大平安。２点を追う鳥取城北は、８回表に７番垣内がセンター前ヒットで出塁し、９番山下のタイムリーヒットで１点を返した。さらに１死１塁から１番吉田がレフトオーバーの３塁打を放ち同点に追い付いた。なおも１死１・３塁のチャンスだったが後続が断たれ同点どまり。２－２で迎えた９回の裏、龍谷大平安は２死から出た四球のランナーが二盗、三盗と攻め立て、次打者のヒットで惜しくもサヨナラ負けとなった。鳥取城北の後半の追い上げにより、見ごたえのある好ゲームであった。　今大会の開会式には、第１回大会から地方大会に欠かさず出場してきた皆勤15校の主将が、入場行進する全国56代表校を先導した。その先導の先頭は第１回大会開幕試合で勝利した歴史を持つ鳥取西の浜崎瀧太郎主将が歩き、先頭後方からは14校の主将らが「ありがとうこれからも」と書かれた横断幕を掲げた。その中には、米子東の鶴田一朗主将の勇姿もあったことは、県高野連として先人に感謝しなくてはいけない光景であり、偉大な財産を残してくださっていることを強く感じた一場面であった。

３　軟式部の歩み

全国高等学校軟式野球選手権大会は昭和31年から始まり平成30年で62年、中国地区高等学校軟式野球大会は平成５年から始まり、現在で25年の歴史がある。

全国大会については、昭和56（1981）年（第26回大会）の準決勝まで進んだ米子工を最後に岡山・島根の高い壁に跳ね返され続けていた。30年の月日が過ぎ、平成23（2011）年（第56回大会）の東中国大会決勝では鳥取県勢対決の境－鳥取西が実現し、７－３で勝利した境が全国初出場を果たした。全国大会では名門作新学院と対戦し２－０の

惜敗であったが、攻守に持ち味を発揮した好試合であった。残念ながら東中国大会決勝で敗れた鳥取西は、翌年（第57回大会）も連続して決勝まで勝ち上がり、浜田に３－２の逆転サヨナラ勝ちし全国初出場を果たした。全国大会では初戦敗退であったが、２年連続鳥取県勢出場という快挙は記憶に新しい。

また､比較的歴史の新しい中国大会については、平成15年（第11回大会）に鳥取西、平成17年（第13回大会）に米子東の２度の優勝を誇る。準優勝は平成８・９年（第４・５回大会）の米子東、平成12年（第８回大会）の鳥取西、平成19年（第15回大会）の八頭、平成23年（第19回大会）の鳥取城北と、５回である。特に地元（米子市）で開催された平成15、23年には優勝、準優勝を収めており地元開催に強い大会となっている。

しかしながら、鳥取県高等学校野球連盟軟式部の加盟校数は、最も多かった昭和39年の26校から年々減少し平成29年には10校となった。その原因としては全国的な少子化、野球離れなどが挙げられるが､気軽に出来る日本独自の「軟式野球」を、野球経験者だけでなく初心者にも拡大していけるよう取り組んでいきたい。

４　今後の課題　～200年構想～

全国的にみると平成19（2007）年から平成28年の10年間の間で中学校軟式野球部員が39％、学童チームの登録数が19％減少するなど急速に「野球離れ」が進んでいる。この現象は鳥取県においても同様である。

こうした課題を解決するため野球の楽しさを広め、けがなどで野球をあきらめる選手を減らし、安全に長く続けられる環境づくりに取り組み、同時に、幅広い世代に応援してもらい、野球団体などと連携できる土台づくりを進めることが必要であり、今後、日本高野連・朝日新聞社・毎日新聞社が主体となり都道府県連盟と協力しながら事業を進める取り組みを展開していく考えである。

平成29年から、県内でも連盟および加盟校でいくつかの取り組みに着手している。そのいくつかを紹介すると、第99回選手権鳥取大会からバックネット裏の正面最前列周辺に「ドリームシート」を設けている。観戦に来た幼児、小学生から中学生が、間近で迫力のある臨場感溢れる高校野球を味わってほしいという考えから設置している。さらには、高校球児が小学生や幼稚園・保育園児と野球を通して交流をする事業も県内各校で積極的に開催している。野球に興味を持ち、野球が楽しいと感じてもらうきっかけになればという考えからスタートした。この交流は、野球の普及活動だけに止まらず、高校生の側にも大きなメリットがあると考えている。幼児や小学生と触れ合うことで、高校生にとっても、自己を振り返ることや、日頃は教えられる側にある高校生が教える側に立つことで、自己を見つめ直す良い機会となり両者にとって大変有意義な場となっている。

今後、取り組んでいかなければならないこととして、

①小・中学生の野球団体や県内の野球団体と協議会・連絡会の設置を進め、現状や課題を共有して普及・振興に取り組んでいきたい。

小学生に指導をする高校球児

②けが予防講習会の開催に向け、医師や理学療法士と連携を深め、指導者や部員を対象に講習会を開催し、けがの予防やコンディショニングの方法を学んでいきたい。

③普及・振興の取り組みをさらに推し進めていきたい。幼保育園児から小学低学年にはティーボー

ル教室やボール遊び講習会を開催し、小学高学年から中学生には指導者派遣、小中高の児童・生徒らが交流するイベント開催など小中の学校との協力関係を深めていきたい。

５　全国高等学校野球選手権記念大会・功労者表彰

都道府県高等学校野球連盟の育成と運営に永年従事され､功労のあった方を表彰するものである。

平成５年（第75回）　村上　光雄（元会長）
10年（第80回）　壹岐　哲彌（元理事長）
15年（第85回）　中谷　暢夫（元理事長）
20年（第90回）　貫名　和久（元理事長）
25年（第95回）　浦木　　清（元理事長）
30年（第100回）　越田　一義（審判委員長）

６　育成功労賞

高等学校野球部の責任教師または監督として、通算20年以上指導に当たり、育成と発展に功績のあった方を表彰するものである。

平成15年（第85回）　窪田　紀重（倉吉産業）
16年（第86回）　坂口　允司（米子西）
17年（第87回）　坂尾　嘉彦（鳥取西）
18年（第88回）　木下　亮一（鳥取東）
19年（第89回）　該当者なし
20年（第90回）　松本　範彰（米子北）
21年（第91回）　前川　一孝（鳥取湖陵）
22年（第92回）　頭本　元文（根雨）
23年（第93回）　徳永　昌平（八頭）
24年（第94回）　井畑　浩次（米子東）
25年（第95回）　該当者なし
26年（第96回）　岩瀬　勝俊（鳥取湖陵）
27年（第97回）　楮原　英俊（鳥取工業）
28年（第98回）　石賀　英樹（倉吉総合産業）
29年（第99回）　山﨑　和正（境）
30年（第100回）　坂口　健一（境）

７　その他の全国大会の軌跡

（１）国際大会

平成５年　長谷川　裕城　（日本選抜　鳥取西）
全日本選抜チームが初の欧州派遣

（２）県内開催の国際・全国大会

平成13年６月16日（米子市民球場）
日米親善高校野球大会2001
鳥取県選抜５－11ハワイ州選抜

（３）全国大会

①明治神宮大会

平成６年　第25回明治神宮野球大会
鳥取西５－９北海（北海道地区代表）
平成23年　第42回明治神宮野球大会
鳥取城北９－４敦賀気比（北信越地区代表）
（延長11回タイブレーク）
鳥取城北６－４智辯学園（近畿地区代表）

２回戦突破に喜ぶ鳥取城北ナイン

鳥取城北０－７光星学院（東北地区代表）
ベスト４

②国民体育大会

平成５年（第48回大会）香川県
鳥取西（８年ぶり3回目）２－３三本松（香川）
（延長16回）
平成６年（第49回大会）愛知県
八頭（初出場）０－９愛知（愛知）
平成26年（第69回大会）長崎県
八頭(20年ぶり２回目)２－１八戸学院光星(青森)
準決勝６－20 明徳義塾（高知）
ベスト４

表彰式後、行進をする八頭ナイン

【歴代会長・理事長】

◇会長

平成５年～６年	西尾	博仁（倉吉東）
７年～８年	山田	董（鳥取西）
９年	長谷川	洋一郎（米子東）
10年	永見	收（米子東）
11年～12年	田中	昭文（倉吉東）
13年～14年	神戸	直樹（鳥取西）
15年～16年	仲本	敏行（米子東）
17年～18年	岸田	美明（倉吉東）
19年	山田	正憲（鳥取西）
20年	原田	純一（鳥取西）
21年	小田原利典	（米子東）
22年	依藤	典篤（米子東）
23年～24年	牧	尚志（倉吉東）
25年	坂口	祐二（鳥取西）
26年	河田	透（鳥取西）
27年～28年	山根	孝正（米子東）
29年	河田	雅志（倉吉東）
30年	御舩	斎紀（倉吉東）

◇理事長

平成５年～６年	椿	聰（倉吉東）
７年	浦木	清（鳥取西）
８年	田村	純一（鳥取西）
９年～10年	貫名	和久（米子東）
11年～12年	河野	宏二（倉吉東）
13年～14年	徳永	惇（鳥取西）
15年～16年	舩本	憲三（米子東）
17年～18年	檜	佳憲（倉吉東）
19年～20年	絹見	芳宏（鳥取西）
21年～27年	大森	教雄（米子東）
28年～	田村	嘉庸（倉吉東）

◇審判委員長

～平成17年	浜田	圭司
18年～21年	木村	敬郎
22年～	越田	一義

第10章　国際大会等での鳥取県選手の活躍

第１節
オリンピック・パラリンピック・デフリンピックへの参加

１　オリンピック

⑴　平成８（1996）年アトランタオリンピック

本県から２名の選手が出場した。ウエイトリフティング競技では、平成４（1992）年のバルセロナオリンピックに続き２大会連続出場を果たした西本宣充選手（鳥取西工高教）が99kg級に出場し、前回大会の成績（８位）を上回ることはできなかったものの、ベテラン選手として日本選手団を牽引した。

また、女子サッカー競技では、大部由美選手（日興證券）が鳥取県初のサッカー代表選手として五輪出場を果たし、県内のサッカー選手に夢と希望を与えた。

⑵　平成12（2000）年シドニーオリンピック

男子サッカー競技に中田浩二選手（鹿島アントラーズ）、自転車競技に森本朱美選手（若桜中教）、トライアスロン競技に小原工選手（テイケイ）の３選手が出場した。

中田浩二選手は、予選リーグから先発メンバーとして出場するが、予選リーグ３戦目に負傷し、その後の試合の出場はできなかった。

また、森本朱美選手は、教職を本職にしながらも日本代表選手の座を射止め、勤務校の生徒からの声援を受けながらオリンピックの舞台で女子ポイントレースに出場し、16位の成績を収めた。

そして、シドニー大会から正式競技となったトライアスロン競技に出場した小原工選手（テイケイ）は、日本人選手の最高成績（21位）を収めた。

⑶　平成16（2004）年アテネオリンピック

女子サッカー競技の大部由美選手（YKK東北フラッパーズ）がアトランタ大会以来の２度目の出場を果たし、本大会では日本代表チームの主将を務め、チームを牽引した。

⑷　平成18（2006）年冬季トリノオリンピック

ボブスレー競技に小林竜一選手（布勢総合運動公園）が清川卓選手（サニウェイ・長野県）とのペアで２人乗り競技に出場し、29チーム中27位の成績を残した。

⑸　平成20（2008）年北京オリンピック

中京大学３年の和多見里美選手が自転車女子ポイントレースに出場するが、残念ながら途中棄権となった。また、バレーボール競技に山本隆弘選手（パナソニックパンサーズ）が左腕のスパイカーとして出場するが、予選１次リーグで敗退となった。

⑹　平成22（2010）年冬季バンクーバーオリンピック

小林竜一選手（布勢総合運動公園）が、前回のトリノ大会に続く２大会連続の出場となった。男子４人乗りに出場し、１回戦、２回戦を見事突破し３回戦に臨むが上位20チームには入れず（21位）敗退した。

⑺　平成24（2012）年ロンドンオリンピック

ホッケー競技に佐藤雅子選手（ソニーHC BRAVIA Ladies）が出場、予選リーグ１勝２敗２分で９－10位決定戦に進出し、南アフリカに勝利し９位の成績を収めた。また、川中香緒里選手（ミキハウス）がアーチェリー競技で個人、団体の２種目に出場し、個人種目では１回戦敗退となるが、団体種目では、見事、銅メダルを獲得した。

⑻　平成28（2016）年リオデジャネイロオリンピック

本県から川中香緒里選手（ミキハウス）、冨田千愛選手（明治大学大学院・こうほうえん）、阪口真紀選手（ソニーHC　BRAVIA　Ladies）の３名が出場した。前回のロンドンオリンピックに続き２大会連続出場となった川中選手は、期待された団体種目は準々決勝で敗退し８位に終わる

が、見事２大会連続入賞となった。また、ボート競技に出場した冨田選手は、軽量級ダブルスカル種目で12位の成績を収めた。前回のロンドン大会に続き２大会連続で本県出身選手が出場することとなったホッケー競技では、阪口真紀選手が全試合フル出場を果たしたが、予選リーグを４敗１分で終え決勝には進めなかった。

２　パラリンピック

オリンピック後に同じ場所で開催される、世界最高峰の障がい者スポーツの総合競技大会であり、本県出場者とその成績は次のとおりである。

○1992年（平成４年）バルセロナ大会（夏季）
アーチェリー（身体障がい）　森田正則
８位入賞

○2000年（平成12年）シドニー大会（夏季）
陸上競技（視覚障がい）　福留史朗
マラソン　５位入賞

○2004年（平成16年）アテネ大会（夏季）
陸上競技（視覚障がい）　福留史朗
マラソン　11位

○2006年（平成18年）トリノ大会（冬季）
アルペンスキー（座位）　谷口　彰
滑降　14位
スーパー大回転　15位
大回転　19位
回転　11位

○2010年（平成22年）バンクーバー大会（冬季）
アルペンスキー（座位）　谷口　彰
スーパー大回転　18位
大回転　11位
回転　18位

○2014年（平成26年）ソチ大会（冬季）
アルペンスキー（座位）　谷口　彰
スーパーコンビ　７位入賞

○2016年(平成28年)リオデジャネイロ大会(夏季)
陸上競技（車いす）　野田昭和
400m　予選敗退
1500m　失格

３　デフリンピック

夏季五輪の翌年に開催する聴覚障がい者の世界大会で本県出場者とその成績は以下のとおりである。

○1993年（平成５年）第17回大会（ソフィア）
バレーボール　塚根隆　林則和　福本和巳
西村秀正　福本智富美　10位
卓球　房安京子　女子団体　１位
女子シングルス　１位
女子ダブルス　１位
混合ダブルス　１位

○1997年（平成９年）第18回大会（コペンハーゲン）
バレーボール　林則和　福本和巳　９位

○2001年（平成13年）第19回大会（ローマ）
バレーボール　福本和巳　選手兼役員　６位

○2005年（平成17年）第20回大会（メルボルン）
バレーボール　福本和巳　７位

○2009年（平成21年）第21回大会（台北）
陸上競技　前島博之　走高跳　８位
堰本将平　４×100mリレー　６位

○2013年（平成25年）第22回大会（ソフィア）
陸上競技　前島博之　走高跳　４位
走幅跳　７位

○2017年（平成29年）第23回大会（サムスン）
陸上競技　前島博之　走高跳　５位
十種競技　４位
中村開知　４×100mリレー　１位
バレーボール　前島奈美　１位

第２節
2020東京オリンピック・パラリンピックに向けての対応

56年ぶりに東京で開催される第32回オリンピック競技大会に向けては、国を挙げて競技力の向上やスポーツの普及発展に取り組んでいるところであるが、本県においても過去のオリンピックの出場選手数を一人でも上回るべく、強化策を講じている。

平成28年には「東京オリンピック・パラリンピック代表選手育成プロジェクト事業」を創設して、将来、国際舞台で活躍することのできるジュニア選手の発掘・育成や、既に国際舞台で活躍する本県選手の活動経費の支援を実施した。

翌平成29年度には、同事業を「2020東京オリ・パラターゲット競技事業」に改編し、2020年に日本代表選手になる可能性が高い選手に対して、国内外での強化練習や合宿が可能となるよう支援を強化した。対象選手は次表のとおりである。選手の中には中学校や高校に在籍する者もおり、長期にわたる海外遠征や合宿により学校生活に支障が生じないよう教育委員会と連携しながら県内各学校に特段の配慮を依頼し、実施した。

H30年度「東京オリ・パラターゲット競技事業」対象競技及び選手

競　技	選　手
水泳（飛込）	三上紗也可（ナショナル強化A指定） 安田舞（JOCエリートアカデミー）
セーリング	瀬川和正（ナショナルチームメンバー）
スポーツクライミング	高田知尭（ナショナル強化B指定） 高田こころ（ナショナルユースメンバー）
ボクシング	小川達也（ジュニアユース日本代表） 入江聖奈（全日本選手権女子優勝） 木下鈴花（全国高校総体優勝）
ボート	高島美晴（東京五輪メダルポテンシャルアスリート） 古田直輝（U23日本代表）
パラ陸上	野田昭和（リオパラリンピック日本代表）

H30. 4 . 1 現在

第３節
各種の世界大会、国際大会、ワールドカップ

第１節で紹介した選手以外にも、本県出身や本県在住の選手がさまざまな世界の舞台で活躍した。

サッカー界では、大部由美選手（日興證券―OKI―YKK　AP―TEPCO）がFIFA女子ワールドカップに第４回大会まで連続出場した。また、中田浩二選手（鹿島―マルセイユ―バーゼル―鹿島）は、平成14（2002）年の日韓大会と、平成18（2006）年ドイツ大会のFIFAワールドカップに出場した。日韓大会では４試合全てに出場し、フィリップ トルシエ監督率いる日本チームのベスト16の成績に大きく貢献した。米子北高卒の昌子源選手（鹿島）は、平成30（2018）年ロシア大会にセンターバックとして出場し、守りの要として日本の一次リーグ突破（決勝トーナメント進出）に貢献し、世界から賞賛を受けた。

空手界では、井上慶身氏に師事し本県を競技活動の拠点として移住してきた宇佐美里香選手（鳥取県教育委員会―鳥取県体育協会）が、平成24（2012）年フランスで開催された、世界空手道選手権の女子形種目において優勝する偉業を成し遂げた。

カヌー界では、遠藤絵里子選手（鳥取県教育委員会―鳥取県地域振興部―NPOみのぶ観光）が、平成25（2013）年に女子カヌースラローム選手としてナショナルチーム入りを果たし、同年のワールドカップ及び世界選手権に参戦した。

ボート界では、冨田千愛選手（明治大―明治大大学院・こうほうえん―福井県体育協会）が平成27（2015）年に韓国（光州）で開催された第28回ユニバーシアード競技大会の軽量級ダブルスカルで見事、金メダルを獲得した。また、高島美晴選手（明治大学）と古田直輝選手（明治大学）が平成27（2015）年からナショナルチーム入りを果たし、ワールドカップに参戦している。

レスリング界では、平成27（2015）年に米国（ラスベガス）で開催の世界レスリング選手権大会に前田祐也選手（拓殖大―鳥取県体育協会―鳥取中央育英高職）と岡太一選手（自衛隊）が、それぞれグレコローマン80kg級とグレコローマン85kg級に出場した。

また、2020年東京大会からオリンピック正式種目に決定したことを契機に、国内の競技レベルが飛躍的に向上しているスポーツクライミング界で

は、高田知尭選手（フロンティアスピリッツ―鳥取県体育協会）が平成28（2016）年の世界選手権ボルダリング競技で８位入賞を果たした。

自転車競技では、平成30（2018）年に河端朋之選手（日本競輪選手会）が、2018UCIトラック世界選手権大会（オランダ・アペルドールン）男子ケイリンで銀メダルを獲得。同種目25年ぶりのメダル獲得の活躍であった。

第４節
アジア競技大会

平成10（1998）年にタイ（バンコク）で開催された第13回大会及び平成14（2002）年の第14回韓国（釜山）大会の女子サッカー競技に大部由美選手が出場し、３位の成績に貢献した。

釜山大会では、水泳（飛び込み）競技に宮本基一郎選手、宮本幸太郎選手の兄弟が出場し、３m及び10mシンクロダイビングの２種目において４位の成績を収めた。

平成22（2010）年に中国（広州）で開催された第16回大会では、宇佐美里香選手が空手道女子形で金メダルを獲得し、女子アーチェリー団体では川中香緒里選手が出場し５位入賞に貢献した。

平成26（2014）年に開催された第17回大会（韓国・仁川）では、自転車競技に河端朋之選手が出場し、スプリント（個人）種目で銀メダル、チームスプリント(団体)で銅メダルを獲得した。また、川中香緒里選手がアーチェリー競技女子リカーブ団体で銅メダルを獲得した。

第５節
プロスポーツでの活躍選手

大相撲界では、鳥取城北高校相撲部出身力士が次々と活躍し、同校は全国有数の強豪校としての地位を確立した。

数多い同校出身力士の中でも、田宮啓司選手（琴光喜）は平成12（2000）年11月場所では平幕優勝は逃したものの、１横綱３大関を撃破する殊勲で小結を飛び越しての関脇昇進を果たし、平成13（2001）年９月場所では幕内在位７場所目にして史上３番目のスピード優勝を果たすなど、さい先の良い力士生活を送るが、その後大関昇進までの道のりは長く、平成19（2007）年に新入幕から所要44場所での史上２番目に遅い大関昇進となった。平成22（2010）年に野球賭博問題を受けて解雇処分となり、引退を余儀なくされた。

同校では、モンゴルからの留学生を受け入れており、数多い力士を角界に送り出している。

平成20（2008）年に貴乃花部屋へ入門したバーサンドルジ選手（貴ノ岩）は平成26（2014）年１月場所で初入幕し、平成28（2016）年７月場所では優勝争いに加わり、12勝３敗の好成績で自身初の三賞となる敢闘賞を受賞した。

ガントルガ･ガンエルデネ選手（照ノ富士）は、平成25（2013）年３月場所で初入幕を果たし、同年５月場所では幕内初優勝を成し遂げ、平成27（2015）年３月場所で初土俵以来所要23場所での関脇へのスピード昇進を果たした。その力と勢いは止まることなく、同年７月場所で平成生まれ初の大関へ昇進した。

平成26（2014）年９月場所で新入幕を果たしたアルタンホヤギーン･イチンノロブ選手（逸ノ城）は、幕下付出から所要４場所での新入幕は史上２位タイのスピード出世であった。入幕後は、同年11月場所で西関脇に昇進した。

石浦将勝選手（石浦）は平成24（2012）年に横綱･白鵬の内弟子として宮城野部屋へ入門することが発表され､翌年１月場所に四股名を本名と同じ｢石浦｣として23歳で初土俵を踏んだ。平成27（2015）年１月場所後の番付編成会議で新十両昇進が決定し、第53代横綱琴櫻以来、53年ぶりの鳥取県出身の関取となった。新入幕の場所では10勝５敗の好成績で敢闘賞を受賞した。

また、学生時代にアマチュア横綱、学生横綱のタイトルを手にした水戸龍は、初土俵後、勝ち越しを積み重ね、平成30年１月場所での新十両昇進

が決まった。

本県中部地区のプロスポーツ選手では、ボクシング競技とゴルフ競技において活躍が光る。

プロボクシングの西谷和宏選手（北条ボクシングジム―VADYボクシングジム）は、中学時代にボクシングを北条ボクシングジムで始め、22歳の時にBADYボクシングジム（神戸市）に移ってプロデビューした。平成27（2015）年12月に日本ライト級タイトル戦に初挑戦するが判定負け。しかし、平成29（2017）年３月の二度目のタイトル戦で、劣勢から挽回し王座を奪取した。

また、日本女子プロゴルフの鈴木愛選手は、倉吉北高校を卒業後、平成25（2013）年にプロデビューし、同年のステップアップツアー「中国新聞レディースオープン」でプロ入り初優勝した。平成26（2014）年９月に「日本女子プロゴルフ選手権大会」に出場し、同大会史上最年少勝利を更新する20歳128日でのレギュラーツアー初勝利を果たした。平成29（2018）年にはツアー２勝を挙げ、日本人選手としては４年ぶりとなる賞金女王に輝いた。

プロ野球界では、投手の活躍が印象深い。20世紀は川口和久投手（鳥取城北高卒・広島―巨人）と加藤伸一投手（倉吉北高卒・南海―ダイエー―広島―オリックス―近鉄）が活躍している。川口投手は、広島時代に２度のリーグ優勝と一度の日本一に貢献。FA移籍により平成７（1995）年から巨人のユニフォームに袖を通し、平成８（1996）年のリーグ優勝時には胴上げ投手となった。また、加藤投手は計５球団を経験した息の長い投手であった。戦力外通告、自由契約を幾度となく経験しながら、平成８（1996）年には広島でカムバック賞を受賞している。球界再編の波で大きく揺れた平成16（2004）年のシーズンをもって、鳥取県高校生史上初のドラフト１位指名投手は引退した。

加藤投手が引退した平成16（2004）年秋のドラフトで能見篤史投手（鳥取城北高卒）が阪神タイガースに入団し、主に先発として活躍。平成29（2017）年シーズン終了時で98勝を挙げている。また、平成25（2013）年秋のドラフトで広島東洋カープに入団した九里亜蓮投手（米子市出身）は、入団４年目の平成29（2017）年にシーズン９勝を挙げ、セ・リーグ２連覇に貢献した。

プロサッカー選手では、主に二人の選手が躍動した。中田浩二選手（後藤ヶ丘中卒）は、鹿島アントラーズ時代（1998 ～ 2004年、2008年7月 ～ 2014年）にはチームのタイトル獲得に貢献した。リーグ優勝２回、天皇杯優勝１回、ナビスコカップ優勝１回を経験している。2005年にフランス一部リーグ・マルセイユに、2006 ～ 2008年はスイスリーグ・FCバーゼルに在籍。2008年７月に鹿島に復帰するまで海外でも主にセンターバックとして活躍した。また、昌子源選手（米子北高卒）は2011年に鹿島アントラーズに入団。2014年のリーグ戦では自身初の全試合出場を果たし、Jリーグ優秀選手賞を獲得した。センターバックとしてフィジカルの強さ、足もとの技術に磨きをかけ、空中戦の強さ、守備範囲の広さも高い評価を受けている。

第６節 県民栄誉賞・スポーツ顕彰の表彰制度の創設

鳥取県は、平成４年のバルセロナオリンピックで県出身の選手３人が入賞を果たしたことから、鳥取県県民栄誉賞表彰規程（平成４年８月）を創設した。

県民栄誉賞は、オリンピックその他国際的なスポーツ競技大会で３位以上の成績を収めたものが対象となる。

スポーツ顕彰は、世界大会等で目覚ましい活躍をした本県にゆかりのある選手に知事が授与するものである。

（資料編　９県民栄誉賞・スポーツ顕彰受賞者参照）

鳥取県体育協会史Ⅱ編集委員会委員

※役職名は平成31年４月１日現在のもの

監修

田淵　康允（元鳥取県体育協会会長）
油野　利博（前鳥取県体育協会会長）

編集委員

編集委員長

後藤　裕明（鳥取県体育協会専務理事）

副編集委員長

田中　昭文（元高校総体推進室長　元鳥取県高等学校体育連盟会長）
太田　裕司（鳥取県スポーツ振興監）
新　　貞二（前鳥取県スポーツ振興監）

委　　員

前田　達雄（元鳥取県高等学校体育連盟理事長　元鳥取県教育委員会スポーツセンター所長）▽川口一彦（鳥取県体育協会副会長）▽後藤　弥（伯耆町教育委員会教育長、元全国スポーツレクリエーション祭室長）▽村山　洋子（元鳥取県教育委員会体育保健課長）▽加藤　憲雄（元鳥取県教育委員会スポーツセンター所長、元鳥取県教育委員会スポーツ振興課長）▽長谷川　和郎（総合型地域スポーツクラブ連絡協議会長）▽椿　知夫（鳥取県スポーツ少年団副本部長）▽松田　佐恵子（鳥取県障がい者スポーツ協会常務理事兼事務局長）▽岩本　章嗣（鳥取県スケート連盟会長）▽加藤　博司（鳥取県バドミントン協会会長）▽宮石　憲士（前鳥取県体育協会副会長、前鳥取県剣道連盟会長）▽新田　明彦（鳥取陸上競技協会専務理事）▽岡田　行雄（鳥取県自転車競技連盟理事長）▽池田　洋二（鳥取県サッカー協会会長）▽生田　秀正（元日野郡体育協会長、鳥取県マスターズ陸上会長）▽小椋　勝美（元鳥取県中学校体育連盟会長）▽小倉　健一（元鳥取県高等学校体育連盟会長）▽明場　達朗（鳥取県地域振興部スポーツ課長）▽小西　慎太郎（前鳥取県地域振興部スポーツ課長）▽住友　正人（鳥取県教育委員会体育保健課長）▽吉田　朋幸（前鳥取県教育委員会体育保健課長）

特別編集委員　森本　定和（元山陰中央新報記者）

事務局長　植田　司郎（鳥取県体育協会常務理事兼事務局長）

事務局　稲田　誠一（鳥取県体育協会事務局次長兼生涯スポーツ担当リーダー）▽村山　繁（前鳥取県体育協会事務局次長兼生涯スポーツ担当リーダー）

編集後記

鳥取県体育協会の創立100周年記念事業として、鳥取県体育協会史Ⅱを刊行することになり、県体協事務局に編集準備委員会、編集委員会を設置して編さん作業に着手した。

しかし前回の鳥取県体育協会史発刊から20年以上を経過しており、記録や資料が散逸し、行方が判明しないことや当時を知る担当者の退任などで資料の収集に時間を要した。

編集委員や執筆者は競技団体等の役員､学校の先生方をはじめ県職員､県教育委員会の現職やOBの方々、市町村職員、県障がい者スポーツ協会、県体育協会の職員など約190名の方々に、本来の仕事や公務の合間に原稿を執筆していただいた。十分な資料のないなか多くの時間を割き、編集委員会の構想した内容に沿うものにしようと苦労されたことに深く感謝を申し上げたい。なお、内容についての責任は発行者である鳥取県スポーツ協会にあることから、執筆者の氏名は記載しないこととした。

平成29（2017）年７月に編集委員を通して執筆者に協力依頼し、約１年間で原稿を作成していただくことにしたが、期限内に原稿が提出されたのは３分の１程度で、最終的にすべての原稿が集まったのは令和元（2019）年６月であった。

これらの原稿について、二人の監修者に意見を聴取したり加筆修正をお願いした。その後、監修者の意見等を執筆者に伝え、原稿の修正や加筆をお願いし、ようやく令和２年初めにすべての原稿が完成したのである。

なお、平成28年５月から、元山陰中央新報社の教育・運動担当の記者であった森本定和氏に特別編集委員をお願いし、県立図書館での資料収集と整理、資料目次の作成のほか、提出された原稿のチェック、削除、加筆修正など大変な努力を得たことに深く感謝したい。

監修者は当初、長年県体協の会長等役員を歴任した田淵康允氏と元県教委体育保健課長・元由良育英高校長の足立猛氏に依頼していたが、足立氏が体調不良のため辞退することになり、その後任に前県体協会長の油野利博鳥取大学名誉教授にお願いした。お二方にはぼう大な原稿､資料の監修に感謝申し上げたい。

ともあれ、刊行された本書は、都道府県のスポーツ・体育協会をはじめ、県内の小・中・高・大学、市町村、図書館、関係団体において本県の貴重なスポーツ史資料として活用されることを期待したい。

最後に、あらためて刊行に携わった関係者の皆さんに重ねて深く感謝申し上げたい。

令和２年吉日

（鳥取県体育協会史Ⅱ編集委員会事務局）

鳥取県体育協会史Ⅱ

発行日　令和２年10月１日

編集者　鳥取県体育協会史Ⅱ編集委員会
発行所　公益財団法人鳥取県スポーツ協会
鳥取市東町一丁目220番地
鳥取県議会棟別館１階
0857－26－7802
印刷所　中央印刷株式会社
鳥取市南栄町34番地
0857－53－2221
製本所　日宝綜合製本株式会社